

桜咲く。

LCRCL (エルマル)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは花町高等戦闘専門学校、略して花町高专。

福岡県福岡市に位置する、そこそ有名な学校である。

これは、そんな花町高专に入学した少女の学校生活を描いた、多分バトル系の物語である。

※ストーリーはオリジナルです。他作品のネタが混ざっています。

目次

1年1学期

私は桜木咲子	1
入学式	6
咲子「解せぬ」	12
咲子vsメイ	19
メイは可愛い？	25
なんか急展開	30
桜木咲子、弟子になる	37
真・体力テスト	43
ランク上位が大集合？	48
重力魔vs1年軍団	54
桜と梅と狼のトリオ	59

作戦勝ち？	65
メイって案外ガチ勢？	69
日花の師匠!?	74
突然の3代目試験	81
もうバレた：	88
情報集めが趣味の双子	94
ほぼイナイレのサッカー①	103
ほぼイナイレのサッカー②	108
ほぼイナイレのサッカー③	113
ほぼイナイレのサッカー④	118
不良っているもんなんだね	124
今時神頼みする人	130
さとかに隊vs不良軍団	134

咲子&メイvs新太

142

メイの本性

146

メイとお出かけ。

153

不死鳥……のペット!?

159

翔の家でのハプニング

166

まともそうな勉強会

171

明日は雨の予報ですが、そうはさせま

せん。

176

模擬戦をしよう

181

1年夏休み

夏休みと言えば?…兄が帰ってくる!

天界へ行くというすごい展開

190

天界

195

チャカメカファイアー

201

一人称を元に戻すと…?

206

作れ!連携技!

210

朱雀、飛んで来る

215

一方その頃、他の人たちは…

219

特訓の成果

223

…寝てます。

229

お前ら、人間辞めたん!?

233

カオスなバトル①

237

カオスなバトル②

242

飛羽野きじお

247

室見〇〇

251

ナオと色々やってみた。

255

海へ行こう

259

シンガツソー!①

264

シンガツソー!②

269

シンガツソー!③

273

……付き合い始めて1日目だぞ?

ま

だ。

280

1年2学期

波乱の2学期、スタート!

286

3代目対3年1位①

290

3代目対3年1位②

297

斬士対毒花①

302

斬士対毒花②

307

咲子、有名になる。(今更?)

312

ヤクザに喧嘩を売られたら?

317

迫り来る銃弾

322

v s 那珂川遠賀

326

ネロイズム

331

思いを継ぐ

336

落ち込んだメイ

341

受け継ぐメイ

345

突然の転校生

349

…あつてた!?

354

翔 v s ゼイル

360

悲しい過去

364

普通?の登校

373

サ○ズ戦の真似をしてみた①	379
サ○ズ戦の真似をしてみた②	384
ブラコンの妹	390
ゼイルの家①	398
ゼイルの家②	403
ゼイルの家③	408
ゼイルの家④	413
3人目か…	418
テスト勝負？	423
2対2の模擬戦	428
咲子の1日	433
メイの1日	439
ゼイルの1日	444

公開処刑タイム！	479
茜「ごちそうさまでした…ゲホッ」	473
普通のお泊り会！	⑤ 468
普通のお泊り会！	④ 462
普通のお泊り会！	③ 457
普通のお泊り会！	② 449
普通のお泊り会！	①

- お家デート? | 488
- 一方、その頃… | 492
- 見せつける | 497
- そして12月になる | 503
- 3代目 vs 斬士 ① | 507
- 3代目 vs 斬士 ② | 511
- 一杯食わされた | 516
- 見つけ! | 521
- 2学期終了!(そして100話突破!) | 526
- 1年冬休み | 530
- 兄の反応 | 530
- さとかに隊のクリスマス会① | 535
- さとかに隊のクリスマス会② | 539
- 帰宅後 | 543
- 今度は⑨か… | 548
- 桜梅蓮桃椿、集結! | 552
- 反応薄っ! | 557
- 手合わせ | 562
- 趣味 | 566
- 風鈴の能力 | 571
- 差を埋めたい! | 576
- 貴方、センスありますよ!! | 580
- 解決策 | 587
- ゆっくりした | 591

福岡へ帰る	650
お似合い	646
スキーからの雪合戦!	641
嬉しい連絡	637
開放	633
いざ!北海道へ!	627
抵抗開始前	623
偶然発見!?	618
年越しラーメン!?	613
例の武器	608
赤坂留美	604
北海道で待ってる	600
友達	595

出番がほしい!	654
1年3学期	
3学期、スタートツ!	659
遭遇	664
天界、突入!	669
アンヘル	674
強さを試す①	679
強さを試す②	684
正義の起床	689
魔界の脳の木	694
フルボッコ	699
はい、はい、はい、はい	704
正々堂々と生きていきたいのさ	708

747	大技の連続！斬士 v s 重力魔②	742	アホとバカ	807
	兄妹対決！斬士 v s 重力魔①		5校衝突、開幕ッ！	801
		742	1年5校衝突	
738	天使化対天使化！3代目 v s 闇炎②		5校衝突まで1週間	796
			それでも好きだ	791
734	バトルデー再び!! 3代目 v s 闇炎①		リア充爆発…しないッ！	785
			うん、甘いね。	780
	実にのほほんとした一日	730	甘すぎるッ！	776
		725	また 会った	771
	Deuce、Deuce、Deuce！		鬼は内、福も内！	767
			た つ み	761
	前向いたって	721	唐突なキャラ紹介	757
			ホントに平和な生活	752
	夥しいリアルを噛むので、	717		
	宿るもどうせ、	713		

岩は投げんでいいわ！	861
本人	856
名前はハーフ、中身はめちやくちや日	851
混合した嵐	846
馬鹿力を持った鬼	841
桜vs椿	837
Aerial Break up	832
舞い散る腕	827
辛い！酸っぱい！苦い！	822
氷と霧の対決①	817
刀と剣、犬と猫②	812
刀と剣、犬と猫①	

天使化って強い(白目)	922
2人の結果	917
1年春休み	912
決着	907
vs風鈴②	901
vs風鈴①	896
見えない敵	890
タッグバトル②	885
タッグバトル①	880
三つ巴③	875
地雷原!?	871
三つ巴②	866
三つ巴①	

ゲーム実況をしてみました	926
同じ技だが見た目が違う	930
出番くれ〜い	934
ペンギン達と特訓	939
うん、規格外	945
混合した嵐 v s それ以外?	949
鬼：と手合わせ	954
お兄さんが厨二病を再発しました…	959
もういくつ寝ると2年生	964
2年1学期	
進級	969
タツグマッチ! 咲子&メイ v s 出夢&	

花①	975
乱戦! 咲子&メイ v s 出夢&花②	980
決着! 咲子&メイ v s 出夢&花③	985
留美のランク戦	990
誘拐	995
再び魔界へ	1001
研究所① (200話突破!)	1006
竜美	1012
研究所③	1018
研究所④	1024
研究所⑤	1029

最強規格外娘竜美

過去の話をしよう

…あ“？

実は配信者だった

逃げるぞゴラア！

よし、出番だ

力を見せよう

とある配信中の出来事

お久しぶり

竜化した咲子

斬士の過去

2年夏休み

暑くなるゝ(物理)

1035

1041

1046

1051

1056

1062

1067

1072

1077

1082

1087

1092

憑依してみよう

日花の1日

対応しよう

別の属性の技を覚えようと思う

1113

ちよつとした大会が開幕

咲子vsルマ

留美vsゼイル

祐樹vs茜

絵奈vs学

メイvs育也

経緯

痴話喧嘩

1097

1102

1108

1117

1123

1129

1135

1140

1145

1150

1155

絵奈 v s 祐樹

1161

咲子 v s 留美

1167

決勝戦①

1172

決勝戦②

1178

2年2学期

夏休み明けの転校生

1184

マイペース v s マイペース!?

1189

マイペース…な勝利

1194

絵奈とレイン

1199

分かりやすい(ワケではない)絵奈の新

能力

1203

レインが破壊光線なら…

1207

…絵奈はギガインパクトを覚えるよね

?

再戦! 3代目 v s 闇炎①

1211

朝の陽光! 3代目 v s 闇炎②

1221

兄妹喧嘩①

1227

兄妹喧嘩②

1232

兄妹喧嘩③

1237

兄妹喧嘩④

1241

早速バトル! レイン v s 花①

1246

体力切れ!? レイン v s 花②

1251

コラボ編寸前の回

1257

異世界から来た

1263

大量に登場

1268

異世界バトル! 咲子 v s 日花①

1271

1274

スーパー化と天使化！咲子 v s 日花 ②

1279

赤い台風と夕焼けの輝き！咲子 v s 日

花 ③

1284

グリッチと竜…！咲子 v s 日花 ④

1289

またどこかで会いましょう

1295

対応はどうする？

1301

勧誘

1306

メンタルを折ろう

1311

え、いところ！

1316

日付を設定したからといって油断して

1361

はならない

1322

決戦前夜…？

1328

集合…

1333

戦、始まる

1340

因縁

1345

復讐（笑）

1350

恨み

1355

初代の戦闘

1360

何か変なヤツら ①

1366

何か変なヤツら ②

1371

不良の親はヤクザ

1376

スピリッツバーン

1382

大親分現る

1389

片付け（相手が味方を）	11395
大怪我	14011
鉄壁	14071
殺意マシマシ筋肉プロテイン絡め	1414
煽ったクセに苦戦	1419
炎の空	1424
病院へ	1429
もう片方の刀	1433
文字通り衝撃の事実	1438
スキマ…？	1443
平行世界の魔術師	1449
病院的一幕	1454

茜と紫	1459
魔術師！咲子vsケーティ①	1464
2割!?咲子vsケーティ②	1469
竜星群と黒嵐！咲子vsケーティ③	1474
二ヨの気持ち	1478
旅人	1482
初代の友達	1487
天空掌を創った人	1492
彼氏へのプレゼント	1497
そうだ、食べに行こう	1502
カプサイシンチャレンジ	1507
留美とレイトの遺伝子	1513

1566	ドッペルとワンダーズ	1517
	特訓、特訓。	1522
	曲を作ってるヤツ	1527
	夢（300話突破！）	1531
	2年冬休み	
	帰省	1537
	初代梅	1541
	風鈴は食いしん坊である	1546
	みんなで食べにいく	1551
	圧倒的スピード	1556
	代を継ぐ条件	1561
	クリスマス朝…には全然見えない	1566

	さとかに隊のクリスマス会V2①	1571
	さとかに隊のクリスマス会V2②	1576
	クリスマス会後の話	1580
	さんぽ	1585
	初代と特訓①	1590
	初代と特訓②	1594
	初代と特訓③	1598
	初代と特訓④	1603
	一方その頃、メイは…	1610
	ハイテンション留美	1614
	ブラシーボ効果みたいなもん	1619

ラーメンか、そばか、どっちなんだい!?

2年編での年越し

見せつけるねえ

招集?

花称号会議①

花称号会議②

花称号会議③

花称号会議④

準備と豪雪

北ぞ北海道

なんで俺も…

明日の計画

167116671662165816541651164816431638163316281623

朝特訓、朝飯。

スキー場で滑ろうか?それとも雪玉を

投げようか?

ありきたりな遭遇

その頃、竜美は

潜入捜査

任務完了ッ!

隠されたもの

日照と斬舞

そんなにアホじゃない

うん、絶対⑨じゃないよね?

スキーバトル?

Yとサーフィン

17261721171617111706170216971693168916841679 1675

カニ鍋、美味しいよね

帰りを付いてくる風鈴

2年3学期

2年3学期、始まる

久々の1対1！咲子vs出夢①

1745

激闘！咲子vs出夢②

威力比べ！咲子vs出夢③

C-MOON！咲子vs出夢④

1760

決着！咲子vs出夢⑤

剣豪と闇炎！メイvs日和①

連戦！メイvs日和②

1731

1736

1741

1750

1755

1764

1770

椿砲！メイvs日和③

落炎の桜！メイvs日和④

流水の陣！メイvs日和⑤

疾風と黒薔薇！メイvs日和⑥

1797

1年の差！影風vs岩拳①

弾ける岩！影風vs岩拳②

1780

1785

1791

1803

1808

1年1学期

私は桜木咲子

ここは花町高等戦闘専門学校、略して花町高専。

福岡県福岡市に位置する、そこそそ有名な学校である。

これは、そんな花町高専に入学した少女の学校生活を描いた、バトル系物語である。

side 桜木咲子（さくらぎさきこ）

私は桜木咲子。15歳。

今日から花町高専に入学する。

めちやくちや楽しみだ。

咲子「どんな感じなんだろうなく♪強い人いるかな？楽しみなあ〜♪」ワクワク

言い忘れていたが、花町高専は戦闘を専門とする学校だ。

色々想像しながらワクワクしていると、自分のドアが開けられた。

ガチャッ。

春菜「おはよう咲子。ご飯できたわよ」

咲子「おはよう母さん。準備終わったらすぐ行くね」

春菜「分かったわ。しつかり準備しなさいよ？」
ガチャツ。

ふふっ、言われなくても分かってるわよ。私を何歳だと思ってるの？
そう思いながら、花町高専の制服を着る。

咲子「これで準備は完了かな？」

こんなものだろう。さて、朝ご飯だべよつと。

ガチャツ、シャー。

階段の手すりを滑っていく。これの方が普通に降りるより速いのよね。
一階にとうちやーく。

ー数分後ー

さて、朝ご飯も食べたし、そろそろ行こう。

咲子「行ってきまーす」

春菜「行ってらっしゃーい、気をつけなさいよ」

咲子「はーい」ガチャツ

さて、いつもの自販機に集合して友達を待とう。

ーさらに数分後ー

絵奈「おはよう、咲子」

翔「相変わらず早いな、お前」

咲子「そりや今日から花町高専に通うから、楽しみで仕方ないのよ！」

この2人は

貝塚絵奈（かいづかえな）と西新翔（にしじんしょう）で、

私の親友だ。2人も今日から花町高専へ通う。つまり同級生だ。

翔「……あいつは今日も遅いな」

絵奈「祐樹君、いつも通り遅刻しそうね……」

もう1人の親友、戸畑祐樹（とばたゆうき）は遅刻魔だ。

だいたい集合時間の10分後にくる。そのせいで、私たちはダッシュで学校に向かう

必要がある。

しかも変なことに、祐樹本人はこの中で一番足が速い。

それがあるから余計にイラつく。

咲子「初日から遅刻したくないし、このまま置いていっちゃおう？」

絵奈「えー、待つてあげようよー」

翔「俺は賛成だな。遅刻するのはあいつのせいだ。いつもなら待つてあげてるが、今日は初日だ。俺たちの他の奴らに対する第一印象が悪くなっちゃうぞ」

絵奈「うーん……祐樹君には悪いけど、行こっか」

咲子「行こう行こう♪」

私たち3人は花町高専にゆっくり歩いていく。

花町高専は中学校より少し近いので、すでにここから見える。見えると言っても、建物が目立つのもあるんだけどね。

咲子「どんな人達がいるんだろうね？」

翔「強い人とかいるといいな」

絵奈「私みたいに絵を描く人っているのかな？」

咲子「あんたの”能力”を持つてることは無いと思うけど、絵を描く人はいると思うわよ」

翔「同じ”属性”の人と手合わせしてみたいよな」

咲子「そうね。私の”属性”はあんたに相性悪いし」

☆説明しよう！

この世界では、5属性と特殊能力が存在する！

5属性は、火、水、風、土、雷の5つの属性で、だいたいの方は1つ持っている！
子は火、絵奈と翔は水だ！

特殊能力は、その人個人の特別な能力である！

ちなみに、絵奈の能力は絵を実体化させる能力だ！

絵奈「近くまでくると人が増えてきたね」

翔「花町高専はそこそこの有名な学校だからな…在校生や新入生の数も多いんだろ」

咲子「そうね。ところだ」「おい、お前らー！」…あ、やつときたわね、祐樹」

振り向くと、祐樹がダッシュで走ってきた。

祐樹「置いていくなんて酷いぞ、お前ら！」

翔「いやいや、初日から遅刻するのが悪い」

咲子「同感ね」

絵奈「もつと早くきてよー」

祐樹「反論できないだ」と…」

咲子「まあいいわ。途中からだけど一緒に行きましょ」

祐樹「あ、ああ…」

まったく、なんでもいつも遅刻するのやら…

入学式

side 桜木咲子

花町高専についたあと、私たちは事前に言われていたクラスに入っていた。私たちは4人は全員2組だ。

咲子「クラスの中はあまり中学と変わらないわね」

翔「まあ、クラスの中は、だがな」

絵奈「グラウンドとかすごかったね〜！」

祐樹「いろんな人が特訓してたな」

??「あ、アンタたち！」

??「お前らもここに来たのか！」

少し雑談していると、誰かから声をかけられたので、振り返ると、そこには見知った顔が2つあった。

咲子「あら、若宮宮若ペア。2人ともここに入学したのね」

翔「知り合いが他にもいてよかったぜ」

この2人は、若宮景子（わかみやけいこ）と宮若敬太（みやわかけいた）だ。中学校

の時の同級生で、そのころはすでに付き合っていた。2人が出すラブラブな雰囲気砂糖吐きそうになるのはよくあることだ。

敬太「ここでもよろしくな！」

景子「ここでもよろしくね！」

わお。息びったり。

祐樹「おう、よろしくな」

絵奈「他にもいるかな。中学からの知り合い」

景子「今のところアンタたちしか見当たらなかったわよ」

敬太「ま、俺は景子とあればそれでいいがな」

早速ラブラブ発言。もう慣れたけど。

景子と敬太「そういう事だから、それじゃ」スタスタ…

咲子「……………コーヒーある？」

翔「あるぞ。マツ缶だが」

絵奈「どうやってそれを千葉から仕入れてきたの？」

翔「こないだ旅行に行った時に爆買した」

祐樹「はあ…」

咲子「翔って戦闘狂で甘党という謎の組み合わせを持つてるよね」

翔「それを言わないでくれ。ほい、ブラックコーヒー」

咲子「あ、持ってたの？ありがと」

ゴクリ。うん。ちょうどいい苦味ね。さっきの2人の雰囲気はそこまで甘くなかったけど、そこから過去の甘い雰囲気を出してしまったわ。記憶力がいいのはいい事ばかりじゃないわね。

ガラガラ…

先生「はい、みんな席について」

ドアが開いて女性の先生が入ってきた。

咲子「……………。(強そう。)」

この先生、ただものじゃないわね。とてつもないオーラを感じるわ。

先生は持ってた書類を近くの机に置くと、自己紹介を始めた。

日花「私は担任の坂田日花(さかたにちか)よ。よろしく」

坂田日花？その名前どこかで…

と思いながら隣を見ると、翔を含んだ数人が驚いた顔をしていた。うーん…絶対聞いたことある名前なんだけど…

翔「おい咲子、俺たち相当ラッキーだぞ」ボソツ

咲子「そんなにすごい人なの？」ボソツ

翔「ああ、彼女は2代目の”桜”だ。聞いたことあるだろ？」ボソツ

咲子「あ、そうだった！だから聞いたことある名前だったんだ！」ボソツ

☆説明しよう！

桜属性は、火属性の亜種で、かなり珍しいぞ！ちなみに、他の4属性も亜種が存在するぞ！

強いのは確定ね。あとで手合わせお願いしようかな？

そう思ってた先生の方を見ると、見事に目があった。

先生はすぐに目を逸らしたが、なぜかまだ見られてるような気がした。

日花「……さて、そろそろ入学式だから、廊下で並びなさい」

全員「はい」

ガタンガタン…

ー講堂ー

教頭「これより、令和2年度第〇〇回花町高等戦闘専門学校入学式を始めます。起立、気をつけ、礼」

入学式はいつもありそうな挨拶から始まり、校長先生の話や、先生紹介などがあった。でも、私が待っていたのは、この後の話だ。そう、

教頭「次は学校紹介です。高飛風太（たかとびふうた）先生、お願いします」

紹介はどうやら風太先生がするようだ。なぜ下の名前で呼んでるのかというと、彼の妹である高飛水奈子（たかとびみなこ）先生も同じ苗字だからだ。

風太「さて、みなさん、待ちに待ったかもしれない学校紹介です。まず、みなさんはもうすでに分かっているとありますが、この学校は戦闘を専門とする学校です。そのため、戦闘技術が高いほど成績がいいということになります」

うん、まずはこの学校の専門のことね。これを知らない人はただのバカね。

風太「しかし、もちろん普通の高校で教えるような教科も教えてますので、100%戦闘のみというわけではありません。くれぐれも勘違いしないようにしてください」

これも基本ね。勘違いする人っているのかしら？

（いるよ、祐樹とか。）

風太「ここで、戦闘専門学校ならではの制度、学年ランクの紹介をします」

お、きたきた！ランク制度！待ってましたー！

風太「ランク制度は簡単に言えば最強ランキングみたいなものです。個人個人のパワー（戦闘力みたいなもの）や技術で決められています。みなさんはこの後パワー測定をして早速ランクが分かると思いますが、そこで終わりではありません。ランク戦というものがあり、自分より上のランクの生徒を倒すことで自身のランクを上げることができます！しかし、負けると下がるので要注意を」

なるほど。絶対1位になりたいなあ♪狙うならトップね！

その後色々学校の説明をされ、紹介は終わった。最後は終わりの言葉だ。

教頭「これをもちまして、令和2年度第〇〇回花町高等戦闘専門学校入学式を終わります。起立、気をつけ、礼」

礼をした後、マイクは坂田先生に渡された。

日花「これよりパワー測定に入ります。1クラスずつ順番に測定室に入ってきて下さい。まずは1組からどうぞ」

パワー測定ね。楽しみだわ。

咲子「解せぬ」

side 桜木咲子

入学式の後、私たちはパワー測定をし、その後帰った。

その次の日、結果が返ってきたんだけど…

パワー測定結果

桜木咲子

パワー 27.5万

属性 火

学年ランク 1位

…は？

いやいやいや、1位になりたいとは言ったけども…

何が何でもいきなりすぎるわよ…

咲子「解せぬ」

翔「確かに納得できないな」

絵奈「咲子はやっぱり強いね」

祐樹「俺、この中でパワーが一番低い…」

翔は4位、絵奈は6位、祐樹は10位だった。私たち全員学年上位に入っている。

咲子「……………ほんと解せぬ」

翔「さつきから同じことしか言っていないぞ、お前」

咲子「だって、私はすごい戦いをして1位になりたかつたのよ！こんな感じで1位になるのは納得できないわよ！」

絵奈「なら、2位と戦えば？」

祐樹「まあ、一応いい戦いになると思うぞ」

咲子「いや、でもな……うーん……」

??「桜木咲子さん、あなたにランク戦を申込みます」

咲子「え？」クルッ

振り向くと、そこには桃髪で目が青い少女がいた。

腰にさしているのは……日本刀か。

………日本刀!?!

咲子「なななな日本で日本刀なんて持ち歩いてんの!?銃刀法違反にならないの!?!」

??「失礼な!これは逆刃刀なので違反じゃありません!」

咲子「はあ。それならいいけど……まず、アンタ誰?」

メイ「私は室見メイ(むろみめい)です。学年ランクは2位です。1位であるあなたを倒しにきました」

咲子「私はただパワーが高いと思ってんの?」

メイ「そう思わなくもないですが、あなたはそうじゃないと判断してます」

咲子「……なるほどね。その申し込み、了承するわ」

メイ「感謝します。それでは、昼休みに戦闘場に来てください」

咲子「了解」

返事を聞くとメイは去っていった。

咲子「初バトルか…」

翔「フラグ回収が早かったな」

絵奈「咲子、油断しないでね」

祐樹「相手は剣士か…どんな戦いになるんだろうな」

咲子「私は全力を出すだけよ。楽しみね」

―昼休み―

…やつと昼休みになったわね。待ちくたびれたわ。

咲子「さて、戦闘場に行くわよ！」

翔「俺らは後から行くぜ。頑張れよ」

咲子「うん！」

そう言つて私は戦闘場へと歩きだした。

―戦闘場―

戦闘場についた頃には、数名観客がいた。

一応1位と2位の戦いだしね。来てもおかしくないわね。

メイ「咲子さん、お互い全力を出しましょう」

咲子「ええ、望むところよ！」

アナウンス『これより、ランク戦を開始します。両者、前へ』

2人「よろしくお願いします」

アナウンス『では……ランク戦、始め!』

始めの合図がされ、私は手に火の玉を作る。

火属性の基本、ファイアボールだ。

見た目は……マ○オで出てくるアレね。色も形も似ている。

メイ「なるほど。試しにそれを打ってくるんですね」

咲子「その通り♪オラア!」ポイツ!

ファイアボールをメイに向かって投げる。しかし、メイは一步も動かず、刀を鞘から抜きそれを斬った。

メイ「……火斬り」

わお、お見事。なら、次はこれね。私は拳に火を纏ってメイに向かって走り出す。

咲子「くらえ!ファイアパンチ!」ドゴツ!

メイ「ハアツ!」キイン!

私はメイを殴るが、メイは刀で拳を受け止める。

すごい反射神経ね。

咲子「このまま押すわ、ハアアア!」グググ:

メイ「私も……負けませんっ!」グググ:

今はメイが押している。だけど、これも私の作戦のうちよ。

咲子「あ、やばい、押される……！」（演技）

メイ「このまま押し切ります！」

メイは演技に気付かずそのまま押しを続けた。そのうちに私は火を右足にも纏う。

準備は完了だね。さて……

咲子「ハアツ！」キイン！

軽々と刀を弾く。

メイ「え!?ぐうっ！」

メイはそれに動揺する。隙あり！

私はその場で宙返りをする。

咲子「炎突！」ドゴオ！

そして火を纏ったかかと落としをする。

メイ「……ガハツ！」

攻撃はメイの頭に直撃する。

咲子「よし、決まった！」

メイ「ううっ……今のは効きました」

咲子「ふふっ、でしょ？」

メイ「はい、確かに効きました。でも、同じ手は通用しません！そろそろ本気で行きましよう！」

咲子「…いいわよ。本気をだすわ！」

初めてのランク戦、絶対勝ってみせる！

咲子VSメイ

side 桜木咲子

咲子「……ハッ！」ポオオオ！

私はエネルギーをためて手に火纏う。

メイ「いつでも来てください！」

メイは刀をだし、いつでも攻撃を防御できるようにしている。隙がないわね。でも、あれなら…

咲子「…これならどうかしら？」シャカシャカ…

私は火を纏った手をブンブン振り回す。そのせいか周りの空気に熱が広がり、もわわんとぼやけていく。

メイ「これは…！」

咲子「陽炎！」モワーン

空気が歪み、視界が悪くなる。これじゃメイは攻撃を正確に当てることができない。

メイ「…陽炎を出すとは、考えましたね。でも、私の属性は、風です。つまり…」キツ…

メイは刀を構えると、大振りをした。

メイ「これは効果がないんですよ！」ブンッ！

メイは風を起こして陽炎を吹き飛ばす。しかも、それだけにとどまらず、さらに風で飛斬撃を放つ。

メイ「風斬！」ズバツ！

咲子「…まずい！…うぐうっ！」ズバツ！

飛斬撃をかわそうとするが、いくつか当たってしまった。

痛い！何この威力!?思わず体勢を崩してしまった。

メイ「まだまだあ！」ズバズバツ！

メイはまた飛斬撃を飛ばしてきた。流星にこの体勢ではまずい！こうなったら、練習していたイナ○レの技を…！

咲子「うおおおお！イジゲン・ザ・ハンドオオ！」

ドゴツ！ギユイイイイン！

地面を殴り、そこからエネルギーが放射するように火でできた円状の壁ができる。飛斬撃はそれに当たって上に受け流される。良かった、成功して。

メイ「え、あなたも」イナ○レファンなんですか？意外ですね」

咲子「え、アンタも？仲良くなれそうね」

メイ「そうですね。でも、それは後でにしましょう。飛斬撃が効かないなら、これです！」キーン…

メイは見覚えのない構えを取る。

これは新技の予感…！

メイ「ハッ！」ドッ！

メイはとんでもないスピードで突っ込んできた。速い…！

咲子「…っ！」ポッ…

メイ「もう遅いです！くらえ！」

メイの刀は緑色のオーラを纏って私に斬りつく。

メイ「鳴鳴斬り！」ギイーン！

メイの必殺技らしき技が私に炸裂する！

私は火で防御をするも、徐々に押し切られていき、しまいには攻撃が命中してしまっ
た。

咲子「…グハッ！」バギイ！

痛い！あばらが数本逝った！何この技!?やばい…負けてしまうかも…

??『何諦めてんの?』

…!?どこからか声が…私、まさか幻覚とか出てないよね？

?? 『出てないわよ。私はアンタの精神に話しかけてんのよ、安心しなさい』
精神に?…って、あなた誰ですか!?

?? 『それは教えられないわね。でも、1つだけ言うわ。決して諦めないこと。諦めなければ、アンタは勝てるわ』

はあ。諦めないことね…そうしますか。

?? 『よろしい。じゃあね』

そこで声は聞こえなくなった。何今のは?

メイ「…さつきから何ブツブツ言ってるんですか?勝負中ですよ?」

咲子「…あ、やべ」

メイ「ハアツ!」ブンツ!

咲子「…ふっ!」スツ…

今、私の手はこういう状態。

手刀手

…真剣白刃取りをしてる。

メイ「…!?さつきと気迫が違う…!」

諦めないと思うと、なんか力が込み上げてきた。これならいける!

咲子「ハアアアツ!」ギイン!

メイ「ううっ！」ズツ…

メイは私に押され少し後ずさる。

咲子「ハアアア…」ボオオオオ…

手に力を込める。すると…

ヒラア…

咲子「これは…！」

手には赤い桜の花びらがあつた。これは坂田先生の…！

まさか私も？

メイ「その花びらは…！」

…授業中に先生がやってた技、やってみる価値はあるわね。

咲子「火桜！」BLOOM!

桜の弾幕がメイに向かって飛んでいく。

メイはそれを止めようとするが…

メイ「…このパワーは…！強すぎる…！」ギギギ…

咲子「ハアッ！」ドゴッ！

パンチをメイに叩き込む。鳩尾にクリーンヒットした。

メイ「ガハッ！」

メイは火桜とパンチのダメージで倒れる。どうやらバテたようね。

咲子「…まだやる？」

メイ「…いや、降参です。負けました」

その時にアナウンスがなった。

アナウンス『ランク戦、終了！勝者、桜木咲子！』

咲子「いい勝負だったわ」スツ

私は倒れてるメイに手を差し伸べる。

メイ「…あなたが桜属性だとは予想外でしたね」ギユツ

咲子「あはは…あれ、今初めてやったのよね…」

メイ「え!?!じゃあ今目覚めたってことですか!?!すごいです!!」キラキラ

メイは目をキラキラさせてそう言った。見るからに興味津津ね。

咲子「さて、保健室に行くわよ」

メイ「え、あ、はい」

…後で大勢から質問せぬにあいそうね。

メイは可愛い？

side 桜木咲子

私とメイは、お互い骨が折れたりしたので、保健室へと向かった。

ーと言いたいところだが、戦闘場から出ると、そこには生徒が大量に待ち構えていた。どう考えてもインタビュだろうな…

咲子「…ねえ、メイ」

メイ「何ですか？」

咲子「…覚悟はいい？」

メイ「え？何ですかいきなり「いい!？」…あ、はい、いいです」

咲子「よし、なら…」ガシッ

私はメイをお姫様抱っこする。

メイ「え？え？」

咲子「いくわよー！」

メイ「何をするのー」

ダダダダダダダ

私はメイを抱えて保健室に向かって全速力で走りだした。

生徒「あ、逃げた！」

生徒「速すぎだろ！」

生徒「追うぞ！」

生徒たちはそういうけど、その頃はもうそこにはいなかった。

ー保健室ー

先生「桜木さん、あなたあばらが数本折れてるわね。室見さんは骨にヒビが入ってるわ：羽犬塚さん、ちよつとこつちにきなさい」

羽犬塚「はい、ボクに何の用ですか？」

先生に呼ばれて銀髪の女の子が走ってきた。

この子：：どうやらボクっ娘のようね。初めて会ったわ。

先生「アンタの能力で桜木さんと室見さんの骨を治してほしいの。お願いできるかしら？」

え、能力？

羽犬塚「はい！ボクにお任せください！」

メイ「どうやって治すんですか？」

羽犬塚「ボクの能力は骨を出す能力なんだ！それで治すんだよ！」

咲子「なるほど…お願いね、羽犬塚さん」

羽犬塚「さん付けはやめてよ、同級生だし。ボクは羽犬塚ルマ（はいぬづかるま）だよ！」

あ、同級生だったんだ。

メイ「えつと…私は室見メイです…よろしく」

咲子「私は桜木咲子よ。よろしくね、ルマ」

ルマ「うん、よろしく…さて、咲子から治療するから、動かないでねー。えーつと、これをこうして…」ギギギ…

体の中の骨が動いたりする感覚がした。不思議な感覚ね。

ルマ「…よし！これで治療完了！もう動いていいよ！」

咲子「うん…おおつ、すごい！ホントに治ってる！」

ルマ「よかった！じゃあ次はメイちゃんだね」

メイ「何で私はちゃん付けですか…」

ルマ「可愛いからいいじゃん！動かないでねー」

メイ「か、可愛い…私が…／／」

メイは顔を赤くして照れる。もしかして可愛いって言われるのが慣れてないのかな？まあ、可愛いのはホントだけど」

メイ「さ、咲子さんまで：／／／

咲子「あ、声に出てた？ごめんねー。でも、可愛いのはホントだから、照れなくてもいいんじゃない？」

メイ「そ、そうですか：？」

咲子「うん！私が断言する！」

メイ「あ、ありがとうございます：／／／

あ、また照れた。男子がこの顔みたら絶対惚れるわね。

ルマ「：メイちゃんも終わったよーって、あれ？顔赤いよ？まさか失敗した!？」

メイ「いや、失敗してませんよ。ありがとうございます」

ルマ「お礼はいらないよ！進んでやってるんだから！先生、終わりましたよー」

先生「あら、ありがとね、羽犬塚さん。あとは傷の消毒ね」

ルマ「それじゃ咲子とメイちゃん、またねー」タタタ：

ルマは保健室を去っていった。ボクっ娘はいるものなのね。

先生「ーこれで消毒もできたわよ。今日の残りの授業はあまり動きすぎないようにね」

2人「はい。ありがとうございます、失礼します」

ガラガラ：

咲子「さて、教室に戻りま s h 「咲子ー！」：やつと来たわね」
メイ「私は先に帰って m 「メイー！」：私も呼ばれましたね」
時間は遅くなったけど、結局質問ぜめになるのね…。

なんか急展開

side 桜木咲子

……。

来るの遅くない？

翔「初勝負お疲れさん！」

絵奈「遅くてごめんね。人たがりができてたものでね、抜けるのに時間がかかったんだ。」

祐樹「あとよ、お前、桜属性だったのか!？」

咲子「いや、それがね、勝負中に目覚めたみたいで……」

祐樹「え、そうなのか!?! すごいな！」

翔「ん？よく見たら……お前、目が紅くなってるぞ。坂田先生みたいな目の色だ」

絵奈「きれいだね。」

咲子「え、そうなの？」

祐樹「鏡でみてみろよ」

咲子「えっと、鏡鏡……あ、ほんとだ」

鏡を見てみると、以前まで黒かった私の目が紅くなっていた。桜属性に目覚めたら目が紅くなるのかな？

そう考えてる時、メイは男子2人と話していた。

？「メイ、鳴鳴斬りの威力おちたんじゃね？」

??「そんなはずないだろ、相手が強かっただけだ！」

メイ「育也君の言う通りです。威力は落ちるところか上がってます。咲子さんが強かったんですよ」

？「……おい、お前」

咲子「え？私？」

？「お前、卑怯な手なんか使っていないよな？」

咲子「使うはずがないわよ。こう見えても私、卑怯者は嫌いだから」

学「…ならいい。俺は本松学（もとまつまなぶ）だ、よろしくな」

育也「僕は竹下育也（たけしたいくや）だよ。よろしくね」

咲子「う、うん、よろしく…」

続いて、翔たちも自己紹介する。

翔「俺は西新翔だ」

絵奈「貝塚絵奈だよ」

祐樹「戸畑祐樹だ。よろしく」

育也「うん、よろしくね！」

学「全員強そうだな」

メイ「三人とも10位以内らしいですよ」

学「そうなのか!?!いやー、ぜひ戦ってみてーな」

育也「まあまあ、それは後で考えようよ。とりあえず場所変えない? 周りに人がいっぱいいるし」

咲子「え、いつのまに…」

気付いたら、周りに人から注目されていた。

咲子「所で、アンタたちは何位?」

学「俺は5位で…」

育也「僕は9位だよ」

祐樹「この中で俺最下位かよ…」

翔「おい、つまり、ランク10位以内がここに7人も集まっていることになるぞこれ」

絵奈「注目されててもおかしくないね」

メイ「一旦ここから離r「キーンコーンカーンコーン…」

昼休みが終わった。放課後話しようか」

咲子「そうしよつか。じゃあね〜」

私たちはそれぞれのクラスに帰っていった。

その後の10分休憩で質問責めにあつたのは別の話。

―放課後―

咲子「ふい〜、やつと帰れる〜」と、思わないでね?」

…え?」

日花「アンタに話があるの。ついてきて」

咲子「あ、はい。3人とも先に行つてて〜」

翔「おう」

絵奈「またね〜」

祐樹「なんでアイツが呼び出しを?」

―指導室―

咲子「それで、何ですか? 私何も悪いことしてませんよ?」

日花「なんで悪いことした前提なの? アンタが今日目覚めたことについてよ」

咲子「あ、桜属性のことですか?」

日花「そうよ。アンタみたいに目覚めてすぐ火桜を使う人を見たのは私以外では初め

てね」

咲子「え、アレ使えるようになるのってどれぐらいかかるんですか？」

日花「数日かかるわね」

咲子「なるほど…って、先生もすぐに使えたんですか？」

日花「そうよ。すごいでしょ？」ドヤア！

咲子「先生がドヤった…」

日花「…まあ、それは置いといて、アンタ、今すぐ火桜を出してみなさい」

咲子「へ？」

日花「コツは掴んだはずよ。はい、出して」

咲子「は、はい。スウ…ハッ！」ヒラッ！

花びらのイメージをして力を手に集中させると、数枚の火桜を出すのに成功した。

日花「あら、数枚出すとはやるわね」

咲子「思ったより上手くいきました」

日花「…じゃあ、攻撃しなさい」

咲子「え!?!危なくないですか!?!」

日花「大丈夫よ。かかってきなさい！」

咲子「…分かりました。ハアッ！」B L O O M！

火桜が先生に飛んでいく。

日花「……！」カッ！

しかし、私が飛ばした火桜がいつのまにか先生が出した火桜に止められる！

日花「悪くないわね。もういいわよ、解除して」

咲子「あ、はい」

フツ…

日花「合格だわ」

咲子「え？合格？何がですか？」

日花「咲子、アンタ…」

私の弟子にならない？」

桜木咲子、弟子になる

side 桜木咲子

日花「アンタ、私の弟子にならない？」

咲子「え（聞き取って反応した）？…へ？（言ってることを理解した）何ですかいきなり」

日花「もう一度言うわよ。私の弟子にならない？」

咲子「ええええー!?に、2代目桜の先生の、で、弟子に、ですか!？」

日花「そうよ」

咲子「も、もももちろんです！お願いします！」

日花「オツケー☆」

咲子「ノリ軽っ！」

日花「いやー、私、弟子にしてください！って言われたことは何回もあるけど、私の弟子になって！って言ったのはアンタが初めてなのよ？」

咲子「わ、私が初めて、ですか!？」

日花「私のような才能を持つてる人に会いたかったのよ。目覚めてすぐに火桜を使う

ような人を、ね。だからアンタが初めてよ」

咲子「な、なるほど…」

日花「ということ、よろしくね」

咲子「は、はい。よろしくお願いします（何がということ、かは分からないけど）」

日花「さて、戦場で早速特訓よ！」

咲子「え、いきなりですか!？」

日花「そうよ。早く桜属性に馴染む必要があるし」

咲子「あ、なるほど」

日花「行くわよ！」

咲子「はい！」

その後2時間ほど私は先生と特訓をした。

先生は火桜の技術を手取り足取り教えてくれた。

そのおかげで私はすでに射程距離を10メートルに伸ばすことができた。

日花「さて、今日はここまでよ。お疲れ様」

咲子「今日はありますがとうございました、師匠！」

日花「師匠はやめてよ。先生でいいわよ」

咲子「はい、先生！」

日花「素直でよろしい。じゃあね」

咲子「はい、さよなら！」

タタター

side 坂田日花

ふふっ、いい弟子ができたわね。しかもたったの2時間であの成長速度、私と同じぐらいだわ。数日で私の技の1つは教えられそうね。

風太「おう、日花、まだここにいたのか」

日花「ええ、今日できた弟子を鍛えてたのよ」

風太「……弟子って、桜木のことか？」

日花「ふふっ、正解よ。流石にわかるわね」

風太「まあな。アイツ、当時のお前にそっくりだ」

日花「私に？どちらかと言えば」私の”先生に似てると思ったわ」

風太「お前の先生か？まだ天界で特訓してんのか？」

日花「そうよ。後1ヶ月ぐらいで帰ってくるわ」

風太「そうか。その時に桜木を紹介してやれ」

日花「もちろん、そのつもりよ」

火野先生は、どういう反応するかな？

side 桜木咲子

咲子「ふうくただ今く」ガチャ

春菜「お帰り。遅かったわね」

咲子「ねえねえ母さん、今日すごいことがあったのよ」

春菜「へえ？なにになに？」

咲子「私、ランク1位になって、昼休みに2位と戦ったの！」

春菜「あら、すごいわね。それで？」

咲子「私が勝ったんだけど、その時に……」

春菜「その時に？」

咲子「桜属性に目覚めたのよ！」

春菜「……え!?桜属性に!?!」

咲子「そうそう!しかも……」

春菜「しかも？」

咲子「坂田先生の弟子になったの！」

春菜「……坂田って、坂田日花？」

咲子「うん、そうだけど？」

春菜「……日花なら、ありえるわね……」

咲子「え、母さん、先生のこと知ってるの？」

春菜「知ってるどころか、友達なのよ」

咲子「……………ええええええ!!」

春菜「ふふつ、今度は私が驚かしたわね」

咲子「それって、ホント!?!」

春菜「ホントよ。私たちが学生のころ、日花はずっと1位だったわ」

咲子「す、すごい…」

春菜「あつ、話はここまでにして、一旦ご飯にしましょ?」

咲子「うん!」

夕食を食べてる時、母さんからいろんな話を聞いた。

父さんがランク2位で先生によくボゴボゴにされてたり、

風太先生と水奈子先生も友達だったり、いろいろ。

話している時、母さんは楽しそうだった。

春菜「…それでね、日花の技の1つがね…」

咲子「うんうん…」

春菜「炎天桜舞! 日花がその技を使う時、周りが火桜だらけになるの!」

咲子「へえ〜!」

炎天桜舞か…いつか教えてもらえるかな？

夕食を食べ終わった後もいろんなことを話してもらえた。
今日は本当に楽しかった。

真・体力テスト

side 桜木咲子

坂田先生の弟子になって数日後、今日は真・体力テストの日だ。

中学校までの新体力テストと違うことは全くない。つまり、ただ名前を変えたただけだ。カッコいいからいいけど。

クラス全員運動場に集合し、今はハンドボール投げをしているところだ。属性ありで測定している。

生徒「…テイツ！」ポイツ！

日花「35m！」

生徒「…よし！」

日花「次！」

咲子「はい！」

翔「咲子、がんばれよ」

咲子「もちろん！ハアアアツ！」ボオオオオ…

ボールを持つてる手に火をつける。

咲子「ファイアブースト！」ドピユウウウ…

日花「わお。遠いわね」シュツ！

先生は遠くへ走って行き、しばらくすると帰ってきた。

日花「…21km！」

咲子「…やったー！」

祐樹「…まじか…」

絵奈「すごい飛んだね〜」

1100m走

日花「よーい…ドン！」

咲子「うおおおおお…」

絵奈「はやいね〜」

翔「いつものことだろ」

祐樹「俺、そろそろ追い抜かれそうだな…」

咲子「ふう」

日花「時速169km！」

☆説明しよう！

ここではタイムではなく、時速のスピードが測定される！

咲子「おっ、伸びたわね」

その後、色々測定してから…

ーシヤトルランー

今は20mシヤトルランが始まるところだ。

ブザー「5、4、3、2、1、スタート！」

ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド♪

咲子「何回いくかな？」

ー30分後ー

ブザー「100」

翔「おっ、100回行ったぜ」

祐樹「俺はもうすぐバテそうだ…」

咲子「私はまだまだいけるわよ」

絵奈「みんな、頑張れ〜」（すでに脱落している）

ーさらに30分後ー

ブザー「300」

現在生き残ってるのは、私と翔とルマだけだった。

咲子「ハア、ハア…そろそろ疲れた…」

翔「俺…もだ…」

ルマ「ボクはまだまだ余裕だよ♪」

生徒「す、すげー…」

生徒「あいつらバケモンかよ…」

生徒「1位と3位と4位だから納得はできるけどよ…」

言い忘れてたけど、ルマのランクは3位だ。1、2、3位が全員女子という、衝撃の事実が発覚したのは、つい数日前のことである。

咲子「…ねえ、翔、ルマ」

翔「な…んだ？」

ルマ「なになに？」

咲子「333回で…もう…やめようよ」

翔「俺…は…賛成だぜ…」

ルマ「まあ、別にいいよ」

―数十秒後―

ブザー「333」

咲子「ハア、ハア…」バタン

翔「もう…ムリだ…」バタン

ルマ「あ、ボクも！」 バタン

日花「……。終了！」

生徒たち（羽犬塚さんは絶対もつと行けただろ…）

ルマ「あー、楽しかった♪もう一回やる？」

ルマ以外全員「どんだけ体力あんの!?!」

先生含めクラス全員ルマの底なしの体力に驚くのであった。

ランク上位が大集合？

side 桜木咲子

真・体力テストから約1週間後、日花先生に鍛えてもらったり、ランク戦に挑んできた奴らをフルボッコにしたり、メイに可愛いと言って赤面したのを見て癒されたりと、いろんなことがあった。

今は昼休みで、いつも通り翔たちと特訓していたら…

ピンポンパンポーン♪

放送「1年生のランク1位〜10位は、戦闘場に集合してください。繰り返します。

1年生のランク1位〜10位は、戦闘場に集合してください」

ピンポンパンポーン。

咲子「集合？なんでだろ…」

翔「とりあえず行こうぜ」

「戦闘場」

私たちが戦闘場についた頃には、すでに全員集まっていた。

メイ「咲子さん、こんにちは」

咲子「よっ、メイ」

学「相変わらず挨拶が軽いな」

咲子「あんたが言うな」

学「んだとお!?!」

育也「まあまあ、そこまでにしてよ」

祐樹「それよりよ、なんで俺たちは集合してんだ?」

絵奈「何らかの会議かな」

???「…あいつが1位か」

?「おい、お前」

咲子「?」

次郎丸「俺は寺野次郎丸(てらのじろうまる)で…」

渡「俺は門司渡(もじわたる)だ。お前に忠告をしておく」

咲子「忠告?」

2人「…1位だからってふんずりかえつてると、痛い目見るぞ」

他の7人「!?!」

咲子「…分かったわ」

次郎丸「言うことはそれだけだ」

渡 「じゃあな」スタスタ

ルマ 「あの2人、なんかムカつくね」

翔 「あいつらはどうやら俺たちのアンチのようだな」

祐樹 「どこでもいるものなんだな、アンチって」

絵奈 「咲子、大丈夫？」

咲子 「あんなことを言われたくらいで怯えてたら1位になれないわよ。大丈夫よ」

メイ 「なら良いんですけどね……」

ガラガラ……

水奈子 「みんな、もう集まってるわね」

?? 「……………」

戦闘場に水奈子先生と1人の生徒が入ってきた。

メイ 「……………!」

咲子 「先生、その人は先輩ですか？」

水奈子 「そうよ。この人は3年の1位、室見出夢（むろみいずむ）君よ」

出夢 「よろしくね」

ん？ 室見？ まさか……

メイ 「お兄さん……」

翔「兄妹なのか？」

メイ「あ、はい」

水奈子「さて、なんであんなたちをここに読んだかと言うと…」

水奈子先生は間を置いてから、話した。

水奈子「出夢君対あんなたち10人で戦って欲しいのよ」

10人「!？」

出夢「……」

ルマ「力の差を見せつける為、ですか？」

水奈子「まあ、そう言ったところね。あとこの戦い、動画撮るから、全力を出しなさいね」

育也「は、はあ…」

学「マジかよ…」

水奈子「さて、みんな準備しなさい」

10人「は、はい…」

出夢「君たちの力、楽しみにしてるよ」

わお、強いやつあるあるの発言だ。実際に強いオーラを感じ取るけど。

それよりも準備しよつと。

―数分後―

アナウンス 「1年生ランク1位〜10位対室見出夢、開始!」

渡 「うおおおおお!」

次郎丸 「くらえええええ!」

ダダダダダ

翔 「おいバカ突撃したらやられるぞ!」

しかし、2人は無視して出夢先輩に突っ込む。

出夢 「…さて、始めよう」

先輩はそう言うと言に何か纏い地面に叩きつける。

ズシツ!

咲子 「…!重力!?!」

メイ 「お兄さんの能力は重力を操ること…つまり、重くしたり軽くしたり方向を変えたり自由自在なんです!」

祐樹 「何そのチート」

渡 「くっそお…!」

次郎丸 「重ええ!」

出夢 「さて」 ガシツ

重力魔 vs 1年軍団

side 桜木咲子

ルマ「強いね…」

メイ「あつさり相殺されましたね…」

出夢「さて、今度は僕の番だよ！重力球！」ギユイン！

先輩は紫色の波動弾をいくつか飛ばしてくる。

当たったらひとたまりもなさそうね。

咲子「みんな下がって！イジゲン・ザ・ハンド・改！」

私は右手にエネルギーを纏ってから地面に拳を当てる。

そして床からドーム状のエネルギーの壁ができる。

重力球は壁にあたり、上へと受け流され、天井にあたる。

出夢「へえ、属性や能力ではなく、エネルギーを使って防御するとはね…しかも妹の

好きなアニメの技とは…」

メイ「お兄さん、一言余計です。風斬！」ズバツ！

翔「俺も加勢するぜ！エターナルブリザード！」

ティウルルン…

メイは飛斬撃、翔は氷で攻撃する。

翔は水属性だがその中の氷系をよく使う。

出夢「またあのアニメの技か…フンツ！」バリイン！

しかし、攻撃はあっさり破られる。

学「ストーンパンチイッ！」ブンツ！

学は手に岩を集めて先輩に殴りかかる。

出夢「こんどは物理攻撃だね。ハッ！」ガシツ

先輩はその拳を軽々受け止める。

学「やべ、まさか…」

出夢「ぐるぐるぐるぐるぐる…」ブンブンブンブン…

学「あーれー」クラクラ…

先輩は学をブンブン振り回す。そして…

出夢「それっ！」ポイツ！

学「うわああああ」ピユウウ…

祐樹「あら…」

アナウンス「本松学、場外により失格！」

出夢「あと7人だよ。早くかかってよ」

絵奈「……………」カキカキ…

育也「……………」ビリビリ…

咲子「終わりそう？」

絵奈「終わったよ〜！」

育也「俺も準備オーケー！」

咲子「よし、2人とも、ゴー！」

ルマ「僕たちも技の準備を…」ギギギ…

絵奈はさつき描いた絵を実体化させる。それは…

出夢「おお…すごい能力だね…まさか龍を描くなんて…」

先輩が言った通り、龍だ。しかも、墨に電気を流していたため、体は電気を纏っている。

絵奈と育也「電龍！」

電龍「グオオオオオ！」ゴオオオ…

電龍は先輩に突撃する。

出夢「これは止めにくいから…フンツ！」ズシイ！

先輩は能力で重力を強くし、龍の動きを止める。

電龍「グググ…」ズンツ!

祐樹「止められた…なら…!」ビリビリ…

メイ「何をするんですか?」

祐樹「見とけよ…」ギユウン…

祐樹は龍の真後ろで足に電気を纏わせる。

まさか演出まで再現するとは…ドラゴンじゃなくて龍だけだ。

祐樹「電龍、電撃光線を出す準備をしろ」

電龍「…グオ」ビリイ

祐樹「よし、行くぜ!ドラゴンスレイヤー!」

ビリイツツ!!

電龍「グオオ…」フツ…

電龍はエネルギーを使い果たして消えてしまう。

出夢「ぐっ…凄いパワーだ!」グググ…

先輩は重力の壁を作り、攻撃を塞ごうとするが、壁は次第に割れていく。

出夢「…そうだ!さつき君がやってたのは…」スツ…

咲子「え、私?まさか…」

出夢「こう、かな?」ギユイイン!

先輩は壁を曲げ、電撃光線を受け流す。私が使った技の原理をすぐに理解し、使うとは……さすが3年の1位、侮れない強敵ね。

翔「咲子のイジゲン・ザ・ハンドを真似した……」

育也「恐ろしい……」

電龍が破られたから自信は余り無いけど、使うしか無い！

ルマ「咲子、僕はいつでもオーケーだよ！」ギギッ

咲子「え、早っ！私もこれでオーケーよ！」ポオオ

出夢「ムッ!？」

咲子とルマ「いつけええ！ケルベロス！」

ケルベロス「ワオーン！」

地獄の番犬、ケルベロスを呼び出した。

桜と梅と狼のトリオ

side 桜木咲子

ケルベロス「ワオーン！」ドドドド!

私とルマが作ったケルベロスは先輩に突っ込んでいく。

：こりやダミーとして利用するしかないようね。

出夢「：なんで同じような手を2回も？」ズシッ!

ケルベロス「グルルル：」ズンッ!

ケルベロスはあつさり動きを封じられる。

しかし、私の狙いは先輩に近づくことだ!

咲子「隙あり! 火桜!」シュッ!

ケルベロス「あぐあー」B L O O M!

ケルベロスの口の中から火桜が発射される。

先輩は少し驚くが、すぐに防御体制をとる。

咲子「甘い! ハアアアッ!」ボオオオ:

私はサッカーボールサイズの火の玉を作って蹴り上げ、それに向かってジャンプし回

転し始める。

この下り、どこは他にもあつたような……

天の声「まあ、平行世界であつたな」

あ、そうなの、へえー。つて、気にしてる場合じゃなかつた。

咲子「ハアアアツ！爆熱スクリュー！」ボオオオ……！

メイ「……なら、私も！」タタタ……

メイは私が蹴つた火の玉に反応し、ケルベロスの前で刀を構える。え、それつて……

メイ「合体技！鳴鳴ウルフレジエンド！」ズバアツ！

ケルベロス「ワオーン！」

……まさかの飛斬撃でのシユートチエイン。よく間違えて火の玉を斬らなかつたね？

出夢「フツ！」ギユン！

先輩は私のイジゲン・ザ・ハンドを真似た重力の壁で火の玉を受け流そうとするが、威力が強すぎて壁を破る。そして先輩に直撃する。

出夢「ぐうっ！」シユウウ……

咲子「やった、当たつた！」

メイ「やりましたね！」

出夢「……いやー、流石に当たるとは思つてなかつたよ。……そろそろ本気でいかせて

もらおうか」

え、本気？さつきまで本気じゃなかったの？

と、相手が強すぎる時の発言あるあるを考えていると、

先輩は先程より数倍強いオーラを放ちながら弾幕を撃ってきた。

出夢「とりあえず、充分な強さな満たない人たちは：

ギューイン！

…脱落してもらおうよ、ハアツ！」

そう言つて弾幕は私とメイ以外に飛んでいく。

ケルベロス「きやうんっ！」フツ…

ケルベロスは真っ先にあたり、消えてしまう。

翔「アイスグラウンド！…ぐあっ！」

絵奈「ええっ!?!うわあああ！」

祐樹「重くて動けねえ…うおっ！」

育也「ま…ま…ま…うわあああ！」

アナウンス「西新翔、貝塚絵奈、戸畑祐樹、竹下育也、場外により失格！」

4人は揃つて脱落してしまった。しかし、

ルマ「…ボーンガード！…ふう…」

ルマは骨のガードや底なしの体力でなんとか生き延びる。

出夢「…なるほどね。よし、君も認めよう」

ルマ「え、ボクも？ やたっ！」

ルマは認められて少し喜ぶ。

メイ「…お兄さん、なんのつもりですか？」

出夢「いやー、桜と梅のコンビと戦ってみたかったんだよ」

なるほど…私とメイね…ん？

メイ「……え？」

メイは梅属性だと言われて明らかに動揺している。

☆説明しよう！

風属性の亜種は梅属性だ！ 覚えとけ！

出夢「ん？もしかして気付いてなかったのかい？」

メイ「………。えっと…」

…なぜ分かったんですか？」

あ、知ってたんだ。

出夢「いや、僕はさっきまで知らなかったよ？」

メイ「え？ええっ？」あたふた

メイはそう言われてさらに動揺する。

咲子「これってもしや…」

ルマ「すごいね。自ら白白させてるよ」

メイ「…ハッ！あつさりだまされました！」

出夢「そうか…メイは梅属性だったんだね…。兄として嬉しいよ…」

メイ「ううう…秘密にしましたのに…」

メイは悔しそうな顔で先輩を睨む。

ルマ「まあまあメイちゃん、落ち着いて…それよりも先輩を倒す作戦を立てようよ」

出夢「30秒だけあげるよ。スタート」
そこから30秒、私たちは先輩を倒すための作戦を考えるのであった…。

作戦勝ち？

side 桜木咲子

出夢「さて、30秒たったよ。始めよう」

咲子「いくよ、2人とも！」

メイ「はい！」

ルマ「オーケー！」

私たちが考えた作戦なら、先輩の能力をうまく利用できるし、有利に戦える。

出夢「重力球！」ギューイン！

咲子「メイ！」

メイ「はい！風梅！」BLOOM！

メイは梅属性の基本技、風梅を使う。

花びらは重力球にあたり、重力球の威力は次第に減っていく。

ルマ「ボクの出番！ボンバット！」カキーン！

威力が弱まった重力球をルマは骨で作ったバットで跳ね返す。跳ね返った重力球は

先輩に向かって飛んでいくが、先輩はすぐにそれをかわす。

出夢「なるほどね。でも…」ギユイイン…

先輩は重力球の数を増やし…

出夢「複数あれば問題ないよね！」ギユンツ！

咲子「火桜！」

メイ「風梅！」

BLOOM！

私とメイの火桜と風梅が重力球にあたり、威力を減らす。

このまではさつきと一緒だ。

出夢「同じ手は通じないよ！」ギユイイン！

先輩は重力球をさらに飛ばしてくる。

完全に”予想通り”だ。

ルマ「今度はこれだよ！ボーンスロープ！」ギギツ！

ルマは骨でできたスロープを作り、それに重力球が当たる。図ははこんな感じだ。

咲子　メイ　ルマ　コレ↓（　重力球

そして、ボールのようにスロープを上って曲がり、先輩に向かって飛んでいく。

出夢「なにつ!?!…ぐわっ！」ドゴオオツ！

ルマ「やった、当たった！」

出夢

咲子「うまくいったわね」

メイ「止めるのではなく受け流して跳ね返すとはよく考えましたね」

咲子「いやー、イジゲン・ザ・ハンドを少し応用しただけで、大したことじゃないわ
よ」

メイ「それを考えつくだけで大したことですよ…」

出夢「…いい作戦だった。

降参だ」

咲子「…え？」

出夢「いやー、このまま戦ったらきつと僕が負けてしまうよ。しかも、昼休みをあと少しで終わるからさ」

メイ「じゃあ、私たちが勝ったことでいいんですか?」

出夢「いいよ。今回は君たちの勝ちだ」

ルマ「やったー♪」

アナウンス「室見出夢、降参により失格!勝者、桜木咲子、室見メイ、羽犬塚ルマ!」
キーンコーンカーンコーン…

アナウンスは、昼休み終了のチャイムとともに流れるのであった。

ー放課後ー

咲子「さて、帰る」おい、桜木」…なによ」

渡「先輩が降参したのって、お前が卑怯なことをしたからじゃねーのか?」

次郎丸「そうだろ?パワーが高いだけで1位になった卑怯女」

翔「おいお前ら、その言い方は「大丈夫よ、翔」でもよ…酷くないか?」

咲子「そんなに私のことを罵りたいのなら、私を倒しなさい。アンタ達2人で」

渡「言われなくても…」

次郎丸「分かってらあ!」

さて、お仕置きの時間ね。

メイって案外ガチ勢？

side 桜木咲子

咲子「…で？まだやるの？」

渡「くそお…」ボッコーン

次郎丸「強え…」ボコーンッ

咲子「私の質問に答えなさい」

渡「チツ…今回はここまでにしてやる」

次郎丸「いい気になるなよお！」ダダダ

2人は弱いやつがよく言うセリフをいい、私から逃げるように去っていった。あれ絶
対逃げてるよね？

翔「おつかれ、咲子。ほれ、マッ缶」

咲子「あ、ありがと。ちようど糖分が欲しかったのよ」

絵奈「それにしても、あの2人弱かったね」

祐樹「なんでまだ10位以内にいるのか不思議なくらいだ。明日ランク戦申し込んで
フルボッコにするか？」

翔「いい考えだな。俺はあいつらより上位だから挑めないんだよな…今回に限ってお前が羨ましい」

祐樹「…遠回しにお前はランクが低いと言われている気がするんだが」

咲子「安心して、祐樹。一応この中では一番低いから」

祐樹「…はい、そうですね…」ズーン…

絵奈「安心して！この中では低いけど、学年では上位だから！」

祐樹「フオローになってないような気が…」

咲子「まあ、そんな話は置いて、早く帰りましょ」

翔「そうだな」

祐樹はそのあと少し落ち込んでいたが、明日ランクを上げれると思いついた瞬間、すぐに立ち直った。単純ね。

―帰宅後―

ガチャツ

咲子「ただ今」

春菜「お帰り、咲子。客が来てるわよ」

咲子「客？だれかn「私ですよ」…ユーは何しにこの家へ？メイ」

客はメイだった。緑のパーカーとオレンジのスカートを着ていて、腰には相変わら

ず日本刀（逆刃刀）が差してあった。それ、動きづらくならないのかな？

メイ「ちよつと…特訓に…付き合つて…ほしくて…ここに…来たんですけど…ダメでした？」モジモジ

この前家の場所教えたから来たのはいいとして、何その仕草。私女なのに惚れてしま
うよ？可愛すぎでしょ！

咲子「も、もちろんいいわよ！」

メイ「…ほんとですか!」パアア

メイは私の返事を聞いた途端明るい表情をした。笑顔が眩しいよお

咲子「ところで、どこでするの？」

メイ「…庭でやります？」

咲子「お母さん、それでいい？」

春菜「いいわよ、荒らさない程度には」

咲子「オツケー♪」

メイ「ありがとうございます！早速始めましょう！」

その後約1時間、私たちは模擬戦や技の練習をしていた。

―約1時間後―

咲子「ふうーっ、今日はここまでにしよっか」

メイ「そうですね。ところで咲子さん、私イナ〇レが入った3〇S持ってきたんですが、あなたは持ってますか？」

咲子「もちろん、持ってるわよ！通信対戦する？」

メイ「私のチームは強いですよ？」

咲子「私だって！やろうやろう！」

私なんて、ゴットキャッチとかG5まで強化してるんだから！

―数分後―

咲子「負けた…」ズウーン…

メイ「フツ、これが私の実力です！」ドヤア！

わお、メイのドヤ顔可愛い…って、そんなこと言ってる場合じゃないわね。

咲子「どうやったたらあんなに強くなるの？」

メイ「ゲーム内の全キャラ調べ尽くしてから、バランスよくステータスを調整したんです。チーム作るだけで200時間以上かかりましたよ」

咲子「まじすか…」

あまりのガチっぷりに、女らしくない返事をしてしまった。メイってガチ勢なのね。私はエンジョイ勢だけど。

メイ「時間も遅くなってきましたし、そろそろ帰りますね」

咲子「あ、うん。じゃあね〜」

メイ「失礼しました、さようなら〜」ガチャツ。
今日学んだこと。それは、

メイは女でも惚れるくらい可愛いしガチ勢であること。
以上！

日花の師匠!?

side 桜木咲子

メイがガチ勢だと知って約2週間後、祐樹がアンチを（文字通り）蹴散らして7位に上がったたり、日花先生との特訓で全身筋肉痛になったり、学習定着度調査でオール満点とったりした。

今は5月の初め頃、つまり黄金週間ことゴールデンウィークだ。ちなみに宿題はすでに終わらせている。

今私は火桜を使って物を運ぶ特訓をしている。

咲子「うーん、この花びらをこうして…こう?」

ヒラツ…ガタン。

咲子「あつ、また落としちゃった」

蓮也（れんや）「おう咲子、なんか手伝えることあるか?」

咲子「父さんが? うーん…アドバイスとかある?」

蓮也「アドバイスか…花びらで持とうとしているものを自分の手で持つてるようなイメージやればよくないか?」

咲子「なるほど。ありがと、父さん」

蓮也「いいってことよ」

ピンポーン♪

蓮也「ん？春菜はなんか頼んでたか？」

春菜「頼んでないわよ、出てくれる？」

蓮也「おう。ガチャツ　どちら様ですか？」

日花「宅配じゃない者で〜す！」

その声…まさか。

蓮也「…まだそのセリフ言ってたのか。久しぶりだな」

日花「久しぶり♪私の弟子を呼んでくれる？」

蓮也「おう、ちよつと待ってる。咲子、お前の師匠が呼んでるぞ」

咲子「うん…何ですか？先生」

日花「ちよつと会わせたい人がいるのよ。いつしよに来てくれる？」

咲子「分かりました。すぐ準備してきますね」

日花「早めにお願いな」

咲子「はい」タタター

…まさか先生が来るとは思わなかったわね。どこにいくんだろ？

―数分後―

咲子「準備終わりました…た？あれ？先生は？」

春菜「日花なら蓮也と庭で手合わせしてるわよ。そろそろ帰って来ると思うわ」

咲子「え？…あ、なるほど」

母さんが言ったことを理解した矢先、無傷の先生とポッコポッコにされてる父さんが帰ってきた。

日花「いやー、楽しかった♪」

蓮也「昔から衰えてるどころか、数倍強くなってるねーか、お前？」ポッコーン

春菜「日花、さすがにやりすぎ」

日花「ごめんごめん。あ、咲子、準備終わったの？」

咲子「はい、終わりました」

日花「それじゃ、咲子と行ってくるわね」

蓮也「おう、変な事するなよ、お前がするとは思えないが」

春菜「いつてらっしゃい」

咲子「うん、行ってきまーす♪」ガチャツ。

出発して数分後、私たちは花町高専の近くの公園に来ていた。ここで何するんだろ？

咲子「ここで何するんですか？」

?? 「ん? …… あ!」

咲子 「え?」

?? 「アンタ、やつと会えたわね」

日花 「知ってるんですか?」

?? 「ええ、」 私が彼女を桜属性に目覚めさせたから」。私の声、聞いたことあるでしょ?」

咲子 「声? …… あ! メイと戦ってて負けそうになった時、どこからともなく聞こえた声の人ですか!」

有美 「そうよ。私は火野有美（ひのゆうみ）よ。さつき天界から帰ってきたの」

咲子 「…天界? あの世ですか?」

有美 「まあ、似たようなものね。天国はその一部よ。そこで半年ぐらい特訓してたのよ」

咲子 「は、半年!? 長いですね…」

有美 「まあ、私の人生に比べれば短いわよ」

日花 「咲子、こう見えても先生は65歳よ。全然そう見えなけれど」

え!? 私の約4、3倍じゃん! 見た目若つ!

咲子 「40歳の先生が若く見えるのはいいとして「言い方」すみません…えつと、6

5歳で30代に見えるなんてすごいですね…」

有美「驚くのも無理はないわ。それよりも…」ゴソゴソ…

有美さんは持ってたカバンの中から赤い帽子を取り出した。帽子の前には桜の花びらが刺繍されていた。

有美「これ、欲しい？」

咲子「え？えつと…まあ…欲しいですね」

有美「そう。日花、これ持ってて」ゴソツ

日花「パシリですか…はいはい」

有美「はいは一回。…欲しいなら、私に傷を1つでもつけてみなさい」

日花「…え!?!先生まさか…」

有美「そうよ。咲子、アンタに3代目試験をするわ」

咲子「3代目?…え!?!」

有美「もちろん、3代目桜になるための試験よ」

咲子「いやいやいやいや、何で私なんか3代目に!?!そもそもなる資格あるんですか!?!」

有美「あるからこうして試験を受けさせるのよ。で、どうするの?」

咲子「…その試験、受けます!」

有美「よろしい。じゃあ…かかってきなさい！」

ただ帽子が欲しかったただけだけど、何故かエスカレーターして、3代目桜になるための試験を受けることになってしまった。それでも、試験は合格してみせる！

突然の3代目試験

前回では少しでも傷をつけることが条件でしたが、展開的にみて一撃当てる方がいいと思っただので変えました。

side 桜木咲子

有美「…さあ、かかってきなさい」ムンツ!

咲子「はい…」ゴクリ。

このオーラ…日花先生以上だわ。一撃与えようとするだけでボコボコにされそうだわ。されるとは思えないけど。

咲子「一撃でも…当てれば…いいんですよね?」

有美「そうよ。一撃でも…よ」

咲子「…分かりました。行きます!」ダツ!

私は手に火を纏って早速有美さんに突っ込んでいく。

咲子「…ハアツ!」シュツ!

そして有美さんに拳を当てようとする。しかし、有美さんに当たったと思った瞬間、有美さんの姿はそこにはなかった。

咲子「……消えた!？」

有美「ふつつ、ここよ」シュツ!

咲子「つ、いつのまに…フツ!」シュツ!

有美「……………」シュツ!

咲子「また消えた!?!速いとしたら気配は感じるはず…なのになんで…?」

なんで…気配ごと別の場所に行ってるの?……。

有美「その程度じゃ私には当たらないよー。ほらほら、早く来なさい♪」

この人…確実に煽ってきてるわね。ウザい…

咲子「こうなったら…ハアアア…」ギユユン…

日花「へえ、今使うのね」

有美「……………」スツ…

有美さんは攻撃のかまえをしただけで動かない。

咲子「当たれ!炎天桜舞イツ!」BLOOM!

私は火桜を縦横無尽に動かし、有美さんに当てようとする。

有美「なるほどね、そうきたか。こうなったら…見せるしか…ないわね…」ギユユン

ン…

有美さんは手にエネルギーを溜めて…紫色の火桜?みたいなものを出した。あれ、火

桜だよな？なんで紫色なの？

有美「私の能力を乗せた火桜よ…くらいなさい」

有美さん、能力持ちなの!?! まずい、なんの能力か…!

有美「自分の攻撃に当たりなさい！」

…転送火桜!」 B L O O M !

シュツツツ!

次の瞬間、有美さんから私に向かって一枚の転送火桜を飛ばされ、気づいたら有美さんと場所が入れ替わっていた。

案外シンブルな能力ね、転送って。でも…

有美「さて、私の能力を知ったところで、どうするの？当たってしまおうよ？」

咲子「あ、やばっ」

シユルルルル！

自分の火桜が自分に向かって飛んでくる！解除はできないし…まずい！

咲子「イジゲン・ザ・ハンド改！」ギユイイン！

エネルギーをドーム状にし私を囲む。

しかし、大量の火桜が当たり壁は徐々に削られていく。

くっ…初見の相手に炎天桜舞を使った私がバカだった…！

咲子「くっ…こうなったら…意地でも解除するっ！うおおおおお！」右手でエ

ネルギーを流すのをやめ、は両手に私の全エネルギーをためこむ。

すると、私の手には白い火桜が一枚あった。

咲子「これは…！」

日花「白？……春菜の能力に似てるわね」

有美「…フツ、やっと分かったようね。自分の能力が」

咲子「…よくわからないけど、ハアアア！」ヒュン！

とつさの判断で白い火桜を他の火桜に当てる。すると…

シュツ…シュツ…シュツ…シュツ…

他の火桜が触れると同時に消えていく。

咲子「消えた…？」

有美「ふふつ、桜属性だけじゃなくて能力も目覚めさせてしまったようなね、私」

咲子「能力…ですか？」

有美「…：ほら、驚かずに一発当てなさいよ。まだ試験は終わってないわよ」

咲子「あ、そうだった。…フツ！」ギョーン！

私はまた白い火桜をだす。さっきこれがほかの火桜に触れた時、火桜が消えた。でも、お母さんの能力は確か、解除する能力…だった気がする。じゃあ、私もそうなのかな？

咲子「まあ、やってみないとわからないよね！ハアツ！」

シュツ！

有美「またきたわね。転送！…あれ？」シーン

有美さんは自分を転送しようとするが、何故か失敗に終わった。多分白い火桜が能力を解除したんだと思う。どちらにせよ、隙あり！

有美「あれ？あれえ？…あ」

咲子「炎突！ハアツ！」ドゴオオオ！

有美「…当たっちゃった」

日花「…………。勝者、咲子！」

咲子「やったあああああ！」

有美「ふふつ、いやー、能力が技や能力の解除、しかも食らった人はそのあとしばらく能力が使えなくなるとはね…流石に驚いたわね」

咲子「私の能力つて、サポート系になりそうですね」

日花「使い方によつては相手が詰むわね」

有美「少し地味だけどね。…さて、咲子」

有美さんは真面目な表情になる。あ、今受けたの3代目試験だった。

咲子「…はい！」ピシッ！

有美さんは私が欲しいって言った帽子をだした。

有美「アンタはこれから3代目桜よ。おめでとー」パサッ…

咲子「…はい！ありがとうございます！」

有美「よろしい。これからもよろしくね」

咲子「はい！よろしくお願ひします！」

日花「…思い出してみると、私も同じぐらいの時期に2代目になったわね」

咲子「え、そうなんですか!？」

有美「あ、言い忘れてたんだけど、桜の称号はこの時期に継ぐのよ。ま、まだ2回しか受け継がれてないけど」

咲子「有美さんって、どうやってこの称号を手に入れたんですか？」

有美「……私が作って、何故かみんな了承した」

咲子「は、はあ……」

こうして私は、能力に目覚め、3代目桜になるのであった。

もうバレた…

side 桜木咲子

いきなり3代目桜になった数日後、ゴールデンウィークも終わり学校が再開した。いつも通り4人で学校に行くと…

ざわざわ…

咲子「?何この人ばかり?」

翔「さあな、分からん」

絵奈「え、でも、こつち向いてるよ?」

祐樹「俺らなんかしたか?」

咲子「…まさか、ね」

3代目になったのはまだ家族以外には言っていない。驚かしたいからね。でも、もしか
しなくても誰かにもうバレたかも…先生が言ったのかな?

そう思っていると、同級生が近づいてきた。

「ねえねえ桜木さん!」

咲子「?何?」

けど、本当だったんだ!」

咲子「いや、それ、盗み聞き?」

「違う違う、たまたま聞いただけだから」

咲子「……ならないわ」

「答えてくれてありがとう。じゃあねー」 タタター

翔「お、おい、咲子…」

絵奈「い、いつのまに…」

祐樹「さ、3代目、桜に…」

3人「なつてたんだ!?(なつてたの!?)」

咲子「数日前。有美さんに会つて、有美つて、火野有美さん?初代桜の?」そう、それで「ええええええええええええ!」:いや、そんなに驚かなくてm「驚くに決まつてるだろ!初代桜だぞ?!天界から戻ってきたばっかだぞ!」あ、そうそう。天界から戻つてくるのを日花先生と迎えてから「マジかよ…」:マジよ。それで、何だかんだあつて3代目試験を受ける羽目になってかr「3代目試験!」:合格条件は有美さんに一撃でも当てることだったの。それd「簡単すぎない!」:私を最初はそう思つただけど、有美さんの能力、転送でかなり苦戦したわ。でも、そのおかげで私は能力に目覚めたn「今度は能力に目覚めたのかよ!?!どんな能力だそれ!」:あとで教えるわ。それで、私は能

力を使ってから、やっと有美さんに一撃当てたわ「何の技を？」…炎突よ。それで当たから、私は合格、3代目桜になったの」

翔「なるほどな…」

絵奈「先生と行ったのなら納得できるね」

祐樹「で、お前の能力は何だ？」

咲子「自分や相手の能力や技を無効化または解除して、選択可能で一時的に使えなくする能力よ。相手が能力主体で戦う場合、相手は詰むわね」

翔「何ちゆう弱そうに見えてチート級の能力だ…」

絵奈「私は能力主体で戦うから詰むわね」

祐樹「お前、入学してから格段に強くなつてね？まだ1ヶ月ぐらいいしか経ってねーぞ？」

翔「まあ、色々あったからな」

咲子「確かに、内容がかなり濃い1ヶ月だったわね。あと…」

…この人ばかり、どうにかしない？」

3人「うん、そうしよう」

「おい桜木！何でお前なんか3代目になってやがんだ!?卑怯な手を使ってんじゃねーの!？」

「そうだそうだ！入学早々1位になって上に3代目になるなんて、絶対なにかしたんだろお！」

なにその言い方。鬱陶しいわね。

咲子「はあー、うっさいわね。そんなに言いたいならかかってきなさいよ」

「っ…言われなくても分かかってラア！」

「かかれえー！」

咲子「…炎天桜舞」 B L O O M !

「ギヤアアアアア！」

…さっさと倒してクラス行こつと。

3人「……………」。(また強くなってる…)

咲子「どうしたの三人共、早く行くわよ！」

翔「え、あ、おう」

絵奈「待つてよ」

祐樹「俺、次遅刻したら死にそうだな」

(祐樹は遅刻するたびに咲子からいかりのてっついV3をくらう)

咲子「さーて今日も元気に行こう♪」

その後、私はクラス、廊下、食堂とあらゆるところで3代目桜についての質問せめに
会っただけど、それはまた別のお話。

情報集めが趣味の双子

side 桜木咲子

5月の中旬、今は学校行事が特になく、私は日花先生に特訓でポコポコにされたり、メイとイナイレについて語り合ったり、学をおちよくって追いかけられたり、若宮宮若コンジの甘々な雰囲気砂糖吐きそうになったりした。

咲子「……暇だね」

翔「そうだな」

絵奈「期末テストまで1ヶ月もあるしね」

祐樹「どうする？週末博多にでも行くか？」

咲子「ここ博多区だからすでにいるわよ」

翔「祐樹が言ってるのは市街地の方だろ」

絵奈「咲子はヒマすぎてボケ役になっちゃってるね」

祐樹「俺の仕事とるなよ」

咲子「うーん…何かすることないかな…。あ、いい事思いついた！」

翔「お前が言ったら3割の確率でまともじゃないんだよな…」

絵奈「でも7割はまともなんだよね〜」

祐樹「で、そのいい事とは？」

咲子「…情報を集めている人を探そうよ」

翔「情報？…なるほどな」

絵奈「なんでそんなことを？」

祐樹「暇つぶしか？」

咲子「情報を集める人を見つけて、ちよつとした契約を結ぼうと思うの。例えば、ほしい情報を別のものを取り引きしたり、私たちが情報を手に入れたら渡したり、ね？」

翔「いい考えだ。今後アンチが増えそうだし、そういう情報は必要だな」

絵奈「でも、そんな人簡単に見つかるの？」

祐樹「新聞部とかにいるんじゃない？」

咲子「すぐに見つかるわよ、”私”の場合は」

翔「何をする気だ？」

咲子「私が欲しいのは能力で情報を集める人なの。だから、能力には能力よ。フツ！」

ギョーン…

絵奈「情報を集めてる人の能力が解除されてしまったら、その人に話に行くんだね〜

？」

咲子「その通りよ。ここは校舎の中だから能力を使う人はほほいないし…炎天桜舞、解除火桜バージョン！」BLOOM!

私は解除火桜を全方位に飛ばす。

言い忘れてたけど、解除火桜は殺傷能力が一切ないので、好きにばらまくことができます。

祐樹「ほう、考えたな」

翔「アホのお前が上から目線で言うな」ペシッ

絵奈「もしもの時はエネルギーを分けてあげるね」

咲子「うん、その時はお願い…！」ギユウン…

―数分後―

翔「……（解除）されたか？」

咲子「……!!今されたわ!パソコン室辺りで!」

絵奈「オツケー!行くよ!」タタター

祐樹「俺の方が速いぜ…ライトニングアクセル!」

ダツ…シユツ!

祐樹はイナイレの技で走っていく。廊下は走るなど教えられなかったの!?!私もするんだけどね。

絵奈「あ、速いね。待って」

翔「さて、俺たちも…っっておい咲子、大丈夫か？」

咲子「いや、ちよつとエネルギーを使いすぎたわ…マツ缶一本ちようだい」

翔「おう、ほらよ」スツ

私はマツ缶を受け取り、蓋を開け、一気に飲み干す。

咲子「プハーツ、これで回復したわ、行きましよ」

翔「おう」

ーパソコン室付近ー

祐樹「…ん？準備室のドアが開いてるな」ガチャ

絵奈「し、失礼します…」

??「……………」カタカタ

??「……………」桜木さんは？」

祐樹「何故アイツを？」

??「君が桜木さんと一緒にいるのは知っている。そして、彼女の能力によって今俺は能力が使えない。もう一度聞く、桜木さんは？」

咲子「私はここよ。少し遅れたわ」ガチャツ

パソコン準備室のドアを開けると、そこにはノートパソコンを無言でいじっている眼

鏡をかけた女子とその隣に眼鏡をかけた男子がいた。この2人、顔がかなり似てるわね。

咲子「祐樹と絵奈は外で待ってて」

祐樹「お、おう…」

絵奈「待つとくよ」ガチャツ

??「……………」カタカタ

??「…何故、俺の能力を解除したんだ？」

咲子「何故、ね……………あんたならもう分かるでしょ？情報集めてたんだから」

??「…まあそうだろうな。俺と、いや俺たち2人と契約を交わしたいんだろ？情報交

換の」

??「……………私は賛成」カタカタ

無口の女子は賛成の意見を出した。

咲子「一応聞くけど、なんで？」

??「…え、えつと…その…／／／」カアア

女子は何故か顔を赤く染めている。恥ずかしい理由でもあるのかな？

??「千代、答えてみる、桜木さんだぞ？」

女子は千代というらしい。それとその言い方、なんか違和感があるんだけど…

?? 「わ、私は、あなたの、ファンだからでしゅ／＼／」

あ、囁んだ。そして私のファンね：アンチかもしれないって心配してたけど、むしろその逆だったようね。

咲子 「なるほどね。で、アンタはどうするの？」

私は男子の方に向く。

?? 「俺は…」

大賛成だ。…だってよお、桜木さんを助けられるかもしれないんだぜ！ 反対する理由がないだろ!？」

あ、この人もファンなのね。

咲子「じゃあ成立ね。名前は？」

千早「俺は七隈千早（ななくまちはや）で…」

千代「わ、私は七隈千代（ななくまちよ）でしゅ／＼」カアア

千早「俺たちは双子で、俺は能力で学校中の情報を集め、千代はパソコンで色々情報を集めてる。俺の能力は監視。見たり聴いたりする能力だ。もちろん更衣室とかトイレとかは見えてないぞ、見たら千代からお前らでいう正義の鉄拳G5をくらうしな」

ほうほう。千早は能力、千代はパソコンで役割分担してるのね。

咲子「契約成立ね。契約書とかある？」

千早「千代、あれを出せ」

千代「…はい」スッ

千代は一枚の紙を取り出した。え、これ、契約書じゃん。

どれどれ…

契約書

・七隈兄妹は、桜木咲子及び仲間たちに情報を無償で提供する。

・桜木咲子が新しい情報を手に入れた場合、彼女の自己判断で情報を提供してもらう。

ここにサインを↓

咲子「…え、これって…」

千早「俺らが圧倒的に不利だ、と言いたいんだろ？」

千代「で、でも、私たちは桜木さんを助けたいので、これでどうか納得してくだしやい！」ドツ！

2人は土下座する。そこまで私を助けたいの!?

咲子「か、顔を上げてよ。契約を頼んだのは私だし、アンタたちの気持ちは伝わったから。サインするよ、ほい」

サササツ。

千早「ああ、確かにもらった。これからよろしくな」

咲子「うん、よろしく」スツ…

私は握手のために右手を差し出す。

千早「……………／／」ギユツ…

千早は照れながらもちゃんと握手する。これで契約成立ね。

咲子「さて、放課後ここにまた来るわ」

千代「あ、あの、その前に…」

サ、サインくださいやい！」テレテレ

咲子「あ、うん」

この2人、随分照れ屋ね…

ま、とりあえずこれで情報源ゲット！

ほぼイナイレのサッカー①

side 桜木咲子

体育の授業。そこでは様々なスポーツをすることがある。

そして今月のスポーツはなんとサッカーだ。リアル超次元サッカーが実現できる！
楽しみ！

日花「さて、みんな知つての通り、今日はサッカーの試合をするわよ。チーム分けは……」

Aチーム 私、祐樹、敬太、千代など

Bチーム 翔、絵奈、ルマ、景子、千早など

千早と千代は同じクラスだったのね。陰キャだから気付かなかったわ。

翔「今回は敵か。お前のゴール、打ち破つてやるぜ！」

咲子「ふふつ、私も技を強化したからそう簡単には破れないわよ」

バチバチバチバチ……

日花「お喋りはそこまですて、早く並びなさい」

2人「あ、はい」

ー1分後ー

先攻は私たちAチーム。私はGK、祐樹はFW、千代はMF、敬太はDFだ。相手Bチームは、翔とルマがFW、景子がMF、絵奈と千早がDFね。

日花「試合開始！」ピピーツ！

祐樹「突っ切るぜ！」ダダダー

翔「させねーよ！スノーエンジェル！」パキーン！

祐樹「カチーン☆」

翔は祐樹からあっさりボールを奪う。あのアホ：

翔「あーよっ」サツ

千代「あ…」

翔は体力がない千代をあっさり破り、敬太の前までくる。

敬太「咲子に教えてもらったやつでいくぜ！ザ・マウンテン！」ドツゴオオ！

翔「うおっ、危ねえ」ピヨーン

翔はザ・マウンテンをギリギリ飛び越える。ジャンプ力すごいわね…

そして、翔はゴール前までくる。

咲子「止めてみせる！」

翔「それはどうだろうな？ハッ！」キュルルル…

翔はボールを回転させ、冷気を纏わせる。

翔「エターナルブリザードV3！」ティウルルン！

咲子「V3まで強化してるのね。なら…パツと開かず、ギユツと握って…」グツ…

翔「…なるほどな」

咲子「正義の…鉄拳！G5！」ドゴゴゴゴ…！

私はエネルギーで拳を作り、それを高速で回転させることでシュートの威力を弱め、止める。

翔「ほう、やるな」

咲子「今度はこっちの番よ！○○！」ポイツ！

私はボールをDFの1人に投げ、そこから祐樹へパスが繋がれていく。

祐樹「今度こそ！」ダツ！

ルマ「えーと、こうしてこうして…バーリアンの盾！」

ピカア！

ルマは骨でできた盾を作り、行く手を阻む。しかし…

祐樹「それにはこれだ！ラウンドスパーク！」ギユルン！

ルマ「ジビビビビ！」ビリィッ！

祐樹はルマに向けて電気の塊を飛ばし、感電させる。防御ができなくなったルマは抜

かれていく。

景子「イグナイトステイール！」ボオオオオ！

祐樹「ライトニングアクセルV2！」ドピユウン！

景子は火を纏ったスライディングをするが、祐樹は持ち前のスピードでそれをかわす。

「いいぞ！そのままゴールに突き進め！」

「おおおー！」

千早「そうはさせないぞ！シーファイ！」キラン

祐樹「ならば…分身フェイント！」シャシャッ！

千早「なにつ!？」

祐樹は3人に分身し、細かい動きのパス回しで千早を翻弄し抜き去る。あれ、どうやってするんだろ？あとで聞いてみよう。

「まずい、抜かれた！」

「点はやらないぞ！無限の壁！」ドッドドッドッ！

相手のGKは大量の壁を出現させる。そのせいでもうゴールが見えない。

祐樹「無限の壁か…なら、とう！」ドッ！ゴロゴロ…

祐樹は分身したままゴール前まで行き、1人がボールを空に蹴り上げる。蹴り上げら

れたボールは雷雲から降ってくる。まさか1人でするの？

祐樹「イナズマ：ブレイクツ！」ドツゴオオ！

雷を纏ったボールを分身含めた3人で蹴る。

「何っ!?…ぐああああ！」ドゴオオオオオオ！

シュウウウウツ！

ボールは無限の壁を打ち破りゴールに突き刺さる！

祐樹「やった、決まった！」

1—0

今は前半20分。

咲子「もっと攻めていくわよ！」

Aチーム「おおお！」

ほぼイナイレのサッカー②

side 桜木咲子

1-0

祐樹がイナズマブレイクで先制点をとった。

翔「ここから反撃だ！」

Bチーム「おおお！」

Bチームボールで試合は再開する。

翔「ついてこい！ルマ、絵奈！」ダッ！

絵奈「うん！」ダッ！

ルマ「オーケー！」ダッ！

祐樹「必殺技の準備か？そうはさせねえよ！フォトンフラッシュュ！」ピカア！

祐樹は電気を纏って眩しい光を放つ。

翔「くっ、しまった！」

祐樹「へへーん、これでボールは…あれ？」ポーン

光が収まると祐樹はボールをドリブルしていたが、そのボールはただの骨の塊だっ

た。

ルマ「フェイクボール♪」ポワン♪

祐樹「なん…だと…」ズーン

そして祐樹は3人に抜かれる。

「キラーズライド！」

絵奈「昇り竜！」グオオオオオ！

「は!?…うわあああ！」

MFの1人がキラーズライドでボールを奪おうとするが、絵奈はいつのまにか描いた龍に乗って突進してきた。ほんと、いつの間にかいたの？それ。

千代「え?あ…」

そしてびっくりしてた千代もあっさり抜かれる。ま、運動神経悪いからしょうがないよね、うん。

敬太「これならどうだ!咲子、あれ頼む！」

咲子「…オーケーよ!」パッ!

私はエネルギーで手を2つ作り出す。

敬太「まずはこう!」ツオオオオオ…

敬太は土の壁を3つ作り…

咲子「たあっ！」ゴゴゴ!

私がエネルギーの手で左右の壁を斜め前に押す。

敬太「ロツクウオールダム！」ゴオオオ!

翔「ほう、考えたな。だが効かん！」ピヨーン!

敬太「な、またか……」

3人は敬太を抜き、ゴール前までくる。

絵奈「翔、そろそろ行っちゃう〜?」

ルマ「言い方が飲み会みたいなんだけど……」

翔「おう、そろそろ行くぜ」

ルマ「突っ込まないんだ……まあいいや」

????
「クエエ……」

咲子「ん?」クルツ

どこからか聞き覚えのある鳴き声が聞こえてきたので振り向くが、そこには誰も何もいなかった。

咲子「気のせい……だよな?」

まさか……あの技を再現するはずは……

と思っていると、翔、絵奈、ルマの3人は高く飛び上がり、翔は……

翔「テイウイイツ！」

口笛を吹いた。すると…

「クエエエエエ！」

どこからともなく紫色のペンギンが5匹飛んできた。

咲子「ファ!？」

ルマ「ちゃんと来たね」

絵奈「おっと、タイミング合わせて〜」

ペンギンたちと3人はボールの周りを少し移動し…

3人「皇帝ペンギン3号! G4!」ドゴオ!

ペンギンたち「クエエエエエ！」ピユウウウ!

3人はボールなかかと落としをすると、ボールはペンギンたちに囲まれながら私

(ゴール)に向かって飛んでくる。

咲子「まずいわね…スウウウウ…」キュイイイン…

翔「ムツ!？」

咲子「ムゲン・ザ・ハンド! G7!」ドバババツバーン!

G7と聞いて驚く人も少なくないだろう。しかし、これはムゲン・ザ・ハンド限定で改造したものだ。技の時の手の数は、G1が4本、G2が6本、G3が8本、G4が1

ほぼイナイレのサッカー③

side 桜木咲子

1-0

さつき前半が終了し、今は休憩だ。

咲子「ねえ翔、どうやってアンタのペットを連れてきたの？」

翔「口笛吹いて呼び出した」

咲子「え、でも私の近くで鳴き声が聞こえたような…」

翔「正確に言うてアイツらを学校のすぐ外に待機させてた。なあお前ら？」

ペンギンたち「クエエエエエ！」

咲子「そこまで皇帝ペンギン3号を再現したかったのね…」

翔「別にいいだろ。お前ら、帰っていいぞ。ほれ」

ペンギン「クエツッ！」ピユウウ…

ペンギンたちはエネルギーを纏って飛んでいった。羽なしでよく飛べるわね…

翔「ところで咲子、お前ムゲン・ザ・ハンドの強化しすぎだろ、G7なんてよ…」

咲子「いや、文字通り無限になるまでやめないつもりよ」

翔「いつの話になるんだよ、それ……」

日花「そろそろ休憩終了よ。グラウンドに戻りなさい」

2人「はい」タタタ……

――1分後――

日花「後半開始！」ピピーツ！

後半はBチームボールで始まる。

祐樹「通さねえよ！クイックドロウ改！」ダツ！

ルマ「真ムーンサルト！」シュツ、シュツ、ピョーン！

祐樹はボールを奪おうとするが、ルマがそれを飛び越えてかわし、抜いていく。そして翔にパスをする。

「フレイムダンス！」グルグルボオオオ！

翔「ウォーターボール！」バシヤア！

「うわっ！」ビシヤア

翔「火は水に弱いんだぜ？」ダツ

ずぶ濡れになったMFは翔に抜かれてしまう。

千代「私だつて！ゴー・トウ・ヘブン！」ピカア！

翔「うおっ、危ねえ！」サツ！

千代は頑張つてボールを奪おうとするが、翔に間一髪でかわされてしまう。

千代「また、抜かれた…」ズーン

……あとで慰めよ。

「行くぜ、敬太！」

敬太「おう！ハアアアアッ！」

ズドドドドドドッ！

土の壁が翔の左右を塞ぐ。

「ノーエスケイプ！」シャッ！

そして前から翔に向かってスライディングをする。

翔「……フツ、モンキーターン！」ピヨーン！

翔はボールを両足で挟み、スライディングしたDFを飛び越えて一回転する。まさか

ノーエスケイプまで破られるとは……

翔「いくぞ、ルマ！」

ルマ「うん！」

2人はボールの間にたち、それぞれ赤いオーラと青いオーラを纏う。

2人「ハッ！」グルグルグルッ！

そしてボールが黄緑色のオーラを纏い、2人はそれを中心にジャンプし回転する。

2人「ザ・バースV3！」ドギユウウン!

そして2人は同時に蹴り、ボールは赤、青、黄緑のオーラを纏いながら私に向かって飛んでくる。

咲子「スウウウウウ：ムゲン・ザ・ハンドG7！」

私はエネルギーで作った68本の腕でボールを抑える。

咲子「うおおおおお！」

そして、私はついにボールをガツチリと止める。

咲子「敬太！パス！」ポイツ!

敬太「おう！」タツ

私はボールを敬太に向かって投げる。

絵奈「おっと、させないよ。スピニングカット！」

ドガン!

しかし、パスは絵奈にカットされる。

敬太「な、しまった！」

絵奈「さて、魔神！」グオオオオ!

咲子「!?!」

絵奈は絵で描いた青い魔神をだす。

ほぼイナイレのサッカー④

side 桜木咲子

1-1

…やばい。

連続で技を使ったから疲労が溜まってるわ…

日花「試合再開！」ピピーツ!

Aチームボールから試合が再開する。あと5分ぐらいしかない。5分以内に点を取らないと…!

…よし、あの作戦でいくわ。

私はゴールエリアから飛び出し、敵陣に向かって走っていく。

咲子「祐樹、こつちにパス！」タタツ

祐樹「え、お、おう」

翔「時間がねえからお前も来るのかよ…アイスグランド!」
ルマ「でも、通さないよ! ボルケイノカット!」シャツ!

翔は氷、ルマは火の衝撃で私を止めようとする。

咲子「甘い！烈風ダツシユ！」ボオオオ！

2人「ぐあつ！」シユウウ…

烈風で吹き飛んだ2人を抜き、今度は景子たちMFが道を阻む。

「桜木さんの周りを走れ！」ダダダ

3人が私を囲み、走り出す。それと共に砂埃がたち、私の周りに暴風がおきる。

景子「ハリケンアロー！」ビユウウウン！

咲子「…フツ」タツ

私は冷静にスライディングしてきた景子を飛び越える。

咲子「ハアツ！」ボオオオ…

「な!？」

「かわした!？」

そして2人目と3人目の攻撃もかわし、火を纏って回転する。

景子「あれって…ハリケンアローを利用してるの!？」

咲子「ふふっ、その通りよ！」ボオオオ…!

ハリケンアローの暴風は火の渦となり、私はその上でボールを蹴る。

咲子「嵐爆熱ハリケン！」ボオオオ!

名前は嵐竜巻ハリケンと爆熱スクリユを混ぜたもの。うん、なかなかいいネーミ

ングセンスね。

「うおおおお！真無限の壁ー」ドツドツドツ！

GKはいつのまにか進化した無限の壁でボールを止めようとする。

咲子「まだまだあ！」ドゴツ！

しかし、私はそのボールをさらに蹴り、壁にも衝撃を与える。

「何っ!？」

咲子「砕けろおおお！」ドゴオオオオオ！

ドツゴオオン！

「ぐああっー」ギユウン！

バシユツ！

ボールはついに無限の壁を破り、ゴールに突き刺さる。

2—1

日花「…試合終了了！」ピッ、ピッ、ピー！

それと同時に試合が終わる。なんとか勝てたわね。

祐樹「よっしゃあ！勝ったぞ！」

翔「ハア、お前の発想はやっぱりすごいぜ…」

絵奈「まさか相手の技を利用するとはね、あれはすごかったよ〜！」

咲子「やつぱり、戦闘に発想力って必要なのね」

その後、私は役に立てず落ち込んだ千代を慰めたり、メイに新しく作った技を見せてあげたりした。やつぱり超次元サッカーすごいわね♪

――校舎裏――

「兄貴、最近一年に強い女が現れたのはしつてますよね？」

「ああ、それがどうした？」

「俺たち、アイツにボコされたんです！」

「ただ調子にのるなっつて、殴っただけなのに！」

「……ほう、そんなに強いんか？」

「へい、そんなに強いんです！しかも三代目桜になりやがって……絶対何か反則をしたに

決まっています！」

「たしかに、そいつは怪しいな。明日、そいつに思い知らせてやる」

「へい、ありがとうございます、兄貴！」

その話を能力で監視している者がいた。

千早（監視能力）「……………」じー

「…………おい、俺たちを監視してるやつがいるような気配がするぞ」

「ほんとですか、兄貴？今すぐ見て回ります！」

「おう、たのんだ」

千早「…ッ！」

千早「くっ…もうちよつと話を聞きたかったが、これはまずい！解除！」シユツ！

「兄貴、あたりには何もありませんでした」

「…すまん、きつと俺の勘違いだ。話を続けるぞ」

ーパソコン準備室ー

千早「ハア…ハア…」

千代「どうしたの？そんなに息を荒くして」

千早「一大事だ！今すぐ桜木さんに連絡するぞ！」

千代「え？う、うん！」

これは早く連絡せねば…！

不良っているもんなんだね

side 桜木咲子

今は放課後、私たちはある所で個人のやりたいことをしていた。

翔「それでよ、俺が…」

学「うわ、マジかよ」

育也「すごいね」

祐樹「どうやってやんだよ、それ？」

男子たちは雑談しており、

絵奈「……この絵はどうかな？」

ルマ「うん、よく描けてるよ！」

ルマと絵奈は絵を描いており、

メイ「天空落としV3！」

咲子「なら私はこれ！……え!?破られた!?!」

私とメイはイナイレで通信対戦をしている。ちなみに私が負けている。だって、メイが強すぎるんだもん！

メイ「やった！また一点です！」

咲子「強すぎる…」シクシク…

こうして色々していると…

テン、テツテツテンテレレンテンテンテンテンテン
私のiPhoneが鳴る。

咲子「千早から？」ピッ

千早「桜木さん、大変だ！今どこにいる！」

咲子「え、どうしたの？そんなに慌てて」

千早「桜木さんのアンチどもが動き出したんだ！」

咲子「…：…分かった。今からいう所に来なさい。…：…よ」

千早「了解。すぐ行く！」テウーツ、テウーツ。

そして千早は電話を切った。

翔「アンチが動き出したって？」

咲子「そうみたいよ」

学「お前が雇った情報機関は信用できるのか？」

咲子「ええ、でないと私はこうして電話に出てないわよ」

祐樹「むしろそもそよ連絡先を交換してねーよ」

学「…ならいいが」

絵奈「それにしても、どう動き出したんだらうね」

育也「話し方が焦ってたよね」

ルマ「よほどの大事なんじゃない？」

メイ「アンチが軍でも作ったんでしようか？」

咲子「それももうすぐ「コンコン」…ちようどきたわね」
ガチャッ。

千早「ハア…ハア…ここは…秘密基地か…？」

咲子「いや、祐樹の家の空き倉庫よ。ところで千代は？」

千早「そこだ」

千代「み…ず…」グツタリ

千代は疲れすぎてぐったりしていた。

翔「ほれ」スツ

千代「ありがとう…」ゴクゴク

まあ、体力ないからしようがないよね。

咲子「さて、本題に入りましょ」

千早「ああ。まず先にこの映像を見てくれ」ジリツ…

翔「これは……」

千早「俺の能力で撮った映像だ。再生するぞ」

映像では、私が倒したアンチが兄貴と呼んでる身長が高い人に私が調子に乗ってる、絶対反則をしているなどとありもしないことを言った。そして、兄貴（と呼ばれている人物）が明日思い知らせてやると言ったところで映像が切れた。

千早「……この後気配が気づかれそうになっちゃったから撮るのをやめたんだ、すまない」

咲子「いや、充分よ。この映像の人兄貴って呼ばれてるけど、誰なの？」

千早「こいつは4年の不良、筑紫新太（ちくしあらた）だ。花町高専の不良たちのボスだ」

絵奈「不良ね。今時いるもんなの？」

千早「いるもんなんだよ。しかも4年で、不良たちのボスだ。大変ではないわけがない」

祐樹「……そいつってどれぐらい強いんだ？」

千早「そうだな……ここにいる全員を相手しても勝てるか勝てないかぐらいだな」

メイ「それってお兄さん以上じゃ……」

千早「いや、出夢先輩よりは弱いぞ。先輩は四月にやった力を試すための試合ではほ

ぼ遊び感覚だったらしい」

ルマ「それよりは弱いんだ…」

千早「だが安心しろ。俺が集めた情報によると彼には大きな弱点があるようだ」

咲子「弱点？教えて教えて！」

千早「まあ、弱点というか恐れてる人物、と言った方がいいな」

咲子「誰なのよ、それ」

千早「4年の1位だ」

咲子「4年の1位？……あ」

翔「どうした、咲子」

咲子「私、その人知ってる」

絵奈「えく、それって誰なのく？」

咲子「4年の1位は…」

坂田日和（さかたひより）、
「日花先生の娘よ」

今時神頼みする人

side 桜木咲子

翔「まじか、日花先生娘がいたのかよ！」

咲子「あ、2年の息子もいるわよ」

絵奈「へえくなんか意外だね」

祐樹「17歳と19歳の子供がいるような見た目じゃないからな…意外だな」

千早「坂田日和先輩は筑紫が恐れている人だ。多分襲いかかろうとしたところで返り討ちにあつたりしたんだろう。それも何度も」

咲子「あ、日和さんならありえるわね」

ルマ「え、知り合い？」

咲子「知り合いつていうか、ゴールデンウィークの時に一回日花先生の家に行つたことがあつたのよ。そこで日和さんその弟の未例（みれい）さんにあつたのよ。ちなみに連絡先も交換してるわね」

何故私が言つてなかつたか？作者が書かなかつたからよ。↑メタい！

学「なら、早速電話してみたらどうだ？」

咲子「うーん、断られそうだけどね…やってみるわ」
 ピツ、ピツ。プルルルル…カチャツ。

日和『はい、もしも咲子ちゃん?』

咲子「こんにちは、日和さん。今話せますか?」

日和『あ、ちよつと待ってね:『ドゴオツ!』:よし、オーケーよ。で、何の話?』

今、とんでもない音が聞こえたような…まさか戦闘中だったの?

咲子「話はですね…」

《キング・クリムゾン!》ヴォーン!

…ということなんです。協力をお願いしますか?」

日和『……………。どうしようかな?』

咲子「……………」

日和『……………どれにしようかな天の神様の言う通り。鉄砲撃ってバンバンバン…』

…この人、未だにそれやってたの? 来年成人なんだよね?

日和『……………する、しない、する、しない:』パラパラ…

今度は花びらをちぎって占うやつね…

咲子「あの、日和さん、嫌なら嫌って言っているんですよ? 別に強制じゃないんで」

日和『そうよね…あ、そうだ! 私はあんたたちを見ておくわ。それで、アンタたちが

私にとって充分力を發揮していたら助けてあげる。これでどう?」

咲子「はい、それでお願います! (結構まともだった…)」

日和『じゃあそう言うことで。じゃあねー』テウツ、テウツ。

育也「どうやら協力してくれるみたいだね」

メイ「力を發揮って、具体的に何をすればいいんでしょうか?」

咲子「日花先生ならこうするから…:恐らく、不良軍団と戦えばいいんじゃない?」

翔「多分そうだろうな」

絵奈「でも、数とか分かるわけ「分かるぞ」あつた…」

千早「花町高専の不良は全校生徒の5%、つまり45人ほどだ。そしてそのボスが筑

紫新太。下っ端は大体2年だな」

祐樹「45人か…:ここに10人いるから…:ひと「1人で4、5人倒せば行けるが?」…:

おい、あのネタ俺がやろうとしたのに」

ルマ「フツ、早いもん勝ちだよ」

千早「まあ、ネタは置いといて…:下っ端は倒せるかもしれないが、ボスの筑紫は一筋

縄ではいかないだろうな。油断は禁物だな」

咲子「そうね。でも、アンチどもがおりもしないことを言うのは許せないわ!フル

ボツコにしてやるわよ!」

全員「おおお！」

さとかに隊 v s 不良軍団

side 桜木咲子

ー次の日ー

今日は恐らく不良たちの襲撃が来るだろうから登校するとき注意していたが、その時は何も起きなかった。

翔「いつくるんだろうな」

絵奈「放課後じゃない？」

祐樹「靴箱の中に紙入ってたりしてな」↑フラグ

祐樹は冗談を言っているとところで私は自分の靴箱を開けると…上履きと共に一枚の紙が入っていた。

咲子「そんなこと……あ」

翔「…マジかよ」

咲子「これ絶対襲撃予告じゃん」

祐樹「ほぼノータイムでフラグ回収されたな」

絵奈「で、内容は？」

咲子「えつと…」

『放課後、 2 2 2 2 2 1 1 1 1 3 3 8 1 1 1 9 5 5 2 2 2 2 1 1。』

…なんらかの暗号かしら？

翔「…これ、よくあるやつじゃね？ほら、あかさたなの行の番号1〜10とあいいうえおで数字の数で書く暗号」

絵奈「あゝ、なるほどね。そしたらどうなるの？」

祐樹『『こうしやうらにこい』、になるな』

咲子「校舎裏ね。『や』は小さく出来ないからそのままのかしら？」

翔「まあ、そうなんだろう」

咲子「じゃあ、放課後戦闘開始ね！」

祐樹「俺たち、ボッコボコにされないよな？」

絵奈「したら私たちはすでに襲われてると思うよ」

咲子「そうね。ま、早めにこれをみんなに伝えましょ」

翔「…咲子、それなんだが、暗号の『や』を小文字に”しないで”あいつらに伝えてくれ」

咲子「いいけど、なんで？」

翔「…それは後で伝える」

咲子「…まあいいわ。教室に向かいましょ」

翔、まさか何か考えでもあるのかな？↑またフラグ

↓放課後↓

時は飛んで今は放課後。私たちは教室で集合した。

メイ「幸いだけれども部活に入っていないので、チーム全員で戦えますね」

学「おう、不良なんか蹴散らしてやるぜ」

ルマ「ところでさ、そろそろチーム名とか決めない？」

咲子「私たち4人が中学生の頃、苗字の頭文字をとってさとかに隊って名前にしてたわね」

翔「懐かしいな」

育也「シンプルな名前だね」

メイ「私たちが考えても技名っぽい名前しかでないでしょうし…それでいきましょか？」

千早「…俺は気にしないぞ」

千代「わ、私も、です…」

咲子「なら、新生さとかに隊、誕生ね！」

ルマ「よし、名前も決めたところで、校舎裏に行こう！」

全員「おおお！」

―校舎裏―

咲子「……誰かいる？」

千早「居るが、ボスの筑紫が見当たらないな。近くには居なさそうだ」

咲子「…突入するわよ。合図したらみんな出てきて」

ルマ「オーケー」

翔「………了解だ」

なんか間があつたわね。なんでだろ？

咲子「行つてくるわ」スタスタ…

私は校舎裏に出て、不良たちに近づく。すると、不良たちは集まつて私の方を向く。

「おう。やつとききたか、1年の反則3代目桜よお」

「ちようど調子に乗つてたお前を殴りたかつたんだよ」

そう言つて不良たちは指の骨をゴキゴキ鳴らす。言つておくけどそれ、ちつとも怖くないよ？

咲子「反則なんかしてないわ。殴るなら早くかかつてきなさい」

「ツ……その性格が気に入らねえなあおい…」

不良たちは徐々に私を囲む。

「お前1人が俺たち40人に勝てるんでも思ってたのか、ああん？」

咲子「…ハッ、喋ってるヒマがあつたらとつときなさいよ」

「…！上等だゴラア！」

「かかれえー！」

不良たちは私を囲み挟み撃ちにする。

咲子「炎結界！」ボオオオ！

しかし、私は火の結界で攻撃を防ぐ。

「火か…おい水のやつら！こいつの火を消せ！」

「おうよ、オラア！」ビシヤア！

シュウウウウツ…

不良の1人が水を出し火を消そうとする。

咲子「…あ、やべ（演技）」

「結界がなかったらお前は無防備だぜえ！」

「ぶっ潰してやらああ！」

不良たちは私が油断したと思ひ込み、一気に襲いかかってくる。しかしもう遅い。

咲子「フツ…私が1人だとも思ってた？」

…さとかに隊、全員出撃！」

「…何っ!？」

メイ「ウインドブラスト！」ピユウウウウツ!

ルマ「ボーンラツシュ！」ズドツ!

翔「冷突！（炎突の氷バージョン）パキイツ!

絵奈「激流ストーム！」ドツゴオン!

祐樹「サンダーシヨット！」ビリイツ!

学「ストーンパンチイツ！」ドガア!

育也「雷斬！」ズバツ!

「なんだこいつら……ぐあぁっ！」

「1年のくせに……強え！」

咲子「私も……炎天桜舞！」 B L O O M !

「ギャアアアアア！」

「く……クソオ……」

不良たちは私たちの総攻撃でなすすべなく全滅した。

咲子「これで全員ね。あんたたちのボスはどこ？」

「……ククツ、教えねえよ。ちゃんと紙を読んだのか？」

翔「……やはりそうだったか！」

「……やっとなかったか、馬鹿どもが！」

「フハハハハ……グハツ！」

咲子「アンタは黙ってろっと……翔、やはりそうだったかって何が？」

翔「ああ、そのことだが、暗号の『や』は小文字にするなど言ったよな？」

絵奈「言ってたねえ」

祐樹「それがどうかしたのか？」

翔「……実はよ、俺の家の近くに“こうしや”っていう店があるんだよ」

メイ「こうしや？……まさか！」

学「筑紫がいるのはそこってことか!？」

育也「俺たちはまんまと騙されたね…」

咲子「くっ…とにかくこうしやにダッシユよ!」

全員「おおっ!」ダッ!

ーこうしや裏ー

咲子「ハア…ハア…本当にいたわ…」

新太「…お前が桜木か」

咲子「ええそうよ。アンタの部下どもをボコボコにしてきたわ」

新太「…!!ほう…」

こうしや裏につくと、そこには4年の不良、筑紫新太がいた。

咲子&メイ v s 新太

side 桜木咲子

新太「…ほう、お前たちが俺の部下を倒したんだな？」

咲子「ええ、その通りよ。今度はアンタを倒すわ」

新太「…だろ。そこで、1つ提案がある。桜木、俺と一対一で勝負しろ。他の干渉は許さん」

咲子「断つたら？」

新太「被害者が増える」

咲子「……二対一、ならどう？」

新太「…いいだろう。とつとと準備しろ」

咲子「じゃあ、メイ、一緒に戦ってくれる？」

メイ「もちろんです！」シャキン！

メイは刀を掲げてそう言った。

咲子「よし、じゃあ……という作戦で行くわよ」

メイ「なるほど…分かりました」

新太「さて……始めるぞ！」ドッ！

筑紫はメイの方に突っ込んでいく。やっぱり弱い方から倒すのね。

メイ「晴天飛梅！」ビュウン！

新太「……ムッ！」サッ！

メイは炎天桜舞の梅パージョンを放ち、筑紫はそれに反応してガードする。

咲子「隙あり！炎突・改！」ドゴオッ！

新太「……グッ！」ガッ！

私は強化した炎突を筑紫の頭に当てるが、そのせいで足を掴まれてしまう。これはま
ずい！

咲子「くっ……炎天桜舞！」BLOOM！

私は足を掴まれながらも炎天桜舞を放つ。

新太「……オラア！」ドゴオ！

咲子「……ガハア！」メリイ……

筑紫は少し怯むが、すかさず私に腹パンをする。そして直撃。やばい、この威力はや

ばい……

メイ「咲子さん！……鳴鳴斬り・改！」ズバッ！

メイは私を助けるために緑色のオーラをまとった刀で筑紫に斬りかかる。

新太「真剣……白h「させない！ファイアパンチ！」…グツ……グオツ！」ドゴツ、ズバツ！」

筑紫は真剣白刃取りをしようとしたため、私は腕を殴り、その隙にメイが筑紫を斬る。

メイ「……しぶといですね」

咲子「そうね。ダメージは入ってるんだけど、威力が低くて支障が出てないわ」

メイ「どうします？ 連携攻撃でもしますか？」

咲子「…そうしましょう」

筑紫「……おうおう、なかなかやるなお前ら。この俺が本気を出す時が来たよう……だ

なあ！」ドツツ！

咲子「このパワー、さつきより数倍強い！」

メイ「これが…不良のボスの本気……！」

新太「行くぞゴラア！」ギユウウン！」

筑紫は電気の球を作り、投げてくる。

咲子「かわすと周りに被害が出るわ！ 止めるわよ！」ガシツ、ガシツ！

メイ「え、あ、はい！」ギギギ…

新太「…ほう。いつまで持つんだろうな？」

咲子「ムゲン・ザ・ハンドG7！」ギュルルルルル…ガシガシガシ…ガシッ！
メイ「ハアアアアッ！」ズバズバズバズバツ！

私は掴んで止め、メイは斬ることで分散させる作戦だ。

新太「…手こずってるようだが、俺は待たねえんだよ！」ドゴツ、ドガツ！

筑紫は私たちの鳩尾にパンチを叩き込む。

メイ「…グハッ！」

咲子「…ガハッ！」

ドゴオツ！

…そして私たちは地面に激突する。

メイ「ハア…ハア…肋が数本逝っちゃいましたね…」

咲子「そうね…ハア…強いわ…」

新太「…耐えるとは思わなかったぜ。だがここまでのようだな」

咲子「いや…まだ…終わらないわよ！」ギユウン…

メイ「そう…です！まだ…戦います！」ギユウン…

私たちは立ち上がり、まだ戦えると言う。

新太「…そうか。なら続けよう！」ドツ！

この人は強いけど、私は負けない！

メイの本性

side 桜木咲子

新太「…それにしてもよー、お前らのコンビ、お似合いだなーw」

咲子「…いきなり何？」

新太「いやー、卑怯ヤローとクソの妹のコンビはいいなあーw」ゲラゲラ

筑紫は私たちを指差してゲラゲラと笑いだす。

咲子「卑怯ヤローって、私？反則なんてした覚えがないんだけど」

メイ「……………クソ？」

新太「じゃあ入学して速攻で1位になったり、同じ日に桜属性に目覚めたり、挙げ句の果てには3代目桜になったりするのはどう説明するんだ、ああ？」

咲子「それはー「お前の言い訳なんざ聞きたかねーよ。それとよー、…………ツ」

こいつ、私の説明すら聞こうとしないのね。

新太「あのクソイズムのせいで俺にどんな恥をかかされたか知ってつか、ああ？」

メイ「クソ…イズム？」

新太「あのクソよおー、アイツを襲った俺の部下どもをボコった後、ボスである俺に

文句をつけてきたんだよ。それでよお、その文句を受け入れる代わりに勝負しろと言ってやったのさ。アイツはそれを承諾した。俺あその時1位だったんだぜ？ あんなやつ、フルボッコにしてやると思ってたんだよお。だがよお、いざ戦ってみたら……俺が完膚なきまでにボコボコにされた……。あのクソイズムのせいで、俺は恥をかかされ、1位から下がってしまっただよ！」

……一言言っただい？

自業自得だよな？ 悪いのは勝利を確信してたアンタだよな？ それのどこが出夢先輩をクソと呼ぶのにつながるの？

内心キレてると、黙ってたメイはとんでもない発言をした。

メイ「……………おい、”テメエ”」

咲子「…!？」

今、メイがお前って言った!？」

新太「あ？ なんだよ、怒ったのか？」

メイ「今、”俺”の兄のことなんだった？」ハイライトオフ

ハイライト失った目をしたメイがそう言う。一人称が俺になってる!？ それと、ハイライト仕事して！メイが怖くなってるよ！

新太「ああん？ 聞こえなかったのかあ？ クソって言っただよ、ク・ソ！」

メイ「ほう、クソか、そうかそうか」シヤキン…

メイは逆刃刀を出し、筑紫に向ける。そして歩きだす。

メイ「……………」スタツ、スタツ…

新太「…………ツ、ど、どうした、ようやく戦いを続けるのか？」

咲子（何、この凄まじい威圧感。メイってまさかのブラコンだったの!?!それにしてはヤバすぎない!?!喋り方まで変わってるし!?!）

メイ「戦い? いや、違うな…」

新太「な、何言ってるんだ? て、テメエ」ブルツ

筑紫は目に見えて怯えている。どう見えても強がつてるし、体は小刻みに震えてるしね。私も正直怖いんだけどね、うん。

メイ「これは…」

親友や兄をバカにした屑に対する裁きの時間だ……カッ！

ギョオオオ！

メイはさらに強い威圧を出す。例えるならワンピースの霸王色の覇気だ。威圧が向けられているのは私じゃないのに気絶しそうなレベル。

新太「……ひ」

メイ「ひ？」

新太「ヒイイイ、ごめんなさい、もう言いません、もう言いませんから許してください！」

新太は怯えてながら謝り、土下座する。

メイ「謝ってきたか。なら……許して……」

新太「許して……？」

メイ「……やらん！」ズバツ！

メイは逆刃刀を新太に思いつき斬りつける。

新太「……ガハッ！」

メイ「お前の！ ような！ 屑は！ 今更！ 謝って！ きても！ 意味！ なんて！ ねえんだよ！」ドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴオ！

メイはさらに蹴りとパンチを叩き込む。

新太「グ：ウ：く：そお：」ピクピク：

メイ「ほう：まだその言葉を言うのか？」

新太「し：しまった：！」

メイ「どうやら罰が足りなかったようだなあ！ くらえ！」

ギョオオオ：

メイは刀にオレンジ色のオーラを纏わせる。

メイ「冥冥斬り：！」ズバアツ！

そして鳴鳴斬りの強化版みたいな技を筑紫に当てる。

新太「ガ：フツ：」チーン：

咲子「私たちの勝ち：なのかな？」

メイ「さて、俺は元に戻るか：：：：ふう、疲れましたね、咲子さん」ハイライトオン

咲子「う、うん：（ほぼメイがやったんだけどね）」

メイが元の口調に戻ったタイミングで、翔たちが来た。

翔「おう、お前ら、お疲れさん」

ルマ「メイちゃん、強かったね！」

絵奈「威圧が強すぎて気絶しそうになったよ」

祐樹「……あれは怖かったぜ」ビクビク

学「口調も変わってたな」

育也「メイがこんなに怒ったのは初めて見たよ」

千代「……」チーン

千早「コイツは威圧で気絶しちまつてるぜ……」

メイ「あ、はは……私、キレると本性出してしまうんですよ」

咲子「アレ、本性なの？」

メイ「はい、でもあまりにも口調が悪いのでお兄さんに止められました。今では敬語で話す方がしつくりきますが、たまに戻っちゃうんですよ……」

全員（なるほど。絶対メイを怒らせちゃだめだな）

メイ「さあ、屑は裁きましたし、今日はパーっと祝勝会でもしましょう！」

咲子「お、おお！」

それを彼女、坂田日和はずっと見ていた。

日和「あらら、私出番なかったわね。ま、いいものを見せてもらったわ。咲子ちゃんとメイちゃんはどんどん強くなりそうね、ふふっ」サツ……

その後、咲子たちはラーメン屋で祝勝会をした。
こうしや裏で放置された筑紫はしばらく怯えながら生活していたという。

メイとお出かけ。

side 桜木咲子

『唐人町、唐人町。降り口は右側です。お忘れ物のないよう、ご注意ください』

メイ「降りましょう、咲子さん」

咲子「そうね」

アナウンスと共に、私たちは地下鉄を降りる。

私は今日、メイとお出かけをしている。どこに行くのかって？それはー

メイ「マークイズに着いたら、何しますか？」

咲子「そうね、まずは服屋かな？」

私たちはマークイズに行くことになった。一応キャナルやヨドバシに行くことも考えたけど、ショッピングモールと言えばここなのでここにした。

ー数分後ー

咲子「ふう、ついたついた」

メイ「今日はいっぱい楽しみましょう！」ニコッ

メイの笑顔が眩しい。本性を最近知ったけどそれでも可愛い。まるで天使。

天の声「後々リアル天使になるんだよn「ハイハイネタバレやめようねー♪」……ガハツ」チーン

メイ「……………?」

メイはキョトンとしてるけど、気にしない気にしない!

ー服屋ー

咲子「メイ、この色かこの色、どっちがいいと思う?」

メイ「あの、咲子さん、なんで全部パーカー何ですか?」

咲子「パーカーは最高かつ最強だからよ」

年中着ることができると、寒かったら何枚も着て、暑かったら脱げば良い。まさに最強の上着。

メイ「あと、あなたが今着ている赤いパーカーの桜の文字と花びらはあなたが見つけたんですか?」

咲子「そうよ、いいでしょ?」

メイ「はい、似合ってます。……なら、私はこの緑パーカーを買って梅の文字と花びらをつけましょうか」

咲子「いい考えね。それで?どっちがいいと思うの?」

メイ「うーん……こっちですかね」

咲子「オツケー♪」

ーゲーセンー

メイ「咲子さん、この連打ゲームやりましようよ、無料みたいですよ」

咲子「えっと、どちらが10秒でボタンをもっと押せるか勝負するゲームのようね。やりましょ」ポチッ

メイ「あ、始まりますよ」

3…2…1…スタート!

2人「うおおおおおおおおおお!」

ズドドドドドドドドドドドドドドドド!

私たちはボタンが壊れるギリギリのレベルで連打する。

多分毎秒20回ぐらいのスピード。

ピピーッ!

咲子「あ、終了ね」

メイ「勝ったのは…」

テツテレーン!青(メイ)の勝利!

咲子「誤差で負けちゃったわね」

メイ「…よっしゃ! WRYYYYY!」

咲子「メイ、素が出てるわよ」

しかもD I Oの真似してるし。

メイ「……………あ、ついうっかり」

咲子「ま、それでもいいけどね」

ーフードコートー

咲子「……………」ズズーツ

メイ「……………」ズズーツ

咲子「…美味しいわね」

メイ「凶暴な旨味ですネ」

咲子「どこの雪ノ下雪乃なのよ、アンタ」

てか、俺ガイル読んでたのね。

メイ「でも、美味しいのは事実ですネ」

咲子「そうね。豚骨ラーメンはホントに美味しいわ」

メイ「……………」ゴクゴク…

咲子「……………」ゴクゴク…

2人「…ぷはーっ」コトツ。

うん、スープも美味しかったわ。

ー本屋ー

咲子「メイ、アンタイナイレの攻略本見つけた？」

メイ「へ？わわ私は見当たりませんでしたよー？」

私はメイが隠してた本を取る。

咲子「……じゃあ、これは何？」サツ

メイ「……あ」

咲子「へへっ、いただきー……って、これ鬼滅の刃の漫画じゃねーか！攻略本ちやうやん！」

思わず口調が変になってしまった。騙されたー！

メイ「ふふっ、お先に失礼♪あ、あと漫画返してください、買いますので」

咲子「え、あ、うん」スツ

メイ「ついでに咲子さん、攻略本はあなたの隣の本棚にありますよ」

咲子「へ？……あ、ホントだ。買おっと」サツ

ふう、無事にゲットできたわね。

ー帰り道ー

メイ「今日は楽しかったですね」

咲子「そうね……ん？あれ、出夢先輩じゃない？」

私たちから10メートルくらい離れたところに出夢先輩がいた。

メイ「え?…:…あ、そうですね」

咲子「それと隣にいる女の人は…彼女?」

メイ「はい、あの人はお兄さんの彼女の藤崎花（ふじさきはな）さんです。1年前から付き合ってますね」

咲子「あ、そうなんだ。とりあえず邪魔しちやダメだから別の道で行こうか」
メイ「そうですね」

こうして、私とメイのお出かけは平和に終わるのであった。

不死鳥……のペット!?

side 桜木咲子

咲子「……あ、ここだ」ポチッ

ピンポーン。

……ガチャッ。

??「おお、いらっしやい、咲子さん」

咲子「こんにちは、平尾さん」

この人は坂田平尾（さかたひらお）さん。日花先生の夫だ。ボサボサの黒髪で、眼鏡をかけている。

今日は日花さんに呼ばれて彼女の家に来た。

平尾「さあ、入って入って」

咲子「失礼します」

ーリビンゲー

未例「あ、咲子じゃないか」

日和「一緒にゲーム、する？」

咲子「いや、遠慮しときます。日花先生はどこですか？」

未例「……………ブツ」じー

日和「はははっ、母さんはアンタの後ろにいるのよ」

咲子「……………ふえ？」クルツ

そう言われてあわてて振り返ると、マジで日花先生がいた。

日花「……………よっ」

咲子「よっ、じゃないですよ！いつからいたんですか!?!」

日花「日和がゲームするか誘って来た時からいたわね」

咲子「全く気付かなかった…」

日花「まあ、気付いてたら逆にすごいんだけどね。こんなに気配を消すのは天……………」
れ以上は言わないでおくわ」

咲子「は、はあ…。今日は何で呼び出したんですか？」

日花「ちよつとアンタに見せたいものがあるのよ」

未例「……………ああ、あれね」

日和「咲子ちゃん、びっくりするわよ♪」

咲子「何を、ですか？」

日花「正確には、私が飼い始めた鳥ね」

咲子「鳥？」

日花「そう、鳥。とりあえずついてきなさい、鳥だけに」
テテツチー。

未例「……ブツ」

日和「ははははははっ、いいダジャレね、母さん」

平尾「……」カチーン

咲子「あ、はは……」

私は苦笑い、未例さんは笑いをこらえ、日和さんは大笑いし、平尾さんは何故か物理的に凍っている。なにこの変な状況。

日花「……ま、それは置いといて、ついてきなさい」スタスタ

咲子「え、あ、はい」スタスタ

ー倉庫ー

咲子「広い倉庫ですね」

日花「まあね。さてと」

日花は指をくわえると、

ピーッ！

口笛を吹いた。

すると…

「ピエエエエエエ！」

バサバサツ！

咲子「……………え？」

鳥ぐらいの大ききの鳥が飛んできて、先生の肩に乗った。しかし、ただの鳥じゃない。

火を纏った鳥、不死鳥だった。

日花「どう？驚いたでしょ？」

咲子「いやいやいやいやいやいやいや！驚くどころじゃないですよ！なんで不死

鳥を飼ってるんですか!？」

日花「この子、朱雀っていうのよ。可愛いでしょ」ナデナデ

朱雀「クルルルル…」

咲子「名前は聞いてません!」

日花「はいはい、飼い始めた経緯ね。…ゴールデンウィークのから少し過ぎた頃の話なんだけど、有美先生が赤い卵を渡してきたのよ。なんの卵か聞いてみると、不死鳥の卵って言われて、相変わらずこの人ぶっ飛んだもの渡してくるな、なんて思ったわ」

…有美さんって、ぶっ飛んだもの渡してくるのね、脳内にメモつとこ。

日花「私も最初は遠慮したんだけど、その時に卵が孵化して、刷り込みで私を親と認識してしまったのよ」

咲子「あらら…」

日花「それで先生は、天界で不死鳥から『この卵を坂田日花に渡しなさい、いつか絶対に役に立つでしょう』なんて言われたらしくて…あ、テレパシーだね」

不死鳥ってテレパシー使えるんだ。

日花「だからしようがなく飼うことにしたのよ。でもこの子すつごく可愛くて…めんどくさい気持ちなんて吹っ飛んでしまったわ」ナデナデ

朱雀「クルルルル♪」

咲子「朱雀って、主になにを食べるんですか？」

日花「鶏肉ね。好物は唐揚げね」

咲子「唐揚げ食べるんだ……」

朱雀「ピエエ！」バサッ！

朱雀は先生の肩から離れ、今度は私の肩に乗った。

咲子「え？えつと……」

日花「頭を優しく撫でてやりなさい」

咲子「あ、はい。よしよし……」ナデナデ

朱雀「クルルルル♪」パアア

私は朱雀の頭を優しく撫でると、朱雀は気持ちよさそうに鳴く。確かに可愛い。

咲子「……なんだか癒されますね」

日花「そうね。ちなみに、朱雀はまだ生まれてから2週間しか経ってないのに、もう火が出せるのよ」

咲子「それって珍しいんですか？」

日花「ええ、普通は1ヶ月ほどかかるわね」

咲子「うわ、早いですね……」

朱雀「ピエエエエ！」ボオオオオ！

日花「ほら、そんなふうには」

咲子「おお、凄いですね！」

その後しばらく朱雀と遊んだ。めっちや癒された。

翔の家でのハプニング

side 桜木咲子

5月下旬のある日、私と祐樹、絵奈、ルマは翔の家に遊びに来ていた。

翔「おう、お前ら、よく来たな」ガチャツ

祐樹「失礼します」

3人「……………」

翔「ん？お前ら、どうしたんだ？」

咲子「翔、アンタの部屋、入ってもいい？」

翔「いいけど、なぜ聞いてきた？」

絵奈「いや、翔は年頃の男子だし、エロ本とか隠してそうだからね」

ルマ「ボクは単純に入りたいだけだよ」

翔「いやいやいや、俺のような奴がエロ本なんか持つてると思うのか？」

咲子「あ、そうだった。持つてるとしたら祐樹だったわね」

祐樹「な、なんで俺だよ!？」

絵奈「たまに視線が、ね」

祐樹「いやそんなことは…あ」

ルマは胸を張った姿勢をすると、祐樹の視線が胸のほうに行った。

ルマ「ほらね？」

祐樹「こ、こここれは不可抗力だ、信じてくれ」

咲子「翔の視線は向いてないの？」

翔「興味ないしな」

祐樹「しまった…」

ルマ「…エッチ」じー

祐樹「グハッ」バタン。

絵奈「あららく、倒れちゃった」

翔「こいつはペットで寝かせておこうぜ」

ー寝かせたあとー

咲子「さて、なにする？」

翔「俺のペンギンたちを連れてこようか？」

絵奈「うーん、今はそんな気分じゃないかな？」

ルマ「あ、じゃあこれでもない？」サツ

ルマがそう言って出てきたのは…スマブラか。

私はオンライン対戦を少しやってたからそこそこ強いと自負してる。

翔「おう、そうするか」

そして私たちはしばらくスマブラをした。

side 戸畑祐樹

祐樹「……………ハッ！」ガパッ

ここは…翔の部屋か？

確か、俺はルマにエツチって言われてそのシヨックで気絶したんだよな？

いやー、好きな人に悪口（悪口なの？）を言われたら以外と精神的にくるんだよなー。

（誰得だよその情報。）

祐樹「それにしても、ホントに翔のやつエロ本を隠してねーのか？探せばあるんじゃないか？」

さてさて始まりました翔のエロ本探検隊。

まずはよくあるベットの裏…

祐樹「…ないか」

次は床下…

祐樹「ここもないか」

俺の場合はここに隠してるんだがな。

(お前は持つてるのかよ！)

なら、今度はタンスの裏…ん？

祐樹「なんだこれ？」サツ

タンスの裏に挟まってたのは埃まみれの本だった。表紙からしてエロ本ではないよ
うだ。

祐樹「読んでみるか？」パラパラ

本を開いてみると、そこには手書きで技のやり方などが書いてあった。どうやらこれは
は翔の技ノートのようだ。

祐樹「すげー研究してるんだな…ん？」パラッ

なんだこれ…「このページ以降を読んだら凍らせる」？

そう言ってもな…

祐樹「読みたくなるのが俺なんだよな…」パラッ

ん？これは…

日記だ。翔のやつ日記なんか書いてたのか。

4月〇日

今日俺は花町高専に入学した。しかも運のいいことに担任があのだ目桜の坂田日
花先生だった！俺超ラッキー！

結構普通だったな。

そう思いながら他の日の日記を読んでみる。うん、普通の日記だな。なんも違和感がない。と思っていると…

ガチャツ

翔「おお祐樹、目が覚めたのか…ん？」

祐樹「あ、やべ」

翔「…ほほう、俺の日記を読んだんだな？そんなに凍りたいんだな？ああ？」ゴゴゴ…

祐樹「あ、その…気になってしまつて…」

翔「そうかそうか、凍らせられたらどんな気持ちなのかが気になつてしょうがないのか」ピキピキ…

祐樹「いや、ちが…」

翔「違わねーよ。くらえ！」ドゴオ！

祐樹「ぐえっ」カチーン

翔「しばらく全身冷やしてろ」ガチャツ

そして俺は3時間ぐらい氷漬けにされた。

まともそうな勉強会

side 桜木咲子

今は6月中旬、あと1週間で1学期期末考査だ。

私は授業の内容をしっかり覚えてるので問題ないが、祐樹や絵奈、学などが赤点とりそうのため、今日は勉強会になった。

咲子「……ここにこの公式を当てはめて……」

祐樹「……こうか？」

咲子「うん、正解。次はこれを……」

祐樹「……なるほどな」

私は祐樹に数学を教え、

千早「○○年に○○は何をした？」

学「……○○の改革？」

千早「不正解。これだ、○○の乱だ」

学「そうだったか」

千早は学に歴史を教え、

メイ「この言葉の活用形は何でしょうか？」

絵奈「えつとく、連用形？」

メイ「正解です。これで多分国語は大丈夫ですね」

絵奈「ありがとう、メイちゃん♪」

メイ「は、はい、どういたしまして…（またちゃん付けされちゃいましたね）」

メイはさつきまで絵奈に国語を教えていた。

そして、他のメンバーは…

翔「○○年に○○の乱を起こしたのは？」

育也「○○○○と○○○○！」

翔「正解だ」

ルマ「嫌な奴（18782）が2人いたら？」

千代「…皆殺し（37564）よ。有名な問題ね」

ルマ「あ、やっぱり知ってたんだね」

千代「…じゃあ、皆殺しを2回すると？」

ルマ「…えつと…75128だから…苦い睡？」

千代「正解。凄い偶然よね」

ルマ「そうだね」

問題を出し合ったり、計算の雑学を話したりしていた。

これがさとかに隊の勉強会だ。案外まともにできている。

祐樹「咲子、この問題どうすんだ？」

咲子「ん？ああ、そこはこれを……」

祐樹「……よし、できたぜ」

勉強会は、こんな感じで進行した。

そしてテスト当日。

3人曰く問題はスラスラ解けたらしい。

私はどうかって？もちろん一教科につき見直し込みで15分で終わらせてるわよ？

当たり前でしょ？

(咲子が規格外なだけです、安心してください)

そしてテント返しの日……

祐樹「おっしやああ、80点取れたぜええ！」

咲子「よかったわね♪」ドヤ！

私は100点のテストを見せながらドヤる。

祐樹「やつぱ咲子は100点か。でも、俺はこう見えてもクソ頑張ったから、そんなの関係なく嬉しいぜええ！」

絵奈「メイちゃんのお陰で赤点回避できたよ〜！これで親に新しい筆買ってもらえる〜！」

翔「おう、そりゃよかったな」

絵奈「うん、可愛いメイちゃんに万歳〜！」

―廊下―

メイ「わ、私って、そんなに、可愛いんですかね…／＼／＼」

一方メイは可愛いと言われてまた照れていた。

―1組―

育也「うわっ、すごいじゃん学」

学「おう…俺何年ぶりだろうな…」

…満点取るの！」

学は社会で100点を取り、クラス1位の点数だった。

学「千早のやつ、教えるの上手すぎだろ！じゃないとこんな点数取れねーよ！」

育也「赤点取ってた学だから説得力あるな…今度俺も教えてもらおうかな…」

こんな感じで、時系列は思いつきり飛ぶのであった。

(メタい話でしめるな！)

明日は雨の予報ですが、そうはさせません。

side 桜木咲子

『明日の天気予報です。福岡市付近は雨になると予想されており…』

咲子「明日は雨か…」

春菜「いや、案外晴れるかもよ?」

咲子「え、なんで?」

春菜「明日は何の日?」

咲子「6月21日だから…夏至?」

春菜「そうよ。それでね、夏至は毎年ずっと晴れなのよ。何でかわかる?」

咲子「…奇跡?」

春菜「奇跡…ね。ま、分からない方が驚くわね。明日晴れたら日花に聞いてみなさい」

咲子「先生に?…うん」

何で先生に?

―次の日(夏至)―

次の日、天気を見てみると母さんがいった通り晴れていた。しかも快晴、雲ひとつなかつた。

咲子「うわ、本当に晴れてる…」

春菜「ね？言つたでしょ？」

咲子「不思議ね…ちよつと先生に聞いてくる！行ってきます！」ガチャツ

春菜「行ってらっしゃい」

私は先生の家へと走つていった。

ー坂田家宅ー

ピンポーン♪

…ガチャツ。

日花「あれ、咲子？どうしたの？」

玄関は先生本人が開けた。

咲子「先生、今日は雨の予報だったのに雲ひとつないっておかしくないですか？」

日花「あら、まさか春菜が聞いてこいって？」

咲子「はい、そうですけど？」

日花「なるほど…実はね…」

シユツ!

ギユオオオオオオオオオオツ!

先生は空に向かって空振りパンチをする。その刹那、とんでもない突風が起こり、その影響で先生の足元の地面がめり込む。

咲子「……………ホワーウ」ガクガク

何、この人? 強すぎでしょ? 3割でこれぐらいなの!? 先生ってまさか人間辞めてるの!?

日花「まあ、半分ぐらい人間辞めてるわね。実質人間としての全力は本当の全力の5割程度だから」

咲子「え、本当の全力?」ガクガク

日花「あ、この話はまだ早いわね。とにかく、私と有美さんはああやって雲を弾き飛ばしたのよ。分かった?」

咲子「は、はい、分かりました」ガクガク

日花「ん? 何で震えてるの?」

咲子「いやー、日花先生のパンチが怖すぎて少し怯えています」ガクガク

日花「ハア…安心しなさい。アンタは殴らないわよ、少なくとも今は」

咲子「え、つまり将来殴るんですか!?!」

日花「ま、いつか手合わせする時に、ね？」

咲子「は、はあ……」

私は先生の規格外さに驚くのであった。

模擬戦をしよう

side 桜木咲子

7月の初め頃、私たちは戦闘場にいた。

咲子「炎突改！」ドゴツ！

メイ「フツ！」キイン！

咲子「ハツ！…え？」シュツ！

メイ「そこです！ウインドブラスト！」ピュウウン！

咲子「うわっ！」ピュウウウ：

私とメイは今、模擬戦をしている。もう気づいてると思うんだけどね。

咲子「ふう、なんとか吹っ飛ばなかつ…!?」

メイ「鳴鳴斬り改！」ズバツ！

咲子「ぐうっ！」シユウウ：

メイの斬撃をなんとか防御する。改に進化してるから威力も上がってるわね。

咲子「…：ハアアアアツ！フレイムダンス！」ボオオオ！

私は炎を纏って、逆さで回転し始める。

咲子「能力だったら解除出来たけどね…ハアアアアッ！」

メイ「それは…残念でしたね！ハアアアアッ！」

ピユウウン！

火桜と風梅どうしのぶつかり合いで、あたりに突風が起きる。突風と言っても扇風機レベルだけどね。

メイ「……………フッ！」ピユウウン…

咲子「…うわっ！」ツルツ

私は何かにバランスを崩されてしまった。

咲子「…やぼっ！イジゲン・ザ・ハンド改！」ギユオオ…

バランスを崩されてしまった私を風梅の花びらは狙うが、私はすかさずドーム状の境界を張り、飛んできた花びらを上を受け流した。

メイ「…あまり隙がないですね。さすが日花先生に鍛えてもらっただけあります」

咲子「アンタこそ、独学でそれほどの技術とはやるわね。アンタみたいな人は中々いないわよ？」

メイ「褒められてもらい光荣…ですっ！」ズバッ！

咲子「こらこそ褒めてくれてありが…とうっ！」ドゴッ！

メイの刀と私の拳がぶつかり合う。

…今よ!

咲子「そこだっ!」ドゴツ!

足でメイをこかした。

メイ「えっ!?!」

咲子「炎突改!」ドゴオ!

メイ「かはっ!」バタン

咲子「どう?」

メイ「…降参です」

『勝者、桜木咲子!』

咲子「…ふう」

メイ「うう…惜しかったです…」

咲子「いやー私もあと少して負けるところだったわね」

メイ「次は勝ちます!」グッ

小さなガッツポーズをするメイ。可愛いな…」

メイ「え!?!」カアア

あ、声に出してた。メイは顔を赤くする。そんな顔も可愛いな…」

メイ「もう!照れるじゃないですか!」テレテレ

その後も可愛いと言われ続けたメイはしばらく拗ねたが、通信対戦をしてあげると言ったら許してくれた。可愛い。

1年夏休み

夏休みと言えば?…兄が帰ってくる!

side 桜木咲子

メイと模擬戦をしてからまた数週間後、今は夏休みである。

宿題は夏休みが始まってすぐオール（完徹）して3日で終わらせた。私の体力とマッ缶があれば大丈夫だった。その次の日丸一日寝ただけだね。

あと、夏休みになると帰省する人も少なくないだろう。何でこの話をしてるのかって?
それは…

……兄さんが千葉から帰省してきたからだ。

春樹「咲子、お前超強くなってるな」

咲子「そりゃ、日花先生に鍛えてもらってるからね♪」

春樹「……ほう、あの日花先生に弟子入りしたのか」

咲子「そうだけど、どうかしたの？」

春樹「いや、俺は弟子にしてくださいって頼んで断られたんだよ、懐かしいな」

咲子「私の場合、逆に弟子になってって誘われたんだけど」

春樹「へえ……って、今何だった!？」

咲子「日花先生に弟子になってって誘われたのよ」

春樹「……そんな事ある？」

咲子「ある」

春樹「アンビリーバボー。ハルキシンジラレナイナ」

……なるほど、そのネタね。

咲子「……何言ってるんだこのゴミいちゃんは。実際に起きてることなのよ？」

春樹「……あのー咲子さん？俺ガイルネタで言うのはいいんだけど俺結構傷つくからね」

?演技なのは分かってるけど、ね?」

咲子「……口調まで変わってるわよ、兄さん」

春樹「おう、これは失礼。で、日花先生にどんな特訓つけてもらったんだ?」

咲子「…知りたい?」

春樹「知りたいから聞いてんだろうが」

咲子「まず、毎日指だけの腕立て伏せ千回、腹筋五千回、スクワット五千回、反復横跳び一万回」

春樹「……それを毎日かよ」

咲子「しかも、毎週金曜日は模擬戦。いつも先生に触れもせずにフルボッコにされる」

春樹「鬼かよ…」

咲子「あと、先生の気まぐれで技を教えてくださいね。炎天桜舞とか。しかも習得するまで帰れません状態で」

春樹「…そりゃそんな特訓したら嫌でも強くなるわな」

咲子「今の私は5連続でオールしても問題ないぐらいの体力と、自動車を両手で問題なく止めるぐらいの力があるわ」

春樹「まさか…俺の妹、人間辞めた?」

咲子「それを言うなら日花先生に言つてよ」

春樹「あー、先生は、半分、人間辞めてるから言わなくていい」

咲子「(日花先生って何で半分だけ人間辞めてるんだろう…)とところで兄さん、きじおさんは？」

春樹「きじおなら家にいると思うぜ」

咲子「ふーん…」

兄さんの親友の飛羽野きじお(ひわのきじお)さんはキジの仮面をつけている。昔は帽子を付けていたが頭が入らなくなつたため仮面にしたらしい。

春樹「それでよー、きじおがよー…」

咲子「へー、それはすごいわね」

私は兄さんとしばらく談笑した。楽しかった。

天界へ行くというすごい展開

side 桜木咲子

兄さんが帰ってきて数日後、私はメイとイナイレで通信対戦をしていた。

咲子「いけっ！ジェットストリームG5！」

メイ「…まずはザ・マウンテンV3で威力さげて…ゴットハンドトリプルG5！……よし、止めました！」

咲子「あー、もうTP切れになってるわね…また負けそう…」

メイ「咲子さんが天才だと、私は秀才ですかね？」

咲子「…いきなり何の話？」

メイ「勝ちたいなら努力しろという事です」

咲子「フアイ…」

努力ねー。夏休みどんな特訓するんだろ？

そう思った矢先、兄さんが部屋に入ってきた。

春樹「咲子、日花先生が来たぞ、なんか話があるそうだ」

咲子「話？…一応メイも付いてきて」

メイ「?…あ、はい…」スタスタ
ー1階、リビンググー

リビンググに来たけど…

咲子「あれ?先生どこ?」

メイ「隠れてるんですかね?」

チョンチョン。誰かに肩をトントンされる。ん?

クルッ

日花「……よっ」

咲子「また背後からの登場ですか!?怖いので止めて下さいよ先生!」

日花「いやいや、怖がらせるためにやってるんだから止めないわよ。メイは1学期ぶ

りね」

メイ「あ、はい、こんにちは…」

私たちはとりあえずソファーに座る。

咲子「で、先生、話って何でしょうか?」

日花「本当は咲子だけに聞くんつもりだったけど、メイにも聞くことにするわ。アンタ

達…

…天界で特訓合宿をしない？」

咲子「え。（天界と聞いてビックリ）……え？（理解したけど聞き間違えだと思い込む）
………え!?!（先生の顔を見てこれはマジだとしり戸惑う）て、天界で、とと特訓!?!」

メイ「……是非行かせて下さいっ！」キラキラ

メイは目をキラキラさせて言う。即答したわね…

日花「メイは即答ね。咲子はどう？」

咲子「天界で特訓って、何か裏でもあるんじゃないですか？なんか怪しいですよ？」

日花「裏ね……ただ…特訓…するだけだけどね？」

何今の間の置き方。怪しさ全開でしょ。

咲子「その特訓って、しんどいですか？」

日花「……アンタの態度によるわね」

態度？うーん……

咲子「……私も行きます」

日花「オーケー。すでに春菜と蓮也（両親）に聞いてるけど、咲子は予定が無いはず

よね？メイはどうなの？」

メイ「私もヒマでしたね」

日花「了解。じゃ、今週の土曜日8時半に花町高専の校門前で集合よ。服は1着だけでいいわ、洗えるし。あと持つてくるものは……無いわね。持つていきたくないものがあつたら好きに持つて行っていいわ。上着はパーカーをお勧めするわね。それじゃ、失礼するわね」ガチャツ。

……。

メイ「咲子さん……」

咲子「メイ……」

咲子「先生もパーカー好きなんだね」

メイ「先生もパーカー好きなんですわね」

見事に意見が合った。

結論。

やはりパーカーは最強の上着。

天界

side 桜木咲子

― 出発当日 ―

咲子 「行つてきまーす」

春樹 「行つてらっしやい、頑張れよ」

咲子 「うん！」

今日は天界で特訓をし始める当日だ。どんなことをするのか楽しみで仕方がない。

咲子 「くく♪」 ピー♪

楽しくて思わず口笛を吹き始めるぐらいだった。ちなみに吹いてる曲はボカロの曲で、サムネイルに角が生えてる天使と神社の鳥居がある曲だ。

…感のいいボカロファンなら分かるよね？

― 集合場所 ―

有美 「あ、来たわね」

咲子 「おはようございます、有美さん。メイと日花先生は？」

有美 「メイはまだ寮にいるわ。日花は…アンタの後ろね」

咲子「…は？」クルッ

………またかよ…。

日花「…よっ」

咲子「もうそのネタ飽きました…」

日花「飽きて結構。私はずっとやるからね」

咲子「ハア。……先生、おはようございます」

日花「おはよ。メイはそろそろ来ると思うわ」

136・2473秒後

→的確すぎるだろ！

メイ「おはようございます！」

咲子「テンション高いわね」

メイ「天界へ行けるんですよ？テンション高くない訳ないじゃないですか！」

咲子「ま、それもそうね」

私も楽しみだし。

日花「さて、全員揃ったし、始めるわよ。………

天使化！」カッ！

ギョオオオ！

先生がそう言った刹那、突風が巻き起こった。

有美「……………」

咲子「うわっ！」

メイ「すごいパワーです！」

日花「……………ふう、完了」

咲子「……………先生？」

日花「驚いた？これが天使化よ」

先生は…天使になっていた。

髪は紫色、赤い羽が生えており、頭には赤い天使の輪っかがあった。

メイ「成る程、だから半分人間辞めると言われてるんですね…」

日花「そういうこと。…ハッ！」ピカア！

先生はなんかワープホールみたいなものを出した。

日花「さ、入って！」

咲子「あ、はい！」

メイ「突入！ハアア！」

有美「…2ヶ月ぶりね」

―天界―

ワープホールをくぐると、光に満ちた空間に出た。

日花「…ようこそ、天界へ」

咲子「ここが…」

メイ「天界…！」

2人「すごいです！」

有美「ふふつ、私はもう慣れちゃってるからね。あまり驚かないのよねー」

日花「そりゃ人生の4分の1天界で過ごしてますからね」

有美「ふふつ、それもそうね」

…マジか…有美さん15年も天界で過ごしたんだ…。長っ!

咲子「ところで先生、私たちが特訓するのってまさかその天使化というやつですか？」

日花「え? いや、これはまだ早いわ。教えるのは別のものよ」

メイ「何となく上級者向けに見えますしね…」

日花「その通りよ。解除!」カッ!

先生はそういうと羽と天使の輪っかは消え、髪色が黒に戻った。

日花「さて、付いてきて」

スタスタ…

私たちは天界の街を歩く。天界には普通に人が歩き回っていた。地上によく似ていた。ただ、ひとつだけ言えるのは、悲しそうな顔をした人は1人もいなかった”という事だ。

咲子「…先生、質問があります」

日花「何?」

咲子「ここって、天国ですか?」

日花「…いや、天国はあるけど生きてる人は立入禁止よ。だから違うわね」

メイ「天界の中に天国があるんですね…」

日花「…さて、ついたわ」

メイ「……………わあ……」

私たちが着いた建物は、一際大きな建物だった。

日花「ここが、有美さんの道場よ」

『火野道場』

咲子「……………すごい……」

チヤカメカフアイア―

side 桜木咲子

『火野道場』

有美「さあ、入って入って」

咲子「あ、はい……」

メイ「……………」キラキラ

日花「…3ヶ月ぶりね」

私は緊張、メイは目をキラキラさせながら道場へと入っていった。

中では、様々な年齢の人が鍛錬をしていた。

「フツ！ハツ！」

「…………スウウウウウ」

「せやっ、とうっ！」

「……………」瞑想中

有美「みんな、ただ今」

「…………ツ!?!」クルツ

有美さんの一言で全員こっちを向いてきた。そして…

「おかえりなさいませ、師匠！」 ザッ！

挨拶をし、全員90度のおじぎをした。

有美「さて、今日はここまでにしなさい。解散！」

「失礼します！」 ザッ！

弟子たちは再びおじぎをし、次々と部屋を去っていった。

日花「相変わらずですね、先生」

有美「アンタはもつと弟子を増やせばいいのに」

日花「私は自由がいいので遠慮します」

有美「ふーん、まあいいわ。さて、メイ」

メイ「は、はい！」 ビシッ！

有美「…炎分身！」 ポンッ！

有美さんは火で自分の分身を作った。

有美「アンタはコイツと戦いなさい」

分身「よろしく」

メイ「はい！よろしくお願いします！」

有美「ということで、日花、あとはよろしく」 スタスタ

有美さんはそう言って去っていった。

日花「…はいいい。咲子、今からアンタには新技を覚えてもらうわ。この技はそこそこ威力が高く、相手によっては初見殺しを狙うこともできるわね」

咲子「なるほど…」

日花「さて、手本を見せるわよ。…ハアアアツ」ボオ…

先生は小さな火の玉をいくつか出し、それを合わせて凝縮した。

日花「ほい」ポイツ

そしてそれを床に投げた。

咲子「…あれ？何も起きませんね」

日花「…起爆」パチン

ドガーン！

先生が指を鳴らすと火の玉は小さな爆発を起こし弾けた。

咲子「うわっ！」ボツ

日花「その名も、チャカメカファイアーよ」

咲子「なんか…変な名前ですね…」

日花「ま、名付けたのは私じゃないし、気にしない方がいいわよ。仕組みはなんとなく分かった？」

咲子「はい。複数の小さな火の玉を合わせ凝縮し、それを弾けさせる技はですよね？」

日花「理解が速くて助かるわ。さて、やってみなさい」

咲子「はい！……ハアアアツ……」ポオオオ……

私は複数の小さな火の玉を出す。そして、それを合わせて凝縮しようとするけど……

咲子「……っ、うわっ！」ドガッ！

日花「……まあ、まだ一回目だからね。またやってみなさい」

咲子「……ハアアアツ……これを……うわっ！」ドガッ！

凝縮しようとする所をまた失敗した。

咲子「まだまだ！ハアアアツ……うわっ！」ドガッ！

日花「………」

何度やっても凝縮する所を失敗してしまった。

咲子「ハア、ハア……先生、コツってありますか？」

日花「そうね……円を大きな円で囲むイメージかしら？」

円を大きな円で囲む？……あ！なるほど、そういうことね！

咲子「ヒント、ありがとうございます！」

日花「フツ、分かったようね。やってみなさい」

咲子「はい！ハアアアツ……」ポオオオ……

そして…この複数の火の玉をさらに大きな火の玉で囲むイメージで…

咲子「ハアツ！」ポツ！

日花「おお、成功したようね。すごいわね、私のヒントを聞いて1発で成功なんて」

咲子「さて…ほいつ」ポイツ

日花「？」

私はチャカメカファイアーを床に投げた。

…このネタを使おう。

咲子「キラーク○ーン第1の爆弾…スイッチ、オン」ポチツ

ドガン！

仗助ええええええええ！↑このネタ、ググって見てね☆

日花「…なるほどね。さて、あとはチャカメカファイアーをバンバン出して強くする

だけね」

咲子「はい！頑張ります！」

咲子は、チャカメカファイアーを覚えた！

一人称を元に戻すと…?

side 室見メイ

私は今、有美さんの分身と特訓をしています。

メイ「真鳴鳴斬り！」ズバアアアツ！

分身「おっと」サツ

私は進化した鳴鳴斬りをしますが、簡単にかわされてしまいます。

メイ「うーん…どうすれば攻撃が当たるのでしょうか？」

いい方法が思いつきません。うーん…

分身「…アンタ、無理してるわね」

メイ「…え？」

無理してる？私？

分身「信じられないような顔をしてるわね。肉体的な意味じゃないわ、精神的な意味

よ。…アンタはなんでいつも敬語なの？」

メイ「え？…えつと…本来の喋り方だと女らしくないというか…もうすでに敬語の

方が慣れてるんですけどね…」

分身「…そこは問題ないわね。…じゃあ、一人称は？」

メイ「いつもは”私”ですが、素に戻った時”俺”になりますね。ちよいちよ戻っちゃうんですよn「それよ！」…へ？」

分身「恐らくそこで無理してるわね。敬語はもう慣れてるからいいとして、一人称は元に戻した方が楽になるわよ」

メイ「そう、ですか…？」

分身「そうよ。試しに一人称を俺にして自己紹介してみなさい」

メイ「はい。えっと…俺は室見メイ、16歳の花町高専1年で、ランク2位です。…これでいいですか？」

なんか…恥ずかしいです…

分身「………ないわね」

メイ「何がですか？」

分身「アンタが言う違和感がないわね！うん！もうそれで行きなさい！」

メイ「え、ええええ!!?おかしく…ないん、ですか…？」

むしろ違和感しかないと思うんですけど…

分身「ええ、アンタらしいわよ！」

メイ「俺らしい、ですか…。…分かりました！俺、一人称を元に戻します！」

分身「それがいいわ。さあ続けましょう！」

メイ「はい！」

それからしばらく特訓したんですが、前よりも調子が良くなり、有美さんの分身に数発当たるほどでした。

―特訓後―

咲子「メイ、おつかれ！私、新技覚えたのよ！」

メイ「おお、凄いですね！俺、新技作れるように頑張ります！」

咲子「……………ねえ、メイ」

メイ「はい、何ですか…!？」

咲子さんは俺に顔を近づけてきます。近いです／／

メイ「あ、あの、俺の顔になんか付いてますか？」

咲子「……………わね」

メイ「へ？」

グッ
咲子「その一人称、似合ってるわよ！俺って…メイらしくてかわかっかしいわよ！」

咲子さんはそう言って親指を立ててきました。

……………か、かわかっかしい／／

メイ「そ、そうですか……?／＼」テレテレ

咲子「ええ、俺が一人称の方がしっくりくるわよ……それと、今のメイ可愛いわよ♪」
か、「可愛い……また言われました……慣れませぬね／＼」

メイ「……可愛い／＼」プシュー

咲子「うわっ、何この娘、超可愛いんですけど……」

メイ「もう！俺のことからかいすぎです！」

咲子「あはは、ゴメンね〜♪（その顔も可愛いよ!）」
その光景をみてた日花は言った。

日花「何こんな所で百合百合してるのよ……」
と。

作れ! 連携技!

side 桜木咲子

―次の日―

昨日ここに来たばかりだけど……1つ言っていていい?

有美さんの弟子たち、優しすぎない?

みんな聖人レベルなんだけど。私ここにいていいのかな?

有美さんに聞いたところ、道場の中ではそういう態度だが、出ると普通になるとのこと。…切り替えすごくね?

そう思っていると、昨日から一人称を俺に戻したメイに話しかけられた。

メイ「咲子さん、今日は俺と咲子さんと連携技作りましょうよ!」

咲子「連携技?…いい考えね、やってみましょう!」

トントン。

咲子「ん?……もう驚きません」

日花「よつ。今日の特訓は連携技作りにするわね。準備ができたら道場に来なさい」

2人「はい!」

日花「いい返事ね。それじゃ、待つてるわよ」ガチャツ
メイ「さて、俺たちも準備しましょうか」

咲子「そうね」

そして私たちは準備をし、道場へと移動した。

―道場―

日花「連携技で大切なことはなんだと思う？」

咲子「意思疎通？」

日花「…ちよつと違うわね」

メイ「角度やタイミング？」

日花「そういう物理的なものじゃないわよ」

じゃあ精神的なものか……

咲子「……あ！心を一つにすること？」

日花「正解！意思疎通やタイミングも大事だけど、心を一つにすることが一番大事よ。そうしないと威力どころか技すら発動しないからね。分かった？」

2人「はい！」

日花「じゃあ、特訓開始よ！」

そして私たちは特訓を始めた。

咲子「まず、どんな感じの連携技にするの?」

メイ「そうですね…。私の晴天飛梅と咲子さんの炎天桜舞を組み合わせたものなんてどうでしょう?」

咲子「なるほど、2つの種類の花びらを合わせるのね。早速やってみる?」

メイ「はい、そうしましょう!」

―数秒後―

咲子「行くわよ!炎天桜舞!」B L O O M!

私は右側から炎天桜舞をし、

メイ「はい!晴天飛梅!」B L O O M!

メイは左側から晴天飛梅をする。

2人「ハアアアアツ!」グググ:

シューウウウ:

2種類の花びらは互いにぶつかり、消えてしまった。

咲子「あ、消えちゃった」

メイ「でも、まだ1回目です。またやりましょう!」

私たちはまた配置に着く。

咲子「今度は同じ方向に打つわ!炎天桜舞!」B L O O M!

メイ「晴天飛梅！」 B L O O M !

ギョルルルルル……シユウウウウ……

花びらはしばらく一緒に飛んでいくが、やがてぶつかり合い消えてしまった。

咲子「…今度は少し持ったわね」

メイ「そうですね。方向はこれでいいかもしれません」

あとは弾幕の速度？…いや、それだと威力が上がらない。……あ、そうだ！

咲子「……ねえメイ、私たちの力、合わせてみない？」

メイ「合わせる？ どういう事ですか？」

咲子「エネルギーを混ぜるってことよ。そしたら互いにぶつかり消えてしまうことは

無いんじゃない？」

メイ「なるほど…やってみましょう」

日花「………（どうやら分かったようね）」

咲子「オーケー。…ハアアア…」 ギョウウン…

メイ「いきます。…ハアアア…」 ギョウウン…

2人「ハアッ！」 ギョウンッ！

ギョルルルル…！

私とメイの赤と橙のエネルギーが混ざり合い、朱色のエネルギーとなって回転する。

咲子「…よし!」

メイ「成功です!このまま技を出しましょう!」

咲子「了解!炎天桜舞!」BLOOM!

メイ「晴天飛梅!」BLOOM!

グルグル…ギョルルルルッ!

朱色のエネルギーを纏った2種類の花びらはぶつかり合って消えることなく一緒に飛んでいった。これが新技だ。

咲子「やったー!成功!…名前どうする?」

メイ「そうですね…あ!陽天梅桜、なんでもうでしよう!」

咲子「陽天梅桜…うん!いい名前ね!そうしましょう!」

その後、私たちは新技を鍛えるのであった。

朱雀、飛んで来る

side 桜木咲子

―数日後―

天界でメイと特訓を始めてから数日、私たちはどんどん力を付けていった。恐らく来る前の1.5倍のパワーにはなってる。帰ってメイと組んだら3位以下相手に無双できそうね。ちなみに、今は特訓してない。じゃあ何をしてるのかって？それは…

咲子「先生、能力持ちですか？」

日花「…どつちだと思おう？」

チョン。

咲子「…100%持ってますね。私の能力が反応したので」

日花「アンタの能力は能力発見器にもなるのね。…まあ、隠してもいつかはバレるし。そうよ、私は能力持ちよ。何の能力かは教えないけどね♪」

咲子「…まさか、それを当てるのが特訓ですか？」

日花「んな訳アルかい！（↑同作者他作品のキャラでダジャレ作るな！しかも同一人物じゃねーか！）今日の特訓はメイと武器交換よ。いつてら」

…今日は武器交換か…。つまり、メイは拳で、私は刀で戦うということだ。この特訓しんどのいよね…。

メイ「咲子さん、早く行きましようよ」

ずっと黙ってたメイがそう言う。

咲子「…ハア、分かったわよ。いつてきー」スタスタ

…特訓、がんばりますかー！

side 坂田日花

私の弟子とその友達は部屋を去る。

日花「…さて、私も出かけますかー！」

…どこ行こうかな。(決めて無かったのかよー)…あ、そうだー！

天界一周ランニングしてこよっと！(地球の円周半分だぞ、それ！)

…安心して、私は最低10,000周は余裕だから。

天の声「…この規格外半人間辞めてるパーカーババアが…」

日花「…それ全部事実だけどき…アンタの顔面燃やしたるか？」ボツ…

天の声「喜んで遠慮させていただきます。それでは」フツ

…燃やしたかったのに。まあいいや。早くランニング行こーっと。

ー1時間後ー

日花「たでーま」ガチャツ

朱雀「クエエエエ♪」バサツ!

日花「あら、朱雀。天界に飛んできたの?」

朱雀「クエツッ!」

朱雀は偶に地界（地上）からここに飛んで来る。不死鳥特有の能力の一つね。

日花「…アンタも特訓するの?」

朱雀「クエエエエ!」ポオオオ!

朱雀は目に炎を宿して（物理）いい返事をする。

日花「決まりね、行きましょう」

朱雀「クエツ♪」バサツ

ー道場ー

日花「じゃつ、行ってきなさい!」ピシッ!

朱雀「ピエエエエエ!」バサツ、バサツ。

咲子「ん?…ええ、朱雀!」

メイ「ふ、ふ不死鳥!?!なんでこんな所に!?!」

2人は振り返って朱雀を見て驚く。ドツキリ大成功ね♪

日花「天界に飛んできたのよ。特訓に付け合わせなさい」

メイ「え、まさか先生のペットですか!？」

咲子「そう、この子は朱雀。生後2ヶ月半で、好物は唐揚げよ」

メイ「ハア。…朱雀さん、特訓がんばりましょうね！」

朱雀「クエエエ！」

そして、私はしばらく3人が特訓してるのを優しい目で見守るのであった。

一方その頃、他の人たちは…

咲子とメイが天界で特訓をしていた頃、地界では…

side 西新翔

ーさとかに隊基地ー

翔「咲子とメイ、天界で何してんだろうな…」

絵奈「今頃めっちゃ強くなってるんじゃない？」

祐樹「パワーが40万超えてたりしてなw」

(マジで超えています)

ルマ「というか、今考えるところの中で一番強いのはボクだよな？」

学「そういえばそうだな」

育也「それがどうかしたのかい？」

ルマ「ただ気付いただけだから特に何も無いよ。ところで、今から…咲子のお兄さんに特訓させてほしいって頼みに行かない？」

春樹さんと特訓ね…。

千早「いい考えだ、不採用」

ルマ「え、なんで!？」

千代「春樹さんは教えるタイプじゃないようね…」カタカタ

翔「…お前、パソコンでそんなこと分かるのか？」

千代「春樹さんが所属する事務所のプロフィールにそう書いてあったの」

絵奈「…どうやって事務所が分かったのー？」

千代「…企業秘密よ」カタカタ

…なるほどな。

祐樹「でもよ、プロフィールの情報だけ信じるのか？」

千早「そういう問題じゃない。特訓をつけてもらうなら適任者がいるということだ」

祐樹「…誰だ、その適任者ってのは？」

千早「飛羽野きじおさんだ」

翔「きじおさんが…確かに教えるのがうまそうだな」

学「どんな人なんだ？」

絵奈「赤髪でー、雉の仮面を横に付けててー、風属性でー、面倒見のいい人かな？」

育也「なるほどね…」

翔「…よし！早速きじおさんに頼みに行こうぜ！」

ほぼ全員「おお！」

ルマ「お、おお……！（追いつかれないように頑張ろう……！）」
絶対に咲子たちとの差を縮めてやる！

side 桜木咲子

咲子「……………ハッ！」ドゴッ

メイ「……………ぐっ……！」キンッ

私はメイと打ち合いをしている。

咲子「真炎突！」ドゴォ！

メイ「真鳴鳴斬り！」ギイン！

お互い二段階進化した技をぶつけ合う。

メイ「ハアアアアッ！」キイン！

咲子「うわっ！」フラッ

力はメイが勝ち、私は刀に押されて体制を崩してしまふ。

メイ「風斬改！」ズバァ！

咲子「進化した……!?なら私も！真イジゲン・ザ・ハンド！」ギユウウン！

ギユルルルル…

飛斬撃は私が出したドーム状の壁に受け流され、天井にぶつかる。

メイ「…咲子さんもどんどん技を進化させてますね、流石です」

咲子「そつちこそ、私より先に”真”になったのに」

メイ「…努力の成果です。晴天飛梅！」 B L O O M !

メイは話を終え、梅の花びらを私に飛ばしてくる。

咲子「…フレئمダンス…」 グルグル…

メイ「…? (何もするつもりですか?)」

咲子「…と見せかけての炎天桜舞！」 B L O O M !

メイ「…つ!? ウィンドブラスト! …きやあッ!」 バタッ!

メイはとっさに対応しようとするが、遅すぎて技をくらい、場外となった。

咲子「…また私の勝ちね♪」

メイ「そうですね。でも…いつかは必ず勝ちます!」

咲子「そう。なら…かかってきなさい!」

…ライバルがいるのって、こんな感じなのね。

特訓の成果

side 桜木咲子

今は8月上旬、私とメイが天界に来て特訓を始めてから半月経った。

日花「…さて、ここでの特訓も今日で終わりだし…アンタたち2人对私で模擬戦をしない?」

咲子「…:私たち、死にませんよね?」

日花「言い方が悪かったわね。私の分身と戦うわ。パワーは…:そうね、出夢の倍ぐらいかしら?」

メイ「お兄さんの倍…:ですか」

咲子「つまり、2人で分身を倒せたら、がんばったら1人で出夢先輩を倒せるということですか!」

日花「まあ、そうなるわね。頑張りなさい」

2人「はい!」

―道場―

分身「……………」

分身「甘いわよ！ハアア…」ボオオオ…
分身は私がパンチを止めて一瞬だけ戸惑ったが、すぐにメイの斬撃を回避し、火を出
す。

分身「おりやあ！」ドゴツ！

メイ「ハッ！」キンッ！

そしてメイに殴りかかるがメイはしつかり刀で止める。

咲子「炎天桜舞改！」B L O O M！

私はやつと進化した炎天桜舞をお見舞いする。

分身「……私も！絶炎天桜舞！」B L O O M！

メイ「絶!?!……ぐうっ！」ドスッ

咲子「この威力は…ガッ！」ドゴツ

私とメイは両方ダメージを受けてしまう。つて、絶は強すぎる…

分身「その程度？まだ行けるでしょ？」

咲子「そう…ですネ！」

メイ「負け…ません！」

咲子「ハアアアアッ！フレームダンス！」ボオオオオ！

私は火を出し、纏いながら回転する。

咲子「先生、やりました！」

メイ「私は補助でしたけど頑張りました！」

日花「ええ、2人ともおめでとう。特訓はこれで終了だわ。帰る準備をしなさい」

2人「はい！」

―数分後―

有美「私はもうしばらくここで弟子たちを鍛えておくわ」

日花「……弟子が多くて大変ですね♪」

有美「ふっ、まあそうですね」

咲子「この場所で特訓させてくれてありがとうございます！」

メイ「お陰でかなり鍛えられました！」

有美「ふっ、出来たらいつでも来なさい」

日花「いつでも、ね……（私ならマジでするけどね）」

有美「日花には言っていないわよ」

日花「ギクツ……さ、さて帰りましょ」

有美「（逃げたわね……）それじゃあね」

2人「はい！さようなら！」

そして私たち3人は地界へ帰っていった。

帰宅して早々兄さんに質問責めにあつたのは別の話。

……寝てます。

side 桜木咲子

ー次の日ー

咲子「……zzz……」くかー

春樹「まだ寝てんのかよ」

私は今……寝ている。

咲子「……zzz……」（はよ出て行きなさいよ、兄さん）くかー

少なくともそのフリ。

春樹「……しやーない、寝かせておくか」ガチャツ。

よし、やっと出たわね。

咲子「もう10時半だけど、まだ眠いわね……」

昨日までの特訓でかなり疲れてるからね……昨日は1秒未満で寝たわよ。のび太レベルね。

咲子「……さて、寝y「ピンポン」……誰かしら？」

ま、どうせ兄さんが出るし、寝ようと……

ガチャツ。

メイ「咲子さーん♪まだ寝てるんですか？」

…思ったところでメイが入ってきた。来るの早くね？

咲子「Zzzz……」くかー

必殺、寝たふり！（どこが必殺だよ！）

さあ、はよ出て行け、メイ！

メイ「…寝てるんですね。じゃあ…ちよーつとだけイジワルしちゃいます♪」そーつ

…え、何する気？

メイ「えいつ」ダキツ！

むにゅっ。

メイは抱きついてきた。しかも私より少し大きめの胸を押し付けて。あ、安心して。

メイと私の胸は平均サイズだから。別に気にしてないし。

メイ「咲子さーん、早く起きて下さーい♪」むにゅむにゅ

メイは抱きしめる力を強くする。抱きしめられているのが男子だったら喜びそうな状

況ね。苦しい…

咲子「分かった分かった、ギブギブ。離して、苦しい」

メイ「あれ？起きてたんですか？全然気付きませんでしたよー♪」

咲子「…この隠れ変態が」

メイ「へ、変態!?俺のどこが変態なんですか!？」

咲子「さつき思いつきり胸を押し付けてきたじゃん…」

メイ「あ、あれはたまたまですよ…と、とにかく!俺は変態ではありません!」

咲子「はいはい、分かったから。で?何でこんなに早く来たの?」

メイ「…作戦会議をするためです」

咲子「作戦会議?何の?」

メイ「さとかに隊基地で待ち伏せしてみんなを驚かせる作戦です!」

咲子「へえ。まあ確かに帰ってきたことは誰にも言っていないわね…」

メイ「早速行きましょう♪」

咲子「でも、祐樹だけには言っていない?基地は祐樹の家の空き倉庫だし」

メイ「祐樹さんなら…まあ”バラさなければ”大丈夫ですよ」

咲子「…:ま、バラしたら文字通りぶっ潰しましょ♪」ゴゴゴ…

メイ「そうですね♪」ゴゴゴ…

一方、その頃…

祐樹「…:!?何だこの寒気は…」

無駄に勘のいい祐樹だったのである。

咲子「さて、早速行きましょっか」

メイ「あ、その前に」ゴソゴソ

咲子「？」

メイ「これ、あげます」スツ

メイが渡してきたのは：

何かしらの液体が入ったペットボトルだった。

咲子「何これ？」

メイ「梅ジュースです。梅のシロップを水で薄めたものです。甘くて美味しいですよ」
♪

咲子「…なるほどね。ありがと、受け取っておくわ」

テン、テレレレン、テンテンテン♪

咲子は、梅ジュースのボトルを手に入れた！（ポケモン風）

メイ「さて、行きましょっか」

咲子「そうね」

…どういう反応するかしら。

お前ら、人間辞めたん!?

side 桜木咲子

ーさとかに隊基地ー

朝飯食って着替えてからメイとここにダツシユできた。ちなみにそれを合計で20分で終わらせている私たちは少しづつ人間を辞めているのだろう。

メイ「誰か居ますかー?」

咲子「……どうやら祐樹は居なかったようね。さて、早く隠れましょ」

メイ「そうですね♪」

そして私たち2人はそれぞれ基地のどこかに隠れた。

ー118分43.93秒後ー↑細かつ!?

ギギギ…

翔「…お、俺たち今日1番乗りみたいだな」

絵奈「そうだね」

翔と絵奈が基地に入ってきた。

まだ隠れておく。

ーさっきの時間の0・36倍の時間後ー↑つまり6分44・6148秒（計算機使った）

祐樹「ちーっす」

ルマ「おはよう♪」

千早「おはよう」

千代「…おはよ」

今度は祐樹、ルマ、千早、千代が入ってきた。あとは松竹ペアね。メイも入れると松竹梅トリオになるわね、今考えると。

ーさっきの2・5倍の時間後ー↑つまり14分21・537秒（もういいわ!）

学「すまねえ、遅れた」

育也「しょうがないよ、昨日は夜中まで勉強してたんだし…」

そして最後に学と育也が来た。

……作戦開始!

咲子（炎天桜舞改!）

メイ（晴天飛梅改!）

BLOOM!

私たち2人は倉庫の奥の方で技を出す。

翔「火桜と風梅だど!」

ルメ「まさか…咲子とメイちゃん!」

2人「ふふふ…その通り!」

そして私たちは花びらの中で姿を現した。

咲子「私、桜木咲子と…」

メイ「俺、室見メイは…」

2人「ただ今、さとかに隊に帰ってきましたー!」

最後に私たちはバアアン!という効果音が出そうなセリフを言う。すると……

全員（もちろん咲子とメイ以外）「お……おとおつ!」

翔「やつと帰ってきたか、お前ら!」

絵奈「いきなり居なくなるからびっくりしたよ〜!」

祐樹「お前ら、天界に行ったんだってな!」

ルマ「なんか強そうな雰囲気出してるね♪」

千早「というか、メイの一人称、俺になってね!」

千代「……戻ったと思うわ」

学「さっきの登場シーン…カッコよかったぜ…!」

育也「随分派手に登場したね」

みんなそれぞれの反応を見せた。

咲子「みんな、久しぶり! いやー私とメイは超特訓したわよ!」

メイ「お陰で片手で車を止めるくらいのパワーがつかまりました!」

翔「わお、マジかよ…」

絵奈「すごいね〜」

祐樹「お前ら、人間辞めたん!?!」

咲子「安心して、日花先生みたいに辞めてないわよ」

メイ「やつとお兄さんとまともに戦えるぐらいの実力になった、と言ったところですかね?」

ルマ「ううう…:2位と3位の差が大きくなつていくよ…」

咲子「…:あ、そうだ! 私たち2人対みんなで戦ってみない?」

メイ「いい考えですね! 俺は賛成です!」

翔「…:それって…:舐めてんのか?」

咲子「んなわけないでしょ。実力を試したいだけよ♪」

翔「…:まあ、冗談だったからいいが」

そして私たちは、私とメイvsみんなの模擬戦をすることになった。

カオスなバトル①

side 桜木咲子

私たちは模擬戦をしに倉庫を出て今は公園にいる。いるのはいんだけど…

千早「さあやって参りました、咲子&メイvs翔、絵奈、祐樹、ルマ、学、育也！実況は俺七隈千早と…」

千代「七隈千代がお届けします…！」

咲子「…何故実況なんかしてんの？」

千早「…俺た兄妹は戦闘力皆無だ、察してくれ」

咲子「…お、おけ」

千早「スウウ…：それでは…バトルスタート！」カーン！

なんか調子狂うけど、いっちょやりますかね。

ルマ「ハアツ！骨鎧！」ポーン！

メイ「なるほど…硬そうですね」

千代「おーっと！ルマは早速骨で鎧をポーンとつけてきた！ダジャレが寒い！」

…なんか千代がキャラ崩壊してる気がする…。

実況は無視しておこう。

(千代と千早の出番はもうありません)

翔「先手必勝だぜ！冷突改！」パキン！

翔は氷を纏った

咲子「私にそれは通用しないわよ！フレイムダンス！」ボオオオ！

私は火を纏って踊り出し、翔の攻撃をかわす。

翔「チツ……学！」

学「おう！ストーンパンチ！」ズオオオ！

学は石でできた拳を私に当てようとするが……

メイ「そうはさせません！真鳴鳴斬り！」ズバア！

それをメイが真っ二つに斬る。そして緑の飛斬撃は学に命中する。

学「な……グハッ！」ズバツ！

千早「おおっ、学が大ダメージか!？」

咲子「サンキュー、メイ！チャージ完了！」ボオオオ……

翔「まさか、フレイムダンスはチャージ時間の短縮のためにやったのか……!？」

咲子「その通り！でももう遅いわよ！真爆熱スクリュー！」ドツゴオン！

翔「くそっ……エターナルブリザードV2……!」グググ……

翔は私が飛ばしてきた火の球に対し氷の球で反撃しようとするが…

翔「ぐっ…ぐわあっ！あちいつ！」ボオオオ！

威力は私が勝ち、翔は火傷する。

千代「咲子の攻撃が翔に炸裂ー！これは痛いぞー！」

絵奈「翔は下がってて〜！激流ストームG3！」バツシャア！

そんな翔を絵奈は後ろに下げ、絵奈は水でできたマジンと共に水の球を蹴り飛ばして
くる。

……今気付いたんだけど、技が進化してるわね？

育也「からの…！」ピリリ…

祐樹「サンダーショット改！」バチィツ！

それに加え育也と祐樹が雷の波動を飛ばしてきた。

ルマ「さらに…真ボーンラッシュ！」ボーン！

さらにルマが骨の弾幕を。……鬼畜すぎない？

千早「連続攻撃だ！咲子とメイはどう対応するのか!？」

咲子「メイ！アンタは育也と祐樹をやりなさい！私は絵奈とルマをやるわ！でも、その前に防衛よ！」

メイ「はい！ウインドブラスト改！」ビュウン！

咲子「真イジゲン・ザ・ハンド！」ギユルルルル!

メイは威力を相殺し、私は攻撃を受け流す。

千代「な、なんと！完全に相殺したー！」

ルマ「今の攻撃を……」

絵奈「完全に相殺した……？」

祐樹「嘘だろ!？」

育也「……手強いね」

咲子「フフフ……これはどうかしら？」ポツ

私は何個か小さな火の玉を出し、それを大きな火の玉で包むようにして凝縮する。

ルマ「……何、その球？」

咲子「ほいつ」ポイツ

絵奈「え、何これ？何する気？」

千早「咲子は不思議な火の球を出してきた。新技か？」

咲子「……チャカメカファイアー、スイツチON」パチン

私は指を鳴らす。すると……

ドガン!

絵奈「うわっ!？」ピユウウウ!

ルマ「この威力は…!?」バキーン!

絵奈は爆風で飛んでいき、ルマの骨鎧は碎けてしまう。

千代「おーっと、咲子の新技チャカメカファイアーに、絵奈とルマは引つかかってしまったー! 果たして無事なのか!?!」

絵奈「……………」チーン

ルマ「う、うう…」

千早「絵奈が倒れている! 貝塚絵奈、脱落だー!」

ルマ「さっきの爆発力……………やばいね…」

咲子「ドツキリ大成功♪」

さて、今度はどの攻撃をしようかな?

カオスなバトル②

side 桜木咲子

千早「さあ1人目の脱落者が出たぞ！この戦いは見逃せない！」
：目立ちたがりやの実況は無視するわ。

ルマ「今の爆発でボクの鎧が砕けちゃったよ…」

咲子「フフフ…ドツキリ大成功ね♪」ニコツ

ルマ「うわ…殴りたいその笑顔」

咲子「じゃあ殴ってきなさいよ？」

ルマ「ムウ…真ボーンラツシュ！」ボンツ！

ルマは若干イラつきながらも私に向かって骨を飛ばしてくる。

咲子「…ムゲン・ザ・ハンドG8！」ドババババーン！

それを私は132本の手で全て掴む。

ルマ「…前より手の数が増えるような…」

咲子「増えてるどころか倍になってるのよ。ハアツ！」バキツ！

そして掴んだ骨を全て砕く。

ルマ「また砕かれた…こりや倒すのに」骨が折れる」わね…」テテツチー！」

咲子「…アンタ、いつサ〇ズになったの？」

ルマ「いやー、同じ骨関連だし？」

咲子「理由になってないわよ…話はこちらまでにしましょう。真炎突！」ボオオオ！

ルマ「ボンガード改！」シュツ！

私はルマに向かって火を纏ったかかと落としを入れようとするが、それをルマが骨でガードする。

咲子「ぐっ…まだまだあ！うおおおお！」パキパキ…

ルマ「負けないよ！ハアアア！」ギギギ…

私は骨にヒビを入れたところで、ルマはヒビを修復してしまう。

咲子「なら…フレイムダンス！」グルグル…

ルマ「またあの技ね。させないわ！」ボツ…

ルマは火を出し…

ルマ「ヒートタイヤ！」グリーン！

火でタイヤみたいなものを作る。まさか…

ルマ「突進ー！」ドドドド！

案の定ルマはその中に入り私に向かって突撃してくる。

咲子「避けないと…あ、そうだ！」ピヨン

私は逆立ちのままジャンプした。そしてルマのヒートタイヤはそのまま私の下を通る。

ルマ「え？逆立ちのままかわした!？」

咲子「チャージ完了！真爆熱スクリュー！」ドツゴオン！

ルマ「……ギャフン！」ドゴオ！

ルマは私の火の球に当たり、そのまま気絶する。

千代「おおっ！ここの戦闘は咲子の勝利だー！」

千早「一方メイは苦戦しているようだぞー！」

メイ、今すぐ助けに行くわよ！

side 室見メイ

どうも、現在絶賛苦戦中の室見メイです。

俺は今、1対4で戦ってます。……明らかに不公平ですよね!？」

メイ「真鳴鳴斬り！」ズバア！

学「それは見切ったぜ！オラア！」ドゴツ

翔「…ハアッ！」パキン！

メイ「…くっ」

俺の攻撃は学さんと翔さんに防がれてしまいました。

祐樹「サンダーショット改！」ビリイッ！

育也「雷斬改！」ズバア！

そして、そこから祐樹さんと育也さんの挟み撃ち。……ここはこの技！

メイ「……真火斬り！」スパーン！

祐樹「…何っ!？」

育也「それ、火を切る専用じゃないんだね…」

メイ「…そうです。今度は俺からいきます！」ダッ！

俺は4人に向かって走って行きます。

…本気で行きます！

翔「来たか…冷突改！」カチン！

学「ストーンパンチイッ！」グオオオオオ！

メイ「…遅いです！」サッ！

翔「さつきより…」

学「スピードが上がってるだど…!？」

メイ「ハアアアア！絶鳴鳴斬りいい！」ズバアッ…！

俺は土壇場で技を進化させ、4人を斬りつけます。

翔「…グハッ！」

学「強…すぎだろ…」バタン

祐樹「絶…かよ…」バタン

育也「さすが…だね…」バタン

その内3人は倒れました。

翔「ハア…ハア…」

メイ「留めです！ウインドブー！参った！降参だ！」…え？」

翔「お前ら…強くなりすぎだろ…！」

咲子「いやーね？まさかメイが4人相手に勝つなんて思わなかったわよ？」

メイ「私も苦戦しましたけどね」

千早「…模擬戦終了ー！勝者は咲子とメイだー！」

千代「半月でこれほどの力をつけた2人！これはすごい試合だった！」

…最後まで目立ちたがりやな実況ね。

飛羽野きじお

side 桜木咲子

模擬戦の後、私たちは基地でメイと特訓について質問されていた。

翔「で、どんな特訓したんだ!」

咲子「……黙秘権を行使するわ」

絵奈「えーケチく、言つてよく」

メイ「実際に特訓してからのお楽しみですね」

祐樹「そうか…じゃあ、ビフォーアフターで、何倍強くなったんだ?」

咲子「……2倍」

祐樹「……What?」

メイ「何故英語になるんですか? 2倍ですよ、2倍」

祐樹「MJKY (マジかよ)!」

咲子「マジよ。冗談を言うんでも?」

ルマ「ボクたちはきじおさんに教えてもらったけど、強さは1.5倍だったよ……」

メイ「きじおさん? 誰ですか、それ?」

咲子「兄さんの友達よ。教えるのが上手いのよ」

メイ「なるほど…」

???「へえー、俺の事を褒めてもらえるのは嬉しいね」

咲子「はい、そうですねー……え？」クルツ

後ろから声があったので振り向くと、そこにはきじおさんがいた。

きじお「やあ諸君。失礼してるぞ」

全員「…いつから居たんですか!？」

きじお「あー、さっき」

全員「どうやって入って来たんですか!？」

きじお「能力で」

咲子「なるほど……」

きじおさんの能力は”短距離の瞬間移動”だ。本人曰く半径100m以内どこにも瞬間移動ができるとのこと。チート級の能力である。

メイ「貴方がきじおさんですか？」

きじお「その通りだ。俺は飛羽野きじお、よろしく」

メイ「俺は室見メイです、よろしくお願いします」コクツ

メイは自己紹介をし、おじぎをした。

きじお「ほうほう……なるほどね……」

咲子「？」

メイ（……バレた!?!）

きじお「いや、気のせいかな？まあいいや。…所で咲子、翔との模擬戦はどうだったんだい？」

メイ「ふう、良かった…俺と咲子さんとで完封しました」

きじお「おお…それは凄いね。天界で相当鍛えたんだろう…。翔、今日の特訓は無しにしておくよ。しっかり休んでね」

翔「あ、はい…」

……これがきじおさんが教えるのが上手い証拠だ。しっかり教えている人はの事を気にかけている。

きじお「さて、俺はそろそろ春樹の所に行くよ。それじゃあね♪」シユツ
そしてきじおさんは行ってしまった。

メイ「…なんか、親しみやすそうな人ですね」私「の事がバレそうになったけどね」
ルマ「そうなんだよ。きじおさんのお陰でボクらは強くなったんだよ！」

咲子「実際私とメイの方が断然強くなってるんだけどね」

ルマ「……天界だからしょうがない！それともう自慢しないで、ボクでも羨ましく

なっってしまうから！」

ボクでもって……顔からしてもう羨ましがってるわよ。

咲子「はいはい、特訓のことはもう辞めね。メイ、通信対戦しましよ」

メイ「はい、また勝ってあげます！（吹っ飛ばしてやるよ！）」

2人以外全員（切り替え早すぎる…）

室見○○○

side 室見メイ

―寮部屋―

ガチャツ

メイ「ただ今―」

俺は誰もいるはずのない部屋にそう言います。ま、いまs―

『お帰り♪』

メイ「……………え？」

今、声が出たような気が…気のせいですよ？

『気のせいじゃないわよ♪』

メイ「だ、誰ですか！どこに居るんですか?!?」

『アンタの中に居るのよ』

な、中、ですか…？

『そう、中。詳しくはアンタの夢の中で話すわ。じゃーね』

そして声はしなくなりました。

メイ「今のは何だったんでしょか……？」

……とりあえず忘れて夕食でも食べるとしますか。

『……………』

―数時間後―

メイ「さて、寝ますか……」

明日もいい一日になりますように……。

—————

「メイ、起きなさい！」

メイ「ん……んん？」

俺は自分に似たような声に起こされました。

メイ「ここは……夢……ですか？」

目が覚めたのは真っ白な空間でした。

「そう、気付くのが早かったわね」

私は目の前にいる少女に気付きます。

桃髪で、橙色の目、そして青いパーカー……目の色とパーカーの色以外私と瓜二つの姿

でした。

「ふふっ、同じ人なんだから、そりゃ似てるわよ」

メイ「同じ人？貴女は…誰ですか？」

ナオ「私は室見ナオ。アンタの別人格よ」

別人格…？つまり…

メイ「え…私って、二重人格だったんですか!？」

衝撃の事実です。

ナオ「ま、二重人格といっても、そうなったのはつい最近だからね♪」

メイ「…いつこうなっただんですか？」

ナオ「そうね…咲子と連携技を作ろうとした時、覚えてるでしょ？」

メイ「はい、陽天梅桜を編み出した時ですか？」

ナオ「そうそう♪その時、咲子のエネルギーとアンタのエネルギーが混ざったでしょ？その時偶々混ざったエネルギーの一部がアンタの魂に入り変異して、私という人格が生まれたってワケ」

メイ「は、はあ…」

ナオ「それとね、性格9割メイ1割咲子みたいな感じかな？だからメイの特技はほぼできるよ」

メイ「じゃあ、一人称が俺ではなく私だったり敬語で話さなかったりするのには咲子さんの部分ですか？」

ナオ「そうなるわね。でも、私とアンタではつきり違うのは…」

メイ「違うのは？」

ナオ「属性よ」

メイ「…え？」

ナオ「アンタは梅属性、私は桜属性なのよ」

メイ「…What？」

ナオ「英語で反応しても無駄よ。事実だから」

メイ「つ、つまり…俺は一人で陽天梅桜が使えるようになったんですか!？」

ナオ「それはできないわ。エネルギーの割合の問題で」

メイ「そ、そうですか…。人格の交換ってできますか？」

ナオ「できるけど、余程のことがない限りするつもりは無いわね。あと、私のことは誰にも話さないでくれる？話す時がくるまで」

メイ「…分かりました、話しませんよ。これからよろしくお願いします、ナオ」
どうせ同じ人ですし、呼び捨てでいいでしょう。

ナオ「ふふつ、こちらこそよろしくね、メイ」

ガシッ!

そして俺、室見メイにナオという人格が増えたのでした。

ナオと色々やってみた。

side 室見メイ

ー次の日ー

チュンチュン……

メイ「……うーん……」ムクツ

俺は目を覚まし、起き上がります。

メイ「昨日の夢……本当ですよね？ナオ、いるなら返事して下さい」

そして数秒待ちました。すると……

ナオ「おはよ、メイ♪」

……今どこから声がしたんですかね？そう思っていると、突然視界が暗くなりま
した。

ナオ「だーれだ！」

メイ「え……ナオ、ですよね？」

ナオ「正解！こっち向いて！」

メイ「あ、はい」クルツ

プスッ。

振り向いた瞬間頬に指が当たりました。

ナオ「ははっ、引っかかったわね〜♪」

ナオは笑いながらそう言います。……って、

メイ「なんでここに居るんですか!？」

ナオ「何でって…分身したからよ」

メイ「…分身？」

ナオ「そう。多重人格者が分身すると、人格が1つその分身に入るのよ」

メイ「いつのまに俺は分身なんて覚えたんですか？」

ナオ「…私が勝手にやったのよ。主導権を一時的に乗っ取ってエネルギーをコントロールし、分身したのよ」

メイ「なるほど…分身ってそういう仕組みだったんですね…」

メイとナオは分身を覚えた!

と、俺は心の中で言います。

ナオ「ところでさ、そろそろ起きて朝飯食べない? 食べる時は戻っておくからさ」

メイ「あ、そうですね。朝食をとってきます」

ナオ「オーケー、そんじゃ、またね♪」ポワン

そしてナオの分身は消えました。

ナオ『レッツゴー♪』

……明るい人ですね。

今日は……鮭のバター焼きでも作りますか。材料もありますし。

――1. 5時間後――

朝食を食べ終わった後、分身しナオと食器洗いしました。2人でやるので効率が上がりましたね。

ナオ「さて、これから何する？」

メイ「そうですね……2人ですし、通信対戦でもしましょう」サツ

ナオ「……実質1人だけどね」

メイ「人格が2人なんだから問題ありません！」

ナオ「はあ……ま、やるけどね」

しばらく俺たちはスマ○ラで対戦をしました。

結果は……俺の圧勝ですね。

ナオ「うう……まだ生まれたばかりだから経験が足りなかつた……」

メイ「大丈夫ですよ。経験はこれから重ねればいいですから。それよりも、そろそろさとかに隊の集合時間ですね。どうします？」

ナオ「私はこのまま留守番しておくわ。何かあったら混乱を招くし」

メイ「じゃあそうしましょうか。…ただし、俺以外の誰かが来ても応答しないで下さいよ？口調や性格が若干違いますし」

ナオ「分かったわ。安心して行ってらっしゃい」

メイ「はい、行ってきます♪」ガチャツ

…これからの生活が楽しみですね♪

ナオ「……………イナイレやろつと」

まずはイナイレの経験を積むナオであった。

海へ行こう

side 桜木咲子

ザッパーン…

私たちは今日、海に来ている。

翔「おら！くらえ！」バシヤッ

祐樹「うわっ！やったな、このっ！」バシヤッ

学「隙ありっ！おらあ！」バシヤッ

育也「うわっ！」ドボーン

3人「ハハハ、やりやがった！」ゲラゲラ

育也「あはは…負けちやった…」

男子4人は水のかげあいをしていて、

ルマ「えつと…こうかな？」シユツ

絵奈「そうそう、その角度で…」

ルマと絵奈は骨のテントを作っており、

メイ「うおおおおお！」バシヤバシヤ

咲子「うおおおおお！」バシャバシャ

私とメイは海の上でランニングをしている。どうやって浮いてるのかって?…エネルギーコントロールよ。

翔「…あいつら、すげーな」

祐樹「俺たちも辛うじて立てるぐらいなのにな…」

学「マジでどんな特訓したんだ？」

育也「…俺たちも頑張らないとね」

ちなみに、七隈兄妹は今日情報集めの為基地にいるらしい。そこまでやってくれるなんてありがたいわね。あとでなんか奢ろう。

―数分後―

咲子「ハア…ハア…」

メイ「いい運動に…になりましたね…」

咲子「メイ、いまから塩作らない？」

メイ「え、どうやってですか？」

咲子「こうよ。まずは海水をこの金属のバケツにいれて…」ガポツ

メイ「フムフム…」

咲子「次に、私が両手に火をつける」ポツ

メイ「なるほど……」

咲子「そして、熱で水を蒸発させる！」シユウウウ……！

メイ「おお！」

咲子「この水は綺麗だから、ほら、塩が出てきたわよ」

メイ「すごいです！俺も出来るように頑張ります！『まあ、やるのは私だけどね』（それもそうですね……）」

咲子「？……ま、この塩は海に戻して……と。昼飯食べましょ！」

メイ「はい、そうしましょっか！」

ルマ「あ、ちょうどバーベキューの準備も出来たよ！」

絵奈「みんなを呼んできてく！」

2人「了解！」ダダダ

そしてみんなを呼んできました。

―数分後―

翔「パクツ……うんめえー！」

祐樹「この肉は最高だぜ！」

学「この焼きとうもろこしもイケるぞ！」

育也「どれどれ……！確かに！」

咲子「メイ、アンタの好きな食べ物ってなんなの？」

メイ「そうですね…この中だったら普通に肉ですかね？それとも食べ物の中ですか？」

咲子「そうだけど、なんなの？」

メイ「うーん…逆日の丸弁当ですかね？」

咲子「え、なにそれ？」

メイ「日の丸弁当の梅干しとご飯を逆にしたものです。つまり、大量の梅干しの中に少量のご飯があります。酸っぱいですけど案外美味しいですよ？」

…さらつとんでもないこと言ってたわね。

咲子「え、ええ…機会があつたら食べてみるわ」

メイ「はい♪」ニコッ

そしてこの笑顔。眩しい…

ルマ「おい、みんなー！スイカ割り、やらない？」サツ

ルマはどこからともなくスイカを出し、骨のバットを作りながらそう言う。

翔「おう、俺が割るぜ！」

祐樹「お、俺も俺も！」

学「俺もだ！」

育也「…じゃあ、俺も、かな？」

3人「どうぞ」サツ

咲子「あ、あのネタね…」

絵奈「じゃあ育也に決定だね。はい、目隠し」

育也「うん…うわ、この状態でちゃんと当たるかな？」

育也は目隠しをして不安そうに言う。

翔「大丈夫だ！俺たちがちゃんと場所を言う！」

育也「うん、頼んだよ！」

そしてスイカ割りが始まった。

結果はクリーンヒットで、叩いた時スイカが綺麗に八等分された。切れ目もなかったのにどうやって？

そして、そのあとスイカを食べ、海でまた遊び、その後帰った。今日は楽しい一日だった。

シンガツソー!①

side 羽犬塚ルマ

海で遊んだ数日後、ボクは寮でゴロゴロしていた。

ルマ「…そういえば、今日って夏祭りだっけ？」

ボクは溜まってたチラシを見ながら言う。

ルマ「さとかに隊のみんなも呼んでワイワイする…いい考えだね!早速連絡!」ピポ
パ

ボクはスマホを取り出し、グループチャットを開く。

ルマ「今日の夏祭り一緒に行く人ー!」っと」ポチポチ

メールをしてから数分待ち、またチエツクすると、すでに返信が来ていた。

咲子『私は行くー!』

メイ『俺も行きます!』

翔『そういえば今日だったな。俺は行くぜ!』

絵奈『私も行くよー!』

千早『夏祭りの屋台の…』

千代『とつておきの情報を教えるわ!』

学『あ、俺とある用事で無理だ、すまん』

育也『俺も用事があるんだ、ごめんね』

2人用事で行けなかった人もいるけど、ほとんど来れるみたい。そして…

祐樹『夏祭りに行く行くー!』

…ボクが気になつてる人が返信してきた。

祐樹はバカで足が速くて遅刻魔でちよつとエツチだけど、なんだかんだで性格が良
い。近くにいたら何故か顔が熱くなる。なんでだろう?調べてみよう…

ルマ「……………ふえ!?そ、そんな。ボク…

祐樹に恋してるの!？」

…そういえば、祐樹が胸をじーつと見てた時、そんなに気持ち悪い感じがしなかった。まさかもうその時からだったのかな…？

ルマ「ど、どどどどうしよう！今祐樹を見たら顔赤くなっちゃう！ううう〜！」ジタバタ

ボクはベットで悶えまくる。ホントにどうしよう…

ルマ「…と、とにかく、赤くならないようにしないと…！」

―そして数時間後―

ボクは白い浴衣を着て集合場所に行く。

咲子「あ、ルマ！綺麗ね！」

赤い桜の浴衣を着た咲子が褒めてくれる。

ルマ「あ、ありがと。咲子も綺麗だよ！」

咲子「ありがと♪」

メイ「これで全員ですかね？」

翔「いや、いつものやつがまだだ」

絵奈「ま、祐樹の事だしね〜」

千早「でも、集合時間はまだだ」

千代「もうちよつと待ってあげよつか」

ー集合時間ちようどー

(一瞬もズレがないジャストタイミング)

祐樹「おーい！来たぜー！」

ルマ「……／／／」

あ、ダメダメ、赤くなっちゃう！こうなったら！

ルマ「さ、さあ、祐樹も来たし、レッツゴー！」

全員「おお！」

ふう、なんとか誤魔化せた。

ー夏祭りー

咲子「どこから行く？」

メイ「あつちの射的から行きましようよ！」

咲子「いいねー、勝負よ！」

メイ「はい！」ダダダ

咲子とメイちゃんは早速射的の屋台に走っていった。

翔「お、あつちに綿飴がある！買ってくぜー」タタッ

翔も綿飴の屋台に走っていった。

それから次々とメンバーが離れていき…

祐樹「後は俺たち2人か…」

ルマ「そ、そうだね…」

ボクと祐樹の2人だけになった。

…なにこの典型的なラブコメ展開!?

シンガツソ―! ②

side 羽犬塚ルマ

祐樹「……………」

ルマ「……………」

今ボクと祐樹の2人しかない。どうしよう…好きな人のとなりにいるんだよ!?! 照れないわけないじゃん!

ルマ「……//」

祐樹「なあルマ、あそこの紐くじ引きに行かぬ? 俺たちだけまだどこにも行ってないし」

ルマ「う、うん…」

とりあえず祐樹の提案に乗った。…バレてないよね?

祐樹(なんか今日のルマいつもより可愛いな…)

※バレてます。

学「いらっしやい!…お、お前らか」

何故か学が屋台にいた。

祐樹「用事ってこれのことか？」

学「ああ、親の手伝いでここにいるんだ。くじの景品はちゃんとあるぜ」

祐樹「よし！ルマも引くか？」

ルマ「あ、いや…ボクは遠慮しておくよ」

祐樹「そっか。ほい、500円」

学「まいど。一本引いていいぞ」

祐樹はしばらく考え…

祐樹「よし…キミに決めた！」

一本引いた。すると…

学「青か。景品はこれだな」サツ

学は紐の色を見て景品を出す。

祐樹「うーん…ルマ、欲しいものあるか？」

ルマ「え!?ボ、ボク!?えっと…じゃあ…」

これ、かな?

ボクは赤い犬の髪留めを取る。

祐樹「じゃ、それやるよ」

ルマ「い、いいの?その…当てたのボクじゃないし…」

祐樹「ああ、これぐらい安いもんだ。受け取ってくれ」

ルマ「う、うん…ありがとう…／＼／＼」カアアア

学「景品は決まったようだな。そんじやあな（こいつらを見てると砂糖吐きそうになつてきたぜ）」

祐樹「おう、またな」

ボクたちは屋台から一旦離れる。

ルマ「ねえ、祐樹、その…」

祐樹「なんだ？」

ルマ「髪留め、付けてくれない、かな…／＼／＼」

祐樹「おう、いいぜ。…：…：こうか？」スツ

祐樹は髪留めを付け、鏡でボクの顔を見せてくる。

※祐樹は鏡で雷を反射させ攻撃することがある。だから持ってた。髪留めはボクの銀髪によく似合っていた。

ルマ「似合う…：かな？」

祐樹「よく似合ってるぜ」

ルマ「ありがとう…／＼／＼」テレテレ

祐樹（照れるルマなんて初めて見たな…可愛いな）」

え、か、可愛い!?

ルマ「ボ、ボクが、可愛い…／＼」プシユー

メイちゃんが可愛いって言われている時ってこんな感じなんだ。しかも好きな人から言われているし…ううう／＼／

祐樹「あ、声に出てたか? すまん、本当のことだ」

ルマ「ほ、本当のこと…なんだね／＼」カアアア

祐樹「あ、ああ…(やべ…こいつのこと好きだからそんな顔されるとつい告白して振られてしまうじゃねーか! 振られるのかよ…って、そんなこと言ってる場合じゃねえ! 作戦を続ける!)…なあルマ、もうすぐ花火だからどこかに座らないか?」

ルマ「う、うん…」

そしてボクたちは移動した。

シンガツソ―！③

side 桜木咲子

……………。

咲子「……………」じー

メイ「…甘いですね」じー

翔「宮若宮コンビより甘いぞこりゃ」

絵奈「ルマが照れてるね」

千早「これ絶対アレだよな？」

千代「…いい情報GET！」

私たちはルマと祐樹を近くで見守っている。一応邪魔するつもりはない。

咲子「そろそろ花火の時間ね」

メイ「俺たちは2人から離れて見ましようか」

翔「…なあ、いい考えがあるんだが」

絵奈「なになにく？」

翔「千早、あいつらをつけてくれ」

千早「了解」スツ：

千早は監視の目玉を一個2人に飛ばした。

翔「これでオーケーだ。甘々なシーンをあいつらに見せて悶えさせてやろうぜ」

千代「：情報も手に入るし、一石二鳥ね」

咲子「フフフ：今回は私たち全員共犯者ね。オーケー？」

全員「オーケー！」

よし。：さて、花火見に行こうつと♪

side羽犬塚ルマ

ルマ「ここら辺かな？」

祐樹「おう、シート敷くぞー」スツ

あ、ちゃんと準備してんだ。

ルマ「ありがと」

祐樹「偶々もってただけだ、気にするな」

ルマ（なにその言い方：カッコいい／／／）カアアア

祐樹「どうした？顔真っ赤だぞ？熱か？」ピトツ

祐樹は手をボクのおでこにつけてきた!?

や、やめて！それ以上したら：

ルマ「だ、大丈夫だよ……／＼／＼」プシュー……
恥ずか死んでしまうよお／＼／

祐樹「ならいいが……（うわあ、今のはやばかった。恥ずかしいぜ／＼／）」カアアア
……あれ？祐樹も若干顔が赤い？まさか……

ボクホントに熱があつて移つちやつたのかな!?

（どうしてそうなる!?!）

ルマ「祐樹……大丈夫?」

祐樹「ん?あ、おう……大丈夫だ」

祐樹の顔は元に戻つてた。気のせいかな?

（気のせいではありません）

『花火打ち上げまで10……9……』

ルマ「あ、始まるよ!」

祐樹「おう」

『8……7……6……5……4……3……2……1……打ち上げ!』

次の瞬間。

ヒュウウウ……ドツカアアン!

赤い、大きくて綺麗な花火が空に打ち上げられた。

そして次々と花火が打ち上げられる。まるで花火の花畑だ。

ルマ「綺麗だね……」

祐樹「そうだな……」

ルマ「……………(告白、しようかな?)」

祐樹「(…今だ!) なあルマ、俺の気持ちを聞いてくれ」

ルマ「?なに?」

祐樹「ルマ……」

貴女の事が好きです。付き合ってください!」

………！

両思いだった……！

すごく嬉しい……！

ルマ「……祐樹、ボクの気持ちも聞いてくれる？」

祐樹「お、おう……」

ルマ「ボク……羽犬塚ルマは……」

貴方の事が好きです。付き合ってください！
ボクも気持ちを伝える。

祐樹「ルマ……」

ルマ「祐樹……んっ！」

祐樹「んむっ!？」

ボクは祐樹に抱きつき……

唇を奪った。

つまりキスした。

何時間にも感じた数秒間のキスのあと、ボクはそつと唇を離した。

ルマ「ふふっ…祐樹、よろしくね♪」
祐樹「…ああ、こちらこそよろしく」
そして再びキスをした。

……付き合い始めて1日目だぞ?まだ。

side 戸畑祐樹

チyunチyun……

祐樹「う、うーん……」

俺は目を覚ました。確か、夏祭りのあとみんなでカラオケでシンガツソ〜して、途中で眠くなつて……誰かが家まで連れてきたのか?

祐樹「……いや、違うな。……おい、まさか……」

しかし、目を覚ました所は自宅ではなく、昨日彼女になったルマの寮部屋だった。何回か来たことがあるため直ぐに気付いた。

……って、なんで俺ここにいんの!?!とつとと起きねーと!そう思つて起きようとしたその時……

むにゅっ。

2つの柔らかいものが背中に当たった。

祐樹「おいこれまさか……」サツ

そつと掛け布団を取ると……

ルマ「祐樹……ムニヤムニヤ……」スヤスヤ

ルマが気持ちよさそうな寝顔で寝ていた。そして、背中に当たっていたのはもちろんルマのそこそこ大きめの胸だ。

祐樹「Oh……my……god……」

俺の背中に当たって少し凹んでいる胸を今すぐ揉みたい！だが、俺は紳士だからそんなことはしない。……許可を貰わないとな！（そういうことじゃないだろ！）

祐樹「起こさないように……と」スツ

ルマ「Zzzz……」スヤスヤ

祐樹「ふう……ん？」

ベットから起き上がると、ルマの机に何かが書かれた紙が置いてあるのに気付いた。

祐樹「どれどれ……」祐樹がここで寝るのはすでに咲子が連絡してるから大丈夫だよ！

あと、ボクが起きたら思いっきり甘えさせて貰うから、覚悟してね、ボクの彼氏さん！

「ルマより……ナイスプレーだ咲子。さて、彼女の為にも朝飯を作つてやろうかな？」
ゴソゴソ

ルマの好きな食べ物は確か……あれだな。お、材料はあるみたいだ。俺は早速料理に取り掛かった。

―約30分後―

ルマ「んう……祐樹?」

祐樹「おはよう、ルマ。ちようど朝飯もできたぜ」

ルマ「…え、作ってくれたの!」

祐樹「ああ、しかもお前が好きなのフレレンチトーストだ」

ルマ「わあ…ありがと、祐樹!」ダキッ!

ルマは喜び、抱きついてくる。

そして再び、むにゅっ。

祐樹「あ、ああ、どういたしまして……当たってるぞ…」

ルマ「えへへ…当たてるのよ、嬉しいでしょ?」

祐樹「確信犯か…まあ、嬉しくないわけでもないが…」

ルマ「でしょ?ま、今はこれぐらいにしておくよ。とりあえず顔洗ってくるね」タ

ッ…

………柔らかかった。(何がかはもう知ってるよね?)

その後俺とルマは仲良くフレレンチトーストを食べた。何回かあーんもしたことも

言っておこう。

そして現在…

祐樹「……こうか?」ナデナデ

ルマ「うん、そう……えへへ……」ホワー

ルマが俺に膝枕し、ルマの頭を俺が撫でているところだ。女子の髪ってサラサラして
るな……

ルマ「ねえ、祐樹」

祐樹「ん？なんだ？」

ルマ「……一緒に連携技とか作ってみない？」

祐樹「連携技か……確かにいいかもな。あいつらをビックリさせようぜ！」

ルマ「うん！頑張ろうね！」ニコッ

その笑顔、癒される……」ナデナデ

ルマ「……えへへ／／」カアアア

……多分今の声に出てたな。ま、いいか、事実だし」

ルマ「……もう、そんなに褒めないでよ！大好き！」ギョッ！

祐樹「怒ってるのか喜んでるのか分からないんだが……」

ルマ「……ちよつと腕の力抜いて？」

祐樹「ん？おう」スッ

言われた通りに腕の力を抜く。

ルマ「……」ガシッ

それをルマが掴む。何する気だ?

祐樹「……お、おい、ルマ?」

ルマ「……………」そーっ

ルマは俺の手を胸の前まで持っていていき…

ルマ「……………」あっ／／／むにゅっ。

…強制的に(本当かな?)胸を揉まされた。

祐樹「な、ななな何してるんだお前!」

そしてルマは爆弾を落としてきた。

ルマ「祐樹…おっぱい大好きなんですよ?好きに揉んでいいよ?／／／」

な、何言っちゃってんのこの娘!?

祐樹「いやいやいやお前の気遣いは嬉しいが無理しなくていいんだぞ?」

ルマ「だって…その…祐樹を喜ばせるのってこれぐらいしか思いつかないから…／／

／カアアア

…なんだ、そういうことか。

祐樹「…ルマ、こっち向け」

ルマ「え?……………んむっ!」

祐樹「んっ……………」チュッ

俺はルマをこっちに向かせ、唇を奪う。数秒間キスした後、唇をそつと離す。

ルマ「ん…祐樹、大好きだよ…」

祐樹「俺もだ、ルマ。…デートでもするか？」

ルマ「…うん！」

そして俺たちは外に出かけた。後々聞いた話によると俺たちの雰囲気は甘々だったらしい。

1年2学期

波乱の二学期、スタート!

side 桜木咲子

祐樹とルマがくつつついて数日後、夏休みも終わり二学期が始まった。

正直言つて祐樹のルマが付き合う事になるのは若干早いと思つた。2人の行動力に賞賛する。

まあ、かといつて甘々な雰囲気を出しすぎるのは遠慮して欲しいけど。

祐樹がなんか(性格が)イケメンになつてるし、ルマが(祐樹に対して)デレツデレになつてるし……うっ……

ゲホツ(砂糖吐く音)

ゴクゴク……(ブラツクコーヒーを飲む音)

咲子「ぷはあ……翔ありがと」

翔「どういたしまして。……(雰囲気)マジで甘いな」

絵奈「そうだね」

千早「クラスメイトたちが”リア充爆発しろ”とか言つてるぞ」

千代「まあ、そりゃあ、ね……」

咲子「リア充爆発しろとまでは言わないけど、流石に二学期初日からこんな雰囲気だと、どうしてもブラックコーヒーを一気飲みしてしまうわね……それも何度も」

翔「……その時は流石に自腹で買えよ」

咲子「もちろんそうするつもりよ。……そろそろ授業始まるし席に着こつか」

絵奈「そうだね〜」ガタン。

ガラガラ……

ドアが開けられ、このクラスの担任で私の師匠、日花先生が入って来る。

日花「みんな席に着いてるわね？……よし、出席とるわよー」

そしていつも通りの時間が始まる。

ー数時間後ー

……ふう、やつと帰りの会ね。

日花「明日は特別バトルデーよ。他の学年の生徒にバトルを申し込むことができるわ。やりたい人は相手に申し込むように」

特別バトルデーか。待ち遠しかったわね。

やつとメイの兄、出夢先輩と戦える！そのために私は技をさらに鍛え、強化版まで作った！

咲子（くうくつ、楽しみね!）

日花「今日の授業はここまで。そんじやさようなら!」

「さようならー」

ガタガタ:

翔「咲子、やっぱり出夢先輩に挑むんだろ? 顔に出てたぜ」

咲子「ええ、そのために特訓してたようなものよ」

絵奈「出夢先輩のパワーってどれぐらいなんだろうね」

メイ「俺または咲子さんの1.5倍ぐらいのパワーですよ」

…メイがいつのまにか会話に入ってた。

咲子「…つまり、90万ぐらい?」

メイ「そうなりますね。俺もお兄さんに挑むつもりでしたが、今回はお義姉さん（予定、ほぼ確定）の藤崎花さんに挑みます」

咲子「へえ…お互いがんばろ、メイ!」スツ

メイ「はい!」パァン!

ビシ、バシ、グッ、グッ!

（ジョジョ3部でポル○レフと花○院がやってたハンドシグナル）

千早「そのネタ、知ってたのかよ…」

咲子「最近アニメを観たからね」

千代「なるほど…出夢先輩の能力とか覚えてる？」

咲子「ええ、重力を操る能力でしょ？」

メイ「そうですね。それと、お兄さんは能力メインで戦います。つまりどういうことか分かりますよね？」

咲子「…解除できる！」

翔「なるほど、つまり咲子は出夢先輩と（戦う）相性が良いということか」

メイ「ただ、お兄さんはちゃんと風属性の攻撃もしてくるので気をつけて下さい」

咲子「…分かった、気をつけるわ」

明日のバトル、楽しみね…！

3代目対3年1位①

side 桜木咲子

―次の日―

昨日出夢先輩にバトルを申し込み、その後メイと今日に響かない程度の猛特訓をした。

メイ「咲子さん、お互い頑張りましたよ！」

咲子「ええ、私たちの全力を学校中に知らしめてやりましょう！」

メイ「はい！」

そして、私たちは別れ、それぞれバトルの準備をした。

―数分後―

『さあ、やってまいりました！1学期1回のイベント、特別バトルデー！授業は俺、七隈千早とー』

『ー七隈千代が致しますー！』

ワアアアアアア！

……どうやってそうなったの？

後で質問せめね。

『初戦は3年と1年の1位同士の対決!』

『今回のバトルデーで注目のバトルの1つです! それでは、選手入場です! まずは、1年の1位で3代目桜の桜木咲子選手!』

咲子「さて、私の出番ね」ザッ

私は控え室から出て、威圧を全く出さずに入場した。

「へえ、あれが3代目桜か」

「室見にぶっ潰されねーか楽しみだな」

「どこまで食らいついていけるんだろうな」

観客にとって私はあまり良い印象ではないようだ。

そして、反対側からは…

『そして、3年の1位で重力魔の異名を持つ、室見出夢選手!』

出夢「……………」スタスタ

ワアアアアアア!

「出たぜ! 重力魔だ!」

「調子に乗った1年をぶっ潰せ!」

「いーずーむ! いーずーむ!」

出夢先輩がすごい歓声と共に歩いてきた。

『さあ、両選手入場しました!』

『3……2……1……バトルスタートオ!』カーン!

千代のアナウンスと共にバトルが始まる。

出夢「……………」ギユウウン……!

咲子「…………ハッ!」ギユウウン……!

そしてお互いに威圧をぶつ放す。

「ぐおお、すげー威圧だぜ……」

「あの1年も平然としてやがる……」

出夢「……こつちから行かせてもらうよ!ハアッ!」ドッ!

出夢先輩は手に能力を纏い突っ込んできた。…大丈夫ね。

スッ……

私はそつと手を片手だけ出す。

出夢「……………」

「なんだ、アイツ?」

「片手だけで止められるというのかよ?」

そして……

ドツガアアアン!

出夢「…ほう、止められたね」

咲子「…余裕ですよ」

私は片手で先輩の拳を止めていた。後ろでマジンが手を出して止めながら。

咲子「マジン・ザ・ハンド改!」グオオ!

出夢「フツ!」シユツ

咲子「せいっ!」ガシツ!

先輩は隙をついたと思いい私をもう片手で殴ろうとするが私が”頭で”止める。

出夢「なっ!?!」

咲子「かーらーのー?真炎天桜舞!」B L O O M!

そして空いた片手で攻撃を先輩にぶち込む。

出夢「ぐわっ!」ドゴオ!

先輩はそれをもろにくらい、地面にめり込む。

「あの1年、室見にあれだけ攻撃を叩き込んでやがる…」

「いやいや、多分アイツが本気出してないだけだろ、すぐ終わるさ…」

カッ!

「……………ッ!」

私は威圧で観客を黙らせた。観てなさい。

出夢「いやー、すごいパワーだね。僕もそろそろ…」

先輩は間を置くと…

出夢「全力を出させてもらおうかな…！」

そういった。その刹那…

ギョオオオオオオオオオオ…！

とてつもない重力が辺りを襲う。もつとも、私には無意味だが。

出夢「…何故効いてないんだい？」

咲子「あいにく、そんな能力なんですよ」

出夢「へえ…なら、これはどうかな？絶重力球！」ドツ！

絶!?相当強化されてるわね。

咲子「解除火桜改！」シュツ…

出夢「…流石にそれは驚いたよ」

咲子「そう言われて嬉しいです。フレイムダンス改！」ぐるぐる…

出夢「何をするか分からないけど、そうはさせないよ！上向き！」テテテツ！

先輩がそう告げた瞬間、私は天井に向かって”落ちていった”。

咲子「解除火桜改！」シュツ…スタツ。

咲子「や……やった……！」

3代目対3年1位②

side 桜木咲子

私が編み出した爆熱スクリューの強化版、ブレイズスクリューは出夢先輩の鳩尾辺りにクリーンヒットした。その結果、彼は地面にクレーターを作り、大ダメージを受けた。

出夢「ぐっ…すごい技だね…」ヨロツ…

咲子「まだまだいきますよ！」

出夢「フツ、そうかい…じゃあ僕は全力で行くよ！絶風斬！」ズバアツ！

先輩はメイも使う風の飛斬撃をいくつか飛ばしてくる。

咲子「真イジゲン・ザ・ハンド！」ギョルルルル！

私はドーム状のエネルギーの壁で攻撃を受け流す。

出夢「どうやら属性攻撃は解除できないみたいだね」

咲子「もうバレましたか。そうです、私の能力は相手の能力を解除し、相手に直接接触した場合さらに一時的に使えなくするという能力です。能力メインで戦う出夢先輩相手にはもってこいの能力です」

出夢「うん、確かにそうだね。属性の弾幕攻撃するのまで対策されてるし…」スッ

先輩は両手で構えをとる。…来るわね。

咲子「…マジン・ザ…」ギユウウン…

出夢「近接攻撃で倒すしかない、ねっ！」ドゴツ！

咲子「…ハンド改！」ガシッ！

先輩はストレートを入れてきたが、マジンの手で受け止める。

咲子「わざわざ私の得意分野をさせてくれるのはありがたいですね！絶炎突！」ドツ

…

出夢「…フンツ！」ガシッ

先輩に足を掴まれた。

咲子「え」

出夢「オラア！」ドゴツ！

そして地面に叩きつけられた。

咲子「ぐっ…！」

出夢「とうっ！」シユツ

咲子「ハッ！」

先輩はさらに蹴りを入れようとしたが紙一重でかわす。

咲子「真炎天桜舞！」B L O O M！

出夢「っ……効かないねえ！」ズドツ！

先輩は至近距離からの攻撃をなんとか耐え、私の鳩尾に1発入れてきた。

咲子「……ガハッ！」

「やっちまえー！」

「とどめをさせー！」

そして観客は歓声を上げる。

……。

うるさい……

咲子『黙れ……!』カッ

グオオオオオオオ!

出夢「っ、この威圧は……!」

咲子「……ッラア!」ドガッ!

私はとっさに先輩を殴る。

出夢「……がっ!」

咲子「せいっ!」ギユン!

次にアツパーで上に飛ばす。

出夢「ぐっ……!」ピユウウウ……

咲子「絶炎突!」ドゴオ!

出夢「ぐふっ!」ドガアン!

そして空中でかかと落としを入れ……

咲子「ブレイズスクリュー!」グワアンッ!

ブレイズスクリューでトドメを刺す。

出夢「が……はっ……」バタン

先輩は連続攻撃に耐えられず、ついに倒れる。

『………!試合終了!勝者、桜木咲子!』カンカンカン!

『な、なんとー！負けたことがほとんどない圧倒的な実力を持つ出夢選手を倒したー！これはすごいぞー！』

『そしてさっきの強力な威圧は、人によっては気絶するレベルの強さです。それほどの実力を持った選手でした』

ワアアアアアア！

「おい、あの1年、室見を倒しやがったぞー！」

「信じられねえ！夢でも見てんのか、俺!?!」

「それとあの威圧、霸王色か何かかよ!?!」

…最後の観客のセリフは突っ込む所があるけど、私にそんな体力はない。

咲子「やった…わ…ね…」 バタン

私は疲れ切り、そのまま倒れて眠りについた。

斬士対毒花①

side 室見メイ

咲子さんとお兄さんが保健室に運ばれた後、俺と（未来の）お義姉さんこと花さんは戦闘場で向き合いました。

『さあ、今度は1年と3年の2位同士の対決！』

『お互い1位とそれほど差がありません！これは中々の勝負が期待できるでしょう！』
それにしても、あの2人はどうやって実況になったんですかね？気になって仕方がないです。

ナオ『メイ、たまには変わっていい？』

ダメです。まだその時じゃないのにバレてしまうじゃないですか。

ナオ『むーっ、つまらないのー』

ハア…分かりました。でも、バレない程度ですよ？

ナオ『了解♪』

メイ「ふう…さて、花さん、よろしくお願いします」

花「ふふっ、こちらこそよろしくね、メイちゃん♪」

メイ「こんなところでちゃん付けはやめてください」

花「そつちこそここで」お義姉さん」と言えはいいのに…」

メイ「戦う前から調子狂いますね。ハア…」

花「あら、わざとやってるのよ？」

花さんはドヤ顔をしながら言ってます。斬りたいですねその顔。

『この2人の戦いが、今始まる！』

『バトル、スタートオオ！』カーン！

メイ「先手必勝！真風斬！」ズバツ！

俺は早速飛斬撃を飛ばします。

花「きたわね。毒手！」ガシツ！

それを花さんは毒でできた手で受け止めます。

花さんの能力は「毒」。

いろんな種類の毒を操り戦います。

花「次は私の番ね。毒霧！」ムワワーン…

メイ「対策済みです！真ウインドブラスト！」ピユウウン！

花さんは毒の霧を出しますが、俺が速攻でそれを吹き飛ばします。

花「うわー、吹き飛ばされちゃうか。…なら、試すのはここで終わりにしようかな？」

ドクドク：

花さんは毒を出しながら言います。

メイ「真風斬！ふっ！」スタツ

俺は飛斬撃を出し、それに乗りました。しないと毒が当たっちゃいますからね。

花「ここは私の自由自在！ベノムゾーン！」

気づいたら足場が風斬のとその下以外ありませんでした。

メイ「なるほど、毒でじわじわ痛めつけてから倒すと…ま、俺にとつては…」ジャキ

ン

花「…何かくるわね」スツ

花さんは毒で身を守ります。ですが…

メイ「(毒の床もガードも)無意味です！ハアアア！」ドドドドド

俺は刀に橙色のオーラを纏わせ、花さんに向かって突撃します。

花「え!?効いてない!?…そういうことね！」ズイッ

花さんはどうやらタネに気付いたようで、毒を操作して俺を横から攻撃してきまし

た。でも…

メイ「それも対策済みです！絶火斬り！」ズバツ！

花「ぐっ…！」

それを俺が真つ二つに切り裂きます。

メイ「お覚悟！冥冥斬り！」ズバァン！

花「……かはっ！」ズバツ！

ドゴツ！

そして強化版になった俺の十八番を花さんのガードごと斬りつける。斬撃を命中し、花さんは地面に倒れこみました。

花「ぐっ……なかなか威力ね……」ニヤツ

花さんは起き上がりながらにやっとしています。

メイ「……ポーカーフェイスはやめておいて下さい」

そう言われた花さんの顔は苦しい表情に変わります。

花「そうね……ぐうっ……」

メイ「どうやら大ダメージが入ったようですね」

花「……………フッフ……………」

メイ「…………ツ！」スツ

花「もう遅い！脱出不可能よ！」ドドドドド

花さんは巨大な毒の塊を落としてきました。

花「猛毒のロードローラーよおー!!」

……しかもロードローラーの形をしてました。
ジヨジヨ要素をここで出しますかね？普通。

斬士対毒花②

side 室見メイ

花「猛毒のロードローラーよー！」

ヒユウウウウウ!

メイ「これじゃ斬れない!……なら!」

ナオ! 出番ですよ! 分身です!

ナオ『オーケー!』

ポワン!

ナオ「ふう、さて、どうするのメイ?」

メイ「2人同時に行きますよ!」

ナオ「…了解!」

花「分身できたのは知らなかったけど、それじゃ意味ないわよ!くらえー!」ドドド

ドド

メイ「意味はあります! 真晴天飛梅!」B L O O M!

ナオ「さらに!…炎天桜舞!」B L O O M!

俺とナオはそれぞれ技を繰り出しました。そして…

花「な…！押し切られる…！うわっ！」ドガッ！

花さんは押し切られ天井に激突します。

翔「炎天桜舞だど!？」

絵奈「今のはなんなの〜？」

学「見間違えじゃないよな？」

育也「しかも口調も違つたし…」

翔さんたちが話していることに気付く。

ナオ「あちやー、もうバレちゃったか…」

メイ「ま、いいんじゃないですか？別に減るものじゃないですし」

ナオ「それもそうね。…さて」

メイ「やりましょうか、1(2)人で！」

花「ハア、ハア…なんの仕掛けが分からないけど、メイちゃん、そつちは梅属性だよ

ね？亜種を2つもちはありえないんだけど？」

ナオ「そうね…でも、人格が違うならありえるでしょ？」

花「メイちゃん…二重人格だったんだ…」

メイ「といつても最近ですけどね。…話はここまでにして…」チキッ

ナオ「……ぶった斬ることに専念しよう！」ドツ！
俺たち2人は花さんに突撃します。

花「ふっ、もう一回ベノムゾーン！」ドクドク：

ナオ「させない！フレイムダンス！」ボオオオ！

花さんが毒を出す前にナオが火で邪魔します。

花「ぐっ、なら……ポイズンアロー！」シュツ！

メイ「絶火斬り！」スパーン！

花「それも斬られてしまうのね……」

ナオ「爆熱スクリュー改！」ドツゴオン！

花「……ぐはっ！ハア、ハア、対策すごいわね……」

メイ「勝てるよう努力しましたので。真ウインドブラスト！」ピユウウウ！

花「うわっ！」

俺は花さんの上に吹き飛ばします。

ナオ「かーらーの、真炎突！」ドゴツ！

花「ガフツ！」ドゴオ：

さらに空中からナオがかかと落とし。花さんは俺の目の前の地面に激突します。そ

して……

メイ「冥冥斬り！」ズバツ！

トドメの冥冥斬り。これぞナオとの連携技、空前絶後です。

花「…わ…たし…の…ま…けよ…」ガクツ

『……試合終了！勝者、室見メイー！』カンカンカン！

ナオ「……！」

メイ「や、やりました！やったー！」

『な、なななんと！3年の1位と2位が1年の1位と2位に倒されてしまったー！』

『これはかなり稀にみる光景ですね…メイ選手は二重人格だと判明しましたし、この先どうやって戦うことになるのが楽しみですね！』

ナオ「ふふつ、嬉しそうね。さて、私は戻るわよ」ポワン

メイ「はい、お疲れ様でした、ナオ」

花「…うつ…あれ？私負けたの？」

メイ「はい、自ら降参しましたよ？」

花「マジか…いやー、メイちゃん強くなつたねー！」

メイ「まあ、天界での特訓頑張りましたし」

花「うん！次は勝つからね！」

メイ「…望む所です！」

そして俺と花さんは熱い握手を交わしました。

咲子、有名になる。(今更?)

side 桜木咲子

どこかのベットで目が覚めた。

咲子「……知らない天井ね」

メイ「知らないわけじゃないじゃないですか」

??「目が覚めたようね。はじめましてかしら?」

横を見ると、そこにはメイとメイに似てる女の子がいた。

……誰?

咲子「メイの双子かなにかかしら?」

ナオ「いや、双子じゃなくて別人格よ。私は室見ナオ、属性は桜よ」

咲子「別人格?じゃあアンタは今分身?」

ナオ「その通り。理解が早くて助かるわ」

メイ「ナオは別人ではなく別人格なので、”1人”なのに実質”2人”で行動できるんですよね」

咲子「へえ。ところで、それって精神的に負担がかからないの?」

メイ「……それが、普通の二重人格と違って全く負担が無いんですよ」

ナオ「私の発生の仕方が特殊だからね。性質的には人格ではなく魂が2つあるような感覚なのよ」

咲子「なるほどね。……あ、アンタ藤崎先輩に勝った？」

メイ「はい！俺とナオで……」

ナオ「……実質ほぼ完封したわよ！」

咲子「……二重人格って、強いわね。……そういえば、他のみんなはどこなの？」

メイ「部屋の外にいます」

ナオ「部屋の中に入ろうとしてる人達を止めてるのよ」

……あ、これ、私を見たいからね。

咲子「怪我もほぼ治ってるし、そろそろ起きて部屋を出るわね」

メイ「え、まさか……」

咲子「そう、そのまさかよ」ガシッ

私はメイとナオを片手ずつでお米様抱っこする。

ナオ「え、ちよっ、待っ……」

咲子「またないわよ！」ガラガラ

私は足で勢いよく保健室のドアを開ける。

次の瞬間。

ワアアアアアア!

「出たぞ! 3代目桜だ!」

「バトルすごかったぜ!」

「斬士もかつこよかったぞー!」

翔「お、咲子!」

絵奈「バトルお疲れ様〜!」

学「なんで2人をそう抱えてるんだ?」

育也「ねえ、これって前にも…」

咲子「…ふふつ、2人とも、準備はいい?」

2人「いや、早く降ろし」「行くわよー!」…え」

ダダダダダダダダダー!

私は今出せる最大のスピードで逃げる。

「あ、逃げたぞー!」

「取材したかったのに…」

「1学期にもこんな事あったような…」

―数分後、メイの寮部屋―

咲子「ふう、疲れた」

メイ「…俺は精神的に疲れました」

ナオ「メイに戻る気力もないからこのまま寝よつと…」

ナオはよろよろとベットに行き、そのまま寝た。

咲子「…あれ、いいの？」

メイ「大丈夫ですよ、エネルギーがなくなったら戻ってくるので」

咲子「そう。…イナイレの通信対戦でもしましょつか」

メイ「そうですね」

そして私が再び通信対戦でフルボッコにされたのは言うまでもない。

side?????

室見父「ぐっ…離せ！」

室見母「何故…こんな事を…！」

??「ククク…この俺を怒らせたからそうなったんだ。大人しく息子さんが来るのを待ってな」

室見父「何?!?出夢に何をする気だ!?!」

??「…秘密だ。黙ってろ」ドゴッ

室見父「ぐふっ！」

室見母「あなた！」

??「おうおう、もつと早く死にてえんならそうしてやつてもいいんだぜ？」

室見父「ぐっ……！」

??「ククク、いい顔だ。この俺……」

那珂川組組長、那珂川遠賀（なかがわおんが）が気に入るような最高の顔だぜえ！
ククク……コイツらをバラすのが楽しみだ！

ヤクザに喧嘩を売られたら？

side 桜木咲子

バトルデーが行われた日の夜、私はメイ、ナオとゲームしていた。

アルミ「あとをここをこうして……」

ナオ「……こうかしら？」

アルミ「そうそう、それからこう……」

ピンポン！

メイ「誰でしょうかね？」ガチャッ

メイはドアを開ける。そこには意外な人達がいた。

出夢「……」

花「入っていいかな？」

咲子「あ、はい、どうぞ」

2人はお邪魔しますと言い、入ってきた。

出夢「……メイ、スマホに電話が来なかったか？」

メイ「え？……来ませんでしたよ？」

出夢「そうか…」

ナオ「兄さん、それがどうしたの？」

花「……咲子ちゃん」

咲子「はい、何でしょうか？」

花「この話を聞いたら、貴女も協力してもらおうわよ、それでもいい？」

協力？……まあ、先輩達は悪いことするような人達じゃないし…

咲子「…協力します」

出夢「…分かった。それじゃあ話す。数分前、那珂川組というヤクザから電話が来た。『お前の両親は捕らえた。返して欲しければ2時間以内に俺たちのアジトまで来い！』ただし、警察でも呼んだら両親は即死だと思え』

ヤクザはそう言って電話を切った。かけ返そうとしたが、どうやら逃げ番号のようでかけ返せなかった。次に、僕は両親に電話した。すると親ではなくヤクザが出て

『これはお前の親の携帯だ。とつとと来ねーと両親は死ぬぞ？』

と言つて再び電話を切った。そこで、だ。メイ、ナオ、それに咲子。那珂川組をブチのめしに行くぞ

…両親が拉致された上に、警察なども呼べない…これはかなり悪い状況ね。

メイ「……俺は行きます。お父さんやお母さんを助けるために！」

ナオ「…私も行く。メイが行くなら私も加勢するわ！」

2人とも…ふっ、カッコいい言い方するじゃない。

咲子「…先輩、聞いたからには私も加勢します。友達を…メイを全力でサポートさせていただきます！」

花「…いい心意気よ。さあ、行きましょう」

3人「…はい！」

そして私たち5人は示された場所へ移動した。

―那珂川組アジト―

出夢「…着いたね」

花「…そうだね」

メイ「ここで、両親が捕らえられているんですね……」

アジトはボロい窓が所々割れた建物だった。いかにもって感じがするわね。

先輩たちは入り口の前まで行き…

出夢「…フンッ！」ズシッ！

花「…睡眠毒！」ムワワーン

周りを重くし、眠る毒をまき散らした。私たちは事前に抗体を渡されているので眠らない。

出夢「さあ…

突入するぞ！」スツ

ドガン！

出夢先輩は入り口のドアを思いっきり蹴飛ばす。

ヤクザ「来たぞー！」

ヤクザ「ぐっ!? 重え…Zzzz…」くかー

ヤクザ「おい、寝てる場合…か…」くかー

ヤクザ「くそ…睡眠ガスか！撃てえ！」ダダダダッ！

そしてすぐにヤクザの構成員が襲ってきた。が、すでに3割ほど寝ている。

咲子「銃弾は受け流す！真イジゲン・ザ・ハンド！」キイン！

私はみんなの前に出て飛んできた銃弾を全部上に受け流す。

ヤクザ「チイツ！舐めやがって！」ダダダダッ！

メイ「俺を忘れないでください！真ウインドブラスト！」ビュウウン！

ナオ「私だつて！真風斬！」ズバア！

ヤクザ「ぐああああつ！この…ガキどもがっ！」

出夢「ガキで結構。僕たちに歯向かったこと…」

花「後悔させてやるわ！」

迫り来る銃弾

side 桜木咲子

ヤクザ「オラオラ！敵だぜ、ヒヤッハー！」ダダダダッ！

ヤク中らしき奴がマシンガンを撃ってくる。

花「毒手！」ドドドドッ

それを藤崎先輩が止めるが、どんどん毒の手が崩されていく。

咲子「加勢します！真イジゲン・ザ・ハンド！」ギョルル！

ヤクザ「止めるかー？なら、これはどーだー！」ポイツ！

出夢「爆弾だ！避ける！」

咲子「………っ!?」サッ

ドガン！

花「ぐっ……！」

メイ「花さん！」

私はなんとかかわすが、藤崎先輩がダメージを受けてしまった。

ナオ「…野郎、ぶっ殺してやるわ！」ギョルル…

ナオ、キャラ崩壊してるわよ。

咲子「つて、…え？」

ナオ「チャカメカファイアー！」ポイツ！

ヤクザ「あ？なんだコrr「着火！」……ぐおつ！」ドガンン！

ナオ「やり返しよ！」

咲子「それも使えたのね…」

ヤクザ「ケホツ、ケホツ……調子に乗るなよ、このガキどもお……お前ら、かかれえー
！」

「うおおおおー！ヒヤツハーー！！」ズドドドドドドドド！

突然、大量のヤクザが現れ、銃弾を撃ってくる！

咲子「真イジゲン・ザ・ハンド！」ギユルルルル…！

ぐつ……この量は…多すぎる…！

メイ「咲子さん！力を貸します！真ウインドブラスト！」ビュルルル！

咲子「ありがとメイ…ハアアアアツ！」ギユルル！

そして、なんとか銃弾を全部受け流した。

ナオ「…真爆熱スクリュー！」ドツゴオン！

ヤクザ「グアアアアツ！」シユウウ…

出夢「絶重力球！」ギユウン！

ズシッ！

ヤクザたちは地面ににめり込む。

ヤクザ「ぐっ…この野郎共…待て…！」

メイ「待ちませんよ！冥冥斬り！」ズバッ！

メイは容赦なくヤクザ共に斬りつける。

ヤクザ「グハッ！」

出夢「…進むもう」

ガチャッ…

??「おやおや、来たようだね」

咲子「誰よ、アンタ」

遠賀「ククク…俺はこの那珂川組組長、那珂川遠賀だ。室見出夢の両親はちゃんとい
るぞ」

出夢「来てやったぞ。さっさと両親を返してもらおうか」

遠賀「ククク…させるとでも？」スチャッ

那珂川は拳銃を出し、こちらに向けてきた。

遠賀「俺の能力を説明しよう。俺の能力は…」バンッ！

V S 那珂川遠賀

side 桜木咲子

メイ「咲子さん！……絶風斬！」

出夢「ダメだ！今したら……」

遠賀「よっ」サツ

咲子「!?……ガフッ！」ズバツ！

メイ「……そんな……卑怯な……！」

メイは飛斬撃を放つが、丁度掴んでた私を盾にし攻撃を塞いだ。そのせいで私の背中から血が出る。

咲子「ハア……ハア……このっ！」シユツ

遠賀「おっと、離されたか」スチャツ

花「咲子ちゃん、大丈夫？」

咲子「大丈夫……です……すぐに治します……！」シユウウ……

出夢「……みんな、連携攻撃を仕掛けよう。絶風斬！」ズバツ！

遠賀「おっと「鳴鳴斬り！」……ぐおっ……っつて、ぐあっ！」ズバツ！

後ろに回り込んでいたナオが斬りつけ、それで油断した那珂川に出夢先輩の飛斬撃が
当たると。

花「…ベノムゾーン！」ドクドク…

遠賀「毒か。これは厄介だな…よっ、ほっ！」ダダダダッ！

咲子「ハアアアアッ…絶イジゲン・ザ・ハンド！」ギョルルツ…！

私は技を進化させ銃弾を受け流した。が…

遠賀「おっと、それじゃあ止められないよ！」

シュツ！

銃弾は方向を変え、私たちに向かって飛んでいく！

咲子「…！！…そうだ！…うおおお！」ダダダダッ！

遠賀「…何!？」

咲子「オラア！」ドゴツ！

遠賀「ガツ!？」

私は那珂川に突進し、腹パンを入れる。そして…

咲子「やり返しよ！」サツ！

遠賀「まさか…ギヤアアアア！」ドドドドッ！

那珂川を盾にし、銃弾は全て那珂川に命中した。

遠賀 「この…ガキ…が…！」 スッ

出夢 「…ハッ！」 ズドッ！

遠賀 「何イ!?」 ドゴッ！

出夢先輩は咄嗟に重力を操り、那珂川の拳銃は地面にめり込んだ。

遠賀 「糞お…銃が無かつたら俺は…！」

メイ 「真ウインドブラスト！」 ビュウウン！

遠賀 「うおっ!？」

メイは那珂川を空中に飛ばし…

ナオ 「真炎突！」 ドゴッ！

遠賀 「へブッ！」 ドゴオッ！

空中でナオがかかと落としをし、那珂川は地面にめり込む。

メイ 「冥冥斬り！」 ズバッ！

遠賀 「ガッ…ア…！」

ナオ 「空前絶後、成功！」

そしてメイがトドメに斬った。

出夢 「…僕の両親はどこにいるんだ！」

遠賀 「…ク…ククク…！」

那珂川は不気味に笑い出した。

花「…早く答え…なさいっ！」ドゴッ！

藤崎先輩は怒り、那珂川を殴る。しかし那珂川は笑い続ける。

遠賀「ククククク…！」ポチッ

那珂川は何かのボタンを押す。すると…

ゴゴゴゴゴ…！

咲子「壁が…!？」

室見母「…出夢！メイ！」

室見父「お前たちは早く逃げろ！」

ヤクザ「…スッ

壁が動き出し、そこからメイの両親がヤクザと共に現れる。

遠賀「ククク…！」

………「やれ」

出夢「な……止め……！」

ズドドドドドドド……！

花「……っ！」

だが、時は遅かった。

私の目の前でメイの両親は……

蜂の巣に会い、殺された。

ネロイズム

side 桜木咲子

室見母「……………」バタン

室見父「……………」バタン

遠賀「ク…ククク…ハハハ！ざまあみろ、クソガキども！」

メイ「あ……………ああ…」バタン

ナオ「メイ!？」

メイは目の前で親が殺されたショックで気絶してしまった。

咲子「ハア、ハア、この…クソ野郎…！」

私も気分が悪くなってきた。

出夢「……………」ゴゴゴ…

花「……………出夢？」

出夢「あはは…」

よくみると、出夢先輩はハイライトがなくなっている。

花「どうしたのよ、出夢!？」

ナオ「きっかけて……親が殺されることですよね!」

花「そう……もうこれはヤバイことになるわ……」

そして……煙の中から紫色の角と黒い翼を生やした出夢先輩が現れた。

出夢「逆さの悪魔、ネロイズム……!」

先輩は何倍にも膨れ上がったパワーを出しながらさういう。

遠賀「悪魔化か……。そんなになろうと関係ねえんだよ、死ねえ!」バンツ!

那珂川は遠慮なく銃弾を放つ。

出夢「……」パシツ!

遠賀「な……!」

しかし先輩は銃弾を掴み取る。

出夢「……」スタスタ

遠賀「ヒ……ヒイツ……お、お前ら、う、撃てえー!」

那珂川は恐怖を露わにするが、銃弾を撃つよう仕向ける。

しかしその刹那……

バキツ!

ヤクザ「ガツ」ドゴツ

グシユツ!

ヤクザ「ブツ」ボガツ

メギヤツ!

ヤクザ「」

遠賀「そ、そんな……」

先輩は目にも留まらぬスピードで周りにいたヤクザたちを文字通りメツタメタにする。そのせいか周りに血の匂いが充満する。

咲子「うつ……」

ナオ「お兄ちゃん……!」

花「出夢……!」

出夢「…………」スツ

遠賀「ヒ、ヒイイイ!い、命だけ、命だけは許してくれー!」ガクガクブルブル
那珂川は怖気付いた表情で必死に命乞いをする。

出夢「…………却下」ギユルル……

遠賀「え……」

花「出夢!やめて!それじゃアイツと同類になるわよ!」

しかし、出夢先輩に藤崎先輩の声は聞こえなかった。

出夢「ヘラヘラすんな……!」シユツ!

遠賀「ヒイイイ！」

咲子「ツ……………え？」

出夢「……………」

日花「…うちの生徒に殺しはさせないわよ」

咲子「先生……！」

何故か日花先生が現れ、出夢先輩の手を止めていた。

思いを継ぐ

side 桜木咲子

咲子「日花先生……！」

日花「……咲子、今すぐみんなで逃げなさい！」カッ！

先生は鋭い目つきでそう言う。

咲子「は……はい！」ダッ！

花「出夢……目を覚まして……！」ダッ！

ナオ「ハア、ハア……」ダッ！

私たちはすぐにアジトの外に出た。

……。

side 坂田日花

日花「……行つたわね」

出夢「どけ！僕はそいつを……」

日花「……殺らせるとでも？」ドガッ！

私は悪魔化したメイの兄、出夢に腹パンを入れる。

出夢「…かはっ！」ドゴオ！

日花「あら、気絶しなかったの？なら…」ギユウウン…

出夢「な…に…？」

日花「少々手荒なマネをするわよ！火桜！」BLOOM！

出夢「…むんっ！」スッ

それに対し出夢は重力球を何発も飛ばしてきた。

日花「まずいわね…！…！…！」シュツ

ドガン！

出夢「当たったか。さて、アイツを「何勝手に終わらせてるの？」…ガッ!?」ドゴッ

！

私は能力を使って出夢の後ろに回り込んだ。そしてストレート。出夢は地面にめり込む。

日花「気絶しなさい！…：月夜桜舞！」BLOOM！

そして私は炎天桜舞の強化版、月夜桜舞をおみまいする。

出夢「が…はっ…」シュツ

それに当たった出夢は気絶し、悪魔化は解除された。

日花「…気絶したようね。さて…」スタスタ

次にやることは…

遠賀「……………」チーン

泡を吹いてるコイツと周りにいるヤクザ共を警察に引き渡すことね。

―数分後―

警察「ご協力ありがとうございます、2代目！」

日花「ええ、頼んだわよ」

警察「はっ！」ブロロロ…

気絶させた出夢、重症を負った花は病院に運ばれた。殺された室見両親の葬式は後日行われるそうだ。

日花「ふう、さて…」クルツ

咲子「……………」

日花「なんで相談しなかったの？」

ナオ「先生などと呼んだら即殺すと脅されて…」

日花「なるほどね。そこは理解したわ。でも…」ガンツ！

私は2人の頭に拳骨をする。

咲子「……………」ジーン

日花「私はこう見えて規格外だと自負してるわ。だから…もう誰も死なないように、

次は私を呼びなさい」

ナオ「はい……」

咲子「……………」

ナオは申し訳なさそうな顔で返事するが、咲子はずっと無言で下を向いてる。

日花「咲子、まさか……責任を感じてるの？」

咲子「……………いや、そういうわけでは「じゃあ、なんでずっと黙ってるの？」それは、その……」

日花「私はアンタの師匠であり先生なのよ。ちゃんと話しなさい」

咲子「私は……………何も出来なかった……！」うるっ

咲子は泣きながらそう言う。

咲子「目の前で誰かが殺されそうだったのに……何も出来ず、殺されてしまった……」

私は……私は……！」

ナオ「咲子……」

……………なるほど、そういうことね。

日花「咲子、顔を上げなさい」

咲子「はい……………え？」ナデナデ

私は咲子の頭に手を置き、優しく撫でる。

日花「アンタはまだ未熟よ。初めてそんな場面に遭遇して対応できたら私より規格外よなにかよ。だから……私は慰めるのは下手だけど……失った命はもう帰ってこない。大事なものは思いを継ぐことよ」

咲子「思いを……継ぐ……」

日花「そう。思いを継いでこそ、人は強くなる」

ナオ「……うう……」うるっ

日花「でも、今は2人共思う存分に泣きなさい、胸貸すわよ」

咲子「先生……うわああああああん！」

私はこうして弟子とその親友を慰めるのであった。

落ち込んだメイ

side 飛羽野きじお

ゴクゴク…プハア!

きじお「ふう、働いた後のマツ缶は美味いな！脳にしみる！」ゴクゴク

俺は夜、公園のベンチに座りながらマツ缶を飲んでいた。

ザツ…ザツ…

きじお「…ん？」

足音がしたので見てみると、そこには子供を背負った銀髪青年がふらふらと歩いていった。

??? 「……ぐっ…」フラッ

きじお「むっ、危ないぞ！」ガシッ

青年が倒れかけたので慌ててそれを止める。

きじお「……な!？」

なんだ、この傷だらけの体は!？」

??? 「……だ…れ…で…すか…?」

きじお「名前の前に、大丈夫が君!？」

???「俺…は…あら…や…ど…ぜ…イ…ル…」

きじお「名前は聞いてない!どうしたんだ、その体!？」

???「……………」

…意識を失ってしまったみたいだ。

一旦家に運んで寝かせよう。

side 桜木咲子

事件から2週間が経った。メイの両親の葬式も既に終わっており、出夢先輩と藤崎先輩も無事退院した。

ただ、1つだけ問題が残っている。それは…

咲子「まだ立ち直らないの?」

ナオ「ええ…」

メイが未だに立ち直ってない。一応本体はナオで、メイを分身させているため自殺することはなさそうだ。「自殺することはないでしょ?」と言ってやったが、「メイの精神は今不安定だから、何するのかわからない」とのこと。

咲子「…今日、メイを説得するわ」

ナオ「私でもできなかつたのよ?」

咲子「それでもやるわ。：親友として」

ナオ「：そう。なら私も手伝うわ」

咲子「ありがとう」

―放課後―

”とある物”も持ってきたし、準備は完了ね。

ピンポン…

ガチャツ。

ナオ「来たわね。入って」

咲子「失礼します…」

私はメイの寮部屋に入る。

メイ「……咲子…さん？」

咲子「：久しぶりね、メイ」

メイ「はい、そう…ですネ」

メイの目はハイライトが無くなっており、髪はボサボサ、服も荒れていた。

咲子「：本題に入るわよ。メイ、いい加減に学校に来なさい。みんな寂しがつてるわ

よ？」

メイ「……帰って下さい」

咲子「いやよ。アンタが立ち直るまで私は帰らないわ」

メイ「……俺は目の前で両親が殺されたんですよ？何もできずに、です。咲子さんに俺の気持ちがかかりますか!？」

咲子「……分からないわよ」

メイ「なら、帰ってください！俺は…行きません！」

咲子「…親の気持ちも考えずに？」

メイ「え…？」

咲子「アンタの両親は学校に行かないことを望んでいるのかしら？」

メイ「そ…それは…」

咲子「メイ……」

パシイン！

私はメイの顔を叩く。

メイ「…っ、何するんですか！」

咲子「目を…覚ましなさい！」

受け継ぐメイ

side 桜木咲子

咲子「メイ…目を覚ましなさい！」

私はメイの頬を叩き、そう言う。

メイ「……っ、私は……」

咲子「アンタに渡したいものがあるの」スツ…

私は一枚の紙をメイに渡した。

メイ「これは…手紙？」

咲子「そうよ。読んでみなさい」

『メイへ』

この手紙を読んでいるということは、きつと僕はもう死んでいるんだろう。その時の為に、メイに伝えたい事がある。

家の和室の壺にはからくりが仕掛けられている。起動するのは簡単だ、壺とメイが持っている筈の逆刃刀を入れ替えるといい。

……からくりを起動させたら、その奥の物を受け取ってくれ。

これからも剣術を腕を上げるんだぞ。
室見透吾』

メイ「お父さん……」

咲子「彼のズボンのポケットに入っていたらしいわ」

メイ「そうですか……」

メイはしばらく手紙をじっと見つめる。

咲子「……………」

メイ「……………」スツ

そして、メイは立ち上がる。

メイ「咲子さん、俺について来て下さい」

咲子「……分かったわ」

私はメイについて行った。

―室見家宅―

メイ「着きました」

メイの家は早良区の西側にあった。高専から結構遠いから寮で生活してるのかしら

?

咲子「なんか和風の家ね……」

メイ「はい、数百年前に建てられたので」

咲子「なるほどね…」

私たちは家の中へと入っていく。

室見祖父「おおメイ、おかえり」

メイ「ただ今、お爺さん。咲子さんも一緒に来てます」

咲子「失礼してます」

室見祖父「そうか。ま、ゆっくり過ぎしんしゃい」

私たちはメイのお爺ちゃんに挨拶をし、廊下を歩く。

―和室―

メイ「壺は…これですね」

咲子「……………」

メイ「これを取って…」スツ

メイは壺を取り…

メイ「俺の刀を置く」コトツ…

逆刃刀を置いた。すると…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…！

咲子「!!」

後ろの壁が動きだし、道ができた。

メイ「…進みましょう」

奥には、小さな畳の部屋と、その台に刀が置いてあった。

咲子「……………」

メイ「…ん？紙が貼つてありますね。『これは名刀”飛梅”。僕の祖父、つまりメイの曾祖父が使つていた刀だ。受け取つて室見家の秘伝を受け継いでくれ。室見透吾』…手紙の続きでしょうか？」

咲子「…そうなんじゃない？…選択は2つ。秘伝を受け継いで刀を受け取るか、受け継がずに引きこもるか。…さあ、選びなさい、メイ」

メイ「……………俺は…」スツ…

メイは両手で刀を手取る。

メイ「…もう落ち込みません。この刀と共に、両親の思いも受け継ぎます！」シャツ

！

そして刀を抜き、掲げながらそう言った。

咲子「…ふふつ、カツコいいじゃない。…おかえり、メイ」

メイ「はい、ただ今、咲子さん！」

メイの目は、光に反射している刀と共に輝いていた。

突然の転校生

side 桜木咲子

メイが立ち直った後、私たちは何事もなく9月と10月を過ごし、今日は11月1日だ。

その間私とメイはかなり調子が良く、パワーや技はそれなりに強くなった。後一步でパワーは100万に到達する所だ。

そして今私たちは朝の模擬戦をしている。

咲子「行くわよ、メイ！ハアアアアッ！」ギョルル…

メイ「はい、咲子さん！ハアアアアッ！」ギョルル…

翔「やべ、来るぞ！…エターナルブリザードV3！」

ルメ「真ボーンガード！」

絵奈「激流ストームG5！」

学「ロックウオールダム！」

育也「真雷斬！」ズバツ

祐樹「ボルトタイヤヤ！（ヒートタイヤの雷版）」

2人「……陽天梅桜改！」 BLOOM!

私たちの連携技がみんなに向かって飛んでいく。

6人「……ギヤアアアアア！」

……そして容易く防御を打ち破り攻撃は当たる。

『模擬戦終了！勝者、桜木咲子と室見メイ！』

咲子「ふう……お疲れ様、メイ」

メイ「はい、お疲れ様です。俺はそろそろクラスに行きますね」

咲子「ええ、また後で」

メイ「はい！」 タタタ……

翔「ぐっ……お前ら強すぎだろ……」

絵奈「手加減してよー！」

学「……もつと努力しなきゃな」

育也「……そうだね」

ルマ「うう……差が開いていくよ……」

祐樹「まあまあ、泣くなよルマ」

???「……」

咲子「……ん？」 クルツ

シーン…

咲子「…気のせいかしら？」

今視線を感じたような…

ークラスにてー

日花「みんないるかしら？…いるわね。さて、今日から新しく転校生が来たわ」

「おお、マジか！」

「先生、男子ですか、女子ですか？」

日花「男子よ」

「けっ、つまんねーの」

「せめてイケメンがいいな…」

翔「こんな時期に転校生か？」

絵奈「なんだろうねー？」

日花「さて、入ってきなさい」

???'「はい」ガラガラ…

中に入ってきたのは、銀髪で、そこそこ顔が整っている青年だった。

でも…

咲子「あの”目”は…」

彼の目はハイライトはあるものの、少し腐っていた。例えるなら比企谷八幡と普通の人の中の普通の人寄りの目、かしら？

とにかく、あんな目をしているのは何か訳がありそうね。

ゼイル「飛羽野ゼイル（ひわのぜいる）です。千葉から来ました。趣味は特にありません。よろしくお願いします」

……飛羽野？

きじおさんに兄弟は居なかつたはず。苗字が同じなだけかしら？でも、千葉から来たのなら…親戚かしら？

ゼイルは簡単な自己紹介をすると、お辞儀をした。

日花「さて、ゼイルに質問はある？ある人は挙手」

「はい！」

「はい！」

咲子「はい！」

日花「じゃあ…〇〇から」

「属性はなんですか？」

ゼイル「風属性です」

「兄弟は居ますか？」

ゼイル「兄と妹がいます」

…なら、ありえるわね。私の質問は…

咲子「…飛羽野きじおさんとどんな関係ですか？」

ゼイル「……………知りません」

咲子「……………」スツ

私は席に座る。

…あれは絶対嘘ね。一瞬間が焦ってたわ。

日花「さて、ゼイル、アンタの席は…あら、丁度咲子の隣ね」

…え？なにこの典型的な展開。

咲子「…桜木咲子よ、よろしく」

ゼイル「…よろしく」

…あとできじおさんに電話してみよ。

…あつてた!?

side 桜木咲子

―放課後―

授業中、ゼイルの態度は普通だった。

寝ることはないし、授業のことはちやんとメモってるし、発表もちやんとしてる。

…って、なんでそんなこと知ってるんだろ私。ハア…

とりあえず、全ての授業が終わり今は放課後だ。今日もいつも通りさとかに隊基地

(という名の祐樹の空き倉庫)にいる。

翔「で、ゼイルって本当にきじおさんの親戚なのか?」

咲子「ええ、ほぼ確定よ」

絵奈「え、根拠は?」

咲子「私が質問した時、一瞬焦ってたわ。だからよ」

学「なるほどな…」

メイ「あれ?千代さん、何してるんですか?」

千代「…飛羽野君の情報を探してる」

ナオ「あら、仕事早いわね」

千早「俺と千代はこれくらいしか出来ないしな」

育也「…そういう分野では2人ともほぼ最強なんだけどね」

祐樹「ル、ルマ、ここではちよつと…うわっ！」

ルマ「んふふ、祐樹く♪」ギュー！

9人「……………ゲホツ」↑砂糖吐いた

みんなでワイワイ話していると、倉庫の入り口からノックが聞こえてきた。

咲子「私が行くわ。はい、どちら様です…か…」

きじお「やあ、諸君」

ゼイル「…よう」

……………。

予想通りだったー！

咲子「あー、えつと、とりあえず入って下さい」

きじお「うん、失礼するよ」

ゼイル「……………」

翔「おう、誰が来た…って、きじおさんとゼイル!?」

絵奈「咲子の予想があつたね」

きじお「ちよつと今日はゼイルの事で話があつてね」

ゼイル「…コイツら本当に信用できるのか?」兄さん」

咲子「…え!? 兄さん!」

きじお「そうだよ。ゼイルは最近引き取つたんだ。だから義弟だよ」

メイ「な、なるほど…」

きじお「そこで、君たちにゼイルの事を任せたいんだ。俺は千葉で働いてるし、俺の両親が住んでいるところは市外だしね」

ナオ「…そこで、私たちに頼みに来たと?」

きじお「その通りだ。…頼めるかい?」

咲子「………ゼイル」

ゼイル「なんだ?」

咲子「アンタの意見を聞かせなさい」

ゼイル「…分かった。俺は兄さんを心配させたくない。だから…頼む、さとかに隊に入れてくれ…!」

ゼイルはなんと土下座をする。

咲子「あ、そ、そこまでしなくても…頭を上げなさい!」

ゼイル「…おう」スツ

咲子「ふう…さとかに隊に、歓迎するわ！」

ゼイル「…ありがとう」

きじお「（…これなら任せられるね）…諸君、ゼイルと仲良くしてくれ。じゃ」フツ
きじおさんはゼイルを見て頷くと、そう言って瞬間移動した。

咲子「さて、とりあえずみんな自己紹介ね。私は桜木咲子よ（2回目）」

翔「西新翔だ」

絵奈「貝塚絵奈だよ」

学「本松学だ」

育也「竹下育也だよ、よろしく」

千早「ここの情報係の七隈千早と…」

千代「…七隈千代よ」

メイ「ええと、俺は室見メイです」

ナオ「私はメイの別人格の室見ナオよ、よろしくね」

祐樹「と、戸畑祐樹だ、うわっ!？」

ルマ「ボクは羽犬塚ルマだよ、ムフ♪」ギュー

ゼイル「…なあ、まさかとは思うが、ここって、ランク上位ばっかじゃね?」

咲子「ええそうよ? 千早と千代以外全員8位以上ね」

ゼイル「マジか…とんでもない集団に来たかもしれない…」

メイ「まあ安心してください。別に弱いのはダメという訳ではないので。偶々ほぼみんなランク上位なだけですよ」

ゼイル「お、おう…分かった」

翔「ところでよ、ゼイル、俺と模擬戦しねーか？」

ゼイル「…俺とか？」

翔「ここにゼイルという名前のヤツはお前以外いねーぞ。で、模擬戦しねーか？」

ゼイル「…慎重にお断りします」

翔「なんでだ？お前のパワーを見てみたいんだよ」

ゼイル「いや、俺がボコボコにされる未来しか見えん」

翔「…なるほどな。じゃ…ルマ！」

ルマ「オツケー！ハアツ！」ボンツ！

ゼイル「え」

ルマは骨で檻を作り、ゼイルを捕まえた。

翔「さて、と」ガシッ

ゼイル「な、何をする気だ…？」

翔は檻を担ぐと…

翔「えっほ！えっほ！」スタスタ
そのまま裏庭へ移動していった。
咲子「…ゼイル、ドンマイ」

翔 v s ゼイル

side 桜木咲子

―裏庭―

ゼイル「強制かよ…」

翔「すまんがどうしても力を見てみたいからな」

絵奈「2人ともくがんばれ」

…とりあえずお手並み拝見といこうか。

メイ「模擬戦、始め！」

翔「…オラア！」ドゴツ！

翔は始まってすぐ突撃し、辺りに砂が舞う。

翔「…ほう、止めたか」

ゼイル「…まあな」ガシッ！

ナオ「…おお」

祐樹「止めたな」

翔「じゃあ、次はコイツだ！うおおおお…！」パキイイ…

ゼイル「…させねーよ！絶風斬！」ズバツ！

翔「いきなり絶だど!?…エターナルブリザードV3！」ドゴォ！
ギギギ…！

風の飛斬撃と氷の球がぶつかり合う。

ゼイル「追撃だ！真ウインドブラスト！」ビユウウン！

翔「そんなのありかよ！…なら俺も！真冷突！」ドガッ！
2人は互いに追撃をする。

翔「ぐっ…うおっ!?!」ビユウウン！

ゼイル「ハアアアアッ！」ドゴォ！

ぶつかり合いはゼイルが勝ち、翔はダメージを受けた。

翔「ぐっ…やるな、お前」

ゼイル「…そろそろ本気を出すぞ」

翔「何…!?!」

ゼイル「…くらえ…影斬！」ズバツ！

咲子「…能力!?!」

ゼイルは影みたいな物を出し、斬撃を飛ばしてきた！

翔「スノーエンジェル！…ぐあっ！」ズバツ

翔はガードしようとするが、ガードは破られ被弾してしまう。
ゼイル「トドメだ！…シヤドースクリュー！」ドツゴオン！

…!!

咲子「あれは…爆熱スクリューの影バージョン!?」

ナオ「すごいわね…!」

まさかゼイル…イナイレフアンなの!?

翔「な…ぐあああつ!」ドゴオ!

メイ「…模擬戦終了!勝者、ゼイルさん!」

ゼイル「…ふう、疲れた」

咲子「ゼイル、アンタ…」

ゼイル「ん?なんだ、桜木」

咲子「…今のはイナイレ技よね!?アンタイナイレフアンなの!」ユサユサ

ゼイル「あ、ああ…そうだが…離してくれ」

気づいたら私はゼイルの肩を掴んでブンブン揺すつてた。

咲子「あ、ゴ、ゴメン!／／」サツ

ゼイル「お、おう…とりあえずイナイレはやってるぞ。お前もか?」

咲子「そうだけど…」

ゼイル「そうか、仲良くできそうだな」ポンポン
!?

ゼイルは私の頭に手を置き、撫でてきた!

咲子「ゼ、ゼイル? その…」

ゼイル「…あ、スマン! つい癖でやってた。不愉快だったか?」

咲子「え? …いや、そんなに…」

ゼイル「そ、そうか…」

なんか、気持ち良かったな…

翔「ハア、ハア:ゼイル:お前、強すぎだろ!」

ゼイル「あ、スマン、強くし過ぎだ」

翔「…:次は負けないからな!」

ゼイル「いやそれフラグだぞ…」

ゼイルはそう言うが、既に翔は去っていた。

ゼイル「…:ま、いいか」

その後色々ゼイルと話し、解散した。

咲子「…:公園にでも向かおう」

ちよつと寄り道しますか。

悲しい過去

side 桜木咲子

―花町公園―

ベンチに座って秋風を浴びる。涼しい。

咲子「……プハア、生き返るわね」

ちようど近くの自販機で買ったミルクティーを飲みながらそう言う。

咲子「……?」

スタスタ

誰かが来た。

ゼイル「隣、いいか?」

来たのはマツ缶を持ったゼイルだった。

咲子「ええ」

ゼイル「あざっす」スツ

ゴクゴク…。

しばらく無言が続く。でも、悪くない。

咲子「……………」

ゼイル「……………」

咲子「ねえ、アンタ、質問があるんだけど…」

ゼイル「なんだ？」

咲子「…アンタ、なんでそんな”目”してるの？」

ゼイル「つ……………何のことだ？」

咲子「その半分腐ってる目のことよ。私以外気付いてなかったわね。…余程の事が無いとそうはならないわよ？」

ゼイル「気付いてたのか……………。話してもいいが、気分が悪くなったらすぐに言えよ？
決していい話じゃないからな？」

咲子「ええ、知りたいの。話してくれる？」

ゼイル「…分かった」

side 飛羽野ゼイル

俺の家族は俺、妹、両親の4人で、そこそこいい家庭だった。

ある日…

母「ゼイル、茜（あかね）、いい子にしてなさいよ？」

父「お菓子はテーブルに置いてあるから、仲良く食べるよ？」

2人「はい！」

両親は出かけた。しかし、帰ってくることはなかった。
数時間後、家に何故か警察が来た。

警察「新宿（あらやど）さんのお子さんですね？」

ゼイル「はい、そうですけど……」

警察「……………」。あなた方のご両親は……

……先程、交通事故に遭い亡くされました」

2人「……………え？」

両親は死んでしまった。俺と茜はかなりショックを受けた。だが…不幸はそれだけではなかった。

叔父「オラァ！」ドゴツ

ゼイル「…グハッ！」

叔母「ふんっ！」ドガッ

茜「…キヤアッ！」

叔父「何でこの俺が…こんな、餓鬼どもを！」ドガッ

叔母「ストレス発散用のサンドバッグにはなるわね！」ドゴツ

俺たちは叔父と叔母に引き取られたが、毎日虐待を受けた。しかも…

「おー！脱ゼイルだぜー！」

「変な名前だなー！」

自分の名前が少しユニークなだけですと虐められる毎日…。ただ、

一郎「おいお前ら、やめてやれよ！」

「…ちえっ、冷めた」

「いーぜ」

ゼイル「ありがとな、一郎」

一郎「どうってことねーよ」

親友の雷落一郎（らいらくいちろう）だけが唯一の味方だった。しかし、それは中学校までの話だ。

一郎は総武高専（千葉にある戦闘専門学校）に入学し、俺はそこその高校に入学した。流石にここは平和に過ごせるだろう…と思っていたが…

「おい、まさかお前脱ゼイルか!？」

ゼイル「…?!？」

中学校で俺を虐めていたヤツが偶々同じ高校に入学していた。それから、俺は学校では虐められ、家では殴られ蹴られる毎日だった。

茜「お兄ちゃん…私達…いつまでこんな生活を続けなければいいの…?」

俺は泣いてる茜の頭を撫でながら、言った。

ゼイル「…今日までだ」

その後俺は荷物をまとめ、茜と一緒に家から逃げた。

1週間ぐらい過ぎただろうか。

持っていた金は底を尽き、俺は茜を背負って夜歩いていた。そこで俺が倒れそうになつたのを…

きじお「おい君、大丈夫かい!？」

命の恩人であるきじお兄さんに助けられた。

その後、きじおさんに匿われ、虐待をした叔父と叔母は逮捕された。俺と茜はきじおさんに引き取られ、俺はここに転校してきた。

side 桜木咲子

ゼイル「……これがこの目の理由だ。きじおさんに匿われる前はもつと酷かったぞ」
ゼイルの体験は残酷だった。残酷すぎてしばらく言葉が出なかった。

ゼイル「で、お前はと思う？ただの作り話だと思うのか？」

私は……

咲子「……信じるわよ。アンタの目は嘘をついてない」

ゼイル「………」

咲子「アンタの過去は残酷だった。……でも、もうそれは起きないわ。だって……」

…今のアンタには、味方がいるから」

ゼイル「……！」

咲子「きじおさんも、私も、さとかに隊のみんなも、アンタの味方よ。裏切ることは絶対にないわ」

ゼイル「そう…なのか？」うるつ

咲子「そうよ。……肩、貸すわよ？」

ゼイル「……ちよつと…借りるぞ…ううつ…」

ゼイルは私の肩で静かに泣いた。そんなゼイルの頭を私は撫でながら言う。

咲子「……私がアンタを守ってやるわ」

―数分後―

ゼイル「…ありがとな、桜木」

咲子「ええ、どういたしました…て？」

…え、どうしたの、その目!?

ゼイル「ん?どうした？」

咲子「いや、あの、その…目が…」

ゼイル「さらに腐ったのか？」

咲子「いや、その…めつちやカツコよくなってるのよ／＼」

ゼイルの目は完全に腐りが取れ、綺麗な黒になっていた。そのせいか顔イケメンになってる。

ゼイル「……は？」

咲子「ほら、鏡」

ゼイル「…誰だ、コイツ？」

咲子「……／＼」

ゼイル「どうした？そんなに顔赤くして？熱か？」スツ

咲子「…!？」

ゼイルは手を私の額に当てる。いやいやなにやってんの!？」

咲子「べ、ベベ別に熱なんてないわよ!？」

ゼイル「そ、そうか、スマン」スツ

咲子「…それと、私のことは咲子と呼びなさい」

ゼイル「いや、そんなに親しく「文句あるの？」…分かった。咲子」

咲子「……／＼」プシュー

な、なんか、照れちゃう／＼

ゼイル「?…ま、いいや。じゃあな、咲子」スタスタ

咲子「え?え、ええ、また…」

ゼイルは公園を去っていった。

咲子「…後でベツトで叫ぼう」

うん、双子葉。

普通？の登校

side 桜木咲子

―帰った後―

咲子「……………」ガチャツ

私は部屋のドアを開け、中に入り、そっとしめる。そして…

ボスツ（ベットに倒れこむ音）

咲子「キヤアアアアアア！／／／」

私は布団に埋まりながら発狂する。

咲子「うう…ゼイルのやつ、カッコ良すぎでしょ…／／／」

な、何言ってるの私!?

咲子「やばい、悶え死ぬ〜！」ジタバタ

その後しばらくは私はベットで悶々としていた。

―次の日―

咲子「……………」スタスタ

今日私は一人で登校している。何故って？

咲子「……………」ニヤニヤ

何故かニヤニヤしてしまうからだ。だから早めに学校に行つてこの顔をどうにかすることにした。

「…………お、よう」

咲子「…………ん!?!」クルツ

この声は……!

ゼイル「おはよう、さく……咲子」

咲子「……おはよ、ゼイル」

……なんでだろ、顔が合わせられない……!

ゼイル「どうした? 顔赤いぞ? やっぱり熱か?」

咲子「え? あ、いや、べべ別に大丈夫よ!?!」

ゼイル「? ならいいが……。あ、昨日の話、誰にも言うなよ?」

咲子「昨日の? ……ああ、分かったわ」

なんか、私とゼイルだけの秘密って感じで嬉しいような……………つて、

何考えてんの私!?!」

ゼイル「いきなりどうした? 大声で叫んで」

咲子「声に出してたの? ……なんでもないわ」

ゼイル「お、おう…」

そこから私たちは喋らなくなった。

…この空気も悪くないわね。

翔「おい、今の見たか？」

絵奈「見たよ」

メイ「咲子さんとゼイルさんが…」

学「一緒に歩いてるな…」

育也「いつのまにそんなに仲良くなったんだらうね？」

千早「…監視！」

千代「ナイス！」

咲子「…:…!」

なんか、視線を感じる…!

…あれは!

咲子「千早の能力！」

千早（隠れてる）「…ギクッ」

咲子「…真解除火桜！」 B L O O M !

シュツ…!

ゼイル「おお、今のなんだ？」

咲子「私の能力よ。相手の能力を解除し、一時的に使えなくするの」

ゼイル「…能力メインで戦うヤツには「天敵みたいな能力、でしょ？」 …何故分かった？」

咲子「いやー、なんとなく？」

ゼイル「はあ…」

—————

翔「クソオ、咲子のヤツ気付きやがった！」

千早「悔しいぜー！」

絵奈「凄いやね〜」

メイ「俺たちちつて気付かれてるのでしようか？」

ナオ「いや、気付かれてないと思うわよ？」

学「なんか、雰囲気か、な…」

育也「まさか、咲子が、ね…」

千代「…情報が欲しい！」

「…アンタたち、何やってんの?」

全員「!?」クルッ

日花「よつ。で、何やってんの?」

翔「あ、その…みんなでワイワイ登校してるだk」ならなんで咲子とゼイルの方をじつと見てるの?」…あ」

日花「つけるのはいいけど程々にしなさいよ。じゃ」スタスタ

絵奈「…危なかったね〜」

その後、みんなは咲子とゼイルに気付かれずに学校に着くのであった。

—————

そして…

咲子「嵐爆熱ハリケーン…改!」ボオオオ!

「ギャアアアアア!」

咲子「炎突の強化版!怒りの…鉄槌!テヤアア!」ドゴオ!

「うわあああああ!」

咲子「真フレイムダンス!からの…ブレイズスクリュー!」ゴオオオオ!

「っ、強すぎる…!」

『模擬戦終了!勝者桜木咲子!』

ゼイル「…咲子、強えな。ほい」
咲子「ありがとう！」

何故か調子が良い咲子であった。

サ○ズ戦の真似をしてみた①

side 桜木咲子

―昼休み、戦鬪場―

咲子「……………」

ルマ「……………」ギギギ…

咲子「…何してるの？」

ルマ「骨の枠を作ってるんだ」

咲子「…私を囲んで？」

ルマ「うん」

咲子「…何がしたいの？」

ルマ「まあ、みててよ」

咲子「はあ…」

―数分後―

出夢「やあ、久しぶりだね」

咲子「あ、先輩、お久しぶりです」

ルマ「先輩、伝えたい通りにして下さいね！」

出夢「もちろん、そのつもりさ」

咲子「……？」

ルマ「さて、そろそろかな？」

ドゴーン！

咲子「!?」

絵奈「ふう〜、バズーカ描くのしんどかったよ〜」

ルマ「絵奈、ご苦労さん。メイちゃんとナオ、これ持つて」

メイ「了解です」ガシツ

ナオ「ちよつと重いわね……」

咲子「……本当に何する気なの？」

ルマ「それはね……アンダーテールのとあるキャラクターの攻撃だよ！」

咲子「骨……重力……光線……あ。サ○ズ戦だ！」

ルマ「その通り！流石に青攻撃は再現出来なかったけどね」

咲子「で、勝利条件は？」

ルマ「全ターン耐えることだよ！」

咲子「……ノーダメで？」

ルマ「いや、そこは当たった時間とかを千早と千代が計算してるから大丈夫だよ」
咲子「なるほどね…いつでも来なさい！」

ルマ「オーケー！祐樹、合図お願い！」

祐樹「おう！…始め！」

その瞬間、周りの電気が消される。

出夢「←」

咲子「……来る！」

ボンツ！

咲子「うおっと！」サツ

出夢「↓」

重力が右向きになり、同時に大量の骨が迫ってくる。

咲子「真ん中から、上…下…上…下…下…よし！」

…と、思ったその時。

チュドーン！

咲子「うわっ！真ん中、下、真ん中、下…！」

光線のこと、忘れてたわ…

ルマ「1ターン目、クリア」

出夢「←」

重力は下向きになり、骨が迫ってくる。

咲子「小ジャンプ、小ジャンプ、小ジャンプ…イテッ！」ゴン！

うっかり上の方の骨に頭が当たってしまった。

千早「…残り93」

…今ので6減ったわね。

ルマ「2ターン目、クリア」

出夢「←」

咲子「なるほどね…」

青い骨の代わりに骨を下まで吊るした状態にするのね。

咲子「ジャンプして後退、ジャンプして後退、反対向きにジャンプして後退、ジャン

プして後退…よし！」

ノーダメで行けたわね。

ルマ「3ターン目、クリア」

出夢「←」

今度は段差が違うボーンギャップ（仮名）だ。

咲子「ええと、小ジャンプ、普通、大ジャンプ、小ジャンプ、小ジャンプ、普通…つ

と

これもノーダメだ。

ルマ「4ターン目、クリア」

出夢「←」

プラットフォームと骨が一緒にきた。

咲子「…フツ！」ピヨン

すぐにプラットフォームに飛び乗り、しゃがむ。

←その時の図

骨

咲子（しゃがみ）

プラットフォーム

骨

骨

骨

そして2個目のプラットフォームに飛び移り、すぐに飛び降りる。

ルマ「5ターン目、クリア」

…結構楽しいわね。

サ○ズ戦の真似をしてみた②

side 桜木咲子

ギューイン…ズドーン!

咲子「おっと!」サツ

私は今サ○ズ戦の真似をしている。

ルマ「…フューズー、クリア」

咲子「ふう、ここからしんどくなるわね」

視界は暗転する。

出夢「←」

咲子「…フツ!」ピョン

視界は暗転する。

ギューイン…

咲子「…ハッ!」サツ

ドガーン!

視界は暗転する。

咲子「上、真ん中、下、真ん中、上……」

視界は暗転する。

ルマ「次」

どうやらターンを数えるのをやめたようね。

ギユイイン……

咲子「フツッ！」「ドガーン！」……危なかつて「ギユイイン」……うわっ！」

ドガーン！

咲子「ぐっ！」

光線が腕にかする。

千早「……残り54」

ギユイイン……

咲子「……」サツ

ドガーン！

ルマ「次」

出夢「→」

重力は上向きになる。

咲子「……ハッ！」ピヨン

シャツ！

私はすぐ下にとび、上から骨が出てきた。

そして数回似たようなことが繰り返される。

出夢「↓」

ピヨン

シャツ！

出夢「←」

ピヨン

シャツ！

出夢「↑」

ピヨン

シャツ！

ルマ「次」

次は…ああ、骨が上下から一定間隔で迫ってくるやつか。

咲子「右↓、左↓、右↓、左↑と」

ルマ「次」

ギュイイン…ドガーン！

今度はさつきより太い光線が放たれる。

咲子「これは走り抜けるしかないわね！」ダダダ

走り抜けることで光線から離れたが、何発か当たりそうになった。危なかつたわね。

ルマ「次」

出夢「↓、←、←、→、↑、→、↓、←」

咲子「えつと…左、上、上、下、右、下、左、下…」ササツ

シャツ！（8回）

ルマ「よくここまでできたね。次が最後だよ！」

出夢「→、↑、←、↓」

咲子「下、右、上、左」サツ

そのあとの右、左、右、左…

出夢「—————↓」

私は右へと吹き飛んでいく。骨も迫ってくる。

咲子「上真ん中下真ん中上真ん中下真ん中上真ん中…下上下上下上…真ん中…左！」

サツ

シャツ！

視界は暗転する。

出夢「↓?」

咲子「右斜め上」サツ
シヤツ!

視界は暗転する。

出夢「↓?」

咲子「左斜め上」サツ
シヤツ!

視界は暗転する。

出夢「↑?」

咲子「左斜め下」サツ
シヤツ!

視界は (r y

出夢「←」

咲子「上!」サツ
シヤツ!

かわしたあとに…

ギユギユギユイイン…!

ブラコンの妹

side 桜木咲子

「放課後、さとかに隊基地」

ゼイル「ここだよな？」

咲子「そうよ。誰か来てるかしら？」チラツ

私はドアの間から中をみる。中には2人、人影が見える。

咲子「いるようね。入るわ……よ……」ガチャツ

私は中の光景に唾然とする。その光景は……

祐樹「……♪」チュウ

ルマ「ん〜♪」チュウ

……バカツプルがディープキスをしている光景だ。

咲子「……」ガチャツ

ゼイル「……なあ、咲子」

咲子「……そうね」

2人「見なかったことにしよう」

ゼイル「コーヒー飲むか？」スツ

咲子「ええ、ありがと」

ゴクゴク…

翔「おう、お前らもう来てたのか。なんで中に入らないんだ？」

ゼイル「…砂糖吐きそうになった」

絵奈「あ、なるほど（察し）」

翔「すでに終わってんじゃね？」ガチャツ

翔はドアを開けるが、

ガチャツ。

すぐに閉めた。

翔「……」パカツ（コーヒー缶を開ける音）

ゴクゴク…

絵奈「終わってなかったね」

咲子「…帰ろうk」「帰らないでくれー！」…はあ」

ルマ「早く来るとは思わなかったんだよ！」

咲子「…次は遠慮しなさい」

祐樹「ぜ、善処する…（だいたい始めるのはルマなんだよな…）」

翔「なら良し。入ろうぜ」

絵奈「あ、はは…」

私たちは中に入る。

―数分後―

メイ「咲子さん、問題です！キーパーコマンド16は？」

咲子「えつと…孤月十字掌！」

メイ「正解です！そこで俺はそれを少し変えた風斬の強化版、孤月十字斬を作りました！」

咲子「おお、どんな技？」

メイ「十字にクロスさせた飛斬撃ですよ」

咲子「なるほどね…」

そんな話をしていた時。

コンコン。

誰かがドアをノックしてきた。

？「お兄ちゃん！きたよー！」

咲子「お兄ちゃん？」

ゼイル「あ、妹だ」

咲子「茜つて子？」

ゼイル「そうだ。…今開ける！」
ガチャツ。

茜「お兄ちゃんだー！」ダキッ

ゼイルがドアを開けると、東花町中の制服を着た赤みがかつた黒髪の少女がゼイルに抱きついた。

ゼイル「おい茜、いきなり抱きつくなよ」

茜「ムフー。やーだ！」

全員「……………（あ、コイツブラコンだ）」

ゼイル「…10人以上から見られてもか？」

茜「うん！」

ゼイル「マジかよ…」

茜「ムフー…」

何、この空気。

咲子「…あのー」

ゼイル「ほら茜、咲子たちも困ってるだろ！」

茜「…ん？今お兄ちゃん、人を下の名前で呼んだ？しかも女子？」

ゼイル「…あ、やべ」

茜「まさか…変なものを食べた？」

ゼイル「食べてねーよ！（ふう、）お姉ちゃん候補 なんて言われなくて良かったぞ」

「それとも…：…あ？」

茜「変なものを飲んだ!？」

ゼイル「なんでそうなる!？」

咲子「…ねえゼイル、気まずいんだけど…」

ゼイル「あ、すまん。コイツは茜、俺の妹だ。ほら、自己紹介しろ」

茜「私は飛羽野茜！こう見えても中3です！よろしくです！」

翔「マジかよ、中1かと思っただぜ…」

茜「よく間違われます！」

咲子「慣れてるのね…」

茜「……………」じー

茜は何故か私を見つめている。

咲子「な、なに？」

茜「…貴女が3代目桜の桜木咲子さんですか？」

咲子「そうよ？」

茜「……サイン下さい！」サツ！

茜はどこからともなくペンと色紙を出してきた。

咲子「え、ええ……カキカキ

茜「ありがとうございます！」ニコッ

咲子「ど、どういたしました。……ところで、なにしにきたの？」

茜「……昨日、お兄ちゃんが帰ってきた時、目が綺麗ななつてたんですよ」

咲子「（あ、あれね）それで？」

茜「それで、どうやって腐りが取れたかきいてみると、『誰かに助けられた』って言われたんですよ」

ゼイル「お、おい茜、本人が隣に居るんだが？」

茜「それで怪しいと思って今日の朝お兄ちゃんの日記を見ら「はい、そこまで！」むぐー！」

ゼイル「それ以上言ったら嫌いになるぞ？」

茜「そ、それはやだ！話すのやめる！」

ゼイル「よし」

全員（扱いやすっ！）

咲子「……ねえ茜」

茜「なんですか？」

咲子「…能力つてあるの？」

茜「ありますよ。…スキマつて知ってます？」

咲子「…あー、東方の確か…八〇紫の能力？」

茜「はい、それです！私の能力は”スキマ”です！」

咲子「だから瞬時にペンと色紙を出したのね…」

茜「……………」じー

茜はまた私をじつと見つめる。

咲子「今度はなに？」

茜「……………」ダキッ！

咲子「え!？」

茜は私に抱きついてきた。

ゼイル「な、何してるんだよ茜!？」

茜「ムフー、あったかい…♪」

咲子「……まあいっつか。可愛いわね」ナデナデ

茜「ムフー」

全員（……空気になってる!?)

その後茜は日記の内容を暴露し、ゼイルと咲子は顔を盛大に赤くするのであった。
……内容は想像に任せる。

ゼイルの家①

side 桜木咲子

茜「ここです！」

咲子「へえ、ここが……」

私は、ゼイル（と茜）の家に来た。なぜって？

それは数分前に遡る。

―数分前―

咲子「それじゃ、解散」

スタスタ……

咲子「今夜両親出張なのよね……」

ゼイル「じゃあボッチか？」

咲子「そうなのよ」

茜「あ、じゃあ咲子さん、私達の家に来ませんか？」

咲子「……え？」

ゼイル「ちよつとまで茜、いきなり何言い出してるんだ!？」

茜「別にいいじゃん、減るものじゃないし」

ゼイル「家族以外の女子が家にきたら俺の精神がすり減るんだが？」

咲子「……………（ゼイルたちの事をもっと知りたいし、これはいい機会ね）茜、行くことにしたわ」

ゼイル「おい咲「了解です！」ちよ待つ「早速準備してくるわね！」まじかよ…」

茜「ここで待ってます！」

咲子「オーケー、急いで準備してくる！」ダダダ

そして私は荷物を準備し、基地に戻った。

茜「さてと、スキマオープン！」パカッ

なにもない空間に切れ目が入りそれが開いた。

茜「入ってください！」

咲子「ええ」スッ：

ゼイル「はあ…」スッ：

スキマの中はいろんなものが入っていた。おそらく茜の荷物なのだろう。

しばらく進むと、赤いマークがついているところがあった。

茜「ここでスキマを開いて、と！」パカッ

―外―

私達はスキマから出ると、前には白いアパートがあつた。
そして冒頭に戻る。

茜「ここです！」

咲子「へえ、ここが……」

ゼイル「……行こうぜ」

―数分後―

茜「ただいまー！」ガチャツ

咲子「おじやましませーす」

ゼイル「おじやましませーす」

茜「咲子さんは適当にくつろいでてください！」

ゼイル「俺は晩飯作つて来る」

咲子「あ、手伝うわよ？」

ゼイル「いや、別n「どうせ暇だし」……分かった」

茜（お兄ちゃん、咲子さんに弱いのかな？まさか……ね？）

ジユウウウウウ……

ゼイル「咲子、その「塩？はい」あざっす」シャカシャカ

咲子「あ、ゼイル、あそこに「コシヨウか？ほれ」ありがと」

モワワーン（甘いオーラ）

茜「……………（本当に昨日知り合ったの？マジで付き合っていないの？夫婦にしか見えな
いんだけど!?!）」（。ㇿ。ㇿ）

ーまた数分後ー

ゼイル「よし、できた」

咲子「こつちもできたわよ」

夕食はハムエッグにサラダというシンプルなものだった。どうやらゼイルたちも私
みたいに味噌汁はあまり作らない主義らしい。

茜「……………」（。ㇿ。ㇿ）

ゼイル「茜、どうした？」

茜「……………このリア充がっ！」

咲子「は？」

茜「2人のせいでブラックコーヒー三杯も飲んだんですよ！」（。ㇿ。ㇿ）

ゼイル「…なんでだ？」

茜「……………もういい（気付いてないの!?!あの雰囲気で!?!）…ゲホッ」↑砂糖吐く音

咲子「どうしたの、風邪？」

茜「…何でもないです！」ゴクゴク…

ゼイル「コーヒー飲みすぎるなよ？」

茜「…うん（誰のせいだと思ってるの!?!）」

その後私達はゆつくり夕食を食べた。

…何故か茜はコーヒーをヤケ食いならぬヤケ飲みしてたが。

ゼイルの家②

side 桜木咲子

夕食を食べた後、何故か茜が率先して食器洗いをしていた。なんかイライラしてたけど……大丈夫かな？

そして、私達は今……

咲子「……よし」

ゼイル「お前……強すぎだろ……」

スマブラをしていた。

咲子「ゼイルはまだまだね。もっとフレームを重視しないと」

ゼイル「それ、気にするのガチ勢ぐらいだぞ……」

咲子「ま、いいじゃない。もう一戦やりましょ」

ゼイル「いや、もういい。ボコされるの疲れたぜ」

咲子「むう……じゃあ、面白いこと話して」

ゼイル「……俺のようなやつがか？」

咲子「……ゴメン」

ゼイル「許す」

咲子「で、このコントローラーどこに」なおせば「いいの？」

ゼイル「なおす？壊れてるのか？」

咲子「あ、博多弁なんだった。どこにしまえばいいの？」

ゼイル「ああ、そこの棚だ」

咲子「オツケー」スツ

私はコントローラーを棚におした。

ゼイル「…なあ咲子、博多弁って他にどんなものがあるんだ？」

咲子「そうね…」なおす「は」しまう「でしょ？他には…あ、ほうきで「はく」は博

多弁では「はわく」になるわね。他は知らないわね」

ゼイル「なるほどな…ちよつとトイレ行ってくる」タタタ…

その時ちよつと茜が食器洗いを終えて戻ってきた。

茜「咲子さん、先にお風呂入ってていいですよ」

咲子「そう？じゃあ借りるわね」

私は茜に言われて風呂に入ることにした。

…これがちよつとしたハプニングになることを知らずに。

―風呂―

カポーン

咲子「ふう…温まるわね♪」

お湯はちようどいい温度に調節されていた。癒やされる…
その時。

ガチャツ

ドアが開いて…

ゼイル「風呂でも入る…か…」

何故かゼイルが入ってきた。

タオル一枚で。

私とゼイルの目があった。

咲子「……………出て行きなさい！／／／」

ゼイル「お、おう、すまん！」ガチャツ

ゼイルは急いで出ていき、ドアを閉めた。

咲子「……………／／／」カアアア

見…見られた！

咲子「ううう…／／／」

絶対この後気まずいことになる…！

私はその後半時間ほど風呂で悶えるのであった。

―半時間後―

咲子「……………／／／」

ゼイル「……………／／／」

茜「いやゝ、見事に引つかかったねゝ」

ゼイル「誰のせいだと…」

咲子「…思ってるのよ！／／／」

どうやら茜はゼイルがトイレから戻ってきた時にゼイルが風呂に入るよう仕向けたらしい。

ゼイル「で、なんでそんなことしたんだ？」

茜「……………甘い」

咲子「甘い？」

茜「甘いんですよ！2人の雰囲気がいそいで何回砂糖吐きそうになったと思ってるんですか!？」

ゼイル「……………？」

咲子「祐樹とルマのような雰囲気でしょう……………どこが？」

茜「しかもやり返しとして風呂でハプニングを起こそうとしたのに、結果的に雰囲気

が更に甘くなってます！私にどうしろと!？」

ゼイル「さつきから言ってることが分からんぞ？」

咲子「同じく」

茜「……もういい！」ゴクゴク……

茜は何故か逆ギレして、コーヒーを飲み始めた。

……ホントになんぞ？

ゼイルの家③

side 桜木咲子

茜を説教（何故か逆ギレしていた）した後、茜は自分の部屋に行った。そして今、私はゼイルと…

「ロードローラーだッ！」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラア！」

「もう遅い！脱出不可能よ！無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ッ！」

ジョジョ3部をNet○lixで見ている。

ゼイル「時間停止ってロマンあるよな…」

咲子「持つてたらなにをするの？」

ゼイル「移動時間の短縮とかか？」

咲子「へえ…男だからあんな事やこんな事をすると思っただわ」

ゼイル「俺にそんな欲望をない」

咲子「ま、ゼイルのことだしそんな事言わないのは知ってたけど」

ゼイル「地味にデイスられてる気が…」

咲子「…さて、次話っと」ポチッ

ゼイル「……………（ま、いいか）」

咲子「ところで、今の所のさとかに隊の印象は？」

ゼイル「そうだな…室見本体は真面目、室見分身は咲子に似てて、西新は戦闘狂、貝塚はマイペース、戸畑と羽犬塚はリア充、本松は口悪いが優しい、竹下は常識人、七隈兄妹は情報集めの天才…と言ったところか？」

…めっちゃ的確ね。てか、室見本体と室見分身ってなによ（笑）

あと…

咲子「……………」じー

ゼイル「どうした？」

咲子「私は？」

ゼイル（咲子か…優しいし強いし可愛い…かな？）

……………か…かわ…／／／

咲子「ううう…／／／」プシュー

ゼイル「どうした？顔赤くして」

咲子「私が…可愛い…／／／」

ゼイル「あ、声に出てたか？すまん、事実だ」

咲子「じ…事実…はうあく／＼／＼」プシユー

もう私のHPは0よ／＼／

ゼイル「ホントにどうした？熱か？」スツ

咲子「…!?!／／／」

ゼイルは手を私の額に当てる。

…二回目じゃん！

咲子「え、つと、その…ううう／＼／＼」

ゼイル「なんだ、熱ないじゃないか。なんで顔赤いんだ？」

咲子「……………」ガシツ

ゼイル「な、なんだ…？」

私は無言でゼイルの手を掴む。

咲子「……………」ポン

そしてその手を私の頭に置く。

ゼイル「…撫でてほしいのか？」

咲子「……………」コクツ

ゼイル「分かった」ナデナデ

ううう…癒やされる／／／

咲子「はうあゝ／＼／」

ゼイル（…ホント可愛いなコイツ）

咲子「可愛い…えへへ／＼／」デレデレ

ゼイルに言われたら照れちゃうな…♪

（いい加減好きだと気付けよ！）

ゼイル「……………（また赤くなってるないか？）」ナデナデ

咲子「…むきゅ／＼／」

ゼイル「（あ、そろそろ十一時か）…よっと」スツ

咲子「えっ／＼／」

私はいきなりゼイルに抱っこされる。

しかもお姫様抱っこで／＼／

ゼイル「部屋に連れてくぞ」

咲子「……………たい」

ゼイル「ん、どうした？」

咲子「ゼイルの部屋で寝たい／＼／」

もう…照れる／＼／

（元々照れてたじゃねーか！）

ゼイル「いやいや、なんでだよ！」

咲子「ダメ、かな…？」

私はルマに教えてもらった技（？）、上目遣いをする。

ゼイル「…ダメじゃない」

効果は抜群だ！（ポケモン風）

私はそのままゼイルの部屋に運ばれるのであった。

ゼイルの家④

side 桜木咲子

ーゼイルの部屋ー

ゼイルの部屋はベットと机と本棚がある至って普通の部屋だった。

ゼイル「下ろすぞ」

咲子「う、うん……／＼」スッ

ゼイル「ベットはお前が使え、俺は床で寝るから」

咲子「……ダメ」

ゼイル「は？」

……これ言うの、緊張する／＼／

咲子「わ、私と……寝なさい／＼／」

ゼイル「いやいや、好きでもない奴と一緒に寝るのはダメだろ」

咲子「え？私……」

………大好きだけど／／／

(運ばれてる時に好きだと気付いた)

咲子「……………と、とにかく！一緒に寝なさい！／＼／＼」
ゼイル「だから…」

ボスツ（ベットに飛び込んだ音）

咲子「ほら、ここ！／＼／＼」ポーン

ゼイル「……………分かったよ」

ゼイルもベットに入り、部屋の電気を消した。

ゼイル「…おやすみ」

咲子「おやすみ…／＼／＼」

近い近い良い匂い！

咲子「……………／＼／＼」ギユツ！

私は後ろからゼイルに抱きついた。

ゼイル「お、おい!？」

咲子「…しばらくこうさせて」

ゼイル「いや、その、柔らかい感触が…」

咲子「別にいいじゃない、減るもんじゃないし」

ゼイル「俺の理性がな…」

咲子「無くなったらどうなるの？」

ゼイル「…襲うかもしれないんだぞ？」

咲子「……………別にいいけど？」

ゼイル「は!?!と、とにかく、離れてくれ…」

咲子「むう…分かったわよ」

私はゼイルから離れる。

咲子（…好きになったからには思いっきりアタックしなきゃね!）

―次の日―

ガチャッ

茜「ふああああ…おはよう、お兄…ちや…ん…」

ゼイル「茜、助けてくれ」

咲子「……………♪」ギユッ

茜「あの…咲子さん？」

咲子「おはよう、茜♪」

茜「(なるほど…)…お兄ちゃん、がんばれ」ガチャッ

ゼイル「茜!?!」

茜「コーヒー飲もつと」

咲子「ムフー」

ゼイル「咲子離せ、遅れるぞ」

咲子「…しようがないな」

ゼイル「ハア、ハア…マジで理性が無くなるところだったぜ」

…後でもっとやろつと♪

その後私達は朝食を食べ、登校するのであった。

―登校―

咲子「……………♪」

ゼイル「……………」

チヨンチヨン。

咲子「あ、日花先生、おはようございます♪」ニコツ

日花「ええ、おはよ。良いことでもあったの？」

咲子「はい、おかげで絶好調です♪」

日花「(なるほど、ゼイルがね…)…頑張りなさい、じゃ」

咲子「はい、頑張ります♪」

ゼイル「……………？」

―朝の特訓―

咲子「怒りの鉄槌…V2！」ドゴオ！

翔「進化早くね!?!グハッ!

咲子「真チャカメカフアイアー!」ドガン!

絵奈「いきなり真!?!うわっ!

咲子「もつとかかかってきなさい!」

全員（調子良すぎない!?!）

3人目か…

side 室見メイ

メイ「……………」

ナオ「……………」

??「……………」

俺たちは今精神世界にいます。

そして、ここにいるのは…

メイ「緑色の目とパーカーの俺、メイと…」

ナオ「赤色の目とパーカーの私、ナオと…」

2人「…誰ですか、貴女？」

ヤエ「あたし？あたしはアンタ達の別人格さね。名前は室見ヤエ、属性は椿さ」

ナオ「…椿？」

メイ「土属性の亜種ですよ。…で、貴女は何が原因で生まれたんですか？」

ヤエ「…ナオと同じだよ」

メイ「つまり、エネルギー融合ですか？」

ヤエ「は？ちがうちがう」

ナオ「…どういうことよ？」

ヤエ「ナオはな…」

…元々いたんだよ」

2人「……………What？」

ヤエ「英語で驚かれても無理はないよ。…でも事実だし」

メイ「ど、どういうことです？俺は元々多重人格ということですか？」

ヤエ「その通り」

ナオ「じやあ私はずっと勘違いしてたという事？」

ヤエ「まあ、アンタが起きたきっかけとしては間違つてないさ」

メイ「きっかけ、ですか？」

ヤエ「そ、きっかけ。ナオは咲子のエネルギーとのぶつかり合い、あたしは自力で起きたのさ」

ナオ「は、はあ…」

ヤエ「ちなみにあたし達を含め、人格は5つある」

メイ「5つ!？」

ヤエ「片方は蓮、もう片方は桃属性だ。きっかけさえあれば起きると思う」

ナオ「つまり、実質属性5つ持ちになるわね…」

ヤエ「ん、そうなる」

メイ「そうですか…とりあえずヤエ、ここで模擬戦をしましょう」

ヤエ「オーケー！」

その後模擬戦をしたんですが、ヤエの防御力は半端なかつたですね。しかもイジゲン・ザ・ハンドが使えると知ったときは驚きました。

side 桜木咲子

―次の日―

咲子「あ、おはようメイ」

ゼイル「よう室見」

メイ「おはようございます咲子さん、ゼイルさん」

ナオ「おはよう咲子、ゼイル」

ヤエ「おはよ咲子、ゼイル…」

咲子「……………」

ゼイル「……………」

メイが3人いる？幻覚かしら？

2人「……………」(つハ) (こし) し

目を擦つてもう一度見る。

メイ「……………」

ナオ「……………」

ヤエ「……………」

ゼイル「…マジかよ」

咲子「本当に3人いる…」

ヤエ「バレたか。あたしは3人目の人格のヤエ。属性は椿さ。よろしく咲子、ゼイル」

咲子「え、ええ、よろしく…」

ゼイル「……………宿題が捗りそうだな」

ナオ「…確かに！」

そして私達は5人で登校するのであった。

―昼休み―

ヤエ「空前…！」ドゴツ！

ナオ「…絶後！」ドガツ！

次郎丸「ぐ…くそが…！」

メイ「冥冥斬り改！」ズバツ！

次郎丸「ガハッ！」バタン

『勝者、室見メイ！』

3人「…………ふう」

咲子「アンチに対して容赦ないわね…」

アンチに対して容赦ないメイ（たち）であった。

テスト勝負？

side 桜木咲子

メイの3人目の人格が起きてから二週間ほど経った。

その間メイたちの連携に圧倒されたり、ゼイルがルマをランク戦で倒し3位になったり、千早と千代の凄腕な情報収集能力によりゼイルをいじめていたやつらを見つけ、ぶっ潰したり（想像におまかせします）した。

そして：

咲子「うう：：寒い：：」ブルブル

11月末の現在かなり寒くなってきた。

ゼイル「大丈夫か、咲子？」

咲子「：：大丈夫!!!」

翔（どう見ても強がってるな）

絵奈（バレバレだよ）

ルマ「咲子、今日はなんの日か知ってる？」

咲子「えつと：：あ。テスト返し！」

メイ「その通り! 点数勝負をしようよ!」

咲子「オーケー! 中間では勝ったし、今度も勝ってやるわ!」

??? 「おっと、待ちなさい!」

咲子「あ、アンタは:」

ロジカ「折尾ロジカ(おりおろじか)よ! 国語で勝負しなさい!」

咲子「えっと: なんで私?」

ロジカ「いっつも私みたいに百点だからよ!」

咲子「は、はあ:」

言ったか分からないけど、私の得意教科は国語である。

ロジカ「とにかく、勝負しなさい!」

咲子「え、ええ:」

こうして、クラスで一番頭がいい(私は二番目)ロジカと点数勝負をするかになった。

―数分後―

日花「はーい、テスト返すわよー」カサツ

咲子「: : : : : : : : : :」ゴクリ:」

日花「国語の百点は、つと:」

来る……!

日花「咲子と、ロジカと、翔」

咲子「ふう……」

翔「つしや!」

ロジカ「くっ……」

国語は引き分けね。

―数分後―

日花「次は数学ね。百点は……」

今度は……?

日花「……咲子とロジカね。すごいわね」

咲子「よし」

ロジカ「また……?」

……復讐してて良かったわね。

その後も両者百点が続き、あと二教科になった。

日花「音楽の百点は……ロジカと千代!」

ロジカ「ふふっ、勝ったわ!」

千代「………(やったー!)」

日花「咲子は98点ね」

惜しかったわね…

咲子「…あとは保体のみ…!」

―また数分後―

日花「さあ、最後よ。保体の百点はルマと…」

ルマ「やたっ!」

ドクン…ドクン…（心臓の鼓動）

ロジカ「……………」

咲子「……………」

日花「…咲子よ!ロジカは96点ね」

咲子「…よし、勝った!!!」

2点差でギリギリ勝ったわね。ふう…

ロジカ「負けた…私が…負けた…?」ズーン

ロジカは見事なorzのポーズをとる。

咲子「……………ロジカ」

ロジカ「何よ、勝負に勝ったから調子に乗るつもり?」

咲子「違う、私はそんな事しないわよ。……………一緒に勉強する?」

ロジカ「……………考えておくわ」スタスタ
そしてロジカは去っていった。

咲子「……………返事を待ってるわ」

ゼイル（さつき負かせた相手を助けるとは…咲子は優しいな。可愛いし）」

咲子「えっ？／＼／＼」

ゼイル「ん？どうした？」

咲子「（今声に出てたわよー）…なんでもないわ」

ゼイル「…………？」

…………その後ロジカと仲良く勉強会をしたのは、また別の話。

2対2の模擬戦

side 桜木咲子

私達は基地でくつろいでいた。

メイ「咲子さん」

咲子「ん、どうしたのメイ？」

メイ「2対2の模擬戦をやってみませんか？俺とヤエ対咲子さんとゼイルさんみたいな感じで」

咲子「いい考えね。ゼイル、それでいい？」

ゼイル「おう、いいと思うぞ」

ヤエ「あたしの出番さね」

―数分後―

翔「よし、お前ら、準備できたか？」

4人「オーケー！」

♪DELTARUNE CHAPTER 2—BIG SHOT

翔「模擬戦…始めっ！」

メイ「先手必勝！狐月十字斬！」ズバツ！

咲子「当たらないわよ！絶イジゲン・ザ・ハンド！」ギョルルルル！

ゼイル「影斬！」ズバツ！

ヤエ「岩なだれ！」ドゴドゴドゴッ！

私達の技がぶつかり合う。そして互いを相殺しあつた。

咲子「絶チャカメカフアイアー……」ポイツ

メイ「!! 離れ……」

咲子「着火！」

ドガーン！

メイ達は爆発に巻き込まれる。

ゼイル「鬼畜な技だなおい」

咲子「そう？」

煙は晴れ、少しダメージを食らつた2人が出てくる。

ヤエ「……危なかつたな」

メイ「ですわね」

ゼイル「防御されたようだな。絶ウインドブラスト！」ピュウウウン！

メイ「効きません！真晴天飛梅！」BLOOM！

ヤエ「追撃だ！曇天椿舞！」 B L O O M !

ゼイル「…やべっ！」

咲子「させない！怒りの鉄槌V2！」 ドゴオ！

ヤエ「…ガッ！」

ゼイル「危なかつたぜ…」

メイ「…なかなかやりますね。ヤエ、そろそろ本気で行きましょう！」

ヤエ「ああ、そうだな…！」

咲子「ゼイル、私達も本気で行くわよ！」

ゼイル「…おう！」

ヤエ「岩なだれ…！」 ドゴドゴ…

ヤエは岩をいくつか出し…

メイ「絶ウインドブラスト！ハアツ！」 ビユウウウン！

それをメイが風で発射した！

ゼイル「考えが斬新だなおい！」

咲子「ハアアアアツ！ムゲン・ザ・ハンドG9！」 ガシガシガシツ！

私は260本の腕で飛んでくる岩を止める。

ゼイル「手の数半端ないな…」

………！

咲子「…ゼイル、いい考えがあるわ！」

私は作戦をゼイルに伝えた。

ゼイル「上手くいくのか？それ」

咲子「ええ、上手くいくはずよ！」

ゼイル「…分かった、やろう！」

咲子「オーケー、作戦開始！」ダッ！

私はメイとヤエに向かって走っていく。

メイ「接近戦ですか。冥冥斬り改！」ズバッ！

咲子「よっ」ピョン

メイ「えっ!？」

咲子「…今よ、パス！」

ゼイル「ああ、オラア！」ポイツ

ゼイルは壺の形をした影の塊を投げてきた。

咲子「絶チャカメカファイアー！」すぽっ

私はその中にチャカメカファイアーを入れ：

咲子「流星…ブレードッツ！」バシユツ！

それを思いっきり蹴った。

ギユウン、キラーン、ドガアアアン、シユウウウウウツ！

影を纏った赤い流星が2人を襲った。

メイ「嘘ですよね!?!…うわっ!?!」

ヤエ「この…威力は!?!…ぐわっ!?!」

翔「……………勝者、ゼイルと咲子!」

ゼイル「…上手く行っただな」

咲子「うん! (ゼイルと連携技ができた♪)」

メイ「土壇場で新技ですか…」

ヤエ「油断してたね…」

その後も模擬戦を数回戦し、各自帰宅した。

咲子の1日

side 桜木咲子

17:00am

咲子「ふあああ…」

私はいつもこの時間帯に起きる。アラームはいらぬ。

咲子「手すりつと」

シャーツ。

手すりを滑って1階に降りる。

春菜「咲子、おはよう」

咲子「おはよ母さん」

春菜「最近学校はどう？」

咲子「…まあ、そこそこかな？」

春菜「ふーん。じゃあアンタはなんで最近部屋でゼイルがなんとかか何とか言ってる

のかしら？」

咲子「あ」

春菜「声が大きいからバレバレよ。で、ゼイルって誰？」

咲子「え、えつと……／＼」カアアア

春菜「…なるほどね。やっと女子らしいことしてるじゃない♪」

咲子「…勘のいい母さんは嫌いよ」

春菜「まあまあそんな事言わずに…そのうち連れてきなさいね♪」

咲子「う、うん…／＼」

私は朝から顔を赤くするのであった。

17:30 am

咲子「行つてきまーす」

春菜「行つてらっしやーい♪」

私は家から出る。そしてとある曲がり角で待つ。

咲子「……………」

スタスタ…

ゼイル「ん？あ、咲子。よう」

そして偶々ゼイルに会う。

咲子「ゼイル、一緒に行きましよ？」

ゼイル「…………別がいいぞ」

ゼイルははじめの頃は躊躇っていたが、今はすんなり受け入れる。

咲子「……………♪」

ゼイル「で、なんでそんなにくつついてんだ？」

咲子「…秘密♪」

ゼイル「お、おう…」

私達は雑談をしながら登校した。

17:50

朝の特訓

ゼイル「流星……………」ポイツ

咲子「…ブレード！」ドゴツ！

シユウウウウウウツ！

メイ「おお…もう完成してますね！」

ヤエ「あたしも頑張らんとね！」

18:20

日花「出席とるわよー」

そして学校が始まった。

14:00↑一気に飛ばす

…そして学校が終わった。

私は一旦家に帰り、パーカーに着替え、さとかに隊基地に向かった。
―さとかに隊基地―

私とメイはイナイレ3で通信対戦をしている。

咲子「グランドファイアーG5！」

メイ「……………」

咲子「よし、もうTPはないし、これなら…」

メイ「イジゲン・ザ・ポスト！」

ボールはポストに弾き飛ばされてしまった。

咲子「え、うそおおおん!？」

メイ「TP0でも角度が大丈夫ならなんでも跳ね返されます!」

咲子「…バグ?」

メイ「いえ、そういう仕様です」

咲子「知らなかった…」

そして、私は案の定負けた。

―帰宅後―

咲子「……………」

プルルルル…

来い来い来い来い恋来い来い！

ピッ

咲子「……来た！」

ゼイル『もしもし』

咲子「ゼイル、私よ！」

ゼイル『おう、咲子か。どうしたんだ？』

…ただ声が聞きたかったとは言えないわね…

咲子「ちよつと話したかったのよ」

ゼイル『そ、そうか…』

そして私達は半時間ほど電話で話した。

ピッ

咲子「………♪／／／」

ゼイルはガードが高いからね…どうやって落とそうかしら？

咲子「…一旦トイレ行こ」ガチャッ

部屋のドアを開けた次の瞬間。

咲子「……お母さん!？」

春菜「…あ、バレた」

ドアの前にお母さんがいた。

咲子「…全部聞いてたの？」

春菜「いや、良いものを見せてもらったわよ♪」

咲子「な、な、な…／＼／＼」

春菜「あらあら、照れちゃって」

咲子「…／＼／＼」プシュー

春菜「やりすぎちゃったかしら？うふふ♪」

咲子「」

私はトイレに行った後、寝るまでベッドで悶えまくるのであった。

メイの1日

side 室見メイ

15:30 am

ピリリリリリ!

メイ「……んう」

カチャツ。

俺は毎日この時間帯に起きます。

メイ「パーカー着てつと。……分身!」

ポワン!

ナオ「ふああ……」

ヤエ「おはよ」

メイ「さて、ランニング行ってくるので、素振りと朝食の準備をお願いしますね」

俺達は交代交代でランニング、素振り、朝食の準備をします。

2人「行つてらっしゃい」

メイ「はい、行つてきます!」タタツ……

ヤエ「…あたしは素振りっ」と

16:20am

朝食を食べた後、俺達は普通にゲームしてます。

最近はずきさんが真似していた（無理やりされてた）アンダーテールにはまってますね。

メイ「……ふう、勝てました」

本物のサ○ズ戦は難しかったです。

ナオ「もう!? 私は不死身アン○インで拮抗してるのよね…」

ヤエ「あたしは今Pルートやってるからネタバレはやめてよ」

17:45am

メイ「そろそろ行きましょっか」

ナオ「そうね」

ヤエ「技を鍛えてやるよ!」

17:50a (ry)

メイ「狐月十字斬!」ズバツ!

ナオ「怒りの鉄槌!」ドゴオ!

メイ「…いつの間になんか使えなくなってますか?」

ナオ「隠れて特訓してた」

メイ「なるほど」

ナオ「後はこれね。…ブレイズスクリュー！」ゴオオオオオツ！

メイ「おお…すごいですね！」

ナオの努力に成果を称賛する私でした。

18:20

風太「出席とるぞー」

そして学校が始まりました。

14:00

…そして学校が終わりました。

俺達は一旦寮に戻り、パーカーに着替え、基地に向かいました。

…かと思いきや今日は金曜日だったので、お泊り会の準備もしてから行きました。

※咲子達は毎週金曜日基地で泊まっている。結構快適。

ーさとかに隊基地ー

メイ「あ、こんにちは、千早さん、千代さん」

千早「よう」カタカタツ…

千代「……こんにちは」カタカタツ…

2人はプログラミングをしていました。

メイ「何作ってるんですか？」

千早「……秘密だ」

千代「企業秘密よ」

メイ「は、はあ……」

―数分後―

咲子「おーいメイ、イナイレやろー♪」

メイ「“おい磯野、野球しようぜ！”またいなノリですか？」

咲子「そ。今日こそ勝ってやるわ！」

ま、その後咲子さんが負けたのは言うまでもありませんね。

―数時間後―

メイ「俺はそろそろ寝ますね」

咲子「ええ、おやすみ」

俺は布団に入り、すぐ眠りに付きました。

―精神世界―

メイ「で、なんでここに呼び出したんですか？」

ナオ「……………」じー

ヤエ「……………」じー

メイ「ど、どうしたんですか？」

ナオ「…タツチ」ポン

メイ「え？」

ヤエ「……………」に

メイ「に？」

ヤエ「逃げろー！鬼ごっこだメイ！」ダダダダダ

メイ「え!?あ、ちよっと!？」

俺は精神世界で鬼ごっこをするのでした。

ゼイルの1日

side 飛羽野ゼイル

17:00

ゼイル「……朝か」ムクツ

俺は毎日こうやって起きる。

ゼイル「……茜を起こして来るか」

スタスタ

茜「お兄ちゃん……大好き……むにやむにや……」

ゼイル「……どんな夢見てんだ、コイツ」

……起こすか。

俺は茜に近づき……

ゼイル「……早く起きねーと朝飯抜きだぞー」ボソツ

そつとささやいた。するつ

茜「え!?待って待って、今起きるからあ!」ガパツ

ゼイル「……大袈裟だなおい」

茜「…あれ？お兄ちゃん？」

ゼイル「おう、おはよう茜」

茜「…私ご飯抜き!?!」

ゼイル「安心しろ、冗談「じゃあ寝よつと」…じゃないぞ「え、じゃあ起きる…」…
どつちかにしろ」

茜「うーん…起きる！」

ゼイル「よし、なら行くぞ」

茜「はーい！」

その後俺らは準備をし、家をでた。

17:30

ゼイル「…ん？あ、咲子。よう」

曲がり角に咲子がいた。

咲子「ゼイル、一緒に行きましょ？」

また誘われたな。別にいいが。

ゼイル「…別にいいぞ」

そして咲子は俺にくつついてきた。

咲子「……………」

ゼイル「で、なんでそんなにくつついてんだ？」

咲子「…秘密♪」

ゼイル「お、おう…」

可愛いなその笑顔」

咲子「……／／」カアアア

ゼイル「……？」

17:50

ゼイル「流星……」ポイツ

咲子「…ブレード！」ドゴツ！

シユウウウウウツ！

メイ「おお…もう完成してますね！」

ヤエ「あたしも頑張らんとね！」

18:20

日花「出席とるわよー」

そして学校が始まった。

14:00

…そして学校が終わった。

俺は一旦帰り、パーカー（咲子達からもらった）に着替え、さとかに隊基地に向かった。

ーさとかに隊基地ー

咲子と室見本体はイナイレで通信対戦をしていた。

……前々から思ってたんだが女子がするようなゲームじゃねーぞ？

そんなことを考えてる俺は……

千早「他にあるか？」

ゼイル「ああ、……とかか？」

千代「うん、いいわね。ありがとう」

ゼイル「おう」

七隈兄妹に話をしてから西新達と雑談をしていた。

ー帰宅後ー

ゼイル「……さて、M u l aでも見るk」

ピリリリリリリッ！

……パーフェクトタイミングでスマホが鳴った。

ピッ

ゼイル「もしもし」

咲子『ゼイル、私よ!』

…言い方が俺俺詐欺みたいだな。

ゼイル「おう、咲子か。どうしたんだ?」

咲子『ちよつと話があったのよ』

ゼイル「そ、そうか…」

何を話せばいいんだ?これ。

俺達は半時間ほど色々話した。

ピッ

ゼイル「ふう…M u l a 見るか」

俺に“1番好きなアニメは?”と聞いたら絶対“M u l a のものおきば”と答える自信がある。

俺は最新話を見た後、すぐに寝た。

普通のお泊り会！①

side 桜木咲子

今日は金曜日で、毎週恒例のお泊り会である。

だけど…

メイ「さあ咲子さん、弾いて下さい！」

咲子「はあ…」

私はとあるエグいピアノの曲を弾くことになった。

何故こうなったかは数分前に遡る。

メイ「咲子さんってピアノ弾けますか？」

咲子「指使い間違ってるけど、弾けるわよ」

メイ「習ってたんですか？」

咲子「いや、独学」

メイ「凄いですね…どれくらい弾けますか？」

咲子「そうですね…MEGALOVANIAの最高難易度を普通に弾けるレベルかしら

？」

メイ「じゃ、先に基地で待ってます！」 タタツ：

咲子「はあ…」

私は家から電子ピアノを持っていった。家が基地に近くて良かったわ…。

―基地―

全員「……………」

咲子「はあ、はあ…持ってきたわよ、メイ」

ゼイル「ところで咲子って何弾くんだ？」

咲子「R U S H E」

ゼイル「マジかよ…」

メイ「さあ咲子さん、弾いて下さい！」

咲子「はあ…」

私はピアノのコードをコンセントに繋げ、電源をつける。

メイ「さあ、流しますよー」

咲子「…………ムゲン・ザ・ハンド」ギユウウウン！

♪Sheet Music Boss—R U S H E

……………ミ

……ミ

……ミ

……ミ

……ミ

……ミ

……ミ

……ミ

……ミ

……ミ

……ミ

ラドミド……ラドミド……

冷静にピアノを引続ける。

まだ序盤なので、簡単に弾ける。

タラララタラララタララタララタララタララタララタララタラララン♪

ミを連打する。そろそろ両手じや無理なのでムゲン・ザ・ハンドの手で補助をする。

メイ「……………」

ゼイル「すげえ…」

絵奈「きれいに弾けてるね〜」

…そろそろね！

咲子「E！」

ターラン、

RUSH

タン、タン、

E

ターラン、

RUSH

タン、タン

E

ターラン、

RUSH

タン、タン、

E

ターラン、

RUSH

タン、タン、

E

ターラン、RUSHタン、タン、E

ターラン、RUSHタン、タン、E

ターララーララーララーララーララーララーララーララーラ

たたかいはじまりだ

咲子「うおおおおお！」

私は何本もの手でピアノを弾く。はつきりと言うわ、超しんどい。

ターララッタッタッタッタッタターララッタッタター、

ターララーラッタッタッタッタッタッタッタッタッタ

バンバンバンバン！

翔「弾けてるな…」

メイ「すごいスピードですね」

ターララッタッタッタッタッタッタ、タッタ

R U S H E

ラ ス ト ス パ ー ト ！

咲子「ドドドドド

鍵盤で押していないキーが無いほど、私は本気で弾く。

R U S H E

タララララララララララララララララララララララララン♪

バーン…

咲子「EEEEEEEEEEEEEEEEEEEE！」

∧ ● ∨

—

i t i t i t i t i t

→終わった直後の咲子の顔のイメージです。

―その後―

咲子「指が……」

絵奈「あはは……」

メイ「凄かったですよ、咲子さん！」

咲子「ええ…指の感覚が無いわ……」

翔「冷やしてやるよ、休んどけ」パキッ
咲子「ありがとう」
お泊り会は続く

普通の お泊り会！ ②

side 桜木咲子

とんでもない曲を弾いた後、私達（私、ゼイル、メイ、翔、学、絵奈）は宇宙人狼（A mong us）をやっていた。

咲子「私は食堂にいたわよ」

ゼイル「俺もだ」

メイ「俺はエンジンですね」

学「俺は翔と医療室にいた」

絵奈「私は電気だよ」

翔「学と医療室にいた」

6人「……………スキップで」

↓数分後（分かれた）↓

咲子「え、誰が死んだの!？」

翔「絵奈だな」

絵奈「……………」チーン

メイ「遺体は廊下にありました」

ゼイル「……………」

学「…ゼイル、なんで黙ってたんだ？」

ゼイル「学がベントしてたのを目撃した」

学「な……!?!」汗汗

咲子「…黒ね」ポチッ

学 was the imposter.

ゼイル「…よし」

咲子「すごいわね」

ゼイル「偶々だ」

学「くっそー!」

翔「学はポーカーフェイスを覚えろ」

学「おう…」

絵奈「もう一戦やる？」

咲子「いや、そろそろ夕食タイムね。今週の料理当番は私ね」

ゼイル「…ところで、戸畑と羽犬塚が見当たらないぞ？」

咲子「家の中にいるのよ。料理してくるわねー」ガチャッ

私は倉庫を出て祐樹の家に入る。

祐樹「あ、よう咲子」ナデナデ

ルマ「~~~~~♪」

祐樹はルマを膝に寝かせて頭を撫でていた。

…ゼイルとできるようにアタックしなきゃ!

咲子「祐樹、台所借りるわよ」

祐樹「おう」

言い忘れていたが、祐樹の両親は毎週金曜日夜勤だからお泊り会をしている。

ー台所ー

咲子「今夜は確か…カルボナーラね」

ゼイルの大好物らしい。

………本気で作るわ!

ー半時間後ー

よし、できた♪

ルマ「おお、おいしそうだね!」

咲子「みんな呼んできてくれる?」

ルマ「オーケー♪」タタッ

「数分後」

翔「んめーなコレ！」

絵奈「美味しいね〜♪」

ゼイルはどう

ゼイル（今まで食ってきたカルボナーラで一番美味しいな。咲子はいいいお嫁さんになる」

かnnnnnnnnnnnnnnnnnnnn（バグった）

咲子「……………はうあく／＼／」プシユ〜

お：およmmmm（またバグった）

学「…コーヒー買ってくる」

育也「あはは…」

千早「……………甘いな」

千代「……………甘いわね」

ルマ「あーん♪」

祐樹「……………ん」パクツ

……………。

咲子「ハッ！」

ゼイル「どうした、咲子？」

咲子「えつと…」チラッ

確かゼイルに…

『いいお嫁さんになる』

『いいお嫁さん』

『お嫁さん』

『お 嫁 さ ん』

咲子「…はうあゝ／＼／」テレテレ

翔「…ゼイル」

ゼイル「なんだ？」

翔「…気付け」

ゼイル「何に？」

絵奈「…鈍感だね」

咲子「……………／＼／」プシユ

私はその後10分ほど顔を真っ赤に染めるのであった。

普通のお泊り会！③

side 桜木咲子

私はしばらく顔を赤くしたあと、夕食を食べ、倉庫に戻った。

絵奈「こうかな？」

千早「ああ、そこをそうして……」

咲子「なにしてんの？」

絵奈「秘密だよ」

千早「秘密だ」

千代「……」カタカタ

咲子「ふーん」スタスタ

翔達は……

翔「よし、再生するぞ……」

学「……んぐ」

祐樹「ブハッ、はははははは！」

育也「はははっ！」

ゼイル「……よし」

面白動画で笑ってはいけないうをやっていた。

メイ達は……

『ゴオオットオオオ……キャッチ！』

メイ「出ました、ゴットキャッチG3！」

ルマ「おお……」

……イナイレアニメの鑑賞をしていた。

咲子「私も見ろ！」

メイ「どうぞ」

そして私はしばらくイナイレの鑑賞をした。

12時間後

咲子「あ、もう8時ね」

翔「そっか。じゃあそろそろ……部屋割りの時間だ！」

私達は毎週倉庫の地下室を寝室代わりに使っている。部屋は5つあるため、1人ここので寝ることになる。

ゼイル「今回はどうやって決めるんだ？」

翔「そうだな……よし、今回はババ抜きで決めるぞ！先に上がったヤツが部屋を決める

「ことにするぜ！」

絵奈「いいね〜！やろうやろう〜！」

―数分後―

無言ババ抜き、スタート！

咲子「……………」スツ

メイ「……………」スツ、パサツ

ゼイル「……………」スツ、パサツ

翔「……………」スツ

祐樹「……………」スツ、ズーン

…祐樹がジョーカー持つてるわね。

ルマ「……………」スツ、パサツ

学「……………」スツ

育也「……………」スツ、パサツ

千早「……………」スツ

千代「……………」スツ

私はあと…

咲子「……………」スツ、パサツ

…さっきので1枚残っている。

メイ「……………」スツ

ゼイル「……………」おつ、上がりだ」スツ、パサツ

ゼイルはちようど今0枚になった。

翔「どっちの部屋にするんだ？」

ゼイル「…1番奥の部屋で」

翔「オーケー…」スツ、パサツ

ゼイル「じゃあな」スタスタ

ゼイルは地下室に荷物を置きに行った。

―数分後―

咲子「……………」おおつ、上がり！」スツ、パサツ

私が2位だった。

翔「どの部屋…聞かなくてもいいか」

咲子「ええ、行ってくるわね♪」スタスタ

翔「おう…」

私はゼイルと同じ部屋に向かった。

―部屋―

ガチャッ。

ゼイル「よう、2位は咲子か？」

咲子「そ。私もこの部屋にしたの」

ゼイル「……そっか」

咲子「…ねえゼイル」

ゼイル「なんだ？」

咲子「その…」

緊張するわね…

咲子「好きな人とか…いたりするの…？」カアアア

ゼイル「ツ……なんでその質問を？」

咲子「…質問を質問で返さないでくれる？」

ゼイル「どこの吉良吉影だよ…」

咲子「………」じー

ゼイル「…いるぞ」

え、いるの!?! 誰誰誰誰!?

咲子「誰なの!?!」

ゼイル「…秘密だ(咲子だとは言えない…)」

咲子「ブーブー、ケチ」

ゼイル「…その内分かるだろ、多分」

咲子「…そう」

その後しばらく雑談するのであった。

普通のお泊り会！④

side 桜木咲子

ゼイル「……そろそろシャワー行って来る」

咲子「ええ、行ってらっしゃい」

ゼイルは服とタオルを取り、部屋を去った。

咲子「……ゼイルが寝転がってた布団……」

……。

…モフツ。

すうーはあー。

咲子「……いい匂い」

別に匂いフェチではないけど、癒やされる匂いだ。

咲子「……ムフ♪」ゴロゴロ

まるでゼイルに抱きつかれてるような気分ね♪

咲子「ゼイル……」

私はいつゼイルのことが好きになったんだろう。

家に泊まった時?…その時気付いたけど、違う。

ゼイルの過去を知った時?…それも違う。

一目惚れ?…第1印象は普通だった。

いつだろう?…。

…まあいいや。惚れた時は関係ない。

いつ告白しようかな?

クリスマス? 雰囲気があるタイミング?

……。

咲子「…今でしょ?」

今夜、告白しよう。

無理だったら、振り向いてもらえるように努力する…なんてフラグが立つ考えはし

ちやダメね。

……。

―数分後―

咲子「……そろそろ戻ってくるわね」

ゼイルの布団を直して…と。

咲子「……「ガチャツ」…おかえり、ゼイル」

ゼイル「…おう、シャワー空いてるぞ」

咲子「そう？じゃあ行って来るわね」

私は移動やシャワーの合間で告白のセリフを考えるのであった。

ーシャワーシーンはカット！ー

緊張するわね…

ガチャツ

咲子「…ただい…ま…」

ゼイル「…あ、やべ」

ゼイルは私の布団でうつ伏せになっていた。

咲子「な…な…!?!」

ゼイル「こ、これは、その…」

咲子「…私の布団の匂いを嗅いでた、と」

ゼイル「ご、誤解だ、転んじまっただけだ！」あたふた

咲子「…ホントに？」

ゼイル「ホントだ」

咲子「…分かったわ」

…作戦開始よ！

ゼイル「おう…（ふう、誤解されたら社会的に殺されるところだつて「えいつ！」うおつ!）」ボスツ

私はゼイルを布団に押し込む。そして…

咲子「……………／／」ギユツ

ゼイル「お、おい、咲子!」

思いつきり抱きついた。

むにゆつ。

…わざと胸を押し当てながら。

咲子「ねえゼイル」

ゼイル「…なんだ」

咲子「……………好きな人に抱きつかれたら、どんな気持ちになるの?」

ゼイル「（おいおいまさかバレたのか?!）…嬉しいんじゃないのか?」

咲子「ふーん…じゃあ、好きな人に抱きついたら、どう思う?」

ゼイル「…質問の意図が分からんぞ」

咲子「…分からないの? ホントに?」じー

ゼイル「俺が抱きついたら? でも抱きついてるのは咲子だろ…ってまさか!」（コイツ、

俺のことが…ありえねー、そんなことは…!）」

咲子「やつと気付いた？」

……好きなのよ、貴方のことが
ゼイル「……………」

普通のお泊り会！ ⑤

side 桜木咲子

咲子「…好きなのよ、貴方のことが」

ゼイル「……………」

私は一旦ゼイルから離れる。

咲子「いつ好きになったのかは分からない。…でも、貴方と一緒にいて、私は次第に好きになった。…飛羽野ゼイル…君、私、桜木咲子と…付き合ってください」

そして告白をした。

ゼイル「……………」

……俺は本当に鈍感だな、両想いだったのに」

咲子「……!!」

ゼイル「俺の過去を話した時、嘘だと言って信じてもらえないと思ってた。……だが、お前は信じ、慰めてくれた。おかげで目の腐りも取れたし、心も軽くなったんだ。……だから、ここではつきりと言う。

……俺、飛羽野ゼイルは、貴女、桜木咲子さんのことが……好きです。付き合ってください」

……嬉しい！

咲子「……ゼイル」

ゼイル「……咲子」

私達は息を吸い、同じ言葉を同時に言う。

2人「よろしくお願いします」

……。

咲子「…ふふっ」

ゼイル「…ははっ」

咲子「これで私達は恋人同士なのよね？」

ゼイル「ああ、そうだな」

咲子「…大好き！」ギユツ

ゼイル「おっと」ダキッ

私は抱きつき、ゼイルは私を抱きとめた。

咲子「ゼイル、今夜は一緒に寝よ？」

ゼイル「…もちろんだ」

私達は幸せな気持ちに包まれながら一緒に寝るのであった。

ガチャッ

翔「おい咲子、ゼイル、ゲームしよ…マジか」

絵奈「そうしたの？…：…おおう」

メイ「はわわわ…：／／／」

学「…コーヒー飲んでくる」スタスタ

育也「幸せそうだね…」

千早「…ごちそうさまでした」

千代「……………」パシヤッ

全員「…ナイス！」

翔「明日の朝この写真であいつらに質問攻めをしようぜ」

絵奈「いいね」

スタスタ

咲子「……………」スヤスヤ

ゼイル「……………」スヤスヤ

2人がそれに気付くことはなかった…

―次の日―

チュンチュン…

ゼイル「ん……………」ムクツ

咲子「……………」ギユツ

ゼイル「…起きてるのか？」

咲子「…うん、おはよう」

ゼイル「おはよう」

咲子「しばらくこうさせて？」

ゼイル「いいぞ」

―数分後―

咲子「…も面白いわよ」

ゼイル「そうか。…朝飯食いにいくか？」

咲子「…そうしましょつか」

私達は荷物を整理し、移動した。

―祐樹の家、ダイニングルーム―

2人「……………」

今日の朝食は……赤飯だった。

翔「…昨日はお楽しみだったか？」

絵奈「くつつくの遅かったね〜♪」

咲子「な…な…!？」

ゼイル「…いつバレた!？」

学「バレバレだぞ」

育也「抱きあってたしね」

メイ「だから、今日は赤飯です！」

咲子「……………はうあく／＼／＼」プシユ

ゼイル「咲子!？」

私は昨日の告白と今起きた出来事に耐えられず、オーバーヒートするのであった。

茜「ごちそうさまでした…ゲホツ」

side 桜木咲子

お泊りが終わった後、私は一旦帰り、その後ゼイルの家に向かった。

ーゼイル宅ー

ピンポーン

咲子「……………」

ガチャツ

茜「あ、咲子さん、こんにちはです。聞きたい事があるのでお入り下さい」

…もうバレたのかしら？

咲子「…失礼します」

スタスタ

ゼイル「……………咲子」ズーン

ゼイルは精神的に疲れたような表情をしていた。

咲子「大丈夫？」

ゼイル「大丈夫…じゃねえ…帰って早々質問攻めにあつた」

咲子「だからそんな顔してるのね…」クルツ

茜「……………」じー

振り向くと茜が観察してるような目で私達を見ていた

咲子「…ど、どしたの茜？」

茜「咲子さん…あなたが先に告白したということはホントですか!？」キラキラ

咲子「そ、そうよ…？」

茜「……………」

咲子「きき？」

茜「きやあああああああああ→→→→→！」

茜は突然叫ぶ。

咲子「ど、どうしたの!？」

茜「……………」咲子さん」ズンッ

茜は顔を近づけてくる。

咲子「な、なに？近いよ…？」

茜「…咲子お義姉さんって呼んでいいですか？」

咲子「…ふえ!？」

お、お義姉さんって…早いよ／／／

咲子「／＼／」

茜「あー、やっぱ今は答えなくていいです」

咲子「そ、そう…」

ゼイル「茜、それ以上聞くのはやめとけ…俺が恥ずか死ぬ…」

茜「…分かったよ、お兄ちゃん。咲子さん、お兄ちゃんをよろしくです♪」スタスタ

茜はそう言つて部屋を去つた。

咲子「…なんか茜の威圧が凄かつた」

ゼイル「なんでだろうな？」

咲子「さあ?…んっ」

チュツ

ゼイル「んむっ!?!…ぷはっ…な、ななな何すんだいきなり!?!」

咲子「何つて?…ファーストキスよ／＼／」

ゼイル「そ、それを何故今?」

咲子「…甘え足りないのよ」

ゼイル「彘?」

咲子「だーかーらー!目の前にゼイルがいるのに何もシてないから我慢できないの

!」

ゼイル「“してない”の発音が違う気が…うおっ」ボスツ
ゼイルをソフアーに押し倒す。

咲子「…ツ／／…んく！」ギユウウウ

そして顔を赤くしながら前から抱きしめる。

ゼイル「…はあ」ナデナデ

そんな私の頭をゼイルが撫でる。

side 飛羽野茜

モワモワ（甘々オーラ）

私はお兄ちゃん達をこっそり見ていたけど…

茜「…甘すぎる」

前咲子さんが来た時も甘かったけど、これはやばいよ!? 付き合い始めたの昨日だよね
!?(雰囲気の) 加減がないにもほどがあるでしょ!?

茜「お兄ちゃんが付き合うのは妹として嬉しいけど…ゲホツ」

やばい、コーヒー飲まないと…

茜「あつた…」

パカツ、ゴクツ

私は黄色と黒の缶コーヒーを開け、一口飲m…

茜「…って、これマツ缶じゃん!」
苦いものが飲みたかったのに…!

チラッ

咲子「~~~~~♪」ギユッ

ゼイル「……………♪」ナデナデ

…お2人さん、

茜「ごちそうさまでした…ゲホッ」

コーヒー買ってこよ…

公開処刑タイム！

side 桜木咲子

―自宅の前―

ゼイル「……来てしまった」

咲子「……幸い今日父さんはいないから大じよ……ばないわね、母さんがいるし」

ゼイル「……押すぞ？」

ピンポン！

…ガチャツ。

春菜「咲子、おかえり…あら？」

ゼイル「…どうも、飛羽野ゼイルです」

春菜「…そう、アンタが、ね…」じー

母さんはゼイルをじっと見つめる。

咲子「…母さん？」

春菜「なるほど、彼がアンタの彼氏さんね♪」

…何故分かった!?

咲子「な、な…なんで分かったの!?!?!」

ゼイル「…咲子、誘導尋問に引つかかかってるぞ」

咲子「…ハッ!?!」

春菜「…色々聞きたい事ができたわね。入りなさい」

咲子「ううう…//」

ゼイル「し、失礼します…」

ーリビングー

春菜「…で? 経緯を教えてちょうだい」

咲子「…ホントに言わなきゃいけないの?」

春菜「そりゃ、娘が変な人と付き合っていないか確認しなきゃ…ね?」

咲子「うっ…」

ゼイル「…咲子、覚悟を決めろ」

咲子「え?」

どんな覚悟?

…そう聞こうと思ったが、時はすでに遅かった。ゼイルはポーカーフェイスのように真顔になり…

ゼイル「俺は11月に千葉から転校してきました。その前は…壮絶な過去でした。き

じお兄さんに助けられ、妹と一緒に飛羽野家に引き取られました」

経緯を話し始めた。

春菜「…なるほど、だから飛羽野なのね。…続けて」

ゼイル「それで、転校したその日の放課後、俺は咲子率いるさとかに隊に会いました。みんな良い人たちでした。…その夜、マツ缶…あ、マックスコーヒーです、をベンチに座って飲むうとしてました。その時に、咲子が先にベンチに座ってたので、隣に座る許可をもらってから座りました。咲子は俺の過去について聞いてきました。何故俺の目が腐っているのか、と。俺は驚きました、まさか会って1日も経ってない人に気付かれるとは、と。俺は全て話しました。…正直、嘘だと思われるだろうと思ってました。しかし、咲子は俺を信じてくれました……」

ゼイルの話は長かった。でも、事細かに説明していた。

ゼイル「…すると突然咲子が後ろから抱きついてきました」

咲子「ちよっ!？」

春菜「ふーん…」

…私なら絶対に言えないような内容まで真顔で。私がした大胆な行動を全て。

…公開処刑にあっている気分だ。

咲子「……………／／」カアアア

ゼイル「咲子はしばらくこうさせて、と言ってきました」
やめて！もう咲子のHPはゼロよ！

春菜「あら〜大胆ね〜♪」

咲子「ううう〜／＼／」

―数分後―

ゼイル「…以上が付き合い始めた経緯です」

春菜「なるほどね…」

咲子「…はうあ〜／＼／」プシユ〜

ゼイル「…大丈夫か、咲子」

咲子「うう…ゼイル〜」ギユツ

私は涙目でゼイルに抱きつく。

ゼイル「安心しろ、俺も超恥ずかしいから」ナデナデ

咲子「じゃあなんで話したのよ」

ゼイル「…話してと言われたからな、仕方ないだろ？」ナデナデ

春菜「あらあら、お似合いね〜」

私はしばらくゼイルに慰められるのであった。

お家デート？

side 桜木咲子

母さんに色々話した後、私とゼイルは私の部屋に入った。

ゼイル「…構造が俺の部屋に似ているな」

咲子「まあ、確かにそうね」

ゼイル「…真似したのか？」

咲子「いや、これは元々よ。ところで…いまから何する？」

ゼイル「…音楽聴くか？」

咲子「いいわね…」

ゼイル「“ネロイズム”と“アンヘル”、どっちを聴く？」（かいりきベア）

咲子「ネロイズム？ 確か出夢先輩の悪魔化した時の名前ね…ネロイズムでお願い」

ゼイル「了解」

そしてゼイルは曲を流し始めた。

『ああ 規制 罵声 余生 全部全部ぜんぶ うざいうざいな』

咲子「……………いい曲ね」

ゼイル「…だろ？」

―数分後―

咲子「次は？」

ゼイル「そうだな…じゃあ、”表裏一体”と”空中分解”」（すりい）

咲子「…空中分解で」

『空に舞 舞 舞い散る腕は なりふり構わず踊りだす…』

ゼイル「影に隠 隠 隠れた足は 気を遣ってきつてちりばめーてく…♪」

ゼイルも歌いだした。

咲子「…：…歌唱力高いわね」

―数分後―

ゼイル「”イエスマン”と”ハングリーニコル”」（煮ル果实）

咲子「イエスマン」

『屍人、屍人！ 君の隣で 屍人、屍人！ 悪魔と踊る…』

ゼイル「…：…：…」ガンガン

ゼイルは動画の人のポーズのマネをした。

咲子「…足逆よ」

ゼイル「そうか？…ホントだ」

―数分後―

ゼイル「ダンスロボットダンス」と「太陽系デスコ」(ナユタン星人)
咲子「太陽系デスコ」

『あの一等星のさんざめく光で あなたとダンスを踊ろうか…』

ゼイル「……………」シユツシユツ

ゼイルはまたポーズのマネをした。

咲子「腕疲れるわよ、それ」

―数分後―

ゼイル「腕痛え…」

咲子「ね、言ったでしょ?」

ゼイル「…そろそろ別のことしようぜ」

咲子「そうね…スマブラでもやる?」

ゼイル「おう。ステイプ持つてるか?」

咲子「ええ、課金キャラ含めて全員いるわよ」

ゼイル「よし、やろうぜ」

私達はしばらくスマブラで遊んだ。

…ゼイル普通に強いんだけど!?ワンチャンVIP入りしてるでしょ!?(してます)

―数時間後―

ゼイル「お、もう6時か。帰るぜ」

咲子「あら、もう？ここに泊まってもいいのよ？」

ゼイル「いや、茜が寂しくなるだろうしな」

咲子「…じゃあ、私があっちで泊まるのは？」

ゼイル「あ、それなら良いかもな」

咲子「許可取ってく r 「別に良いわよ」…いつからいたの、母さん？」

春菜「さつき夕飯ができたから呼ぶ所だったのよ。ゼイル、アンタの分もあるわよ」

ゼイル「…じゃあ頂きますね」

そして私達は夕食を食べ、私はゼイルとゼイルの家に行くのであった。

一方、その頃…

side 飛羽野茜

茜「ハア…」

私はソファアで寝転がっている。

茜「お兄ちゃん…」

咲子さんと付き合うってことは、かまってくれる時間も減るってことだよね…でも、それでお兄ちゃんが幸せになればそれでいい…のかな？

茜「…そうだ！」

絵奈さんとかメイさんとか呼んでミニお茶会でもしよう！

早速準備…

絵奈『すぐ行くよ〜』

メイ『お茶会ですか、いいですね！クッキー買っていきますね！』

2人とも承認してくれた。

茜「後はお茶の用意だね」

―数分後―

ピンポーン!

絵奈「来たよ、茜ちゃん♪」

メイ「1人ついてきてますけど、いいですか?」

茜「それって…?」

千代「…私よ」スツ

3人目は千代さんだった。

絵奈「ずっと何らかのゲームのプログラミングをしてたから休憩も兼ねて連れてきたんだ。ダメだったかな?」

茜「いや全然大丈夫ですよ!むしろ大歓迎です!ささ、入って下さい♪」

3人「失礼します」

1数分後

茜「紅茶です、どうぞ」

絵奈「おお!」

メイ「いい香りですね」

千代「…いただきます」

ズズツ

メイ「…で、茜さん、本題はなんですか?」

茜「あー、やっぱ分かつちやいますか?」

メイ「そりや、呼び出されてるんですからね」

茜「本題は…そうですね…」

“ヒマだから”とは言えない…

茜「…みなさんはお兄ちゃんと咲子さんがくつついた事についてどう思いますか?」

絵奈「咲子とゼイルがくつついた事ね…」

メイ「甘々な雰囲気を出しすぎなければ大丈夫だと思えますよ?」

千代「…それはほぼ不可能なのよね」

絵奈「私は別にどうってことないかな?」

茜「そうですね…」

メイ「悩みでもあるんですか?」

茜「……………」

絵奈「茜ちゃん?」

茜「…お兄ちゃんと」

千代「お兄ちゃんと?」

茜「お兄ちゃんにくつつく時間が咲子さんに奪われてしまいます!どうすればいいで

すか!」

何変なこと言ってるのかって？

…大真面目よ。

3人「……………」

茜「あの…どうすればいいですか!？」

絵奈「ブラコンね」

メイ「ブラコンですね」

千代「多分末期ね」

茜「私はブラコンではありません！お兄ちゃんが大好きなだけです！」

3人「それをブラコンいう（の）（んです）（んだよ）」

茜「そうなんです…ま、ブラコンかは置いといて、「置いて行かないで！」どうすればいいと思いますか？」

メイ「それは…友達でも作ればいいんじゃないですか？それならゼイルさんではなく友達と過ごすほうが楽しいと思いますし」

引つ越す前は虐待はされていたものの、お兄ちゃんとは違っていじめられてはいなかった。

私は無キヤ（陽キヤでも陰キヤでもない）という種類の人間で、目立つこともなかった。……そのため友達もいなかった。

茜「友達ですか…そうですね、やってみます！」

ちようど結構雑談をしているクラスメイトがいるしね！

千代「…頑張つて」

その後私達は紅茶やクッキーを楽しみながら雑談をした。

見せつける

side 桜木咲子

ピンポーン!

…ガチャツ

茜「あ、お兄ちゃんと咲子さん、おかえりです」

咲子「“おかえり”はまだ早いわよ?」

ゼイル「…ただいま」

私達は家の中に入っていった。

ーリビンググー

メイ「あ、ゼイルさん、お邪魔してます」

絵奈「おかえり〜」

千代「……………」ズズツ

ゼイル「お前らいたのか」

咲子「茜に呼ばれたの?」

絵奈「そうだね〜」

メイ「咲子さんは何故…あ、分かりました（察し）」

咲子「……………」ギョツ

ゼイル「おっと」

私は無言でゼイルに抱きつく。

咲子「…ムフゝ」スリスリ

そして顔をスリスリする。

モワーン（甘々オーラ）

千代「……………」ゴクゴク

私を見て千代は無言でコーヒーを飲み始め…

絵奈「甘いね」

絵奈は温かい目で見守り…

メイ「見せびらかしますね…」

メイは少し呆れた顔をし…

茜「うう…羨ま…羨ましい！（けしからん！）」↑言葉がそのまま

茜は本音と建前を逆にする。

ゼイル「…咲子、流石に今はやめようぜ」

咲子「むう…いいわよ」スツ

私はゼイルから離れた。

…ま、あとでやればいつか♪

メイ「咲子さんは泊まるんですか？」

咲子「もちろんよ」

絵奈「確定なんだね…」

茜「あ、メイさん達も泊まるんですか？」

千代「…私は泊まる」

絵奈「私は明日の朝から用事があるからだめかな」

メイ「今日は…ナオなら大丈夫ですよ」

ポワン！

ナオ「ども」

茜「分かりました！布団とか用意しときます！」

タタツ…

―数分後―

メイ「あ、そろそろ俺は帰りますね」

絵奈「私も帰るね。じゃあね」

ガチャツ。

千代「……………」カタカタ…

ナオ「…なにする？」

咲子「そうね…」

…なにしようか？

ゼイル「そろそろ晩飯だしな…料理してくる」

咲子「私も手伝う！」

ゼイル「おう、たのむ」

そして私とゼイルは夕食の準備にとりかかった。

千代「…ふう、これで一段落…2人は？」

ナオ「料理中よ」

千代「そう…」

ナオ「…そういえば私達あまり話したことがないわね」

千代「そうね。作者に頼めば増えるかしら？」

天の声「ん、呼んだk「フンツ！」ぐはっ」

ナオ「アンタはお呼びでない！」

天の声「ふあい…」フツ…

その後2人は気が合い、雑談をするのであった。

とある飲食店の出来事。

「なあ」

「…なんだい？」

「俺、最近就職したんだよ」

「へえ、何処に？」

「……………」

????????????????

……魔界だ」

そして12月になる

side 桜木咲子

ゼイルと付き合い始めてから数週間が経った。

その間にゼイルと買い物に行ったり、ゼイルと一緒に食べたり、ゼイルと…

あれ？ゼイルばかりね。…ま、いいや。

そして、今は12月。めっちゃ寒い。正直言っつとゼイルに抱きついてないと凍

え死ぬ。(死にません!)

咲子「寒い」ギョッ

ゼイル「…なあ咲子、ここ教室」

咲子「別にいいじゃん…」ギョー

「アイツらまたやってるぜ」

「…このリア充がッ!」

ゼイル「…助けてくれ、西j「スマン無理だ。コーヒー買ってくる」じゃあ貝d「私も買ってくる」…だれかー」

咲子「別にいいじゃん、減るもんじゃないし」

ゼイル「俺の理性がすり減る！あと俺の社会的HPが！」
社会的HPってなによ…

咲子「むう…分かったわよ」

ゼイル「ああ…やつと開放された…」

ゼイルは何故か疲れたような表情をしている。

咲子「ゼイル、大丈夫？」

ゼイル「誰のせいだと思ってるんだ…」

誰のせい？うーん…

咲子「…分からないわね、誰なの？」

ゼイル「(可愛いのはいいけど遠慮がないんだよな…)…もういいわ、席につこうぜ」
咲子「？うん…」

―数分後―

日花「あと2週間未満で2学期も終わりよ。くれぐれも体調を崩さないように。…
授業を始めるわよ」

そして授業が始まった。

―昼休み―

メイ「咲子さん…行きましょう」

咲子「ええ…また負かしてやるわ！」

私達はまたランク戦をすることにした。理由は…メイが挑んできたからね、うん。

ー戦闘場ー

咲子「ふう、久々に本気出しますか…！」

私は戦闘服（桜パーカーに青い運動用短パン）に着替え、入場した。

その次の瞬間。

ワアアアアアアア！

「3代目だ！」

「頑張れよー！」

そして反対側から…

ワアアアアアアア！

「斬士の登場だー！」

「負けるなー！」

メイが戦闘服（斬パーカーに赤い運動用短パン）を着て入場してきた。

メイ「…すごい歓声ですね」

咲子「なおさら負けることができないわね…！」

『ランク戦……スタートオ！』

メイ「小手調べと行きますか……狐月十字斬改！」ズバアツ！
メイは十字形の飛斬撃を繰り出す。

咲子「止めてやるわ！……真マジン・ザ・ハンド！」パシイン！

それを私がエネルギーで作ったマジンで止める。

咲子「絶……炎天桜舞！」BLOOM！

メイ「絶ですか……ならこちらも絶で行きましょう！絶ウインドブラスト！」ビュウウ
ン！

互いの技がぶつかり合う。

咲子「追撃！怒りの鉄槌V2！」ゴオオ……

メイ「……分身！」ポワン！

ナオ「冥冥斬り改！」ズバツ！

ヤエ「岩なだれ改！」ドゴドゴツ！

追撃をするが、ナオとヤエに止められてしまった。

咲子「ふふっ、やるわね……」

ヤエ「アンタこそやるね……」

ナオ「でも、こっちは3対1……」

メイ「連携で勝ってみせます！」

3代目 vs 斬士 ①

side 桜木咲子

♪かいきりきべアーネロイズム

4月戦った時は1対1だったから勝てたけど…

咲子「今回はしんどいわね…」

…ま、負けるつもりはないけどね!

咲子「絶…フレイムダンス!」グルグル…!

ヤエ「技の溜めね…させないよ!曇天椿舞改!」BLOOM!

まずい、邪魔された!…なら!

咲子「絶イジゲン・ザ・ハンド!」ギユルルル!

咄嗟に曇天椿舞を受け流す。

ヤエ「あちゃー、受け流されたか」ニヤリ

ヤエは何故か口角を上げる。

咲子「…後ろ!」クルツ

メイ「もう遅いです!冥冥斬り改!」ズバツ!

咲子「…ガハッ！」

ぐっ…思いつきり斬りつけられたわね…

咲子「痛いわね…！」

ナオ「追撃よ！ブレイズスクリュー！」ゴオオオツ！

もう一撃食らったらやられる…！

咲子「今度は止める！ムゲン・ザ・ハンド…GO！」ガシガシガシ…ガシツ！
516本の手で火の球を止める。

咲子「ハア、ハア…」

今ので結構エネルギーを消費したわね…

メイ「…そろそろトドメと行きましょうか」

ヤエ「了解！…とりやあ！」ドゴツ！

咲子「ガッ!？」

空中に向かって蹴り上げられた。…この技は空前絶後!?

ヤエ「空前…！」

真上にナオが待機している。

咲子「食らって…たまるか！」

考えろ、どうしたらかわせるか…

…!!

ゼイルが今特訓してる技…私にもできるかしら？

咲子「やるしかない！…ハアアアアアアアッ！」

ナオ「!？」

私はエネルギーを纏い…

咲子「…ハアッ！」

…回転させて大量の熱風を起こす。

ナオ「この技は!?!…うわっ!？」ビュウウウン!

メイ「新技ですか…この土壇場で！」

翔「おう、今の技すげーな！」

ゼイル「……………(大嵐をもとにしたのか?)」

絵奈「迫力満点だね〜！」

咲子「…あら？傷も治ってるわね」

エネルギーを纏ったからかしら？

咲子「それとこの技…」

…空前絶後を邪魔、つまり分解する技…名付けて空中分解！

咲子は空中分解を覚えた！

ヤエ「中々良い技じゃないか…」

ナオ「油断してたわ…」

咲子「これで空前絶後は封じたわね！」

メイ「ですね…でも、技はたくさんあります！…絶晴天飛梅！」 B L O O M !

ナオ「真炎天桜舞！」 B L O O M !

ヤエ「曇天椿舞改！」 B L O O M !

3人同時攻撃ね…

咲子「絶…イジゲン・ザ・ハンド!!」ギョルルルル…

私はドーム状の結界で受け流そうとする。

ピキッ

咲子「ヒビが…!？」

3人「…ハアッ！」

パリン！

咲子「…まずい！」

ドゴオオ！

3代目 VS 斬士 ②

side 桜木咲子

……………。

辺りに煙が立つ。

メイ「命中しましたよね？」

ナオ「そのはずよ」

ヤエ「やったか……？」↑圧倒的フラグ

咲子（やってないのよね、それが）

私は絶イジゲン・ザ・ハンドが破られたと同時に空中じやないけど空中分解を発動した。だからこんなに煙が立ってる。…技もほぼ食らってない。

咲子（さて、どうやって奇襲するか…そうだ！）

グルグル…

私はすぐにフレイムダンスを始める。

咲子（溜めた炎を衝撃波に…ハアツ！）

ドシユウウツ！

咲子「フレイム…ウエイブ！」

炎の衝撃が辺りに広がる。

メイ「…衝撃波!？」

ナオ「また新技!？」

ヤエ「奇襲か…」

煙は晴れていく。

咲子「…ふう」

メイ「ダメージが、入ってない!？」

ナオ「いつ防御したの!？」

咲子「さあ、いつでしょうね?…今度はこっちの番よ!」ダツ!

ヤエ「来たか…岩なだれ改!」ドゴドゴツ!

咲子「フレイムウェイブ!」ドシユウツ!

岩を火で砕き、ヤエの前で飛び上がる。

咲子「怒りの鉄槌…V2!」ドゴオ!

ヤエ「…グハツ!」

鉄槌はヤエの頭に直撃。

咲子「追撃! ブレイズスクリュー…蹴りバージョン!」

さらに竜巻○風脚のような連続蹴りをおみまいする。

ヤエ「ガフツ…ギヤツ！」

ドゴドゴドゴッ！

咲子「…ふう。目が回るわね、これ」

ヤエ「ぐっ…後少しで吐く所だった…」

咲子「あら、ゴメン☆」

ナオ「謝る気ないわね…冥冥斬り改！」ズバツ！

咲子「……………！」サツ

私はエネルギーを両手に纏う。そして…

咲子「真剣白刃取り…！（技ではない）」ガシッ！

…ナオの刀を両手で止めた。

翔「おお、やりやがった！」

絵奈「アレはタイミングが重要だよね〜」

ゼイル「……………頑張れ、咲子！」

ナオ「フア!?」

咲子「できた…！」

ナオ「は、離さない！」

咲子「…ホントに？」

ナオ「じゃないと攻撃ができないでしょ!？」

咲子「分かったわ…離すわよ…」

ナオ「早くしなs」「アンタごとね!」…ス

咲子「うおおおおおおりやああああああつ!」↑女子が言うような言葉じゃないだろ!

ナオ「うわあああつ!？」

思いつきり投げ飛ばされたナオは飛んでいき…

ズドツ!

メイ「OH MY GOD…」

場外の壁に激突した。

…あとメイ、英語で驚くのはおかしいわよ。

『…1人場外、よって勝者、桜木咲子!』

※分身した場合、1人場外になったらアウトである。

咲子「…よし!」

勝
つ
た
！

一杯食わされた

side 桜木咲子

メイとの対戦を終えてから数分後、私達は新聞部…というか知り合いにインタビューされていた。

ロジカ「あの新技…空中分解はどうやって思いついたのでしょうか？」

咲子「…エネルギーを纏えばどうにかなるかも、と思ったので、そこで思いつきました」

なんか、ロジカと敬語で話すのってシユールね。

ロジカ「…以上です、質問に答えてくれてありがとうございます」スタスタ

咲子「…ご苦労さん」

メイ「咲子さん」

咲子「ん、どうしたの？」

メイ「放課後、絶対に一杯食わせてやります！」

咲子「へえ…いいわよ」

しっかり休まないとね…！

…と、思っていたが、昼休みの後はまた授業のため、休むヒマはないのであった。
―放課後―

ゼイル「…で、何処行くんだ？」

メイ「ついてきてください」

咲子「…メイ、一杯食わせてやるとか言つてなかった？」

メイ「言つてましたね。まさにそれをしようとしてるんですけど？」

咲子「……………」

―数分後―

私達とはある建物の前に来た。

『イーディングニコル』

…飲食店だ。しかもとあるボカロの曲に似た名前の。

メイ「入りましょう」スタスタ

ゼイル「なあ咲子、これって…」

咲子「何する気かしら？」

疑問に思いながらも、私達は店の中に入っていった。

???「あ、いらつしやいませ。3名様ですか？」

メイ「はい」

??? 「こちらの席にどうぞ」

咲子 「……メイ、まさか一杯食わせるのはおごるってこと?」

メイ 「ずっとそのことを言っていましたけど?」

ゼイル 「意味間違っていないか?」

メイ 「……あー、いや、私が放課後また戦いを申し込むワケないじゃないですか」

言われてみれば……

咲子 「確かにそうね」

ゼイル 「……オーダーするか」

その後オーダーし、雑談しながらおやつ?を食った。めっちゃ美味しかった。

――多分大体1時間後――↑長い!

咲子 「メイ、ありがと」

メイ 「お礼はいらないですよ、また稼げばいいですし」

ゼイル 「え、バイトやってるのか?」

メイ 「梅ジュースの製造、販売です」

咲子 「あ、なるほど」

だからしばしば梅ジュースの差し入れがあるのね。

――

一郎「桜のヤツがオレの親友と付き合い始めた」

? 「へえ、桜ってどんなやつなんだ？」

一郎「明るい性格で優しいらしいぜ」

?? 「強さは分かる？」

一郎「パワーは120万超えてるらしい」

??? 「なるほど、じゃあ私達の中で2番目ですね」

? 「だな。能力は？」

一郎「秘密だつてよ」

?? 「そりやそうね。…あ、一郎」

一郎「なんだ？」

?? 「冬休みになったら、福岡に凸しない？」

一郎「おお、いい考えだな！」

??? 「福岡といえば明太子ですよね？」

? 「玄界灘！」

一郎「それは海だろ」

? 「あ、そうだった」

?? 「反対意見はないようだし、採用ね！」

一郎「おう」

見つけ！

side 桜木咲子

私は今日、ゼイルの家にお邪魔していた。てか今日泊まることになっている。

咲子「……………♪」ゴロゴロ

ゼイル「で、なんで俺のベットのゴロゴロしてんだ？」

咲子「いい匂いがするから♪」

ゼイル「へえ…」

咲子「むう、なにその反応？」

ゼイル「あまり興味が無いからな」

咲子「ふーん…あ、そうだ！」

いい事思いついたわ！

ゼイル「どした？」

咲子「ゼイル…エロ本隠したりしてないよね？」

ゼイル「……………何いってんだ、咲子？」

ほほう、今間があつたわね。

咲子「ベットのクッションの裏!…ないわね」

ゼイル「そんなもん持ってねえよ!」

咲子「次…ベットの下の下!」サツ

ここもないわね…

―数分後―

咲子「ハア、ハア…」

ゼイル「いくら探しても見つかるワケないだろ、そもそも持ってないし」

咲子「……………」

確かに何処にも無かったわね。でも、私の勘(的中率93%)がここにあると言って
るのよ!

咲子「…!」

ゼイルの能力は影…なら!

咲子「真解除火桜!」B L O O M!

ゼイル「……………あ」

解除すれば出てくる!

花びらは部屋中隅々まで行き渡る。そして…

ポワン!

咲子「出た！うおおおお！」ダッ

ゼイル「お、おい」

咲子「見つけ！」サッ

ゼイルの机の下から一冊の本を抜き出した。

ゼイル「や、やべ……」

咲子「どれどれ……」

『万乳引力』

ゼイル「じゃ、じゃあn」「ここにいなさい」……い、いや「いなさい！」……は、はいっ

！」

咲子「……………」ペラッ

無言でページをめくる。

……………。

この中の女性全員巨乳のお姉さんね。

さらにページをめくる。

咲子「……………」カアアア

ま、まさかこんな……／／／

咲子「／／／」プシュッ

ゼイル「さ、咲子…?」

…ハッ?!いけない、今から説教する所だったのに!

咲子「ゼイル、なんでこんな本持ってたの?彼女である私がいるのに?」

ゼイル「い、いや、だってよ、車の免許持ってるのにマリカーする人いるだろ…?」

咲子「…ふーん」

そんな言い訳するんだ。

咲子「ふーん」じー

私は顔をゼイルに近づける。

ゼイル「さ、咲子、近いぞ…?」

咲子「…ねえゼイル」

ゼイル「な、なんだ?」

咲子「ゼイルって、その…大きいほうが好みなのかしら?」

ゼイル「そ、そんなことはないぞ」

咲子「…ふーん」

なるほどなるほど。

咲子「なら…」じー

私は顔をさらに近づける。そして…

咲子「…んっ／＼／」 チュッ

ゼイル「んむっ!？」

抱きついてキスをした。

咲子「ぷはっ…ゼイル…／＼／」

ゼイル「怒って…ないのか…？」

咲子「怒ってるわよ…でもね…私思ったのよ…」

ゼイル「なにをだ…？」

咲子「それなら、エロ本無くてもいいようにすればいいのよ…」

ゼイル「お、おい、それってつまり…」

咲子「ウフフ♪今夜は寝かせないわよ♪」

ゼイル「マジカよ…」

その後私達はお楽しみをした。

何をシたのかは想像に任せる。

2学期終了！（そして100話突破！）

side 桜木咲子

咲子「……………♪」

ゼイル「どうした、そんな可愛い笑顔して」

咲子「今日はなんの日？」

ゼイル「12月22日だが？」「じー」…スマンスマン、2学期最後の日だ

咲子「つまり？」

ゼイル「明日から冬休みだな」

咲子「そう！その通り！」

ゼイル「やけにハイテンションだな」

魅惑ハイテンション、カニバリズム踊ればぐって、それはテレキャスタービーボーイ

！

咲子「だって、性なる夜もあるし大晦日もあるしその後は札幌旅行よ!!」

ゼイル「“聖なる夜”の間違えじゃないか？」

咲子「いや、でも私達はすでにセツ「それ以上は言うな、規制される」…そうだった、

ゴメン。…でも、楽しみなのも仕方ないんじゃない!?」

ゼイル「そうだな…」

―数十分後―

日花「明日から冬休み。だからといって特訓と勉強を怠っていいというわけではないわよ。しないとよいお年を迎えることができないわよ（大嘘）」

特訓と勉強…まあしつかりやってるから問題ないわね。

日花「話は以上よ、終業式あるから整列しなさい」

ガタガタ…

ーキング・クリムゾン！ー↑やってみたかった

…そして放課後になった。

ゼイル「終わったぜ…」

咲子「帰ろ帰ろう〜♪」

絵奈「帰る帰る〜♪」

翔「さらつと絵奈もノツてやがる…」

メイ「明日は確か、春樹さんときじおさんを空港で迎えるんですけどよね？」

咲子「私とゼイルが付き合ってることは…きじおさんは知ってるんでしょ？」

ゼイル「ああ、驚くよりは納得した様子だった。『こんなに早いのは予想外だった』

とか言ってたな」

咲子「兄さんには言っていないから、ね…」

ゼイル「俺がボコされるのか、泣きながら喜ぶのか、適当に流されるか…」

咲子「この前父さんに言った時、襲いかかろうとした所を母さんが笑顔と無言の圧力で父さんを黙らせたのは凄かったわね…：兄さんのことだし力を試しそうね」

ゼイル「どれぐらい強いんだ？」

咲子「確かパワーは大体1000万で、悪魔化ができるわね」

ゼイル「悪魔化なしでも10倍差があるじゃねーか…」

翔「まあでも流石に本気を出すこと無いと思うぞ？」

絵奈「気持ちを確認するために勝負してきそうだよね」

ゼイル「そうか…ま、頑張るか」

咲子「本当にそうなら応援してるわよ♪」

ゼイル「フラグ立てるな」ワシヤワシヤ

咲子「テヘツ☆」ペロツ

私はテヘペロを披露。

ゼイル「……………」スツ

するとゼイルは何故かスマホを出し、こっちに向け…

カシヤツ

無言で写真を撮った。

咲子「…ゼイル？」

ゼイル「…ハッ！可愛すぎて無意識に写真撮ってた！」

咲子「そ、そう…？」

ゼイル「おう」

咲子「そうか…／＼／」

2人以外（……甘い！）

その様子を見ていたみんなは心の中で同じ言葉を発するのであった。

1年冬休み

兄の反応

side 桜木咲子

次の日、私達は兄さんときじおさんを迎えに福岡空港国内線ターミナルにいた。私と両親、ゼイルと茜がいる。

蓮也「なんで俺まで…」

春菜「夏休みは迎えなかつたでしょ？」

蓮也「そうだが…」

咲子「あはは…」

茜「お兄ちゃん、まだかなまだかなく？」

ゼイル「あと10分ぐらいある、落ち着け」

咲子「…ねえゼイル、どんな反応すると思う？」

ゼイル「昨日言った内容だ」

咲子「ま、そのうち分かるか」

ー10分後ー

ウイイイン

きじお「やあ。ゼイル、茜、元気だったかい？」

春樹「ん？なんで親父までいるんだ？」

蓮也「それは春菜が「あゝん？」…何でもございません」

ゼイル「1ヶ月ぶりだな、兄さん」

きじお「ここでの生活は慣れたかい？」

茜「うん、だいぶ慣れたよ！」

きじお「それは良かった。…ま、ゼイルはそれ以上いつてるよね？」

ゼイル「お、おう…まあな」

咲子「……………」

春樹「どうしたんだ咲子、そんな黙って」

言うのは恥ずかしい…だから…こうする！

咲子「んっ！」ダキッ

ゼイル「おっと」ギユッ

私はゼイルに思いつきり抱きついた。

蓮也「…ほう」

春菜「あらあら」

茜「いきなり!？」

きじお「…どうやら本当みたいだね」

春樹「…:What？」

兄さんの反応はイマイチだった。なら…!

咲子「ムフ♪」スリスリ

ゼイル「お、おい、咲子…?」

春樹「…ああなるほど理解した」

咲子「答えをどうぞ」

春樹「…彼氏、できたんだな？」

咲子「うん、大正解♪」

ゼイル「ど、どうも…」

春樹「なるほどな…」じー

兄さんはゼイルを観察する。

ゼイル「ど、どうしたんですか？」

春樹「…なあきじお」

きじお「なんだい？」

春樹「コイツらが結婚したら、俺らは兄弟になるんだよな？」

きじお「そうなるね」

な、ななな…

咲子「いきなり何言ってるの兄さん!？」

け、結婚だなんて／＼／

まだ付き合い始めて1ヶ月ぐらいよ!？」

ゼイル「あはは…」

咲子「ぜ、ゼイル、苦笑いしないでどうにかしてよ!？」

ゼイル「いやいや、俺にどうしろと?」

咲子「もう…兄さん!」

春樹「スマンスマン、ちよつとボケてみたかったんだ。…ゼイル」

ゼイル「…はい」

春樹「…咲子を任せる」

ゼイル「…ありがとうございます」

ゼイルは深いお辞儀をした。

春樹「…顔を上げてくれ、俺はこういう真面目な雰囲気苦手なんだ」

ゼイル「あ、はい」

その後、私達は一旦帰り、一緒に昼食を食べた。

茜「……（真面目な雰囲気？どこが？）」
「雰囲気はそれほど真面目ではなかったのである。」

さとかに隊のクリスマス会①

side 桜木咲子

咲子「かんぱーい！」

全員「かんぱーい！」

ゴクゴク…（酒は飲んでない）

今日は12月25日、つまりクリスマスだ。私達は今さとかに隊基地でクリスマス会をしている。

メンバーはいつものメンツに加えてロジカや茜、出夢先輩と花先輩、未例さんも誘っている。

咲子「ところで未例さん、日和さんはどうしたんですか？」

未例「ああ、家でゴロゴロしてるぜ」

咲子「はあ…」

花「メイちゃん、誘ってくれてありがとうとね♪」

メイ「お礼はいらないですよ、花さん。楽しむのはみんなでした方がいいですし」

出夢「それもそうだね、ははっ」

ロジカ「……………」じー

咲子「…どしたの？」

ロジカ「…ありがと」

…誘った事のお礼かしら？

咲子「どういたしました」

ロジカ「……………」ゴクゴク

茜「お兄ちゃん、そろそろやれば？」

ゼイル「いやいや、ここはな…」

茜「いつも似たようなことやってるじゃん！」

ゼイル「あれは咲子が「いいからやる！」わあつたよ…咲子」

咲子「ん、呼んだ？」

ゼイル「ああ。…渡したいものがある」スツ

ゼイルは赤くラッピングされた箱を渡してきた。

…クリスマスプレゼント!?

咲子「開けていいかな？」

ゼイル「どうぞ」

なにかななになんか？

ラッピングをきれいに開け、中の箱を取り出し、その箱を開けると……
咲子「わあ……！」

赤と銀のチエック模様のスカーフが入っていた。
すぐに首に巻いてみる。

咲子「似合う……かな……？」

ゼイル「おう、似合ってるぞ。頑張って編んだ甲斐があつたぜ」

……え!?

咲子「編んでくれたの!? 凄い……嬉しい!」ギョツ

ゼイル「喜んでもらえて何よりだ」ナデナデ

茜「……ゲフンゲフン」

翔「……コーヒー飲みたいやついるか?」

絵奈「あ、私飲む」

ルマ「ねえ祐樹、抱きしめていい?」

祐樹「おう、別にいい」「わーい!」……うおっ」ドサツ

出夢「……僕達はカレカノらしくないのかな……?」

花「安心して、あつちが甘々なだけよ……」

ロジカ「……(羨ましい……)」

一方その頃…

カタカタカタツ。

千早「仕上げはできたか？」

千代「…いつでもオーケー」

千早「よし、1階で発表するぞ」

千代「…ええ」

咲子「…あら、七隈兄妹は？」

ゼイル「あつちでなにかの準備をしてるぞ」

千早「プロジェクトの準備、完了！」

千代「…発表、スタート！」

さとかに隊のクリスマス会②

side 桜木咲子

千早「ちようどとあるゲームが完成したから、今から説明のプレゼンテーションを行うおうと思う」

全員「おお」パチパチ

千代「まずは質問。『M u i a のものおきば』って知ってる？うごメモの職人で、マリオを主人公にした二次創作を投稿してるの」

千早「そのM u i aさんの作品の時系列をとある人が続きを書いたのが三次創作の『M U L A ストーリ』だ」

千代「そのM u i a ストーリーをもとに、私達は2人で数ヶ月前からプログラミングしてたの」

咲子「つまり四次創作ってことね」

千早「その通りだ。そしてそのゲーム…名前は『M U L A の物語』…がつい先日2部まで完成したんだ」

ゼイル「内容があつてるか俺に質問することがあつたな」

千代「このゲームのジャンルは弾幕系RPGで、デルタレーンのようなバトル形式を再現しているわ」

そして千代は実際にプレイ動画を見せてきた。

……画風に見覚えがあるわね。

絵奈「あ、私を書いたピクセルアートはそのためかく！」
思った通りね。

アルカ『…時間停止！』

←ブウウウウン…

学「内容は知らんがクオリティーが高いな」

育也「確かにそうだね」

メイ「面白そうですね」

そしてその後も発表が続いた。

千早「以上、発表を終わります」

千代「見てくれてありがとうございます」

咲子「…さっそくやってみたいわね」

千早「パソコン持つてるか？」

咲子「あ、持ってない」

千代「後でデータをメールで送るわね」

咲子「うん、ありがと」

―数時間後―

翔「お、そろそろ7時だ」

祐樹「家から例のブツ持ってくるぜ！」タタツ

例のブツってアンタ：

ゼイル「例のブツってなんだ？」

咲子「そのうち分かるわよ」

茜「お兄ちゃん、今日の事を考えれば簡単に答えが見つかるよ！」

ゼイル「そうか？うーん…」

絵奈「今年は何味かな？」

翔「人も去年の4倍ぐらいだしな、大きさはどうなんだろうな？」

ロジカ（今日はクリスマス、なら例のブツはアレしかありえない…）

ルマ「アレ、頑張って選んだんだよね」

メイ「楽しみですね！」

―数分後―

祐樹「持ってきたぞー！」

ドスン!

全員「おおう!」

祐樹は大きなクリスマスケーキをテーブルに置く。

咲子「今年はフルーツケーキみたいね」

ルマ「その通りだよ。カット係、お願いね!」

メイ「了解です!」シャキン

メイは長いナイフを振りかぶり:

メイ「斬ッ!」

スパスパッ!

キレイに16等分した。

出夢「よくあのスピードで切れたね…」

咲子「さあ、食べていく〜!」

その後、私達は楽しくケーキを食べた。

帰宅後

side 桜木咲子

ケーキを食べた後、私達は解散し、それぞれ帰路についた。

茜「咲子さん、楽しかったですね！」

咲子「そうですね。帰ったら速攻パソコンでMULAの物語を入れるわ！」

ゼイル「……咲子」

咲子「なに？」

ゼイル「その……今夜俺の家で泊まるか……？」

……え、

ええええええええええ!!?

咲子「ゼイルが誘ってきた!？」

ゼイル「驚く所そこかよ!？」

茜（はあ、またコーヒー買わないと……）

咲子「えつと……もちろんオーケーよ！仮に父さんが止めてきても母さんと兄さんがどうにかするし」

ゼイル「お、おう…（蓮也さん、強く生きて下さい）」

そして、ちょうど私の家の前まで来ていた。

咲子「早速準備してくるわね！」 タタツ

ゼイル「ん、待つとくわ」

ガチャッ

咲子「ただイモ〜」

春樹「オカカえり〜」

蓮也「……？」

春菜「………咲子」

咲子「どしたの、母さん？」

春菜「オーケーよ♪」

咲子「（もうバレた!?) う、うん、ありがとう。準備してくる！」 タタツ

春菜「すごい勢いね、ウフフ♪」

蓮也「…なあ春菜、何がオーケーなんだ？」

春樹「親父、それは『女の秘密』ってヤツだぜ」

蓮也「そ、そうか…」

―数分後―

服とパソコンを準備した。他にいる物は…無いわね。

咲子「行つてきまゝす♪」

春菜「行つてらっしや〜い♪」

ガチャツ

咲子「お待たせ〜」

ゼイル「おう、待ったぜ」

茜「レッツゴー！」

スタスタ…

ーゼイルの家ー

ガチャツ

ゼイル「ただいまー」

咲子「お邪魔しまーす」

きじお「おかえり、〃 3〃 人とも」

………ん？

咲子「3人？」

きじお「付き合ってるんだから、ここが第2の自宅みたいなものでしょ？」

咲子「なるほど……」

ゼイル「…とりあえず部屋に行こうぜ」

咲子「うん！」

スタスタ…ガチャツ。

目標：ゼイルのベット

咲子「ジャ〜ンプッ！」

ボスツ

ゼイル「…何してんだ？」

咲子「ムフ〜、いい匂い〜」

ゼイル「…まあいいや」ガチャツ

ゼイルは部屋を去った。

咲子「…よし」

半月前、エロ本見つけたのよね。

…あの後搾り取ってヤツたわ。(ナニをととは言わない)

咲子「エロ本探しパート2、スタート！」

速攻で真解除火桜を発動。

咲子「…ないわね」

能力で隠してはいないようね。

咲子「慎重に探して行きますかー！」

その後数分間探したが、見つかることはなかった。

咲子「ないようね…『ピロン』…ん？」

ゼイルのスマホからのようね。メールかしら？

咲子「パスワードを入れて、と」

ロック画面を開くと…

咲子「…?!?／／／」

見事なエロ画像が表示される。

それを見た私はすぐにスマホを元の場所に戻す。

咲子「／／／」

ガチャツ

ゼイル「…ふう、暖まったぜ…どした咲子？」

咲子「ゼイル…今夜搾り取るわよ」

ゼイル「え、あ、まさか…」

咲子「…フフフ♪」

ゼイル「＼（^o^）／」

その後、お楽しみだったとき。

今度は⑨か…

side 室見メイ

……。

メイ「…ヒマですね」

ヤエ「……だね」

お兄さんと花さんは出かけてますし…さつき咲子さんにメールを送ってみても、

咲子『ゴメン、今日デート』

と、返信されましたし。うーん…

ナオ「翔達を誘えば？」

メイ「みんな用事あるんですよ…」

…宿題という。

ヤエ「あたし達はすでに宿題が終わってるからね…」

メイ「…MULAの物語でもやりますか」

1部8章（ケイサツの逆襲）までしか進めてませんし。

―数分後―

メイ「…よし、倒せました！」

やはりこの5人（マリオ、ロゼッタ、ノリオ、アルカ、クツパ）のチームは最強ですね！

ピカッ…

ナオ「……？（一瞬メイの目が黄色くなったような…）」

――1時間後――

メイ「くうっ、このイカしぶといですね…」

中々倒せません！

??『じゃあ、あたいが手伝ってあげる！』

メイ「……今誰か喋りましたか？」

ヤエ「いや……？」

ナオ「何も言っていないわよ？」

メイ「今の声は何だったんでしょう…」

…まあいいや、ゲームを続けま

??『もう、無視しないでよ！』

メイ「さつきからなんですか!? 何処にいるんですか!？」

2人（……あ、まさか）

?? 『精神の中よ!』

メイ「……………?」

?? 『こうなつたら…!分身!』

ポワン!

俺の目の前に現れました。

黄色いパーカーと目をした俺と瓜二つの少女が。

?? 「どう?驚きすぎて声も出ないでしょ?」ドヤア

うわあ、いいドヤ顔ですね。

ナオ「…で、アンタ誰?4人目でしょ?」

クミ「あたいは最強の室見クミ!属性は桃(雷の亜種)よ!よろしく!」

メイ「は、はあ…」

…最強って、俺達。パワーは全く同じハズですけどね?

クミ「そのゲーム、やらせて!」

メイ「え?あ、はい。今すぐ新しいデータを…」

―数分後―

クミ「…よし!また倒した!あたianne最強ね!」

ヤエ「わお…………」

メイ「凄い才能ですね…」

ただ、この後クミは社会以外ほぼ無理だと気付いた（社会だけ何故か満点）俺達でした。

一郎「ここが福岡か…」

? 「寒いなココ…」

??? 「沖繩に比べればそりやそうでしょう」

?? 「私は逆に暑いわね、北海道と比べたら」

一郎「よし、まずは2代目に会い、3代目の事を知ろうぜ」

??? 「でもその前に昼食を食べませんか？時間もちようどいいですし」

? 「おう、賛成だ！とんこつラーメン食いてえな」

一郎「じゃあ、そうするか」

?? 「レッツゴー！」

スタスタ…

千早「…マジかよ」

千代「あの人達は…」

桜梅蓮桃椿、集結!

side 坂田日花

平尾達は出かけており、私は家でゲームしていた。

(日花はゲームで暇つぶしをする)

日花「……誰か来るわね」

…ピンポーン。

シュツ

私は能力を使って客人の後ろに回り込む。

??「あら、留守かしら?」

一郎「少しまとうぜ」

…よし。

トントン

5人「ん?……え!?!」

日花「…よっ」

5人「に、2代目桜!?!いつのまに!?!」

日花「…なるほどね、入りなさい」
こりや面白いことになりそうね。

side 桜木咲子

咲子「……♪」

ゼイル「フツ……（可愛いなコイツ……）ナデナデ

茜（完全にお兄ちゃん達の空間になってる……）

きじお（幸せそうだね……）

咲子「ゼイル、確か今日よね、アンタの親友が来るの」

ゼイル「そうだな。気が合うと思うぞ」

咲子「そう？楽しみね」

―数分後―

……！

咲子「ゼイル、分かる？」

ゼイル「おう、強いオーラを感じる」

咲子「5人いるわね……」

ピンポーン。

咲子「……」ガチャッ

ドアを開けた刹那：

シユツ!

弾幕が飛んできた。

咲子「：へえ。空中分解！」ギョルルル!

なので全て受け流した。

? 「マジかよ：」

??? 「この威圧でも余裕そうな表情：」

?? 「しかも全部受け流した：」

一郎「：わりいわりい、ついつい3代目桜の力を試したかったんだ」

ゼイル「おい咲子、いつまでそこに：って、一郎じゃねーか! 久しぶりだな!」

咲子「ふーん、アンタが一郎?」

一郎「久しぶりだな、ゼイル。：俺は雷落一郎。4代目桃だ」

咲子「桃? 私は桜木咲子、3代目桜よ。よろしく」

一郎「おう。：で、お前らはいつまで黙ってたんだ?」

風鈴「あ、ゴメン。私は梅野風鈴、6代目梅よ」

流「那覇流だ。5代目蓮だ」

砂智子「椿木砂智子、5代目椿です」

咲子「全員花称号だったのね…」

ゼイル「…とりあえず入ってくれ」

一郎「おう」

スタスタ…

一旦落ち着いた後、私は一郎に話しかけた。

咲子「まさか私以外知り合い同士だったとはね…」

砂智子「偶然が重なった結果こうなったんです」

一郎「でも、きじおさんが驚くどころか納得してたのは意外だったな」

風鈴「というか、アンタどうしたらあの威圧で平然としてられるの？」

咲子「うーん…覇気を纏ったから？」

流「なんでワン〇ースなんだよ」

咲子「冗談よ。でも、似たようなものね。威圧を威圧で返したのよ」

風鈴「いやいやそんな誰でもできるような言い方で言われても…」

砂智子「道理で2代目さんが1年にしては規格外」とか言ってたんですね…」

咲子「あら、日花先生に会ったの？」

一郎「おう、会ったぜ。お前の情報を引き出そうと思ってたんだが…」

ピンポーン。

ゼイル「ちよつと行つてくる…」

ガチャツ

千早「ゼイル、大変だ！現役の花称号が全員福岡に…ゑ!?!」

千代「家に来てる!?!」

あ、ちよつと説明がめんどくさい事になるわね…

反応薄っ!?

side 桜木咲子

ゼイル「…ということだ」

千早「なるほど…」

千代「確かに咲子は規格外ね…」

咲子「おい」

一郎「…なあ」

咲子「…?」

風鈴「今日福岡に来ることは事前に決めてたんだけど…」

砂智子「その…泊まる所が…」

流「ねえんだよな…」

……What?

咲子「…アンタらアホ?それともバカ?」

一郎「スマン…」

咲子「…まあいいわ。今日は金曜日じゃないし、基地で泊まっていいわよ」

風鈴「ありがとう…!! (土下座)」

風鈴がなんと土下座してきた。

咲子「土下座までしなくても…」

砂智子「あはは…」

流「その基地つて、どんなモンだ？」

咲子「デカイ倉庫を改造したもの」

風鈴「……？」

千早「まあ、説明するならそれが妥当だな」

千代「行った方が早いわね」

咲子「…ついてきなさい」

一郎「お、おう…」

ー移動したー

ゼイル「ここだ」

一郎「ここが基地か…」

砂智子「倉庫にしか見えませんね…」

咲子「そりゃ外は改造してないからね」

ガチャツ…

メイ「あ、咲子さん、来たんですね」

千早「なあメイ、これからやばいやつらが来るんだが、驚きすぎるなよ?」

メイ「?はい…」

ゼイル「よし、入れ」

風鈴「し、失礼します」

メイは4人をじつと見る。

咲子「…で、反応は?」

メイ「…知ってましたよ?」

咲子「え?」

メイ「日花さんから連絡をもらったので」

…あの先生、ネタバレしよって…!

メイ「室見メイです、よろしくお願いしますね」

一郎「おう、よろしく」

砂智子「あの…驚かないんですか…?」

メイ「まあ、俺と同じレベルの力を4人も感じたので、少し驚きましたが」

流「マジかよ、お前も威圧に怯まないのか…」

メイ「そうですね。(出るわよ)…あ、はい。分身!」ポワン!

メイはナオ、ヤエ、クミを出した。

風鈴「!?…4人になった!」

一郎「…なるほど、多重人格か」

メイ「そうです。全員性格や属性が違います」

ナオ「私はナオ、属性は桜よ」

ヤエ「あたしはヤエ、属性は椿さ」

クミ「あたいは最強のクミ、属性は桃よ!」

流「…蓮だけがないな」

メイ「まだ眠ってるんですよ。きつかけさえあれば目覚めるんですが」

砂智子「なんか複雑ですね…」

咲子「…ところで、一郎達は今日何するの?」

一郎「今日? 観光は明日だしな…あ、千早」

千早「…なんだ?」

一郎「『MULAの物語』の製作者って、お前か?」

千早「…何故分かった?」

風鈴「二次創作ゲームであの高クオリティーだから話題になってるのよ」

千早「そうか…配信開始してから2日しか経ってないぞ?」

一郎「それぐらい凄いなだよ。どれぐらい時間かけたんだ？」

千早「あー、千代、どれぐらいだっけ？」

千代「ちよつと待って……カタカタ……」

千代はなにかを検索する。

千代「……半年ね」

風鈴「え!？」

千早「正確にはもつと短かった気がするんだが……」

咲子「マジか……」

改めて七隈兄妹の凄さに驚く私達であった。

手合わせ

side 桜木咲子

一郎「…いい事思いついたぜ」

風鈴「なになに？」

一郎「ゼイル、俺と手合わせしないか？」

ゼイル「俺負けれると思うぞ？」

風鈴「私も手合わせしたいわね…咲子と」

咲子「…じゃあ、私とゼイル対一郎と風鈴にしない？」

一郎「いい考えだな。早速準備しようぜ」

ゼイル「……咲子」

咲子「？」

ゼイル「…頑張ろうぜ」

咲子「…もちろんよ」

―数分後―

メイ「準備はできましたか？」

一郎「おう」

咲子「オーケーよ」

メイ「それでは…始め！」

ゼイル「先手必勝！狐月十字斬！」ズバツ！

風鈴「え、なにその技!?!:うわっ」サツ

一郎「イナイレの技を改良したのか…真ポルトタイヤ！」ピリツ！

咲子「へえ、来たわね。…絶イジゲン・ザ・ハンド！」ギョルルルル！

私は電気のタイヤを受け流す。

一郎「マジかよ…」

咲子「ゼイル、時間稼ぎをお願い」

ゼイル「了解」

風鈴「何する気か知らないけど、させないわよ！風斬・鎌鼬！」ズバアア！

風鈴は風斬の正当強化版の技を繰り出す。

ゼイル「咲子には衝撃も触れさせねえよ！真影斬！」シャツ！

…キーン！

それをゼイルが影で跳ね返す。

風鈴「負けないよ！回風球！」ギョルルルル！

ゼイル「…ん？螺旋丸にしか見えないんだが？」

風鈴「らせんがん？なにそれ？」

風鈴はNARUTOを知らないようね。

ゼイル「…まあいいや。シャドースクリュー改！」ゴオオオツ！

一郎「させねえよ！ボルテッカー！」ズドツ！

一郎は電気を纏ってゼイルに突進する。

ゼイル「…おっと」サツ

一郎「な!？」

ゼイルは影に潜った。

風鈴「…かはっ!？」ドゴォ！

ゼイル「…隙だらけだ」

そして後ろに回り込み、風鈴の背中を殴った。

ゼイル「…風神の舞！」シユシユツ！

ビュウウウン！

風鈴「うわあああああゝ…」

風鈴は文字通り飛んでいった。

メイ「…梅野風鈴、脱落！」

流「マジかよ、アイツ強いな！」

砂智子「あー、風鈴さんを助けてきます」タタツ

ナオ「…咲子はそろそろ発動するわね」

一郎「俺一人か…」

ゼイル「そのようだな」

咲子「…チャージ完了！」

ゴオオオツ…

一郎「…あゝ」

咲子「くらえ…真…嵐爆熱、ハリケーン！」

ゴオオオオオオオオオ!

一郎「嘘だろー!?!」

…ドゴオオ!

メイ「…雷落一郎、脱落! よって勝者、飛羽野ゼイルと桜木咲子！」

ゼイル「…よし！」

咲子「勝ったわ！」

趣味

side 飛羽野ゼイル

一郎「いやー、お前強いな！」

咲子「アンタもなかなか強かったわよ？」

風鈴「私吹き飛ばされたんだけど!？」

ゼイル「風神の舞の威力は充分みたいだな」

風鈴「私まさかの実験体!？」

流「風鈴の舞、なんてな！」

風鈴「…りゆう？」ギロツ

流「…スママセン」

砂智子「それにしても、あの最後の攻撃、必殺技っぽいですね」

咲子「嵐爆熱ハリケーンのこと?…いや、アレはただ範囲と威力が高くて溜めも長いハイリスクハイリターンな技よ？」

砂智子「そうなんですか？」

咲子「そうなのよ（ま、フレイルムウェイブという溜め時間短縮用の技があるんだけど

ね…）」

メイ「…咲子さん」

咲子「ん、どうしたのメイ？」

メイ「…そろそろ時間ですよ！」

咲子「え、もう!?速く行くわよ！」

ダダダ

一郎「何するんだあいつら？」

ゼイル「倉庫に行けば分かるぞ」

風鈴「大事なこと？」

ゼイル「…あの2人にとってはな」

砂智子「行ってみましょう」

ー倉庫ー

『ムゲン・ザ…：ハンドオオオ!』

咲子「おー、キタキタ！」

メイ「進化しました！」

流「急いでた理由が…」

一郎「イナイレ鑑賞なんてな…」

風鈴「なんか、ね……」

砂智子「意外ですね……」

ゼイル「だろ？」

咲子「ん？アンタ達も観る？」

5人「見ません」

咲子「そう、残念ね」

イナイレ信者が増えると思ったのに……

メイ「………」パクツ

咲子「あれ、ポテチない!？」

メイ「あ、今のが最後のです」

咲子「むう……しゃーない、新しいの取ってくるわ」スタスタ

そう言つて咲子は冷蔵庫へ向かった。

一郎「……ゼイル」

ゼイル「なんだ？」

一郎「話がある」

ゼイル「……おう」

俺と一郎は移動した。

ゼイル「で、話つて？」

一郎「：お前、咲子に助けられたんだろ？」

一郎はそうきいてくる。

ゼイル「：まあな」

一郎「だよな。道理で引越してたつたの2週間で彼女できるワケだぜ（コイツは天然スケコマシだしな）」

ゼイル「で、本題は？」

一郎「：どうやって助けられたんだ？見た所良い奴そうだし、お前の心を動かすぐらいの事があつたんだろ？」

ゼイル「そうだな：俺は目が腐つてた事が真つ先にバレたんだよ、咲子に：」

俺は話した。俺が過去を打ち明けたことを。その後咲子に慰められた事を。咲子の優しさに惹かれた事を：。

一郎「：まるで運命だな」

ゼイル「そうとしか思えねえよ」

一郎「マジでお似合いすぎるぜ。手合わせでの信頼も中々のものだったしな」

確かに、咲子が技を溜めてる時に攻撃されないと保証できない。それができると俺を信頼してたんだ。

ゼイル「ホントに良い奴だぜ、咲子…」
…大好きだ。

風鈴の能力

side 桜木咲子

流「あ、そろそろ晩飯だな」

一郎「…近くにいい飲食店ってあるか？」

ゼイル「あるぞ」

咲子「あるわね」

2人「イーディングニコル」

…パーフェクトタイミング！

風鈴「同時に言った…」

砂智子「じゃあ、そこで夕食を食べましょうか♪」

うん、双子葉。(変な漢字はわざと)

―移動―

♪煮ル果実―ハングリーニコル

咲子「ここよ」

流「おお…」

ゼイル「入ろうぜ」

スツ

???「いらつしやいませー」

コツクは前と同じく1人だった。

一郎「んー、どれにしようか…」

一郎はメニューを見ながら考える。

砂智子「私は明太子スパゲッティにします」

まあ、一応ココ（福岡）の名産物は明太子だしね。

私は…グリルポークね。

風鈴「…カプサイシンライス」

咲子「え…アンタ、大丈夫なの？」

風鈴「ええ。というか必要なのよ、能力的に」

咲子「その能力って？」

風鈴「…秘密よ☆」キラッ

うわあ、ムカつく顔ね…ま、私が解除すればいい話だけど。

私達はそれぞれオーダーする。

…ちなみに風鈴のオーダーを聞いた時一瞬驚いた顔をしてた。

??? 「すぐに準備いたします」

…シユバババツ!

ホントにすぐできそうね。

―数分後―

砂智子 「美味しいですね、コレ！」

一郎 「だよなく」パクッ

風鈴 「……………」ガブツ

風鈴は赤く染まった米を一口食べる。

風鈴 「…ん、いけるわねコレ」

咲子 「へえ…」スツ

私も一口食べてみよう…

パクッ

……………!?

咲子 「ゲホツ、ゴホツ…痛っ!?!」

辛いつてレベルじゃないわよ!?!

ゼイル 「咲子、牛乳だ」コトツ

咲子 「ありがと！」ゴクゴクツ…

…ハア。

咲子「あゝあゝ…ヤバかった」

一郎「安心しろ咲子、俺も初見でそうだった」

流「他にもレモン汁をそのまま飲んだり、純粋なココアパウダーを食べたりしてたぞ
「流、それ以上言ったらただじゃおかないわよ?」…すみませんでしたもう言いません」
咲子「なるほど…コレ（カップサイシン）は辛い、レモン汁は酸っぱい、ココアパウダー
は苦い…味覚を何かに変換する能力かしら?」

風鈴「まあ大体あつてるわよ。何に変換するかはこの中で私以外誰も知らないけど」

一郎「見たことないんだよな、能力使うの…」

…それとも見たけど能力だと気付かなかったかね。

―半時間後―

???「ありがとうございます」

一郎「俺達は基地へ行くぜ。お前らは?」

ゼイル「送って行く。咲子、家で待っていてくれ」

咲子「分かったわ。じゃあね」

そして私は一郎達と別れた。

――

メイ「1076、1077…」ブンッ

メイは刀（飛梅）で素振りをしていた。

???（生真面目そうな人だなあ…）

そんなメイを偶々通りかかった男がしばらく見ていた。

差を埋めたい!

side 羽犬塚ルマ

ルマ「祐樹くボクの出番がないよ」

咲子とゼイルは一郎達と名所っほい所に連れて行くとか言ってたし…

祐樹「そうだな…どうする?ゼイルに追いつけるように特訓するか?」

ルマ「うん!特訓しよ!」

祐樹「おう!」

―数分後―

祐樹「まずは技を見せてくれ」

ルマ「うん、まずは…絶ボールラッシュユ!」シュバツ!

的(骨で作った)に攻撃を当てる。

ルマ「真ヒートタイヤ!」ゴロンツ!

次は火のタイヤを当てる。

ズガアン!

ルマ「クリティカルヒット!」

祐樹「…2つだけか？」

ルマ「うん…」

祐樹「そうか…じゃあまずはボーンラツシユの強化版を作ってみろ」

ルマ「強化版？うーん、1つの骨を複数とばすから…今度は骨をクロスさせてみる！」
ボクは十字形の骨を生み出す。

ルマ「こうかな？」

祐樹「おお、上手く出来てると思うぞ。それをボーンラツシユみたいは何本も飛ばしてみろ」

ルマ「うん…いつけええええ！」

シユバシユバツ！…バキツ！

十字形の骨の弾幕は的を砕いた。

ルマ「おお…凄い威力！」

祐樹「名付けて…『クロスボーン』なんてどうだ？」

ルマ「クロスボーン…いい名前だね！ありがと！」チユツ

祐樹「お、おい…」

ルマ「えへへ♪」

キスしちゃった、テヘツ☆

祐樹「(コイツ、可愛い顔しやがって…)…ルマの新技もできたし、今度は俺の新技作りを手伝ってくれないか?」

ルマ「もちろん!」

祐樹「よし、まずは的を直してくれ」

ルマ「オーケー」

シュツ!

祐樹「じゃあ始めるぞ。まずは…サンダーラッシュユ!」(サンダーショットの強化版)バッチィイ!

祐樹は電撃を的に当てる。的にヒビが入った。

祐樹「真ボルトタイヤ!」ゴロンツ!

バキイ!

的に穴があいた。

ルマ「うん、威力はもうあるから、1から新技を作りやなきやね」

祐樹「そうなんだよな…」

雷といえは…うーん…

ルマ「…あ!」

祐樹「なんか思いついたのか?」

ルマ「…纏えばどう?」

祐樹「纏うか…やってみる…ハッ!」ビリッ!

祐樹は電気を纏った。その影響なのか髪型が何処かのバトル漫画に似ている。そして

ルマ「かつこいい…!」

祐樹「攻撃してみるか…!?」シユッ

祐樹は目にも留まらぬスピードで動き出した。

祐樹「すげえ、5倍ぐらい速くなってるぞこれ!」

ルマ「名付けて、『エレキアーマー』なんてどう!?」

祐樹「いい名前だ。ルマ、ありがとな」ナデナデ

ルマ「どういたしまして♪」

その後、ボク達2人は仲良く(ほぼイチヤイチヤ)特訓をしたのであった。

メイ「ん、あなたは…?」

???「あ、邪魔だったかな?」

オレンジ色の髪の毛の少年がメイに話しかけた。

貴方、センスありますよ!!

side 室見メイ

オレンジ色の髪の少年が近づいてきました。

メイ「…見てたんですか？」

??? 「うん、邪魔だったかな？」

メイ「いや、別にそうではないんですけど、女子が刀を振り回してるのってやっぱ気になります?」

??? 「まあ、そうだね」

…一応、刀の免許もらってるので逮捕はされるはずないですね。

メイ「…もしかして、興味あるんですか？」

??? 「うーん、どうかな…?」

メイ「木刀あるので体験してみます?」

??? 「…うん、やってみるよ」

俺は木刀を取ってきました。

メイ「あ、ところで、俺は室見メイといいます」

レイト「僕は渡辺^{わたなべ}レイト、よろしくね」

メイ「じゃあレイトさん、どうぞ」スッ

レイトさんに木刀を差し出します。

レイト「構えはこうかな？」サッ

メイ「はい、それであってます。素振りをしてみて下さい」

レイト「うん……ハッ！」ブンッ

レイトさんが刀を振った時……

ポオッ！

レイト「うわっ!?!」

火の斬撃が飛んでいきました。

メイ「!!」

レイト「今のは……？」

メイ「レイトさん」

レイト「？」

メイ「さっきのをもう1回やってみて下さい」

レイト「……うん、多分マグレだけどね……」サッ

レイトさんはもう1回木刀を構え……

レイト「…ハッ!」ブンツ

刀を振りました。すると…

ボオツ!

レイト「え!?!」

また火の斬撃が飛んでいきました。

メイ「凄い! またやりましたね!」

レイト「刀を扱ったのは初めてなんだけどね…」

メイ「…え?」

今ので初めてですか!?

レイト「僕、戦闘経験がない凡人なんだ」

メイ「…レイトさん」ゴゴゴ…

レイト「室見、さん…?」

メイ「…貴方、センスありますよ!!」

レイト「え、僕が…?」

メイ「はい!」

レイト「ホントに?」

メイ「そうです、貴方が、センスあるんです」

レイト「そうか……」

メイ「あれ、嬉しくないんですか？」

レイト「……やっぱいいや」

メイ「……」

レイト「……すまない、まあ嬉しいよ」

メイ「……レイトさん、その仮面、外したらどうですか？」

レイト「なんのことかな？」

メイ「その精神的な仮面のことですよ。態度が明らかに不自然です」

レイト「……とうとう気付かれちゃったか。……室見さん、僕の話聞いてくれないかい

？」

メイ「……いいでしょう」

レイト「何故センスあると言われて落ちこんでるかというよね……」

side 渡辺レイト

僕は生まれた時から普通じゃなかった。

結構早く喋れるようになったし、周りの様子も理解できた。

そんな僕の両親はまだ『この子は凄い』としか思ってたらしいが、

明らかに違うと気付かれたのは僕が幼稚園に通っていた時だった。

レイト「100、101…」

先生「凄い、初めてで100回跳んでる！」

初めて縄跳びで150回ぐらい跳んだり、

レイト「にげろー！」ダダダ

「レイトくんはやいよー！」

「つかまえられないー！」

どう見ても幼稚園児が走らないようなスピードで走っていたり。

しかも、これは能力じゃないそうだ。

僕の才能は、小学生の時も発揮された。

レイト「…よしー！」

「おお、レイト100点じゃん！」

「すげー！」

それほどテスト勉強してないのに毎回満点取ったり、

レイト「フツ、フツ…」タタッ

「後少して200回だ！頑張れ〜！」

体育でとんでもない成績を出したりと、僕は凄い才能を持っていた。

しかし、両親は…

父「あまり努力していないのにいつもトップで、気味が悪い」

母「私は“普通”の子が欲しかったのよ」

父「…そうだ。レイト、普通の子になるまで学校は休みだ」

レイト「っ……」

褒めるどころか気味悪がられ、“普通”の子になるように矯正されてしまった。

その数日後、僕は学校に復帰した。

「ようレイト、お前大丈夫だったか？」

レイト「うん、もう大丈夫だよ」

…精神的な仮面をつけながら。

レイト「うーん、ダメだったか…」

「何処の問題がわからなかったんだ？教えてやるよ」

テストの点数も平均点ぐらいを出した。そして…

父「よしよし、いい子だ」

母「私が望んだ子だわ」

両親からは褒められるようになった。

そのまま仮面をつけていることは気付かれずに中学校、そして高校の今までを過ごした。

…まさか今見破られるとは思わなかったよ。
レイト「…これが僕の過去さ」

…この人なら、助けてくれるかもしれない。

解決策

side 室見メイ

レイト「…これが僕の過去さ」

メイ「……………」

才能を活かす事ができない上に親に普通にされたんですね…

メイ「…貴方の両親、そうとうクソですね」

人をあまり悪く言わない俺でもそう思います。

レイト「かもね…」

メイ「で、レイトさんはどうしたいんですか？」

レイト「僕？…：正直言ってこんな地獄はもうこりこりだよ」

メイ「それは、心からの願いですか？」

レイト「…どういう事だい？」

メイ「仮面がついたままになってるんですよ」

レイト「…そうか…：この仮面、外し方が分からないんだ。6年ぐらいつつとつけっぱ

なしだったから、外したら…発狂するかもしれない」

メイ「そうですか…じゃあ、少しずつ外せばいい話です」

レイト「でも…どうやって？今日は幸い両親が出張だから外せるけど、帰ってきたらまた地獄は続く」

メイ「そう、なりますよね…」

どうすればいいのでしょうか？

ナオ『ゴメン、私達も思いつかない』

そうですか。うーん…

メイ「…あ、いい事思いつきました！」

レイト「いい事って？」

メイ「ズバリ、反抗です」

レイト「…え？」

メイ「才能を活かすことをためらわずに、普通になれと言われてもやめない…そんな反抗が必要だと思います」

レイト「いい考えだね…不採用」

メイ「な、何ですか？」

レイト「一定の限度を超えると監禁されてしまう。そうなったらどうしようもないんだ」

メイ「監禁罪で訴えれば良くないですか？」

レイト「文字通り何も無い密閉空間で通報できるとでも？」

メイ「あ、そうでした……」

なら、才能を親から隠して過ごす……いつかバレますね。

……!!

メイ「レイトさん、火で刀を作れますか？」

レイト「え、やったことないけど？」

メイ「貴方の才能ならすぐにできるようになるハズです。監禁された場合はそれで脱

出できます！」

レイト「なるほど……」

メイ「採用、しますか？」

レイト「……うん、それをお願い」

メイ「なら、まずは……」

それから数時間俺はレイトさんを鍛えました。

数分で物にしていたのでホントに凄い才能ですよ。

レイト「ふう……」

メイ「お疲れ様です」スッ

レイトさんにポカリを渡します。

レイト「ありがと…ぷはっ」

メイ「希望はありますか？」

レイト「…うん、あるよ。明日両親が帰ってきたらまだ何もしないけど、年が明けたら反抗開始だ。室見さんには感謝しかない」

メイ「どういたしました。ところで、レイトさんの両親は出張なんですよね？」

レイト「そうだけど？」

メイ「…よかつたらウチで泊まりませんか？」

レイト「……………え？」

ゆつくりした

side 室見メイ

メイ「…よかつたらウチで泊まりませんか？」

レイト「……………え？」

レイトさんは驚いた顔をしています。

メイ「何かおかしいんですか？」

レイト「えつと…僕、男。君、女。しかも今日会ったばかり。…おかしいよね？」

メイ「あー、確かにそうですね。…で、泊まるんですか？」

レイト「さつきおかしいと言ったよね!？」

メイ「別に、何も問題は無いと思いますが？」

レイト「…やっぱいいや。泊まるよ」

メイ「はい、じゃあ荷物を準備してきて下さい！」

レイト「うん」タタツ

そしてレイトさんは一旦家に帰りました。

一郎「いやー、楽しかったぜ」

咲子「それは良かったわ」

ゼイル「：おい咲子、アレ見ろ」

咲子「メイが：知らない人を鍛えてるわね」

ゼイル「まあ、見た所怪しくはないな」

咲子「明日質問ね」

そして咲子達は帰宅するのであった。

――数分後――

レイト「ふう、おまたせ」

メイ「じゃ、入りましょうか」

ガチャッ

レイト「案外シンプルなんだね」

メイ「そうですね。あまり女子っぽいことはしません」

レイトさんは荷物を降ろします。

メイ「俺は夕食を作るので、レイトさんはゆっくりしていて下さい」

レイト「うん、そうさせてもらおうよ」

side 渡辺レイト

レイト「……………」

何すればいいんだろう？

レイト「…ん？」

『イナイレ攻略本』

…なんでイナイレ？

レイト「…あ」

『MULAの物語』

室見さんのパソコンの画面に、そのゲームが表示されていた。

レイト「…やってみたかったんだよね」

普通の趣味を持つ必要があったから、本来の趣味である“二次創作ゲーム”ができなかったんだ。

レイト「室見さん、MULAの物語をプレイしてもいいかい？」

メイ「はい、新しいデータを作って下さいね」

レイト「うん、ありがとう」

メイ「…あ、焦げちゃいますー！」タタツ

…お茶目だね。

レイト「プレイするか…」

カタカタ…

『この世界は、不思議である。』

人が生き返ったり、時が止まったり、巻き戻ったり。

そんな世界で極めて不思議なことが起きた時、世界は救われるのか、滅ぶのか。

これは、そんな不思議な物語である。

奇妙ではない。不思議なのだ』

おお、最初の文章が再現されてる。

―数分後―

レイト「うん、凄いクオリティーだね」

下手な二次創作よりも断然いい出来だ。

メイ「レイトさん、夕食ができましたよ」

レイト「うん、今行く」

この時間、今まで無駄にしてきた時間と比べて…

…まるで天国のような時間だね。

友達

side 渡辺レイト

レイト「ん、美味しいね」

メイ「喜んでもらえて何よりですよ♪」

室見さんは嬉しそうだ。

…室見さんの第1印象は、『生真面目そうな人』だった。

でも実際に話しかけてみると、真面目で優しい、けど根はかなり強い、そんな人。

レイト「…室見さん」

メイ「なんですか？」

レイト「僕のこと…裏切らないよね？」

演技だったとは思わないけど、一応質問する。

メイ「…そんなワケないじゃないですか。貴方の過去の話は信用できますし、俺は人

助けがしたいんです。俺が裏切ることはないですよ」

レイト「そうか…もう1つお願いがあるんだけど」

メイ「お願い？」

レイト「僕の…友達になってくれないか？」

ずっと仮面をつけていたため、今まで友達はいなかった。

でも、この人なら…

メイ「…もちろんです♪」ニコッ

…喜んで承諾するだろう。

レイト「改めて、よろしくね室見さん」

メイ「はい、よろしくですレイトさん」

その後、僕は室見さんといろんな話をした。

初めての友達と話すのは、とても楽しい時間だった。

side 桜木咲子

一郎達を福岡の名所つぼい所に連れて行って次の日。

咲子「今日は何するの？」

一郎「特に予定は無いな」

ゼイル「お前ら計画性なくね？」

風鈴「うん、ごもつとも…」

流「スマン…」

咲子「…じゃあ、博多で自由行動にしない？」

砂智子「いい考えですね」

一郎「早速準備するか！」

―数分後―

ガチャツ

メイ「みなさん、おはようございます！」

咲子「あ、メイおはよう」

ゼイル「やけに機嫌がいいな」

メイ「はい♪（レイトさんは帰りましたが、連絡先は交換したので♪）」

咲子「ところで、昨日アンタと一緒にいた人つて、誰？」

メイ「友達です」

咲子「へえ…そのうち紹介してね」

メイ「もちろんです♪」

ホントに機嫌がいいようね。

一郎「準備できたぜ」

咲子「じゃ、行きましょ」

メイ「あ、俺は用事があるのでここに残ります」

ゼイル「了解。行こうぜ」

そして、私達は博多駅へ向かった。

side 室見メイ

メイ「千早さん、千代さん、頼みがあるんですけど…」

千代「…なるほど、分かったわ。任せて」

千早「お安い御用だ」

メイ「ありがとうございます」

これで、もしもレイトさんが監禁されてしまい、火が出せない状況になっても、俺が救出できますね。

メイ「絶対に、助けてやります…!」

俺は、昨日友達になった相手を守り通すということ、固くケツイするのです。

母「ただいま」

父「はあ、疲れたぜー」

レイト「おかえり父さん、母さん（うん、仮面は大丈夫だね）」

母「レイト、元気にしてた？寂しくなかった？」

レイト「やめてよ母さん、僕もう15だよ？」

母「ふふっ、そうかしら？」

父「あ、レイト、荷物をそこに降ろしてくれないか？」

レイト「…ここでもいい？」

父「おう、ありがとな」

レイト「どういたしまして。じゃあ、勉強（筋トレ）に戻るね」

母「ええ」

タタッ

レイト（…ここからいなくなるのが楽しみだ）

北海道で待ってる

side 桜木咲子

―博多駅―

一郎「あ、そろそろ時間みたいだ」

流「楽しかったぜ」

咲子「ええ、こちらこそ」

砂智子「次会うのは5校衝突ですかね？」

風鈴「私は北海道で待ってるから！」

一郎「…ゼイル」

ゼイル「？」

一郎「…またな！」グッ

ゼイル「…ああ！」グッ

おお、友情を感じるわね…

一郎「そんじゃあな…！」タタッ

4人は改札を通り、奥へと進んでいった。

咲子「曲者揃いだつたわね」

ゼイル「それは咲子もだろ」

咲子「ふふつ、それもそうね。：帰りましょ？」

ゼイル「ああ」

side 渡辺レイト

レイト「友達と遊びに行つてくる」

母「行つてらっしゃい」

ガチャツ

今日も室見さんに鍛えてもらう予定だ。

前回（昨日と一昨日）もかなり分かりやすかつたから、知識もだんだん染み込んでいった。

：楽しみだ。

―数分後―

ピンポーン

：ガチャツ

メイ「あ、レイトさん。どうぞ」

レイト「うん、失礼します」

僕は家の中に入っていった。

メイ「今日は何しますか？」

レイト「今日も僕を鍛えてくれないか？」

メイ「今日もですか？ 偶には休んだ方がいいと思いますよ？」

レイト「偶にはって、まだ2日だよ、鍛えてもらってるの」

メイ「それもそうですけど…とにかく、やりすぎるのはダメです。仮面が無くても精神的負担がかかってしまったらとんでもない事になりますよ？」

レイト「そ、そうだった…」

忘れてたよ。

メイ「じゃあ、もう1回ききます。今日何しますか？」

レイト「…またMULAの物語をやっていいかい？」

メイ「もちろんです。…どうぞ」

レイト「ありがと」ニコッ

メイ「…どっ、どういたしまして♪（今の笑顔なんですか!?! なんか、顔が熱く…）」
室見さんの顔がほんのり赤くなっていた事を、僕が気付くことはなかった。

side 室見メイ

メイ「……………」

レイトさんは今俺のパソコンでMULLAの物語をプレイしています。そして俺は…

メイ「…やっぱりはつきりとは見えないですね」

悪魔化したお兄さんがランク戦をしてる動画を見えます。

身体能力と共に動体視力も上がったハズですが…

メイ「お兄さんの悪魔化はパワーが4倍、つまりおよそ500万ですね」
4倍という差は大きいですね。

メイ「レイトさんの成長速度も半端ないですし…」

最初の頃は50000ぐらいだったものが10万ぐらいですから。

メイ「うーん…」

お兄さんぐらいのスピードにも対応できるように自分を鍛えるか、レイトさんの才能を磨くために彼を鍛えるか。

俺はどっちを優先すればいいんでしょうか？

クミ『あ、どっちもすれば？』

どっちも…悪くはない考えですね。

メイ「…後で決めますか」

時間は充分ありますし。

赤坂留美

side 桜木咲子

ゼイル「……………」

咲子「……………」

茜「え、えつと……」

??「おお……！」キラーン

ゼイルの家に入って数秒後、茜の友達らしき女の子が目を文字通り輝かせて私をじーつと見ている。

咲子「あの…アンタは？」

留美「茜ちゃんの友達の赤坂留美あかさかです、先輩！」

咲子「せ、先輩？」

留美「はい、来年花町高専に入学するので！」

咲子「は、はあ……」

ゼイル「…とりあえず自宅に入っただけいいか？」

留美「…あ、スミマセン、すぐどきます！」サツ

2人（……忙しいな、この子）

―数分後―

咲子「…で、留美」

留美「はい、なんですか？」キラーン

咲子「なんでそんな憧れるような目で私を見てるの？」

留美「そんな目をしてるんじゃないなくて、実際に憧れてるんです！」キラーン

咲子「そ、そう…」

茜「スミマセン咲子さん、留美は私から咲子さんの話を聞きたびに目を輝かせながら聞いてるんです。相당한ファンですよ？」

咲子「ファン、ねえ…」

確か千早と千代もファンだったわね。（今でもそう）

咲子「ところで、どうやって茜と意気投合したの？」

留美「…ズバリ！先輩です！」

咲子「え、私？」

留美「茜ちゃんのお兄さんが先輩の友達だと知り、その事で色々話していたらいつの間にか意気投合しました！」

咲子「なるほどね…あ、一応聞くけど、私のどういう所に憧れてるの？」

聞くのは恥ずかしいけど…

留美「…戦い方です！」

咲子「戦い方？」

留美「はい、あの技の発動するタイミング、状況に対する対応力、格上の相手を倒す戦術…そして強力な技の派手さ…その全てに憧れてます！」キラーン☆

留美は目をさらに輝かせてそう言う。

咲子「そ、そう…（自分から聞いてなんだけど、照れるわね…）」

茜「留美、そこまでにしとけば…？」

留美「…あ、スミマセン！」

咲子「べ、別にいいわよ…謝らなくても」

フアンができて嬉しいのは事実だし。

留美「…先輩、1つ質問いいですか？」

咲子「いいわよ？」

留美「弟子って、受け付けますか？」

咲子「弟子？いくつかの条件を達成したら受け入れるかな、多分」

留美「その条件って？」キラーン

咲子「1つ目はパワーが30万以上、2つ目は改以上の技が最低1個はあること、3

つ目は…努力を怠らないこと、かしら？」

留美「…先輩」じー

咲子「な、なに？」

留美「…頑張ります！」

あ、この子弟子になる気ね。今気付いたわ。

咲子「ええ、期待してるわ」

留美「はい！」ニコッ

うん、いい笑顔ね。

こうして私は弟子候補ができた。

例の武器

side 坂田日花

朱雀「クルルル♪」

有美「あら、可愛いわね」ナデナデ

有美先生が家に来ている。

日花「で、何しに来たんです？ 朱雀の様子見だけじゃないですよね？」

有美「まあね。最近の咲子はどうしてるの？」

日花「かなり成長してますよ。技もパワーも対応力も」

有美「そう。…ところで、最近“例の武器”が不安定なのよ」

日花「えっ!?! 不安定!?!」

有美「なんか、はじけそうな感じなのよ」

日花「はじけそう？」

有美「ええ、まるで新しい主を探しているような…」

日花「主、ですか…でも、あの武器には嫌な思い出しかないんですよね…」

有美「まあ、それは使ってた人で、武器のせいじゃないわよ」

日花「そうですね…」

有美「大丈夫よ、新しい主ができたならその時よ。それまでは…」

…鎌、結界、絵画の『アンヘル』を、大事に保管するわ」

日花「…頼みますよ？」

有美「ええ、任せなさい」ナデナデ

朱雀「クルツ…」スヤスヤ

アンヘル…前の主が相当なクズだったわね…

日花（主は身近な人になるかもね…）

私の勘は、確かにそう言っていた。

side 桜木咲子

あと数日でお正月♪

お正月には餅食べて♪

ゼイルにあーんをしてもらう♪

はよ来い来いお正月♪

ゼイル「…突っ込んでいいか？」

咲子「？」

ゼイル「流石に替え歌だよな？」

咲子「そうよ？」

ゼイル「で、俺があーんしてあげるのはいいとして、それを歌詞にするのはおかしいと思うぞ？」

あ、あーんするのはいいんだ。

咲子「別に、何もおかしくないわよ…？」

ゼイル「はあ、ダメだこりゃ」

ゼイルは何故か落ち込む。…何でだろ？（お前のせいだろ！）

…立ち直らせないと！

咲子「…えいつ」トン

ゼイル「うおっ」ボスッ

ゼイルをベツトに倒す。そして…

咲子「フウ…ハア…！／／／」ドン

ゼイル「さ、咲子…？／／／」ドキッ

ベツトの上で逆床ドンした。

咲子「これ、ドキドキするわね…／／／」

ゼイル「咲子、顔が、近いぞ／／／」

ゼイルは顔を赤くする。……。

咲子「ハア、ハア…」

ゼイル「咲子…？」

咲子「…もう我慢できないわ！んっ…ちゅっ…」

ゼイル「んむっ!?!ちゅっ…」

ゼイルと舌を絡めてキスをする。

咲子「ぶはっ…フフッ♪」

ゼイル「いきなり何するんだよ…」

咲子「ゼイル…やるわよ♡」

ゼイル「~~あ~~」

その後、部屋中にこんな声が聞こえた。

アツ—————！！

茜「……………」ドキドキ

『あつ、そこは…んっ！』

茜「聞こえる…（タイミング考えてよお兄ちゃん！）」

年越しラーメン!?

side 桜木咲子

一昨日は…うん。言わなくていいわね。

今は12月31日の夜。あと少して新年を迎える。

咲子「今年の色々あったわね…」

ゼイル「ああ。10月でやっとあの地獄が終わった…そして引越してしばらくした後咲子と恋人になった。…いい年だった」

咲子「…あ、ゼイル、アンタ年越しに食べる物ってあるの？」

ゼイル「いや、ないが？」

咲子「じゃあ…年越しラーメン、食べてみる？」

ゼイル「ラーメン？そばとかじゃないのか？」

咲子「ウチはラーメンなのよ。おせちも食べないわね」

ゼイル「なるほどな。食べてみる」

咲子「了解。準備してくるわね」スタスタ…

キッチンできじおさんに『俺と茜の分も作ってくれるかい?』と、頼まれたので、4

人分作る事になった。

(きじおは年越しラーメンの事を知っている)

side 飛羽野ゼイル

.....

10月、逃げる事を決めるまでは、最悪と言っただいような状況だった。

あの時、兄さんに匿われなかったら：いや、考えちゃダメだ。

ここに引越してきて、最初はまだ人間不信だったが：ここは良い奴ばかりだった。

特に咲子。俺が過去を打ち明け、慰めてくれた。おかげで目の腐りも取れ、肩の荷が完全に降りた。

それから、充実した日々だった。似た趣味を持つ友達ができた。咲子の可愛い一面も見れた。

咲子と付き合う事になった時、本当に嬉しかった。まさか両思いだったとは思わなかった。

今の俺は、幸せ者だな。

咲子「ゼイル、できたわよ」

ゼイル「おう、今行く」

―数分後―

ズズツ…

ゼイル「おお、美味しいな」

咲子「喜んでもらえて嬉しいわ♪あ、ちなみに正月の餅にとあるものを混ぜ込んだわよ」

ゼイル「それは楽しみだ。…美味え」

side 桜木咲子

ラーメンを食べた後、私達は117の時報を聞いていた。

ピッ、ピッ、ピッ、プーン♪

咲子「後20秒」

ピッ、ピッ、ピッ、プーン♪

ゼイル「10」

茜「9」

きじお「8」

咲子「7」

ゼイル「6」

茜「5」

きじお「4」

咲子「3」

ゼイル「2」

全員「1…」

…プーン♪

『あけましておめでとう』

—————
その頃、他のメンツは…

祐樹「これからもよろしくな、ルマ！」

ルマ「うん♪」

祐樹をルマは家で過ごし、

絵奈「むにゃ…」

絵奈は寝ており、

千早「…おつ、年明けてる」カタカタ

千代「あけおめ…」カタカタ

七隈兄妹はパソコンとにらめっこ、

レイト「……………」ギュルル…

レイトはエネルギーを集中してて気付かず、

翔「あけおめ」

育也「ことよろ」

学「…寝ようぜ」

翔、育也、学の3人は互いに挨拶、

メイ「お兄さん、次は貴方に勝ちます！」

出夢「そうかい、でも負けないよ！」

花「……………（これババ抜きよ？）」

メイと出夢が何故かババ抜きでガチになっていた。

……………。

「時間停止！」

←ブウウウウン…

赤いパーカーを着た女性が、そう言った。

偶然発見!?

side 桜木咲子

1月1日、朝。

ゼイル「…おっ、これ甘いな」

咲子「でしょ? マックスコーヒーを餅に混ぜ込んだのよ」

茜「美味しいです♪」パクパク

きじお「…とところで、初詣には行くのかい?」

咲子「もちろん行きますよ。…着物がないので浴衣で」

きじお「それ、寒く…あ、大丈夫か」

火で暖めればいい話である。

ゼイル「咲子、自分の家族にあけおめ言ってないだろ?」

咲子「そうね、まあどつちにしろ浴衣を取りに帰るから、そこで挨拶するわ」

ゼイル「ああ、そうしろ」

―数十分後―

私はゼイルと自宅に帰っていた。

学「眠い…」

育也「学、目をつぶってたら電柱に当たるよ?」

翔「…おつ、お前らも初詣か?」

そこで男子3人組に遭遇した。

咲子「一旦家に帰って、浴衣に着替えてから行くわ」

翔「そうか。そんじゃ先に行つとくぜ」

ゼイル「ああ、じゃあな」

学「…「ゴンツ!」…痛えっ!?!」

育也「ほら、言わんこつちやない」

翔「お前バカかよwww」

学「クソがよおお!」

…仲良いわね。

―数分後―

ガチャツ

咲子「ただいま」

春樹「咲子、あけおめことよろ」

咲子「あけおめことよろ」

春菜「咲子、浴衣は部屋に置いてるわよ」

咲子「うん、ありがと」

春菜「…早く孫の顔が見たいわね♪（早い!）」

咲子「そ、そんな事言わないでよ!あと…最低5年待ってて／＼／＼」

春菜「あらあら〜」

蓮也「春菜、そこまですして「黙ってなさい」あ、はい」

父さん…後で何か奢るわ。

咲子「ふう…浴衣着てくる〜」

タタツ…

〜さらに数分後〜

ガチャツ

ゼイル「来たか咲…子…」

咲子「に、似合うかな…?」

ゼイル「…」スツ

ゼイルはスマホを出し…

カシヤツ

…無意識に写真を撮った。

ゼイル「…最高に似合ってるぞ」

咲子「ありがと♪」

その後、日吉神社で初詣をし、帰ってゼイルに餅をあーんしてもらった。

学「ぐっ…」ズキズキ

翔「まだ痛えのか？」

育也「思いつきり当たったみたいだからね…」

学「俺は朝が弱えんだよ、クソう…」

3人組がとある道を通りかけた時。

「よし、ここはオーケーね」

何処からか聞き覚えのある声があった。

翔「ん?…おい、アレ坂田先生だよな？」

育也「何してるんだろう…」

日花「時間…停止！」

フツ…

日花がそういつた瞬間、彼女は消え去った。

翔「なっ!?消えた!?!」

育也「アレが坂田先生の能力…」

翔「こりや大スクープだぞおい!!!」

2人(学は頭痛で悶えていた)は偶然日花の能力を発見したのだった。

抵抗開始前

side 室見メイ

メイ「ーで、それで、咲子さんが…」

レイト「ふむふむ」

俺は家でレイトさんと雑談していました。

メイ「…あ、言い忘れてました。俺達、明日から2日間北海道へ行くんですよ」

レイト「そうか。お土産頼めるかな…?」

メイ「いいですよ、何がいいんですか?」

レイト「ばかうけで」

メイ「了解です」

レイト「…で、北海道の何処へ行くんだい?」

メイ「札幌、旭川、阿寒湖、函館、輪花高専…あ、スキー場にも行きます」

レイト「それは楽しそうだね」

メイ「レイトさん…家の事、頑張つて下さいね?」

レイト「もちろん。バレてはいない…と思う。だから大丈夫…なはず」

メイ「そうですか。それなら心配ないですね」

レイト「だね。…ゲーム再開しようか？」

メイ「あ、はい」

ピコピコ…

ガチャツ。

母「服はここに…あら？」

レイトの母はレイトの服をイスに置くと、パソコンの電源がついている事に気付いた。

母「戦闘試合…？」

画面には、咲子対メイの動画が一時停止されていた。そのパソコンの前には、技のメモもあつた。

母「あの子、まさか…」

カチツ

レイトの母は別のタブを開く。そこには…

「今年の目標」

①もう親のいいなりにならない

②才能を発揮し、磨く

③花町高専に転校する

コメント

メイ『中々いい目標です。頑張りましょう！』

2021/1/1

母「才能…ね…」

そんなものいらないわ、とレイトの母は呟いた。

母「帰ってきたらどうしてあげましょうか？」

しかし、レイトはメイの家に泊まったため、その日から監禁されるのは回避できた。

side 渡辺レイト

ー次の日ー

メイ「じゃ、集合時間になるので行ってきましたね♪」

レイト「うん、楽しんできてね」

メイ「はい、それじゃ♪」タタッ

そして室見さんは走り去った。

レイト「……………」スタスタ

昨日つけておいたパソコン、バレたかな？

レイト「ま、バレても別にいつか」

帰っても監禁されることはない。

仕組んだからね。

しばらく歩いた後、“元”自宅に着いた。

レイト「ただいま」ガチャツ

母「あらレイト、おかえり」

父「話がある。はやく上がってくれ」

レイト「話?…分かった」

さて、抵抗スタートだ。

いざ！北海道へ！

side 桜木咲子

―空港―

今日から北海道に旅行だ。

…すっごい楽しみ！

咲子「楽しみね、メイ♪」

メイ「そうですね♪」

ゼイル「阿寒湖って、確か変なゆるキャラがいたような気が…」

千早「ああ、いるぞ。…こいつだ」

『まりもつぽり』

ゼイル「こいつか…」

絵奈「変な見た目してるね〜」

学「…なあ、本場の味噌ラーメンって美味しのか？」

翔「まだ着いてもねえぞ。話が早すぎないか？」

学「関係ねえ！俺は早く食ってみたいんだ！」

育也「まあ、考えは分からなくもないけど、ね…」

ルマ「祐樹、スキーで思いつきり滑ろうね!」

祐樹「もちろんだ!」

『まもなく新千歳行き〇〇便の搭乗が開始します』

咲子「あ、そろそろね」

ゼイル「行こうぜ」

スタスタ…

―数時間後―

―新千歳空港―

咲子「うっ、寒いわね…」

ゼイル「そりゃ北海道だからな」

ゼイルからもらったスカーフがなかったら冷凍食品になってたわ。

※なりません。

翔「で、風鈴との集合場所って何処だ?」

絵奈「入口付近で待ってるって言ってたよ」

学「…あそこにいるぞ?」

全員『え?』

学「ほら、アレ風鈴じゃね？」

よく見ると、空港の飲食店で食べていた。

咲子「あ、ホントね。おーい」タタツ

風鈴に近付く。すると風鈴はこっちに気付いた。

風鈴「ん、はひほはひ、ほうほほほっはいほうへ！」モゴモゴ

略：ん、咲子達、ようこそ北海道へ！

ゼイル「行儀悪いぞ」

風鈴「ん。…ふう、ゴメン。ヒマだったから食べようと思ったたら、いつの間にか集合時間になってたの」

咲子「ふーん…案内してくれる？」

風鈴「もちろん♪…あ、その前にコレ食べてから」パクパク

咲子「……私達も昼食食べた方が良さそうね」

その後雑談しながら昼食に味噌ラーメンを食べた。美味しかった。

side 渡辺レイト

レイト「で、話って？」

母「アンタ、これは何？」スツ

母さんはパソコンの画面を見せてくる。

レイト「僕の目標だけど、何か?」

父「お前、何をしているのか分かってているのか!」

はあ、何も悪いことはしてないよ。頭おかしいよ?

レイト「うん。…僕は自分がやりたい事をやる」

母「へえ…これは罰が必要なようね」

父「その腐った性根を普通に戻してやる。反省部屋行きだ!」

監視カメラには気付いてないようだね。

レイト「思ったんだけど、僕の普通と父さん母さんの普通は違うよね?」

母「そ、そんな事は…」

レイト「僕の普通は、父さん母さんが決めつけるものじゃない」

父「…んだとコノヤロー!」ブンツ

レイト「おっと」サツ

この拳、遅いね。室見さんの刀より大分遅い。

レイト「僕はやつと本当の友達ができたんだ。言いなりにはもうならない」

母「言いなり? ふざけないで。私達はアンタの事を思ってる」

レイト「僕のため?僕はそのせいでずっと仮面を付けてたんだよ?ずっと…地獄を味わってたんだ!それが…僕のためか!」

母「ヒツ…」

父「…：…おいレイト。お前操られてるのか？いつものお前はとうした？」

レイト「うん、僕は操られてた。…お前から」

父「は…？」

レイト「お前らは普通普通言つて、僕を何日も監禁して、精神的に追い込まれた僕は普通”に見えるようにする” 仮面を付けざるを得なかった。それを何年も。いい成績を取つたら褒めずにまた監禁…クズも良いところだ。本来ならお前らは監禁罪と児童虐待で逮捕されるんだぞ？」

母「嘘…：そんなハズは…」

まだ信じないか。

…もう、家族とは思わない。

レイト「今日を持って、僕は…お前らと縁を切る！」

父「なっ…」

パサッ

書類を机に置く。

レイト「ほら、早く書け。しないと訴えるぞ？」

汚い脅しかもしれないが、コイツらはクズ。これぐらいどうってことない。

母「でも、誰が引き取り…」

レイト「書いてあるだろ?ここだ」

父「……嘘だろ!」

『室見メイ』

開放

side 渡辺レイト

父「お前、最近有名になったヤツに引き取られるのか!？」

レイト「そうだが、どうした？」

母「ありえない…絶対ウソよ…」

レイト「証拠がほしいのか？」

父「見せれるものならな！」

レイト「分かった」スッ

僕はスマホを出し、とある人に電話する。

??『あ、僕の出番がきたのかい!？』

レイト「うん、きたよ。急いできてくれ！」

??『了解だよ!』

ツ…

レイト「数分で来るだろう」

父「ほう…（もし来なかったら…ククク…）」

―数分後―

ピンポーン

レイト「来たみたいだ」

ガチャツ

??「ハロー、レイト君！」

レイト「うん、よく来たよ室見さん」

母「え……」

父「……いや、室見メイじゃないな、誰だ？」

ニヨ「僕はメイの5人目の人格、室見ニヨだよ」

彼女はつい昨日目覚めた人格で、属性は蓮、一人称は僕だ。

――
メイ「誰がここに残るかじゃんけんしますか？」

ナオ「いや、これは戦って……」

ヤエ「じゃんけんがいい」

クミ「あたいはゲームで！」

ニヨ「じゃあ、僕が引き受けるよ！」

4人『……ん？』

ニヨ「やあ、やっと目覚めたよ」

4人『えええー!?!』

という感じで、ニヨが福岡に残るのを引き受けたのである。

ニヨ「…で、証拠が欲しかったんだよね?」

母「え、ええ…」

レイト「ほら、とつとと書け!」

父「ぐっ…」サラサラ

クソジジイは『俺、キレそうです』って顔をしながら書類にサインする。

父「…終わったぞ」スツ

レイト「分かった…もう僕はお前らの家族じゃない。分かったな?」

母「そんな…」

レイト「今更誤つてもムダだ。…行くよニヨ」

ニヨ「うん…(凄い威圧だね…)」

その後僕はそのまま市役所へ行き、書類を提出した。

これから僕は…室見レイトだ…!」

レイト「やっつと、開放されたよ…!」

ニヨ「おめでと、レイト君♪」

レイト「ああ…！」うるっ

僕はしばらく感動に浸っていた。

やっと、地獄が終わった。

side 桜木咲子

咲子「札幌にも地下鉄があるのね…」

風鈴「うん、あるよ」

ゼイル「それは現在進行系で乗ってるから分かる」

ガタンゴトン…

咲子「ところで、明日スキー場へ行く予定だけど、アンタも来る？」

風鈴「もちろん♪スキー歴5年の力、見せてあげるよ！」

翔「おお、それは頼もしいな」

そして私達は電車に揺られながら雑談をするのであった。

嬉しい連絡

side 室見メイ

今日は札幌市を観光しました。

風鈴さんが色々な所へ連れてってくれたんですが、全部興味深いものでした。

今はホテルの部屋でスマホをいじってます。

メイ「ニヨは大丈夫でしょうか…」

『テレキャスタービーボーイ、僕に愛情を…』

あ、電話来ました。レイトさんからですね。

ピッ

レイト『やあ、室見さん』

メイ「こんばんは、レイトさん。どうしました?」

レイト『…大事な話がある。今いいかな?』

大事な話…何でしょうか?

メイ「はい…」

レイト「分かった、話すよ。僕は今日の朝室見さんと別れた後、
“元”自宅に帰った」

え、「元」自宅？

レイト『そして早速“元”両親に呼び出されて、僕がわざと仕組んだものを見せられた。作戦通りだったよ』

“元”両親…？まさか：

レイト『そして、それについてきてきたところで、僕は思いつきり正論を叩きつけた。あの時は本当にイライラしたよ』

レイトさん、もしかして論破が得意なんですかね？俺も何度かされてますし。

レイト『そして、縁を切った』

メイ「え、今日切ったんですか!？」

レイト『うん、室見さんがサインした書類を渡したよ。君が書いた証拠を見せろと言われたけど、ニヨさんと呼んで証拠を見せた』

メイ「なるほど…」

つまり、ニヨがいなかったらレイトさんは…いや、考えちゃダメですね。

レイト『それで僕の“元”両親は縁を切った。…君には本当に感謝しかないよ。ありがとう…!』うるっ

レイトさんは泣いてるような震えた声で話しています。

メイ「レイト…君」

レイト『……室見さん？』

メイ「友達」として、助けるのは当然ですよ。これからもよろしくお願いしますね、レイト君」

レイト『……うん、これからもよろしくね、メイさん！』

メイ「はい♪……そろそろ失礼しますね、また明日です、レイト君」

レイト『うん、また明日！』

ツ……

メイ「……／／／」

は、初めて人を君付けしました……顔が熱いです……／／／

――――
 絵奈「……」(。(。D。D)

千代「……」(。(。D。D)

同じ部屋にいた絵奈と千代は、メイの電話をずっと聞いていた。メイは未だに2人の事に気付いていない。

メイ「うう……レイト君にどう顔を合わせれば……／／／」

絵奈「……千代、やるよ」

千代「……ええ」

2人『……メイ、レイト君って誰？』

メイ「……ふえ!?! / /」

やっと2人に気付いたメイはその後質問攻めにあい、メイはずっと顔を紅潮させるのであった。

スキーからの雪合戦！

side 桜木咲子

北海道2日目。

今日はスキー場にいる！

咲子「滑ってやるわよ〜！」

風鈴「あ、その前に注意したい事があるわ」

咲子「ん、なに？」

風鈴「偶に雪が少し解けて泥溜まりになってる所があるから、そこに激突しないようにね」

咲子「了解。じゃ、滑っていく〜！」

シャーッ！

雪の坂を凄いスピードで滑っていく。

咲子「そして…とうっ！」

ピヨン、クルクル、スタツ！

空中に跳んで一回転し、着地した。

ゼイル「おお、お見事」

咲子「ふふっ、でしょ？」

ゼイル「次は俺の番だな」

咲子「期待してるわ」

ゼイル「おう」

タタッ

―数十秒後―

しばらくするとゼイルが滑ってきた。そして…

ゼイル「せいっ！」ピヨン

ブワッ!

咲子「おお…」

スタッ

風を起こしながら一回転し、着地した。

ゼイル「どうだ？」

咲子「かっこよかった！」

ゼイル「そ、そうか…」

翔「おーいお前ら、超次元雪合戦しようぜ！」

咲子「それってイナイレの雪合戦？」

翔「まあ、似たようなものだな。お前らもやるか？」

咲子「ええ、やるわ。ゼイル、行きましょう」

ゼイル「ああ」

タタツ

どうやら超次元雪合戦は2人1組のチームで挑み、当たったら負け、技使用オーケーの雪合戦のようだ。

チームは私とゼイル、翔と絵奈、祐樹とルマ、千早と千代、メイと風鈴、学と育世の6チーム。…メイと風鈴が厄介そうね。

メイ「じゃ、このチャカメカファイヤーが爆発したらスタートです」

……………

……ドガーン！

スタートね！

翔「先にお前を狙う！オラア！」ポイツ！

咲子「甘いわ！絶イジゲン・ザ・ハンド！」ギョルルルル！

翔の雪玉を受け流す。

絵奈「隙あり！後ろだよー！」ポイツ

咲子「…空中分解！」ギユイイイン!

絵奈「え〜!」

咲子「ふう、危なかったわね。やり返しよ!ムゲン・ザ・スノーボール!」

ムゲン・ザ・ハンドの腕がそれぞれ雪玉を持っている。つまり…516個ある。

咲子「いけえ!」

ポイポイポイツ!

翔「そんなのありかよ!?!…うわっ!」

絵奈「うわ、多すぎ…あ」ボスツ

咲子「絵奈、アウト」

絵奈「あはは、やられちゃった〜」

翔「マジかよ…」

私達はそのまま雪合戦を楽しんだ。結果的に私とメイの相打ちで引き分けになったけど、楽しかった。

side 室見レイト

僕は今、不可解な出来事に遭遇している。それは…

ニヨ「……♪」ギユツ

ニヨさんが僕に抱きついてる事だ。何でだろう…昨日の夜からずっとこうだ。

レイト「あのー、ニヨさん？腕離してくれませんか？」

ニヨ「やだ」

レイト「いやなんで〜!？」

ニヨ「…ふふっ♪」

いやいやそんな嬉しそうな顔されても…

お似合い

side 坂田日花

日花「……………」カタカタ：

私の教え子が作ったこのゲーム、めっちゃ面白いわね：

日和「…お母さん、何してんの？」

日花「ん、見ての通りゲームだけど？」

日和「咲子ちゃんをちゃんと鍛えてる？」

日花「アンタに言われなくてもちちゃんとやってるわよ。咲子達は今北海道だし」

日和「へえく。じゃ、遊びに行くね」

日花「ええ、行つてらっしゃい」

ガチャツ。

……………。

日花「ん、シークレットボス？」

『ダークアルカV2』

どうやら1回も負けずに1部をクリアしたら戦えるようね。

『♪ステルス・ロック』

おお、いい曲ね。

日花「おっと、攻撃力エグいわね」

こりやちよつとしんどいわね。

その後、私は頑張つて倒したのであつた。

side 室見レイト

ピンポーン。

レイト「はーい」ガチャツ

出夢「あれ、君は？」

花「会つたことないね」

ドアを開けると知らない人が出てきた。

ニヨ「あ、お兄ちゃんと花さん、入つていいよ」

出夢「ん、メイじゃないみたいだね。別人格かい？」

ニヨ「うん、5人目のニヨだよ！」

花「で、アンタは？」

レイト「レイト…です」

花「名字は？」

レイト「室見レイトです…」

出夢「(同じ名字!?) …とりあえず入らせてもらおうよ」

―数分後―

出夢「僕は室見出夢、花町高専3年の1位で、メイ達の兄だ」

花「私は藤崎花、花町高専3年の2位で、出夢と付き合ってるよ!」

レイト「えっと、よろしくお願ひします…」

ニヨ「レイト君、そんなに固くしないでいいよ」

レイト「で、でも…」

プレッシャーがね…

出夢「ところで、名字が同じなのは偶然かい?」

ニヨ「…どう思う?」じー

出夢「偶然じゃないみたいだね。…まさか」

花「メイちゃん、行動力凄いね!」

レイト「…はい、僕メイさんに引き取られました」

出夢「(今更だけど僕の妹って規格外?) …経緯を話してもらえるかな?」

レイト「はい…」

―ただ今説明中―↑使う作品が違う!

レイト「…以上です」

出夢「…フツ」

花「…ふふっ」

レイト「えつと、どうしたんです？」

出夢「言ったほうがいいのかな？」

花「いいと思うよ？せーの」

2人『2人ともお似合いだね』

めちやくちや予想外なセリフが飛んできた。

ニヨ「えっ／＼／」

出夢「完全に奇跡としか言いようがないよ」

花「ニヨちゃん、頑張ってね♪」

ニヨ「う、うん／＼／」

レイト「???」

ニヨは何を頑張るのかな？分からない…

日花「よし、勝った！」

朱雀「クルル♪」

福岡へ帰る

side 桜木咲子

北海道の色々な所へ行き、カニ、熊肉、味噌ラーメンなども食べた。
楽しかった。

そして今日は福岡へ帰る日だ。

風鈴「旅行は楽しめた？」

咲子「もちろん！楽しかったわよ」

風鈴「それは良かったわ。次会うのは…3月の5校衝突ね」

咲子「そうね。私はもつと強くなるわ！」

風鈴「じゃあ、私はそれを追い越せるように頑張るわ！」

ガシッ

握手を交わす。

咲子「じゃあね、風鈴」

風鈴「またね、咲子」

2人『また会おう』

ゼイル「おお、決まった」

メイ「アツいシーンですね！」

―数時間後―

咲子「ふう、着いた着いた」

ゼイル「ん？ 茜と赤坂がいるな」

メイ「…あ、レイト君！」 タタツ

…ん？ 今メイ君付けした？

スタスタ

茜「おかえり、お兄ちゃん」

ゼイル「おう、ただいま」

留美「先輩、私特訓しましたよ！ たとえば―」

咲子「はいはい、後は家で聞くから」

メイ「お土産です、レイト君」

レイト「ありがとう、メイさん」

メイ「どういたしまして♪」

咲子「……………へえ」じー

レイト「…ん、どうかしたかい？」

咲子「私は桜木咲子よ」

レイト「あ、僕は室見レイトだよ」

咲子「で、アンタがメイに引き取られたのね？」

レイト「…うん」

訳ありなのは知ってたけど、どうやらほぼトラウマのようね。

咲子「ま、深くは聞かないでおくわ。よろしく」

レイト「うん、よろしくね」

ゼイル「……………（なるほど、コイツも追い込まれてたのか）」

そして、私達は帰ってきたついでにレイトの歓迎会をする事にした。

ー半時間後ー

♪M U L A ス ト ー リ ー A r u m i i s h e r e .

全員『かんぱーい！』カンッ

※酒は飲んでません。

咲子「ん、美味しいわねコレ」

メイ「改良した梅ジュースです。喜んでもらえて何よりです♪」

咲子「ところで、冬休みの残り数日何するの？私はゼイルとイチヤイチャするけど」
メイ「さらつと自慢しないで下さい。俺は、そうですね…」チラツ

メイはチラツとレイトを見る。

翔「でな、それでな、学がー」

レイト「え、ホント!?!ははっ!」

学「俺の黒歴史掘り返すなよ…」

育也「電柱に当たるとつて黒歴史なのかい?」

うん、楽しんでるわね。

メイ「…レイト君と色々したいですね」

咲子「へえ。…好きなの?」

メイ「ふえ!?!そ、そんな事ないでしゅよ!?!」

咲子「嘸んでるわよ。なるほどね…」

メイ「す、少し…好きです…」

咲子「ふふつ、それなら応援するわよ」

メイ「…はい!」

その後私達は飲み会（酒は飲んでない!）を楽しんだ。

出番がほしい!

side 貝塚絵奈

.....。

絵奈 「最近私の出番がないよ」しよぼん
作者が出してくれないよ (メタい!)

学 「それは同感だ」

育也 「出番、ないよね...」

絵奈 「うくん...何しようかな」

学 「絵でも描けばどうだ?」

絵奈 「千代や千早からの依頼はすでに終わってるんだよ」

育也 「じゃあ、オリジナルの絵を描けば?」

絵奈 「オリジナル? うくん...」

.....!

絵奈 「いい考えだね! やってみるよ!」

紙、色鉛筆、と。

絵奈「描こう加工描こう♪」

育也「変なものが混ざってた気が…」

―数分後―

………。

今、衝撃の事実気付いちやった。

絵奈「何を描けばいいの〜!?」

ネタがない…どうしよう…

絵奈「最近起きた事は…」

北海道旅行だよね？

絵奈「北海道で一番印象的だったのは…」

やっぱりスキーと雪合戦かな〜？

絵奈「じゃ、下書き…」

その後私は頑張つていい絵を描いたよ〜。

side 七隈千早

カタカタカタツ。

千早「…どうだ？」

『天空掌！』ズガアン！

千早「よし、効果音はオーケーだな」

次はキャラクターのセリフだな。

『おお、お姉ちゃんが新技出しててる!』

うん、コレもオーケーだ。

…今俺が何をしてるのかって?

M U L A の物語第3部のプログラミングだ。1部と2部が好評だったので、かなりやる気が出てる。

ガチャッ

千代「千早、そろそろやりすぎじゃない?」

千早「いや、俺はまだいけるぞ?」

千代「ふーん。はい、エナドリ」スツ

千早「あざっす」カチャッ

ゴクゴク…

…ふう、生き返ったぜ。まるで仕事を終えた会社員のようだ。

千早「よし、続けるか」

カタカタッ…

s i d e 室見メイ

メイ「……………」

ナオ「……………」

ヤエ「……………」

クミ「……………」

ニヨ「……………」

ギユウウウ…

レイト「えっと、5人とも、どうしたんだい？」

今、俺達はレイト君に抱きついてます。

…理由？ 黙秘します。(バレバレ)

レイト「そろそろ離して『いやです(やだ)(やだもん！)』…ええー」

だって、なんかレイト君の近くにいると癒やされるんですよ!? 離すワケないじゃない

ですか!?

レイト「……………(ホントに、何この状況!?) トイレ、行つていいかな…?」

メイ「それならいいです」

ナオ「でも、戻つてきてよ？」

ヤエ「もし戻らなかつたら…」

クミ「つかまえるよ！」

ニヨ「…ウフフ♪」ゴゴゴ…!

レイト「(ニ、ニヨさんが怖い!)わ、分かった。行ってくるよ」あ、トイレに閉じこもるのもダメですよ」…うん(ダメか…)」

スタスタ

メイ「……………」

早く戻ってきてほしいです〜

1年3学期

3学期、スタートツ！

side 桜木咲子

咲子「今日から3学期ね」

ゼイル「そうだな」

咲子「……5校衝突以外に行事あったっけ？」

ゼイル「知らん」

咲子「まあいいや。…むふ」ギョツ

ゼイル「……（もう慣れた……）」

ちなみに、私達は既にクラスにいる。

「おい、お似合いコンビだぞ」

「くうう……羨まけしからん！」

翔「言われてるな……」

咲子「別に、被害はないしどうでもいいわよ」

絵奈「おお、凄い堂々としてるね」

ルマ「祐樹く、ボク達もく」ギユツ

祐樹「ルマ、今はやめてくれ、恥ずか死ぬ…って聞いてんの!？」
聞いてないわよ、どう見ても。

千早「で、今日の分のプログラムは…」

千代「量的に多分2時間かかるわよ」

千早「そうか…頑張ろ」

ガラガラガラ。

日花「みんな、あけましておめでとう。安全に過ごせたかしら?…そろそろ始業式だから、並ぶわよく」

ガタガタ…

side 室見レイト

今日から僕は室見レイトとして学校へ行く。

「おう、おはよう渡辺」

レイト「あ、僕名字が変わったんだ。室見レイトだよ」

「そうなのか? 室見って、確か…」

レイト「そこは君の想像に任せるよ。じゃ」スタスタ

―数分後―

先生「おい渡辺…じゃなくて室見。お前の保護者って…」

レイト「はい。メイさんです」

先生「マジかよ…」

―数分後―

先生「〇〇〇」

「はい」

先生「〇〇〇」

「はい」

先生「…室見」

レイト「はい」

『ええ!?!』

レイト「?」

「先生、渡辺の名字間違ってますん!?!」

先生「間違ってる。冬休み中に変わったんだ」

「なんで言わなかったんだよ、レイト」

レイト「何でって、言う必要が無かったからね」

「お、おう…（怪しいな）」

―数時間後―

レイト「……………♪」

「おい、アイツ前と比べて雰囲気が柔らかくなってないか?」

「だろ。つけてみようぜ」

レイト「…………… (いるのは分かってるんだよね…まあいいや)」

スタスタ…

僕はそのまま帰った。

ピンポーン

…ガチャツ

メイ「あ、レイト君おかえりです」

レイト「うん、ただいま」

「…おい、アレって」

『ええええええええええっ!』

「む、室見メイ…さんだよな!」

「アイツ、まさかよ…」

「…これは大スクープだ、明日学校中に連絡だ!」

ダダダダダ

ね)
 レイト（行ったみたいだね。ま、仮に明日バレたとしても、何も問題はないんだけど

メイ「えつと、レイト君どうしましたか？」

レイト「ん、なんでもないよ」スタスタ

|-----|

「……………」

「……………」

「さあ、操り人形になりたまえ！」

2人『了解…』

遭遇

side 室見レイト

ー次の日ー

今日は、確か確認テストがあつたっけ？

レイト「……♪」

『僕の心はエゴロック…』

現在エゴロックを聞いている。

「おーいレイト！」

レイト「ん、何だい？」

「…室見メイさんと一緒にいたのが目撃されてるんだが、それってホントか!？」

レイト「ホントだよ」

きつぱりと言う。

「マジかよ、親戚かなんかか？」

レイト「ちよつと違うかな？」

「じゃあなんだよ、他にあんのか？」

レイト「…黙秘する」

「なんだよ、教えてくれよ、友達だろ？」

レイト「いつから友達になったんだい？」

「…は？何いつてんだ、お前？」

レイト「仲良くはしてたよ。でも友達ではない。僕に友達は一人しかいないよ」

「ど、どういうことだ？」

レイト「カンタンに説明するとね…小3から去年までの僕は全部演技さ」

「……………はあ？」

うん、理解できてないみたいだね。

レイト「だから、前まではずっと演技で、今は素で話してるって事だよ」

「あ、なるほど…って、その友達って誰だよ!？」

レイト「それも黙秘するよ」

「ぐっ…いつか答えさせてやるからな！」

レイト「それはどうかな？僕は2年から花町高専に転校するし」

「マジかよ…」

その後の確認テストで、僕は全教科100点を取ったのはまた別のお話。

side 坂田日花

????? 「ほう、来たか入箱」

日花 「今は坂田よ。…で、なんでアンタがここに？」

????? 「フツ、説明する必要もないだろう？」 スツ

ギギギツ！

「……………」

???????? 「……………」

日花 「な…」

????? 「近くの飲食店の店主とその双子だ。操り人形にしてやったぞ？」

日花 「さっさと開放しなさい！ しないと…」

????? 「焼き切ると？…無意味だね！」

日花 「なんですって？」

????? 「僕の糸は火でも焼かれず、刀でも切れない。ほぼ無敵の糸なんだよ！」

日花 「ツ…なら…」 ボツ

????? 「おっと、今は戦わないよ？…また会おう、入箱」

シュツ！

日花 「クツ…」

何で私はとつと倒さなかった？

日花「…咲子達を連れて行った方がよさそうね」
明日伝えましょう。

side ???

―回想―

♪煮ル果実―紗麻

今日も後少しで店じまいかな？

そう思ってた時、誰かが入ってきた。

「ククク…」

変な笑い方だな。

「いらつしやいませ〜」

「……………」ニヤリ

…この人から不穏な気配がする。

「ご注文はどうぞなさいますか？」

「そうだね……………」

：君とその双子かな？」ギギツ！

??? 「なっ、やはり！」キイン！

相手の武器をお玉でガードする。

「クククツ、もう遅い！」シユツ！

「ガツ…ハツ…」

バタン

僕の記憶はそこで途切れた。

天界、突入！

side 桜木咲子

咲子「今日、ヒマね…」

ゼイル「ヒマなら俺達はここにいないぞ？」

咲子「それもそうね…」

私達はさとかに隊基地でくつろいでいた。

メイ「ところで咲子さん、MULAの物語どこまで進みましたか？」

咲子「1回全クリしてから、今シークレットボスと戦えるようにノーコンクリアを目指してるわ」

メイ「あ、俺後少しなんですよね…」

出夢「……………」スッ

翔「……………」スッ

出夢「…勝った」

翔「グッ…もう一回です！」

花「あはは、もう三連敗してるよ？」

※ババ抜きです。

それぞれゆつくりしていた時。

コンコン。

絵奈「はくい」ガチャツ

しかし、誰もいなかった。

咲子「…ハア」クルツ

日花「…よつ。ちよつと話があるのよ」

日花先生は真面目な顔でそういう。

咲子「分かりました」

日花「昨日、とある悪魔と遭遇したの」

祐樹「悪魔?」

日花「まあ、正確には出夢みたいに悪魔化した人ね。そいつは糸で人を操る能力を持つてるのよ」

ルマ「……………」

日花「そしてその能力で、2人操り人形にしてたわ」

翔「な……………」

日花「その1人は…イーティングニコルの店主、ニコルよ」

メイ「えっ…!?」

日花「これから魔界へ行ってアイツをボコすつもりなのよ。…で、私についていく人はいるかしら?」

全員『……………』

私達はしばらく考え込む。

咲子「…私は行きます」

ゼイル「…俺も」

メイ「俺も行きます!」

出夢「…後輩を守るためにも、行きます」

花「私も!」

祐樹「…俺も行きます」

ルマ「ボクもです!」

絵奈「私も行きます!」

翔「…俺も」

日花「…分かったわ。最初に天界へ行くわよ。…天使化!」

ギユイイイン……………!

先生を紫色のオーラが包む。

日花「…インフェルナ、完了!」

咲子（見るのは2回目ね）

出夢（凄いパワーだ…）

絵奈（かっこいい〜!）

日花「さて、と。このワープホールに入りなさい」

咲子「突入!ハアア!」

スッ!

―天界―

メイ「また来ましたね」

『火野道場』

日花「ここにちよつとした武器があるのよ」

私達は道場の中に入っていった。

―数分後―

有美「来たわね。例の武器…『アンヘル』はここよ」

咲子「アンヘル?」

『ドクドク交わって たちまちこんにちは』

有美さんは何かを運んできた。

咲子「ガラスっぽい玉と…」

ルマ「鎌と…」

絵奈「破れてるキャンバス…？」

3つとも赤いわね。

有美「これがアンヘルの3つの専用武器よ」

咲子「…?!？」

突然、ガラスっぽい玉が動き出し…

ズウウツ…!

咲子「え、あ、ちよつと!？」

私の中に入っていった。

アンヘル

♪かいきりきべア—アンヘル

side 桜木咲子

ガラスつぽい玉は私に、鎌はルマに、キャンバスは絵奈の中に入っていた。

咲子「…ツ、グツ…」

なんか、エネルギーが…

日花「…まさか!」

咲子「……………!!」

カツ…!

メイ「うわっ!」

有美「……………」

祐樹「ルマ!」

スウウウ…

咲子「……………あれ?」

なんともない?

翔「……………」

出夢「おお…」

咲子「ん、なんか背中が…」

サラッ

…え？

咲子「…翼？」

ルマ「ボクもある…」

絵奈「なにこれ〜!？」

日花「どうやら、成功したようね」

咲子「成功？」

有美「鏡を見てみなさい、ほら」スツ

咲子「…：W H A T!？」

私の髪色は漆黒になっており、そこから赤い角が生えていた。さらにそこから赤い天使の輪っかがあった。

…そして背中に天使の翼。

咲子「天使化してる!？」

日花「その通り。どうやら1つずつ武器を手に入れたようね」

咲子「ええと、能力って…」

有美「咲子は『結界』、ルマは『鎌』、絵奈は『絵画』よ。結界は、まあ、結界を張ったりする。鎌は、とてつもない威力を誇り、くらったらじわじわダメージを与える。絵画は、絵を実体化するだけでなく、属性も付与されるわ」

咲子「は、はあ…」

結界って…

咲子「こう、かな？」スツ

…ピキン！

メイ「おお、張られています！」

咲子「…新技思いついたわ。メイ、攻撃してくれる？」

メイ「あ、はい。…真狐月十字斬！」ズバツ！

咲子「…」スツ

私は力を右手に溜める。そして…

咲子「…結界流し！」ガオン！

曲線状に結界を張り、攻撃を受け流した。

…イジゲン・ザ・ハンドの強化版ね。

絵奈「…激流の渦!!」グルグル！

翔「え、ちよ、おいつ!」ジャツパーン!
絵奈も強い技を考えたわね。

祐樹「ルマ、攻撃はやめてくれよ?」

ルマ「うん、攻撃はしないよ?かわりに…」ガシツ
ルマは祐樹の腕を掴む。

祐樹「お、おい?」

ルマ「翼使つて飛ぶ!」

ビューン!

祐樹「うわあああああああああああ!」

祐樹、お疲れ。

ゼイル「咲子、翼触つていいか?」

咲子「え? いいけど…」

ゼイル「じゃ、失礼するぞ…」

サラサラ…

咲子「んっ…」

なんか、気持ちいい…

ゼイル「凄いなコレ。暖かい」

咲子「ありがと。…ところで、輪っかって触れるのかしら？」 チヨン
コンコン。

なんか、ガラスっぽい感触がするわね。

ゼイル「これって取れるのか？」 ガシッ

ゼイルは輪っかを掴む。

ゼイル「ちよつと引つ張るぞ…」

咲子「…うわっ!？」 ヨロッ

ゼイル「おっと」 ガシッ

咲子「どうやら輪っかは取り外しできないようね」

ゼイル「当たり前といえば当たり前なのか…？」

強さを試す①

side 桜木咲子

有美 「…来るわよ」

咲子 「え?…!!」

気配を感じるわ。

日花 「敵襲ね。外に出るわよ」

全員 『はい!』

タタツ…

ー外ー

「出たな、入箱日花!」

日花 「私は坂田日花って言ってるでしょ? 耳大丈夫?」

「そんな事関係ない! やれえ!」

『おおおー!』

敵の集団が襲いかかる。

♪かいりきベアーアンヘル (ダーリンシンドロームver.)

日花「咲子、ルマ、絵奈。アンタ達の力を試してみなさい！」

3人「はい！」

「喋ってるヒマなんてねえぞ、ヒヤッハー！」バンツ！

弾幕が飛んでくる。

咲子「ハッ！結界流し！」ガオン！

それを私は受け流す。

咲子「ゼイル！影の袋を！」

ゼイル「おう！」ポイツ！

咲子「ありがと！流星…ブレードツ！V2!!」

シュウウウツ！

「ぐわああっ！」

「なんだこれは!？」

咲子「フツ、いい感じね」

「クツ、なめるな…：ダークボール！」

ギューン！

凝縮された黒い玉が飛んでくる。

咲子「来たわね…ハアアツ！」シュツ

私は前かがみの姿勢になり、私の背中から紫色のオーラが吹き出す。
メイ「……あの技は!!」

咲子「魔王・ザ・ハンド！」

ガシンン！

強化したマジン・ザ・ハンドで止めた。

※イナイレではマジン・ザ・ハンドの強化版はゴットキヤッチである。

「なんだと!?……これならどうだ!!」ドゴオン！

今度は大きな玉だ。

魔王・ザ・ハンドじや大きすぎる……なら！

咲子「ハアアアア……ッ！」

ギユウウン……！

「なっ……!?!」

ゼイル「マジかよ……」

私の後ろから腕が大量に生えてる仏像っぽいヤツが出てくる。

咲子「……千手観音！」

ガシガシガシガシ……ガシッ！

大量の腕でガツチリと止めた。

「クソツ……！」

咲子「ブレイズスクリュー改！」ゴオオオツ！

「…ガハッ！」

咲子「さあ、次の人は…!？」

ゼイル「クソツ、囲まれた！」

「ヒツヒツヒ…」

敵達はいつものまにかゼイルを囲んでいた。

咲子「ゼイルには…手を出させないわよ……」超“炎天桜舞！”BLOOOM！

☆説明しよう！

天使化・悪魔化ができる人は、最後の形態である“神”まで強化できるようになる！

絶↓超↓極↓神

「なにい!?!…ぐはっ」

咲子「覚悟はできてるでしょうねえく!？」

「ひ、ひい〜！」

咲子「怒りの鉄槌…V3！」ドゴオ！

「ギャアアア！」

咲子「…ふう、スッキリした♪」

ゼイル「一応俺戦えたんだけどな…」

???? 「ほう、中々やるな…」

敵の首謀者はそう言った。

???? 「…だが、それじゃあ僕はやられないだろう」

強さを試す②

side 羽犬塚ルマ

♪かいらきベア x M A R E T U — アンヘル (M A R E T U R E M I X)

「おりゃー!」

ルマ「絶ボーンガード!」ピキン!

「なんだこれ、かてえー!」

ルマ「ハッ!」ズバッ!

「ぐわああー!」

ルマ「……そうだ!」

祐樹「なんか考えでもあるのか?」

ルマ「この鎌に火をつけて……」ポッ

火は紫色に燃え上がる。

ルマ「バーニングサイズ!」ズバァン!

「ギャアアア!」

おお、威力高いね〜!

「…くらえー…おらぁ！」ドゴーン！

敵は大砲を撃ってきた。

ルマ「大砲!?!絶ヒートタイヤ！」グルグル！

ルマ()()()()()()()()()()()()()()() 大砲

ギリギリ大砲を跳ね返した。

「…ギャフン！」

今度はどんな攻撃をしようかな?…あ！

ルマ「…レーザー」

祐樹「…は？」

ルマ「レーザーって、どうやって撃つのかな？」

祐樹「知らねーよ。エネルギーを一点に集中でもしてみればどうだ？」

ルマ「…いい考えだね祐樹！ありがとう！」

祐樹「大したこととしてねーよ」

ええと、レーザーは…

ルマ「こうかな?…ハッ！」ピヨン

ボクは空中に飛び上がる。そして足をクロスさせて回転する。

ルマ「…Xブラスト！」ドゴオオ！

「こ、光線!？」

「ギャアアアア!」

祐樹「…一応レーザーだな、うん」

ルマ「この調子で行くよ〜!」

side 貝塚絵奈

♪かいりきベア x 煮ル果実―アンヘル (煮ル果実 REMIX)

絵奈「激流の渦!」バツシャーン!

「流されるう〜!」

翔「半端ないなおい!」

「オラア!」

翔「おっと、ホワイトブレード!」

グサツ!

「ガハッ!」

絵奈「そろそろ新技出すよ〜! (メタい!)」

私は絵で大量の動物を描いた。

絵奈「んんん〜!」ドゴツ

そして水の塊を回転させて蹴り飛ばす。

絵奈「オーバーサイクロン！」

ドストドスト!

「なんだこの数!？」

「逃げろー!」

翔「ノーザンインパクト!!」パキーン!

「う、動けねえ…」

絵奈「翔、いい事思いついたよー!」

翔「なんだ?」

絵奈「エターナルバンドを2人でやったら、どうなる?」

翔「…あ、なるほどな」

絵奈「やってみる?」

翔「やってみるか」

パキーン!

翔は氷の塊を出し、空中で回転させる。

そして私達は左右からそれを蹴る。

2人「ホワイトダブルインパクト!」

パキパキツ…!

飛んでいった氷塊は周りを凍らせながら進む

「冷凍食品になっちまうー！」

「どいつもこいつも化け物揃いだー！」

絵奈「化け物じゃないんだけどな〜？」

翔「言わせとけよ」

絵奈「うん、そうするよ」

日花（3人とも上手く馴染んでるようね。こんなに早いのは予想外だったわ）
そしてそのまま敵襲を返り討ちにした。

正義の起床

side 桜木咲子

敵襲を返り討ちにした後、私達は天界のとある所へ向かっていた。

理由は…

咲子「気分はどう、メイ？」

メイ「まだ、悪いです…」

メイが体調を崩し、さらにエネルギーが溢れ出しているからである。

日花「そろそろ『脳の木』に着くわよ」

行き先は脳の木。近くにいたら精神的な負担を下げられるらしい。

―数分後―

♪すりいーノルア・ドルア・エー

日花「着いたわよ」

出夢「気分は良くなったかい、メイ？」

メイ「……あれ？」

ポワン

ナオ「いきなり出された!？」

ヤエ「なんか勝手に…」

クミ「何が原因!？」

ニヨ「お、落ち着いて…」

いきなりメイの別人格たちが出てきた。

日花「…（これって…）」

ピカッ…!

ゼイル「おい、脳の木が光りだしたぞ！」

ピカッ…!

メイ「お、俺も光って…!？」

ピカア!!!

メイと脳の木を眩しい光が包む。

そして…

メイ「…:…:…」

ナオ「これは…」

ヤエ「なんともない…?」

クミ「???」

ニヨ「…えっ!？」

5人『翼!?!』

日花「今度はメイ達が天使化したようね…」

メイ「オ」

ナオ「キ」

ヤエ「セ」

クミ「イ」

クミ「ギ」

5人『昼の天使、オキセイギ!』

絵奈「おお、決まってる〜!」

翔「ちやつかり決めポーズもしてやがる…」

メイ「あ、気分も良くなりました!というか絶好調です!」

ブワツ!

メイ「もう新技もできます!」バサツ

咲子「え、まさか…」

メイは空へ飛び上がり、頭上にエネルギーを凝縮した玉を作る。そして…

メイ「…ゴツドノウズ!」ドゴオ!

それを私に向かって蹴ってきた。

咲子「つて、私!?! 魔王・ザ・ハンド!」バシッ!
シユウウウ…

メイ「止めましたか。今度はあなたの番です、咲子さん」

咲子「私?…分かったわ。フレイムウェイブ!」グルグル
火を思いつきりチャージする。

咲子「チャージ完了! 絶嵐爆熱ハリケーン!」ゴオオオツ!

炎の渦がメイ達に襲いかかる。

メイ「5人で力をあわせて止めます! ハアツ…!」

メイの背後に膨大な量のエネルギーが集まる。そしてそれが銀髪マントのマジンになる。

メイ「ゴットキヤッチ!!」ガシャーン!

そして私の最強技をガツチリと止めた。

翔「や、やりやがった…!」

咲子「アンタの天使化も強いわね」

メイ「これでもっと熱いバトルができますね!」

咲子「そうね!」

ガシツ!

日花「……………(こういう部分が女子っぽくないのよね…)」
ゼイル「ところで、この脳の木、根っこが小さくないか?」

咲子「そうね、まるで地下に続いているように…」

日花「まるでというか、実際そうよ」

咲子「えっ!？」

魔界の脳の木

side 桜木咲子

日花「ここから魔界へ行くわよ」

咲子「えっと、どうやってですか？」

日花「こようよ。…ハッ！」ドゴォ!

先生は地面を殴る。すると…

ボゴォ!

地面に穴が空いた。

メイ「ええ!?!」

日花「この下は空洞なのよ。突入、ハアア!」ピヨーン

そして先生は穴の中に飛び込んだ。

咲子「じゃ、じゃあ私も!」ピヨーン

ヒュウウウ…

穴の中に落ちていく。

咲子「…ん?」

落ちていく先に空間があつた。
スタツ

その空間の中で着地する。

♪すりいーノルア・ドルア・ビー

日花「ここが魔界よ」

ルマ「おお…」

私達の前には逆さの脳の木があつた。

ゼイル「…!?!」ドクン

咲子「ゼイル!?!」

ゼイル「何だ、この感覚はツ…!!」

咲子「まさか、メイみたいに…!!」

ゼイル「うっ、うおおおおおお!」

ギユオオオ!

ゼイルを闇が包み…

シユウウウ…

ゼイル「ハア、ハア…。…治療の悪魔、ドーズ!」

悪魔化していた。

目は紫色になり、黒い包帯のような翼。

はつきりと言つて…

咲子「かつこいい…!／＼／＼」

ゼイル「ん、どうした咲子？」

咲子「いや、えつと、あの…／＼／＼」

ゼイル「俺が悪魔化したのは分かるが、なんか様子がおかしいぞ？」ズイツ

咲子「な、なんでもないわよ！（ち、近い／＼／＼）」カアアア

ゼイル「そうか、ならいい」

全員（イチヤイチヤするんじゃねえ…）

日花「…コホン。どうやらゼイルが悪魔化したようね。しかも治癒の悪魔…回復系の技を使うのかしら？」

ゼイル「一応そのようですね。新技は…ハッ！」ブワッ！

ゼイルは影を纏う。

ゼイル「デビルバースト！でりやあつ！」ドゴオ！

そして影を纏った玉を蹴り飛ばす。

…クミに向かつて。

クミ「え、アタイ!?ゴットキャッチ！」ガシイン！

ゼイル「止められたか」

花「連続で変身するね」

日花「ええ、これで私含め、メイ達を1人と数えて8人変身できるわね」

咲子「8人？私、先生、メイ、ルマ、絵奈、ゼイル、出夢先輩…もしかして藤崎先輩も？」

花「その通り♪冬休みの間にできるようになったの♪…変身！」

ギユオオオ！

花「猛毒の悪魔、ベノム！」

藤崎先輩には黒い翼があり、目はマゼンタになっていた。

メイ「可愛いですね」

花「でしょ？メイちゃん達も可愛いよ♪」

メイ「え、お、俺は…」

日花「はいはいそこまでよ。そろそろ進みましょう」

バサッ

私達は空を飛んで移動した。なんか爽快感があった。

…飛べない人達（翔と祐樹）はどうしたのかって？絵奈とルマがおぶって運んだわよ。

日花「そろそろ着い…来るわね」

メイ「また敵襲ですね」
クミ「ボコボコにしてあげるよ！」

フルボッコ

side 桜木咲子

日花 「敵襲ね。行くわよ！」

全員 『はい!!』

「へっ、こちらとら数百人いるんだ、ぶっ潰せ！」

「うおおおお！」

咲子 「ハアツ！超炎天桜舞！」 B L O O M !

「ぐあああ！」

「くっ、くらえー！」

ドゴツ！

敵は大量の弾幕を放ってくる。

咲子 「千手観音！」

ガシイン！

「隙あり！」

シュッ

咲子「しまっー」

ドゴツ!

ゼイル「咲子には指一本触れさせねえよ。シャドースクリュー改!」ゴオオツ!

「グハッ!」

ゼイル「咲子、一気に蹴散らそうぜ」

咲子「いい考えね、採用よ」

ゼイル「行くぞ!流星!」ポイツ

咲子「…ブレード…V2!」ドガッ

シューウウツ!

「うわあああっ!」

「なんだこれー!?!」

咲子「怒りの鉄槌V3!」ドゴツ

ゼイル「デビルバースト!」ズガアン!

「くっ、くそお…」

「コイツら強すぎる…」

咲子「このままフルボッコにするわよ!」

side 室見メイ

メイ「真狐月十字斬！」ズバアツ！

「ギヤアア！」

ナオ「ブレイズスクリュー！」ゴオオオツ！

「ぐふうっ！」

ヤエ「真岩なだれ！」ドゴドゴドゴツ！

「よ、よけろー！」

クミ「ボルトタイヤ！」バチイッ！

「あべべべべっ！」

ニヨ「激流ストームG4！」バツシャーン！

「流される〜！」

メイ「連携を決めますよ！」

ナオ「了解！空……！」ドゴツ！

ヤエ「前……！」ドガッ！

クミ「絶……！」バチッ！

クミ「後……！」ズバッ！

メイ「……改ッ！」ドゴオオ！

「が、はっ……！」

メイ「ふふっ、決まりました！」

side 羽犬塚ルマ

ルマ「バーニングサイズ！」ズバツ！

「痛えええええ！」

祐樹「サンダーラッシュユ！」バチイッ！

「じびびびびびッ！」

ルマ「ハアアッ！Xブラスト！」

シユウウウツ！

「ギヤアアアア！」

祐樹「クソツ、キリがねえな……」

すると近くに絵奈と咲子が来た。

咲子「ルマ、絵奈と連携技やるわよ」

絵奈「一気にカタをつけよう〜！」

ルマ「え、どんな技？」

咲子から説明を聞いた。

ルマ「なるほど……いいね、やろう！」

咲子「よし……GO！」

ダッ!

ボク達は走りながエネルギーを溜める。そして：

3人『グランドファイア!』

火の玉と化したエネルギーを同時に蹴り飛ばす。

ドシユウウツツ!!

辺りを焼き尽くしながら突き進む。

「ぐあああああつー!」

「に、にげろー!」

「撤退だー!」

ダダダダダ

咲子「…ふう」

side 桜木咲子

咲子「私達の勝ちね」

日花「また新技も生み出したようね」

咲子「はい、私達だったらこの技が合うと思っただけです」

日花「なるほどね…さ、進みましょ。そろそろ敵の本拠地に着くと思うわ」

そして私達は空を飛んで移動した。

はい、はい、はい、はい

side 桜木咲子

私達は途中で分かれ道に着いた。

日花「…半分ずつで分かれるわよ」

そのため、右の道は私、先生、ゼイル、絵奈、翔が行き、左の道は出夢先輩、藤崎先輩、メイ、祐樹、ルマが行くことになった。

―数分後―

咲子「…ゾンビ？」

????「……………」

日花「操られてるわ、気をつけて」

ノーマン「…俺はノーマン。…お前らを追い返す」

♪煮ル果実―イエスマン

…ブワッ！

ノーマン「屍人の悪魔、イエスマン」

ゼイル「悪魔化できるみたいだな…」

咲子「関係ないわ。…ブレイズスクリュー改！」ゴオオオツ！
ノーマン「ほう…フンツ！」

ノーマンは懐からゴルフクラブを出し、それで対抗する。
ノーマン「…うらあ！」

カキイン！

咲子「なっ!？」

そしてそれで見事に跳ね返した。私に向かって飛んでくる。

咲子「ツ、まじー」

絵奈「咲子危ない！激流の渦！」バツシャーン！

絵奈の咄嗟の行動で私は助かった。

咲子「危なかったわ、絵奈ありがとう」

絵奈「お礼は倒してからでいいよ」

ノーマン「……来い」

翔「言われなくても！ホワイトブレード！」パキイン！

翔は氷の弾幕を放つ。

ノーマン「この程度なら…ハツ！」

カキイン！

翔「はあ!?!…スノーエンジェル!」

…キーン!

翔はノーマンが跳ね返した弾幕をなんとか防ぎ切る。

ゼイル「遠距離攻撃が効かないのか…」

咲子「これは中々厄介な敵に遭遇したわね…」

日花「……………（これは中々の見所になるわね。咲子達は倒せるかしら?）」

ノーマン「屍人、屍人、君の隣で…」シユツ

咲子「消えた!?!」

ゼイル「いや、動きが素早いだけだ!」

ノーマン「屍人、屍人、悪魔と踊る」

後ろから声がする。

咲子「クツ、怒りの鉄槌V3!」ドゴオ!

そこに攻撃をすると…

ノーマン「…当たっちゃったな」

攻撃が当たったノーマンが立っていた。

咲子「やっぱり近距離攻撃が有効のようね」

ゼイル「そうか、ならまかせろ! シャドースクリュー改…近距離バージョン!」

ドゴドゴドゴッ!

ゼイルは影を纏った連続キックを叩き込む。

ノーマン「グッ……」

ゼイル「効いたようだな」

ノーマン「今のは痛かったぞ……ッ！」 シュツ

ノーマンはまた消えた。

咲子「………」

集中力を高めてノーマンの気配を探る。

ノーマン「……舞ってるだけの朴念仁さ」

咲子「……そこっ！」 シュツ

ノーマン「おっと」 パシッ

咲子「掴まれた!？」

ノーマン「……オラア！」

ドゴオン!

ノーマンに腕を掴まれ、地面に叩き落とされた。

咲子「ガフッ……!」

今ので骨数本逝ったわね……

正々堂々と生きていきたいのさ

♪煮ル果実―イエスマン

side 桜木咲子

咲子「痛い……」

この状態で骨が数本逝くなんて……

咲子「普通の状態だったらヤバかったわね」

ゼイル「咲子、大丈夫か!?今すぐ回復してやるぞ!!」

ギユイイン……

ゼイルの手が緑色に光り、私の怪我を癒やす。

咲子「ハア、ハア……ありがと、なんとか戦えるわ」

ゼイル「……無理するなよ?」

咲子「もちろんよ」

ノーマン「……話は終わったか?」

翔「敵の会話が終わるのを待つなんて案外律儀なんだな」

ノーマン「待ってるだけの朴念仁さ」

さつきから『イエスマン』の歌詞をずっと言ってるわね…

絵奈「オーバーサイクロン！」バツシャーン！

ドスン、ドスン！

ノーマン「これは…厄介だな…！」シユツ

ノーマンはまた消えようとするが、動物（絵奈が描いた）に囲まれてあまり動けない。

咲子「隙あり！怒りの鉄槌V3!!」ドゴオ！

ノーマン「なっ、グハツ！」

ノーマンは私の攻撃に当たり少し怯んだ。

ゼイル「……ダメージは…！」

ノーマン「この野郎…俺の頭にたんこぶができたじゃねーか！」

モワーン

ノーマンはヘルメットを外すとそこには見事なたんこぶがあった。

翔「おお…！」

ノーマン「そろそろ本気を出す。後悔はするなよ…ッ！」シユツ

ゼイル「くっ…」サツ

ノーマン「オラオラオラオラア！」ドゴドゴドゴッ！

ノーマンはラツシユをする。

ゼイル「これは、まずいつ…！」ササッ
それをゼイルがギリギリ避ける。

咲子「超炎天桜舞！」BLOOM!

ノーマン「効かねえよ！」カキーン!

絵奈「翔、行くよ！」

翔「おう！ハアアアアツ…！」

パキパキツ…!

2人『ホワイトダブルインパクト！』パキイン!

氷の玉はノーマンに命中した。

ノーマン「まずい、動け…！」

ゼイル「狐月十字斬改！」ズババツ!

ノーマン「ガハツ…クソが！」シユツ

ノーマンは再び消える。

日花（…そろそろかしら？）

ノーマン「ハハッ、トドメだ！」シユツ

気付いたらノーマンは私の目の前で拳を振りかぶっていた。

咲子「なっー」

日花「オラア！」ドゴツ！

ノーマン「グハツ!?」

咲子「先生!?!」

日花「見るだけにする予定だったけど…今のアンタ達には強すぎるようね。後は私に任せなさい」

咲子「…はい！」

ノーマン「やつと動いたか…先生」

日花「まさか教え子の目を覚ますことになるとはね。私でも予想できなかったわ」

ノーマン「…フンツッ！」シュツ

ノーマンは恐らく全力のパンチをお見舞いするが…

日花「遅い」パシッ

ノーマン「!?!」

先生はそれを軽々と止めた。

日花「久々にこの技を使うわね…」ボツ

先生は手に火を付ける。

日花「…炎天堂!!」ズガアン！

そして強力な掌底を叩き込んだ。

ノーマン「か、はっ……！」
バタン
フツ……

ノーマンは悪魔化が解除され、そのまま気絶して倒れた。

宿るもどうせ、

side 室見メイ

俺達は左側の道を進みました。その先で恐らく洗脳されていると思われる敵に遭遇しました。

メイ「貴方は……！」

♪煮ル果実―ハングリーニコル

ニコル「僕はニコル。僕の店の常連を倒すのは嫌だけど……仕方ないね」
ブワッ！

ニコル「暴食の悪魔、ハングリーニコル」

出夢「悪魔化もするとはね……」

メイ「関係ないです！超晴天飛梅！」BLOOM！

ニコル「…………」

ニコルさんは何故かじつとしています。

ニコル「……いただきます」

ガブッ

メイ「えっ!？」

「なんと、俺の晴天飛梅を食べ始めました!

ニコル「…ごちそうさま。いいエネルギーになったよ」

ルマ「エネルギーを食べる能力、厄介だね…」

祐樹「なら、物理攻撃をするまでだ!真ボルトタイヤ!」グルグル

ニコル「来たか。なら…プレート!スプーン!フォーク!」

ポイポイポイツ!

祐樹「食器!？」

食器の弾幕が俺達に向かって飛んできます。

出夢「…超重力球!」

ズシツ…!

食器は一斉に落ちいきますが…

パリン!

花「うわっ!？」

割れた皿の破片が飛んできました。

ニコル「うん、計算通りだね」

出夢「ツ、グラビティスラッシュ!」

ズババツ！

それをお兄さんがなんとか処理しました。

祐樹「痛え…」

…祐樹さんは何個か刺さってますが。

ルマ「バーニングサイズ！」ブンツ

ニコル「…フライパン！」シャツ

…キイン！

ルマさんの鎌をニコルさんのフライパンがぶつかり合います。

メイ「よく見るとシジュールな光景ですね、鎌とフライパンのぶつかり合って」

花「うん、そこはツツコまなくてもいいんだよ？」

出夢「はあ…」

そう言ってるうちに、戦況は変わってしまいました。

祐樹「せいっ！」ドゴオ！

ニコル「…腕は二本あるから問題ないね」キイン！

ニコルさんはルマさんの鎌と祐樹さんの拳をフライパンを持った両手で止めていました。

花「ベノムゾーンV3！」毒毒ツ！

そこで花さんが毒を地面に溢れさせます。

※祐樹とルマは骨の靴を履いているから問題ない。

ニコル「これは……！」

ルマ「隙あり！ハアッ！」ズバツ

ニコル「ぐわっ！」

メイ「追撃です！真冥冥斬り！」ズバツ！

ニコル「かはっ……クソツ……」

ニコルさんは少し怯みます。

出夢「しづといね……」

花「作者が体力を高く設定したのかな？」メタい！

……花さんのメタ発言は無視します。

ニコル「そろそろ本気を出した方がいいね、コレ……」ゴゴゴ……

ニコルさんの目は光を失いました。……ハイライトさん仕事して下さい。

ニコル「……行くよ」シュツ

出夢「速い……！」

夥しいリアルを噛むので、

♪煮ル果実―ハングリーニコル

side室見メイ

出夢「何処に…!？」

ニコル「…フオーク」シュツ

出夢「そこだっ！」ドゴツ

ニコル「おっと」サツ

出夢「バツテンスロウ！」ポイツ!

ニコル「食べるッ！」パクッ

出夢「くっ…」

メイ「……………」

刀で斬りかかっても恐らくはフライパンでガードされます…なら!

メイ「それをまるごと斬ります…!ハアアアアツ!」

ギユイイン…!

なんか感じたことがない力を感じます…

メイ「コレなら……！」 キンツ

ニコル「むっ……！」

メイ「斬ッ！」

…ズバツ！

ニコル「な……!?!」

俺の斬撃は相手の腕ごと斬りました。

花「アレは、能力!?!」

ニコル「グッ、ありえない……！」

メイ「今のは……」

祐樹「どう見ても能力だろ！」

ルマ「凄いやメイちゃん！」

メイ「……あれ？ニコルさんの腕……」

血が出てませんね……？

ニコル「……？（痛く、ない……？）」

メイ「どうやら俺は空間ごと斬ってしまったようですね。能力は名付けて『次元斬り』

でしようか？」

祐樹「いやいやなんで冷静に分析してんだよ!? 普通戸惑うだろ!?!」

メイ「いや、冬休み特訓してた時似たような出来事が起きたのでニコル「やつと腕がくつついたよ…厄介だね…」

メイ「…これで倒せます！」

キンツ…

俺は目標をニコルさんの胴体にします…

ニコル「ダブルフライパン」スツ

そのフライパンも…

メイ「胴体も真つ二つにしてやります！…斬一閃！」

スパアン！

ニコル「なん、だと…!？」

ニコルさんの胴体も、2つのフライパンも真つ二つに斬れました。

出夢「でも、絵面が…」

花「ちよつとグロいね…」

メイ「スミマセン、勝つにはこうするしかありませんでした」

出夢「そうだね…進もうか」

タタツ…

???? 「やられた、だと…!？」

あんなにあっさりと!？」

???? 「ふざけるな…!？」

side 桜木咲子

ノーマンを（先生が）倒し、メイ達と合流した後、道を進んだ先には建物があつた。

日花 「前と変わらないわね。入りましょ」

スタスタ…

中では敵の集団が待ち伏せしていたが…

咲子、ゼイル 『流星ブレードV2!』

翔、絵奈 『ホワイトダブルインパクト!』

咲子、ルマ、絵奈 『グラウンドファイア!』

大技の連発でボコボコにした。

日花 「ほぼ確実にこの先の大広間に親玉がいるわ…」

ガラガラ…

???? 「やつと来たか…」

前向いたって

side 桜木咲子

日花「倒しに来たわよ、マリオネ」

マリオネ「フン、僕は強くなったんだ、カンタンには倒されない！」

♪かいらきベア x A l b a N o x — マリオネ

マリオネ「かかって来な！」

咲子「言われなくても！超炎天桜舞！」 B L O O O M !

しかし、マリオネは動かない。

マリオネ「…効かないね！」

スパアン！

咲子「なっ!?!」

い、今起こった事を話すわ…

ヤツは糸で私の超炎天桜舞の弾幕を全てスパツと斬った！

アレはただの糸じゃできない…

もつとヤバいやツの片鱗を見た気がしたわ…

(完全にジヨジヨネタ)

絵奈「コレなら斬られないよー！激流の渦！」バツシャーン！
今度は絵奈が攻撃する。しかし、マリオネはまた動かない。

マリオネ「ククツ…系結界！」ピキイン！

糸の結界が激流の渦を弾き返した。

咲子「相当丈夫な糸ね…」

日花「頑張りなさい。もしもの時は私がやるから」

咲子「はい…。ルマ、絵奈、行くわよ！」

3人『グランドファイア！』

これなら…！

ゴオオオツ！

マリオネ「ほう…！」

ブチッ！

大きな火球は糸の結界を焼き切り、マリオネを攻撃した。

マリオネ「…中々いい攻撃だ」

ルマ「ダメーヅがほぼない!？」

メイ「かなり厄介な敵ですね。ゴッドノウズ！」ギユウウン…！

ゼイル「デビルバースト！」ギユオオオ……！！

出夢「グラビティスラッシュ！」ドギユウン！

花「ベノムゾーンV3！」毒毒ッ！

一斉攻撃がマリオネに襲いかかる。

マリオネ「流石にこれはまずい……ストリング・ルーム！」

パラパラッ……！！

マリオネは糸を部屋中に撒き散らす。

日花（……この戦法は昔と同じね。咲子達はどうか対策するかしら？）

ゼイル「空中に行け！地面にいたら糸に絡まれるぞ！」

咲子「分かったわ！」バツ！

祐樹「……………」

ルマ「祐樹、どうしたの!?早く掴まって！」

祐樹「う、うおおおおおおお！」

翔「うおおおおおおお！」

ギユオオオ……！！

2人から激しいオーラが吹き出した。

マリオネ「何ッ!?!」

祐樹「…電雷の悪魔、スパーク！」

翔「氷雪の悪魔、ブリザード！」

バアン！

絵奈「おお…！」

メイ「これで全員変身してますね！」

出夢「だね」

マリオネ「くっ、どいつもこいつも…！」

翔「この状態で…ノーザンインパクト！」パキイン！

祐樹「絶ボルトタイヤ！」グルグル！

氷塊と電気のタイヤが襲いかかる。

マリオネ「…二重系結界！」ピキイン！

マリオネは二重の結界をはる。が…

バリイン！

2人の攻撃に耐えられず、糸は碎け散る。

マリオネ「なっ…ぐわあっ！」ドゴオツ！

日花（コレなら…勝てそうね）

Deuce、Deuce、Deuce!

♪かいらきベア x AlbaNox | マリオネ

side 桜木咲子

咲子「ブレイズスクリュー改！」ゴオオオツ！

ルマ「チェイン！Xブラスト！」シユウウツ！

メイ「チェイン追加します！真狐月十字斬！」ズバアツ！

威力をかなり上乗せした攻撃がマリオネに向かって飛んでいく。

マリオネ「……フンツ！」シユツ

ズバツ！

ルメ「あの威力の攻撃を……」

咲子「斬った……!?!」

マリオネ「調子に乗るのはそろそろやめてもらおうか」

出夢「………（雰囲気が変わった……!?!）」

マリオネ「ストリングボム！」

ボスツ！

糸の玉が飛んできた。

咲子「魔王・ザ・ハンド！」ガシイン！

玉を止めようとするが…

ギリギリ…

咲子「痛っ!?!」

糸が細すぎてダメージを受けてしまった。

ヒュウウ！

咲子「…結界流し！」ガオン！

ギユイン！

どうやら直接接触しなければ大丈夫なようね。

メイ「こんな玉…全て斬ります！」キンツ

咲子「いやいやどうやって？」

メイ「こうです！…斬一閃！」

スウーーーーーッ。

メイは一直線に進む。すると…

ズバ

ーーーーー

ッ!

咲子「フア!？」

空間ごと斬れた。

メイ「俺の能力です！」

ゼイル「んな規格外な……」

マリオネ「クソツ……もつと、もつとだ！」

ボスボスツ!

マリオネはさらに多くの糸の玉を飛ばしてきた。

日花（うん、数を増やせば勝てると思ってるバカね）

翔「めんどくさい攻撃だな。スノーエンジェル！」シユツ!

祐樹「……ルマ！」

ルマ「え、なに？」

祐樹「ヒートタイヤとボルトタイヤで連携技をやるぞ！」

ルマ「……うん！」

2人『ハアアアアッ!』ギユルルル!

2人は並び、力を溜める。

マリオネ「何をする気かは知らんが、させない!オラア!」ボスツ!

メイ「邪魔はさせません！超火斬り！」スパアン！

マリオネの邪魔をメイが阻止した。

祐樹「行くぞ！」

ルマ「オーケー！」

ギユオオオ！

2人『トラフィック・ジャム！』

辺りに大量の車両が現れる。そして：

ブローツ！

マリオネ「なん、だと…!?!」

一斉にマリオネに襲いかかる。

…ホントにシユールな技ね。

マリオネ「ぐわあああああつ！」愚者ツ

マリオネはそのまま火と電気の車にぶつ潰された。

日花「…：…：…：気絶したわね」

咲子「勝ちつて事ですか？」

日花「ふふっ、そうよ」

全員（もちろん日花以外）『やったー！』

メイ「…なんて事があつたんですよ」

レイト「なるほど、だからかなり遅かつたんだね」

メイ「はい…心配かけてすみません…」

レイト「いやいや、謝らなくていいよ」

実のほほんとした一日

side 室見メイ

♪MULA ストリー—オキセイギ

俺の一日はとある作業から始まります。

メイ「……………（可愛いですわね♪）」ナデナデ

レイト「スー…」スヤスヤ

まだ寝ているレイト君の頭を撫でながら寝顔を堪能する事です。

（作業じゃねえ！）

レイト「…ん？」パチツ

メイ「レイト君、おはようございます」

レイト「あ、うん、おはようメイさん」ムクツ

そしてレイト君は起き上がりました。

メイ「今日予定とかありますか？」

レイト「いや、特にないけど？」

メイ「じゃあデー、いや、お出かけしませんか？」

レイト「(今何か言いかけてたような?) 何処に?」

メイ「キャナルです!」

レイト「いいよ、でもそのまえに朝食を食べようか」

メイ「はい♪」

この状況、まるで…夫婦ですネ／／／

メイ「……………／／／」

レイト「どうしたのメイさん?」

メイ「な、何でもないでしゅ／／／」

レイト「囁んでるよ?」

メイ「ホ、ホントになんでもないですよ!／／／」カアアア

レイト「顔赤いよ?熱?」ピトツ

メイ「ふえ!?!／／／」

レイトさんは手を額に当ててきました!

これが鈍感な男子あるあるの1つ、『熱か?』ですか…

レイト「熱ないね…大丈夫?」

メイ「大丈夫ですよ…(これ以上されたら恥ずか死にます／／／)」

レイト「ならいいけど…」

いつか、絶対告白してやります！

side 桜木咲子

♪煮ル果実―ハングリーニコル

咲子「ホントに、いいんですか？」

ニコル「いいんだよ、恩返しだからね」

ゼイル「まさかタダとは…」

私達は今イーティングニコルで昼飯を食べている。

…ただで。

無料。0円。ロハ。

ニコルさんによると、恩返しらしい。

咲子「じゃあ、遠慮なく」

ここの料理は美味しいし。

ガラガラッ…

ニコル「いらつしやいませ〜って、ノーマンか」

ノーマン「よう、兄貴。…ん!？」

ゼイル「…どうも」

ノーマン「おおっ、お前らじゃないか！こないだ助けてくれてありがとな！」

ゼイル「お礼はいらないですよ。当然の事をしたままでです」

ノーマン「その当然の事ができない人の方が多いんだぜ？」

ゼイル「…ですね」

ニコル「まあまあそこまでにしといてよ。で、何か頼むのかい？」

ノーマン「おう、ポークステーキで」

ニコル「オーケー」

ジュー…

―数十分後―

咲子「ごちそうさまでした、美味しかったです！」

ニコル「ありがとう、また来てね」

ゼイル「はい、また来ます！」

ノーマン「ん、そんじやあな！」

2人は結構いい人だった。

その後ゼイルとのほんとは過ごしたとき。

バトルデー再び!! 3代目 v s 闇炎①

side 桜木咲子

私はホントに楽しみだ。

なんせ今日は…

『3学期バトルデー』

だから!!

咲子「今度は日和さんに勝負を挑むわ!」

メイ「俺はお兄さんですね。兄妹対決をしたことがなかったので」

ゼイル「まあ、2人とも頑張れよ」

2人『ええ! (もちろんです!)』

―数時間後、戦闘場で―

千早『さあ始まりました、3学期バトルデー!!』

実況はまた七隈兄妹が担当している。

『わああああっ!!』

千代『今回が今年度最後のバトルデーです! しかも、天使化、悪魔化がありという

特別ルール!!前とは一味違うバトルが始まります!」

千早『最初の対戦の片方は…!2代目桜の坂田日花先生の娘で“闇炎”の異名を持つ、坂田日和選手く!!!』

日和「…よし、また勝つちゃうわよ!」

日花（ふふつ、果たしてそうかしら?）

「きゃーっ!!」

「日和さまく!!」

千代『対するは、現役の3代目桜で最近天使化を習得した、桜木咲子選手く!!!』

咲子「よし、私の出番…!…ダイナミックエントリー…!」ドーン!

「うおおおおお!」

「3代目も頑張れく!!!」

千早『2人が入場したところで…!バトル、スタートツ!』

日和「ふふつ、かかってくる♪」

咲子「言われなくても!超炎天桜舞!」BLOOM!

日和「おお…中々強そうね♪ダークソード!」シャキン!

日和さんはゼイルに似たような能力で剣を作り…

ズバツ!

私の弾幕を切り刻んだ。

咲子「へえ…」

日和「どうしたの？来ないなら私からくる、よっ！」ダッ

ビュン！

目の前に来た。

咲子「速い!!…怒りの鉄槌V3!!」ドゴオ！

日和「おっと！」サッ

キーン！

私の（オーラを纏った）拳と日和さんの闇の剣がぶつかり合う。

しかし…

日和「ふふっ…隙あり！」

ドスッ

咲子「ガハッ!？」

日和さんの攻撃が私に命中していた…!?

咲子「グッ…！」サッ

一旦日和さんから離れる。

日和「逃さないよ！月夜桜舞！」BLOOM！

日花先生の技!!

：娘だから普通にありえるわね、うん。

咲子「(能力を纏ってない：？) 結界流し！」ガオン!

結界を曲線状に張り攻撃を受け流した。

日和「面白いね：コレならどうか？ ヘルフレイム！」ゴオオツ!

咲子「ええ：」

日和さんは火球を出してきた。

：巨大な、火球を。

咲子「なら：コレで行きます！」サツ

グオオオ!

咲子「魔王・ザ・ハンドツ！」ガシン!

グググツ:

日和「：おお」

咲子「ハア、ハア：規模がヤバすぎませんか!？」

日和「それをちゃんと止めてる咲子ちゃんも結構ヤバイよ？」

咲子「グツ：」

確かに：。

天使化対天使化! 3代目 v s 闇炎②

side 桜木咲子

日和「さて、そろそろお互い本気で行こうよ。…天使化でね」

咲子「なるほど…分かりました。天使化!!」

カッ!

♪かいらきベア—アンヘル

咲子「結界の天使、アンヘル!」

日和「ふーん、そんな感じなんだ…天使化!!」

カッ!

日和さんは天使化した。

目は黒くなり、青い角、紫色の天使の輪っか、黒い翼だった。

日和「闇の天使、アマド!」

日花（これは見所ね…）

日和「さあ、来なさい!」

咲子「ブレイズスクリー改!」ゴオオオツ!

早速攻撃をする。

日和「ふふっ………」スッ

日和さんは片手を出す。

咲子「何を……？」

日和「消えろ」

フツ……

咲子「えっ!？」

ブレイズスクリューは日和さんに触れた瞬間突然消えた。

日和「あら、どうしたの？」

咲子「今、消えて!？」

日和「ああ、それね。私の能力で消したんだよ。特に火とは相性がいいし」

咲子「能力……」

今の所分かったのは、能力は「闇」で、身体から離すことができないこと……

もしかして、火を闇で包んだ……？

咲子「(確証はできないけど……)フレイムウェイブ改！(そしてこっさり解除の能力を纏わせる!)」ドシユウ！

火を衝撃波を放つ。

日和「無駄だよ。闇で包めばカンタンに…」スツ

日和さんは再び片手を出す。

日和「……あれ? 何も起きない」

咲子「作戦成功ですね…ハッ!」ドゴツ

日和「ガハッ!?!」

咲子「衝撃波にこつそり能力を纏わせたんですよ。上手くいったようですね」

日和「くつ…でも、火は出せる! ヘルフレイム!」

ゴオオオツ!

咲子「その技はもう止めた! ハアアアアツ…!」ポオオオ…!

私は火をチャージする。そして…

咲子「…絶嵐爆熱ハリケーン!」ドゴオ!

カウンター攻撃をした。

日和「まさかそう来るとは…! でも、私も負けない! 炎天掌!」ズガアン!

日和さんの掌底と私の炎の渦(パワーアップしてる)がぶつかり合う。

咲子「……グハッ!?!」

ザクツ

突然後ろから攻撃をくらった。見てみると火の刃が刺さっていた。

咲子「気付か、なかった……」フツ
バタン

日和「……ふふつ、中々強かったよ♪」

日花（あちやー、負けちゃったわね）

千早『…桜木咲子選手、気絶により脱落！勝者、坂田日和選手く！！』

『わあああああああああ！』

「日和さま、素敵〜！」

「3代目も惜しかったな〜！」

千代『今回もアツいバトル見られました！』

千早『次の試合も中々の見所になるでしょう！』

千代『次の試合まで5分ほどお待ち下さい！』

ー保健室ー

……ハッ！

咲子「知ってる天井ね」

ゼイル「起きたか。…惜しかったな」

咲子「そうね。でも、後悔はしてないわ。次は絶対勝つ！」

ゼイル「フツ、その意気だ」

兄妹対決! 斬士vs重力魔①

side 室見メイ

千早『さて、次のバトルは兄妹対決です! まずは、3年1位で悪魔化ができ、重力を操る! 室見出夢選手!』

出夢「……………」

「おお、かつけえ!」

「いつ見てもクールだな…」

千代『対して、1年2位で天使化ができる、次元斬りの能力を持つ! 室見メイ選手!』

メイ「本気で勝つてやります!」

「次元斬り…凄え!」

「斬つてやれ〜!」

千早『それでは、試合…開始!』

出夢「グラビティスラッシュ!」ズドツ!

メイ「真狐月十字斬!」ズバツ!

ギイン!

出夢「同時に攻撃とは、考える事は同じだね」

メイ「ですね。でも：勝つのは俺です！斬一閃！」ズバツ

出夢「くっ、危ないね！」サツ

お兄さんは攻撃をかわしました。

メイ「いきなり本気でいきます！分身！」ポワン！

4人『登場！』

メイ「超晴天飛梅！」BLOOOM！

ナオ「絶炎天桜舞！」BLOOOM！

ヤエ「真曇天椿舞！」BLOOOM！

クミ「雷天落桃改！」BLOOOM！

ニヨ「雨天流蓮改！」BLOOOM！

それぞれの技で攻撃します。

出夢「超重力球！」

ズシツ……！

ナオ「グツ……」

クミ「重い……！」

出夢「そして……反転！」

ズドツ!

俺達が放った弾幕がこつちを向きました!

ヤエ「ここはあたしに任せな!真イジゲン・ザ・ハンド!真岩なだれ!

ギョルルルル!ドゴドゴドゴツ!

ヤエが弾幕の大部分を止め、受け流しました。

メイ「残りは…次元斬りで裂きましよう!斬一閃!

ズ

バ

ツ

!

俺の頭上の空間を斬り、ずらしました。

出夢「厄介な能力だね…」

メイ「それはお兄さんもです」

出夢「フツ…:だろうね!バツテンスロウ!」ポイツ!

ニヨ「カウンター!激流ストームG5!」バツシャーン!

ニヨ()()()(出夢

ニヨ「グワツ!」ドゴツ

出夢「大量の超重力球！」

ギューン！

クミ「ボルトタイγうわっ!？」

ヤエ「クミ!!」

ナオ「カウンター…ブレイズスクリユー！」ゴオオオツ！

ナオ((())) (()) (出夢

カウンター成功！

出夢「まさか蹴り返すとはね…グラビティスラッシュユ！」ズシツ！

メイ「させません！風神の舞改！」ビュウウン！

出夢「なっ…グハツ！」ドゴオ！

俺がお兄さんを邪魔したので、ナオのブレイズスクリユーは命中しました…メイだけ

に

ヤエ「寒いよメイ」

メイ「ですよね〜」

流石にダジャレは似合いませんよ。

出夢「痛いね…そろそろ全力で行こうよ…！」

メイ「そうしましょう…」

出夢 「悪魔化!」

5人 『天使化!』

ギョオオオ!

出夢 「逆さの悪魔、ネロイズム!

5人 『昼の天使、オキセイギ!』

フルパワーで…倒します!

大技の連続！斬士VS重力魔②

イナズマイレブンGO―千宮司の力

side室見メイ

出夢「さあ…行くよ！」

メイ「参ります…！」

出夢「バツテンスロウ！」ポイツ

メイ「ゴツトキヤツチ！」ガシイン！

ナオ「怒りの鉄槌！てやあ！」ドゴツ！

出夢「グツ…グラビティスラッシュ！」ズシッ

ナオ「ガッ!？」

クミ「ナオ！…ゴッドノウズ！」ゴオオオオッ！

出夢「流石にこれはしんどいね。…反転！」

クルッ

ヤエ「カウンター！真冥冥斬り！」ズバッ！

ヤエ（（（（（出夢

ナオ「前!」ボオツ!

出夢「グッ…」

ヤエ「絶!」ドゴツ!

出夢「ガハッ…」

クミ「後!」バチッ

出夢「ガッ…」

ニヨ「…改!!」ズバツ!

出夢「く、そつ…僕の…負け、だ…」バタン

そしてお兄さんは気絶しました。

千早『…勝者、室見メイ選手〜!』

『わあああああああ!』

「よくやった斬士!」

「かっこよかったぞ〜!」

千代『両戦とも素晴らしい戦いを見せてくれました!』

メイ「…勝てました…!」

咲子さんに自慢してやります!

―数分後―

咲子「で、勝ったのね…」

メイ「はい！凄いですよね？」

咲子「ええ、凄いわよ…」

メイ「この調子で学年ランク1位も奪ってやります！」

咲子「あら、それはさせないわよ？」

メイ「のぞむ所です！」

ホントに平和な生活

side 室見レイト

……。

メイ「……♪」

何この状況？

確かに、メイさんが今日のランク戦に勝ったらしく、「ご褒美下さい！」と言われたから、素直に聞いてあげたけど…

レイト「僕の膝枕ってご褒美なのかい？」

固そうだけど…

メイ「俺にとつては充分ご褒美です♪」

レイト「ならいいけど…」

なんでだろうね？

(ゼイルと同じく鈍感かよ！)

…MULAの物語でもやろつと。

カタカタ…

メイ「えっ!?裏ボスとかいるんですか!？」

レイト「うん、いるよ。2部の裏ボスのBGMがかっこいいんだよね」
ステルス・ロックっていうらしいんだけど。

メイ「誰がその曲作ったんですか？」

レイト「僕も分らないよ。開発者にきいてみれば？」

メイ「そうですね、明日きいてみます」

さて、続けよつと。

※ずっと膝枕してます。

side 飛羽野茜

留美「炎突!」ドゴオ!

茜「あぶなっ!？」

今、私は留美と特訓している。

茜「風斬!」ズバツ!

留美「フツ!」サツ

茜「ウインドブラスト!」ビュウウン!

留美「なら!…イジゲン・ザ・ハンド!」ギユルルル!

茜「ええっ!？」

留美「からの、炎突！」ドゴツ

茜「ガハッ!…また留美の勝ちだよ…」

留美「やったく！」

茜「まさかイジゲン・ザ・ハンドを覚えるとはね…」

留美「咲子先輩が好きなイナイレを見て、マネしたの！」

茜「うん、咲子さんと全く同じ方法だね」

留美「でしょ？私のもっと強くなるよ！」

茜「なら、私も負けないよ！」

2人『ハアッ!』

そして、特訓を再開した。

side 西新翔

今俺は学と育也を交互に鍛えている。俺達との差を縮めたいらしい。

学「おりやつ！」ドゴツ!

翔「おっと」サツ

学「そこだ！」ドガッ

翔「うおっ、かすった」

学「絶ストーンパンチィッ！」ドゴオン!

翔「グハッ！」

学「ハア、ハア、当てたぜ！」

育也「凄い、スピードも上がってるよ！」

学「よっしゃ！」

翔「次は育也だ…来い！」

育也「うん！真雷斬！」バチッ！

翔「スノーエンジェル！」パキイン！

育也「くっ、なら！サンダーラツシユ！」ドドドドッ！

翔「フツ、ハッ、効かねえよ！」ササッ

育也「全部かわされた!？」

翔「くらえ…ノーザンインパクト！」シャアッ！

さて、どう対応する？

育也「コレだ！無頼…ハンド！うおおお！」ガシッ！

翔「おお…」

イナイレのアニメではネタ技の無頼ハンドで止めやがった…

翔「中々やるな！」

育也「まだまだ行くよ！」

咲子「…主人公の私が出てない、だど？」
ゼイル「メタいぞ、咲子」

唐突なキャラ紹介

名前 属性 能力 パワー（普通↓天使・悪魔化） 学年ランク
説明

威力が強い技トップ3（1位、2位、3位）

桜木咲子 桜 解除…？ 170万↓680万 1位

この小説の主人公。

花町高専の1年。

イナイレ大好き。彼氏持ち。

3代目桜。

絶嵐爆熱ハリケーン、流星ブレードV2、グランドファイア

室見メイ 梅 次元斬り 170万↓680万 2位

咲子のライバルで親友。

5重人格で一人称が俺の剣士。

斬士。

空前絶後改、絶狐月十字斬、真冥冥斬り（同率3位）、斬一閃（同率3位）

飛羽野ゼイル 風 影 125万↓375万 3位

悲しい過去があつた転校生で、咲子の彼氏。

影風。

流星ブレードV2、シャドースクリュー改、デビルバースト

西新翔 水 なし 90万↓270万 5位

甘党で少し戦闘狂な氷使い。意外と頭がいい。

ホワイトダブルインパクト、ノーザンインパクト、ホワイトブレード

貝塚絵奈 水 絵の実体化 75万↓300万 6位

マイペースな性格で、語尾がのびのびとしている。

グランドファイア、激流の渦、ホワイトダブルインパクト

戸畑祐樹 雷 なし 88万↓264万 7位

足が速い遅刻魔。真っ先に彼女ができた。

トラフィック・ジャム、サンダーラッシュ(2位まで)

羽犬塚ルマ 火 骨 90万↓360万 4位

ボクっ娘は存在した。祐樹の彼女。

トラフィック・ジャム、グランドファイア、Xプラスト

坂田日花 桜 時間停止：? 1. 8億↓7. 2億 元1位

2代目桜で、咲子の師匠。

炎天掌、月夜桜舞（2位まで）

本松学 土 なし 62万 8位

口調は悪いが根は良い奴。

絶ストーンパンチ（1位まで）

竹下育也 雷 なし 57万 9位

一応さとかに隊の中では常識人枠。

サンダーラッシュ、真雷斬（2位まで）

室見レイト 火 なし 20万 なし

精神的に病んでいた所をメイに助けられ、引き取られた。

零零斬り（1位まで）

室見出夢 風 重力 180万↓720万 1位

メイの兄。

重力魔。

グラビティスラッシュ、バツテンスロウ、大嵐

攻撃技の強さランキング

- 1位 空前絶後改、絶嵐爆熱ハリケーン、炎天掌
- 2位 真冥冥斬り、流星ブレードV2、斬一闪、トラフィック・ジャム
- 3位 グランドファイア、グラビティスラッシュ、絶狐月十字斬
- 4位 怒りの鉄槌V3、ヘルフレイム
- 5位 月夜桜舞、超炎天桜舞、超晴天飛梅、Xブラスト
- 6位 ゴッドノウズ、デビルバースト
- 7位 シャドースクリュー改、ブレイズスクリュー改
- 8位 激流の渦、バーニングサイス、風神の舞改
- 9位 ホワイトダブルインパクト、バツテンスロウ
- 10位 フレイムウェイブ、風斬・鎌鼬、オーバーサイクロン、大嵐

た つ み

♪煮ル果実―紗麻

sideノーマン

はあ…

ノーマン「しんどいな…」

この仕事量はヤバい…

ノーマン「ブラック企業ならぬ鬼企業か…」

魔界だけに。

…ま、これも必要だからな。

ノーマン「しかたないか…」

カタカタツ…

「おい、実験まで後十分だ。資料を持っていけ」

ノーマン「はい、すぐ行きます」

スタスタ…

ココは研究所、色んな生物で実験をしている。

…人間も含めて。

?? 「……………」

「どうした、早く立て！」

?? 「…やだ」

「あ？」

?? 「やだ！」

「ほう、反抗か…ならくらえ！」ポチッ

バチバチ

?? 「ガアアアアアッ!?!」

ノーマン 「…………ツ（あの野郎、あんな小さな少女を…!?!）」

この潜入調査が終わったら絶対に救い出してやる…!

「さて、まずかこいつだ」 スッ

研究員は薬品を出す。

「コブラの毒を薄めたものだ」

ノーマン 「!?!（毒だ?!?!）」

?? 「ヒッ…」

少女は怯える。

「ヒヒヒ…オラア！」 ドスッ

それを見てにやけた研究員は注射針を刺す。

?? 「痛いよ…」

「もつと痛くなるぞ〜？」 スポッ

毒を注入した後針を抜いた。すると…

?? 「ガッ」

ノーマン（頼む…死ぬな…！）

?? 「ア” ア” ア” ア” ア” ツ…！」

少女は苦しむ。

ノーマン（助きたい…クソツ！）

でも、できねえんだよ…！

?? 「ハア、ハア…」

「おお、成功だ…！」

少女は毒に耐えたようだ。

「次はもつと濃度を上げて試すぞ。実験終了だ」

「はっ！」

スタスタ

部屋に戻りながら考える。

ノーマン（助けを呼ぶか？）

いや、今呼んだら確実にバレる。

ノーマン（バレにくい時期は…）

…5月。

ノーマン（その時期に賭けるしかないようだな…）

約3ヶ月半もあるが…。

そして、研究員がある人物を誘拐することで、結構大きな実験に発展するのだが、それはまた別の話。

side 桜木咲子

咲子「ヒマね…」

ゼイル「そうだな…」

咲子「むゝ」ギュー

ゼイルに抱きつく

ゼイル「しようがないな…」ナデナデ

咲子「ムフゝ」

落ち着くわね…

咲子「膝枕していい？」

ゼイル「いいぞ、ほれ」

咲子「失礼しまゝす」

ストン

ゼイル「硬いか？」

咲子「いや、全然。ちよつと寝るわ…」

スヤスヤ…

―夢の中―

咲子「……ん？」

???「あら、やつと起きたわね」

目の前には黒髪ショートで、桜パーカーと青スカートの女性がいた。

咲子「私……？」

???「違うわよ。まあ、似てるのは認めるけど」

咲子「じゃあ、誰ですか？」

???「それはまだ言えないわね。…また会いましょ♪」

咲子「は、はい……？」

そして夢から覚めた。
…今のは誰だったの？

鬼は内、福も内！

side 桜木咲子

今日は2月3日、節分。

普通なら鬼は外、福は内と言って豆まきをするだろう。しかし…

?? 「いや、強いのは変わんねえな〜！」

日花 「そうね、後で手合わせしましよ♪」

?? 「いいなそれ！賛成だ！」

2人 『ハハハッ！』

ゴクゴク

そして酒を飲む。

私は何をしてるのかって？

咲子 「どうしてこうなった…」

さっきの出来事を思い出したのよ。

ーさっきー

咲子 「先生、何で居酒屋に来てるんですか？まさか…」

日花「安心しなさい、アンタに酒を飲ませる気はないわよ。今日は節分だし友達のと酒を飲むついでにアンタを紹介したいのよ」

咲子「お、鬼？」

日花「正確には能力が『鬼化』なのよ。まあ、常に能力を発動してるから鬼と言っても違和感ないけど」

咲子「は、はあ…」

ガラガラ…

??「よう、日花！」

日花「ええ…久しぶりね、優香」

優香「だな…：挨拶に一発！」シユツ

日花「フツ！」ガシツ

ゴオツ!

咲子「!？」

今の突風は!?

優香「止めちまったか」

日花「そりゃそうでしょ。油断しないわよ」

今の突風を起こすほどの威力のパンチを先生が片手でカンタンに止めた…

咲子（この人も先生も規格外……？）

優香「だよな……ん？お前は？」

日花「紹介するわ。私の弟子の咲子よ」

咲子「桜木咲子です」

優香「弟子？お前とるつもり無かつたんじやねーのか？」

日花「興味を持ったのよ。……当たり前だったわ」

優香「へえ〜！こいつがか！」

咲子「………？」

当たり？予想通り才能があつた、とかかしら？

優香「あたしは基山優香だ、よろしくな！」

咲子「は、はい、よろしくお願いします……」

そして、冒頭に戻る。

咲子（私、何すればいいの？）

日花「咲子は好きに頼みなさい、私が奢るから」

咲子「あ、ありがとうございます。……焼き鳥とカルピスを……」

「あいよ」スッ

パクッ

…美味しいわね。

優香「ところでよ、咲子は何歳なんだ？」

咲子「15歳です」

優香「15か…ちょうどその時だよな、あたしと日花が会ったの」

日花「そうね。5校衝突で戦ったわね」

優香「懐かしいな…」ゴクゴク

日花「そうね…」ゴクゴク

2人とも一気飲みする。

…急性アルコール中毒にならない!?

咲子「大丈夫ですか…?」

日花「あ、言ってなかったわね。私達2人は酒に関してはほぼ無敵なのよ」

優香「アルコールを直接飲んでも大丈夫なくらいだな」

咲子「ええー…」

酒に強すぎない!?

それからしばらく、私は焼き鳥を食べながら先生と優香さんの話を聞くのであった。

…興味深い話だった。

また 会った

side 桜木咲子

咲子「眠い…」

ゼイル「大丈夫か？」

咲子「むり(?)」

ゼイル「…大丈夫じゃないな。ほれ、こっちで寝ていいぞ」ポンポン

咲子「膝枕く！」ギョツ

ゼイル「それは膝枕じゃなくて抱きつくと言うんだぞ？」

咲子「頭痛い…」

ゼイル「…おいまさか、咲子お前酒飲んだ？」

咲子「うん…」

ゼイル「マジかよ…」

咲子「昨日先生と優香さんと居酒屋で飲んだんだけど、その時自分の飲み物と間違えて…酒をガブ飲みしたのよ…」

ゼイル「あ」

咲子「酔うことはなかったけど、頭が痛い…」

ゼイル「大丈夫なのか？急性アルコール中毒になったりしてないか？」

咲子「それが何故か起きなかったのよね…」

ゼイル「何でだろうな？」

咲子「私、酒に強い？」

ゼイル「多分そうだろうな」

咲子「…また眠くなってきた。おやすみ…」

そのままゼイルの膝枕で寝た。

咲子「ここは…？」

???「あら、また会ったわね♪」

咲子「あ、貴女は」

???「まさかこんな早く再会するとはね」

咲子「……………」

今気付いたけど、声が私に似てる…？

???「どうしたの？」

咲子「あ、いや、なんでもないです」

??? 「なるほど、声が似てるってね」

咲子「!?」

何故バレた!?

??? 「心が読めるのよ。…ま、偶にしか使わないけど」

咲子「貴女は誰なんですか!?!」

??? 「……………」じー

女性はじつと見てくる。

咲子「な、なんですか?」

??? 「一文字だけ教えるわ」

咲子「一文字?」

??? 「ええ、私の名前の頭文字を」

咲子「……………」

??? 「……………」『ア』

咲子「……………!?!」

やっぱり……!

ア?? 「あら、その顔は気付いたようね。じゃ、また会いましょう♪」

咲子「貴女は、まさかア…」

シュツ

咲子「…ハッ」

ゼイル「ん、目が覚めたか？」

咲子「ええ…（まさか、ね…）」

side???

ふふっ♪

ア??「咲子は気付いたかしら？」

まあ、アから始まる私のような見た目の人って、ね…

ア??「かなり少ないのよね…」

…さて

ア??「次の平行世界へ行くとするわ」

シュツ…

side 火野有美

……?

有美「私と同じような気配？」

…消えたわね。

有美「今のは一体？」

何だったのかしら？

有美「……………」

…まあいいや。

有美「気の所為かもね」

私はもう年だし。

有美「…ハア」

クツキー買いに行こつと。

有美「気を紛らわすわ」

甘すぎるッ!

side 桜木咲子

咲子「♪♪♪」

今日はバレンタイン。つまりゼイルに（どう考えても本命）チョコをあげる日だ。

ゼイル「おはよう、咲子。やけに機嫌がいいな」

咲子「ふふっ、何でだと思う？」

ゼイル「……………分かん」

咲子「今日はバレンタインなのよ♪はい、私特製のチョコよ♪」スツ

ゼイル「おう、ありがとな。…早速食べていいか？」

咲子「どうぞ」

ゼイルは箱を開け、チョコを1個食べる。

ゼイル「……………こ、これは……………」

咲子「味はどう？」

ゼイル「すごく美味しい。なに入れたんだコレ!？」

咲子「それはね……………」

言うの恥ずかしいけど……

咲子「愛情よ♪」

そしてテヘペロのポーズをした。

ゼイル「……………」スツ

カシヤツ。

ゼイル「ありがとな、咲子」ギユツ

咲子「ふふっ、どういたしまして♪」

—————

茜「……………」

留美「おお……！」

その光景を影から茜とちようど前の日にお泊り会をしてた留美が見ていた。

茜「お兄ちゃん、甘い…甘すぎるよ！」

留美「せ、先輩、凄……！」

茜「えつと、何が？」

留美「あんな堂々と『愛情よ♪』なんて言えるツ！そこに痺れる憧れるウ！」

茜「留美はいつからジョジョネタを知ったの？…もうやってらんないよ！」ゴクゴク

茜はコーヒを一気飲みした。

留美「あはは……」

side 室見レイト

レイト「……よし」

今日のMULAの物語のボスラッシュもクリア、と。

ガチャッ

メイ「レイト君、おはようございます♪」

レイト「おはよう、メイさん。機嫌いいね?」

メイ「そりや、今日はバレンタインですから♪」

レイト「確かにそうだったね。チョコを好きな人にでもあげるの?」

メイ「はい、もちろんです♪(その好きな人が目の前にいるんですよ♪)」じー

メイさんは何故かこつちをじっと見ている。…上目遣いで。

えつと…めちやくちや可愛いね」

メイ「可愛い／＼／＼…ありがとうございます♪」ニコッ

レイト「あの…なんですつとここに?」

メイ「…どうぞ♪」スッ

メイさんは箱を渡してきた。

レイト「あ、ありがとう。ココで食べていいかな？」
メイ「もちろんです♪」

パカッ

箱を開ける。ホワイトチョコのようだ。

レイト「……ん？」

文字が書いてある？

メイ「／／／」

レイト「えっと…『すきです つきあってください』
まさかチョコの文字で告白するとは。

“斬” 新な告白の仕方だね。

メイ「へ、返事はなんでしゅか!?!／／／」

うん、噛んでるよ。

レイト「メイさん」 ナデナデ

メイ「ふえ？」

レイト「…よろしくね」

メイ「…!はい♪」

今日はいい日だ。

うん、甘いね。

side 室見レイト

レイト「……フツ」

メイ「……エヘヘ」

メイさんと抱き合った感想。

…暖かいね、心も体も。

(ゲホッ)

レイト「そろそろ朝食食べようか？」

メイ「そうしましょうか」

―数分後―

ガチャッ

出夢「メイ、失礼するよ」

メイ「あ、お兄さん、おはようございます」

花「機嫌いいね」

メイ「そうですね」

レイト「メイさん、塩パス」

メイ「どうぞ」

レイト「ありがと」シヤカシヤカ

出夢「……………（なるほど）」

花（意外と遅かったね。私達はもう行った方がいいね、コレ）

出夢「（そうだね）じゃ、また後で来るよ」

メイ「ん？…あ、はい」

何でだろうね？

そのまま朝食は共同作業で作った。

メイ「はい、あーんです♪」

レイト「んぐつ。…美味しいね」

メイ「はい♪……………」じー

うん、分かった。

レイト「あーん」

メイ「はむっ♪」

何その食べ方、めちやくちや可愛いんだけど!?

メイ「美味しいです♪」

それでお互いあーんしあった。

時間は倍ぐらいかかったけど、メイさんの可愛い顔が見れたからよし。

―数時間後―

メイ「えつと、似合ってますか？」

レイト「うん、似合ってるよ」

メイ「じゃあコレ買いますね♪」

レイト「オーケー」

翔「ん、あれって…」

学「メイとレイトか？」

育也「話しかける？」

翔「……………いや、やめとくぞ」

学「だよな」

育也「ゲーセン行こっか」

スタスタ…

ポポンポン。

メイ「テレキャスタービーボーイ、俺に愛情を、嘘で固めたウォーアイニー♪」

レイト「うぎつたんだジーガール、魅惑ハイテンション、カニバリズム踊ればー♪」

2人『1つ、2つ、殺めた手で、何を描いているんだろー♪テレキャスタービーボー

イ、僕（俺）に愛情を、誰か答えてくれないかー♪』

うん、上手く歌えてるね。

メイ「レイト君、歌上手ですね」

レイト「メイさんもね。あ、2番だよ」

メイ「いきます。…見た目がどうやらDeDeDe…」

その後もデートを楽しんだ。

ー数時間後ー

レイト「ああ、楽しかった♪」

メイ「また行きたいですね♪」

レイト「うん♪」

今日はホントにいい日だった！

♪Syoudouービターチョコデコレーション（2分の1倍速）

渡辺男「クソツ…」

渡辺女 「どうすればいいのよ……」

渡辺男 「……ん？」

渡辺女 「あれは……レイト？」

渡辺男 「………」

リア充爆発…しないッ！

♪Syudou―ビターチョコデコレーション（2分の1倍速）

side室見レイト

レイト「後は夕飯の買い物だよね？」

メイ「そうですね。何にします？」

レイト「うーん…」

メイさんの料理は美味しいしね…

そう考えてた時。

???「おい、待て」

レイト「ん、何です…か…」

この人、いや、コイツは…

渡辺男「久しぶりじゃないか、レイト」

レイト「……………」クルッ

見なかった事にしよう。

レイト「無難にハンバーグとかかな？」

渡辺男 「自分の父親を無視するのか？」

レイト 「父親？何処の誰が？」

渡辺男 「俺以外にいないだろ？何言ってるんだお前？」

レイト 「……………」

ああ、せつかくいい日だったのにイライラしてきた。

レイト 「……………」あ？」ギロツ

クズが父親だつて？ふざけてるの？

渡辺男 「ん、どうしたその顔？俺に反抗するのか？」

レイト 「お前と僕は赤の他人だ」

そもそも会いたくもない。

渡辺男 「自分の父親を赤の他人と呼ぶとは、随分と偉そうになったなお前」

偉そう、ね…

レイト 「誰がだ、クズ」

メイ 「ツ…」（レイト君が悪口…コレはヤバいです）」

渡辺男 「クズじゃない、父さんと呼べ」

レイト 「黙れクズ」

渡辺男 「……さつきから言わせておけば、クズやら赤の他人やら…父親に対する敬意も無いのか!？」

クズは怒り出した。

レイト 「クズに敬意？あるとでも？」

もう会いたくもないクズに？笑わせないでよ。

レイト 「今すぐ失せろ」

渡辺男 「おうおう、失せてやるよ…お前の才能もろともな！」 シュツ

クズは拳を振るってきた。…はあ。

レイト「その程度か？」ガシッ
弱い弱い。

渡辺男「は、離せっ…!」

自分からやってきたのに?

レイト「あのさ…」ギリギリ

掴んだ腕を少しずつつひねっていく。

レイト「縁を切った時に言ったよね? 監禁罪と児童虐待で訴えるって」

渡辺男「は? 何言って」そんな事も忘れたのか? 証拠はあるんだぞ?」ツ…」

レイト「僕は今すぐお前を殺したいが、そんな事したらメイさんと過ごせなくなるし
ね」

メイ(レ、レイト君…そこは言わなくていいです／＼)

渡辺男「…ぎ」

レイト「ぎっ?」

渡辺男「偽造したな!」

…は?

レイト「…は?」

本心かたの「は?」だった。

レイト「そんな事して何の意味があるんだ。全部事実が決まってるだろ。…もういい、通報する」

110、と。

渡辺男「ふざけるなあ〜！」ドゴツ

レイト「!？」

顔を思いつきり殴られた。流石に少し痛い。

メイ「レイト君!？」

…おいテメエ」ギロツ

えっ、メイさん?

メイ「さつきから見てたらさんざん調子に乗りやがって。クズはクズらしく逮捕されとけ、ゴラア!」

メイさん、まさか怒ってくれてる…?

渡辺男「……ッ」

メイ「ああ? さつきまでの威勢はどうしたんだ!?!」

渡辺男「ヒイツ!」

そのままクズは怖気付いた。

そしてクズは無事に逮捕されたのであった。

それでも好きだ

side 室見レイト

クズが逮捕された後、僕達は家に帰った。そして今は…

レイト「あの、メイさん…？」

メイ「忘れて下さい／＼」

目の前でメイさんがずっと顔を赤くしている。

レイト「そうは言っても…」

メイ『おいテメエ』

レイト「アレは印象に残るといっか…」

ギャップが、ね？

メイ「うう…咲子さんなら大丈夫ですけど男子にバレたら…嫁に行けません／＼」

カアアア

レイト「…メイさん」

メイ「なんです…ふえ？」

ナデナデ

レイト「アレがメイさんの本性だったとしても、僕はそれ含めてメイさんが好きだ」
メイ「…!!」

レイト「だから、恥ずかしがる必要は無いと思うよ?」

メイ「レイト君…そうですね!」ギョツ

メイさんは抱きついてきた。

メイ「俺も好きですよ、レイト君♪」

レイト「…ああ」ナデナデ

咲子「ゼイル♡」トロン

ボスツ

ゼイル「さ、咲子…?」

咲子「もう我慢できないわ…」ゴソゴソ

ゼイル「お、おいまさか…」

咲子「やるわよ♡」

ゼイル「え、ちよ…」

アツ—————!!

レイト「…?」

何か変な声が聞こえてきたような。

…まあいいや。

メイ「夕飯、作りましょうか♪」

レイト「うん」

―数分後―

見事なハンバーグの完成。

うん、美味しそう。

レイト「メイさん」

メイ「はい?」

レイト「あーん」スツ

メイ「はむっ。…美味しいです♪」

レイト「それはよかった♪」

ハンバーグを焼いたのは僕である。

メイ「じゃあレイト君、あーん」スツ

レイト「んっ。…うん、ホントに美味しい」

―数十分後―

ハンバーグはあーんしあった。

食器洗いは音楽流しながらやった。

そして今は…

ナオ「……………」ギユツ

ヤエ「……………」ナデナデ

クミ「……………」ギュー

ニヨ「……………」スリスリ

メイさんの別人格4人に抱きつかれている。

メイ「ハーレムですね」

レイト「それを言わないでほしい」

メイ「他の人が見たら5股だと勘違いされるような光景ですね♪」

レイト「それって喜ぶ事なの!？」

メイ「レイト君は好かれていますね♪」

レイト「…?」

なんか、メイさんの様子がおかしいような…

メイ「今夜は逃しませんよ、レイト君♡」

わあ、いい笑顔（白目）

レイト「メ、メイさん……？」

メイ「ふふっ……ちゅっ♪」

レイト「んむっ……」

メイさんはキスしてきた。

メイ「んっ、ちゅっ……」

しかも舌を絡めて。

やん、いやらしい！

メイ「ハア……ふふっ♡」

レイト「………（僕どうなっちやうんだろ……）」

その後5人にめちやくちやにされた。

ナニをされたかはあえて言わないで置こう。

5校衝突まで1週間

side 桜木咲子

現在、私はメイ達と特訓中である。

2人「真陽天梅桜！」 B L O O M !

ヤエ「真イジゲン・ザ・ハンド！…グワツ！」 パリン！

咲子「ふう、強化できたわね」

メイ「次はどの技にしますか？」

咲子「…怒りの鉄槌かしら？」

ナオ「え、でももうV3よ？」

咲子「強化版があるのよ。だから…それをモノにするわ！」

メイ「なるほど…」

ヤエ「じゃ、あたしが土の壁を作るから、咲子はそれを的にしな」

ドゴーン

咲子「ありがとヤエ。じゃ、早速…ハアツ！」 ポツ

足に火をつける。

メイ（炎突の正当強化版ですかね？）

咲子「烈焼…グツ！」

足を捻ってしまった。

クミ「咲子、大丈夫か!？」

咲子「大丈夫よ。もう一回…ハアツ！」ポツ

逆回転で…

咲子「烈焼脚！」ドゴォ!

カンタンに言えば、横に回転する炎突だ。でも…

咲子「やっぱり威力が足りないわね」

メイ「まだ強化版とは呼べないんですか？」

咲子「そうなるわね。うーん…」

…あ!

咲子「いい事思いついたわ。天使化！」

ギユイイン!

咲子「結界の天使、アンヘル！」

メイ「(何で毎回決め台詞を言うんでしょうね?)で、天使化して何するんですか？」

咲子「コレよ。結界を張って…」ピキッ

結界を数枚張る。

咲子「これを割る度に強度を増やすのよ。天使化したのはその分結界の強度も上がるからよ」

倍率で言うと、パワーは4倍、結界の強度は20倍なのよね。

メイ「確かにいい考えですね。俺達は何かできますか？」

咲子「うーん…アンタ達で技を鍛えれば？」

メイ「そうします。頑張りましょう！」

タタッ

咲子「さて、続けよう」ボツ

結界に狙いを定めて…

咲子「烈焼脚！」ドゴオ!

パリン!

結界は割れた。

咲子「強度を上げて、と」

ピキン

咲子「ハアッ!烈焼脚！」ドゴオオ!

それをずっと続けた。

―数時間後―

咲子「これで最後ね。ハアッ！」ボツ！

焼き蹴ってやるわ！

咲子「烈焼脚ッ！」ドゴオオッ！

バリイン！

目標の強度の結界が割れた。

咲子「やったー！」

メイ「おお、完成したんですね！」

咲子「これでオーケーよ！」

この調子で明日も特訓頑張るわ！

一郎「オラア！」バチッ！

風鈴「やあつ！」ズバツ！

砂智子「フッ！」ドゴッ！

流「おりやつ！」ザパッ！

その頃、現役で花の称号も持つ者達は、1週間後の5校衝突に向けて特訓をしていた。果たして、勝つのはどちらの高専になるのか…!?

咲子「ただいま」ガチャツ

春菜「おかえり…あら？その翼は…」

咲子「あ、天使化解くの忘れてた」

1年5校衝突

5校衝突、開幕ツ！

side 桜木咲子

『さあ、始まりました！5校衝突！』

『今年はなんと花称号が5人とも同じ年でランク1位という奇跡です！どういいう戦いを見せてくれるんでしょうか!?!』

私達は控室で準備運動をしていた。

咲子「ついに来たわね…」

メイ「です…!」

ゼイル「どんなヤツがいるんだろうな？」

ルマ「ま、どんな人が相手でも頑張るんだけどね！」

翔「絶対勝とうぜ！」

5人『おお!』

―会場―

咲子「さあ、行くわよ」

スタスタ

『来ました!3代目桜率いる桜木咲子選手率いる5人、「パークーズ」です!』
『名前の通り確かに全員パークーを着ていますね』

スタスタ

風鈴「久しぶりね」

咲子「ええ……久しぶりね風鈴」

『次に来たのは6代目梅の梅野風鈴選手率いる「ノース」です!』

そして次々と各高専のチームが入ってきた。

―数分後―

咲子「……………」

風鈴「……………」

一郎「……………」

砂智子「……………」

流「……………」

『5校衝突……開幕ッ!』

ゴーン!

咲子「みんな先制攻撃よ!超炎天桜舞!」 B L O O O M !

メイ「超晴天飛梅！」 B L O O M !

ゼイル「シャドースクリュー改！」 ドツゴオン！

ルマ「Xブラスト！」 ドガン！

翔「ノーザンインパクト！」 パキツ！

一郎「超だど!?!」

??「コレやばくね？」

風鈴「うそーん!?!」

ドガアアアアアン！

エネルギーの衝突による大きな爆発。

煙が晴れると…

咲子「ええ…」

風鈴「何で？」

一郎「俺らが偶々…」

流「一緒にいるんだ…?」

砂智子「私の仕事ですよ。強い人から倒したいので」

咲子「…へえ」

風鈴「いい考えね」

一郎「一度はこんな状況にして欲しかったんだよな」
流「勝つのは俺だ!」

砂智子「さあ…どうでしょうね?」

お互いを見て攻撃のタイミングを見る。

咲子(恐らくだけど、私がマークされてるわね。だから…)
…今よ!

咲子「天使化!」ピカッ!

風鈴「ええっ!」

流「もうできたのかよ!」

♪かいきりきべア—アンヘル

咲子「さあ、かかってきなさい!」

砂智子「言われなくてもやりますよ!絶岩なだれ!」シユツ

咲子「千手観音!」ガシイン!

砂智子「なっ…」

一郎「…面白え!絶ボルトタイヤ!」グルグル

咲子「ハアア…魔王・ザ・ハンド!」ガシイン!

攻撃を連続で止める。

一郎「マジかよ……（コイツをマークして正解だったな）」

咲子「今度はこっちの番よ！真フレイムウェイブ！」ドシュツッ！

火の衝撃波で攻撃する。

一郎「ぐわっ！」

風鈴「……………（このままだったら私達は4人ともやられる。なら！）」コソツ

あら、逃げてるわね。

咲子「逃がすとても？」シュツ

風鈴「なっ!?（速い!?）」

咲子「烈焼脚！」ドゴォ!

風鈴「ガハッ……!（この威力は!?桁違いでしょ!）」

流「オラア！激流の渦！」バツシャーン!

咲子「（絵奈も使ってる技ね）空中分解G2！」

シュウウウ…

水は蒸発した。

流「はあ……?」

咲子「……………やっぱ、私は別で戦うわ。じゃ」

バサツ

一郎「そ、それはないだろ!？」

アホとバカ

side 飛羽野ゼイル

咲子とはぐれてしまった。

ゼイル「どうする？」

翔「俺とゼイル、メイとルマで2手に分かれないか？」

メイ「確かに、それがいいですね」

ルマ「じゃ、またね」

スタスタ

ゼイル「咲子は何処だろうな…」

翔「アイツはカンタンにやられないし問題ないだろ。俺らは俺らで相手を倒せばいい

だけ…！」

ゼイル「誰か来るな」

翔「ああ…！」

…ズドツ！

俺達も前に何か突き刺さる。

ゼイル「チョーク？」

??「巨大化！」

ゼイル「ツ！」サツ

ボワン！

翔「大きくなりやがった!？」

??「おらあ！」シュルル!

ゼイル「翔、ジャンプしろ！」

翔「うおっ!？」ピヨン

??「クソツ、バレたか」

??「次に当てればいいだろ」

砂煙の中から2人現れた。

ゼイル「お前は…竹尾？」

竹尾「よう、ゼイル」

1人は一郎の親友である中村竹尾だった。

アホだったから覚えている。

翔「で、お前は？」

大助「大野大助だ。名前の通り能力は巨大化だッ！」

あ、さらつと能力言いやがったぞコイツ。

竹尾「おい、能力言うなよバカ！」

大助「アホに言われたくねーよ！」

お互い様だろ！

ゼイル「…とつとと始めようぜ」

竹尾「へっ、だな。うおっ！」メキッ

竹尾は木のハンマーを作る。

竹尾「大助頼む！」

大助「おう、巨大化！」

ボワン！

翔「マジかよ…」

ギャグマンガでよく見る10トンハンマーのような大きさだった。

竹尾「ウツドハンマー！」シュツ！

ゼイル「…ッ！」

こいつ、この大きさでこの速さだと!?

大助「重さは変わらないんだよ！」

ゼイル「なら、狐月十字斬改！」ズバツ！

竹尾「うおっ!？」

ウツドハンマーを斬った。

竹尾「やべっ」

翔「オラア！」ドゴツ!

竹尾「グッ！」ズサー

ゼイル「…?」

大助は何かを手に持っている。

大助「くらえ！チョコク！」ポイツ!

まさか、それを巨大化させるのか?

ゼイル「…面白い」

大助「巨大化！」

ポワン!

巨大なピンク色のチョコクが飛んでくる。

ゼイル「ハッ！」カキーン!

俺はそれを跳ね返し…

ゼイル「エアライド！」スタツ!

その上に乗った。

大助「龍玉のピンクホワイトホワイトかよ!?!」

(ドラゴンボールの桃白白かよ!?!)

ゼイル「からの、シャドースクリュー改!」ドツゴオン!

大助「ガハッ……!」バタン

大助はそのまま倒れた。

『総武高専5位、大野大助、脱落!』

アナウンスが鳴る。

竹尾「大助!?!クソツ、覚えてろよー!」ダダダダダ

竹尾は気絶した大助を背負って逃げた。

翔「……………」

ゼイル「1人倒したから、いいだろ」

翔「だな」

刀と剣、犬と猫①

side 室見メイ

メイ「ルマさん、どういう作戦で行きますか？」

ルマ「ボクが防御でメイちゃんが攻撃かな？」

メイ「それがいいですね」

…来ますね。

ズバツ！

メイ「真冥冥斬り！」キンツ！

飛んできた飛斬撃を受け止めました。

??「ほう、止めたか」

??「みたいニヤね」

ルマ「…羽合からだね」

康介「その通りだ。俺は剣士、もみじだこうすけ権田康介だ！」

マオ「そして私は猫野マオだニヤツ！」

メイ「…俺達も名乗りましょう。俺は花町高専の刀剣士、室見メイです！」

ルマ「ボクは羽犬塚ルマだよ！」

康介「室見と羽犬塚か。中々個性的な一人称じゃないか」

2人『それは言わないで（言わないで下さい）』

マオ「あはは…」

康介「まあいい。…始めようぜ！」シャキン！

メイ「参る！」キンツ！

康介「サンダーソード！」シャツ！

メイ「飛梅ツ！」シャツ！

…ギイン！

刀と剣がぶつかり合います。

康介「うおおおおっ！」

メイ「ハアアアアツ！」

side 羽犬塚ルマ

マオ「さて、私達も始めよっか」

ルマ「そうだね。…刃！」シャキン！

刃アンヘル…赤い鎌を出す。

マオ「うわあ、物騒だね…」

ルマ「そんな事言ってるヒマはあるのかな？」サツ

マオ「…!?!」

ボクは猫野の前まで迫っていた。

(相手なので名前呼びはしない)

ルマ「バーニングサイス！」ズバツ！

マオ「うわっ!?!」サツ

しかし素早い動きでよけられた。

ルマ「速いね」

マオ「危なかったニヤ…」

ルマ「次は当てる！クロスボーン！」ポイツ！

マオ「むっ、ニヤツ！」キイン！

爪で跳ね返された。

マオ「今度はこっちの番ニヤ！真スラツシユ！」シャツ！

ルマ「絶ボーンガード！」ピキツ！

ギギギツ…

骨にヒビが入る。

ルマ「なっ!？」

マオ「ニヤァー！」

バリィン!

そのまま割れてしまった。

ルマ「ツ、バーニングサイズ！」シユツ!

マオ「その技は見切ったニヤァー！」サツ

鎌を振るがまた避けられた。

マオ「隙あり!…キャットスワイパー！」

…シヤァン!

猫野はいつの間にかボクを通り過ぎていた。

ルマ「ガッ!？」ズバツ!

気付いた頃にはボクに切り傷がついていた。

ルマ「グッ…(どうすれば…!)」

—————

祐樹「……………」

絵奈「あつ、あれメイとルマだよ！」

学「剣と刀か…」

育也 「ルマは苦戦してるようだね」
祐樹 「ルマ……！頑張ってくれ……！」

刀と剣、犬と猫②

side 室見メイ

康介「ハア、ハア、やるなお前」

メイ「貴方こそ」

康介「それにしては疲れてないようだが？」

メイ「体力には自信があるので」

毎日ランニングをしていますし。

康介「マジかよ」

メイ「そろそろ本気を出します。分身！」

ポワン！

ナオ「あれ？」

ヤエ「2人だけ？」

康介「増えた!？」

メイ「ナオ、ヤエ、新技をしますよ」

2人『了解!』

俺達は横に並びます。

康介「……？（何をする気だ？）」

メイ「デイフェンスコマンド14……」

康介「は？」

3人『無影乱舞！』シュツッ！

康介「消えた!?!（何処だ!?!）」

消えてなんか、いませんよっ！

シュバツッ！

康介「グハツ!?!」

シュツッ！

康介「今のは……！（こいつら、高速で動いてるのか！速すぎだろー!）」

ナオ「ハツッ!」

シュバツッ！

康介「グッ！（見切れねえ……）」

シュツッ！

ヤエ「フンツッ!」

シュバツッ！

康介「…ッ！」サッ

かわされましたか。

シュッ！

康介「!?」

メイ「トドメです！」

3人『空前絶後改！』シュッ！

ドゴッ、ドガッ、ズバッ！

康介「ガ、ハッ…（負けたぜ…）」バタン

『羽合3位、椀田康介、脱落！』

メイ「ふう…」ポワン

ルマさんの加勢に行きますか。

side羽犬塚ルマ

ルマ「痛いね…」

マオ「このまま倒すニヤ！キヤツトスワイパー！」

シヤッ！

ルマ「もうさせない！天使化！」

カッ！

♪かいりきベア x M A R E T Uーアンヘル (M A R E T U R E M I X)
マオ「ニヤツ!? 天使化だニヤ!?!」

ルマ「ボクは負けないよ! バーニングサイズ!」ズバツ!

マオ「ニヤツ!?! (さつきと比べて威力とスピードが桁違いニヤ!)」

ルマ「クロスボーン!」ポイツ!

マオ「ニヤ?」サツ

カンタンに避けられた。

マオ「今のは何のためにやったのニヤ?」

ルマ「ブーメランは?」

マオ「え…ニヤツ!」ドゴツ

ルマ「返ってくるよね?」

骨は猫野の頭に直撃した。

マオ「うう、痛いニヤ…」

ルマ「さつきのやり返しだよ。…ん?」

タタツ…

メイ「ルマさん、加勢しますよ。てか何で天使化してるんですか?」

ルマ「いや、ちよつとこうしないとスピードが追い付かなくてね」

メイ「なるほど。…なら任せます。俺は見ておくので」
ルマ「う、うん」

マオ「…まあいいニヤ。キャットスワイパー！」シャツ！

ルマ「ボーン…アーマー！」ピキツ！

骨を全身に纏った。

キーン！

そして猫野の爪は弾いた。

マオ「そんニヤ…」

ルマ「バーニングサイス！」ズバツ！

マオ「ニヤハツ…（強すぎるニヤ…）」

ルマ「トドメだよ！Xプラスト！」

ドガン！

マオ「ニヤ…」バタン

『羽合2位、猫野マオ、脱落！残り20人！』

メイ「20人…」

ルマ「どうなるんだろうね、この戦い…」

氷と霧の対決①

side 西新翔

ゼイル「翔、敵が近くにいますぞ」

翔「そうか。なら戦闘準備だな」

総武の1人を倒せたのはデカいが、油断はできないしな。

一郎「おう、翔とゼイルじゃねーか」

ゼイル「一郎と…もう1人いるな」

将太「霧野将太だ」

一郎「将太、俺はゼイルと戦いたい」

将太「…分かった、なら俺は西新とやる」

俺の名前は知られてるようだな。

翔「さあ、やろうぜ！」ダッ！

将太「ああ…！」ダッ！

ドゴッ！

拳と拳がぶつかり合う。

翔「ほう」

将太「へえ」

サツ

距離を取り…

翔「ノーザンインパクト！」パキッ！

将太「水針！」シユッ！

互いに技を出す。

翔（（（（（将太

打ち消した！

将太「氷使いか。俺は…」ムワツ…

翔「…霧使いか」

霧野だけに。

将太「その通り！ハッ！」

ドシユッ！

翔「ツ、あぶねえ…」

霧がある範囲がアイツの射程距離だからな。

翔「ホワイトブレード！」パキッ！

周りに氷を発生させて霧を冷やす。

将太「考えたな…だがまだ当たるぞ！」

シュツ！

翔「スノーエンジェル改！」パキイン！

将太「ミストトラップ！」ムワツ！

翔（（（（（将太

翔「グツ、視界が…」

将太「オラア！」シュツ

…ん？当たらなかった？

将太「クソツ、ハツ！」シュツ

…まさか。

翔「お前も視界が狭いのか？」

将太「そ、そんな事ない！」

翔「（あ、コイツ大助みたいなバカだな）…フツ！」ピョン！

ジャンプして霧を抜け出す。

将太「ちくしよー、何処だコノヤロー！」

翔「…オラア！」パキイン！

将太「!?何だこれは!」

とりあえず氷の中に閉じ込めておいた。

翔「じゃあな、次はまともな戦いにしようぜ」

将太「出せ〜!」

スタスタ

：ゼイルはどうなってるんだ?

side 桜木咲子

バサツ、バサツ。

私は天使化した状態で空を飛んでいた。すると…

ヒュン!

咲子「おっと」

突然矢が飛んできた。

砂智子「：逃しませんよ」

見てみると砂智子だった。：武器は弓矢だったのね、意外だわ。

咲子「アンタとは後で戦いたいなのよ。邪魔しないでくれる?」

砂智子「天使化してるからって調子に乗らないで下さい」

咲子「それはゴメン」

砂智子「謝るなら降りてきて下さい」

咲子「…分かったわ」バサッ

砂智子「……………」

咲子「…なーんてね？また後でね〜！」ビューン！

高速でその場から離れた。

砂智子「え!?ま、待って下さいー！」タタッ

咲子（敵に待てと言われて待つバカはあまりいないわよ）
とりあえず味方を見つけたら助っ人に向かうわ。

辛い！酸っぱい！苦い！

side 桜木咲子

咲子「…そろそろ降りた方がいいわね」バサツ
スタツ

咲子「天使化、解除！」

カツ！

翼と角がなくなり、目も元の状態に戻る。

咲子「やっぱり少し疲れるわね」

イナイレGOの化身アームドみたいなものね。

ザツ、ザツ

咲子「…あら」

風鈴「見つけたよ、咲子」

風鈴が目の前の方向から近づいてきた。

咲子「で、私を攻撃するのかしら、風鈴？」

風鈴「もちろん♪」

咲子「ならバイバイ!」ダッ

逃ーげるーのよー!

風鈴「うん、もちろん逃さないよ。風斬・鎌鼬改!」ズバアッ!

咲子「結界流し!」ガオン!

受け流して、と。

風鈴「ええ…」

咲子「あばよつ、とつつあん!」ダダダダダ

風鈴「(煽って来るね…イライラする)…ハアッ!」プクッ

ポオオオッ!!

咲子「!?!」

赤い変なのが飛んできた!?

咲子「千手観音!」ガシイン!

風鈴「あ、触ったね♪」

咲子「…なっ!?!」

ジュワッ…

咲子「熱い!?!」

風鈴「私の能力、”味覚を操る能力”だよ」

咲子「味覚？じゃあコレは、辛味……？」

風鈴「その通り！だから火じやないのに燃えてる感覚だよ……」

咲子「クツ、厄介ね……（なんつって♪）」

私の能力があれば無害よ！

咲子「…解除！」

シューウウ……

風鈴「あれ、消えた？」

咲子「ふふっ、もう効果はないわよ！」

風鈴「そう？なら次は…酸味！」バチツ！

咲子「今度は当たらないわ！結界流…し！？」バチツ！

触れてないのに感電してる！？なにこれ！？

風鈴「残念、酸味は距離があっても効くんだよ♪」

咲子「フツ、解除！」パッ

風鈴「またか…咲子の能力は解除？」

咲子「その通り」

風鈴「………ホントに？」じー

咲子「ホントよ？」

風鈴「そう…(解除か。咲子はそう思ってるみたいだね。能力の一部だと私は思うけど)次は苦味だよ…!」ドロツ

風鈴の手から濃い緑色のドロツとしたものが出てくる。色さえ変えれば完全にウ○コね。

(女子がウ○コ言うな!)

咲子「で、当てる来ないの?」

風鈴「うん、防御用だからね」

防御用?

咲子「…真フレイムウェイブ」グルグル

ドシューウウ!

風鈴「ハッ!」ドロツ

ジュツ…

火の衝撃波は苦味(と思われる物質)に触れると、物体を少し燃やして消えてしまった。

咲子「へえ…」

かなり凄い防御力ね。

風鈴「これで一通り見せたかな。(もちろん甘味と必殺技意外は、ね)便利だけどこれ

を準備するのがね…」

咲子「準備？」

風鈴「カプサイシンとか食べる必要があるのよ私!？」

咲子「ああ…」

確かにイーディングニコルで食べてたわね…

風鈴「さて…バトル、スタートだよ」

やっとならったわね。

舞い散る腕

♪ すりいー空中分解 (long ver.)

side 桜木咲子

風鈴 「さて…バトル、スタートだよ」

咲子 「なら、先に…絶解除火桜！」 BLOOM!

風鈴 「苦味！」 ドロツ

咲子 「……………」 ニヤリ

それが目的よ。

シューウウ…

風鈴 「…あ」

咲子 「からの烈焼脚！」 ドゴオ!

風鈴 「ガハッ! …油断してたよ…」

咲子 「戦闘中に油断は禁物よ? …超炎天桜舞！」 BLOOOM!

風鈴 「私だって! 絶晴天飛梅！」 BLOOM!

咲子 ()()()()(風鈴

風鈴「グツ！」

咲子「真フレイムウエイブ！」ドシユツ！

風鈴「…甘味！」ギユン！

咲子「回復した…？」

風鈴「それだけじゃないよ。…ハツ！」サツ！

咲子「速い!？」

火の衝撃波はあっさりかわされた。

風鈴「風斬・鎌鼬改！」ズバツ！

咲子「結界！」ピキツ！

キーン！

風鈴の攻撃は結界に当たる。

今の内に離れないて「させない、よっ！」

ドゴツ

咲子「ガハツ…」

風鈴「甘味は回復力とスピードを一時的に上げるんだ。…追撃だよっ！」シユツ！

咲子「…烈焼脚！」ドゴツ！

風鈴「よっ」サツ

咲子「真フレイムウェイブ！」ドシユツ！

風鈴「ほっ」ピヨン

咲子「クツ…」

私の攻撃は次々と避けられてしまう。

風鈴「風斬・鎌鼬改…！」シャツ！

咲子「まずい…！（腕に当たる！）」

当たらないで！

そう思った時だった。

フワツ…

風鈴「!？」シユツ

咲子「腕が…!？」

文字通り空に舞い散った。なのに…

咲子「痛く、ない…?」

よく見ると血も出てない。

咲子「次元斬り？」

でも、近くにメイは見当たらない。

風鈴「…やっぱりね」

咲子「？」

風鈴「咲子の能力、解除だけじゃないよ。…正確には、解除は能力の一部、かな？」

咲子「能力の、一部？」

風鈴「それ以外は分からないけどね？」

咲子「は、はあ…」

で、コレ…

咲子「動かせるのかしら？」

フラフラ

腕はなりふり構わず踊りだした。

咲子「動いた！」

なら、この状態で…

咲子「超炎天桜舞！」 B L O O M !

風鈴「え、ちよっ!？」ズドッ

離されてる腕ともう片腕から攻撃を放つ。

咲子「ちゃんと機能するわね」

後は、どうやって戻すかね。

咲子「…戻れ！」

シユルル…

腕は戻ってきた。

咲子「くつつつけて、と」

これでいいのかしら？

シユツ。

咲子「あ、戻った」

風鈴「(能力はかなり規格外だね…)…一旦停戦しよう」

咲子「停戦？」

まさか風鈴から言うとは思わなかったわ。

咲子「いいわよ。今の内に離れてなさい」

風鈴「そうするよ。じゃ！」ダツ

風鈴は走り出し、数秒後には見えなくなった。

咲子「これがホントの空中分解、なんつって♪」

Aerial Breakup

♪すりいー空中分解

side 桜木咲子

咲子「分裂ね…」

ドッキリを仕掛けてみよつと。

咲子「まずは腕を離して、と」

ポロツ

右腕は体から離れ、宙に浮く。

咲子「後は待つだけね」

1. 3965分後ー

メイ「あ、咲子さん」

ルマ「やつと会えたね！」

咲子「ええ…」

2人は私の腕がない事に気付く。

メイ「どうしたんですかその腕!？」

ルマ「大丈夫!？」

咲子「ふふっ、大丈夫よ」

「右腕を操ってメイの背中の後ろまで持つていく。そして…

トントン

メイ「？」クルツ

メイは振り向き…

メイ「キヤアアア!?!腕が浮いてます!？」

めっちゃ驚いたわね。

咲子「ドツキリ大成功♪」スツ

カチツ

ルマ「えっ、どういう事？」

咲子「私の能力よ」

メイ「能力？解除じゃなかったんですか？」

咲子「風鈴に指摘されたのよ。解除や数分前目覚めたコレは能力の一部に過ぎないつ

て」

ルマ「へえ。離せるのは腕だけじゃないよね？」

咲子「もちろん、首もオーケーよ。…この通り♪」ポロツ

メイ「ヒツ…それは流石に怖いですよ…」

咲子「うん、ゴメン」カチツ

ルマ「で、これからどうする？」

メイ「体力を温存させますか？」

咲子「いや、他のチームは最低1人脱落してるけど私達は1人も脱落してないわ。だから私達はココで相手を待つ」

ルマ「なるほどね。じゃあ事前に骨を撒いておくよ」ズツ

咲子「私は結界を張つとくわ」ピキツ

これで時間稼ぎになるはずね。

1数分後1

ザツ

砂智子「やっと見つけましたよ、咲子さん」

咲子「げっ、砂智子」

よく考えると、私と砂智子って容姿も名前もかなり似てるのよね。

メイ「どうします？」

咲子「私が砂智子を相手するわ。2人は…」じー

「ハッ、バレたか」

物陰から出てきたのは、茶髪の鬼（のような見た目をした少女）だった。

桂花「基山桂花だ。優香さんの…姪だな」

咲子「へえ、通りで見た目も似てるワケね。…メイとルマはアイツを相手しなさい」

2人『了解です！（オーケー！）』

咲子「じゃ、突撃！」ダッ！

砂智子「絶岩なだれ！」ドゴドゴドゴッ！

咲子「空中分解G2！」ギュルルルル！

一郎「ハア、ハア、やるな…」

ゼイル「お前もな…」

2人『…流石だな』

一郎「ははっ、同じことを言っちゃまった」

ゼイル「ふっ、だな」

一郎「…ゼイル」

ゼイル「…何だ？」

一郎「次会うのは10人切った時だ」シュッ

ゼイル「…ああ（その時は、絶対俺が勝ってやるぜ、一郎）」

桜VS椿

side 桜木咲子

咲子「烈焼脚！」ドゴツ！

砂智子「土流波！」ボコツ！

チツ、防がれたわ。

咲子「なら、真フレイムウェイブ！」ドシユツ！

砂智子「絶岩なだれ！」ドゴドゴドゴツ！

また防がれた。

咲子「むう……」イラッ

砂智子「（今です！）絶曇天椿舞！」BLOOM！

咲子「空中分解G2！」ポロッ

バラバラになって攻撃をかわす。

砂智子「フアッ!?!」

面白い驚き方ね。

咲子「烈焼脚……！」ドゴオ！

砂智子「え、グフツ」

咲子「隙だらけよ」

砂智子「グツ、油断してました。怖い能力ですネ」

咲子「まあ、目覚めたのはほんの数分前だけどね」

砂智子「(数分前でこの完成度ですか…) …次はないですよ」

咲子「…へえ」シユツ

それは私のセリフよ？

砂智子「!？」

後ろに回り込む。

咲子「アンタが、ね」シユツ!

砂智子「ッ!」サツ

咲子「あら、避けられたわね」

砂智子「……………(なんですか今のスピード!?まさか本気じゃないんですか!?)」

咲子「いや、私は本気よ」

砂智子「えっ、思考が読まれました?」

咲子「カンよ。そんな顔してたし」

砂智子「は、はあ…(気をつけますか)」

いい加減攻撃しよっと。

咲子「ブレイズスクリュー改！」ゴオオオッ！

砂智子「(来ましたか)それは得意分野です」スッ

砂智子は手を構える。

咲子「？」

砂智子「わっせろい！」ドガッ！

咲子「はあ!」

砂智子はなんと土の拳でブレイズスクリューを跳ね返した！

砂智子「ふふっ、どうです？」ドヤア

砂智子はドヤ顔をする。

咲子「いやそれ可愛いだけだから」

砂智子「か、可愛い!?私がですか!?あらやだ〜!」

咲子「ええ…? (混乱)」

何、その反応?

砂智子「(フツ、隙ができました!)絶岩なだれ!」シュッ!

咲子「なーんてね?千手観音!」ガシイン!

砂智子「なっ!?(あのエネルギー量をすぐに…精密動作性Aですか貴女!?)」

咲子「超炎天桜舞！」 B L O O O M !

砂智子「グツ…（やはり相手が強すぎましたか…?）」

咲子「トドメよ。ハアッ！」

ポオオオツ…!

莫大な量の熱が渦巻く。

砂智子「コ、コレは…（まるで赤い台風…）」

咲子「焼き尽くせ…」

クリムゾンハリケーン」

ゴオオオオオオオオオオ!

砂智子「ふふっ、私の負けですね」

ドガアアアアアアアア!

赤い台風は砂智子に直撃した。

ルマ「!？」

メイ「今のは!？」

桂花「へえ、やるじゃん」

『羽合1位、樺木砂智子、脱落!羽合残り1人!』

馬鹿力を持った鬼

side 室見メイ

ルマ「!?」

メイ「今のは!?!」

桂花「へえ、やるじゃん」

『羽合1位、椿木砂智子、脱落!羽合残り1人!』

もう倒したんですか!?

♪MULA ストリー—オキセイギ

桂花「まだ2分しか経ってないのに、凄いねアンタらの1位は」

メイ「俺と実力ほぼ同じですけどね」

ルマ「君も倒したら羽合は脱落だね!」

桂花「そうさ。でも:アンタらが私に勝てたら話だな!」シユツ

メイ「!ルマさん右です!」

ルマ「うん!」シユツ

キイン!

桂花「せやあ！」

ボキッ！

桂花さんはルマさんの防御の骨を折ってしまいます。

メイ「油断できませんね。斬一閃！」スパッ：

桂花「あらよっ」サッ

俺の斬撃もあつさりよけられました。

桂花「鬼の力、見せてやんよ！正拳！」

シュバッ！

メイ「ッ!？」

今の攻撃速度は!？」

ブワッ！

ルマ「風!？」

メイ「風圧も凄いですね…」

桂花「今度は当てる！正拳！」ドゴオ！

メイ「真冥冥斬り！」キイン！

飛梅で攻撃を防ぎますが…

桂花「フン、んなもん邪魔だあ！」バツ

シユルルツ…キイン!

メイ「なっ!?!」

手から刀を弾き飛ばされました!?

ルマ「メイちゃん、危ないよ! Xプラスト!」シユウウウ!

桂花「あ、うわっ!」

メイ「え…?」

直撃しましたよね…?

桂花「痛いな、もう! これでもくらいな!」シユバツ!

ルマ「ボンアーマー!」ピキッ!

メイ「刀がないなら…風神の舞改!」ビユウウン!

桂花「うわー吹っ飛ばー」ピユー

今の内に飛梅を!

ガシッ

桂花「あつ、取ってしまったね。仕方ないか」シユツ

ルマ「(また速く…仕方ない、今使う!) 天使化!」カッ!

桂花「おお?」

ルマ「刃アンヘル!」

メイ「天使化しましたか」

桂花（パワーが膨れ上がってる。面白い！）シュツ！

桂花さんはまた動き始めました。

ルマ「バーニングサイズ！」ズバツ！

桂花「うわっ！」

しかしルマさんはちやつと動きを捉えてるようですね。

メイ（俺も攻撃しますか）分身！ポワン！

5人『かーらーのー！』

メイ「無」

ナオ「影」

ヤエ「乱」

クミ「舞！」

ニヨ「フルパワー！」

シュバツ！

桂花「おお、速いね！」シュツ！

メイ「！」

桂花さんは俺達とほぼ同じ速さで動き始めました！

「ナオ「追いつくとは厄介ね」

「ヤエ「でも、作戦は成功だ」

5人『超晴天飛梅！（絶炎天桜舞！）（真曇天椿舞！）（雷天落桃改！）（雨天流蓮改！）』

BLOOM！

ルマ（キレイな弾幕だね…）

しかし、この集中攻撃を受けても…

桂花「ちよつ、今のは流石にそれは多すぎ!？」

桂花さんはダメージを食らったもののピンピンしてました。

メイ「うわあ…」

相手が頑丈すぎて若干引いてる俺です。

混合した嵐

side 室見メイ

メイ「……………ッ」

桂花「どうした、来ないのかい？」

ルマ「バーニングサイス！」ズバツ！

桂花「正拳！」シユツ！

ドゴオ！

ルマ「ハアアアア！」

桂花「グツ、うおおお！」

キイン！

力が互いを弾きました。

ニヨ「メイ、どうしたの？」

メイ「天使化したルマさん相手に互角以上ですよ？」

正直、相手が強すぎます。

クミ「…メイ、こっち向いて」

振り向くと、クミに頬を叩かれました。

メイ「えっ……？」

クミ「目を覚ましなよ！ルマはあんなに頑張ってるじゃん！」

メイ「ツ!!」

ルマ「Xブラストツ！」シユウウウ！

桂花「グツ、当たっちゃったよ……！」

クミ「それなのにあたいた達のリーダーであるメイが諦めてどうするの!?!」

メイ「………」

クミ「リーダーなら、もっと自信を持ってよ！」

メイ「……そうですね！」

ザツ

♪MULAストーリーーオキセイギ

メイ「ありがとうございます、クミ。もう諦めません」

クミ「うん、それでいい！」

メイ「俺達も天使化しますよ！」

4人『了解!』

メイ「天使化！」カツ！

ゴオオオ!

桂花「げっ、アイツもできるの!?!」

ルマ「ハア、ハア、遅いよメイちゃん…」

メイ「昼の天使、オキセイギ!」

桂花「……………(凄い力を感じるよ…!!)」

メイ「ルマさんは休んで下さい。俺達が引き受けます!」

ルマ「うん!」サッ

桂花「かかってきな!」

メイ「言われなくてもやりますよ!絶狐月十字斬!」ズバアッ!

ナオ「怒りの鉄槌V2!」ドゴオ!

ヤエ「絶岩なだれ!」ドゴドゴドゴッ!

クミ「真ボルトタイヤ!」グルグル

ニヨ「激流の渦!」バツシャーン!

桂花「グッ、ガッ、ゴッ!?!連続とは聞いてないよ!?!」

メイ「挑発した貴女が悪いです。斬一閃!」

ス

パ

ア

ン

！

桂花「ツ、しまった！」

メイ「(咲子さんの大技、クリムゾンハリケーンと対を成す技です!)…ハアアアアツ
!」ビュウウン…

ナオ「ハアアアアツ！」ボオオオオツ…

ヤエ「うおおおおお！」ドゴオオオツ…

クミ「はあああああ！」バチイイツ…

ニヨ「ハアアアアツ！」ザパアアツ…

ギユルルル!

5つの属性が混ざり合います。

咲子さんが単体なら、俺達は混合物です!

桂花「なっ…(このエネルギーの渦は!?)」

メイ「くらえ…!」

5人『ザ・テンペスト!』

ゴオオオオオオオオオオ!

緑色の渦が桂花さんに襲いかかります。

桂花「グツ、グオオオオオツ！」

メイ「ハアアアアアア！（もつとエネルギーを！）」

桂花「ぐおっ…（これが、花町の、斬士か…）」バタン

『羽合4位、基山桂花、脱落！羽合、全員脱落！』

メイ「や、やりました…！」

ルマ（勝てたね、メイちゃん！）

名前はハーフ、中身はめちやくちや日本人

side西新翔

一郎とゼイルは戦い終わったのか？

ま、今は気にしないでおっか。

翔「で、お前は海原のヤツか？」

マイケル「その通りだ。俺は佐藤マイケルだ」

マイケル？

翔「コモンネームが混ざってる名前だな」

マイケル「だな。だが、俺は生まれてからずっと日本に住んでる」

翔「ほう。じゃ、話はココまでにして…」

マイケル「ああ、Let's FIGHT！」

そこは英語なんだな。

翔「ノーザンインパクト！」シャツ！

マイケル「フレイムアッパー！」ドゴツ！

ヒュン！

マイケルは攻撃を殴って受け流す。

翔「これならどうだ？ ホワイトブレード！」 パキツ！

マイケル「What the F*CK!？」 サツ

おいおいFワードを言うなよ。

てかさらつとかわしてやがる。

翔「一筋縄には行かないか」

マイケル「行くぞゴラア！」

言い方（笑）

―数分後―

翔「コイツ、しぶといな…」

マイケル「お前に、言われたくねえよ…」

翔「オラア！」

マイケル「せいっ！」

ドゴオ！

拳をぶつけ合う。

翔「いい加減、倒れやがれ！」

マイケル「俺に、倒される！」

2人『お前がな!』

パキッ!ボオッ!

翔「うおおおおお!」

マイケル「オオオオオオッ!」

ドシューッ!

氷と火の爆発が起きた。

翔「グハッ」

マイケル「ガハッ」

ドサッ…

翔「もう、動けねえよ…」

マイケル「俺も、だ。Holy crap dude…」

翔「……………」ニヤッ

マイケル「……………」ニコッ

2人『降参だ』

翔「ハハッ、同時に言ったか」

マイケル「気が合うな」

翔「コレが終わったらゆっくり話そうぜ」

マイケル「ああ」

『海原4位、佐藤マイケル、脱落』

『花町5位、西新翔、脱落』

日花「……………」

有美「へえ、以外と善戦してるわね」

日花「そうですね。でも、中に天使化の前兆を見せる人がいますね」

有美「ああ、??ね」

日花「咲子達はどう対応するんでしょう?」

有美「さあ? クリムゾンハリケーンというぶつ壊れ技を持つてるし、なんとかなるんじゃない?」

日花「は、はあ… (先生は相変わらずね…)」

咲子「メイ、あの技は!?!」

メイ「咲子さんのクリムゾンハリケーンと対を成す技、ザ・テンペストです!」

咲子「へえ… 負けないわよ?」

メイ「俺もです!」

ルマ（…ボ、ボクだっていつまでも置いてけぼりにはならないからね！）
3人は呑気に言い合いをしていた。

岩は投げんでいいわ！

side 飛羽野ゼイル

ゼイル「マジか」

翔が脱落した。

これで後15人か？

ゼイル「……………」スツ

影の中に入る。

ゼイル（この状態で移動してもほぼ意味ないがな）

じゃあ何のために入ったのかって？

……ドゴオ！

ゼイル（飛んでくる攻撃を避けるためだ）

そろそろ出るか。

ゼイル「よっ」サツ

??「出たか！くらえ！」ポイツ

岩がこちらに向かって飛んできた。

ゼイル「……………は？」スウ…

避けなくても当たらなかった。

??「チツ、当たらなかったか。お前花町のヤツだろ？」

ゼイル「そうだ。お前は…海原か」

高雄「いかにも！俺は岩戸高雄だ。お前は？」

ゼイル「飛羽野ゼイルだ」

高雄「飛羽野：勝負を始めるでしょう！」

ゼイル（用意しとくか）スツ

影の塊を予め出しておく。

高雄「くらえ、岩投げ！」ガシツ

ゼイル「岩投げ？」

何だそれ？

高雄「うおらああ！」

ポイポイポイツ！

名前のままかよ!?

ゼイル「エアライド！」ギユン！

影をスケボーの形にし、浮かせてた状態で俺が乗る。

ん、コレマジで動きやすいな。

高雄「避けるなよ！ポ○モンでは技の当て合いだろ！？」

ゼイル「ココはポ○モンじゃねーよ！？」

高雄「頭来たぜ！くらえ！」ゴオツ

ゼイル「……！」

今度は強そうだ。

高雄「両手岩投げ！」ポイポイポイツ！

ゼイル「変わらねえのかよ！」ササツ

またエアライドで避けた。

…コイツ確実に3位以上だよな？アホなのか？それともポ○モン形式が通用したのか？

ゼイル「…俺のターンだ」

高雄「おう、来い！」

ゼイル「（え、攻撃を受ける気なのかコイツ!?…まあいいや）…デビルバースト！」

シャツ！

高雄「ガハッ!?」ドゴオ！

うわあ、モロにくらいやがった。

こんな感じの状況がしばらく続いた。

―数分後―

高雄「グフツ…」チーン

ゼイル「ちよつとやりすぎたか？」

『海原3位、岩戸高雄、脱落!』

岩戸に何度か攻撃を避けてもいいと忠告したが、挑発だと捉えた岩戸は直撃され続けた。

ゼイル「……行くか」

スタスタ…

流「オラア!」

風鈴「せいっ!」

ドガーン!

流「ふう、強くなったな風鈴!」

風鈴「そつちこそ強くなったね!」

流「口調も少し変わったか？」

風鈴「うん、ちよつとコレの方がしつくり来るからね」

流「そうか。…続けようぜ！」

風鈴「うん！」

2人『ハアアアア！』

ドガン！

蓮と梅はぶつかっていた。

羽合の次は、海原なのか…？

三 つ 巴 ①

side 室見メイ

天使化を解除した後、ルマさんはそこに残りました。

メイ「……………あつ」

流「オラア！」

風鈴「せいっ！」

ドゴオ！

流さんと風鈴さんが戦っていました。

ナオ「乱入する？」

ヤエ「それがいいね」

クミ「でも、卑怯じゃない？」

ニヨ「これは団体戦だよ。1対1で戦わなくてはいけないルールなんてない」

メイ「…ですね。乱入しましょう。デイフェンスコマンド14……」

スタツ

5人『無影乱舞！』

シユバツ!

流「激流の…うおっ!」

風鈴「風斬・鎌いた…キヤツ!」

…スタツ

メイ「どうもこんにちは」

流「…メイか」

風鈴「乱入してきたんだね」

メイ「その通りです。その戦い、俺達も加わりますよ」

流「俺達だと?お前1人しか…」

風鈴「いや、周りに4人いるよ」

シユツ

ナオ「御名答♪」

ヤエ「メイは5重人格だ」

クミ「全員それぞれ別の属性だよ」

ニヨ「僕達に勝てるかな?」

流「咲子もお前もぶっ壊れてやがる…」

まあ、否定はしませんね。

風鈴「三つ巴の戦いね…面白い。…絶晴天飛梅！」BLOOM!

流「なら俺も！絶雨天流蓮！」BLOOM!

ヤエ「そう来るんだ。…絶曇天椿舞！」BLOOM!

クミ「真雷天落桃！」BLOOM!

ニヨ「真雨天流蓮！」BLOOM!

強化されたんですね。

流「まとめて倒してやる！激流の渦改！」バツシャーン!

大きな波が迫ってきました。

てかコレどう見てもツナミブーストです。

ナオ「フレイムウェイブ！」ドシュツ!

ナオ()()()()()(流

パワーダウン!

風鈴「よっ」フワッ

風鈴さんは普通に浮遊して避けました。

メイ「超火斬り！」ズバツ!

メイ()()()(流

パワーダウン！

かなり威力は削れたハズです。

メイ「クミ、カウンターを！」

クミ「任せて！真ボルトタイヤ！」グルグル

クミ（（（（流

カウンター成功！

風鈴「カウンターとは、斬新だね…（斬士だけに）」

流「嘘だろ!?…グワツ」ザパーン、バチイッ！

流さんは攻撃を避けられずくりました。

メイ「作戦は成功ですね」

風鈴「私の番だよ。大嵐！」ビュウウン！

出ました、ウインドブラストの正当強化版。

メイ「なら、風神の舞改！」ビュウウン！

メイ（（（（風鈴

風鈴「えっ、わあああっ!?」フワツ

威力勝負は俺が勝ち、風鈴さんは宙に浮きます。

ナオ「隙あり！怒りの鉄槌V2！」

そこにいつの間にか風鈴さんの背後にいたナオが追撃しました。

風鈴「グハッ…」

流（こりややべえな）

三つ巴 ②

side 室見メイ

流 「流石に5人を相手にするのはやばいな…」

風鈴 「だね…」

メイ 「そうですね。なら…俺達は2人で相手しましょう。ナオ、ヤエ、ニヨ、戻って下さい」

3人 『了解』フツ

クミ 「あたいは？」

メイ 「俺と戦います」

クミ 「分かった、任せて！」

流 「手加減ってか？」

メイ 「いえ、流石に5人で相手するのはプライドが傷つくので」

(リンク戦の時毎回やってるのに?)

風鈴 「なら止めないよ。…流」

流 「何だ？」

風鈴「一時的に同盟を組まない？」

なるほど、そう来ましたか。厄介ですね。

流「フツ、いいだろう！いくぞ！」

風鈴「うん！」

メイ「クミ、左右から攻撃します！」

クミ「オーケー！」サツ

流「激流の渦改！」バツシャーン！

風鈴「さらに大嵐！」ビユウウン！

2人『斬一閃ッ！』

ス

パ

ア

ン

！

空間を斬って攻撃をずらしました。

流「空間ごと斬っただど!？」

風鈴「そういう能力だろうね」

メイ「次元斬りと呼んでます」

クミ「真雷天落桃！」 B L O O M !

流「ウオーターランチャー！」ズバァン！

クミ（（（（（（流

パワーダウン！

クミ「いやソレハ〇ドロポ〇プ!？」

メイ「それは言っちゃダメですよ！絶狐月十字斬！」ズバァン！

メイ（（（（（（流

カウンタ成功！

風鈴「……隙あり！風斬・鎌鼬！」ズバァン！

クミ「グッ！」

流「おいおいそっち行ってる場合かよ!?!ぐおっ」

流さんには攻撃が当たってますね。

メイ「クミ、大丈夫ですか？」

クミ「うん、あたいたいサイキョーだから、全然余裕だよ！」グッ

サイキョーではないとおと思いますが、様子からして全然余裕なのは事実ですね。

風鈴「ほぼダメーじがないんだね」

流「お前パワーどれぐらいなんだ？」

メイ「最後測定した時は170万でしたね」

クミ「でもそれ一週間前でしょ？無影乱舞と最強必殺技を覚える前の」

メイ「ですね。なら、今はおよそ200万ですね」

風鈴「わお…」

流「俺まだ150万にもなってないんだが…」

風鈴「私は158万だけどね」

クミ「…ま、茶番はそこまでにしとこう」

(お前が言う事じゃないだろ!?)

メイ「そうですね。攻撃を続けます！デイフェンスコマンド14…」

2人なので威力は少し減りますが…いいでしょう。

2人『無影乱舞』シュバツ！

流「速いなおい！」

風鈴「……………(見える…?)」

花「おお、メイちゃん凄いね〜！」

出夢「当たり前だ、僕に勝てる自慢の妹だからね」

地雷原!?

side 羽犬塚ルマ

ルマ「そろそろ行こっかな？」

体力も回復したしね。

「おうっ。」

ルマ「ん？」

向いた先には背が低い人がいた。

鶯「俺は海原2位の南野鶯だ、お前は？」

早速自己紹介されたね。

ルマ「花町3位の羽犬塚ルマだよ」

鶯「3位か：勝負だ！」ザッ

ルマ「もちろん！」スッ

鶯「水鎧！」ピキッ！

南野は水で鎧を作った。

ルマ「ならボクも。ボーンアーマー！」ピキッ！

互いが鎧を装備した。

鵜「行くぞオ! アクアカッター!」ズバツ!

ルマ「クロスボーン!」ドゴツ!

ルマ()()()()(鵜

ブロツク!

ルマ「ハアツ!」ピヨン

ジャンプしながら回転する。

ルマ「Xプラスト: V2!」シユウウウ!

鵜「ハイドロポンプ!」バツシヤーン!

うん、そのまま言ったね。

ルマ()()()()(鵜

鵜「グツ、強いな…」

ルマ「まあね。まだまだ行くよ!」ドツ

鵜「……………」ニヤリ

南野は何故か口角を上げた。

ルマ「…………?」

鵜「かかったなアホが! 起爆!」ピカッ

ドガン！

ルマ「うわっ!？」

突然辺りが爆発した！

水の爆弾かな…？

ルマ「ケホッ、いつの間に…」

鵜「起爆！」ピカッ

ドガン！

ルマ「また!？」

ホントいつの間に設置したの!？」

ルマ「……………」

考えるのはやめよう。

ルマ「鎌！」スッ

鵜「…ほう（鎌で何をする気だ？）」

ルマ「バーニングサイズ！」ズバツ！

地面を鎌で斬り裂く。すると…

鵜「あ、やべ」

ルマ「へえ…」

水の塊が設置されていた。

ルマ「コレを操ってるんだね？」

鵜「その通り。だが、いつ設置したか分からない限り、俺は負けない！起爆！」

ルマ「その技はもう見切ったよ！ハッ！」ピヨン

空中にいれば問題ない！

そしてココから…

ルマ「クロスボーン！」シャッ！

鵜「何ッ!?くっ…」ササッ

おお、ちゃんと避けてらっしやる。

ルマ「かーらーのー？XブラストV2！」シユウウウ！

鵜「グハッ！」

今度は直撃したね。

ルマ「…ん？」

南野の足元から水が流れている。

つまり…

ルマ「足元から水を操って地中に設置してるのかな？」

鵜「…くそっ、バレてしまったか」

ルマ「もう怖くないよ！ハッ！」シユツ
南野に向かって走る。

鵜「き、起ばk「遅い！」なっ!？」

ルマ「バーニングサイス…改！」ズバアツ！

鵜「グフツ…」バタン

『海原2位、南野鵜、脱落！海原残り1人！』

ルマ「ハア、ハアツ…」

近くの岩に座る。

ルマ「休まないと…」

流石に連戦で疲れたからね…

咲子「あ、ゼイル！」

ゼイル「おう、咲子。大丈夫か？」

咲子「ええ、大丈夫よ」

三 つ 巴 ③

side 室見メイ

シュバツ!

流「そこか!」シュツ

違いますよ。

メイ「ハツ!」シュバツ

流「グツ!...どうすりやいいんだ?」

シュツ

風鈴「:.....」じー

クミ「ハアツ!」

風鈴「そこっ!」ドゴツ

クミ「えっ!?!」

風鈴さんの攻撃が当たりました。

クミ「:.....(まぐれだね)」シュツ

メイ「:.....ハツ!」シュバツ!

流「ぐおっ！そろそろヤベえな…」よろっ

風鈴「…見えた！ハアツ！」

メイ「ツ！」サツ

流「は!?!お前見えたのか!?!」

風鈴「うん、何故か見え始めた」

メイ（咲子さんの動体視力でもこのスピードを見るのは難しいハズ…まさか…!）
シュツ

流「…クソオ、こうなったら！激流の渦改！」バツシャーン！

流さんはヤケになりましたね。

メイ「ゴツトキャッチ！」ガシンン！

攻撃はしつかり止めました。

流「嘘だろ…」

風鈴「…ハアツ！」

クミ「グハツ!?!」

メイ「クミ!?!」

風鈴さんのパンチがクミに直撃しました。

風鈴「なんでか分からないけど、見えるようになったよ！」

流「俺はもうほぼやられてるけどな」

メイ「……………」サッ

流さんの目の前まで移動します。

メイ「貴方の負けです…斬一閃」

ス

パ

ッ

流「なっ…」

流さんの腕と足を一太刀で斬り落としました。

…表現はグロいですね。

流「くそっ、動けねえ！」

風鈴「うわぁ、怖いね」

流「どうしようもないな…降参だ…クソッ！」

『海原1位、那覇流、脱落！海原、全員脱落！』

風鈴「……………」

クミ「あたいは戻った方がいい？」

メイ「はい、戻って下さい。お疲れ様でした」

クミ「うん、バイバイ♪」シユツ
…さてと。

メイ「風鈴さん、流さんが脱落しましたが、このまま戦いますか？」

風鈴「…いや、一旦退却するよ。また後でね」タタツ

風鈴さんは走り去って行きました。

メイ「……………」

もしかしたら、風鈴さん…

メイ「後々天使化するかもしれませんがね」

だとしたら厄介になるでしょう。

メイ「ま、その時はその時なので今は力を蓄えておきますか」

咲子「…来たようね」

ゼイル「だな」

ザツ…

一郎「よう、お前ら」

竹尾「倒しに来たぞ！」

咲子「フツ、それはこっちのセリフよ！」

一郎「ゼイル、今度こそ決着をつけるぞ」
ゼイル「ああ」

竹尾「バカキヤラの座は渡さねえ！」

咲子「うん、いらないわよそんなもん」

一郎「……行くぞ！」ダッ

咲子「私達が勝つ！」ドッ

花町と総武の最強コンビが、今ぶつかり合うのであった。

咲子「なっ…クツ、魔王・ザ・ハンドG2！」ガシイン！
カウンターされてしまったが、私はそれをしっかり止めた。

ゼイル「デビルバースト！でええりやあああ！」シャツ！

一郎「絶サンダーラツシュ！」ビリイツ！

ゼイル））））））（（（（（一郎

一郎「グツ、やるな…」

ゼイル「それにしてはダメージがほぼないみたいだが？」

一郎「バレたか…まあいい。今度はこっちの番だ！竹尾！」

竹尾「おう！グラスフィールド！」モサツ！

周りに草が生い茂る。

面白いわね、草だけに。

咲子（竹尾ってマジのアホね）

一郎「息を合わせるぞ！」

竹尾「ああ！イナズマ…」

あの動きは!?

一郎「…1号！V3！」ビリイ！

ゼイル「エアライド！」ササツ！

一郎「ッ、逃げるぞ竹尾！」ガシッ

竹尾「ぐえっ!？」

ダダダダダ

―数分後―

咲子「おお…凄いわね」

一郎「ハア、ハア…おかしいだろ…」

竹尾「赤い、台風が…追尾型なんてよお…」

2人『バケモンかお前!？』

咲子「……………」

ゼイル「(バケモンと言っても、咲子はどうせ反応しないと思うが…)」

咲子「私がバケモンなんて…」

…褒めないでよ、照れるじゃない！」ニコッ

2人『だから褒めてねえよ!?!』

戦いは、まるでギャグ漫画のような展開になるのであった……？

タッグバトル②

MULAストーリー——ステルス・ロック

side 桜木咲子

咲子「とりあえずおふざけはココまでにしましょ」

一郎「お、おう、そうだな…」

ゼイル（新技を出す時が来たか）

竹尾「うし！先制攻撃だ！つるのムチ！」パシイン！

咲子「完全にポ○モンね。真フレイムウェイブ！」ドシユツ！

つるを火で焼いた。

竹尾「チツ」

一郎「雷神グフィストオ！」ビリッ！

ゼイル「絶狐月十字斬！」ズバツ！

ドガン！

エネルギーがぶつかり合い、爆発が起きる。

一郎「グツ、やるな」

ゼイル「お前こそな…グッ！」

咲子「…？（何かあったような…まあいいわ）真ブレイズスクリュー！」ゴオオオツ

！

竹尾「能力は植物だが、属性は水だ！ウオーターランチャー！」バシヤツ！

じゃあ、なんでもっと早く使わなかったの？やっぱアホなの？

咲子「……」

ブロックされた！

一郎「竹尾、もう一回行くぞ！」

竹尾「おう！」ダッ

恐らくイナズマー1号V3ね。

ゼイル「…咲子」

咲子「何、ゼイル？」

ゼイル「新技を試したいんだ、俺にやらせてくれないか？」

新技？見てみたいわね。

咲子「もちろん」

2人『イナズマー1号…V3！』バチイッ！

電気の塊が飛んでくる。

咲子「大丈夫!？」

ゼイル「スマン、足を痛めてしまった」

よく見ると、ゼイルの足が出血していた。

咲子「悪魔化して治せば「自分は治せないんだよ」そんな…」

ゼイル「コイツを渡しておく」スッ

ゼイルは凝縮された影の塊を渡してきた。

…なるほど。

咲子「ありがと、ゼイル」

ゼイル「ああ…降参だ…」

『花町3位、飛羽野ゼイル、脱落!』

一郎「後は俺達だけか」

咲子「そうね…提案があるわ」

一郎「何だ?言ってみろ」

咲子「次の一撃で最後にしましょう」

一郎「…フツ、良いだろう!」

ギョオオオ!

一郎「うおおおおお…!」

互いが力を高める。

咲子「ハアアアアッ……！」

私は火を凝縮する。

一郎「…行くぞッ！」

咲子「ええ……！」

一郎「雷神グ……」ドッ！

咲子「天空……」バツ！

一郎「フイストオオオオ！」

咲子「落としいいいッ！」

シューウウッ！

雷神の拳と惑星の雨がぶつかり合う。

一郎「うおおおおお！」

咲子「ハアアアアア！」

ドガアアアアアアン！

一郎「ぐおっ！」

咲子「うわっ！」

大きな爆発で私達は吹っ飛んだ。

生き残ったのは……………。

一郎「ガハッ…」バタン

咲子「…私の勝ちね」

『総武1位、雷落一郎、脱落！総武、全員脱落！』

見えない敵

side羽犬塚ルマ

ザツ

ルマ「！」クルツ

……あれ？

今確かに足音が…

ザツ

ルマ「そこっ！」シユツ

「………」

またいない…？

「……！」シユツ

ルマ「ッ！」ガシツ

「ほう、気付いたか」

ルマ「いつの間に!？」

「俺は気配を消せるんだよ」

ルマ「通りで気付かなかったワケだ…」

透矢「北村透矢だ。能力はないが気配を消すのが得意」

ルマ「ボクは「羽犬塚ルマ、だな？」もう知ってるんだね」

透矢「今から戦う相手は把握している」

ルマ「へえ。…ハッ！」ピヨン

ジャンプして、と！

ルマ「Xプラス…あれ？」

北村が見えない!?

透矢「何処だろうな？」

右前から声が聞こえた。

ルマ「そこだ！XプラスV2！」シユウウウ！

その方向に攻撃した。

透矢「おっと、2メートルずれてたぞ？」

ルマ「ええ…」

透明人間なら気配で分かるけど、気配がなくなったらどうしようもないよ…

ルマ「何処〜!?!」

透矢「……………」スッ

カッ!

ルマ「がつ……!」

いつの間に……うなじを……

バタン

『花町4位、羽犬塚ルマ、脱落!』

side 室見メイ

咲子「なっ!?!」

メイ「後俺達2人ですね。どうします?」

咲子「そうね……2人で2位を倒しましょう。風鈴とは2人で戦った方がいいわ」

メイ「それがいいですね。2人の方が戦術の幅が広がりますし」

咲子「とは言っても、アンタは実質5人だけどね。……行きましょ」

メイ「はい!」

「もうココにいるぞ!」

後ろから声がありました。

2人『!?!』クルッ

しかし、誰もいません。いや……

メイ「透明ですか……？」

「違うな」

咲子「…恐らく、気配を消してるから感知できないのね」

「正解だ」シユツ

現れましたね。

透矢「北村透矢だ。花町の4位は俺が倒した」

確かに、気配が感知できないならルマさんでもまともに攻撃できませんね…

透矢「さてと…」シユツ

北村さんは再び消えました。

メイ「……………」

ザツ

メイ「そこです！」シユツ

透矢「おっと」サツ

惜しかったようですね。でも、次は当てます。

メイ「咲子さん！」ギユン！

咲子「オーケー！」ギユン！

2人『絶陽天梅桜！』B L O O M！

オレンジ色の花びらが飛んでいきます。

ズドツ！

透矢「グツ…そう来たか…！それなら俺を感知しなくても当てれるな…」

メイ「分身！」ポワン！

4人『ハッ！』

メイ「フルパワー…！」

5人『無影乱舞！』

シュバツ！

咲子（なるほど、高速で移動することによって透矢を見つけ、そこを集中攻撃するの
ね）

メイ「ハアツ！」ドゴツ！

透矢「ぐおっ！」

対策はちやんとしてます！

VS 風鈴①

side 桜木咲子

透矢「ガハッ……」バタン

『輪花2位、北村透矢、脱落！輪花残り1人！』

メイ「ハア、ハア……」

咲子「倒せたわね……」

メイ「はい。でも……もう俺の体力が持ちません」

咲子「……お疲れ様。もう休んでて」

メイ「すみません咲子さん……降参します」

『花町2位、室見メイ、脱落！花町残り1人！』

……ザッ

風鈴「これで一対一だね」

咲子「そうね」

風鈴「お互い全力で行こうよ」

咲子「私が圧倒的に有利になるけど？」

風鈴「それでもいいよ。私は全力の咲子を倒したい！」

咲子「……フッ、いいわよ。天使化！」カツ！

シユウウウ……

咲子「結界アンヘル！」

風鈴「おお……」

咲子「行くわよ！」

風鈴「うん！」

ドッ！

風鈴「真風斬・鎌鼬！」ズバツ！

咲子「烈焼脚！」ドゴォ！

風の刃と燃える脚がぶつかる。

……パワーは私が勝ってるけど。

咲子「ハアア！」

風鈴「うわっ！」ドサツ

咲子「超炎天桜舞！」BLOOM！

風鈴「絶晴天飛梅！」BLOOM！

咲子（（（（（（（（（（（風鈴

風鈴「きやあつ！…強いね」

咲子「意外と戦えてるアンタもかなり強いよ思うわよ？…真フレイムウェイブ！」ドシユツ！

風鈴「大嵐改！」ビュウウン！

風鈴は火の衝撃波を吹き飛ばした。

咲子「……………（風鈴から感じるこの力、まさか…）」

風鈴「甘味！」ギユン！

スピードアツプと回復ね。

咲子「もう一回真フレイムウェイブ！」ドシユツ！

風鈴「フツ！」サツ

ええ、避けてる…

風鈴「エアドライブ！」ドゴオ！

咲子「千手観音！」ガシイン！

ギギギツ…

咲子「このパワーは…！」

予想以上ね。

咲子「ハアアアア！」

ガシガシガシッ!

風鈴「むう……」

ピタッ

咲子「……ふう」

腕500本で止めれたわね。

風鈴「……………（私は、勝ちたい）真風斬・鎌鼬！」ズバッ!

咲子「結界流しV2！」ガオン!

ギョルルル!

強化した結界で受け流す。

咲子「ハアア……ツ……真!ブレイズ……スクリュー!」

ゴオオオオ!

風鈴「私は、この戦いで、咲子に……」

…勝ちたいッ!!」カッ!

ギユイイン…!

咲子「!?」

突然風鈴が光に包まれる。これは…

咲子「天使化…!」

今は昼…だから出夢先輩と同じパターンね。

咲子「凄いわね…」

シユウウウ…

そして光は収まり、白い翼に青い角、空色の輪っかを持つ風鈴が出てきた。

風鈴「風の天使、ウインダー!」

咲子「…来い!」

風鈴「へへっ、言われなくても!超…晴天飛梅!」B L O O O M!

シャツ！

咲子「結界流しV2…グツ！」ドスツ

圧倒的スピードで飛んできた弾幕を止めきれなかった。

風鈴「これで…対等に戦えるね！」

咲子「…ふふっ、そうね！」

VS 風鈴②

♪かいりきベアーアンヘル＋すりいー空中分解

side 桜木咲子

風鈴「…真風斬・鎌鼬！」ズバツ！

とてつもないスピードで飛斬撃が飛んできた！

咲子「ツ!? 空中分解G2！」ギョルルルル！

今のはヤバかったわ…

風鈴「おお、凄いね〜」

咲子「じゃあこつちも！」ボツ

グルグル

咲子「お返しよ！真ブレイズスクリュー！」

ゴオオオオ！

風鈴「試してみるよ……ハアアツ！」

ゴオオオ！

咲子「!?」

アレは！

咲子「マジン!？」

しかもイナイレアレスの風神雷神の風神に見える…

風鈴「風神・ザ・ハンドオオオ！」

ガシンン！

マジンは突風を起こして私の真ブレイズスクリューを止めた。

咲子「(魔王・ザ・ハンドと同じぐらいの威力ね…) いっソレ覚えたの?」

風鈴「ん? 咲子の…魔王・ザ・ハンドだっけ? ソレを真似してみたんだ」

咲子「ええ…」

風鈴の才能がヤバス。

咲子「次は当てるわ。超炎天桜舞!」 B L O O O M !

風鈴「超晴天飛梅!」 B L O O O M !

咲子()()()()()()()()()()(風鈴

ブロツクされた!

咲子「真フレイムウエイブ!」 ドシユツ!

風鈴「大嵐改!」 ビュウウン!

咲子()()()()()()()()()(風鈴

ブロツクされた！

咲子「烈焼脚！」ドゴオ！

風鈴「エアドライブ！」ドゴツ！

咲子（（（（（風鈴

ブロツクされた！

咲子「力は互角ね…」

風鈴「なら、体力勝負だね！真風斬・鎌鼬！」ズバツ！

咲子「結界流しV2！」ガオン！

咲子（（（（（風鈴

ブロツク！

咲子「真…ブレイズスクリュー！」ゴオオオオ！

風鈴「風神・ザ・ハンド！」ガシイッ！

あとはクリムゾンハリケーンだけね…

咲子（でもアレは燃費悪いから温存したいのよね…）

風鈴「エアドライブ！」ドツ！

…そうだ！

咲子「千手観音！」ガシイン！

風鈴「ぐえっ」

千手観音の手で風鈴を掴む。そして…

咲子「わっせろーい！」サツ

風鈴「グフツ！」ドゴオ！

風鈴を地面に思いつき叩きつけた。

風鈴「その使い方は斬新だね…」

咲子「ふふっ…もつと行くわよ！」

風鈴「え」ガシツ

咲子「オラ！オラ！オラア！」ドゴドゴドゴツ！

アベンジャーズの映画でハルクがロキにやったように風鈴を千手観音で掴んで地面に叩きつけまくる。

風鈴「グハッ！グホッ！ガハッ！」

咲子「ハア、ハア…流石に操るのは体力を使うわね…」

風鈴「おえー、頭がフラフラする…」

…今ね。

咲子「ハアアアアアア！」

ギョルルル…！

風鈴「!?」

咲子「クリムゾン…ハリケーン!!!」

ゴオオオオオオオ!

赤い台風が風鈴に襲いかかる。

風鈴「風神・ザ・ハンド…!?」 シュツ

咲子「行っけー!」

風鈴「ぐわああああつ!」

決着

side 桜木咲子

煙が晴れ…

風鈴「ハア、ハア…」

天使化が解かれボロボロの風鈴が出てきた。

咲子「まさか耐えたとはね…ハア、ハア…」

私もかなりエネルギーを使い、疲れている。

風鈴「ハハツ、もう、動けないよ…」バタン

咲子「それって…」

風鈴「うん…咲子の勝ちだよ。降参」

『輪花1位、梅野風鈴、脱落！輪花、全員脱落！よって…花町の勝利！』

咲子「…よし！」グッ

風鈴「おめでと、咲子」

咲子「アンタもいいライバル、よ…」

眠く、なってきた、わね…

バタン

…ハッ!

咲子「知ってる天井ね」

ゼイルの家ね、ココ。

ゼイル「何言ってるんだ？」

咲子「ゼイル？顔近いわよ？」

ゼイル「膝枕してるからな」

道理で気持ちよかったワケね。…って

咲子「アンタさらつと彼女をお持ち帰りしてない!？」

いつそんな積極的になったの!？」

ゼイル「失礼な。他の奴らもいるぞ、ほら」

咲子「ん？あ」クルツ

全員『…よっ』

机から全員こつちを見ていた。

咲子「気付かなかったわ」

絵奈「黙ってたからね」

咲子「そう。…で、私何時間寝たの？」

翔「3時間ぐらいだな」

わお、長い。

咲子「そろそろ起きるわn…痛っ!？」グキツ

腕が、首が、背中が…!

咲子「筋肉痛…」ズキズキ

ゼイル「当たり前だろ、思いっきりやったんだから」

咲子「じゃあなんでゼイルは筋肉痛じゃないのよ!」

ゼイル「咲子と比べたらあまり動いてないからな」

咲子「むう…」

ゼイル「どうした？」

咲子「回復しなさいよ」

ゼイル「スマンが俺も疲れてるんだ。ムリ」

咲子「そう、ならしょうがないわね」

ゼイル「……………? (すんなりやめたな)」「でも…ん?」

咲子「後で搾り取るわよ」

ゼイル「急」

全員（こんな所でそんな事言うなよ！）

茜「…コホン」

咲子「あ」

言う場所間違えたわね。

咲子「今のは忘れなさい」

全員『ムリ』

咲子「ですよね…まあいいや」

全員『いいのかよ！』

咲子「ちよつとトイレ行ってくるわ〜」スタスタ

翔「マジでなんだこの空気？」

絵奈「分からないね〜」

メイ「レイト君、今日は寝させません♪」

レイト「う、うん（終わった…）」

茜「…コーヒーいる人います？」

千早「おう」

千代「私も」

――数分後――

咲子「さあ改めて…花町の勝利を記念して…」

全員『かんぱーい!』

その後祝勝会を楽しんだとさ。

1年春休み

2人の結果

side 赤坂留美

今日は花町高専の受験結果の発表だ。

茜「合格してるかな？」

留美「きつとそうだよ！咲子さんの弟子になるためなら前の日の朝飯前だよ！」

茜「そ、そうか。見よう」

私の番号は……！

茜「あつた！私合格だよ！留美は？」

留美「私の番号が……」

茜「え、ないの!?!」

留美「あるッ！」

茜「あるんかい！」

ベシッ！

留美「痛いー」

茜「留美が紛らわしいから！」

留美「ゴメン。でも両方合格できてよかったね」

「あら、おめでどう」

2人「咲子さん！（先輩！）」

咲子「アンタ達もこれで花町生ね」

茜「はい！」

咲子「…そこで、留美に最終試験を与えるわ」

留美「最終試験？」

咲子「ええ、ついてきなさい」

留美「はい…？」

スタスタ

ー公園ー

留美「それで、試験の内容はなんですか？」

咲子「私の十八番、炎天桜舞を止めることよ」

留美「ええ!？」

咲子「安心しなさい、強化されていない状態だから」

留美「ああ…」

ビックリした。

ザッ

咲子「じゃあ、行くわよ！」

留美「はい！」

新技を使うときがきた！

咲子「炎天桜舞！」 B L O O M !

留美「ハアッ！」 キイン！

咲子（あの動きは！）

留美「ゴツドハンド…X！」

ドゴオ！

留美「…よし！」 ガシッ

茜「止めた！」

咲子「おお…まさかゴツドハンドXを使うとは思わなかったわ。留美！」

留美「はい！」

咲子「アンタを…私の一番弟子に任命（？）するわ！」

留美「ありがとうございます…！」 ギユッ！

嬉しすぎて咲子先輩に抱きついた。

咲子「あらあら、ふふっ」

―数分後―

ゼイル「茜、合格したのか？」

茜「うん！」

ゼイル「そうか、よかったな」ナデナデ

エヘヘ

うわ出た、茜のブラコン。

留美「それで咲子先輩、ココで何するんですか？」

咲子「ん、特に何も」

留美「ええ!？」

咲子「なんとなく連れてきただけよ。したい事でもあるの？」

留美「あつ、じゃあMULAの物語やっていいですか？」

咲子「どうぞ」

ゼイル（俺のパソコンだな）

side 桜木咲子

咲子「私は何しようかしら？」

茜「春休みの計画でも立てればどうですか？」

咲子「いや、春休みは天界で特訓という予定でいっぱいなのよ」

ゼイル「ちなみに俺も行くぞ」

茜「へー。どんな特訓ですか？」

咲子「一日中走ったり、使う武器を交換したり、日花先生にフルボッコにされたり、ね？」

茜「最後は特訓じゃなくないですか？」

咲子「気にしたら負けよ」

茜「は、はあ」

咲子「…いいこと思いついたわ。後で合格祝いとしてラーメン奢ってあげる」

ゼイル（俺ガイルの平塚先生かよ…）

天使化って強い（白目）

side 梅野風鈴

5校衝突が終わった次の日、私は一人で特訓していた。

風鈴「真風斬・鎌鼬！」ズバツ！

うん、しつかり強化されてるね。

風鈴「やってみよ。天使化！」カツ！

シューウウウ：

風鈴「風の天使、ウインダー！」

これで試そう。

風鈴「大嵐改！」ビューウウン！

「ほう、天使化か」

風鈴「…姉さん」

私の姉、梅野風香が来た。

風香「妹に先越されるとはな」

風鈴「姉さんも充分強いよ」

風香「その状態で言うとは嫌味にしか聞こえないのだが」

風鈴「そんな事ない」「それは知っている」はあ」

風香「風鈴が6代目梅になってから一層努力してるのは私が一番知っているからな」

風鈴「……………」

直接言われると恥ずかしいな…

風香「そしていいライバルと戦ったからこそ早く目覚めたのだろう」

風鈴「うん…！」

風香「ところで、私に一発当ててみないか？風鈴がどれ位強くなったか試したいんだ」

風鈴「ええっ、姉さん怪我するよ!？」

風香「問題ない、能力で防御するからな」

風鈴「あ、うん」

姉さんも私と同じ能力だ。

ザッ

風鈴「じゃあ、行くよ！ハアアッ！」

エネルギーを集中させる。

風鈴「真風斬・鎌鼬！」ズバッ！

風香「…！（かなり鋭くなってるな）苦味！」ドロツ

ズバツ！

私の飛斬撃は姉さんの防御を斬り裂いた。

風香「ツ！」サツ

しかし姉さんはそれをギリギリ避けた。

風香「フツ…いい攻撃だったぞ！」

風鈴「それをかわされてるんだけどね」

風香「次は私の番だ」

風鈴「えっ、攻撃するの!?!」

風香「ああ、私の攻撃を止めてみる」

風鈴「う、うん！」ザツ

風香「では、行くぞ！絶晴天飛梅！」BLOOM！

来た！

風鈴「ハアアアツ！風神・ザ・ハンド！」ガシイツ！

風香「!!!（なんだアレは!?!）」

姉さんの攻撃をしっかりと止める。

風鈴「…ふう」

風香「今のは、なんだ？」

風鈴「風神・ザ・ハンド。花町1年1位である咲子の技を参考にしたんだ」
威力も互角だね。

風香「凄いな、相手の技を参考に自分の技を作るとは」

風鈴「でも、まだまだだよ。来年は咲子に勝つ！」

風香「…ああ、その意気だ！」

その後姉さんと特訓をした。

咲子「くしゅん！」

ゼイル「大丈夫か？」

咲子「ええ…誰かが私の事を話してるのかしら？」

(その通りです)

ゼイル「ところで、MULAの物語で3部が加わったよな。もうやったか？」

咲子「やったわ。UNDER TALEの曲が大量に追加されてたわ」

ゼイル「そうか。ちよつとやってくるわ」

咲子「ええ」

ゲーム実況をしてみました

side 室見メイ

俺とレイト君は寮でくつろいでいます。

3学期？既に終わってますよ。

それで咲子さんとゼイルさんは天界で特訓しています。

メイ「あ、MULAの物語でゲーム実況してみますね」

レイト「実況？なんで？」

メイ「気分ですよ。それと、千早さんと千代さんに見せたいので」

レイト「なるほど」

カタカタ

『MULAストーリー—ONCE UPON A TIME…?』

メイ「3部1章のオープニングですね」

—1分後—

テツ、テツ、テツ…テツ、テツ、テツ♪

レイト「UNDER TALEのメニュー画面の曲が少しリミックスされてるね」

メイ「ユーザーネームは…オキセイギにします」

アルミ『さて、今日の仕事は…イビト山の調査?』

メイ「早速始めましたね」

アルミとアオイの会話が済み、その後イビト村に到着。

レイト「フリスクのキャラデザは少し原作寄りだね」

メイ「この時の年齢的にもそれがよさそうですね」

まだ10歳ですし。

アルミを操作してイビト山を登ります。

―数分後―

地下に突入しました。

フロギーに遭遇した所です。

アオイ『あれは…カエル?』

アルミ『いや、カエルにしてはデカくない?』

…キーン!

レイト「これは凄いな」

かなり再現度が高いDELTARUNE形式の弾幕戦です。

メイ「…よし、ノーダメです」

さらに進みます。

―数十分後―

現在パピルス戦です。

いや、流石千早さんと千代さんとしか言えないレベルのクオリティーです。

パピルス『くらえ！青攻撃！』

ピン！

メイ「あ、重力に逆らえなくなりましたね」

レイト「でもパピルス戦だし、難易度は…え」

シャシャツ！

メイ「俺は難易度難しいを選びましたが？」

レイト「序盤でこの難易度!?（ほぼ普通のアズゴア戦だよ!?）」

まあ、そう言ってる俺もほぼダメーゼロですけどね

メイ「後3ターンで見逃せますね」

レイト「どうやって知ったんだい？」

メイ「勘です」キリッ

レイト「そ、そっか…」

むう、信じてないですね。

…まあいいです。3ターン後に分かりますし。

―3ターン後―

フツ…

メイ「ほら、言いましたよね？」

レイト「おお、ドンピシャだ」

何処の染岡さんですか。

これでパピルスは仲間になって、とっておきの場所（自宅）へ行くハズです。

―数分後―

メイ「…そろそろ切り上げますか。録音ストップつと」カチツ

レイト「お疲れ様」

メイ「それ程疲れてませんけどね。…頭撫でて下さい」

レイト「オーケー」ナデナデ

メイ「…♪」

やっぱり気持ちいいですね。

その後俺達は動画を千早さんに送り、俺は再びレイト君に頭を撫でられるのでした。平和でいいですね。

同じ技だが見た目が違う

side 桜木咲子

またまた来ました天界の火野道場。

日花「咲子とゼイル、あんた達には個人技を鍛えてもらおうわ」

2人『個人技?』

日花「ええ。例えば:天空落としをね」

咲子「えっ、でもゼイルの影と私の火が必須ですよ?」

“火”が“必”須ね(笑)

日花「でも、それは背景の話。天空とは言ってるけど、宇宙とは言っていないでしょ?」

咲子「た、たしかに:」

ゼイル「なら、咲子が夕焼けver、俺が夜verみたいなものをやればいいんですか?」

日花「そゆこと。早速やってみなさい」

咲子「分かりました:」ザッ

技の構えをし、背景を夕焼けにする(もちろん火で)

咲子「ハアツ！ 天空落とし！」 ドゴツ
シユウウウ！

日花「（威力はあまり変わってないわね）次はゼイルがやりなさい」

ゼイル「はい…」 ザツ

ゼイルは影で背景を夜に変えた。

ゼイル「天空…落とし！」 ドゴツ

ギユウウン！

日花「（こっちは3割ほど威力が下がってるわね）…最後に2人でやってみて」

2人『はい！』

ゼイル「ハツ！」

シユツ

背景が宇宙に変わる。

咲子「天空…！」 ドゴツ

星空が集まり…

咲子「落としいいいッ！」

ギユウウン…！

落下していく。

日花「(元ネタを見てみたけど、凄い再現度ね)さて、アンタ達が改善すべき所を言うわ」

2人『…………』

日花「まず、咲子。アンタの場合は威力は申し分ないけど、エネルギーを使いすぎるわ。能力や火桜も活用しなさい」

先生は的確なアドバイスをくれた。

咲子「はい！」

日花「そして、ゼイル。アンタは単純に威力が足りないわ。だから属性を活用したり影をより凝縮させたりしなさい」

ゼイル「はい！」

そしてそれぞれ特訓を始めた。

日花「私のアドバイスをすぐモノにしてるわね」

流石だわ、と日花は言う。

日花「私の炎天掌は咲子に伝授するべきね。それと…」

―数時間後―

2人『ハア、ハア…』

日花「2人とも、お疲れ様。特訓は終わりよ」

咲子「火桜も使つて燃費を良くしました、ふう…」

日花「ええ、どつちも欠点を修正してたわ。…じゃ、夕飯にするからついてきなさい」

ゼイル「はい！」

その後夕食を食べた。

特訓の後の食事はめちやくちや美味しい、これは事実ね。

学「最近俺の出番がない気が…」

出番くれ〜い

side 本松学

俺の…出番が…

学「マジでねえなおい！」

育也「確かにね…」

ロジカ「サブキャラの立ち位置だし、しようがないんじゃない？」メタい！

学「でもよ、俺さとかに隊の中で唯一の土属性だぜ？もう少し出番あつてもいいと思

うんだが？」

育也「それは、ね…」

ロジカ「単純に作者の扱い方が悪いだけじゃないの、それ？」メタい！

学「…まあいい。とりあえず出番を増やすには強くなる必要があるだろうな」

育也「どのように強く？」

学「もちろんパワーとか技だろうが」

育也「うん、だよね」

ロジカ「…あ、私用事あるから。じゃ」スタスタ

学「おう」

育也「じゃ、学からかかってきて！」

学「ああ、行くぞ！土流波！」ドシュツ！

育也「無頼…：ハンド！うおお…：グワツ！」

まるでアニメの三国先輩だなおい。

育也「最近覚えたの、ソレ？」

学「ああ、密かに特訓してたんだ！」

育也「僕も一応新技があるよ…：ハツ！」シヤツ

育也はジグザグ動きはじめた。…まさか！

育也「ジグザグスパーク！」ビリビリ！

学「だっだっだぁー！ザ・マウンテン！」ドゴオン

学（（（（（（育也

ブロツク！

育也「あちやー、ロツクウオールダムを強化してたんだね」

学「ああ、これでメイ達相手にある程度戦えるぜ！」

俺達はこの後もっと特訓した。

差を埋めてやる！

side 貝塚 絵奈

私は今メイ達と特訓中だよ

でも、咲子がいらないから、代わりにナオがいるよ

ルマ「行くよ！」

ナオ「ええ！」

3人『グランドファイア！』

シユウウウ！

メイ「ゴツドキャッチ：G2！」ガシイン！

絵奈「わお…」

止めちやってるよ。

メイ「いい攻撃でしたよ！」

ルマ「止めちやってるけどね」

絵奈「うーん…」

ナオ「どうしたの、絵奈？」

絵奈「私、単体技が少ないんだよね」

激流の渦とオーバーサイクロンだけ。

しかも両方圏外だからね。(両方威力11位以下、激流の渦改は10位)

メイ「確かに少ないですね。新技ですか…」

絵奈「ツナミブーストでもやろうと思っただけど、やっぱり威力がね…」

メイ「じゃあザ・タイフーンはどうです？」

絵奈「……あ」

忘れてたよ！

絵奈「早速やってみるよ〜！」

ザパーン

周りに水が溢れ出す。

絵奈「ハアアアツ！ザ・タイフーン！」ドゴツ

バツシャーン！

メイ「超火斬り！…ぐわっ!?」ザパーン！

うん、それじゃ止めれないよ〜。

ルマ「やったね、絵奈！」

絵奈「うん！」

—————
ロジカ「……」スタスタ

ロジカは本屋のとあるコーナーにいた。

ロジカ「愚腐腐…」

ペンギン達と特訓

side 西新翔

翔「おはよう、お前ら」

「クエエー！」

学「何か久々にコイツらを見たな」

育也「紫色だけど地毛なの？」

翔「ああ。それと、コイツらは戦闘用ペンギンだ」

学「戦闘用!?!」

翔「見せてやるよ。…撃て！」

「クエツッ！」パキッ

ドゴォ！

ペンギン達は氷の塊を弾丸のように発射した。

育也「おお…」

翔「ま、戦闘用と言ってもペットのようなヤツらだから危害を加える事はない」

学「そ、そうか…」

………!

翔「そうだ、いい事思いついたぜ」

育也「なんだい？」

翔「皇帝ペンギン3号を編み出してみようぜ！」

学「いいな、やってみようぜ！」

「クエエエー！」

―数秒後―

翔「まず、俺達が飛び上がり、空中で俺が指笛を吹きお前ら呼び出す」

「クエツ」

翔「そして俺達が集めたエネルギーの周りを少し回ってから、3人がかかと落としを
いれる。以上だ」

育也「なるほどね」

翔「じゃ、やってみるぞ」

ザツ

3人『フツ!』ドツ

翔「ピエエエエー! (指笛)」

「クエエエー!」ビュウウン

ギユイイン……!

3人『皇帝ペンギン、3ご……!?!』
ドゴオ!

翔「失敗したか」

学「何が原因だ?」

「クエエエ?」

育也「……もう一回やってみよう」

翔「おう」

ザッ

3人『フツ!』ドツ

翔「ピエエエ!」

「クエエエ!」ビユウウン

ギユイイン……!

3人『皇帝ペンギン、3号……!?!』

ドゴオ!

またか。

翔「タイミングがズレてたのか?」

学「なんでだろうな？」

育也「…あ、僕分かったよ」

2人『?』

育也「間違えてたのは、回る角度だよ」

翔「角度？」

育也「うん。飛び上がった地点で、120度ずつ間隔を開け、半周反時計回りをして蹴る」

学「なるほど、分からん」

翔「…確かにそれを忘れてたな」

学「分かるのかよ!？」

翔「分かりやすく説明するぞ？」

まず、左から 俺 学 育也 の順で並び、跳び上がる。

次に、俺が指笛を吹いた時に円の三分の一、つまり120度ほどの間隔を開け、半周ぐらい反時計回りをする。

そして、その状態で俺を中心にかかと落とす。

翔「分かったか？」

学「少し分かった気がするぞ」

翔「そうか。じゃあやってみるぞ」
ザッ

3人『フッ!』ドッ

翔「ピエエエエ!」

「クエエエエ!」

ギユルルル!

(成功の音)

3人『皇帝ペンギン3号!』ドゴツ!

ギユウウン!

学「よっしやあ!」

育也「成功したね!」

「クエエエエ♪」

その後ペンギン達に餌やりをしてから皇帝ペンギン3号の練習をするのであった。

ゼイル「へつくし!」

咲子「大丈夫?」

ゼイル「ああ…誰かが俺みたいにペンギン技を使ってる気がする…」

咲子「めちやくちゃ的確ね…」

うん、規格外

♪安見すやーコーポレートロゴ

side 桜木咲子

日花「さあ、何処からでもかかってきなさい」

今さつき私&ゼイルvs先生の模擬戦が始まった。

咲子「ゼイル、どうする？」

ゼイル「技でもぶっ放しとけ。真シャドースクリュー！」

ゴオオオオ!

咲子「オーケー。真ブレイズスクリュー！」

ゴオオオオ!

ダブルスクリューで先生を攻撃する。

日花「ふっつ…神イジゲン・ザ・ハンド！」ギョルルル!

咲子「フア!？」

ゼイル「イジゲン・ザ・ハンドだと!？」

しかも限界まで強化してる…

咲子「マジでいつ覚えたんですか？」

日花「先週」

咲子「ええ…」

やっぱり私の先生は規格外ね…まあいいわ。

咲子「烈焼脚！」ドゴオ！

ゼイル「皇帝ペンギンX！」シユウウウ！

日花「炎天掌！」ズガアン！

先生は両手で炎天掌をし、私とゼイルの攻撃を片手ずつ使って止めた。

咲子「(作戦がイマイチ思いつかないわね…一応チャージしとくわ)絶対フレームウエイ

ブ！」ドシユツ！

日花「月夜桜舞！」BLOOM！

今昼だよね？

先生の攻撃は私の攻撃を通り抜ける。

ゼイル「エアライド！」ササツ

咲子「結界流しV2！」ガオン！

結界流しV2は極イジゲン・ザ・ハンドと同じぐらいの威力なのよね。

(つまり神イジゲン・ザ・ハンドは結界流しV3ぐらい)

日花「じゃあ、コレは止めれるかしら？ ヘルフレイムV4！」
ゴオオオオオオオツ…！」

咲子「V4!?!」

魔王・ザ・ハンドG2じゃ絶対止めれないわね。

マジでチャージしててよかったわ。

咲子「クリムゾンハリケーン！」

…ドゴオオオオオオオオ!

巨大な火球と赤い台風がぶつかり合う。

ゼイル「俺も加勢するぞ！ 天空落とし・夜！」

ギユウウン!

夜空が落ちてくる。

日花「ツ、流石にコレは…！」

ジジツ…

咲子「え」

ちゅどーん…！」

大☆爆☆発が起きた。

もちろんソレで体だけではなく意識も飛んだ。

咲子「…知ってる天井ね」

日花「何テンプレな事言ってるの？」

咲子「あ、先生。…ゼイルは？」

日花「まだ寝てるわ」

咲子「そうですか…」

日花「…はあ。あんな爆発、滅多に起きないわよ？ハイレベルな戦いをしてもらえない」

咲子「じゃあなんで起きたんですか？」

日花「沸騰してる油に水を垂らしたら跳ねるでしょ？それと似たような感じよ。規模が何十倍も大きいけど」

咲子「ハ、ハア…」

じゃあヘルフレイムV4が油で、クリムゾンハリケーンと天空落としが水だったのかしら？よく分からないわ…

混合した嵐 V S それ以外？

side 室見メイ

メイ「風！」ビユウウン！

ナオ「火！」ボオオオツ！

ヤエ「土！」ゴオオオオ！

クミ「雷！」ビリイイツ！

ニヨ「水！」ザパアアツ！

それぞれの属性のエネルギーを集め、混ぜます。

絵奈「おおく」

茜「規模凄いですね…」

翔「いい具合に属性が混ざってらあ…」

…今です！

5人『ザ・テンペスト！』

ゴオオオオオオオオオオオ！

ザッ

鬼…と手合わせ

side 桜木咲子

優香「よう、咲子と…その彼氏」

咲子「こんにちは、優香さん」

ゼイル「どうも…」

日花「アンタが来たって事は…やるの？」

優香「ああ。今日は日花、お前と手合わせに来た！」

日花「ふふっ、受けて立つわ！」

―数分後―

ゼイル「確か羽合の…基山桂花だったか？彼女は基山さんの親戚か？」

咲子「ええ、桂花の叔母よ」

ゼイル「そうか…」

ザツ

優香「準備はできたぜ」

日花「私もよ。いつでもかかってきなさい！」

優香「そうか。じゃ…遠慮なくッ！」ドッ！

優香さんは踏み込み、先生に向かって突撃した。

優香「正拳ッ！」ドゴオ！

日花「フッ！」ガシッ！

ブワッ！

優香「止めちまったか」

日花「今度はこっちの番よ！炎天掌！」ズガアン！

優香「ツと！」カンッ

先生の掌底を優香さんが金棒で止めた。

(優香の武器は金棒である。鬼だね)

優香「絶土流波！せやつ！」ドゴッ！

咲子(凄い規模！)

日花「…神イジゲン・ザ・ハンド！」ギョルルル！

優香「受け流しやがった…」

私が使ってた技が

日花「私は師匠になっても強くなるわ」

優香「そうかよ、そりゃいいね！そいやっ！」ブンッ！

日花「……そこっ！」ドガッ！

優香「ガハッ!？」

ゼイル（カウンターか……）

日花「ハッ！真！昇龍拳！」ドゴオ！

優香「グッ……」シヤッ

スタッ

優香「今のは効いたよ。でも、流石に私も反撃するさ！ハアッ！」スッ

優香さんは必殺技の構えを取る。

咲子（強いのが来る……!）

優香「奥義……デーモンズ・ブレイカー！」ドゴッ

優香さんは金棒を地面に突き刺す。

ゴオオオオオオオオ!

すると地面が揺れ、岩石が飛びはじめた。

日花「奥義をこのタイミングで!？」

優香「早めに決着をつけたいからね！ハアッ！」

ゴオッ！

日花「……こうなったらしょうがないわね。私も奥義を使うわ！」ザッ

咲子（先生の奥義…一体？）

日花「奥義…五花の終・桜！」シャツ

先生は構え、手を合わせる。

ブルウウウウム！

すると先生を中心に大量の火桜が渦巻く。

日花「ハアツ！」

バシッ

花びらは優香さんの攻撃を封じる。

優香「クソツ、相性が悪いね！」

日花「…行け」

シャアアアツ！

優香「…負けたねコレ」

ドスドスドスッ！

日花「私の勝ちよ、優香」

優香「…はあくあ、また負けたよ。流石日花だ」

咲子「先生…」

日花「私達の手合わせ、どうだった？」

咲子「攻撃の規模も速さも凄かったです！」

日花「…アンタもその内そうなるわよ、知らんけど」

ゼイル「それと、奥義って…」

日花「普通の技とは次元が違うぶっ壊れ技の事よ」

咲子「は、はあ…」

いつか覚えたいわね、奥義技。

お兄さんが厨二病を再発しました…

side 室見メイ

レイト「確か、ココだっけ？」

メイ「はい、ココです」

ココというのは、お兄さんと花お義姉さんの家の事です。

メイ「ポチツとな、です」ポチツ

ピンポーン

…ガチャッ

花「ん？メイちゃんとレイト君？どうしたの？」

メイ「遊びに来ました」

花「オーケー、入って〜♪」

レイト「失礼します」

スタスタ

ーリビングー

花「適当にくつろいでって〜」

メイ「はい、スミマセンね」

ソファに座ります。

レイト「…出夢さんは何処ですか？」

花「部屋にいるよ」

メイ「呼んできます」タタッ

花（あ、今出夢君は…まあいつか）

―数秒後―

メイ「この部屋ですね」

コンコン

…しーん

メイ「お兄さん？」

寝てるのでしょうか？

ガチャッ

ドアを開けた先では…

『くらえ！』

出夢（とスピーカー）「スターバーストストリーム！」

（ソードオート・オン・オン）

……へ？（困惑）

メイ「お、お兄さん？」

出夢「……」

まさかお兄さんの厨二病が再発してたとは……

メイ「失礼しまさ」「ええちよつと!?!」

ガチャツ

……戻りましょう。

ガチャツ

出夢「戻らないで！僕に説明させて！」

メイ「別に俺の兄の厨二病が再発していても引きませんよ、安心して下さい」「安心して

きないよ!?!」……

出夢「僕の黒歴史は再発してないからね!?!」

メイ「じゃあさっきの……スターバーストなんとかはなんですか？」

出夢「……某VRデスゲームだよ」

ああ、そうでしたね。

メイ「疑ってスミマセン、お兄さん」

出夢「……所で今思ってたんだけど」

メイ「はい？」

出夢「イナイレのアニメで出てきた技を全部覚えてる上にノートに書いてる時点でメイも充分厨二だと思っただろ？」

……!!!

メイ「足し、蟹……！」ガーン

出夢「……えっと、メイ？」

メイ「お、俺も厨二病だったんですね……」

出夢「そこまでは言っていないけど……？」

メイ「確かに一人称が『俺』の時点で充分ヤバい人ですね……ハハハツ……」ブツブツ

出夢（何か独り言を始めたー!?）

メイ「フハハ、俺はもうキャラとか気にしないぜ！愛するレイト君に好かれてれば大丈夫さ！フェエエエイ！」？（☆▽☆）／ピカア

もう、何か……みなぎってきたあ〜！（迷言）

―数分後―

メイ「……………／／」カアアア

レイト「えっと、メイさん？」

メイ「忘れて下さい／／」

レイト「そんな事言われても、アレは刺激が強いよ…」
メイ「う☆」

某東方キャラのかりちゅま吸血鬼が原作で言わないセリフを言いました。

レイト「はあ…」 ナデナデ

メイ「／／／」 カアアア

とんでもない黒歴史を作ってしまった…／／／

もういくつ寝ると2年生

side 桜木咲子

2日前日花先生との特訓が終わり、今は4月だ。

咲子「…ヒマね」

ゼイル「イナイレでもやっつけ」

メイ「そうですよ。最近やってないじゃないですか」
……………。

咲子「そうね。メイ、イナギヤラで勝負よ！」

メイ「望むところです！」

―数分後―

咲子「よし、行けっ！神嵐竜巻ハリケーン！」

ギョルルルル！

メイ「属性は風なので…ムゲン・ザ・ハンドGO！
ガシイッ！

咲子「うそん」

メイ「パスして、と」

咲子「させないわよ！ワンダートラップ∞！」
ドゴツ！

メイ「え、どれだけ究極進化してるんですか？」

咲子「全員の技全部よ」

メイ「フア!？」

咲子「今までずっと負けてたからね。めちやくちや時間つき込んだわ」

メイ「そ、それでも技術で勝ってやります！」

ーさらに数分後ー

咲子「……よし」

3ー2

メイ「ま、負けました……」

これで初めてメイに通信対戦で勝ったわね。

咲子「…………あ」

メイ「どうしました？」

咲子「春休みの宿題あったっけ？」

メイ「初日で終わらせてましたよね？」

咲子「…そうだったわね。でも何か忘れてるような希ガス…」

メイ「忘れたのなら、大事な事ではないと思いますよ？」

…おいちよつと待ちなさい。

咲子「ネットミームのマネしてるの？」

メイ「そうですよん、テヘツ☆」

咲子「……？」

なんかメイが軽くキャラ崩壊してるような…

咲子「アンタなんかあったの？」

メイ「はい？」

咲子「いや、ちよつと性格が変わってるよね？」

メイ「変わってます？……あ」

『フハハ、俺はもうキャラとか気にしないぜ！愛するレイト君に好かれてれば大丈夫さ』

！フェエエエイ！』

メイ「ああ…うう／／／」カアアア

メイは突然顔を赤くした。

…ほーん、なんかあったようね。

咲子「レイト、何があったの？」

レイト「数日前、メイさんがまるで深夜テンションのような状態になって暴走したんだよ」

メイ「ちよつ、言わないで下しやい／＼／」
今囁んだわね。

咲子「へー。例えばどんな事言ってたの？」

メイ「そ、それ以上は…」

レイト「フハハ、俺はもうキヤラとか気にしないぜ！愛するレイト君に好かれてれば大丈夫さ！フエエエエ！…なんて言っただけ抱きついてきたね」

…ええ？（困惑）

咲子「今のセリフを言ったの？メイが？」

レイト「うん、メイさんが確かに言ったよ」

咲子「へえ〜」じー

メイ「も、もうムリでしゅ…穴があつたら塞ぎたいです…」
そこは入りなさいよ。

レイト「ははっ、ごめんねメイさん。ちよつと弄りたくなつちやつたんだ」

メイ「むう…」ギユツ

メイはレイトに抱きついた。

メイ「…今夜、分かりますね？」

レイト「あゝ」

メイ「ふふっ♪」

レイト「」

咲子「お疲れ様」

2年1学期 進級

side 桜木咲子

咲子「クラス替えね…」

ゼイル「同じクラスになるといいな」

メイ「レイト君、1組に入るそうです」

咲子「へえ。つまりメイは1組狙いなのか？」

メイ「ですね」

互いに入りたいクラスに入れるといいわね。

1数分後1

1組

折尾ロジカ

貝塚絵奈

桜木咲子

竹下育也

戸畑祐樹

西新翔

羽犬塚ルマ

飛羽野ゼイル

室見メイ

室見レイト

本松学

…など。

咲子「ん？」

メイ「変ですね」

ゼイル「なんで俺達が1クラスに固まってるんだ？」

しかも千代と千早以外ね。

咲子「とりあえずクラスに行きましょ」

メイ「はい…」

スタスタ

12—11

『好きな席をお選び下さい』

咲子「ココね」

ゼイル「俺は隣だな」

メイ「咲子さんの後ろですね」

ガタン

―数分後―

ガラガラッ

日花「おはよう、2―1のみんな。担任になった坂田日花よ。…まあ、3割ほど前学年も同じ担任だけど」

今年も日花先生ね。

日花「それと、転校生を紹介するわ」

「男子ですか？女子ですか？」

日花「男子よ。後、女子は諦める事をおすすめするわ。入って」

先生、一言多いですよ…

ガラガラ

レイト「室見レイトです」

サッ

クラスの半分ぐらいの視線がメイに行く。

日花「質問はあるかしら？」

「はい」

レイト「どうぞで」

「属性はなんですか？」

レイト「火です」

「はいー」

レイト「どうぞで」

「室見さんとどういう関係ですか？」

レイト「……」チラッ

メイ「……………」コクッ

レイト「同棲してます」

『な、なんだってー!?!』

そのセリフ、何処かで聞いたことあるわね。

レイト「細かい事は言いませんけど」

日花「(凄いわね。堂々と言うなんて) ……レイトはメイの隣に行きなさい」

レイト「はい」

ガタン

『……………』

反応面白いわね。

大半の顔↓（。 ㇿ。）

日花「…さて、とある説明をするわ。何故ランクと成績がトップの人達が集まってるのについてよ」

咲子「！」

この説明、気になるわ。

日花「2年から4年は、実力によつてクラスが1組から6組まで分けられるわ。つまりアンタ達は学年のランクと成績をあわせたらトップ30ぐらいに入ってるって事よ」なるほど、だからランクが低い千早と千代は1組にいなかったのね。

日花「だからカンタンに言えばコレで成績とランクが頂点か底辺かすぐに分かるって事よ」

某実力主義の教室に似たシステムね：

日花「…あ、別にずっと1組にいたとしても報酬がもらえるワケではないわよ」

…何か今ので2割ほど落ち込んだ感じがするわね。

日花「それじゃ、話はココまで。始業式に行くから並びなさい」

ガタガタツ…

咲子「……………」
何か一波乱ありそうね…

タツグマツチ！咲子&メイ v s 出夢&花①

side 桜木咲子

メイ「やつと手を組めますね…」

咲子「ええ…！」

今日は年度最初のバトルデー。

入学式の前なので1年の頃は参加できなかったけど、今年からできる！

戦闘服はいつものパーカーと短パン。

もはや私といえばコレね。ちなみにメイも同じよ。

咲子「さあ、行くわよ！」

メイ「はい！」

スタスタ

千早『さあ入場したぞツ、3代目桜、桜木咲子選手と“剣豪”、室見メイ選手だ〜！』

最近知ったんだけど、メイの異名が斬士から剣豪になったのよね。

ザツ

千代『そして反対からも重力魔、室見出夢選手と毒手、藤崎花選手です！』

「ヤーキーコー！めーい！」

「今度こそ勝て、重力魔！」

全方位から歓声が聞こえる。

出夢「いい試合にしよう」

花「まあ、勝つのは私達だけどね？」

咲子「……ふふっ」

メイ「望む所です！」

千早『両者が並んだ所で：試合、開始ッ！』

咲子「早速行くわ、メイ！」

メイ「了解です！」

ザッ

メイ「絶、陽天……！」サッ

咲子「…梅桜！」

BLOOM！

出夢「かからないよ！グラビティスラッシュ改！」ズシッ！

花「ポイズンアーム！」ドシユッ！

（毒手の強化版。手から腕になった）

流石に防がれた。

咲子「試してみよう…ハアッ！」ドッ！

出夢「来たか…フンッ！」ズシッ！

出夢先輩は重力を強くした。

咲子「ツ…絶解除火桜！」BLOOM！

すぐに解除する。

出夢「そう来ると、思ったよっ！」ドゴッ！

咲子「かはっ！」

行動を読まれてたわ…

メイ「咲子さん、そこで止まって下さい…！飛梅・燕返し！」シヤッ！

金色の飛斬撃が飛んできた。

咲子（…なるほど、そゆことね）ピタッ

出夢「それも止める！バツテンスロウ！」ポイツ

…スウッ

飛斬撃はきれいなカーブをした。

出夢「なっ!?!」

ズバッ！

出夢「ぐっ…(まさか曲線をえがくとは思わなかった…)」

花「ベノムゾーンV4!」 毒毒

咲子「結界!」ピキッ!

メイ「何故解除しないんですか?」

咲子「作戦の内よ」

メイ「そうですか…」

花「初攻撃技!炎毒!」ボオッ

火を纏った毒を飛ばしてくる。

咲子「結界流しV2!」ガオン!

シューウウ…

…魔王・ザ・ハンドG2を使ってたら手が腫れてたわね。

メイ「中々攻撃できませんね…」

咲子「…作戦変更よ。本来は出夢先輩をどうにかして毒に落とすつもりだったけど

…」

メイ「性悪な作戦ですね…」

咲子「これじゃ攻撃が面倒くさいから…コイツで毒をふつとばすわ!ハアッ…」ボッ

メイ「!!(その構えは日花先生の…!)」

咲子「炎天掌！」

ズガアン……！

火を纏った掌底が毒をふっ飛ばした。

乱戦! 咲子&メイ v s 出夢&花②

side 桜木咲子

咲子「炎天掌!」

ズガアン!

…ふう、上手くいったわね。

メイ「習得したんですね」

咲子「ええ、結構シンプルだったわ」

まあ、エネルギーのコントロールが得意だったからだけど。

出夢「動きやすくなっただろうけど、それは僕達もだ! グラビティスラッシュ改!」ズ
シッ!

咲子「天空落とし!」ギユウウン!

夕焼けが落ちてくる。

メイ「夕焼け!?!」

花「ポイズンアーム! …うわっ!」ドゴオ!

メイ「しかも威力が下がってませんね…」

咲子「1人技用に改造したのよ」

メイ「なるほど。…作戦を思いつきました」

咲子「何、言ってみて」

………。

咲子「いい考えね。やりましょ」

メイ「そう言うと思いましたよ。…作戦開始です！」

ダッ！

私とメイは左右に動く。

花「何をする気か分からないけど、させないよ！炎毒！」ポオツ！

メイ「極火斬り！」ズバツ

出夢「バツテンスロウ！」ポイツ！

咲子「ふふっ…A E R I A L B R E A K U P G 2！（空中分解G2）」パラツ…

私は文字通り粉になる。

出夢「なっ!?!」

シュツ…

咲子「ふう、慣れないわね」

メイ「風でも吹いたらお終いですね…」

咲子「それは言わないで。千手観音改！」ガシイン！
2000本の手が菩薩と共に現れる。

メイ「分身！」ポワン！

4人『登場！』

咲子「ハッ！」ゴオツ

5人を数本の手で持ち上げる。

出夢「ツ、まずい！花、すぐに防御を！」

花「う、うん！ポイズン……」

メイ「もう遅いです！風！」ビユウウン！

ナオ「火！」ボオオオオツ！

ヤエ「土！」ドゴオオオオ！

クミ「雷！」ビリイイツ！

ニヨ「水！」ザパアアン！

5人『ザ・テンペスト！』

ゴオオオオオオオオオ！

咲子「今の内に……絶フレイムウェイブ！」ドシユツ！

それと天使化。

出夢「こうなったら…悪魔化！」カッ！

花「私も…！悪魔化！」カッ

作戦通りね。

出夢「グラビティスラッシュ改…！」ズシイッ！

花「ポイズンアーム…！」ドゴツ！

メイ「…!!」

2人『ハアアアアッ！』

ドゴオオオ！

先輩達は悪魔化し、混合した嵐を止めた。

咲子「…流石に止められるとは思わなかったわね。でも…」

出夢「ハア、ハア…」

花「なんとか止めれたよ…」

咲子「油断は禁物ですよ、先輩方？」

私は天使化した状態で赤い台風を出す。

出夢「これは…!？」

咲子「クリムゾンハリケーン！」

ゴオオオオオオオオオ！

しかも天使化してるから威力は4倍である。

…先輩達も悪魔化してるけど。

花「ポイズンアーム！」ドゴオ！

シユウウウ：

毒から何らかの気体が蒸発する。

…まさか!?

咲子「絶解除火桜！」B L O O M！

花「…チツ」

決着！咲子&メイ v s 出夢&花③

side 桜木咲子

花「…チツ」

咲子「危なかったわ…」

まさかポイズンアームに毒ガスも仕込むなんて…

メイ「結果的俺達の作戦は成功ですね」

咲子「ええ…それとそろそろ本気を出しましょ」

メイ「ですね…」

6人『天使化！』カツ！

ドンッ！

咲子「結界アンヘル！」

5人『オキセイギ！』

これで私のパワーは10000万よ。

出夢「君達も変身したか…グラビティスラッシュ改！」ズシッ！

咲子「魔王・ザ・ハンドG2！」ガシイン！

しつかり止める。

花「炎毒！」ボオツ

また毒ガスを仕込んでる可能性があるわね…

咲子「結界流しV2！絶解除火桜！」ガオン！BLOOM！

シユウウウ！

咲子「…やっぱり」

メイ「毒ガス、結構厄介ですね…絶冥冥斬り！」ズバツ！

出夢「ツ！」サツ

避けられた…

メイ「…からの飛梅・燕返し！」ズバツ！

出夢「グハツ…！」

と思ったら連続攻撃だったわね。

花「炎毒…大量放射！」ドスドスドスツ！

咲子「なっ!？」

流石にコレは…

咲子「ギリギリ止めれる！千手観音改！解除付き！」ガシン！

毒を解除しながら弾幕を止める。

花「……………」ニヤリ

咲子「(つまり後ろもね) ……ハッ！」ガシッ

花「!? (バレてたの!? 後ろを見てないのに!?)」

顔でバレバレですよ。ポーカーフェイスを覚えて下さい。

咲子「…そろそろ新技を出す時が来たわね。ハアアッ！」ボオツ

火を纏って数回宙返りをする。

メイ「それは予想外でしたね…!! (そっちの方向で強化しましたか)」

映画で豪炎寺が使う技…!!

咲子「マキシマム…ファイアアアア！」ドシユウウ!

チャージをする上に結構な攻撃力を持つ。

(威力は超炎天桜舞ぐらい)

出夢「グワッ…!!」

咲子「今よ、メイ達！」

メイ「はい！」

ザッ!

5人『斬一閃!』

ズ

バ

ッ

!

出夢「グッ…」

花「動けない…」

咲子「さて、どうします?降参しますか?」

出夢「僕は、降参するよ…」

咲子「花先輩は?」

花「…フッ、私も降参よ」

『試合終了!勝者、桜木咲子と室見メイ!』

メイ「ふう…」ポワン

千早『なんとという事だ!勝負を制したのは規格外ペアだった〜!』

千代『規格外ペアでアンタ…』

千代、実況者としてのキャラが壊れてるわよ。

出夢「いい勝負だったよ」

咲子「そうですね」

ガシッ

固い握手を交わした。

咲子「むふ〜」ギユウ〜

ゼイル「……………」ナデナデ

やっぱり戦った後にゼイルに抱きつくのは癒やされるわね〜♪

ゼイル「かつこよかったぞ、咲子」

咲子「ありがとう♪」

留美のランク戦

side 赤坂留美

昨日入学式があつて、私は1-1-1になった。

それとパワー測定もあつた。結果はコレである。

パワー測定結果

赤坂留美

パワー 30万

属性 火

学年ランク 1位

留美「…なんかデジャブ？」

茜「だよね…」

確か先輩もこんな感じだったよね？

留美「ちなみに茜は何位だった？」

茜「3位だよ。お兄ちゃんとお揃い！」

出た、ブラコン。

留美 「1位かあ、狙われそうだね」

茜 「確か咲子さんも真つ先にメイさんから宣戦布告を受けたらしいよ」

留美 「ふーん…」

「1位の赤坂留美、さんだな？」

…ん？

留美 「そうだけど？」

勝 「俺は2位の小倉勝だ。君にランク戦を申し込む！」

茜 (うわあ、完全にデジャブ…)

留美 「…分かったよ。受けて立つ！」

勝 「それはありがたい。ではまた！」 スタスタ

…なんか熱血タイプの人なのかな、今の人は？

茜 「早速ランク戦だね」

留美 「うん、でも頑張る！」

―数時間後―

千早 『さあ始まりまるぞつ、新一年生初のランク戦だ！実況は2年七隈千早と…』

千代 『七隈千代がお送りします！』

えつ、あの2人実況者なんだ…

勝「この勝負、俺が勝つ！」

留美「…フツ、望む所だよ！」

茜「……………」ゴクリ

咲子「留美、頑張りなさいよ〜！」

千早『それじゃあ…ランク戦、始めッ！』

先手必勝！

留美「炎突！」ドゴツ！

勝「ストーンパンチ！」ドゴォ！

かかと落としと岩の拳がぶつかる。

留美「クツ…」

固いね。

勝「岩なだれ！フンツ！」ヒュン！

岩が数個飛んでくる。

留美「イジゲン・ザ・ハンド！」ギユルルル！

勝「何?!」

岩を全て受け流した。

先輩曰くイジゲン・ザ・ハンドはこの時期では環境トップだったらしい。

勝「なら…これはどうだ？」ボコツ

勝は地面に腕を刺し…

勝「ロックハンマー！」ドゴツ！

岩のハンマーを掘り出した。

留美「烈風陣！」ポオオオ！

逆立ちになり、火を纏って回転する。

…ガッ

留美「!？」

勝「オラア！」ドゴオ！

留美「かはっ…！」

ハンマーは腹に直撃した…がやられるほどではない。

留美「伊達に天空落としをモロに食らってないよ！」

(咲子は弟子に何やってんだ!?)

勝「平気だと!？」

私は再び火を纏う。

留美「チャージ完了…ハアアアアツ！」ボオツ！
グオオオオオ！

火のマジンが出てくる。

私はマジンの手に乗り、ジャンプし回転する。

留美「爆熱…ストーム！」ドゴオン！

勝「ロックハンマー！」ドゴッ

留美((((((勝

勝「何だこのパワーは!?!…ぐわあああ！」

ドゴオ！

勝は攻撃に当たり、近くの壁にぶつかった。

『小倉勝、脱落！勝者、赤坂留美！』

留美「…やったあ！」

誘拐

side 桜木咲子

進級してから特に何もなく、5月になった。

咲子「…茜と留美、遅いわね」

ゼイル「そろそろ来るはずだぞ」

メイ「レイト君も…連絡してみます」ピッ

プルルル…プルルル…

『ただいまかけた電話番号をお呼びしましたが、お出になりません』

メイ「圏外ですかね？」

ゼイル「…茜を電話するか」

プルル…ガチャッ

茜『お兄ちゃん…大変だよ！ハア、ハア…』

ゼイル「茜!? どうしたんだ!」

茜『留美が、何者かに、連れ去られて…今ニコルさんと一緒にいるんだけど…』

咲子「留美が!」

茜『ニコルさんが来る頃には、もう…』

メイ「ツ、まさかレイト君も…!」

充分ありえるわね…

ゼイル「茜、ニコルさんを連れてココに來い」

茜『う、うん! すぐ行くよ!』

ツ…ツ…

メイ「レイト君…ツ!」ダツ

咲子「メイ、焦るのは分かるけど今はダメよ!」ガシツ

メイ「でも、レイト君が…」

ガチャツ

ドアが開き…

茜「お兄ちゃん! 学先輩が…」

ニコル「この近くで傷だらけで倒れてたんだ!」

学「クソツ…」

咲子「学! その怪我は!?」

ゼイル「悪魔化して今すぐ回復するぞ…」カツ

学「済まねえ、メイ…レイトが黒づくめのヤツらに、さらわれちゃった…」

ー回想ー

side 本松学

レイト「それで、学君も今日基地に？」

学「ああ、どうせヒマだし、翔と育也は用事が……伏せる！」
ドスッ！

「チッ、避けやがったか」

学「誰だお前らは！」

「貴様に用はない。狙いはそいつだ」

レイト「僕?!」

バンッ！

黒ずくめのヤツが銃撃してくる。

学「ザ・マウンテン！」ボコッ！

レイト「学君……！」

学「逃げるぞレイト！」ダッ

「誰が逃げるって?」

なっ……!?

学「複数いるだ?!」

「フンッ！」

学「ツ…痛っ!」ドゴッ

防御してもこの威力だど!?

「オラッ！」ドガッ

学「ガハッ…」バタン

レイト「学君!?!…ツ、零零斬り！」ズバッ!

「ほう…」サッ

レイトは反撃しようとするがあっさり避けられた。

「眠らせておくか」

シュウウウ

レイト「なっ…これ、は…」バタン

学「レイトツ…!」

「貴様は黙つてろ」ドゴッ

学「ガッ！」

「…よし、連れてけ」

「ハッ！」

シュッ…

学「クツ、クソオオオツ！」

レイトはアイツらに誘拐されてしまったんだ…

―回想終了―

side 桜木咲子

メイ「ツ…」ギリツ

咲子「許せないわね…」

私の弟子は愚か、メイの大事な彼氏までさらうとはね…

ニコル「…その黒ずくめの人達、心当たりがあるよ」

咲子「あるんですか!?!」

ニコル「ああ…」

「…ちようど現在ノーマンが潜入調査をしてる魔界の研究所だ」

再び魔界へ

side 桜木咲子

咲子「魔界の…」

メイ「研究所…?」

ニコル「ああ、それしかありえないよ」

ゼイル「何故そこだと?」

ニコル「ノーマンの連絡によると、ヤツらは非道な人体実験をしてるらしい。能力持ちの4歳児にいろんな物質を注入したり、ね」

咲子「酷い…」

ニコル「恐らく何らかの条件を達成していた2人をさらったんだと思う…実験するために」

学「なら、今すぐ助け「ダメだ」なっ!？」

ニコル「君達も巻き込まれたら、とんでもない事になる。少なくとも先生は呼ぶべきだ」

メイ「確かに、そう、ですね…」

「呼ばれなくてももういるわよ」

全員『!?!』

倉庫の奥の方にある椅子に日花先生が座っていた。

…能力でも使ったのかしら？

日花「話は分かったわ。私も着いてく」

これは心強いわね。

日花「茜、スキマを開けなさい。魔界行きで」

茜「はい！」

パカッ…

咲子「突入！ハアア！」

シユツ…

シユツ…

―魔界―

日花「ニコル、ノーマンは？」

ニコル「そろそろ助っ人と来るはずです」

…ザッ

ノーマン「ただいま来ました」

優香「よう、日花」

助っ人は優香さんだった。

日花「アンタが助っ人ね」

優香「ああ、久々に暴れられるから楽しみだ」ポキポキ

日花「その時は頼むわ。…後、学と茜以外全員天使化・悪魔化をしなさい。相手は全員パワー数百万いってるから」

それはかなりヤバそうね…

『天使化！』カッ！

『悪魔化！』カッ！

シューウウ…

日花「さあ、行くわよ！」

バサッ

―数分後―

咲子「ココが研究所…」

日花「優香、行くわよ！」

優香「ああ！」

日花「ヘルフレイムV4！」ゴオオオオ！

優香「絶土流波！」ドシユウウ！

バガアン！

「何だ何だあ!？」

日花「行くわよ！」

咲子「はい！」ダッ

「侵入者だ！」

メイ「ゴッドノウズ改！」ギユイイン！

ゼイル「デビルバーストG2！」ギユオオオ！

「ぐわあああ！」

「撃て、撃てえー！」ダダダダダッ！

学「当たらせねえよ！ザ・マウンテン！」ドゴオ！

咲子「結界を上乘せ！」ピキッ！

キイン！

ニコル「プレート！スプーン！フォーク！」シユバツ！

ノーマン「オラオラア！」ドゴドゴッ！

「クソツ、コイツら強え！」

日花「これじゃキリがないわね…3手に分かれるわよ！」

チーム1

日花、咲子、茜

チーム2

ノーマン、ニコル、ゼイル

チーム3

優香、メイ、学

日花「私達はあっちの研究室に行くわよ！」

『研究室1』

優香「分かった！健闘を祈る！」ダッ

誘拐者の奪還、共に研究所を潰す計画は、始まったのであった。

研究所①（200話突破!）

♪煮ル果実―アランダーノ

side 桜木咲子

私、先生、茜の3人は『研究室1』に入った。

モクモク…ポワポワ…

変な機材が置かれており、ガラスケースの中には子供が入っていた。

子供「助けてよおお!」

子供「ココから出してええ!」

「フン、貴重な研究材料である貴様らを出すわけないだろう!」

日花「……ッ」ブチッ

ゴゴゴ…

2人『ヒッ…』

せ、先生がキレてる…

日花「おい、お前」

「……ムッ、侵入者か!」

日花「そこの子供達を開放しなさい」

「はいしまーす、と言うとでも…」

シュッ

…ドガッ！

「ガフッ!?!」

日花「はやくしろ!」

「な、殴ったな、この私の腹を!」

日花「お前のようなクズの腹、いくらでも殴ってやるわよ!」

「グッ、後悔させてやる…!」ポチッ

シューウウ!

茜「!?!コレは…!」

咲子「毒ガス!?!」

「クハハ、死ぬがいい…グハッ!?!」ドゴオ!

日花「毒ガス?ならばガス自体止めればいいわ。…時間停止!」

←ブウウウン…

研究員や周りの機材はモノクロになり、ガスや液体は静止する。

茜「止まった…?!」

咲子「これが時間停止…」

日花「速く助けるわよ！」

咲子「は、はい！」

タタツ

近くの檻に走る。

咲子「烈焼脚…！」 ドゴオ！

バキッ！

鉄格子を割った。

「ありがとう、お姉ちゃん！」

咲子「どういたしまして。部屋から出るわよ！」

「はいー！」

ダダダ

研究室の外に出て、ドアを閉める。

日花「再生！」

→ブウウン…

茜「みんなこの中に入って」

「う、うん！」

シュツ…

咲子「…ふう「あそこだ！侵入者だー！」…まだいるのね」

日花「次の部屋へ行くわよ！」

茜「はい！」

タタツ…

side 飛羽野ゼイル

『実験室』

ガタガタツ

ノーマン「クソツ、閉まってやがる！」

ニコル「任せて！…ナイフ！」

ズバツ！

ニコルさんが扉を切り裂いた。

「…!?!」

「侵入者だ！」

「……………」

小さい子供と数人の研究員がいた。

「くらええええ！」ドガーン！

ゼイル「エアライド！」ササッ！

光線銃は避けられるな。

ノーマン「今すぐそのガキを開放しろ！」

「誰がするか！死ねッ！」ポイツ

ニコル「ッ、フライパン：!?!」

シユウウウ

ゼイル「酸!?!」

「馬鹿め！」ポイポイツ！

ゼイル「デビルバーストG2！でりやあ！」ギユウウン！

パリイン！

攻撃をフラスコに当て、こちらに来る前に割る。

「チッ、こうなったら……」ガチッ

「……………！」

ノーマン（そう来たか）

研究員は子供……少女を開放する。

「行けっ！ヤツらを攻撃しろ！」

「こう、げき……？」

「ああそうだ、そこにいる悪いヤツらを殺すのだ！」
「……………」

「…この人達、悪い人じゃない。だからやだ」

竜美

♪煮ル果実—キルマー

side 飛羽野ゼイル

「…この人達、悪い人じゃない。だからやだ」
少女はそういった。

「何だとお!？」

ノーマン「攻撃したからないようだな」

ニコル「今の内に…プレート!」シュツ!

パリン!

「ぐう…さつさと攻撃しろ!」

「やだ」

「貴様を育てた恩人の言葉も聞かないのか!」

「恩人なんかじゃない」

「こっ…この野郎!」サツ

研究員は何らかのスイッチを出す。

…ヤバそうだな。

ゼイル「絶狐月十字斬！」ズバツ！

「ギャアアア！」

カラン、コロン。

攻撃は研究員に当たり、スイッチは床に落ちた。

ノーマン「ほい」スツ

それをノーマンさんが拾う。

「か、返せ…」

ノーマン「返すワケないだろ。こんな…電気ショックスイッチなんてな！」

グシャツ！

「き、貴様ああ！」スツ

研究員は少女に拳を振りかぶる。

ゼイル「間に合ええ！」ドツ

「わっ！」

シユツ

間に合ってよかったぜ…

「そいつを返せ！」

ゼイル「こんなに小さい子供を実験台にするお前に、返すとも思ってたのか？」

「返せと…言っておるのだああ！」 スチャツ

今度はバズーカかよ!?

てか何処から出したんだソレ!?

ノーマン「させるかよ！」 ドゴオ!

「グハッ！」

「…おろして」

ゼイル「は？何言って…」

「一旦おろして」

ゼイル「…何するんだ？」

「…ハアッ！」 カッ!

3人『!?!』

少女は…

「グルル…」

ゼイル「なっ…!?!」

青いドラゴンに変身しやがった。

「グルオオオ！」

「ひ、ひいいい！」

研究員は怖がっている。

「……………ツ！」バキイ！」

ドラゴンは隣にある機材を破壊した。

ゼイル「……………？」

シュツ

「ハア……………もういい」

ノーマン「何だったんだ、今のは……………」

ニコル「この部屋を出よう！」

ゼイル「はい！」サツ

少女を抱えて部屋を出た。

ダツ

「に、逃げるな……………」

ゼイル「黙ってろクソジジイ！」

ガチャツ

さつさとココから離れるか……………子供がいるし。

てかマジで今のは何だったんだ……………？

―数分後―

一旦研究所から出た。

「助けてくれて、ありがとう…」

ゼイル「どういたしまして。…ところで、名前は？」

「名前…？」キョトン

ニコル「もしかして…」

「私、名前がないの…」

ノーマン「マジかよ…」

「気付いたらもう部屋にいたの。お母さんお父さんの事は分からない」

ゼイル「……………」

この子、生まれてすぐさらわれたのか？

「だから、名前はないの」

ゼイル「…そうか。なら…俺が名前を付けてやる」

「ホント!？」

ゼイル「ああ、ホントだ」

そうだな…。

さっきの状態から見て、おそらくこの子の能力は『竜化』だろうな。なら…

ゼイル「お前の名前は…竜美^{たつみ}。竜に美しいと書いて、竜美だ」

ま、漢字は4歳じゃ分からないだろうが。

竜美「たつみ…私、竜美なんだね！」

ゼイル「その通りだ、竜美」ナデナデ

竜美「えへへ…ありがとう、お父さん！」ニコッ

いい笑顔だな。

……ん？

研究所③

♪煮ル果実―紗麻

side 室見メイ

研究所の廊下を進むと、大きな研究室に着きました。

「来たか、侵入者！」

学「土流波！」ドゴツ！

優香「正拳！」ドゴオ！

「フン、バリア」ピキッ！

バリン！

「なっ!？」

メイ「レイト君を返して下さい！」

「フ、フン……貴様に返す実験体はいない！」

実験体……だと？

メイ「……………るな」

「ああ？」

メイ「ふぎけるな！」ズバツ！

「ガツ!?!」

メイ「レイト君は……！」ポワン！

5人『実験体なんかじゃねえ！』

ドゴオオオ！

「グフツ……」

メイ「……ハア」ポワン

あ“あ”……イラつきますね。

優香「……あ？あそこにガキがいるぞ！」

学「あそこ？……!?!?……おいメイ！」

メイ「何です……!!」

レイト「…………」

メイ「レイト君……!!」

数メートル先にレイト君が収容されていました。

メイ「今すぐ助けますからね！」

レイト「……ん？」

メイ「どうしました？」

レイト「君、誰だい？」

……………えっ？

メイ「俺ですよ、レイト君」

レイト「僕を知ってるようだけど…何処かであつたかい？」

冗談ですよね？

メイ「…冗談はやめてくださいよ、レイト君」

レイト「いや、冗談なんかじゃないよ。君は誰だい？」

メイ「ッ……………」

記憶が、なくなってる…？

学「お、おい、レイト、俺は覚えてるか？」

レイト「…覚えてないね」

……………。

俺の彼氏の記憶を消すとは…

メイ「いい度胸してるなおい…！」

学（まただ…メイがキレてやがる…！）

優香（私でもアレは止めれないよ…）

野郎…ぶった斬ってやるッ！

メイ「レイト君の記憶を消したのは…何処だあああ！」
ズバズバツ！

「ヒイイ！」

メイ「お前か？」

「ち、違います！」

メイ「そうか…」ザクツ

刀を研究員の横に刺す。

メイ「なら、犯人を言え」

「ア、アイツです…」

「い、言うんじゃねえよ！」ダツ

メイ「ほう…」

ズバツ

犯人までの空間を斬る。

「ヒイツ!?!」

メイ「テメエ…」

「は、はい…?」

メイ「今すぐレイト君の記憶を戻せ…しないと分かるよな？」ジャキン

「わ、分かりましたああー！」

犯人は死を恐れて記憶をすぐに戻した。

―数分後―

レイト「……メイ、さん？」

メイ「レイト君……！」ダキッ

レイト「ごめんね……忘れてしまつて」

メイ「いいんですよ、思い出せたなら……」

スッ

メイ「おいお前」

「は、はいー！」

メイ「そこに突つ立つてろ」

「えっ……!!?」

メイ「次元斬り」

スパァン！

犯人をサイコロステーキ先輩のように切り裂いた。……死んでないが。

メイ「……しばらく空気に触れて全身を冷やしてろ」

「あ、が……」

学（…おい待て、俺の出番は？）

優香（なくなっちゃまったね）

レイト（うん、僕の彼女は絶対怒らせちゃダメだね）

研究所④

side 桜木咲子

レイトを助け出したメイ達と合流した。

咲子「ゼイル達、まだかしら？」

メイ「そろそろ来ると思いますけど？」

「おーいー！」

タタッ

ゼイル達が走ってきた。

……ん？

ゼイルが少女をおぶっていた。

咲子「その子は？」

ゼイル「実験体にされてた子だ。名前は竜美」

竜美「お父さん、この人は？」

……あ？

咲子「ゼイル？」ニコッ

ゼイル「ヤベっ、この黒い笑顔はヤバいぞ…」竜美が勝手にそう呼んでるだけだ。一応名付けたのは俺だしな」

…ふーん。

咲子「竜美」

竜美「？」

咲子「こっちおいで」

竜美「うん…？」ナデナデ

竜美の頭を撫でる。

咲子「可愛いわね♪」

竜美「えへへ」

日花「……………（すぐなついたわね）」

咲子「ゼイルがお父さんなら…私がお母さんよ」

竜美「うん…お母さん！」

咲子「よしよし、良い子ね」ナデナデ

レイト「めちやくちや乗り気だね」

メイ「…俺もあんな子ほしいです」

なんかメイが不穏な発言してるけど無視ね。

日花「…コホン。そろそろ行くわよ」

咲子「はい！」

ゼイル（竜美がまっさきに「お父さん」って言ったら、俺殺されかけただろうな…）
タタツ

―奥の部屋―

ガチャツ

「来たか、侵入者ども」

日花「アンタは誰？」

「この研究所の所長だ。この私の最高傑作を見せてあげよう」ポチツ

…ゴオツ！

頭上からとてつもない量のエネルギーを感じる。

「来い」

スタツ…

咲子「留美…？」

留美「……………」

留美…が悪魔化していた。

目は赤く、コウモリのような翼が生えていた。

まるで吸血鬼ね。牙はないようだけど。

日花「操られてるようね」

優香「…いや、少し違うな。アイツ、暴走してるぞ」

「さて、精々生き残るんだな！さらば「逃しませんよう？」…なっ!」ズバツ

メイ「クズは逃さない主義なんだよ」

メイ…少し口調が変わってるわね。

留美「…：紅の悪魔、コウマ」

名前そのまんまね。

咲子「留美、落ち着きなさい。…真ブレイズスクリュー!」ゴオオオツ!

留美「…ゴッドハンドX」ガシィツ!

咲子「なっ…」

そうとう強化されてるようね…

留美「爆熱ストーム」ゴオオオツ!

威力がクリムゾンハリケーンレベルですって!?

咲子「千手観音改!」ガシィン!

…バキッ!

咲子「かはっ…」

強すぎるわ…

ノーマン「くらえ！」ヒュン！

ニコル「ナイフアレー！」シュバツ！

留美「烈風陣」ビュウウン！

ノーマンさんとニコルさんの弾幕もカンタンに止められてしまった。

2人『くっ…』

ゼイル「天空落とし！」ギユウウン！

メイ「ゴツドノウズ改！」ゴオオオオ！

留美「………！」ギユイイン！

留美の後ろに2体のマジンが現れる。

留美「風神雷神」ドゴオ！

シュウウツ

ゼイル「止められただと…」

メイ「厄介ですね…どうすりゃいいんだよ…」

研究所⑤

side 桜木咲子

日花「暴走してるとはいえ、かなり強くなってるわね。パワーは数千万にもなってるよ」

咲子「私でも1000万なのに…」

留美「爆熱ストーム」ゴオオオオ!

威力増々の爆熱ストームは優香さんに向かって飛んでいく。

優香「絶土流波!」ドゴツ!

シユウウウ…

メイ「一撃で止めた…?」

優香「調子に乗るのもいい加減にしろよ?」

日花「…そうね、そろそろ頃合いかしら?」

ザツ

優香「日花、やるのか?」

日花「ええ。咲子達じゃ手に負えないようだし」

優香「そうか…行くぞ！」ドツ

留美「炎と「オラア！」ガアッ!?」ドゴオ！」

日花「月夜桜舞！」B L O O O M！」

留美「グッ…」フラッ

ニコル「凄いスピードだ…」

ノーマン「流石だな」

優香「ほらほら、どうした？絶土流波！」ドゴオ！」

日花「ヘルフレイムV4！」ゴオオオオ！」

先生達は左右から攻撃する。

留美「風神雷神」ガシイッ！」

…ギユイイン！」

留美「ガフッ…!？」

威力半端ないわね。

日花「こちとらパワーは7.2億なのよ！」

優香「私は6億だな」

メイ「な、7.2億…」

レイト「規格外だね…」

留美「グッ…ガアアアア！」

ギユオオオ…！

留美は赤いオーラを纏う。

日花「そうとう暴走してるわね…！」

優香「とつととケリをつけ…ん？」

竜美「……」

ゼイル「竜美!?何してんだ！」

竜美「いい加減に目を覚ましてよ！」

留美「ガアアアア！」ドツ

留美は竜美に向かって飛んでいく。

咲子「竜美、危ない！」

竜美「……ハアツ！」シユツ

留美「グハツ!？」

ドゴオオオ!

留美「ガッ…」バタン

ちーん♪

咲子「……は？」

今、起きた事を説明するわよ？

暴走した留美は竜美に向かって飛んでいたわ。そして竜美に攻撃しようとした瞬間、竜美がパンチで……たったの一撃で留美を倒したのよ。

学「おいおいマジかよ!？」

ほぼ全員『……………』(。 ㇿ。)

優香「ハハッ、凄えなアイツ！」

日花「なるほどね……」

咲子「た、竜美……」

竜美「なあに、お母さん？」

咲子「今の、何？」

竜美「うーん……まだ暴走してたから、本気で殴ったの！」

本気、ね……

留美を殴った箇所の床にクレーターができてるんだけど。

ゼイル「……とんでもない子を拾ってしまったな」

咲子「そ、そうね……」

メイ「……………咲子さん」

咲子「何、メイ？」

メイ「……頑張れ」グツ

咲子「……………」ポカーン

もう……何かなんだか分からないわよ〜！

あはは〜竜美強いわね〜♪（白目）

レイト「こうして、誘拐事件は幕を閉じたとき」

ゼイル「勝手に幕を閉じるな！」

わーわー

ノーマン「……面白いなアイツら」

ニコル「だね。いい後輩達だよ」

ピンポーン

…ガチャツ

咲子「ただいま〜」

春菜「おかえりなさい…え」

竜美「こんにちは！」

春菜「……アンタ何年前に子供できたの？」

咲子「ちょ、ちょっと説明させて！」

竜美↓桜木竜美

最強規格外娘竜美

side 桜木咲子

竜美は桜木家が引き取り、幼稚園に通うことになった。
そして数週間が経つ。

留美「爆熱ストームG2！」ゴオオオオ！

茜「真空魔！」ズバツ！

ギユウウン！

茜「エアバレット！」ビユウウン！

留美「烈風陣改！」グルグル！

竜美「……………」

茜「風斬改！」ズバツ！

留美「ゴッドハンドX！」ガシツ！

竜美「…お母さん」

咲子「何、竜美？」

竜美「私も戦いたい！」

咲子「うん、絶対ダメ」

竜美「なんで?!」

咲子「まだまともに力を制御できてないでしょ?」

竜美「ぶうく…」

咲子「とにかく、ダメなのはダメ」

タタツ

ゼイル「遅れてすまん」

咲子「別に大丈夫よ」

竜美「お父さん」

ゼイル「どうした?」

竜美「私も戦いたいの」

さつきと同じ質問ね。

ゼイル「…どうする、咲子?」

咲子「ダメよ。下手したら大怪我するわよ、相手が」

ゼイル「そうか…じゃあ竜美、俺の手をパンチしてみろ」

竜美「いいの!?!」

ゼイル「ああ、やってみろ」

竜美「うん！…ハアツ！」 シュツ
ドゴオオオ！

ゼイル「うおっ!？」

ヒユウ…ドゴーン！

咲子「…:…:」(。 ㇿ)

茜「うん、知ってた」

留美「私、アレをくらったんだ…」

ゼイル「ぐおお、痛え…」

竜美「大丈夫、お父さん？」

ゼイル「だ、大丈夫だ」 ヒリヒリ

…あからさまに強がってるわね。

咲子「…ハア」

こめかみに手を当てる。

咲子「竜美のデタラメな強さ、どうにかできないのかしら？」

先生は大丈夫って言ってたけど…

竜美「お母さん、どうしたの？」

咲子「…何でもないわよ」

竜美「あ、そういえば私、技を覚えたんだ！」

咲子「技？」

竜美「うん！見てて……」

ギユイイン！

その構えは……！

竜美「ドラゴン……クラッシュ！」ガアアアア！

ヒュウウン！

日花「……ん？」

咲子「先生!？」

日花「神イジゲン・ザ・ハンド」ギユルルル！

あ、危なかったわ……

日花「今のは誰がやったの？」

竜美「私だよ！」

日花「あら、竜美が技を？」

竜美「うん！」

日花「………咲子」

咲子「はい？」

日花「アンタの娘でしょ、褒めてあげなさい」
あ、そうだった。

咲子「凄いわね、竜美」ナデナデ

竜美「えへへ」

日花「よし」グッ

咲子「所で、先生は何しに？」

日花「散歩」

…うん、先生らしいわね。

日花「それで、竜美はどう？上手くいつてるかしら？」

咲子「まあ、はい」

パワーがヤバいから常に注意してるけど。

日花「それはよかった。じゃ、またね」スタスタ…

先生は散歩に戻った。

竜美「お母さん」

咲子「何？」

竜美「目玉焼き食べたらい！」

咲子「分かったわ、後で作ってあげる」

竜美「わーい！」

ゼイル（∴俺ら属性だけじゃなくて状態も風なのか？）

茜（多分風じゃなくて空気だよ？）

留美（竜美ちゃん可愛い∴）

過去の話をしよう

side 桜木咲子

咲子「先生」

日花「何？」

咲子「先生って、生徒だった時どんな感じでしたか？」

日花「そうね……1年の頃から話そうかしら？」

――――
当時、私は春菜、蓮也、風太、平尾の4人と仲がよく、私は1位、風太が2位、春菜が3位、蓮也が5位、平尾は8位だった。

日花「炎天桜舞！」 B L O O M !

「グオッ!？」

『勝者、入箱日花!』

日花「よし!」

―数分後―

日花「先生、今日もお願いします!」

有美「ええ」

先生は初代桜、火野有美だった。まあ、今でもそうだけど。

日花「先生、私最近新技を作ったんですよ！」

有美「へえ。見せてみなさい」

日花「はい！ハアツ…」ポツ

手に火をつけ…

日花「炎天掌！」ズガアン！

掌底を放った。

これが私の十八番、炎天掌の誕生よ。

有美「中々いい技ね。パクろうかしら？」

日花「えく…」

有美「ふふつ、冗談よ（まあ、いいならホントにするつもりだったけど）」

ー次の日ー

風太「日花、今度こそは勝ってやる！」

日花「望む所よ！」

『リンク戦、始めっ！』

風太「大嵐！」ビュウウン！

日花「ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

風太「でけえなおい…火斬り！」スパアン

巨大な火球は真つ二つに斬られた。

日花「斬られたわね…なら、コレはどう？」ボツ

風太「また同じ攻撃か？」

日花「ヘルフレイム…V2！」

ゴオオオオオオオオオ！

今度は一回り大きくなっている。

風太「嘘だろ…!?!」

ドゴオオオオ！

『勝者、入箱日花』

コレが、後々使われる「技の強化」ね。

使えば使うほど強くなる便利システムよ。

便利すぎてイナイレに採用されるほど。

(この世界ではそういう設定)

日花「こんな感じかしら」

咲子「ほえく……」

技の強化を作ったの、先生だったのね……偉大。

咲子「流石先生ですね」

日花「褒めてるの、ソレ？」

咲子「褒めてますよ」

日花「そう……ありがと。じゃ、私は帰るわね」

咲子「はい、さよなら」

スタスタ

……。

咲子「後で母さんにもきいてみようかな？」

side 坂田日花

今日咲子に高専時代の話をしたけど、懐かしいわね……

風太「ん？日花じゃないか」

日花「あら、風太。今帰り？」

風太「そうだが……お前は？」

日花「弟子に過去の話して、今帰りよ」

風太「過去か……いつ頃のだ？」

日花「高専1年」

風太「うわ、懐かしいなおい……」

やっぱり風太もそう思うのね……26年前の事だし、仕方ないのかしら？

…あ
“？

side 桜木咲子

今は昼休み、私は弁当を食べていた。

咲子「…遅いわね」

メイ「確かに」

ゼイル、一分前にトイレ行ったハズよね？

咲子「ちよつと見てくるわ」

スタスタ

廊下に出て、周りを見てみる…あ、いたわ。

ゼイル「ん？どうした咲子」

咲子「何してたのよ」

ゼイル「ああ、後輩の荷物運びを手伝ってた」

咲子「…そう」

ん？

「……………
／／／カアアア

絶対あの子ね。

咲子「荷物運びで顔って赤くなるのかしら？」

ゼイル「さあ？」

…なるほど、天然スケコマシね。

咲子「戻りましよ」

ゼイル「おう」

「うわあ〜！売り切れちゃう〜！」

咲子「え」

ドゴオ！

ゼイル「うおっ!」ドサツ

ゼイルが走ってきた子とにぶつかり、倒れ…ん？

咲子「…ルマ？」

ルマ「あれ、咲子？」

ゼイルに覆いかぶさったのはルマだった。

ゼイル「…っ、痛いなおい…」グッ

むにゆ

ルマ「ひゃんっ!？」

咲子「……………あ？」

ゼイルの手は…ルマの（そこそこ大きい）胸におさまっていた。

ゼイル「わ、悪い！」パッ

ルマ「う、うん…」

コレが稀に見るラツキースケベね…

咲子「…ゼイル？」ニコッ

ゼイル「さ、咲子、どうした？（目が笑ってねえ…）」

咲子「ルマの胸、どうだった？」

ゼイル「柔らかかった…あ」

ルマ「バ、バカアアア！」シャキン

ゼイル「お、おい鎌はシャレになら…」

ギヤアアアアアア！

咲子「…後で搾り取るわ」

その後、ゼイルは駆けつけてきた祐樹にもお仕置きされるのであった。

ゼイル（不可抗力なんだよ…）

―放課後―

咲子「…なんて事があったのよ」

茜「なるほど…流石お兄ちゃん、天然スケコマシな上にラッキースケベもするとは…」
フムフム

ゼイル「何でだよ…」

咲子「……………」

竜美「お父さん、モテモテなの？」

何故竜美がその言葉を!?

咲子「…そ、そうなのよ。困るわね」

こう言うしかないわね…

竜美「お父さん!」

ゼイル「何だ竜美?」

竜美「らつきーすけべって何?」

ゼイル「ブフォツ!」

ああ、茜が言ってたわね…

ゼイル「た、竜美にはまだ早いな…」

竜美「え、何で?」

ゼイル「秘密だ」

竜美「むう」

そんな顔しても教えないわよ、多分。

「咲子さくらん！」

咲子「ん？…メイ、その荷物は？」

メイ「基地に設置する電器ですよ。今日届いたので」

ゼイル「手伝うぞ？」

………嫌な予感がするわ。

咲子「いや、私が手伝うわ」

メイ「えっと、じゃあ咲子さん、お願いします」

(メイが手伝ってほしいのは重いからではなく、箱で視界が塞がるからである)

咲子「ええ」

そして“箱”を“運”ぶのであった。

実は配信者だった

side 桜木咲子

ストンツ

咲子「ココでオーケー？」

メイ「はい、後は箱を開けるだけですわね」

咲子「…ところで、レイトは何処なの？」

メイ「特訓中です。ニヨがいるので大丈夫ですよなるほどね。」

咲子「この箱、何処から開けるの？」

メイ「下からです」

あ、ココね…

ゴソゴソ

咲子「よいショット」

メイ「……？（しよつとの発音が違ったような……）」
箱の中にあつたのは……パソコンだった。

咲子「…Windows？」

メイ「はい、基地用として買いました」

咲子「何のために？」

メイ「画面が大きいのでNetOlixでアニメ見る時にみんなで見れます」

咲子「フムフム…」

確かにいい考えね。

咲子「じゃあこの箱は？」

メイ「ハードウェアですよ」

咲子「へえ…」ゴソゴソ

『IOTB』

凄い容量ね。

メイ「コレでゲーム実況動画を保存できますね…」

咲子「…ええ？」

今なんて？

メイ「…あ」

咲子「アンタゲーム実況してるの？」

メイ「はい、主にT w i c hで」

ああ、あの生配信サイトね…

咲子「フア!？」

メイ「な、なんですか？」

咲子「いつからやってるの？何時から配信!？」

メイ「夜10時から12時です…2日に1回ぐらいの頻度でやっています」

咲子「…チャンネル名は？」

メイ「そのまま『メイの実況』ですよ」

咲子「レイトは知ってるの？」

メイ「はい、もちろん」

咲子「ちよつと見てみるわね…」

…あつたわ。

『どうも、メイの実況です。今回は…』

至って普通ね。マイクラのハイピクセルで実況してるようね。

『よつしやあああ!』

素が出てるわよ。

咲子「全体的にいいんじゃない？」

メイ「ありがとうございます」

…いい事思いついたわ（・▽・）

ーその夜ー

今日は…いるわね。

『宝石はコレぐらいですかね？』

配信では丁度採掘中だった。

咲子「早速スパチャで1500円…」カチッ

ピロピロン♪

『あ、ブルームさんスパチャありがとうございます…ブルームさん!』

驚いてるわね（笑）

じゃ、次はデイスコード入って…

プルルル…

『チャット通知ですね…え』

咲子「ども♪」

メイ『スパチャ感謝です』

咲子「ん、ダンジョンでM6周回やらない？」

メイ『あー、20分待って下さい』

咲子「おけ」

配信チャットを見る。

『メイちゃん驚いてて草』

『リア友か？』

『仲良さそう』

悪口はないようね、良かったわ。

その後、ダンジョン周回でポケとツツコミをうまく成り立たせ、視聴者を爆笑させた私達であった。

メイ「観てくれてありがとうございます、それではまた次回で♪」カチツ
メイはそこで配信をやめた。

レイト「咲子さんが来るのは予想外だったね」

メイ「そうですね：でも、楽しかったです。またやりたいですね」

逃げるぞゴラァ!

side 桜木咲子

私は本屋でジョジョの漫画を探していた。

咲子「……ん？」

ロジカ「……………」スタスタ

ロジカが無言で私の後ろを通り過ぎる。

……ちよつと待って?

咲子(ロジカの様子がおかしいわね……つけよ)スタスタ

ロジカについていくと、着いたのは……BLコーナーだった。

咲子「……………」(。D。)

ロジカは薄い本を一冊手に取ると……

ロジカ「愚腐腐……」キラーン

口を三日月にして変な笑い方をした。

咲子「……………」

コレは……

咲子「激写ね」パシャパシャ

私もゼイルとイチヤイチャしてる所を勝手に撮られるし、いいよね？（黒い笑み）

ロジカ「…えっ、咲子？」

咲子「チツ、バレたわね」

ロジカ「何でスマホをこっちに向けてるの？」

咲子「……………」グッ

ロジカ「…今すぐ消しなさい」

咲子「い・や・よ♪」

♪Rolling Sky—Mechanical Power

3、2、1。

咲子「にくげるくのよ〜！あばよ、かっつあ〜ん！」ダダダダダ

ロジカ「ま、待ちなさい！」タタッ

本屋を出て歩道を走り抜ける。

咲子「絶対に捕まらないわよ〜！」

ロジカ「アクアニードル！」シャッ！

あ、攻撃してきたわね。

咲子「背中に結界〜♪」ピキッ

キーン!

ロジカ「ツ、卑怯よ!」

咲子「卑怯で結構。別に傷つかないし」

ロジカ「キーツ!」ダダダー

あ、スピード上がったわね。

…なら私も。

咲子「わっ、いっ!」ダダダダダー

さらにスピードを上げる。

ロジカ「速っ!」

咲子「さいなくらら♪」

そして逃げ切った。

…写真を消して、と。

―基地―

咲子「ふう…」

ガチャツ

咲子「…え」

ロジカ「さあ、写真を消してもらおうわよ!」

待ち伏せしてたのね。

咲子「……RUN！」ダダダ

ロジカ「また!?!」

ちよつとジョギングよ〜ん。

ロジカ「いい加減に、待ちなさい！」タタツ

咲子「私待てと言われて待つバカじゃないわ！」

ロジカ「ハイドロポンプ！」バツシャーン！

ポ○モン!?

咲子「結界流しV2！」ガオン！

Cの形をした結界を張る。

ロジカ「きやあつ!?!」バシヤツ

水は結界で流れ、ロジカに全部かかった。

ロジカ「………」ビチャツ

咲子「wwwwwwww」

濡れてて草。

ロジカ「……もう許さないわ！ハアアアア！」ダダダダダ

咲子「フア!?!」

爆速になつてゐるわよ!?

咲子「こうなつたら…エネルギーまきびし!」コロツ
…グサツ

ロジカ「いつ…何コレ!？」

咲子「にげろ〜!」

曲がり角を曲がる。

メイ「…あ、咲子さん」

ロジカ「室見さん、アイツを捕まえなさい!」

メイ「?はい」ガシツ

咲子「ちよつと!？」

ロジカ「ハア、ハア…さあ、消してもらい…あれ?」

咲子「既に消してゐるわよん♪」

ロジカ「そ、そんなあ〜」バタン

ロジカは疲れ切つたのか、その場に崩れ落ちた。

咲子「いや〜、いいジョギングになつたわよ」

ロジカ「……………」(ハ、#)

その後再び追っかけ回された私である。

…今度はメイ達含めて。

よし、出番だ

side 戸畑祐樹

祐樹 「…なあ絵奈、育也」

絵奈 「なに〜？」

育也 「どうしたんだい？」

祐樹 「俺らの出番がない定期だな」メタい！

絵奈 「そだね〜」

育也 「一応僕達はサブキャラだからね」メタいッ！

祐樹 「…という事で新技覚えるぞ」

2人 『いやいやどういう事で？』

祐樹 「気にするな。…絵奈、お前最近オーバーサイクロンとか絵が関係する技を使つてないよな？」

絵奈 「うん」

祐樹 「じゃあ、絵を使う技を覚えてみる」

絵奈 「絵を使う技ねえ〜…一応見当はついてるんだよね〜」

育也「それって？」

絵奈「大国謳歌だよ」

(イナイレGO2のキーパー技)

大国謳歌か…確かに絵だな。

祐樹「じゃあ一回やってみろ」

絵奈「分かったよ」

育也「弾幕は任せて…サンダーラッシュV3！」バチッ！

絵奈「……………」スッ

絵奈は筆を構える。

絵奈「行くよっ！」サッ

背景が黒い墨で描かれた山地になる。

そして山に山頂から絵奈が飛び込む。

絵奈「大国謳歌！ハアッ！」ガシッ

墨で描かれたゴッドハンドが現れ、弾幕を止めようとする。

絵奈「…うわっ!？」

しかし絵奈の姿勢が崩れ、止めきれなかった。

育也「……………」

祐樹「失敗したか」

絵奈「何かが足りないのかな？」

それなら…何が足りないんだ？

育也「…あ」

祐樹「どうした？」

育也「足りなかったのは、ズバリ『絵の量』じゃない？」

絵の量？

絵奈「よく分からないね」

祐樹「…絵奈、今度は絵の量を増やしてやってみろ」

絵奈「分かった」

絵奈は再び筆を構える。

育也「行くよ…サンダーラッシュV3！」バチッ！

絵奈「…ハアッ！」コオオオ

…おっ？

絵奈「大国謳歌！」バアン！

音が変わったな…

…ガシッ

絵奈「上手くいったよ〜！」

育也「やっぱりね」

祐樹「育也、どういう事なんだ？」

育也「技を出す時の絵：つまり土台が足りなかったんだ。土台が足りないから、エネルギーは足りてもそれを存分に使えない」

祐樹「なるほどな…」

絵奈「土台である絵を増やしたから上手く行っただね〜」

育也「うん。…ところで、僕ちよつと新技を作ってみたんだ」

祐樹「いつの間に？」

育也「数日前からだよ。ジグザグスパークの強化版だ」

絵奈「へ〜。やってみて〜」

育也「分かった。ちよつと距離を取って」

スタスタ

祐樹「…ココか？」

育也「うん、そこで…」バチッ

育也は四肢に電気を纏う。

育也「行くよ…フィールドスパーク！」ビリイツ！

祐樹「うおっ!？」

一定の範囲を育也が放電した。

育也「ふう…：どうかかな？」

祐樹「範囲攻撃か…：いいと思うぞ」

その後俺達はもうしばらく特訓した。

力を見せよう

side 桜木咲子

日花「咲子」

咲子「なんですか？」

日花「これからアンタには1年の1位から10位を相手してもらおうわ」

ああ…

咲子「去年は出夢先輩でしたね…」

日花「ええ。…本気の出しすぎはダメよ？」

咲子「もちろんですよ」

———
留美「なんでランク上位が？」

勝「何かがあるのだろう」

ガラガラ…

日花「みんな、もう集まってるわね」

咲子「……………」

留美「先輩!？」

茜「咲子さん!？」

ふふっ、驚いてるわね♪

「さ、3代目桜……!」

「なんで!？」

日花「さて……これからアンタ達には咲子を相手してもらおうわ」

『!？』

咲子「……………」

日花「ま、安心しなさい。咲子はちゃんと手加減するから。しないと速攻で終わるし」
勝（それほど強いのか……）

日花「さて、みんな準備しなさい」

『は、はい!』

―数分後―

『試合、始めッ!』

咲子「……かかってきなさい」

「言われなくても……アクアニードル!」バシユッ!

へえ…ロジカのアクアニードルの方が断然強いわね。

(当たり前だろ！)

咲子「結界流しV2」ガオン！

ギユルルルル！

「!？」

「コレならどうだ！ファイアボム！」ポイツ！

疑似チャカメカファイアーね。

咲子「千手観音改！」ガシイン！

「なっ!？」

ドガン！

咲子「ふう…」

茜(やっぱり咲子さんは強い…)

咲子「天空…落とし！」ギユウウン！

「ストーンパンチ…ぐおっ！」ドゴオ！

威力が下がったようね。

留美「…なら！」キイン！

え、まさか。

留美「ゴッドハンド、エエエックス！」ガシッ！

シユウウウ…

あ、あのシーンを再現しやがったわね…

(あのシーンとは、イナイレで天空落としを発動し、土系の技で威力を下げた後ゴッドハンドXで止めたシーンである)

茜「エアーバレット！」ビユウウン！

咲子「…魔王！」ギユウウン！

グオオオオオ！

咲子「…ザ・ハンドG2！」ガシイン！

茜「あちやあ…」

「今度は私が！雷天落桃！」BLOOM！

…!?

咲子「…くっ」ドスツ

少しくらったわね…

留美「やったね、桃！」

桃「うん！」

咲子「まさか桃属性がいたとは…」

しかも名前がそのままで草。

咲子「…まあいいわ。そろそろ終わらせましょう」ポツ
ギューイン…！

「あ、あの技はまさか去年度5校衝突の…！」

「に、逃げるぞー！」

ふふっ、逃げれるかしら？

咲子「クリムゾン…ハリケーン！」

ゴオオオオオオオオ！

『ぐわあああああ！』

その後、「強くしすぎ」と先生に怒られたのは別の話。

とある配信中の出来事

side 三人称

メイの実況の配信が始まる。

ゲームは：ハイピクセルスカイブロックのようだ。

メイ『どうも、メイです。今回はこの方とプレイして行きます』

咲子『ども、ブルームです』

チャットを見てみると、

「マジか、トッププレイヤーじゃん！」

「知り合いなのか？」

と書かれている。

メイ『ブルームさん、まずは何処から行きますか？』

咲子『そうね：ワーマニングアップとして、M3かしら？そこからどんどん難易度を上

げていくわ』

メイ『了解です、行きましょう！』

こうしてダンジョン周回は始まった。

ドゴオ！ズバツ！

「効率凄いな」

「超速くて草」

咲子『メイ、そつちのシークレットをお願い』

メイ『こつちですね…取りました』

咲子『じゃ、ボスルームに入るわよ』

シユッ

―数分後―

咲子『…おつ、シャドーアサシンチエストプレート！』

メイ『レアドロップですね！』

「いくらで売れるん？」

「2400万ぐらいだ」

咲子『よし、そこそこ稼げたわね』

メイ『次はM6ですね』

咲子『ターミネーターは持つてる？』

メイ『持つてますけど、完全に強化しきつてません』

咲子『そう…ま、少しは戦えるでしょ。行こっ』

シユッ

ー数秒後ー

ヒユンヒユン!

『2. 5m』(250万ダメージ)

「強っ!?!」

「ぶっ壊れとるやん」

ターミネーターは敵を文字取り蹴散らしていた。

流石10億コインする武器である。

咲子『強すぎるわよね、コレ』

メイ『そうですね…少しナーフしてほしいです』

ーボス部屋ー

キインキインキインキインキインキイン…(全部ヒット音)

メイ『フェエエエエイ!』

「暴走してて草」

「キャラ崩壊しとるwww」

ボスのHP:3秒で0になった

咲子『ええ…?』

メイ『どうしました？』

咲子『えつと…アンタさつき本性出てたわよ？』

メイ『あ…でも一応どっちも本性ですよ』

咲子『そ、そう…』

そしてメイはさらに暴走した。

メイ『ゴリ押しだゴラアアア！』

ドゴドゴドゴッ！

「吹っ切れとるwww」

12時間後

メイ『ご視聴ありがとうございます、それではさようなら！』

咲子『また会いましょ！』

こうして配信は終了した。

side 桜木咲子

咲子「ふう…」

ガチャッ

竜美「お母さん、終わった？」

咲子「ええ、終わったわ」

竜美「じゃあ、一緒に寝よう？」

親子で寝る…

咲子「分かったわ、行きましょ」

竜美「うん！」ニコツ

―寝室―

咲子「それじゃ、おやすみ」

竜美「おやすみ〜」

カチツ

部屋の電気を消す。

…ギユツ

竜美が抱きついていた。

咲子「あらあら…」

竜美「……………」スヤスヤ

もう寝てるわね。

咲子「ふふっ…」

私もすぐに目を閉じて寝るのであった。

お久しぶり

side 桜木咲子

……？

咲子「また夢の中ね、ココ」

「その通り」

前には黒髪ショートで赤パーカーと青スカートの女性がいた。

咲子「……ア「今は違うわ」……え？」

まさか……

咲子「火桜神……？」

火桜神「そ。私は神化したのよ」

マジか……あ。

火桜神「マジよ。私の能力忘れたの？」

咲子「時空を操る能力、心を読む能力、攻撃を確実に当てる能力、世界をハッキングする能力……などですよね？」

火桜神「その通り。よく知ってるわね」

咲子「その辺には詳しいので」

火桜神「なるほど…それで、私がココに来た理由、分かるかしら？」

この人が別世界で行動しているなら、理由は1つね。

咲子「弟子探しですか？」

火桜神「正解…と言いたいところだけど、少し違うわね」

ええ…？（困惑）

火桜神「実は、アンタにとある事をして欲しいのよ」

咲子「とある事？」

ろくな事ではなさそうね。

火桜神「安心しなさい、悪い事じゃないわ。アンタにして欲しい事は…」

咲子「して欲しい事は？」

火桜神「ミキシマ〇クス、ズバリ憑依よ」

咲子「憑依？」

確かに作品内でミキシしてたわね…

咲子「でも誰とですか？」

火桜神「最終的に私とよ」

…え!?

咲子「貴女とですか!？」

火桜神「ええ。…でも、それはあくまでも最終目標。まずは…そうね、竜美を憑依してみなさい」

咲子「竜美ですか…どうやって憑依するんですか？」

火桜神「コレよ…ほれ」ポイツ

咲子「つと」ガシッ

コレは…

咲子「ミキシマ〇クスガン!？」

本物!？」

火桜神「アンタにそれを貸してる限り、アンタは憑依したりさせたりする能力を持つはずよ」

咲子「ど、どうやってですか？」

火桜神「まず、片腕の指を相手に向け、発射するわ。次にもう片腕の指を自分に向けて発射。…それで憑依できるわ」

咲子「へえ…早速明日やってみます」

火桜神「それがいいわ。じゃあね」

咲子「はい、さよなら」

咲子「ゼイル、見せたいものがあるわ」

ゼイル「なんだ？」

咲子「…竜美、そこでじつとしてなさい」

竜美「うん？」

咲子「……ミキシ…マックス！」ギユン！

ドツ！

竜美「うわっ!？」

咲子「私に…ッ！」ドツ

ギユイイン…

私と竜美をエネルギーが包む。

ゼイル「お、おい、何だそれ!？」

ゼイルは焦ってる。…安心しなさい、なんともないわよ。

2人『うっ…うおおおお！』

シューウウ…

咲子「……ふう」

竜美「わあ…！」

ゼイル「!?」

私の髪色は赤っぽくなり、竜の角が生えていた。

竜化した咲子

side 桜木咲子

ゼイル「その姿は!?!」

咲子「竜美を憑依したのよ」

竜美「私みたいな角が生えてる!」

咲子「力がみなぎるわね…!」

ちよつと試してみようかしら?

咲子「…ハアッ!」

ドゴオ!

ゼイル「!!」

私の後ろに青いドラゴンが現れる。

咲子「ドラゴン…スレイヤー!」ゴオオオオ!

ドラゴンが光線を放つと同時に私も波動を放った。

ゼイル「うおっ!?!」

竜美「ん…ハアッ!」ガッ

シユウウウ…

咲子「え…」

パワーアツプしてる状態の波動を竜美に止められた。

咲子「竜美、アンタ強すぎでしょ…」

ま、そんな彼女の力を纏ってるんだから結構強くなってるんだらうけど。

「え…咲子さん?」

咲子「ん?…メイ」

メイ「なんですかその姿!?!」

驚いてるわね。

咲子「竜美を憑依したのよ」

メイ「憑依、ですか…?」

咲子「力がみなぎるのよね」

メイ「ほう…じゃあ攻撃してみてください」

ゼイル「メイ…怪我するぞ?」

メイ「そんなにヤバいんですか?」

ゼイル「あ、ああ…」

メイ「…なおさら試したくなりますね」

ゼイル「気を付けろよ？」

メイ「はい…咲子さん、攻撃して下さい！」

咲子「オーケー！ハアツ！」ドゴオ！

ギユイイン！

メイ「…!？」

咲子「ドラゴンスレイヤー！」ゴオオオオオ！

再び波動を放つ。

メイ「分身！からの…」ポワン！

…なるほど。

5人『ゴツドキャッチG2！』ガシイン！

5人がかりで波動を止めようとする。

メキメキツ…

5人『ぐわっ!？』

咲子「止めれなかったようね」

メイ「強いですね…！」

咲子「そりやミキシマ○クスだからね…あ」

言っちゃったわ。

メイ「えっ!？」

咲子「間違えた、マキシはコトアールのマックスだよねって言いたかったのよ」
よし、コレで大じよ…

メイ「言い直しても意味ないですよ？」

…うぶじゃなかったわね。

メイ「ミキシマ〇クスって、どういう事です？」

咲子「えつとね…」

ーただ今説明中ー

昨日の夢について説明した。

メイ「……?」

ナオ「なるほど、分からないわね」

ヤエ「夢で能力を手に入れるって…」

クミ「咲子はバカ？」

ニヨ「僕は信じるよ」

ニヨ、アンタだけは味方ね。

咲子「ホントにあつた出来事よ。じゃないところはならないし」

メイ「信じるしかないようですね…」

火桜神が何考えてるか分からないわね…

side 火桜神

ふふっ、早速試してみたのね。

火桜神「その力をどう扱うのか…」

見所になるわね。

火桜神「じゃあね、この世界の咲子」

またまたまた、会いましょ♪

シュツ…

斬士の過去

♪すりいーテレキヤスタービーボーイ（4分の1倍速）

sideむろみメイ

メイ「おれはむろみメイです」

「なんでおんなのこなのにおれっていつてるの？」

メイ「しつくりくるからです」

「しかもおれたちにもていねいにしゃべるし」

メイ「…なんかわるいですか？」

「わるくはないけど、ねー」

「なんかおかしいもん」

メイ「そうですか…」

おかしくて、おれはかえるつもりはありません。

それだけで…

メイ「なんで…？」

「おまえ、けもちわるいんだよ」

「しね」

メイ「なんで、そんなこというんですか……？」

「というか、けもちわるいってなんですか？」

そのつぎのひ……

メイ「あれ……？」

うわぐつが、ないですね……

メイ「どこかにおいていったきおくがないですね……ん？」

くつばこのうえに、なぜかおれのくつがありました。

メイ「なんでこんなところに？」

「みろ、あいつわかってないぜ」

メイ「？」クルツ

サツ

いま、だれかのこえが……

メイ「……きにしないでおきましょう」

きようしつにいかないよ。

おれはそのままきようしつにあげました。

メイ「……え？」

おれのおつくえのひきだしには…

メイ「どろ…?」

どろがつめこまれてました。

そのとき、きづいたのです。

メイ「おれは、いじめられてるんですか…?」

わるぐちをいわれるのも、うわぐつをかきされたのも、ひきだしにどろをつめこまれたのも、おれにたいしてのいじめだとしりました。

メイ「なにもわるいことをしてないのに…」

せんせいにいわないと。

おれはせんせいにみせました。

せんせい「何だコレは!」

メイ「あさきたらこれがつめこまれていたんです」

せんせい「そうか…」

メイ「それと、おれのうわぐつもうごかされてました」

せんせい「上靴もか…酷いな」

メイ「おれはどうすればいいんですか?」

せんせい「…：言ってくれてありがとな。後は先生に任せろ」

メイ「…はい！」

そのあと、せんせいにはあさのかいでひきだしをみせて、どろをいれたひとをわかりました。

「ごめんなさい…」

メイ「いいですよ、もうしないなら」

これでおわるとおもってました。

…それはかんちがいでした。

なんにちかあと、こんなことがありました。

「おにごっこやろうぜ〜！」

「やろうやろう〜！」

メイ「お、おれもはいつていいですか？」

「え〜、やだよ」

メイ「なんでですか？」

「おんななおれにおれっていうし、ていねいにはなすしきもちわるいんだよ」

メイ「えっ…」

「だからやだ。…ほかにはいるひといる〜？」

「はいるはいる〜！」

きもちわるいんですか…？

メイ「おれの、このはなしかたが…」

side 室見メイ

……。

嫌な夢を見ましたね。

メイ「あの時の俺は…弱かった」

まあ、今でもまだまだですが。

メイ「その後俺は無理やり一人称を“私”に変えたんですけどね」

敬語で話すのは変えませんでしたけどね。

クラスメートはその内慣れてくれました。

メイ「個性って…ホントに大事ですよね」

あの時の事は、もう思い出したくないな。

2年夏休み

暑くなる～（物理）

side 桜木咲子

咲子「はあ～あ～」ぐでーん

暑い…ッ

竜美「お母さ～ん、暑いよお～」だらーん

ガチャッ

春菜「え…」

咲子「母さん、暑い…」

春菜「クーラーつければ？」カチッ

しーん

咲子「故障してるのよ…」だらーん

竜美「水飲んでくる…」スタスタ

春菜「ヤバいわね…咲子、修理会社来るまではリビングで寝なさい」

咲子「は～い」

リビンググに行こ。

ーリビンググー

咲子「はあゝあゝ」

竜美「わあゝ」

涼すい いゝ♪

咲子「…よし」

パソコンを出す。

咲子「MULAの物語をやろつと」カタカタ

千早によると、後少しで4部が完成するらしいわね。

咲子「今の内に強化しないとね」

まずは裏ボスである火野有太を倒してからね。

side 飛羽野ゼイル

茜「お兄ちゃんゝ、アイス買ってゝ」ぐでゝ

ゼイル「氷なら冷凍庫にいくらでもあるぞ」

茜「分かったゝ」

…ん？

ガラガラッ。

茜は冷凍庫の扉を開ける。そして…

ガシャン

茜「つめたい…：…ってコレ氷じゃん!？」

ゼイル「ノリツツコミお疲れだな」

茜「私が言ってるのはアイスクリームだよ!」

ゼイル「だろうな」

茜「買ってきてよ」

ゼイル「コトアール（断る）」

茜「さらつとイナイレネタを混ぜこんでる…もういいよ、自分で買ってくる」スタスタ

ゼイル「おう、気をつけてな」

ガチャッ

…行つたな。

ゼイル「実はな…」

ガチャッ

俺の部屋の冷蔵庫にアイスクリームが入ってるんだよな

ゼイル「計画通りだな(笑)」

ま、コイツは俺、咲子、竜美用だから茜は気付かないだろうな。
後で食べるか。

side 室見メイ

メイ「：コレでどうですかね？」

ビュウウン：

風の塊を扇風機のような感じで回転させます。

ニヨ「涼しい♪」

レイト「うん、丁度いい風力だよ」

メイ「じゃ、後はエネルギーを溜めて、と」ドツ

コレで3時間は動くはずですよ。

ニヨ「何する？」

メイ「配信するのは早いですし：宿題でもやりますか」

まだ夏休みになってから2日しか経ってませんが。

レイト「僕もやった方が良さそうだね」

ニヨ「僕は？」

メイ「数学の宿題をお願いします」
ニヨ「オケケ」

side 坂田日花

朱雀「クエエ」

日花「ほい、生唐揚げ」ポイツ

朱雀「クエツ！」ボツ

シユウツ！

唐揚げは速攻で焼けた。

朱雀「クエ」パクツ

日花「美味しい？」

朱雀「クエエ」

…暑いわね。後でアイス買おうかしら。

憑依してみよう

side 桜木咲子

咲子「憑依：竜美！」カツ！

ゼイル「上手くいつてるな」

ドゴツ！

咲子「ドラゴン：スレイヤー！」ゴオオオオ！

：ドゴオ！

メイ「やっぱり凄い威力ですね…」

咲子「…あ、いい事思いついた」

メイ「なんですか？」

咲子「メイ、アンタも憑依してみない？」

メイ「俺がですか？」

咲子「ええ。他の人格とかを憑依してみれば？」

メイ「そうですね…分身！」ポワン

4人が出てくる。

メイ「憑依したい人はいますか？」

ナオ「私はパス」

ヤエ「ちよつと興味あるね」

クミ「あたいを憑依したら最強になれるよ！」

ニヨ「僕は見ただけで」

ヤエとクミがやりたいようね。

メイ「じゃあ、2人でじゃんけんして下さい」

2人『最初はぐんちよこりんの鼻くそ、ペコちゃんヨーグルとんこつラーめんたいコア
ラのマーちくわつかにんじん！』ポンツ

長っ!?

(最初はぐんちよこりんの、鼻くそ、ペコちゃん、ヨーグルト、とんこつラーメン、明太
子、こあらのマーチ、ちくわ、わつか、かに、にんじん)

ヤエ グー

クミ パー

クミ「ふふん、やっぱりあたいは最強ね！」

うん、^⑨

メイ「じゃあ相手はクミですね」

咲子「オーケー。じゃあココに立って〜」
ザツ

咲子「すう…ミキシマ○クス！」ヒュン！

メイ「ツ！」ドツ

咲子「ハッ！」

クミ「ぐうっ！」ドツ

ギユイイン！

2人『ハアアアア！』

シュウウウ…

メイ「…ふう」

全員『おお…』

メイの目の色は黄色になっていた。

クミ「パーカーが黄色だったらまんまあたいたいね…」

咲子「そうね」

メイ「コレが憑依ですか…力がみなぎってきますね…」

メイもそう思うのね。

メイ「…ハッ！」バチツ

メイは手に雷を纏い、私に飛びかかる。

咲子「……!!」

メイ「ニードルハンマー！」ドドドドツ!

咲子「結界！」ピキツ

結界を張つてすぐに離れる。

…バリーン!

咲子「うそん」

メイ「凄いですねコレ!」

咲子「そうね…」

メイ「…いい事思いつきました」

咲子「?」

メイ「ハアアアア!」

バチツ、ビユウウン!

咲子「へえ…」

メイ「ゴツドキヤツチG3!」

メイは風と雷を混ぜ、威力を増幅させた。

咲子「試しに…極炎天桜舞!」B L O O O M!

メイ「ハアツ！」ガシツ！

シユウウウ…

咲子「カンタンに止められたわね」

メイ「仕返しです！極晴天飛梅！」B L O O O M！

咲子「そうくるのね…ハアアアア！」

ギユン、ボツ、ビユウウン！

咲子「魔王・ザ・ハンドG3！」ガシイン！

スツ…

メイ「竜美さんって属性2つ持ちですよ？」

咲子「その通り。だから桜と火と風ね」

メイ「憑依って凄いですね…」

その後も色々憑依してみる事にした。

日花の1日

side 坂田日花

午前3時

ピピツ…カチツ。

日花「ふあああ…」

私は毎晩11時に寝て毎朝3時に起きる。

睡眠時間? 2倍速の状態で4時間寝てるから8時間よ。

日花「さて、特訓つと」

ガチャツ

ー公園ー

タタタ…

日花「すう、ハア…」

そして公園を100周する。

1周1キロだから、ね?

(えげつねえ…)

午前4時

日花「……………」カタカタ

パソコンとにらめっこする。

やっている事は…

『ダメージ：120万』

主にゲームね。

午前6時半

日花「そろそろ朝飯を作ろうかしら？」

今日は…パンと目玉焼きね。

ジユウウウ…

スタスタ

日和「おはよく…」

平尾「おはよう、日花」

日花「朝飯は後ちよつとで終わるわよん」

未例「……………」(寝ながら歩いてる)「スヤスヤ

…また？」

ゴンツ

未例はそのまま柱に当たった。

未例「痛え…ッ！」

日花「ちゃんと起きてから歩きなさい」

午前7時

平尾「じゃ、行つてきます」

日花「行つてらっしゃい」

ガチャッ。

今は夏休み。

未例も日和も…私自身も休みである。

日花「何しようかしら？」

日和「母さんゲームしよ」

日花「か、母さんゲーム？」

そんなものあつたかしら？

日和「違う違う、ゲームしようよ母さん」

…うん、知つてた。

日花「オーケー。…アンタが宿題を終わらせてたらね」

日和「…あ。今すぐやってくる！」ダッ

未例「アホだな姉さんは」

…へえ。

日花「アンタ作文は？」

未例「:OH MY GOD」ダッ

どっちもどっちよ。

朱雀「クエエ…」

日花「ちゃんと宿題をしたのは朱雀だけね」ナデナデ

朱雀「クルル♪」

朱雀の宿題は水を温める用の熱を補給することである。

午後1時

今は散歩をしてる。

してるけど…

「絶ブレイズスクリュー！」ゴオオオオオ！

やっぱり来たわね。

日花「神イジゲン・ザ・ハンド」ギユルルル！

「なんかデジャブですね」

日花「何処狙ってんよ咲子」

咲子「マジですみません…」

日花「特訓場所変えれば？」

咲子「そうですね…学校って行っていいんですか？」

日花「オーケーよ。竜美含めて」

咲子「じゃあそこで特訓してきます！」タタツ

これで私に向かって弾幕が飛んでくる事はなさそうね。

午後10時

お、やってるわね。

『よし、レアドロップゲットです！』

『長かったわね』

しばらく配信を見た後、私は寝る準備をした。

午後11時

日花「……………」スヤスヤ

日花「…?」

ココは夢の中ね…

「お、来たわね」

日花 「えっ…」

「どうしたの？」

私がいる…？

対応しよう

side 坂田日花

私がいる…？

「ああ、なんで私がいるか分からないようね」

日花 「ええ…てかアンタ誰よ」

入箱 「入箱日花よ」

は…？

日花 「過去の私？」

入箱 「違うわよ。私は平行世界の入箱日花よ」

…はあ。

日花 「平行世界ね…」

入箱 「そ。ちよつとアンタに話したい事があつて」

日花 「ツツコミどころ満載だけど聞かないでおくわ」

入箱 「それがいいわ。…数カ月後、私…いや、私達はこの世界に行くわ」

日花 「アンタ、達？」

入箱「ええ。私とその仲間達が」

日花「なんで？」

入箱「あ、遊びに？」

日花「ズデーン

Oh…

入箱「い、一応コレを計画したのは私の師匠であつて、私じゃないわよ？」

日花「そう…ま、覚えておくわ」

入箱「ありがとう。じゃ、私はコレで」

シュツ…

日花「……………」

今の、ホントに私なの？

side 桜木咲子

咲子「天使化！」カッ

私は天使化して対応の準備をする。

メイ「無」

ナオ「影」

ヤエ「乱」

クミ「舞」

ニヨ「改」

5人『ハアツ！』

シュバツ！

5人一気に襲いかかってきた。

咲子「空中分解G3！」

パラッ：

自身の体を文字通り空中で分解した。

大分慣れたわね、この感覚。

竜美「お母さんがバラバラになってる〜」

竜美はよく怖がらなかつたわね？普通は怖いわよ？

レイト「ダブルグレネード！」ギユウウン！

咲子「烈焼脚改！」シュツ！

青い弾幕を受け流す。

ゼイル「絶シャドースクリュー！」ゴオオオオオ！

咲子「魔王・ザ・ハンドG3！」ガシツ！

シユウウウ：

メイ「今の対応力、凄いですね」

咲子「天使化してても対応の特訓は必要と思ったのよ」

メイ「今度は俺がやってみていいですか？」

咲子「オーケー」

―数秒後―

メイは1人に戻り、天使化した。

咲子「…よし。マキシマムファイア改！」ギユウウン！

メイ「飛梅・燕返し改！」シヤツ！

レイト「零零斬り！」ズバツ！

(冥冥斬りのレイトバージョン)

メイ「絶冥冥斬り！」キイン！

ゼイル「天空落とし：V2！」

ゴオオオオ！

メイ「ゴッドキャッチG3！」ガシイン！

ギギツ：

メイ「(強すぎますね) 極火斬り！」ズバツ！

シユウウウ…

咲子「おお…」

ゴツドキヤツチからの火斬りのコンボね。

メイ「どうでしたか？」

咲子「アンタも中々いい対応だったわよ」

竜美「お母さんもメイさんもかつこよかった〜！」

それはよかったわ…

咲子「ところでメイ」

メイ「なんですか？」

咲子「アンタの冥冥斬りはいつ強化されるのかしら？」

メイ「…もうすぐですよ」ニコツ

ああ、絶対強化版が出るわね。

別の属性の技を覚えようと思う

side 桜木咲子

咲子「メイ、質問があるの」

メイ「なんですか？」

咲子「1つの属性を持つてる人が、応用で別の属性の技を出せると思う？」

メイ「……どういう事ですか？」

咲子「例えば、桜属性の人が土属性の技を使ったり、ね？」

メイ「あ……応用次第ではできる技もあると思いますよ？」

咲子「そうよね……そこで私は例の通り、桜属性なのに土属性の技を使ってみたいのよ」

メイ「なるほど……手伝いますよ！」

咲子「ありがと」

↓数分後↓

♪Rolling Sky-Volcano

メイ「行きますよ……！」

5人『無影乱舞改!』バツ!

咲子「……………」

地面から噴出させたいから…

咲子「ハッ！」ドゴツ

拳で地面を殴り、エネルギーを送り込む。

咲子「…行けっ！」

…シュツ

咲子「え」

シュバツ！

咲子「グワツ！」

1度目は見事に失敗した。

メイ「失敗しましたね」

咲子「まあ、まだ初めてだし。もう一回やるわよ！」

メイ「…はい！」

…数秒後…

メイ「飛梅・燕返し改！」ズバツ！

さつきは直線でエネルギーを送ってたから、今度は曲線で…

咲子「ハッ！」ドゴツ

…ブシュッ!

メイ「!」

金色斬撃は威力が下がったが、止めきれなかった。

咲子「……まだ失敗ね」

でも、コツは掴めたわ。

メイ「1度目と2度目の違いはなんですか?」

咲子「エネルギーの送り方ね。最初は直線、2度目は曲線よ」

メイ「曲線ですか…じゃあ、エネルギーをいろんな方向から送ってみてはどうですか?」

咲子「いろんな方向…やってみるわ」

…π秒後…

ナオ「真ブレイズスクリュー!」ゴオオオオ!

咲子「…ハッ!」ドゴッ

地面を殴って地中に大量のエネルギーを送り込む。

咲子(いろんな方向から集めて…!)

…ギョッ

咲子「ハアッ!」

ドゴオオオ!

ナオ「おお……!」

地中から土砂が火山のように噴出した。

メイ「グラウンドクエイクです……!」

ナオ「まさかホントに覚えるとはね」

咲子「……これで攻撃の幅が広がったわ。ありがと、メイ達」

2人『どういたしました』

後はコレをどう使いこなすかね。



竜美「お父さん」

ゼイル「何だ?」

竜美「お父さんって、どうやってお母さんに会ったの?」

ゼイル「そうだな……9ヶ月ぐらい前にココに転校してきた時だな。その時俺はあまり人信用できなくてな、その時咲子が助けてくれたんだよ。今思うとホントに運命的な出会いだよな……」

竜美「やっぱりお母さんって凄いね」

ゼイル「だろ?」

ちよつとした大会が開幕

side 桜木咲子

咲子「ゼイル、アンタも呼ばれたの？」

ゼイル「ああ…何だろうな、さとかに隊全員招集つて」

竜美「お楽しみかなく？」

ーさとかに隊基地ー

ガチャツ

咲子「来たわよ」

絵奈「あ、これで全員だね」

祐樹「よし、じゃあみんな注目してくれ」

……?

翔「来るぞ…！」

祐樹「今から、ちよつとした大会を開催しようと思う！」

ほぼ全員『おお！』

咲子「………？」

大会？

祐樹「ルールを説明するぞ。この大会は勝ち抜き戦で、種目は戦闘だ。そして天使・悪魔化、憑依は禁止だ」

へえ、じゃあ実力勝負ってことね。

祐樹「それで、このくじ引きで対戦相手を決めるぞ」スツ

祐樹はくじ引きの箱を出す。

じゃあ6組出るってことね。

祐樹「そして最後に…2回戦の後3人残るが、1番相手を倒す時間が遅かったヤツはそこで脱落となる」

学「マジかよ…」

祐樹「説明が終わったところで、くじ引きするぞ」

コトン。

咲子「まずは私ね…」

スツ…

咲子「…3ね」

祐樹「咲子は3と」

メイ「俺ですね。よっ」スツ

サツ

メイ「11でした」

祐樹「オーケー」

―数分後―

結果はこうね。

レイトvs翔

私vsルマ

留美vsゼイル

祐樹vs茜

絵奈vs学

メイvs育也

※クソ適当に選んだ。

祐樹「じゃあまず1回戦、レイトvs翔だ。2人はフィールド(という名の庭)に出ろ」

スタスタ

―数秒後―

千早「実況はいつも通り俺と千代がやるぜ」

千代「よろしく」

うん、もう反応しないわね。

千早「1回戦…始めッ！」

翔「先手必勝！ノーザンインパクトV3！」パキッ！

レイト「真火斬り！」ズバッ！

先手必勝…ではないわね。

レイト「ダブルグレネード！」ドガン！

翔「絶スノーエンジェル！」シユッ

…バリン！

翔「なっ…ぐっ」サッ

レイト「避けたか…なら…これならどうかな？」ボツ

翔「…？」

レイトは刀に火をつける。

レイト「レーヴァテイン！」ズバッ

ギユウウン！

翔「ホワイトブレードV2…ぐあッ！」ズバッ！

咲子「あの技は…」

マキシマムファイア以上の威力ね。

翔「くっ、お前いつの間にそんな技を？」

レイト「こっそり練習してたんだ。詳細はメイさんに聞いてみて」

翔「…後で聞いておく…オラア！」ドゴツ

翔は地面を殴る。

翔（地中の水を凍らせる…！）

レイト「…?!？」

翔「絶スノーエンジン…地中噴出バージョン！」

パキーン！

レイト「ガッ…！」

レイトは氷漬けになってしまった。

翔「油断したな」

レイト「…なーんてね？」ボツ

翔「何？」

レイト「僕が得意なのは…爆発系攻撃だよ？」シュツ

翔「まさか…」

レイト「爆破！」

ドガァン!

翔「ぐわっ…」

全員『……………』

煙が晴れると、2人とも倒れているが、レイトは意識があつた。
千早「勝者、室見レイト!」

咲子VSルマ

side 桜木咲子

祐樹「それじゃ、次は2回戦だ。咲子とルマは出てくれ」

咲子「ええ…」

ルマ「ボク、頑張るよ！」

―数秒後―

千早「2回戦…始めッ！」

ルマ「クロスボーンV3…大量発生！」

シュバババツ！

大量の骨が飛んてくる。

咲子「千手観音改！」ガシイン！

シューウウ…

ルマ「……………」ニヤリ

…まさか。

咲子「後ろ…」

ルマ「じゃなくて前だよ！」スツ
シャツ！

咲子「ガツ」

骨が顎に当たった。

咲子「…ツ、舌嚙んだわ」

ルマ「え」

咲子「なーんてね？炎天掌！」ズガアン！

ルマ「うっ!？」

咲子「烈焼脚改！」シユツ

ルマ「ボーンアーマー改！」ピキツ！

ドゴオ！

咲子「硬いわね…！」

なら…

咲子「マキシマムファイア改！」ボツ

シユウウウ！

ルマ「真バーニングサイズ！」ズバツ！

ギイン！

まさか弾かれるとはね。

咲子「アンタ、かなり鍛えてるようね」

ルマ「フツ、これだけじゃないよ！ハアッ！」

クルクル…

ルマ「Xブラスト…V3！」

ギユウウン！

…ゴツドキヤツチは使えないんだけど？

咲子「魔王・ザ・ハンドG3！」ガシツ！

……!?

咲子「ぐわっ！」

今の回転は…？

ルマ「光線の中に骨の塊を入れて、回転させてるんだ」

咲子「なるほどね」

なら対策は結界流しね。

咲子「絶ブレイズスクリュー！」ゴオオオツ！

ルマ「……ハッ！」ドツ！

カチャカチャ…

ルマは骨で何かを組み立てている。

咲子「ええ…」

ルマ「ケルベロス！」

「ウォーン！」

ガブツ！

食べてる!?

咲子「WHAT THE F*CK!？」

(おい！)

ルマ「行けえ〜！」

「ガルルル！」

ちよつと待って〜!?

咲子「極炎天桜舞！」 B L O O O O M !

「グリアウ！」 ガブツ！

Oh…

咲子「ヤバいわねコイツ！」

ルマ「へへっ、頑張つて倒してね！」 シュツ

ルマがさらに攻撃してきた。

咲子「くう……！」

こうなったら……！」

咲子「一気に蹴散らしてやるわ！」ポツ

ギユイーン！

ルマ「わお、出たね……！」

咲子「クリムゾンハリケーン……G2！」

ギユオオオオオオオオ！

「グルル……ガウー」ガブツ

ケルベロスは予想通り強化された赤い台風に喰らいつく。

「……グルツ!?!」

ドガーン！

ルマ「あちゃあ……」

ケルベロスは威力に耐えられず、爆散した。

(骨と炎でできてるから、グロくはないよ)

咲子「ハア、ハア……厄介な技だったわ……」

ルマ「……よし！」スツ

カチャカチャ……

咲子「あゝ」

また!?

咲子「もうさせないわよ! ハアツ!」 ドゴツ!

地面を殴り、エネルギーを送り込む。

これは隠すつもりだったけど…!

咲子「グラウンドクエイク!」

ドゴオオオ!

ルマ「なっ!?!…ガハツ!」

ほぼ全員『!?!』

この瞬間、ほぼ全員はこう思っただろう。

なぜ咲子を持つてない属性の技を!?!と。

千早「勝者、桜木咲子!」

留美 V S ゼイル

side 桜木咲子

祐樹「3回戦は、ゼイルと留美だな」

留美「…先輩」

咲子「何？」

留美「頑張ります！」

咲子「…フツ、ええ」

私の彼氏と私の弟子、どっちが勝つのかしらね？

―数秒後―

♪The Fat Rat—Monody

千早「3回戦、始めっ！」

ゼイル「…来い！」

留美「言われなくても…！絶炎突！」ドゴオ！

ゼイル「よっ」ガシッ

留美「え」

ゼイル「オラア！」ドゴツ！

ゼイルは留美の足を掴み、地面にたたきつけた。

…留美、アンタアホなの？

留美「ぐはっ!？」

ゼイル「真風神の舞！」ビュウウン！

留美「……………」ニヤリ

ゼイル「…?」

留美「その技は対策済みですよ！」ピヨン

留美は何故かジャンプした。

ゼイル「何をする気だ?」

留美「ハアアアツ！」ビリビリ

ゼイル「雷だと!？」

留美「スパークウインド！」バチツ！

ゼイル「グッ…!」

そういえば、留美は属性3つ持ちなのよね。

ゼイル「複数持ってたのかよ…」

留美「先輩には教えたんですけどね」

ゼイル「…まあいい、次は当てる！くらえ…クレセントムーン！」ズバツ

ゼイルの弧月十字斬の強化版かしら？

留美「ゴッドハンドX改！」ガシッ

…パリン！

黒い三日月は強化された赤い手をカンタンに破った。

留美「…グフツ!?」

ゼイル「…よし」

…威力は炎天掌ぐらいね。

留美「ツ…強いですね」

ゼイル「攻撃を普通に耐えてるお前に言われてもな…」

留美「先輩のクリムゾンハリケーンを耐えたんです、カンタンにはやられません！」

ああ、確かに何回かくらってたわね。

留美「爆熱ストームG4！」ゴオオオッ！

ゼイル「エアライド…V2！」ササッ！

留美の攻撃を避けるゼイル。

留美（このままじゃジリ貧になる…）

ゼイル「皇帝ペンギンX！」ギユウウン！

影のペンギンが留美に襲い掛かる。

留美「風神雷神！」ガシッ！

シユウウウ…

防御力は充分ね。

留美（攻撃手段が…）

留美は焦っていた。

ゼイル「…？（焦ってるな。今の内にやるか）天空落としV2！」ドゴツ

ギユウウウ！

留美「ッ、烈風陣改！…からの風神雷神！」ガシッ！

…ギユン！

留美「ぐわっ！」ドゴツ！

ゼイル「…降参した方がいいんじゃないか？」

留美「…えっ？」

ゼイル「もうボロボロだろ」

留美「…いや、まだ戦います！」

ゼイル「そうか…！」シユッ

留美（速い！でも…）

…へえ。

ゼイル「……………」スッ

留美「(そこ!) ハアッ!」 シュツ!

ゼイル「!?」 サッ

留美「絶炎突!」 ドゴツ!

ゼイル「ッ…」 サッ

留美「(最後まで、諦めない!) ハアアアッ…!」

ギユイイン!

ゼイル「このエネルギー量は…!?!」

留美「嵐…竜巻…ハリケーン!」 ドゴツ!

ギユルルル!

竜巻が現れた。

ゼイル「マジかよ…天空落としV2!」 ギユウウン!

…シュウウウ!

咲子「……………おお」

見てみると、どちらも場外になっていた。

…しかし。

ゼイルは5メートル、留美は2メートルだった。

ゼイル「…はあ!？」

千早「勝者、赤坂留美！」

留美「や、やった〜！」

祐樹 V S 茜

side 桜木咲子

祐樹 「次は俺と茜だな」

ゼイル 「茜、頑張れよ」

茜 「もちろん♪」ニコッ

出た、ブラコーン。

―数秒後―

千早 「4回戦：始め！」

茜 「真風斬！」ズバッ！

祐樹 「来たか：エレキトラップ！」バチッ！

：ドゴォ！

茜 「止められましたか」

祐樹 「今度は俺の番だな。サンダーラッシュユV3！」ビリッ！

祐樹は電気の塊を飛ばした。

茜 「真空魔！」ギョーン！

…シユツ!

茜はそれを異空間に飛ばした。

祐樹「???」

理解できてないようね。

茜「エアーバレットV2!」ポイツ

祐樹「うおっ!?!」ドゴオ!

ルマ「よそ見しちやダメだよ祐樹!」

祐樹「お、おうスマン…」

彼女に説教されてる彼氏の図。

茜「絶ウインドブラスト!」ビユウウン!

祐樹「エレキアーマー改!」バチツ

サツ!

茜「速い!?!」

電気を纏ってスピードを上げてるのね。

祐樹「サンダーパンチ!」ドゴツ!

茜「ぐう!?!」

攻撃は茜に直撃した。

茜（留美も戦えたんだ、私だって…!）

祐樹「トラフィック・ジャムG3!」

ブロロツ!

茜「真空魔!」ズバツ

シュツ

祐樹「その真空魔はチートだろ…」

茜「能力によるものだからね」

祐樹（近距離攻撃しか当てられないな、こりや）サツ

茜（速い…でも…）絶ウインドブラスト!」ビュウウン!

茜はウインドブラストを地面に向かって発射した。

フワツ

茜「よし!」

祐樹「はあ!?!」

その反動に宙に浮いた。

茜「エアバレット…大量発生!」ババババツ!

祐樹「エレキトラップ!」バチツ!

…シュツ!

祐樹「グオツ！」

まるで発射台ね。

祐樹「…つて、なんで落ちてこねえんだよ!？」

茜「風で浮いてるので♪」

祐樹「ぐぬぬ、このチート野郎…!」

茜「それは咲子さんに言ってお返し」

祐樹「言い返せねえ…」

…口喧嘩してるヒマないでしょ？

茜「真風斬、大量発生！」ズバズバズバツ!

祐樹「トラフィック・ジャムG3！」ブロロツ!

愚者ツ!

茜「ええっ!？」

祐樹は電気の車を積み上げた。

祐樹「これで届くぜ!サンダーラッシュV3!」バチツ!

ドゴオ!

茜「ぐはっ…!」ヨロツ

ドゴツ!

茜「うーん…」ちーん

地面に激突した茜は、そのまま気絶した。

千早「…勝者、戸畑祐樹！」

祐樹「ふう、苦戦したぜ」

ルマ「やったね、祐樹！」

「お母さん、ココが福岡？」

「そうよ、そしてこれから転校する学校に行くわよ」

「うん、楽しみ〜！」

絵奈vs学

side 桜木咲子

祐樹 「5回戦は絵奈と学だ」

絵奈 「頑張るよ〜！」

学 「負けないぜ！」

―数秒後―

千早 「5回戦、始めッ！」

学 「土流波改！」

ドシュッ！

絵奈 「ハアッ！ 大国謳歌！」

ガシッ！

絵奈 「オーバーサイクロンG4！」 バッシャーン！

ドスドスッ！

学 「だっだあ〜！ ザ・マウンテンV2！」 ドゴッ！

ピキッ！

絵奈「あちやあく、ザ・タイフーンの方がよかったかな〜?」

学「さあな…土流波改、3連発!」ドゴドゴドゴツ!

絵奈「真激流の渦!」ザパーン!

…ザシュツ!

絵奈「うわっ!」

流石に3発は防げないようね。

学「さらに、新技行くぜ…!」スツ

絵奈「ええ!?(それはないよ〜!)」

学「くらえ…地裂!」ドゴツ

学は地面を殴ると、地面に亀裂が走った。

絵奈「な、何これ!」

学「それだけじゃないぜ?…行けっ!」

グラツ!

地面が隆起し、断層ができた。

絵奈「危なっ!」

しかし絵奈がギリギリ避けた。

学「つち、コレまだ使い慣れてないから威力が足りないな…」

絵奈「今ので（威力が）足りないの!？」

学「まあいいか。もう一回行くぜ！」スツ

絵奈「ツ、させないよっ！ザ・タイフーンV2！」ザパアン！

学「ぐおっ!？」

学は油断していたため、絵奈の攻撃に直撃した。

絵奈「油断は禁物だよ〜！」

学「はっ、だな。土流波改、10連発！」

絵奈「大量だね!？」

絵奈はどう対応するのかしら？

絵奈「（ん？コレって止めるんじゃない？）…真激流の渦！」ザ

パッ！

グルグル…

学「なっ…!？」

絵奈「よし！」

なるほど、混ぜたのね。

絵奈「くらえー！」

泥水の渦が学に襲いかかる。

学「ツ、地裂！ザ・マウンテンV2！」
ドギユウン！

大きな土の壁と泥水の渦がぶつかる。

学「うおおおおおっ！」

絵奈「（私はフリーハンドだもんね！）オーバーサイクロンG4！」バツシャーン！

ドスドスッ！

学「うそ、だろお!?!」

ピキピキッ

土の壁が割れ始める。

…ドゴオ！

学「ぐわっ…!」

ザパーン！

学「クソがよう…」バタン

千早「勝者、貝塚絵奈！」

絵奈「やった〜！」

学「ちーん

…学のヤツ、びしよ濡れね。

コンコン。

日花「…あら、来たのね」

「うん…久しぶり、日花」

日花「そうね。じゃ、入りなさい、アオイ…ん？」

「こんにちは！」

日花「あら、アンタもいたのね、レイン」

レイン「久しぶりです、日花さん！」

日花「ふふっ、2人とも入って」

アオイ「うん、失礼します」

ガチャッ

メイVS育也

side 桜木咲子

祐樹「じゃ、次はメイと育也だ（ry）」

―数秒後―

メイ「……………」

育也「……………」

千早「6回戦、始め！」

メイ「極晴天飛梅！」 B L O O O O M !

育也「無頼ハンド改！」 ガシッ！

シュウウウ

育也はネタ技で攻撃を止めた。

メイ「流石に防がれましたか」

育也「舐めてもらっちゃ困るよ…フィールドスパーク！」

バチバチ！

メイ「!?（範囲攻撃!?!）」

育也は一定範囲に放電した。

メイ「クツ、文字通り痺れますね…」

育也「それはよかった」

メイ「真風神の舞！」ビュウウン！

育也「……………」バチツ

…おっ？

育也「(留美さんは、確かこうやって…) ハアッ！」

メイ「まさか…」

育也「疑似スパークウインド！」ピリッ！

留美(真似された!?)

メイ「ツ、斬一閃改！」スーツ

ス

パ

ア

ン

！

雷を纏った旋風は真つ二つに割れた。

育也「ぐあっ！」愚者ッ

流石に対応できず、育也は車にひかれた。

二ヨ「最後は僕だよ！激流の渦改！」バツシャーン！

育也「(まずい…) フィールドスパーク！」バチッ！

シユウウウ…

育也「何とか止めれた…」

メイ「攻撃はまだ終わってませんよ？」

シユッ

5人『無影乱舞改！』シユバツ！

育也「!？」

サッ

メイ「ハッ！」ドゴッ！

育也「ぐうっ…そこか！」

メイ「…:…:」サッ

育也「いなくなつて「隙あり！」ガッ」

そしてそれがしばらく続き…

育也「ハア、ハア…」

メイ「トドメです…！」スツ
ギョーン！

メイの刀、飛梅が桃色のオーラを纏う。

メイ「くらえ…命命斬り！」シヤツ！

ズバツ！

育也「ぐはっ…！強、いね、メイ、は…」バタン

千早「勝者、室見メイ！」

…最初は緑、次に橙、そして今は桃ね。

次は紫だったり？」

メイ「違いますよ！」

咲子「あ、声に出てた？」

メイ「命命斬りで最終強化なので」

咲子「あ、そう」

こうして最初の6回戦が終わった。

経緯

side アオイ・キサラ

日花「それで、何でこっちに？」

アオイ「うーん、説明したら長いけど…」

日花「構わないわよ、ヒマだったし」

アオイ「分かった。はじめは1ヶ月前の話」

1ヶ月前

レイン「ただいま…」ズーン

アオイ「おかえり…ってどうしたの!？」

レイン「なんか、気分が悪いの…」

アオイ「…とりあえず体温を測りなさい」

ピッ

レイン「…どう？」

アオイ「36.5度…標準体温ね」

レイン「何でだろ？」

アオイ「……………」

まさか、ね？

アオイ「今夜の夕飯は野菜多めにしておくわ」

レイン「うん…」

―次の日―

レイン「うう…」ズーン

アオイ「さらに悪くなってる!？」

レインは今にも吐きそうな顔をしていた。

レイン「吐きそう、吐きそう…うっ」

アオイ「ツ!!」サツ

レイン「おええええつ…」キラキラ

危なかつたわ…

レイン「…うえつ」

アオイ「大丈夫？学校休んだ方がいいわね…」

レイン「ごめん…」

アオイ「しっかり休んでて」

レイン「うん」

ガチャッ

そして私は部屋を出た。

アオイ「ヤバい……！」

この時期に起きるなんて……

アオイ「一刻も早く福岡に戻らないと！」

そんな感じで、引越す準備をしてから日本に来た。

―引越してすぐ後―

レイン「あれ……？」

アオイ「どうしたの？」

レイン「体調が、戻った！」

アオイ「ふふっ、それはよかった」

レイン「何でかな……？」

アオイ「……奇跡じゃない？」

―回想終了―

日花「なるほど……」

アオイ「という事で、またよろしくね、日花」

日花「ええ、よろしく」

レイン「……?」

side 桜木咲子

祐樹「じゃ、シャツフルするぞ」

カサカサ

祐樹は私、メイ、レイト、留美、祐樹、絵奈の6人のカードをシャツフルする。

祐樹「そしてここから2枚引く」

スツ

出たのは?

祐樹「メイとレイトだな……」

……おお。

咲子「奇跡ねえ……」ニヤリ

メイ「その顔をやめてください」

咲子「はいはい」

祐樹「少し休憩してから始めるぞ」

―数秒後―

竜美「カツコよかったよ、お母さん!」

咲子「ふふっ、ありがと」ナデナデ

竜美「えへへ」

ゼイル「俺は負けたんだがな…」

竜美「お父さんもカツコよかったよ！」

ゼイル「そ、そうか」

嬉しそうね。

咲子「…ところで竜美」

竜美「な〜に〜?」

咲子「アンタ、千代の隣で何かしてたみたいだけど、何してたの?」

竜美「ん〜…秘密!」

咲子「…そう」

じゃあこれ以上きけないわね。

ゼイル「そろそろ戻ろうぜ」

咲子「そうね。またね竜美」

竜美「頑張つてね〜!」

スタスタ

メイ「俺達で戦うのは、初めてですね」

レイト「だね…でも、負けないよ!」

痴話喧嘩

side室見メイ

千早「7回戦、始めい！」

相手は愛しのレイト君…でも手加減はしません！

メイ「極晴天飛梅！」 B L O O O O M !

レイト「(予想通り!) ダブルグレネード！」 ドガンン！

メイ((((((((((((レイト

ブロツクされた！

メイ「飛梅・燕返し改！」 シャツ！

レイト「レーヴァアテイン！」 ギユン！

…ドゴオ！

メイ「ぐうっ！」

レーヴァアテインの方が威力が高かったようですね。

メイ「ハアツ！」 サツ

レイト「フツ！」 スツ

…キーン!

刃がぶつかり合います。

メイ「命命斬り！」

ズバツ!

レイト「グハツ！」ヨロツ

メイ「隙あ…!?!」

レイト「させないよ！」ポイツ

レイト君は炎の塊を投げてきました。

メイ「(爆弾ですねコレは!) 斬一閃、連発！」

ス

パ

ア

ツ

!

ドガーン!

空間ごと斬ったので攻撃は避けられました。

レイト「やるね…それが好きだ(この状況が)」

メイ「…俺も好きですよ（貴方のことが）」

（勘違いしとる！）

レイト「さあ…行くよ！」ドッ

レイト君の周りに光のつぶが浮き上がります。

メイ「これは…？」

どんな攻撃を？

レイト「多分驚くよ…グラウンドスイーパー！」

メイ「なっー」

ドガアアアン！

メイ「ガハッ!？」

それは避けられませんよ…

レイト「本気を出したらどうだい？」

メイ「…ふふっ、いいでしょう。分身！」ポワン！

4人が出てきました。

メイ「行きますよ…」

5人『無影乱舞改…最大威力！』シユバッ！

レイト（そう来たね、なら…）スッ

シュツ!

ナオ「ハアツ!」サツ

レイト「レーヴァテイン!」ズバツ!

ナオ「ぐわっ!」

レイト君の攻撃が当たった!?

レイト「さあ、何でだろうね?」

メイ(……?)

シュバツ!

ヤエ「せいっ!」サツ

レイト「零零斬り!」ズバツ

ヤエ「命命斬り!」シヤツ

キイン!

ヤエ「…まさか」

レイト「分かった?」

ヤエ「…音かい?」

レイト「正解だよ」

音!?

メイ「耳がいいんですか？」

レイト「まあね。秘密にしてたんだ」

クミ「じゃあコレはどう？トラフィック・ジャム！」ブロッツ！

レイト「それは耳関係ないよね!?!真火斬り！」ズバツ

…愚者ツ！

レイト「ぐわっ！」

ニヨ「超雨天流蓮！」BLOOM！

レイト「グランドスイーパー！」シユウウウ！

ドガン！

レイト君はクミの攻撃を防ぎました。

ナオ「怒りの鉄槌V3！」ドゴオ！

レイト「ガツ…」

メイ「トドメです！」

ビユウウ！

ポオオオツ！

ゴオオオオ！

バチバチツ！

ザパアアア!

5人『ザ・テンペストG2!』

ゴオオオオオオ!

レイト「レーヴァテイン!」シヤツ!

…ゴオツ!

レイト「グハツ…!」

ドサツ

…場外ですね。

千早「勝者、室見メイ!」

絵奈 V S 祐樹

side 桜木咲子

メイ「タイムは3分40秒でしたね」

祐樹「分かった。…次の対戦相手を決めるぞ」 スッ

パラパラ…サツ！

祐樹「ん、絵奈と…俺だな」

絵奈「準備してくるよ」

祐樹「…早く倒さなくちやな」

―数秒後―

千早「8回戦…始め！」

祐樹「サンダーラッッシュ V 3！」 バチッ！

祐樹の先制攻撃。

絵奈「大国謳歌！」 ガシッ！

ッシュウウ…

絵奈「それは効かない…あれ？」

しーん

そこに祐樹の姿はなかった。

祐樹「……………」

…後ろに回り込んでるわね。

絵奈「後ろ？」クルツ

祐樹「遅えよ。サンド」

絵奈「よっ！」ガシツ

祐樹「彘」

絵奈は難なく祐樹の腕を掴んだ。

絵奈「ハアアツ！」

祐樹「え、ちよっ!？」

…アレは！

絵奈「背負い投げく！」ヒュン

ドゴオ！

祐樹「グフツ……！」

祐樹の背中が地面に激突した。

祐樹「痛え……」

絵奈「からの、ザ・タイフーンV2！」ザパーン！

祐樹「うおっ!?」サツ

絵奈は追撃をするが、祐樹に避けられた。

祐樹「危ないなコノヤロー！」

絵奈「今戦闘中だよ？」

祐樹「だろろうなチクショー！トラフィック・ジャムG3！」プロロツ！

絵奈「真激流の渦！」バツシャーン！

…愚者ツ！

絵奈「キヤツ！」

祐樹「エレキアーマー改！」ビリビリ

絵奈「くつ、ザ・タイフーンV2！」ザパーン！

祐樹「エレキトラップ！」バチバチツ！

…ギユウウン！

絵奈の攻撃は祐樹の防御を突き破る。

祐樹「…ハツ！」シャツ

しかし素早い動きで避けた。

絵奈「うそーん」

祐樹「ほんとーん。…トラフィック・ジャムG3！」

ブロロツ！

絵奈「(今度は、止める!)…大国謳歌!」ガシツ!

…愚者ツ!

絵奈「それは、させない!ハアアアア!」

ギユルルル!

祐樹「なっ!?!」

突然絵奈の体からエネルギーが溢れ出した。

絵奈「ハアツ!」

シユウウウ

祐樹「止めただと!?!」

今のは、何だったの?

絵奈「…止めた?」

祐樹「は?」

絵奈「止めれた?何で?」

祐樹「今お前の体からエネルギーが溢れ出してたんだぞ?」

絵奈「うん、知ってるけど…今の何?」

祐樹「……気にしないでおくか。サンダーラッシュV3!」ドッ!

絵奈「(さつき、全身が燃え上がるような感覚だった…) ……大国謳歌!」ガシッ!

絵奈は攻撃を止める。でも、少し焦ってるように見えるわね。

祐樹「今度こそトドメだ! トライツク・ジヤムG3!」

ブロッ!

絵奈「ッ……! (止める、止める、止めー)」

ギョルルル!

絵奈「!!」

祐樹「フア!」

絵奈の前に突然大きな手が現れた。

ガシッ

そして電気の車をつかんだ。

祐樹「何を…」

絵奈「(こう、かな?) ……えいつ!」

ポイツ!

手は車を投げた!?

祐樹「おいちよつと待て!」

ドゴオ!

祐樹「へぶっ!」

…ドサツ!

少し吹っ飛んだ祐樹はそのまま場外になった。

千早「勝者、貝塚絵奈!」

絵奈「やったあ!」

あの現象、何なのかしら?

咲子 V S 留美

side 桜木咲子

絵奈「タイムはく？」

千早「4分20秒…脱落する確率が高いな」

絵奈「そんなあゝ」

祐樹「…次は咲子と留美だ」

咲子「ふふっ、ぶっ飛ばしてあげる♪」

留美「私こそ、ぶっ飛ばされないであげますよ♪」

その文章で「私こそ」を使うのは間違つてない？

―数秒後―

♪Rolling Sky—Morning dawn

千早「9回戦…始めっ！」

留美「絶炎突！」ドゴォ!

咲子「ふっ！」ガシッ

留美の足を掴む。

留美「ふんぬっ…頭突き！」ブンツ！

咲子「ゑ」

…ゴンツ！

咲子「痛っ!？」

頭固いわね!？」

留美「爆熱ストームG4！」ゴオオオオ！

…ちよつとネタを思いついたわ。

咲子「フフフ…私の背中には魔王が封印されてるのよ！」

留美「…はあ？」

咲子「こうやってね！魔王・ザ・ハンドG3！」ガシン！

シユウウウ…

留美「あ、なるほど」

咲子「マキシマムファイア改！」ドツ

ギユウウン！

留美「ゴツドハンドX改！」ガシツ！

止められたわね…あ、そうだ。

咲子「千手観音改！」ギユン！

一旦千手観音を出す。

留美「…? (何をするの?)」

咲子「…行けっ!」バツ

ドゴオ!

留美「フア!?!」

数本の腕で留美を攻撃した。

留美「そんな使い方あります!?!」

咲子「あるのよ、それが。…ハアツ!」

今度は全方向から襲う。

留美「うわっ!…げっ!?!グホツ…」ドガツ!

咲子「…そろそろエネルギーがやばいわね」シユツ

千手観音を解除した。

留美「今のはかなりチートじゃないですか?」

咲子「別に、人によつては対策できるわよ?」

祐樹とか、ゼイルとか。

留美「もう本気でいきます…嵐竜巻ハリケーン!」ドゴツ!

ビユウウン!

そう来るのね……!

咲子「なら、私も受けて立つわ! クリムゾンハリケーンG2!」 シュツ!
ゴオオオオ!

竜巻と赤い台風がぶつかる。

留美「からの、爆熱ストームG4!」ゴオツ!

咲子「それは対策済みよ! 結界流しV2!」ガオン!

…ドガーン!

爆発が起きる。

咲子「……よし」ズボツ

留美「うっ…うわっ!」ビュウウン!

おお、飛んでいったわね。

咲子「私は地面に足を埋めてるから大丈夫だけど」

留美「そんなあああ!」

ドサツ

千早「勝者、桜木咲子!」

咲子「…ふう」ズボツ

肝心のタイムはどれぐらいかしらね?

千早「…おお、3分ちようどだ」

絵奈「ガン」

つまり、絵奈は脱落ね。

メイ「…咲子さん」

咲子「まさかランク戦以外で戦うとはね」

メイ「そうですね…今回は俺が勝つがな！」

本性出てるわね。

咲子「ふっ、望む所よ！」

また私が勝ってやるわ！

決勝戦①

♪Rolling Sky—Volcano
side桜木咲子

ザッ

祐樹「決勝戦につき、天使化、憑依は許可するぜ」

じゃあ、フルパワーで戦えるわね。

千早「決勝戦…開始！」

メイ「斬一閃」

ス

パ

ア

ン

！

メイは目の前の空間を斬った。

咲子「……？」

メイ「からの…真ゴツドノウズ！」ギユウウン！
…パリン！

咲子「!？」

空間が、割れた!?

咲子「千手観音改！」ガシン！

シユウウウ…

なんとか止めたわ…

咲子「今のは…？」

メイ「空間を割ることで弾幕の位置をあいまいにしたんですよ」
なるほど…

メイ「まあ、初見で止められましたけどね」

技によっては止められなかったわ…

咲子「話はここまでよ。極炎天桜舞！」B L O O O O M !

メイ「分身！」ポワン！

4人が現れ、ヤエが前に立つ。

ヤエ「超イジゲン・ザ・ハンド！」ギユルルル！

ギユン！

咲子「マキシマムファイア改！」ギユウウン！

クミ「トラフィック・ジャム！」プロロツ！

愚者ツ！

また防がれたわね…

咲子「これならどう？…天空落としV2！」ドゴツ！

ギユオオオ！

ナオ「絶フレイムウェイブ！」ドシユツ！

ニヨ「真激流の改！」バツシャーン！

シユウウウ…

咲子「なっ…」

メイ「これが本来出すべきの5人の力ですよ」

確かに、5人で分割してるわね…厄介だわ。

でも、これは流石に対応できないと思うわよ？

咲子「…ハアツ！」ドゴツ

地面を殴る。

メイ「…？」（恐らくグランドクエイクでしょうが…どうやって…？）

咲子「グランドクエイク！」

ドゴオオオ!

ナオ「!…怒りの鉄槌V3!」ドゴツ!

ナオは栓をするような防御をするけど…

ドガン!

エネルギーが爆発したわね。

ナオ「ぐわっ!」

メイ「至近距離で当たりましたね…(これはまずい…)」

…そろそろ使わないと負けるわねコレ。

咲子「天使化!」カッ!

シュウウウ…

咲子「結界アンヘル!」

ヤエ「天使化かい…」

咲子「新技を見せてやるわ…」ボツ

ドゴツ

火の玉を出し、空に蹴り上げる。

クミ(あたいは最強だから、止めてみせる!)

ゴオオオオ!

火の玉が突然弾け、爆炎となる。

シユルルルル…

ニヨ「……？」

咲子「焼き尽くせ…」

ジ・インフェルノ！」

ドゴドゴドゴツ、シユウウウ！

爆炎の上、両側に強い衝撃を与え、最後に両足で蹴り飛ばした。

威力は天空落としやグラウンドクエイクに劣るけど、燃費はかなりいいのよ！

メイ「ゴツドキヤツチG3…!?!」ジユウ…

ドシユツ！

メイ「キヤアツ!?!」

その火は、弾けるのよ。

咲子「…着火！」

ドガン！

…いい感じに決まったわね。

決勝戦②

♪MULAストーリー——オキセイギ

side 桜木咲子

メイ「ゴホッ……」

ニヨ「メイ、大丈夫？」

メイ「大丈夫ですよ……俺達も天使化した方がよさそうですね」

ナオ「オーケー。天使化！」カツ！

シュウウウ……

5人『昼の天使、オキセイギ！』

咲子「……」

天使化した5人はちよつとヤバいわね。

咲子「グランドクエイク！」ドゴツ！

……ドガン！

メイ「無影乱舞改！」サツ

避けられたわね。

咲子「…分裂」パラッ

右腕を気付かれないように切り離す。

クミ「隙ありい！」シユッ

咲子「ッ、極炎天桜舞！」B L O O O O M !

焦ってるフリをする。

ヤエ「アスタリスクロック！」ゴッ!

咲子「マキシマムファイア！」シユウウウ!

ズバッ!

ヤエの六花形の岩を斬る。

メイ「飛梅・燕返…」

咲子「…ふっ」ニヤリ

右腕をメイの後ろの地面から出す。

咲子「炎天掌！」ズガアン!

メイ「ガフッ!?!」

スッ

地面の中で生成していた火の玉を出す。

咲子「ジ・インフェルノ…地中バージョン!」

ドガアアアン！

ナオ「ぐわあっ!？」

咲子「天空落としV2！」ギユウウン！

ヤエ「ツ、超イジゲン「炎天掌」ぐっ」ズガアン！

右腕を操作してヤエに攻撃した。

クミ「この腕ええ！」シャツ

スパアン！

クミ「フア!？」

咲子「残念、斬撃は効かないのよ。分裂させるだけだからね♪」

…ホントは、自分から分裂しないと痛いんだけどね。

咲子「…戻れ！」

ヒユウウウ…カチツ

右腕を元の位置に戻す。

メイ「中々凄い作戦ですね…」

咲子「成功したのはたまたまよ」

メイ「そうですか。…命命斬り！」ズバツ！

咲子「結界流しV2！」ガオン！

キーン!

メイ「…チツ」

舌打ち!?

ニヨ「超雨天流蓮〜!」 B L O O O M!

咲子「極炎天桜舞!」 B L O O O O M!

シユバババツ!

メイ「(隙あり!) 斬一閃!」 シャツ

咲子「よっ」バラツ

メイの攻撃が当たる前に体を真つ二つに分裂させた。

メイ「ツ、厄介だな…」

もう完全本気モードのようね。

メイ「行くぞ!」

ビユウウン!

ボオオオオツ!

ゴオオオオオ!

バチバチツ!

ザパアアン!

5人『ザ・テンペストG2!』

ゴオオオオオオオ!

咲子「へえ…私も応戦するわ! 憑依…竜美!」ギユン!

ドゴツ!

後ろに青いドラゴンが現れる。

咲子「ドラゴン…スレイヤアア!」

ギユウウン!

ドゴオ!

混合した嵐と竜の波動がぶつかる。

咲子「…ハアツ!」バツ

メイ「…!?!」

咲子「チェイン! ジ・インフェルノ!」

獄炎で威力を上乗せした。

メイ「そんな、バカな!?!」

咲子「ハアアアア!」

ドガアアン!

メイ「グワアツ…!」

シユウウウ…

咲子「ハア、ハア…」

メイ「……………」バタン

千早「勝者、桜木咲子！」

勝った…！

2年2学期

夏休み明けの転校生

side 桜木咲子

勝てた…！

咲子「…疲れたわ」

ゼイル「お疲れ様だ、咲子」ナデナデ

咲子「ふふっ、ありがと」ギユツ

竜美「私も〜！」ギユツ

メイ「また負けました…」ズーン

レイト「まあまあ、もつと特訓すれば次は勝てるよ」

メイ「そうですね…頑張ります！」

祐樹「いや〜、予想通り優勝者は咲子だったな」

咲子「ええ」

祐樹「そこで、景品を渡そうと思う。千早、持ってきてくれ」

千早「ああ…MULAストーリー3部…エクストラステージパックだ！」

なん、ですって…!?

咲子「いろんな世界へ行ったアルミ・マリオの話…マジで!？」

これはヤバくない!?!いい意味で!

千早「マジだ。一応配信するつもりだが、そいつは初回限定版ってヤツだ」

おお…!

咲子「やったあああ!」

絶対後でプレイするわ!

そして、その夜やってみた結果、めちゃくちや作り込まれてて感動した私であった。

sideレイン・キサラ

レイン「お母さん」

アオイ「何々?」

レイン「日本の高校ってどう言う感じなの?」

アオイ「ん…秘密♪」

ええ…

レイン「教えてよ」

アオイ「それは自分で知るべきよ。それと、あなたが行くのは高校じゃなくて高専よ」

レイン「何が違うの？」

アオイ「それも秘密??」

レイン「むう…」

アオイ「そんな顔しても教えないよん」

レイン「……………」

花町高専…どんな場所だろ？

side 桜木咲子

夏休みの日々も普通に過ぎていき、今日から二学期である。

咲子「再びバトルデーになるわね」

メイ「俺は再び兄さんと勝負します」

咲子「私は…多分日和さんかな？」

前回負けたし。

キーンコーンカーンコーン♪

ガラガラ

日花「はいはいみんな席につきなさい」

ガタン。

日花「今日から新しい生徒が入るわ」

「先生く、男子ですか、女子ですか？」

日花「女子よ。じゃあ入って」

「はい」

スタスタ

レイン「レイン・キサラです。ソジックから来ました。よろしくお願いします」

日花「レインに質問はあるかしら？」

「はい！外国人ですか？」

レイン「どちらかといえば外国人ですね」

「属性は？」

レイン「水です。火も少し使えます」

へえ、2つ持ちなのね。

日花「…質問は以上ね。じゃ、レインはその席よ」

学の隣の席ね。

絵奈「……？」

咲子「絵奈、どうしたの？」

絵奈「なんか、雰囲気自分が似てるな〜って」

咲子「へえ…」

彼女もマイペースなのかしら？
…ま、その内分かるわね。

マイペースVSマイペース!?

side 桜木咲子

休み時間になり、レインの周りには人が集まっていた。

「好きなゲームは？」

「転校してきた理由は？」

「IDどんぐらい？」

IDじゃなくてIQね。

レイン「あのお、今弁当食べてるから後にしてくれないかな？」

うん、正論ね。

…私？弁当食べながら様子を見てるわ。

絵奈「……………」

絵奈も弁当を食べながらレインをじっと見ている。

翔「どうしたんだ、絵奈？」

絵奈「…なんでもないよ」

咲子「……………」

珍しく語尾を伸ばしてないわね。

弁当を食べ終わっても、絵奈はレインをじっと見ている。

絵奈「……………」ガタン

スタスタ

レイン「…………？」

絵奈「…キサラさん」

レイン「何かな？」

絵奈「…君にランク戦を申し込むよ〜！」

全員『!?!』

学「マジかよ!?!」

メイ「いきなりランク戦ですか…」

レイン「ランク戦…うん、分かった」

全員『えー!?!』

そりや驚くわね。

絵奈「じゃあ放課後だね〜」

レイン「望む所だよ♪」

これは見どころね。

―数日後―

千早『さあ始まりました、今学期最初のランク戦!』

千代『どうやら2人とも水属性のようです!』

実況者兼プログラマーが言う。

絵奈(この子の波長が私に近い…だから戦ってみたいんだ!)

レイン(初めてのランク戦、頑張るぞ〜!)

千早『ランク戦…開始ッ!』

絵奈「…先手は譲るよ」

レイン「ありがとう…」スッ

ギユイーン!

絵奈の周りに光線が現れる。

…ガスターブラスター?

絵奈「ゑ」

レイン「ソウルブラスター!」

ドガン!

絵奈「…止める!ハアッ!」ギユン!

絵奈の周りにエネルギーが集まる。

絵奈「大国謳歌改！」ガシツ！

シユウウウ…

絵奈「ふう〜（なんとか止めれたよ〜）」

新しく目覚めた能力を活用してるようね。

まだ不明な点は多いけど。

レイン「まさか私の初見殺しと言われている攻撃を止めるとはね」

絵奈「油断できないのはわかってるからね〜！今度は私の番だよ！」ザパッ

絵奈が細長い水の塊に乗る。

絵奈「ザ・タイフーンV3！」ザパーン！

レイン「おお…」

レインはそれに見とれている。

レイン「…白炎結界！」ボツ！

レインの前に白い炎が燃え上がる。

シユウウウ…

その炎がザ・タイフーンを蒸発させた。

絵奈「え〜…」

レイン「私も防御技を持つてるんだよ♪」

絵奈「うーん…（多分だけどレインの能力はタマシイを操る能力だと思うんだよね）
…どう攻撃するかな…?）」

レイン「来ないのかな? じゃあ…ハッ!」ザッ
ギュイン!

咲子（急、まさか…）

レイン「破壊光線!」

ジビビビッ!

青と赤が混ざった光線が飛んでいく。

絵奈「ええ!?!」

…ドガン!

マイペース…な勝利

side 桜木咲子

まさかポ○モンでかなり強い技である破壊光線を使うとは…絵奈は大丈夫なのかしら？

絵奈「…ふう」バシヤツ

大量の水で防いだようね。

レイン「あちやあ、防がれちゃったか」

絵奈「…そういえば、久々だねその技見るの」

…久々？

レイン「そうだね、最後見せたのは3年前ぐらいだったかな？」

…この2人、会った事があるの？

絵奈「…話はここまでにそうか、“お姉ちゃん”」

咲子「お姉ちゃん!？」

そんな事一言も言っていなかったわよね!？」

レイン「言っちゃっていいの？」

絵奈「いいよ、別に減るもんじやないし。ハアッ！」ドッ！

絵奈が大量の絵を描いて実体化させる。

絵奈「オーバーサイクロンG5〜！」キラッ！

ドスン、ドスン！

レイン「白炎結界！」ボッ

…ドスン！

レイン「ええっ!?!…キヤッ！」ドゴッ

絵奈「やたっ、当たった〜！」

レイン「流石私の妹だね。…でも、まだ奥の手があるんじゃない?」

絵奈「あ、分かつちやう〜?」

十中八九天使化の事でしょうね。

レイン「それをやってみてよ。太刀打ちできるか試したいし」

絵奈「う〜ん…分かった！天使化！」カッ！

え、使うの!?!

シユウウウ…

絵奈「絵画アンヘル！」

レイン「……………」(。D。)

そりやそんな顔になるわね。

絵奈「えつと…?」

レイン「……………か」

絵奈「か?」

レイン「かつこいいいいいい!」(☆○☆)

めちやくちや目が光つてる…

絵奈「…攻撃していいかな?」

レイン「どうぞどうぞ!」

絵奈「…ザ・タイフーンV3!」ザパーン!

レイン「ソウルブラスター!」ドガーン!

…シユウウウ!

レイン「うわっ!」

絵奈「見た目だけじゃなくてパワーも上がるんだよ」

レイン「す、すごい…!」

絵奈「この状態で倒すよ!真激流の渦!」バツシャーン!

レイン「……………じゃあ、私も本気を出すね?」

絵奈「本気…?」

レイン「ソウル融合！」カッ！

レインが光りだす。

シユウウウ

絵奈「えく!?」

絵奈の攻撃はレインに触れた途端蒸発した。

…カッ

レイン「…よし！」

レインの髪色は青がかっており、目は光っていた。

絵奈「お姉ちゃん、かっこいいよ〜！」

レイン「ありがとう。じゃあ一騎討ちだよ！」

絵奈「うん！」

ドッ！

レイン「破壊光線！」ジビビビッ！

絵奈「ザ・タイフーンV3！」ザパーン！

…ドシユウウウッ！

蒸気が爆発した。

…まあ、観客席は守られてるから大丈夫だけど。

蒸気が晴れると…

絵奈「…うええ!?!」

レイン「やったああ!」

絵奈が場外になつていた。

千早『勝者、レイン・キサラ!』

千代『よつて、学年ランク5位に昇格です!』
マジか。

学年ランクが変わるとは思わなかつたわ。

絵奈とレイン

side 桜木咲子

リンク変動が終わった後、私達は基地にレインを連れてきた。

レイン「おお……」

絵奈「ココが私達の基地だよ」

レイン「もうなんか、凄いや！（語彙力皆無）」

なんか予想通りの反応ね。

咲子「それで、説明してほしいんだけど」

絵奈「何を？」

咲子「アンタ達2人の関係よ」

レイン「……分かった、説明するよ」

絵奈「これは大体15年前の話かな？」

つまり生まれて間もないって事ね。

side レイン・キサラ

ー回想ー

私と絵奈は双子として生まれた。

生まれたのが先だったので私が姉、絵奈は妹になった。

…しかし、私達は肉親に捨てられた。

後に聞いた話だと、両親は貧乏でとても子供を育てられる環境ではなかったらしい。

…しかもクズだったらしい。

私達は路地裏に捨てられていた。

その時だった。

「あら、なんで子供が？」

私の恩人、坂田日花さんが通りかかったのだ。

日花「…捨てられたのね、かわいそうに」

私と絵奈は日花さんに拾われた。

「あゝ」

「わあゝ」

日花「どうすればいいと思う？」

平尾「そうだね…友達に相談してみよう」

そして、私のお母さん…アオイ・キサラが来た。

アオイ「この子達が捨て子なの？」

日花「そうなのよ……どうすればいいと思う？」

アオイ「……………」

お母さんは少し考えた後、こう答えた。

アオイ「私が1人引き取るわ」

日花「えっ……？」

アオイ「金銭的に1人なら育てられるわ」

日花「ありがとう、アオイ……！」

「わあ〜！」

アオイ「よろしくね」

「あわあ〜」

アオイ「名前ね……」

ザーツ……

外の天気は雨だった。

アオイ「……貴女の名前はレイン。レイン・キサラよ」

レイン「わあ〜♪」

こうして私はお母さんに引き取られた。

絵奈は数日後に日花さんの友達である貝塚さんに引き取られたらしいわ。

―回想終了―

side 桜木咲子

レイン「こんな感じだね」

絵奈「まさかお姉ちゃんが転校してくるとは思わなかったよ」

レイン「私こそ、気分が悪いつてお母さん言ったら何故かココに来たし…」

咲子「それにしても、アンタ達はずでに日花先生に会ってたのね」

絵奈「うん。秘密にしててごめんね？」

咲子「大丈夫よ。…所で、レインは火属性でもあるんでしょ？」

レイン「そうだけど？」

咲子「じゃあ、ワンチャン絵奈も火属性技を覚えられるんじゃない？」

絵奈「…確かに〜！」

レイン「でも、この属性は恐らく能力によるものなんだよね」

咲子「アンタの能力は？」

レイン「タマシイを操る能力って言うんだ」

…え、何そのビツ〇ママみたいな能力。

分かりやすい（ワケではない）絵奈の新能力

side 桜木咲子

レイン「タマシイを操る能力って言うんだ」

…え、何そのビツ〇ママみたいな能力。

咲子「絵奈は絵を実体化：「いや、違うよ」…え？」

絵奈「夏休みの時の勝負の後、少し分かったんだ」

レイン「なにになに？どんな能力なの？」

絵奈「考えてる事がある程度実体化する能力だよ」

………は？

咲子「は？」

ドユコト？

絵奈「え」と、説明するとね〜：」

短くするとこうだった。

まず、絵奈が何かを考える。

次に、それを物、つまり物質としてエネルギーで実体化させる。

最後に、周りにあるものでそれをより実現できるようにする、らしい。

絵奈「こんな感じかなん？」

レイン「私に似たような能力だね」

絵奈「そだね」

咲子「…ちよつと待って？」

絵奈「んん？」

咲子「周りにあるものでそれをより実現できるようにするって何かしら？」

絵奈「たとえば、周りに砂があるとするでしょ？」

咲子「…ええ」

絵奈「それで、実現したい事が”攻撃を止めること”とするじゃん？」

咲子「………」

絵奈「そこで、エネルギーを実体化させたものに砂を纏わせる事で防御力を高めるんだよ」

レイン「なるほど！」

咲子「…結構難解ね」

絵奈「まあ、ある程度分かっただけだし…」じつ

咲子「…何？」

絵奈「咲子の能力も一部しか分かってないでしょ〜?」

レイン「え、そうなの?」

咲子「まあ、確かにそうね」

相手の能力を解除する事、自分の体を分裂させる事…共通点が見つからないけど。

絵奈「…そろそろこんな話は置いとこうか〜」

レイン「そうね〜」

絵奈「3人でゲームしようよ〜」

咲子「え、ええ…」

切り替え早すぎね。

これがマイペースの力なのかしら…?

(多分違います)

side 坂田日花

日花「…中々ね、レインの力は」

見たところパワーはゼイルすら越えてそうね。

(実際に越えてる)

「それで、何で私がココに?」

日花「特別にアンタに見せたかったのよ、アオイ」

アオイ「まあ、いいものが見れたからいいけどね」

日花「レインと絵奈の姉妹喧嘩、どうだったかしら？」

アオイ「絵奈の天使化がカッコ良すぎるよ…！」

日花「アンタもレインと同じ感想なのね」

血は繋がってなくてもそこは似てるのね。

アオイ「しかもさ、レインの破壊光線を防いだんだよ!? 凄くない!?!」

日花「そんなに凄いの？」

アオイ「うん、ソジックでは防げない無敵の技だったのよ!」

日花「へえ〜」

レインが破壊光線なら…

side 桜木咲子

次の日。土曜日だった。

私はいつも通りゼイル、竜美と3人で高専の戦闘場にいた。

竜美「ぶつ飛び…パンチー！」ヒュン!

ゼイル「クレセントぐおっ!?」ドゴオ!

咲子「あちやあ…」

竜美のパンチはゼイルの顔面にめり込む。

ゼイル「い、痛え…」

咲子「大丈夫、ゼイル?」

ゼイル「こう見えて大丈夫だと思うのか…?」

うん、大丈夫じゃないわね。

「お〜いー!」タタタ

ん?

咲子「…絵奈とレイン」

「レイン「土日もココで特訓できると日花さんから聞いてさ」

絵奈「いや、私も知らなかったよ！」

おい。アンタは約2年半ココに通ってるわよね？

咲子「はあ…それで、どんな特訓をするの？」

レイン「…私、破壊光線が使えるでしょ？」

咲子「…そうね？」

レイン「それで、絵奈は…」

絵奈「ギガインパクトを覚える事にしたんだ！」

………え？

咲子「何故そうなる？」

レイン「だってさ、お揃いじゃん？」

絵奈「それと、強い技を覚えたいと思ってる」

咲子「は、はあ…」

竜美「…お母さん、この人は？」

レイン「…お母さん？咲子はもう出来ちゃってたの？」

咲子「ち、違うわよ。説明すると…」

―ただ今説明中―

レイン「なるほど…よろしくね、竜美ちゃん♪」ニコツ
竜美「うん！」ニコツ

絵奈「じゃ、ギガインパクトを覚える特訓を始めよう〜！」

レイン「おー！」

………ん？

咲子「絵奈」

絵奈「何〜？」

咲子「どうやってギガインパクトを覚えるの？」

絵奈「技マシン…なワケないから、とりあえず想像してみるよ〜」

じゃあ想像から始まるワケね、はあ…

咲子「しようがないし、手伝うわよ」

絵奈「ありがとう〜！」

ゼイル「……俺空気か？」

side 室見メイ

メイ「………」（。D。）

ナオ「どうしたの、メイ？」

メイ「とんでもない事実に辿り着きました…」

ヤエ「その事実って何さ」

メイ「俺、いや俺達は多重人格じゃないですか」

クミ「そうね」

メイ「普通、別人格って、主人格に精神的負担がかかりすぎた時に起きるんですよ」

ニヨ「…それで？」

メイ「俺、精神的負担とかクソもないですよね？」

ナオ「…言われてみれば、確かに」

ヤエ「……………」

クミ「偶々発生した、とか？」

ニヨ「気にしないでおけば？」

メイ「うゝむ……………」

謎は深まるばかりですね…

メイ「…今は気にしないでおきますか」

この謎が、後々意外な形で判明する事になるのは、結構後の話である。

…絵奈はギガインパクトを覚えるよね？

side 桜木咲子

絵奈「まずは想像だね〜」

咲子「ギガインパクトって、めちゃくちゃエネルギーをぶっ放せばいいんじゃないの？反動があるかは置いといて」

レイン「確かに。私の破壊光線は反動なんてないし、バンバン撃てるよ」
それは聞きたくなかったわ…

絵奈「じゃあやってみるよ〜」

ザッ

絵奈（思いつきりぶっ放す…!）

ギユイイン…!

絵奈の周りを大量のエネルギーが渦巻く。

絵奈「（今だ〜）ギガインパクト〜」ドゴツ!

…ドガーン!

絵奈「うわっ!?!」

空気が圧縮された結果、絵奈吹き飛ばされた。

ゼイル「…なるほどな」

咲子「なんか分かったの？」

ゼイル「ああ。…レイン」

レイン「何かな？」

ゼイル「破壊光線を撃つ時、お前の足腰はどうなってるんだ？」

…へえ。分かったわ。

レイン「足腰？普通に踏ん張って…そうだ！」

絵奈「??？」

レイン「絵奈は足腰の踏ん張りが足りないんだよ！」

絵奈「踏ん張り…？」

レイン「だから、まずはそれを鍛えよう！」

絵奈「お、おおく！」

咲子「……………」

マジでこの2人の謎のシンクロ感が分からないわ。

ゼイル「…咲子、アレを持ってこればどうだ？」

咲子「ええ、ちよつと待って」

2人『??』

竜美「なになにく？」

―数分後―

咲子「…よいしょつと」

ドスン

絵奈「コレは…！」

レイン「タイヤ？」

咲子「そ、タイヤ」

それも、十個ぐらい積み上げたものね。

レイン「コレでどうするの？」

絵奈「引つ張るんだよ」

咲子「その通り」

レイン「ええっ？」

咲子「日本の陸上部とかはよくやってるわよ？」

レイン「そうなんだ、知らなかった…」

ゼイル「ほい、縄だ」

絵奈「ありがと。…こうかな？」キユツ

絵奈は縄を腰に締める。

そして絵奈の背後には…

ドーン

レイン「……………」(。D。)

十個のタイヤが積み上げられていた。

絵奈「じゃあ行くよ〜！」ダンッ

ギギギッ…

絵奈は少しずつタイヤを引っ張っていく。

絵奈「んぬぬっ…！」ギギッ

レイン「頑張れ〜！」

…こりやつ結構な時間がかかりそうね。

ルマ「じゃあ行くよ！」

翔「…ああ！」

ルマ、ナオ、レイト『ランドファイアG2！』ゴオオオオオ！

翔、学、育也『皇帝ペンギン3号G2！』ギユウウン！

ドゴオオオオ！

大地を抉る炎と紫色のペンギン（超強化されてる）がぶつかり合う。
メイ「からの…命命斬り！」

…ズシヤア！

6人『はあ!?!』

メイはなんと、能力なしでそれらを斬ったのである。

…ペンギンはもちろん斬ってないが。

再戦! 3代目 v s 闇炎①

side 桜木咲子

週明け。

絵奈は土日で1日中タイヤを引っ張っていた。

レイン「頑張ったね、絵奈!」

絵奈「うん! 後は技を完成するだけだよ!」

咲子「そうね…きなさい!」

絵奈「行くよ…ハッ! (思いつきり、ぶっ放す!)」

ギュイン!

絵奈の周りを大量のエネルギーが渦巻く。

レイン「……………」

咲子「来る…!」

絵奈「ギガインパクト…!」ドッ

ゴオオオオ!

絵奈が途轍もないスピードで突っ込んできた。

咲子「結界流しV2！」ピキッ！

…パキッ

咲子「…！」

絵奈「ハアアアア！」

パリイン！

咲子「ツ…！（私の結界流しがあつさりと…）」

絵奈「…やったあ！完成したよ〜！」

レイン「おお…！」

咲子「…ふふっ」

絵奈もある程度は私と戦えそうね。

―数時間後―

千早『さあ始まりました、二学期のバトルデー！実況は七隈千早と…』

千代『七隈千代がお送りします！』

千早が実況で敬語を話すとは、珍しいわね。

咲子「…ふう」

相手は日和さんだ。

今度こそは勝つ！

咲子「……………」スタスタ

千早『先に入場したのは、3代目桜こと桜木咲子選手です!』

千代『彼女は憑依する技術を習得したそうです。どう扱うのかが見どころですね!』

スタスタ

日和「ハロー♪」

咲子「こんにちは、日和さん」

日和「今回も私が勝ってあげるよ」

勝って“あげる”って…

咲子「まさか舐めてます?」

日和「…さあ?」

うわあ…

千早『1回戦…開始ッ!』

咲子「極炎天桜舞!」B L O O O O M!

日和「なるほどね…真月夜桜舞!」ギユウウン!

…音が若干違う…?

日和「ん、どうしたの?」

咲子「…なんでもありません。ジ・インフェルノ!」ドゴッ

シユウウウ！

日和「火球には…火球だよ！ヘルフレイムS！」ドツ

(V4↓S)

ゴオオオオ！

咲子「フア!?!」

シユウウ…

私の火球は日和さんの巨大な火球に飲み込まれた。

咲子「ツ、空中分解G3！」パラッ

シユッ…

日和「ええ!?!」

体をバラバラにし、火球から離れる。

咲子「……………」スッ

気付かれないように左腕を日和さんの後ろに置く。

そして元の位置に戻る。

日和「能力の事は知ってたけど、実際に見ると少し怖いね…」

顔が怖がってないんですがね。

咲子「炎天堂改！」ズガァン！

日和「おっと」ギユン

キーン!

日和さんの闇に攻撃が防がれた。

初登場補正はないのね……(メタい!)

咲子「(左手を地面に埋めて、と)……マキシマムファイア改!」シュウウウ!

日和「ハアッ!」ドッ

シュウウウ……

再び闇に防がれた。

咲子「なら、これはどうですか?……ハアッ!」ドゴッ

地面を殴る。

……日和さんの背後にある左腕も同じ事をする。

日和「(動作から見てグランドクエイクかな?)……闇結界」ギユン

日和さんは前方だけを防ぐ。

咲子「意味ないんですよ……グランドクエイク!」

ドシュウウ!

日和「……なっ!?!」

ドガーン!

朝の陽光！・3代目V S 闇炎②

side 桜木咲子

日和さんの前後からグランドクエイクを放った。

咲子「…ふふっ」

日和「ケホツ、痛いね…まさかあんな範囲だとは思わなかったよ」

咲子「油断は禁物というじゃないですか。ふっ！」ドツ

シユルル…

咲子「天空落としV2！」ギユウウン！

日和「…ハアツ！」ギユン

日和さんは火…いや

咲子「熱…？」

高温の熱を纏った。

日和「煉獄パンチ！」

バゴオン！

咲子「跳ね返した!？」

なら…

咲子「魔王・ザ・ハンドG3!」ガシッ!

シュウウウ…

なんとか止めれ…!

日和「……………」ニヤリ

ドスッ

咲子「…………ふっ」

日和「…あれ?」

カラン

私の背中があつたところから炎のナイフが落ちる。

咲子「同じ手には引つかかりませんよ」パラッ

私は背中をすでに分解してたのである。

日和「へえ…やるね。そろそろ本気を出しちやおうかな?」

咲子「いいでしょう…」

2人『天使化!』カッ

シュウウウ…

咲子「結界アンヘル!」

日和「闇の天使、アマド！」

お互いが天使化をする。

咲子「先手は譲りますよ」

日和「ふーん？君こそ私を舐めてない？」

咲子「力を試したいだけです」

日和「そう、分かったよ…！」スツ

ギユイイン！

日和さんの手から闇が溢れ、集まっていく。

やがてそれは剣となった。

日和「シャドーフューリー！」

闇と炎を凝縮した厨二病じみた剣ね。

日和「行くよ…ツ！」ドツ

速いわね…！

ズブツ

予め右足を地面に埋め、体勢を整える。

日和「ハアツ！」ギユン

咲子「空中分解G3！」パカーン

真つ二つに割れる。

日和「そうすると思った、よッ!」ズバッ

咲子「ガハッ…(演技よ、ふふっ)」

日和「追撃イ!」シヤッ

咲子「烈焼脚改!」ドゴオ!

キイン!

日和さんの剣と私の足がぶつかる。

…もう片足を日和さんの背後から出す。

日和「フンッ!」ギイン

咲子「ッ…」

力比べは日和さんが勝った。

でも…

ドゴッ!

日和「ぎやっ!?(足いい!?)」

咲子「天空落としV2!」ギユウウン!

日和「グハッ…! (強い…3学期と比べて段違いだよ…)」

咲子「…とうっ!」ドッ

ギユイイン……!

日和「えっ……(今発動するの!?どれだけエネルギーが溜まってんの!?)」

咲子「ぶっ飛べ……クリムゾンハリケーンG2!」ギユン

ギユオオオオオオ!

日和「(まさか……)まで追い詰められるとは思わなかったよ……)……ハアッ!」ポツ

咲子「……?」

日和さんは青い炎を全身に纏う。

日和「止める……モーニングドーン!」ダッ

ドゴオ!

日和さんは地面を殴り、青い炎を噴出させた。

ギユウウン……

咲子「(止まるな……)憑依……竜美!」カッ!

日和「!?!」

咲子「極炎天桜舞……竜!」ギユウウン!

日和「なっ……!」

ドゴオオオ!

日和「ガアッ……(負ける、なんて……)」ヒュン……

…ドゴオ!

日和さんはぶっ飛び、壁に激突して倒れた。

『…勝者、桜木咲子選手〜!』

兄妹喧嘩 ①

side 桜木咲子

日和「いや、まさか負けてしまうなんて思わなかったよ」

咲子「油断してました？」

日和「するとも？ 咲子は実力で私に初めての敗北を教えたんだよ」

咲子「…え、初めて負けたんですか？」

日和「うん、入学してから初めてだね。模擬戦含めて」

マジか。

日和「じゃ、そろそろ保健室へ行こっか」

咲子「ですね」

スタスタ

その後、アルコールが傷にめちやくちや染みたのは別の話。

side 飛羽野ゼイル

茜「…お兄ちゃん」

ゼイル「なんだ？」

茜「今回は私が勝つからね！」

ゼイル「お、おう……」

戦闘開始直前、茜がそんなことを言ってきた。

千早『さあ、この兄妹喧嘩は一体どちらが勝つのでしょうか！』

兄妹喧嘩言うな。

千代『2回戦…開始！』

茜「行くよっ！」ドッ

ん、前（ちよつとした大会）と比べて速くなって…いや

ゼイル「風で加速しているのか」

茜「その通り！エアバレットV2！」ギョルルルル！

ゼイル「クレセントムーン！」ゴオツ！

キーン！

風の球を弾き返した。

茜「一個は流石に無理か…じゃあ大量に！」ビュン

ポイポイポイツ！

ゼイル「東方の弾幕かよ…」

それぐらい密度があった。

ゼイル「エアライドV2！」スタツ
ササツ！

弾幕を少しずつ避けていく。

茜「ほいほいほーい！」

ゼイル（なるほど、攻撃力が足りないなら弾数で勝負ってか）
なら、ちようどいい技があるな。

ゼイル「ハッ！」ギユン

周りに影が溢れる。

茜「…？」

ゼイル「ダークブラスター」スツ

ゴオオオオ！

手から凝縮した影を光線のように発射する。

…一応、シャドースクリューの強化版だ。

(回転はどっこいだった!?)

バスッ！

弾幕を消し飛ばした。

茜「ええっ、ちょっとそれはないじゃん!？」

ゼイル「今は戦闘中だ、ルールを破らない限りなんでもありだろ？」

茜「むう：絶風斬！」ズバツ

ババババツ！

今度は飛斬撃かよ：

ゼイル「ダークブラスター」スツ

ドガン！

前方の弾幕を消しとばす。

茜「：とうっ！」

シヤツ！

横からもかよ：

ゼイル「飛ぶしかないおい！」サツ

別に当たっても支障はないが、俺の中の弾幕ゲーは全弾避けたいとう謎のプライドが

許さないんだよお！

ゼイル「天空落としV2！」ギユウウン！

茜「うわっ!？」

掠ったようだな。

茜（弾数で勝負しようと思ったけど、やっぱり無理だったのかな？）
弾幕を全て消し飛ばした。

茜「…そうだ！」

ゼイル「？」

茜「能力を活用すればいいんだった！」ピラッ

兄 妹 喧 嘩 ②

side 飛羽野ゼイル

茜「…そうだ！」

ゼイル「？」

茜「能力を活用すればいいんだった！」ピラッ

茜は突然そんな事を言い、能力であるスキマを開いた。

ゼイル「何をする気だ…？」

茜「こうする気だよ…よっ」スポッ

茜はスキマの中に入り、上半身だけ出す。

ゼイル「はあ…？」

茜「そして…こうっ！」

ドッ!?

ゼイル「ッ!？」サッ

何だ今の!?

茜「ハロー」

茜はいつの間にか反対側にいた。

ゼイル「……………ほう」

なるほど、ジッパーのようにスキマを動かす事で半端ない機動力を持つのか…

茜「これを活用して…：そうれそうれ！」ポイツ！

再び放たれる弾幕。(エアーバレットV2)

ゼイル「しかも機動力が上がってるから下手に動けないな…」

……………ん？

茜「……………♪」ピラッ

茜が俺の頭上でスキマを開くと…

ドバババツ！

ゼイル「フア!？」

大量の弾幕が降ってきやがった。

ゼイル「おいふざけんな！」ササッ

四方八方から飛んでくる弾幕なんて誰が避けれるんだよ！

茜「お兄ちゃん」

ゼイル「それ言うな！」

後、声に出ってたのかよ！

…チクシヨウ、どうすりやいいんだ？

ゼイル「ダークブラスター」ドガン！

…シユウウウ！

コイツは2秒しか弾幕を消さないしな…

茜「ほれほれ〜！」ニヤニヤ

ゼイル「……………」イラッ

その顔、な〜んかムカつくな…

ゼイル「ぶん殴ってやるよおお！」ドッ

茜がいる方向に突っ込む。

茜「あ。ほい」シユッ

しかし目の前でスキマを閉じられた…

ゼイル「ッ!?あぶねえ…」

後少しで場外になるところだったぞ…

茜「お兄さんこちら、弾幕の方へ〜♪」

(元ネタ：鬼さんこちら、手の鳴る方へ〜♪)

さらっと替え歌を作ってやがる…

ブチッ

ゼイル「もうキレたゾ☆悪魔化あああ！」
ギユオオオオ！」

茜「…あれ？なんかオーラが強くなってるような…」
シユウウウ…

ゼイル「ぶっ飛ばしてやるぞ、妹よ」

茜「やれるものなら」「やってみるぜ？」…
「…」
圧倒的スピードで茜の後ろに回り込んだ。

ゼイル「オリヤア！」

ゴンツッ！

茜「いたらい…」

ゲンコツを叩き込んでやった。

ゼイル「こんなんじや済まないぞ？」ニコツ

茜「えっ…でも、私年下の妹…」

ゼイル「んなもん今は関係ねえんだよおおお！」ゴオオオオオ

茜「…オワタ」

ゼイル「デビルバーストG3イイイ！」ギユウウン！

茜「ッ、とうっ！」シユツ

茜は急いでスキマを閉める。

…そうすると思ってたぜ。

ゼイル「もう片方のスキマ狙いなんだよおお！」

茜「えっ…!?!」

ドゴオオオ!

茜「ギャフン！」

ヒユウウウ…

ゼイル「…つと」ガシツ

茜「ちーん

『…勝者、飛羽野ゼイル!』

ゼイル「ふう…」

疲れたな…

兄妹喧嘩 ③

side 室見メイ

メイ「また、戦いますね」

出夢「今度こそ僕が勝たないと、兄としてのプライドが立たないからね…」

千早『3回戦も兄妹喧嘩！ 一体どちらが勝つのでしょうか!?!』

兄妹喧嘩言わないで下さい！

千代『3回戦…開始ッ!』

それでは早速…

メイ「戦略：初見殺し！」

スパパッ！

次元斬りで俺の目の前の空間を斬って斬って斬りまくります。

出夢「…?」（もしかして、視界を斬ってる?）」

メイ「からの…真ゴツドノウズ！」ギユン！

…パリン！

まるで画面が割れたように、空間が割れました。

出夢「!?（違う、空間ごと割ったのか!）バツテンスロウV2!」ドッ!
シユウウウ…

メイ「戦略：初見殺しは破られましたか…」

出夢「似たようなものを別の人から食らった事があるからね…」

メイ「そうですか。なら、これはどうです?分身!」ポワン!

4人とも一気に出しました。

メイ「四方と空中へ移動です」

4人『了解』

ダッ

出夢（囲まれた…今度は何を?）

この技は恐らく、咲子さんじゃ破れません…

5人『斬一閃改!』

ス パ ア ン !

お兄さんの頭上、そして周りの空間を斬りました。すると…

ギユウウウ…!

出夢「なっ!?」ドゴッ

斬れた空間がコピー&ペーストをされたように広げられ、俗に言うミラーダイメン

シヨンになりました。

5人『Q・E・D』

(略：クワントンタイム・エンドレス・ダイヤモンドシヨン)

一応、これは奥義技です。

出夢「この空間は…ッ」サツ

地面の一部が浮き、お兄さんに向かって飛んで行きました。

出夢「いつ、こんな技を？」

メイ「…能力に目覚めてからずっと鍛えてました」

つまり大体10ヶ月です。

出夢「そうかい。極重力球…弾幕！」バババツ！

お兄さんは青紫色の弾幕を放ってきました。

メイ「分身解除」ポワン！

この状態の方が避けやすいですね。

メイ「極火斬り！」

ズバツ！

俺から半径2メートル以内の弾幕を全て斬りました。

出夢「この空間は脱出できないけど、逆に利用はできる…！」バツ！

メイ「そうですか…ッ！」

出夢「極重力球弾幕！」バババツ！

お兄さんは弾幕を再び放ってきます。

完全に東方ですね。

メイ「飛梅・燕返し改！」シャツ！

金色の飛斬撃を飛ばし、お兄さんを狙いました。

出夢「…っ、危ない」サツ

メイ「チツ」

出夢（え、メイは舌打ちするのかい!?）

攻撃が当たらなくてイライラしますね…

メイ「…本気モードだゴラア！」

ぶっ飛ばしたるわ！

メイ「命命斬りイ！」

ズバズバツ！

出夢「ちよ…!?」（口調が変わった瞬間、威圧感が強くなった…）

倒してやるぜええ！

兄妹喧嘩 ④

side 室見メイ

メイ「命命斬りイ！」

ズバズバツ！

出夢「ちよ：！？（口調が変わった瞬間、威圧感が強くなった…）」
倒してやるぜえええ！

出夢「ツ、真グラビティスラッシュ！」ズシヤツ！

メイ「…チツ」

止められたか。

メイ「絶風神の舞！」ビュウウン！

ぶっ飛べ！

出夢「その対策はできてるよ…ハツ！」ズシツ！

メイ「…！」

自分にかかる重力を増やしたのか…

メイ「ならこうだな。…ドラア！」ドッ

刀を構えて兄に突っ込む。

メイ「命命斬り！」ズバツ！

出夢「バツテンスロウV2！」ギユン！

…キイン！

刀とバツテンがぶつかる。

メイ「ハアアアア！」

出夢「うおおおっ！」

…ドゴオ！

メイ「ツ！」ドサツ

出夢「…ふう」スタツ

エネルギーで俺達は弾かれた。

兄は宙返りをして着地したが、俺は大勢を崩してしまった。

出夢「（隙あり！）真グラビティスラッシュ！」ズシャツ！

兄の攻撃は直撃した。

メイ「ガハツ…！」ズドツ

こうなったら…！

メイ「分身！」ポワン！

4人が現れた。

メイ「場所につけ！」

4人『了解！』ダッ

シヤッ！

出夢「…まさか！」

メイ「行くぞ…」

5人『Q・E・D！』

ス パ ア ン ！

範囲をさらに絞り、兄の行動範囲を小さくした。

出夢「しまった…」

メイ「かーらーのー？」

ビュウウン！

ボオオオツ！

ゴオオオオ！

バチバチツ！

ザパアアツ！

5人『ザ・テンペストG2！』

ゴオオオオオオオオ!

出夢「くつ…:(どうすれば…!!!) ハアッ!」ギユン

兄は何故か動かず、そこに留まる。

メイ「ぶつ飛べええええ!」

出夢「僕は絶対に、負けないよ!」ズシッ

メイ「…?」

何をする気だ兄は?

出夢「名付けて…重力・ザ・ハンド!!」

ズシイッ!

青紫色のエネルギーで出来た大きな手が現れ、混合した嵐がそれにぶつかった。

出夢「うおおおおおおおおおっ!」

…ズシユッ!

メイ「なっ!?!」

ザ・テンペストG2が、威力の巻き戻しごと止められただと!?

出夢「ハア、ハア、止められたよ…!」

メイ「まさか止められるとは思わなかった」

出夢「もう互いが限界じゃないのかい?」

メイ「だな、ハハッ…」

天使化する体力もねえ…

メイ「分身解除！」ポワン！

これでもう少し持つハズだ。

出夢「続けようか…真グラビティスラッシュ！」ズシヤッ！

メイ「ゴッドキヤッチG…グフツ!?」ズドツ！

は、速い…!?

出夢「気付かなかったようだね。僕は周りの重力を少しずつ強くしてたのさ」

メイ「なん、だと…」

出夢「おかげでメイの体力消耗も大分早くなった。…フンツ！」

カッ！

メイ「ガッ…」

バタン

出夢「僕の作戦勝ちだよ」

千早『勝者、室見出夢！』

早速バトル!レインvs花①

sideレイン・キサラ

レイン「初めまして」

花「君が初日で6位になった転校生かな?」

レイン「そうです」

花「ふーん。ま、よろしくね」

千早『転校二日目でバトルデーに出場したレイン選手!どのような戦い方を見せるのでしょうか!』

あの2人、実況をやってるのかな?

千代『それでは3回戦:開始!』

♪稲葉曇ーロストアンプレラ

花「先手は君に譲るよ」

レイン「どうも…!」ドッ

これはいいチャンスだね!

レイン「ソウルブラスター!」

ドガーン!

花「(光線?!): :ポイズンアーム改!」ガシッ!

先輩は紫色の手で光線を掴んだ。

: : シユウツ!

花「っ!?!」サツ

レイン「あちゃあ: :」

軌道がズレちやつたか: :

花「今度は私だね。: : 真炎毒!」ボシユツ!

赤紫色の塊が飛んできた。

レイン「白炎結界!」ボオツ!

プスプス: :

弾幕を防いでいく。

シユウウウ: :

レイン「これは: :っ!」グッ

毒ガス!?!まさか: :

レイン「先輩の能力は、毒ですか: :?」

花「その通り♪: :さらに飛ばすよ!」ドツ!

ボシユウツ!

レイン「うわあ…」

これは多い。

多いなら…

レイン「消し飛ばしちやえ♪破壊光線!」スツ

ジビビビツ!

花「ええっ!?(今のは一回り大きかったよね!?)」

破壊光線で飛んできたものを一気に消し飛ばした。

花「君、結構危険なんだね」

レイン「え?」

花「攻撃が」

レイン「…?」

そりや、相手を攻撃するんだから危険なのは当たり前なんじゃないの?

レイン「…まあいつか」

花(よくないよ!?)

レイン「ソウルブラスター…連射!」スツ

ギユイイン…!

花「(大杉?!) ポイズンアーム改!」 バツ

レイン「…発射あ!」

ドガアアアアア!

花「くろう!」

…ピキピキツ、ドゴオオ!

花「きやあっ!」

お、当たったね。

シューウウ…

花「痛いね…ホントに危険だよ」

レイン「さつきから危険危険しか言っていないね…」

花「そろそろ…本気を出そうかな?」

レイン「それって…」

花「悪魔化だよ」

レイン「…どうぞ」

花「ふふつ、後悔しないでね!悪魔化!」 カツ!

ギョオオオ…

花「猛毒の悪魔、ベノム!」

レイン「おお……！」

やっぱりかっこいい……！

レイン「じゃあ私も……ソウル融合！」カッ

シユウウウ……

レイン「行きますよ！」

ドッ！

手にエネルギーを纏って突撃する。

花「……来い！」

レイン「破壊光線……拳バージョン！」ギユン！

花「ポイズンアーム改！」ドッ

ギユウン！

私の拳と毒の腕がぶつかり合う。

レイン「ハアアアア！」

花「……っ！」

……ドギユン！

花「ガハッ……」

拳は毒の腕を破り、先輩に命中した。

体力切れ!? レイン V S 花②

sideレイン・キサラ

花「ガハツ…」

拳は毒の腕を破り、先輩に命中した。

レイン「ふう」

拳バージョンはギガインパクトより性能が劣るんだよね…

花「ハア、もうちよつとこう、『何、止められただど!?』みたいな展開が欲しいんだけど?」メタい!

…え?

レイン「何の事ですか…?」キョトン

花「知らないならいいよ…真炎毒弾幕!」

ボシユウツ!

再び弾幕が飛んできた。

しかも今度は悪魔化してる状態、威力は数倍上がってるハズ。

レイン「白炎…」

花「……………」ニヤリ

レイン「結界……?」

花「発射」ポチッ

先輩は何かを押す動作をした。すると…

シユウウウ……!

レイン「!?ケホッ…」

煙!?

…ドゴオ!

レイン「ガッ…」

これじゃあ見えない……!

レイン「破壊光線!」ジビビビッ!

煙を晴らそうとする。

…シユウウウ!

花「残念、全方向から煙を出してるんだよ♪」

レイン「くっ…」サッ

今は頑張って気配を探って避けてるけど、これじゃ根本的な解決にならない…

レイン「白炎結界!」ボオッ!

これなら正面の煙は防げる。

レイン「ソウルブラスター連射！」

ズドドドドド!

パアツ…

花「…あ」

レイン「ハア、ハア…」

煙は晴れたけど、今のでだいぶエネルギーを使っちゃった…

花「もう疲れてるようだね」

レイン「もう、技が出せません…降参です」

千早『…勝者、藤崎花選手!』

レイン「これが日本の戦闘…」

ソジツクとは大違いだね…

side 桜木咲子

ピチャツ

咲子「そ、そこは…あっ！」

日和
「……
(その反応はちよつと……)
」

今私は傷の消毒をしてもらっている。

ハッキリと言ってめちやくちやしみるわね。

(喘いでると思つた諸君、素直に挙手しなさい)

「はい、終わったわよー」

咲子「はあ…痛い」

日和「大丈夫？」

咲子「コレのどこが大丈夫ですか」

日和「あはは…」

ガラガラ

ゼイル「咲子…来たぞ…」キラーン

(目が限界まで開いている)

…急？

咲子「何その目？どうしたの？」

ゼイル「茜と戦つたんだが、中々…嫌かなりウザい戦法を使つてきたんだよ…」

咲子「なるほど…」

ゼイル「だから咲子、俺を癒してくれ…」ギユツ

ゼイルから抱き着いてきた。

ピトッ

(ゼイルが染みる部分に触れた音)

咲子「あんっ／＼／＼」

ゼイル「ど、どした？」

日和(え、こんな所でするなんて中々大胆だね…)

※違います

咲子「ちよつと、傷が染みるから…」

ゼイル「その反応は勘違いしかないぞ…」

私はしばらくゼイルに抱きしめられるのであった。

コラボ編寸前の回

side 桜木咲子

今は放課後、私達はいつも通り基地にいる。
いるんだけど…

メイ「レイト君〜」

レイト「メ、メイさん？」

メイ「負けちゃいました〜」

レイト「うん、残念だったね」

メイ「だから俺を抱きしめてください！」

レイト「…こうかい？」ギユツ

メイ「はい♪」ニコッ

レイト（わお、僕の彼女超かわE…）

…我慢できないわ。

咲子「ゼイル…」

ゼイル「ん、どうしたんむっ!？」チュツ

咲子「んう〜…ぷはっ」

ゼイル「ど、どうしたんだ？」

咲子「メイに嫉妬した」

レイト（撫でた方がいいかな？） ナデナデ

メイ「…えへへ♪」

ゼイル「……だな」

ほらね？

…それはおいといて。

咲子「そういえば…」

ゼイル「何だ？」

咲子「最近やってないわね…」

ゼイル「…おいちよつと待て、ココで言う事じゃないだろ」

咲子「エロ本、隠してるわよね？」

ゼイル「（~~え~~、バレてんの!?) そんな事ないぞ？」

咲子「ホントに〜？」

ゼイル「あ、ああ」

咲子「ふーん…巨乳の学生が出るエロ本は持ってないんだね？」

ゼイル「(バレたか…) 持ってるぞ…:あ
ふふっ、誘導尋問成功。

偶々上手くいったわね。

咲子「…:」ガシツ

ゼイル「彘」

ゼイルの右腕を掴んだ。

それを私の胸まで持っていく…

むにゅっ

咲子「／／／」

自分の胸をもませた。

ちなみにBカップである。

(メイはC、ルマは…:EかF)

ゼイル「な、なにを…:」

咲子「今から私が言う質問に正直に答えなさい」

ゼイル「おう…:」

咲子「…:おっぱい大好きかしら?」

言うのが恥ずかしいわね…:／／／

ゼイル「え、えつとな…「何ですぐに答えられないの？イエスカノーよ？」…イ」
咲子「イ？」

ゼイル「イエス…です」

…ふーん。

咲子「へえ…」じー

私の彼氏は巨乳が好きなんだ…

咲子「ゼイル…」

ゼイル「咲子…？」

咲子「安心しなさい、貧乳でも興奮させてあげるから」

ゼイル「…え？」

咲子「今夜、楽しみになさい♪」

(ΦωΦ) フフフ…

2人(空気になつて…?)

その後、私は1人でドラッグストアへ行った。

竜美「お母さんお父さん、お休み〜！」

咲子「ええ、お休み」

ゼイル「お休み」

タタタ…ガチャッ

出たわね。

咲子「さて…ゼイル」

ゼイル「何だ…？」

咲子「コレ、飲みなさい」スツ

ピンク色の液体が入った容器を出す。

ゼイル「こ、これは…」

咲子「媚薬よ」ドーン

しかも即効性。

ゼイル「ハッキリと言うな！」

咲子「コレを飲みなさい」

ゼイル「な、何でだ？」

咲子「貧乳でも興奮させてあげるって、言ったでしょ？」

ゼイル「そういう事だったのかよ!？」

咲子「さあ…」パカッ

ゼイル「ちよっ…」

咲子「飲みなさい！」

ゼイル「んぐっ!？」ゴクッ

…よし。

ゼイル「…!?(体が、熱い…)」

咲子「ふふっ…おい♪」

ゼイル「はあ、はあ…咲子おっ！」

「アッ———!」

異世界から来た

side 桜木咲子

咲子「えっと、アルミは炎天掌で…」カタカタ

ドゴオ!

メイ「むう、やりますね…」カタカタ

私達はMULAの物語で通信対戦をしていた。

千早「その部分は、シャキツとした感じにしてくれ」

絵奈「オケケ」カキカキ

千早は絵奈にキャラクターデザインの指示をしている。

もうすぐ4部ができるらしいわね。

留美「先輩」

咲子「どしたの？」

留美「ヒマです」

咲子「宿題でもやってなさい」

留美「3分で終わりました」

咲子「アンタはムスカ大佐なの!？」

てか、高専の学習内容的に考えて3分はありえないと思うんだけど!?
私でも5分はかかるわよ!?

(それでも充分速えよ!)

留美「とにかく、何すればいいと思いますか?」

咲子「そうね…」

適当に言っておきましょう。

咲子「逆立ちで基地を20周してきなさい」

留美「分かりました!」タタッ

ガチャッ

メイ「…マジでやるんですね」

レイト「相当ヒマなんじゃないかな?」

(メイの隣で観戦している)

咲子「さあ?…あ、回復つと」カタッ

ポワン!

メイ「うわあ、イラつきますね…」

「そこは普通に必殺技でもぶちかませば?」

メイ「そうですね…え？」クルッ

咲子「…久々ですね、ソレ」

振り返ると先生がいた。

日花「よつ。メイにちよつと用があるんだけど、いいかしら？」

メイ「何ですか？」

日花「ついてきなさい」

メイ「はい…？」

咲子「…？」

side 室見メイ（桜）

俺と先生は普通の公園に着きました。

メイ「それで、話って何ですか？」

日花「ココに敵が現れるのよ」

メイ「…え？」

日花「だから、アンタに討伐依頼を出すわ」

メイ「ええ？（困惑）」

日花「とりあえず頑張りなさい」スタスタ

メイ「…？」（。D。）ポカーン

…シユツ

メイ「！」ザツ

何か強い気配を感じますね…

メイ「…!?」

視界の先にはパーカーを着た強者感漂う集団がいました。

…あれが敵ですかね？

メイ「ハアツ！」

ドツ！

side 入箱日花

…シユツ

私達は至って普通の公園にいた。

ネロイズム「…誰か来るぞ！」

「ハアツ！」ドツ

メイ「斬ツ！」ドツ！

ガキイン！

甲 「なっ…コイツは…」

目の前にいたのは、見た目がメイにかなり近い少女だった。

「貴方達が先生が言ってた敵ですね？」

日花 「…敵？」

「…あれ？何で先生がココに？」

「メイ、そいつは平行世界の私よ。それと敵なのは冗談よ」

名前もメイなのね…って

Sメイ 「そうでしたか…」

M日花 「私!？」

S日花 「ごきげんよう、平行世界の私達」

とんでもない予感がするわ…

大量に登場

side 坂田日花

S 日花 「ごきげんよう、平行世界の私達」

M 日花 「ええ…？」

アルミ 「この世界の日花よ」

S 日花 「その通り。アンタ達で言うアルミのような立場よ」

こう言っておけば分かりやすいわね。

S メイ 「えっと、さつきから話に追いつけてないんですが…（お兄さんみたいな人もいますし）」

（ネロイズムの事）

「私も…」

「…あ、じゃあ私も」

「アンタはノリで言ってるだけでしょ…」

アルミ 「ま、事情は後で説明するわ」

S 日花 「それがいいわね。…ついてきなさい」クルツ

「……？」

スタスタ

―数分後―

M全員『……………』

とりあえずさとかに隊基地に連れてきた。

アルミ「コレは？」

S日花「私の弟子とメイを含むとある集団の基地よ」

へえ…

Sメイ「ちよつと待つてて下さい」

コンコン

…ガチャツ

咲子「あら、帰つてきたのメイ…え」

出てきたのは咲子だった。

S日花「…よっ。客を連れてきたわよ」

「…What？」

―さとかに隊基地―

S留美「……………」（。D。）ポカーン

千早「おお…」

レイト「ええ…?」

S 絵奈「どゆこと?」

みんなビツクリしてるわね。

咲子「…とりあえず自己紹介を頼むわ」

M 日花「…入箱日花よ」

平尾「坂田平尾だよ」

甲「志免甲だ」

アルヤ「アルヤ・マリオだ」

マリン「マリン・マリオよ」

フラン「フラン・ユメミルだぜ!」

M メイ「私は室見メイ」

M 絵奈「貝塚絵奈だよ」

ルメ「ルメ・パンドラよ」

M 留美「赤坂留美です…」

ネロイズム「僕はネロイズム」

ケーティ「ケーティ・マリオよ」

アルミ「そして最後に、アルミ・マリオよ
うん、多いわね。」

咲子「人数半端ないわね…」

アルミ「次にアンタ達が自己紹介しなさい」

S 日花「じゃあ私からね。坂田日花よ」

咲子「日花先生の弟子の桜木咲子よ」

S メイ「室見メイです。同姓同名ですね」

S 絵奈「貝塚絵奈だよ。同姓同名だね」

S 留美「赤坂留美です。私も同姓同名です」

つまり合計3組同姓同名の人がいると。

(前の苗字含めたら日花も入って4人)

レイト「室見レイトだよ、よろしく」

千早「七隈千早だ」

咲子「…以上ね」

アルミ「同姓同名が多いわね…」

M 日花「紛らわしいわ…」

S 日花「まあ、見た目は違いがあるから見分けはつくけどね」

Sメイ「…メイさん」

Mメイ「何ですか？」

Sメイ「貴女も剣士何ですか？」

Mメイ「そうですが…貴女も？」

Sメイ「はい♪」

もう仲良くしてるわね。

M絵奈「見た目ちよつと違うね〜」

S絵奈「私は髪色が青みがかつてるね〜」

M留美「えつと、留美の属性は？」

S留美「火と風と雷だよ」

ルメ「多くない!？」

あつちの留美は何属性なのかしらね？

(風属性)

S日花「あ、日花」

M日花「何ですか？」

S日花「違和感しかないからため口でいいわよ。…咲子と勝負してみない？」

咲子「私と…?」

アルミ「…面白そうね」

M 日花「えつと…」

咲子「…日花」

ため口だから私じゃないわね。

M 日花「何？」

咲子「私と勝負よ！」

M 日花「…ふふっ、いいわよ」

異世界バトル!咲子 v s 日花①

side 桜木咲子

庭に出て戦闘の準備をする。

平行世界の日花先生：似たような技を使ってきそうね。

アルミ「場外、降参または気絶で勝敗が決まる。いいわね？」

2人『はい!』

S 日花「じゃ……」

咲子「……」ザッ

M 日花「……」スッ

S 日花「戦闘…開始!」

ドッ!

日花が先に動いた。

M 日花「開幕1秒炎天桜舞!」B L O O M!

咲子「(炎天桜舞!?) 結界流しV2!」ガオン!

ギョルルル!

早速似たような技を使ってきたわね。
フラグ回収速すぎでしょ。

咲子「今度は私の番よ…ハアッ！」ドッ
シユルル…

M日花（あの動きは!?!）

咲子「天空落とし…V2！」ギユウウン!

M日花「マジか…（しかもV2に強化されてるのね…）なら…モーニングドーン！」
ギユイーン!

ドゴォ!

私の技を防がれてしまった。

M日花「…ふう」

まさか日和さんの技も覚えてるとはね…いや、アレは先生が教えたからだったわね。

M日花（見た所力は互角のようね）

次はあの技を使った方がよさそうね。

咲子「さて…と！」ボッ

M日花「…?」

咲子「烈焼脚改！」ドゴドゴッ!

火を纏った連続蹴りを放つ。

M日花「ぐうっ…」ガンッ

しかし日花をそれを腕で防御する。

…フツ。

咲子「からの、炎天掌改！」ズガアン！

M日花「(炎天掌!?!しかも改!?)なら私も炎天掌!」ズガアン！

バゴオン！

小さな爆発が起こる。

咲子「…ふう」スタツ

M日花「まさかアンタも炎天掌を使えるとはね…」

咲子「アンタこそ、炎天桜舞を使えるとは思わなかったわよ…」

M日花「(つまり、咲子も炎天桜舞を使えるのかしら?…まあいいわ)くらえ…ヘルフレイム!」ゴオオオオ!

咲子「フア!?!」

ソレも使えるの!?!

M日花「(コレは当たるわね…)ニヤッ

咲子「…ハアッ!」ギユオオオ!

M 日花（…え、ちょっと待って!?!）

咲子「魔王・ザ・ハンドG3!」ガシイッ!

シュウウウ…

M 日花（止められたんだけど!?!）

咲子「ふふっ…」スッ

今のうちに左腕を地面に、と。

M 日花「エグい技使うわね…」

咲子「エグい技ってアンタ…」

そしたら空中分解は何なのよ…

M 日花「（…ま、いいか）そろそろ本気モードといくわ。スーパー化!」カツ!

S 全員『!?!』

日花を白い光が包む。

ビリビリ…

M S 日花「ふう…」

(M U L A スーパー日花)

咲子「紫色になった!?!」

M S 日花「恐らくアンタも変身できるでしょ?」

え、バレてる？

咲子「…その通りよ」

M S 日花「じゃあアンタもやりなさい。お互い変身した状態でぶつかり合いましょ」

咲子「ふっ、いい考えね。天使化！」カツ！

M S 日花（天使化？）

シューウウウ：

咲子「結界の天使、アンヘル！」

M S 日花（アンヘルですって!?!）

アルミ「安心しなさい日花、咲子のアレはただの変身、アンヘル本人じゃないわ」

M S 日花（ですよー）

スーパード化と天使化！咲子VS日花②

side 桜木咲子

♪かいきりきべアーアンヘル

咲子「…ハッ！」ドツ！

先制攻撃よ！

MS日花「白炎結界！」ボツ！

日花の前から白い炎が吹き上がる。

アレはレインの…なら！

咲子「…せいっ！」ドゴツ！

地面を拳で殴る。

ギョーン…

MS日花「!？」

咲子「グラウンドクエイク！」

ドゴオオオ！

そして日花の真下から土砂を噴出させた。

MS日花「グッ…」

咲子「かーらーのー? ジ・インフェルノ!」ゴオオオオ!
今度は火球を飛ばす。

MS日花「反射火桜!」BLOOM!

青い花びらが現れる。

キーン!

咲子(反射された!?)

火球はこちらに向かって飛んでくる。

咲子「千手観音改!」ゴオツ!

ガシガシツ!

MS日花「ええ…」

…おっ

スツ

私の左手は日花の真後ろにある。

咲子「…:そろそろね」ニヤツ

MS日花「何を…:「炎天掌改!」…:かはっ!?!」ズガァン!

後ろから攻撃する。

フツ…

MS日花「腕…?」

ヒュウウン…カチツ

咲子「作戦成功つと」

MS日花「…バラバラの实の能力者かしら?」

(んなワケないだろ)

咲子「私の能力は能力の解除&使用不能、それと自分の体を分解する事よ」

MS日花「(…そろそろ私が攻めようかしら)…フツ」ニヤツ

咲子「…?」

私の真似かしら?

MS日花「時間停止!」

←ブウウウン…

S日花「まさかアンタも時を止めれるとはね…」

アルミ「まあ、あの能力は手に入れ方が若干特殊だからね」

(ドリンクを飲むと低確率で能力ゲット)

2人はそう話してるけど…

アルヤ「……………」もぐもぐ

ポツプコーン食べるのはおかしいを思うわよ、アルヤ。

(アルヤも時間停止持ち)

…まあいつか。

MS日花「攻撃火桜とケツイナイフと…ヘルフレイムで囲って、と」ボツ

少しエネルギーを使ったけど、別にいいでしょ。

MS日花「再生！」

→ブウウウン…

咲子「…!?!」(。D。)

気付いたら私は色んな弾幕に囲まれていた。

MS日花(相当驚いてるわね)

…スキマがあるわね。

咲子「こうなったら…空中分解G3！」パラッ…

シューウウ…

MS 日花（…粉になっただけど？）

咲子「…ふう」

MS 日花「バラバラってレベルじゃないわよね、今の？」

咲子「まあね。てか、アンタも時間停止を使えたのね」

MS 日花「一応言っておくと、ココでは合計4人いるわよ」

咲子「え…時間停止のバーゲンセールかしら？」

（元ネタ：ドラゴンボールの『超サイヤ人のバーゲンセールだ』）

MS 日花「まあ、そうなるわね）話はココまでにしましょ…炎天桜舞！」 B L O O M

！

咲子「極炎天桜舞！」 B L O O O O M !

ドゴオオオ！

赤い台風と夕焼けの輝き! 咲子 v s 日花 ③

side 桜木咲子

ドゴオオオ!

互いの火桜がぶつかり合い、爆発が起きた。

…ドスッ!

MS日花「ガハッ!?!」

咲子「ふふっ…前だから撃つとも思った?」

MS日花「後ろからも撃つたのね…」

その通り。前と後ろの2方向から撃った。

(エネルギーを後ろに集中させ、そこから発射できる)

さて…

咲子「マキシマムファイア改!」ギユウウン!

MS日花「(来たわね…!) 天空掌!」ズガアン!

…風属性ですって!?

MS日花(驚いてるわね)

シユウウウ…

MS 日花 「自分の属性以外の技が使えるのはアンタだけじゃないのよ…（アルミさんは5属性全部使えるし）」

咲子 「そうよね…」

ちよつと作戦が思いつかないわね。こうなったら…

咲子 「フンツッ！」ポツ

MS 日花 「？」

火球を地面に投げ、その周りを走る。

咲子 「コレの方が手っ取り早いのよ！ハアアアア！」

MS 日花 （何が？）

ギュルルル…！

MS 日花 「ゑ」

そこには赤い台風があつた。

Sメイ 「もう使うんですね…」

Mメイ 「……………」（。 ㄩ。）

MS 日花 「ッ…」

いくわよ…！

咲子「ぶっ飛ばせ…クリムゾンハリケーンG2!」

ゴオオオオオオオオ!

MS日花「想像以上にやばい風ね…! (もう使うしかないわ…!) ハアツ!」ギユン

!

日花は手に黄色のオーラを纏う。

ドツ!

飛んだ…?

MS日花「止める…サンセットグロウ!」

ドギユウウウウウ!

咲子「ツ、負けないわよ!ハアアア!」ギユイイン!

MS日花「絶対止める!うおおおおお!」ギユイイン!

…ドガアアアン!

大きな爆発が起きた。

MS日花「ぐうっ!」

咲子「うわっ!」

ドサツ

背中が思いっきり地面にぶつかる。

エネルギーで覆ってよかったわ…

MS日花（くっ、今のでかなりエネルギーを使ったわね…）
憑依以外でもはや勝つ術がないわ…

スッ

咲子「フルパワーで行くわ…憑依…竜美！」カツ！

シユウウウ…

MS日花「!?」

コレが私の全力…

咲子「カンタンに言えばミキシマックスよ」

MS日花「（あ、なるほど…って）誰としたのよ!？」

咲子「それは企業秘密よ」

MS日花「は、はあ…」

日花も立ち上がる。

MS日花「グリッチ化！」ズッ！

ギョオオオオ！

オーラが…

咲子（黒い…?）

ブリッ：

MG日花「…ふう」

咲子「ええ…？」

MG日花「コレが私の第3形態、グリッチ化よ」

日花は…バグっていた。

帽子は黒、顔は目、鼻、口以外黒。パーカーの紐やフードは紫色。

そして全身にバグった感じの何かが浮かんでいた。

MS日花「覚悟はいいかしら…？」

咲子「…それは私のセリフよ！」

グリッチと竜…！咲子VS日花④

side 桜木咲子

MG日花「覚悟はいいかしら…？」

咲子「…それは私のセリフよ！」

ドッ！

互いが突撃する。

MG日花「炎天掌・黒！」ズガアン！

咲子「炎天掌改・竜！」ズガアン！

ドゴオオオ！

黒と青白の炎天掌がぶつかり合う。

MG日花「(威力は互角のようね…)グリッチナイフ！」ヴァアッ！

シユルルッ！

一瞬で現れた!?

MG日花「行けっ！」

ヒュン！

黒いナイフが四方八方から飛んでくる。

咲子「ッ、結界流しV2…連発！」ババッ!

ギユルルル!

MG日花「チッ」

ゑ、舌打ち怖いんだけど!?

咲子「…打ち碎け！」

ドゴッ!

私の背後にドラゴンが現れる。

咲子「ドラゴン…スレイヤアアア！」ギユウウン!

青い光線を発射した。

MG日花（サンセットグロウを使っても止められる気がしないわ…ならー!）スツ

咲子「…?」

MG日花「…消滅！」

フツ:

咲子「なっ…!?!」

光線は日花に触れた瞬間、跡形もなく消え去った。

咲子「ど、どういう事…!?!」

MG 日花「この状態特有の能力…触れた対象を消滅させる能力よ。ちなみに生命体にはできないわ」

咲子「は、はあ…」

生命体にはできないのね、よかった…

(いやいや、できても消すワケないでしょう?)

MG 日花「説明は以上よ…グリッチブラスター！」 シャツ

ギユイイン…！

レインのソウルブラスターに似てるわね…黒いけど。

MG 日花「発射！」

ドガアアン！

黒い光線が飛んでくる。

さつきから黒ばっかね。

咲子「結界流しV2…！魔王・ザ・ハンドG3！」 ガシツ！

シユウウウ…

私は2連続で技を出し、日花の光線を止めた。

MG 日花「対応力半端ないわね…」

咲子「極炎天桜舞・竜！」 B L O O O O M !

M G 日花 (ええ…技名長っ!)

(そこかよ!?)

ヒユウウン!

M G 日花 「いちいち消滅してるヒマないわね…じゃあコレよ!」 パチン
ゴオオオオ!

く、黒いヘルフレイム…!?

M G 日花 「ウイザーインパクト!」 ヒユン

ドガアアン!

M G 日花 「…ふう」

咲子 「……ッ」

技は全部出した…もう後がないわね…なら…

咲子 「…日花、素晴らしい提案があるわ」

M G 日花 「どこかの上弦の参加しら?」

ああ、このネタ知ってるのね。

咲子 「次、最後の攻撃にしない?残ってる全てを出し切りましょうよ」

M G 日花 「……… (いい考えね) …採用」 スッ

ギユイイン…!

咲子「おつ、やる気ね……！」スツ
ギユルルル……！」

お互いがエネルギーを溜める。

M G 日花「準備オーケーよ……」

咲子「私もよ……！」

ドツ！

コレが最後の攻撃よ……！」

M G 日花「マリオファイナル・G！」ギユオオオオ！

咲子「クリムゾンハリケーン・竜！」ゴオオオオオ！

ドゴツ……

バガアアアン！

アルミ「あ、コレはヤバいわね」スツ

S 日花「確かに」スツ

ピキッ!

2人は周りに結界を張った。

…そうしないと被害がヤヴァイのである。

シユウウウ…

M日花「ケホツ…」

咲子「ハア、ハア…」

観客『……………』

日花↓場外

咲子↓場外

設置してたカメラを見ると…

同時に場外。よつて…

アルミ「結果、引き分け!」

2人「そ、そんなあ…」

またどこかで会いましょう

side 桜木咲子

M 日花 「疲れたわ…」

咲子 「アンタホントに強いわね…」

アルミ 「2人とも、お疲れ様」

S 日花 「ゆっくり休みなさい」

その後、私達は色々話しながら休んだとき。

S メイ 「分身！」ポワン！

4人 『登場！』

M メイ 「ええええ!?!」

ネロイズム 「なるほど、多重人格なんだね…」

アルミ 「火野有美ね…」

S 日花 「アルミの読み方を変えたら有美になるわよね」

アルミ 「そうね。一応私の元狂気が火野有太なのよ」

S 日花 「へえ…」

平尾 「おお…」

千早 「どうだ、ちゃんとできるか？」

(MULLAの物語を見せている)

ルメ 「ええ、かなりよくできてるわね」

甲 「コレを半年ぐらいで作ったのか？」

千早 「ああ、俺と千代の2人でな」

アルヤ 「うおっ、すげーな…」

フラン 「速すぎだろ…」

S 絵奈 「…どう!?!」 サツ

(描いた絵を見せる)

M 絵奈 「…いい!!」

マリリン 「絵奈が褒めるレベルって、アンタ凄いわね…」

S 絵奈「そうなの〜？」

マリ「ええ、絵奈はプロの画家だったし…」

フラン「なあなあ、それでマリを描いて「フンッ！」ブフォッ!？」ドゴオ！」

マリ「アンタの場合は水着姿とかでしょ？」イライラ

M 留美「私の方が強い！」

S 留美「いや、私が！」

2人『むむむむむ…』

レイト「あはは…」

こんな感じで時間は過ぎていったとき。

―数時間後―

夕方になった。

アルミ「じゃ、またどこかで会いましょ」

S 日花「ええ…日花」

M 日花「何、日花」

S 日花「…世界、しつかり守りなさいよ」

M 日花「…フツ、もちろんよ」

アルミ「…話は終わったようね。ハアッ！」

ギユオオオオ…

空間が開く。

M 全員『また会おう！』

S 全員『もちろん！』

M 日花（突入！ハアア！）

シュツ

こうして、日花達の別世界日帰り旅行は、終わった。

日花達が来た数日後のこと。

咲子「……………」

メイ「…はあ」

『宣戦布告』

さとかに隊基地に謎の紙がきた。

メイ「何ですかコレ？」

咲子『桜木咲子アンチ隊』つてヤツから来てるわね」

メイ「ええ……？」

私、なんか悪いことしたかしら？

咲子「まあいいわ。少し警戒する程度にしましよ」

メイ「そうですね……」

一方、その頃……

side 七隈千早

「お前ら、集まったか？」

「へい、兄貴！」

千早「アレは筑紫新太……だよな？」

不良たちが集まっている。

新太「桜木咲子達クソ野郎どもを潰すぞ」

「へいっ！」

千早「……！」

こりゃヤバいな……

「でも兄貴、去年敗北しましたよね……」

新太「安心しろ、今回はヤクザと組んでる。那珂川組ってヤツとだ」
「マジすか！そりゃ百人力っすね！」

千早「なんだと…」

メイの両親を殺した組と組んでるのかよ!?

千早「ッ！」ダッ

一刻も早く咲子達に伝えなくては！

対応はどうする？

side 桜木咲子

咲子「少し警戒する程度にしましよ」

メイ「そうですね…」

ガンガンッ！

扉が叩かれる。

ガチャッ

千早「大変だ！ハア、ハア…」

来たのは千早だった。

かなり焦っている。

咲子「ど、どうしたの？」

千早「いいか、落ち着いて聞けよ…？」

そのセリフ、聞いたことあるような…

（本来は『いいですか、落ち着いて聞いてください』である）

ーただ今説明中ー

2人『はあ!?!』

千早「ホントに起きてる事だ」

まさか不良とヤクザが組むなんて…

メイ「……………」ギリツ

うわっ、メイがキレそう…

咲子「そ、それで、コレと関係あるの？」

アンチ隊から来た封筒を見せる。

千早「ほぼ確実にソレだろうが!?!」

咲子「ですよー。開けるわよ」ビリッ

スツ

文字はパソコンで入力されたものだった。

『9月15日の夜、花町公園』

…はあ。

咲子「コレ絶対ウソでしょ？」

千早「分からないぞ」

メイ「…千早、能力を使え」

千早「そ、そうだな…」

コンコン

…ガチャッ

翔「よつ、お前ら……どうした？」

翔、絵奈、レインの3人が来た。

咲子「コレを見なさい」スツ

手紙を見せ、概要を説明した。

絵奈「うわあ……」

レイン「道理でメイがブチギレてるワケか……」

咲子「てか、ちやうど十五夜に設定するのは頭おかしいと思うわよ？」

千早「月に関係する能力を持つてるヤツがいるんじゃないのか？」

あ、なるほどね……

メイ「で、何処のどいつを斬ればいいんだ？」

咲子「アンタ完全にキヤラ崩壊してるわよ？」

メイ「関係ない……二度とツラを見せないようにしたいだけだ」

かつこいいわね。

翔「まずは先生に相談だな」

咲子「そうn「もしもし」……え？」クルツ

振り向くと……

日花「よつ、話はこつそり聞いてたわよ」

先生がいた。

咲子「いい加減この下りやめたいんですが……」

日花「そんな事、今はどうでもいいでしょ？」

咲子「そうですけど……」

いきなり背後に来るのはちよつと……

日花「それで、そのアンチ隊とやらをどうすればいいか、でしょ？」

咲子「はい……」

千早「普通に警察を呼びますか？」

日花「いや、ココは相手のメンタルを徹底的に殺るのが一番よ。警察はその後ね」

咲子「メンタルを殺るって……先生容赦ないですね……」

日花「だって、相手は不良とヤクザよ？容赦する必要がないじゃない」

メイ「いい考えですね、そうしましょう」

アンタはあつさり賛成するのね……

翔「じゃあ、とりあえず戦力を集めますか？」

日花「そうね、そうしなさい。じゃ、私は行くから、作戦は適当に考えてなさいよ。」

時間停止！」パチン

シュツ：

先生は時を止めて場所を去った。

…誰を呼ぼうかしら？

勧誘

side 桜木咲子

一応さとかに隊全員呼んだわ。

現在いるメンバー

咲子、メイ、ゼイル、ルマ、レイン、翔、絵奈、祐樹、学、育也、レイト、千早、千代、竜美

咲子「…で、他に誰を呼ぶ？」

翔「ワンチャン俺達だけでどうにかならないか？」

千早「いや、相手の数は未知数だ。別の誰かを呼んだ方がいい」

メイ「兄と義姉はその日用事がある」

じゃあ出夢先輩は無理ね…

祐樹「…おい、ちよつと待て」

咲子「どしたの？」

祐樹「十五夜って休日だよな？」

咲子「そうよ。それがどうかしたの？」

祐樹「一郎とか風鈴を呼ぶのはどうだ？」

……!!!

咲子「めちやくちやいい考えね！アンタホントに祐樹!？」

中の人が違うのかしら？（メタい！）

祐樹「ちゃんと戸畑祐樹だが!？」

あ、いつもの祐樹ね。

咲子「そうときたら早速勧誘ね」

ゼイル「勧誘ってお前……」

咲子「英語にしたらリクルート、言葉としては会ってるわよん」

ゼイル「は、はあ……」

竜美「??？」

レイン「えっと、その一郎？とか風鈴？って誰？」

絵奈「それは……」

ーただ今説明中ー

レイン「なるほどね……それは頼もしいね」

咲子「じゃ、早速連絡取るわよん」

カタカタツ……

千代「オンライン会議のセットアップ完了」

学「仕事早いなおい!？」

後は4人を待つだけね。

―数分後―

風鈴『ハロー!』

一郎『久しぶりだな』

砂智子『いきなりメールが来てビックリしましたよ…』

流『どうしたんだ、咲子?』

来たようね。

咲子「ちよつと大事な話があつてね…」

4人『?』

―再び説明中―

流『マジかよ…』

一郎『なるほどな…』

咲子「そこで、十五夜の日に来れる人を探してるのよ。来れる人はいるかしら?」

風鈴『うーん、私は北海道だし…』

流『俺は沖縄だしな…飛行機代はないから無理だ、スマン』

一郎『あ、俺は行けるぞ。前日の夜に行つてやる』

砂智子『ちよつと親に聞いてきます』スタスタ

一郎と流は即答ね。

咲子「風鈴は？」

風鈴『ゴメン、行けない！』

風鈴も無理と：

ガタン

砂智子『許可が出ました。私も行きます！』

咲子「ありがとう。じゃあ十五夜の前日：9月14日の夜9時博多駅ね」

2人『了解』

流『頑張れよ、お前ら』

風鈴『不良とかヤクザなんてぶつ飛ばしちやつて！』

行けない2人から応援された。

咲子「ええ、ぶつ飛ばしてやるわ。じゃあね」

ピロン

レイト「2人来るんだね」

咲子「ん、そうね」

育也「解散まで時間があるし、大まかな作戦を考えないかい？」

ゼイル「いい考えだ、不採用」

(元ネタ：m u l a のものおきば)

育也「えっ？」

ゼイル「それは敵の情報を集めてからにした方がいい」

育也「あ、そうだったね…」

作戦か…

適当にやっつてりや勝つでしょ(脳筋)

メンタルを折ろう

side 桜木咲子

……。

……。

……。

咲子「はい、無言の575完成」

ゼイル「何やってんだ咲子……」

咲子「ヒマなのよ」

ゼイル「作戦を考えろ」

咲子「そうね……」

一応、相手のメンタルを折るといふ条件付きの戦法は何個かすでに考えてるのよね……」

レイン「え、早くない!？」

咲子「声に出てた?……いやね、前やったことがあるからすでに何個か考えてるのよ」

レイン「あ、そうなんだ……」

メイ「…咲子」ガシッ

咲子「ぐえっ!？」

メイに胸倉をつかまれた。

メイが!?!胸倉を!?!つかむウ!?!

メイ「その作戦を今すぐ教えろ」

咲子「は、離して…」

レイト「メイ、離してあげて」

メイ「…!?!…ス、スママセン。ちょっとイライラしてて」

正気に戻ったようね。

咲子「作戦の1つとして、相手と全く同じ方法で攻撃することよ」

メイ「…はあ?」(。D。)

理解できてないようね。

咲子「つまり、相手の得意分野で相手を潰すのよ。そうすることで劣等感を感じてメンタルを折れるわ」

翔「性悪だなおい…」

ええ、翔だけに。

(今部屋の温度が5度下がったな)

メイ「他にありますか？」ナデナデ

メイはレイトに頭を撫でられながらきいてくる。

咲子「そうね…逆のパターンもあるわ。つまり相手の弱点で潰すヤツね」

絵奈「それが普通でしょ」

咲子「私が普通だと思う？」

絵奈「思わなくい」

咲子「そういう事よ」

ルマ「他にあるかな？」

咲子「…アンタがかなり動く作戦があるわね」

ルマ「えっ、ボクが？」

咲子「アンタの無限にある体力よ」

（序盤の真・体力テスト参照）

ルマ「あ、なるほど！」

咲子「アンタが…まあ、ひたすら骨とかケルベロスとか飛ばしときやいつかは相手を倒せるわ。ケルベロスに攻撃をかみ砕かれるのは絶望するでしょうね」

祐樹（咲子ってこんなに性悪だったか…？（困惑））

こんな感じで、私は作戦考えたのだった。

side 雷落一郎

「おい、一郎！」

一郎「どうした、竹尾？」

竹尾「明日遊べるか？」

明日は…14日か。

一郎「スマン、用事があるから明日と明後日は無理だ」

竹尾「用事？」

一郎「ちよつと福岡にな」

竹尾「なぬううう!!」

何だよその驚き方。面白いな。

(面白いのかよ!?)

side 椿木砂智子

砂智子「咲子さん…」

彼女は恐らく断然強くなっているでしょう。

私を倒したあの技も…

「砂智子」

砂智子「はい、お母様」

「姉さんによろしく、ね？」

砂智子「はい！」

十五夜の決戦ついでに、私の叔母様に会う事になりました。
最後会ったのが10年以上前ですからね…

ピロン

「あら、秋から？」

『姉さん、砂智子が福岡に来るから、一晩泊めてくれる？』

「うーん…オーケーと」ポチッ

ガチャッ

「おばあちゃん」

「あら、どうしたの竜美？」

え、いとこ!?

side 桜木咲子

そして数日後、9月14日の夜のこと。

『まもなく、新幹線が到着します…』

竜美「お母さん、眠い…」

咲子「だから家にいなさいって言ってたのに…」

竜美「だつてえ…」

ビュウウン!

(新幹線が着く音)

『博多、博多』

「あ、咲子さん。久しぶりですね」

咲子「ええ、久しぶりね砂智子」

砂智子「…えっと、この子は？」

咲子「竜美、自己紹介しなさい」

竜美「私は桜木竜美!…あなたはお母さんの友達?」

砂智子「…お母さん!？」

咲子「えつと…」

―数分後―

砂智子「あ、なるほど…」

咲子「そゆこと」

竜美「眠い…」

咲子「…早めに移動した方がいいわね」

スタスタ

博多駅を出て道を歩く。

砂智子「福岡って人多いんですね」

咲子「そりやね。しかも東京とかとは違って環境的にも住みやすいし」

砂智子「…あ、ヨドバシがこんな所に」

咲子「ゲーセンもあつて色々便利なのよね」

※ヨドバシ博多は博多駅のほぼ真横にあります。

―数分後―

しばらく歩き、私の家がある住宅街まで来た。

咲子「それで、砂智子はどこで泊まるの？」

砂智子「おばさんの家に泊まる予定です」

咲子「それって?」

砂智子「確かココを曲がって」

咲子「ええ」クルツ

スタスタ

砂智子「ココは真つ直ぐで…」

…私の家に近いのかしら?

スタスタ

砂智子「右から6番目の家ですね」

咲子「…砂智子、その家の位置ホントにあつてる?」

砂智子「?」

咲子「ソレ、私の家なのよ」

砂智子「えっ?」

咲子「とりあえず、アンタが言ってる”おばさん”の名前を教えなさい」

砂智子「確か…冬後春奈さんですね」

…ふゆご、ですって?

咲子「もう一回プリーズ」

砂智子「冬後春奈さん」

：マジか。

咲子「ソレ：

…私の母さんの前の苗字ね」

砂智子「…ええ!？」

咲子「つまりアンタのおばさんは私の母さん…私達いどこなのね」
何という衝撃。

外見が似てるとは思ってたけどね…

砂智子「…すぐおばさんに聞いてみましよう!」

竜美「……………」スヤスヤ

(ずっと咲子におんぶされてる)

―桜木宅―

ピンポーン

…ガチャツ

春奈「お帰り、咲子と竜美。ようこそ、砂智子」ニッコリ

うわあ、殴りたいその笑顔。

咲子「…母さん?」

春奈「いやあ、言うのを忘れちゃった、テヘツ♪」ペロツ

砂智子「……………」(。(。))

春奈「まあ、とりあえず入りなさいな」

砂智子「は、はい…失礼します」

ガチャッ

咲子「それで、母さんはいつ私達がいとこだと思いだしたの？」

春奈「数日前、秋（砂智子の母）から電話が来た時ね」

つい最近じゃない…

春奈「それにしても、アンタ達2人はそっくりね。まるで双子よ？」

砂智子「そこまでは似てませんよ…」

※そこまで似てます。

日付を設定したからといって油断してはならない

side 飛羽野ゼイル

咲子は恐らく今博多駅で砂智子を迎えてるだろう。

俺は福岡空港国内線ターミナルにいた。

「おお、ゼイル！」

ゼイル「よう、一郎」

一郎「お前だけか？」

ゼイル「ああ、咲子は砂智子を迎えに行った」

一郎「なるほどな……ちよつと質問がある」

ゼイル「何だ？」

一郎「その……咲子とは何処まで進んだんだ？」

……おい。

ゼイル「すぐ結婚したいレベル。質問は受け付けん」

一郎「OH……マジか」

ゼイル「マジだ。……この写真を見てくれ」 スッ

俺のスマホの待ち受け画面：俺、咲子、竜美の3人が写ってる写真を見せる。

一郎「ゼイルと咲子と：誰だこの子？」

ゼイル「娘の竜美だ「娘え!」：説明させてくれ」

一郎「是非頼む」

「ただ今説明中」

一郎「……ゼイル」

ゼイル「何だ？」

一郎「その子、大事にしろよ？」

ゼイル「当たり前だ」

一郎「よし。：そろそろ行こうぜ」

ゼイル「ああ」

そして俺達は空港を出た。

「空港から出て数分後」

一郎「タクシーを呼ばないのか？」

ゼイル「別にそれほど遠くないしな。ゆっくり歩いて帰ろうぜ……?」

殺気を感じる…

ゼイル「一郎」

一郎「ああ……」

……ヒュン!

クナイが複数飛んできた。

……忍者かよ。

2人『フツ!』サツ

ザクツ!

クナイは地面に刺さる。

ゼイル「恐らくアンチ隊からだろうな……」

ヒュン!

また飛んでくるが、難なく避ける。

一郎「日付設定をしたクセにな……流石ヤクザと不良だ、汚い」

ゼイル「ココで戦うのはよくないしな……」

逃げるか。

ゼイル「一郎、俺の背中に乗れ」

一郎「ん? おう……」ガパッ

ゼイル「しっかりつかまってるよ!」ザッ

風神の舞!

ビュウウン!

「!?」

一郎「うおっ!?!」

風を利用して空を飛ぶ。

ゼイル「ぶっ飛ばすぞ!ハアツ!」

ドツ!

―数分後―

…スタツ

数キロ飛んだ後、着地した。

ちようど俺の家の前に。

ゼイル「一郎、大丈夫か?」

一郎「…ああ、大丈夫だ。てか、よく思いついたな」

ゼイル「今は戦わない方がいいと思っただけだからな」

一郎「そうか…」

ピンポーン

…ガチャツ

茜「お帰り〜お兄ちゃん。ようこそ、一郎さん」

一郎「おう、泊まらせてもらうぜ」

ゼイル「ただいま」

…咲子にメールを送るか。

『一郎と家にいる』

よし。

side 室見メイ

メイ「……………」シャツ

刀を磨く。

…もつと鋭く。

メイ「…はあ」

俺は一体どうすればいいんだ…？

ガチャツ

レイト「メイ、そろそろやめた方がいいんじゃないかな？」

メイ「…そう、ですね」

レイト「…メイ」ギユツ

メイ「……！」

レイト「僕は死なないよ。……いや、僕達は誰も欠けずに勝利を掴むんだ」

メイ「ううっ……レイト君……！」 うるっ

俺はしばらく、レイト君の胸の中で泣くのでした。

決戦前夜…??

side 室見レイト

メイ「レイト君…♪」

ギユウウウ…

僕はメイさんにずっと抱き着かれています。

レイト「えつと…メイ？」

メイ「何ですか？」

レイト「そろそろ離れ「嫌です」ええ…」

メイ「レイト君成分が足りないです」

レ、レイト君成分…?」

レイト「何それ？」

メイ「レイト君に抱き着く事で得られる特別な成分です！」

レイト「何その変な成分」

メイ「変とは何ですか!?俺はそれがないとまともに生活できないんですよ!!」

ブン

レイト「えつと…ゴメン？」

メイ「分かれればいいんです」ギョツ

再び抱き着かれる。

むにゅっ。

レイト「メイ、胸が当たってるけど？」

メイ「柔らかい感触を楽しんで下さい♪」

※今のメイは軽くキャラ崩壊してます。

レイト「う、うん？」

柔らかいなく（白目）

メイ「（やっぱりこの体勢がいいですね）……………えいつ」

レイト「うわっ!？」

ボスツ

ベッドに押される。

ガパツ

メイ「むふう〜♪」

むにゅむにゅ

そしてその上にメイが抱き着いてきた。

正直に言ってヤバい。特に柔らかさが。

レイト（誰か、助けて〜！コレ以上僕の理性が持たないよ〜！）

メイ「…そろそろですね」ニヤリ

レイト「えっ？…んむっ!?」

メイ「ん〜」チユツ

メイにキスされる。

…しかも大人のキスだ。

（エロい！）

メイ「レイト君…しましよ♡」

レイト「あ…」

アツ―――！

―次の日―

レイト「こ、腰が…」

メイ「すぐ治りますよ」

レイト「そ、そうだけど…」

メイ「…ふふっ♪」ニコッ
うわあ、可愛い笑顔。

レイト「今日の夜だよね、決戦は」

メイ「そうですね…まあ、ぶった斬ってやります♪」ニコッ
うわあ…怖い笑顔。

side 桜木咲子

砂智子「えっと…」

(咲子のパーカーを着ている)

咲子「…どう?」

(砂智子の服を着ている)

一郎「…マジで分からないんだが?」

ゼイル「右が咲子で左が砂智子だな」

咲子「ふふっ、流石ね♪」

砂智子「見ただけじゃ分かりませんよね?」

ゼイル「いや、雰囲気で分かるぞ」

一郎「ソレで分かるものなのか?」

ゼイル「ああ」

一郎「よく分からんな…」

この服入れ替え作戦、多分決戦で使うのよね。

side
????

ーこの世界の幻想郷ー

シュツ

「ん、ココは…」

神社周辺の森か。

「把握…」

…大体500メートル先に神社、と。

「ゆつくり歩いていくか」スタスタ

集合…

side 桜木咲子

………。

咲子「後一時間ね…」

ゼイル「ああ…」

武器、よし。

簡易食料、よし。

パーカー、よし。

咲子「問題ないわね」

一郎「ありありだ。点呼しろ点呼」

あ、そうだったわね。

咲子「全員いるかしら？」

ゼイル、一郎、メイ、ルマ、レイン、翔、絵奈、祐樹、学、育也、レイト、砂智子、千代、早、千代。

咲子「いるようね…」

…!!

咲子「誰か来るわ」

シュツ

「よつ、集まってるようね」

…なあんだ。

咲子「先生じゃないですか」

日花「ちよつとチエツクをしたくてね。安心しなさい、既に警察に連絡してるから、存分に暴れまわっていいわよ」

そういう問題じゃない気が…

日花「じゃ…健闘を祈るわ。時間停止」

シュツ

…ふう。

咲子「みんな、準備はいい？」

全員『オーケー!』

咲子「じゃ、作戦通りに行くわよ」

砂智子「…はい」スツ

スタスタ

私、砂智子、ゼイル、学、育也の5人で公園に行く。

残りの人は？

…お楽しみよん。

―数分後―

コオオオオ…

日がちようど沈み切る。

ザツ…

「へっ、たったの5人か」

咲子「その5人にアンタ達は今から倒されるのよ」

「お前らなんかに、できるかよお！」

敵の数…ざつと200人。

side 室見メイ

メイ「……………」

咲子さんが公園に着く頃ですね。

メイ「行きますよ」

一郎「ああ…」

スタスタ

千代さん、レインさん以外は俺と一緒に道を進みます。

…敵のアジトに。

―数分後―

レイト「ココが…」

メイ「……………」ジャキン

刀を…構える。

メイ「汚いやツら相手には汚い戦法で倒す」

シヤツ…

名刀、飛梅をアジトの建物に向ける。

メイ「反射しろ…Q・E・D！」ポワン！

5人に分身する。

5人『…斬ッ！』

…スパアン！

建物の周りの空間は、ミラーデイメンションとなった…。

「何だと…？」

敵のボスは驚いていた。

「何故現場に5人しか来ていない?…まさか
情報が割れたのか?と考える。」

「ありえない。あらかじめ考えていたのか?」

……。

「まあいい…」カチツ

プルルル…

「筑紫に伝えろ、あつちに回せと」

『ハッ!』

ガチャツ

「さあ、どうする…」

桜木咲子…いや、

火野有美？」

side 火野有美

…？

有美「今、とてつもない殺気を感じたわね」
もしかして……いや、絶対そうね。

有美「あの野郎……」

まだ懲りないのね。

有美「……あの時殺せばよかったわ」

……寝よう。

戦、始まる

side 桜木咲子

「お前ら、いくぞおお！」

『オオオオオオ！』ドツ

不良の集団が襲い掛かる。

咲子「みんな下がってて：神炎天桜舞！」 B L O O O O O M !

シュバババツ！

「ぐわあ！」

砂智子「咲子さん、しゃがんで下さい」

咲子「オーケー」サツ

砂智子「アースアローV2！」シヤツ！

「ぬっ…フンツッ！」バキッ！

不良は土の矢をあっさり折ってしまう。

砂智子「…かかりましたね！」ニヤツ

ぐにやっ！

「な、何だコレ!？」

矢の残骸が土に変わり、不良に巻き付いた。

砂智子「育也君!」

育也「了解! フィールドスパークV2!」バチバチツ!

「ギャアアア!」

…バタン

咲子「初見殺し成功、つと」

(クシシ、後ろに来てるのに気付いて「フンツ!」うごっ!?)「バタン

ゼイル「気付かないと思ったか?」

「うおらあ!」

学「地烈!」ドゴツ!

グラツ!

「ダニイ!?!」

(元ネタ:ドラゴンボールのベジータ)

ゼイル「絶風神の舞!」ビュウウン!

『うわあああ…』キラン

咲子「そろそろ大技ぶっこむわよ!」ギユン!

ゼイル「分かった…みんな下がれ！」

スッ

「何をする気だあ？」

咲子「まあ見てなさい…ハアッ！」

ゴオオオオオ！

火球が現れる。

咲子「ジ・インフェルノ！」ドゴドゴドゴッ！

シユウウウ！

みんなを下がらせたのは、火球に巻き込まれる恐れがあるからね。

「へっ…結界！」ピキッ！

…バリイン！

「嘘だドンドゴドーン!?!」

(元ネタ：仮面ライダー剣の空耳)

バゴオン！

「グフツ…」バタン

咲子「…何か弱いわね？」

全員『お前が強いだけだろうが！』

そうかしら？

(周りから見たらそうです)

side 室見メイ

メイ「突入！」

ドゴォ！

Q・E・Dが発動した建物のドアを突き破る。

「おうおう……」

「ボスが言った通りだったぜ……」 スチャッ！

待ち伏せしていた敵がそれぞれ銃を構えてくる。

一郎「コイツら、銃刀法というものを知らないのか？」

メイ「……知ってても無視してるだろうな」

ルマ「ケルベロス！」 カシヤッ

「ワオオオオン！」

「フア!!？」

「何だよソレ!!？」

ルマ「行けっ！」

「ガルルルル！」

「ツ、ぶっ壊せ！」

「おらあ！」バンツ！

「ガルツ！」

バキーン！

一郎（銃をかみ砕きやがった!?)

「うそだろ……」

「グルルル……」

「ヒ、ヒイイ！」ダッ

翔「おっと逃がさないぜ？ ホワイトブレードV2！」パキッ！

……ドスッ

「」バタン

逃がすワケないだろう……？

メイ「進むぞ」

一郎「ああ……（コイツ口調変わりすぎだろ!?)」

タタッ……

因縁

side 室見メイ

メイ「進むぞ」

一郎「ああ…（コイツ口調変わりすぎだろ!?!）」

タタツ…

…来るな。

メイ「ナオ」

ナオ「ええ…マキシマムファイア！」ゴオツ！

…ズバツ！

「ヒイツ!?!」ドサツ

物陰に隠れて銃撃しようとしていたようだ。

一郎「（気付くの早いなおい…）お前らのボスはどこにいる？」

「お、お前らなんか言うもんか！」

メイ「ほう？」

二ヨ「……………」スツ

キイン…

「ヒッ!?!」

二ヨが刀をヤクザの首にあてる。

メイ「答えろ。じゃないと…分かるな？」

祐樹（こ、怖えええええ!）

ルマ（アレがメイちゃんだとは思えないよ…）

千早（……………）カシヤツ

おいそこ、能力で撮るな。

「あ、あっちだ…」

右の方か…

メイ「…ウソではないようだ」

一郎「何で分かるんだ？」

ヤエ「目と声さね」

絵奈（ゑ、それで分かるの!?!）

メイ「吉、幾三」

（よし、行くぞ）

タタツ…

「た、助かったのk」「一旦寝といて」おうふ…」バタン
クミ「まっつて〜！」タタッ

side 火野有美

有美「ふう…」

結局、寝れなかった…

有美「ほぼ確実にアイツのせいでしょうね…」

私に殺気を送った相手…

有美「ヌーク・リート…」

ローマ字にすると、『N u k e L e e t』。アイツは…

有美「私がいぶ前に半殺しにしたのにね…」

まだ懲りないのかしら？

有美「…日花に絶対伝えないといけないわね」

今の私じゃ彼は殺せない。

有美「はあ…」

一体どうしたものかしら…

side 桜木咲子

咲子「ほいほいほい！」

ドゴドゴドゴッ!

『ギャフン!』

ゼイル「ダークブラスター!」

ドガアアーン!

「うおっ!」

(ギリギリ避ける)

砂智子「フンッ!」ドゴォ!

「グハッ」バタン

咲子「ホント、キリがないわね…」

学「ジリ貧になるぞこりや…」

咲子「…いや、それはないわね」

学「何でだよ!?!この数だぞ!?!」

咲子「天使化と憑依があるから」

ゼイル「変身できるのは俺と咲子だけじゃねーか…「いや、私もできますよ?」「砂智子「二か月程前に会得したのです」

咲子「へえ…」

「隙ありいいいい!」

育也「それは叫ぶものじゃない、よっ!」ドガッ!

「ゲブッ!」バタン

咲子「……………」

敵が来ては倒す、敵がまた来ては倒す、敵がまたまた来ては倒す…

咲子「あ”あ”うざったいわね!一気に倒してやるわ!」ボツ

ゼイル「今やるのか!」

咲子「ええ…下がってなさい!」

ギユイイン!

砂智子「…!!!」(その技は…!)

咲子「クリムゾンハリケーンG2!」ドツ!

ゴオオオオオオオオ!

復讐（笑）

side 桜木咲子

ゴオオオオオオオオオオ!

味方『このタイミングで!』（。D。）

赤い台風が敵を襲う。

「な、なんだアレ!」

「に、逃げるぞッ!」

…逃げる?

咲子「それはさせないわよ?」スッ

結界♪

ピキッ

「なっ…」

赤い台風と不良どもを結界で囲む。

「ウ…」

咲子「う?」

「ウソダドンドゴドーン！」

…ドゴオオオ！

ゼイル「…うん、やりすぎだ」

学「咲子怖え…」

シユウウウ…

結界を解除すると、あちこちに不良の死体（死んでない）が転がっていた。

育也「あれ？もう僕達の持ち場は終わってない？」

砂智子「…流石にそれはないと思いますよ？ほら」

ゼイル「？」

クルツ

「ククク…久しぶりだなお前ら…」

…!!

咲子「アンタは…！」

一年前メイにボコされたのザコ不良！」

「ザコじゃねえ！」イラッ

おお、怖い。

咲子「…で？何の用なの…筑紫新太」

新太「へつ、俺も不良なんだぜ？ボスではなくなつたがな…」
ゼイル（学、コイツ誰だ？）

学（咲子が言つた通り、一年前メイにボコされたザコ不良だ）
ゼイル（は、はあ…）

新太「俺はあの時屈辱を味わつたぜ…」

咲子「ケンカ売つたアンタが全面的に悪いわね」

新太「ツ…俺はその屈辱を晴らしに来た」ガラツ

武器は…釘バットね…

咲子「古っ!？」

新太「さつきからごちやごちやうるせえんだよお!」ドツ

よし、煽り成功（黒い笑み）

ゼイル（おお、流石咲子だな…）

砂智子（なるほど、煽つていたのはそういう事だつたんですね）

新太「エレキバットオオオ!」ブンツ!

筑紫は電気を纏つたバットを振ってくる。

咲子「烈焼脚改!」ドゴオ!

…ギイン!

新太「なっー」

咲子「炎天掌改！」ズガアン！

新太「グフツ…（何だ、このパワーは!?!）」ヨロツ

咲子「あら、もう終わり？弱すぎでしょ」

新太「ツ、今のはかすり傷だけ…」スツ

…いや、無理してるでしよどうみても。

新太「くらえ…！」バチバチ

エレキバットの強化版かしら？

新太「エレキバットブン回し！」ブンブン

味方（振り回すだけかい！）

咲子「はあ…呆れた」スツ

ガシツ

新太「…!?!」

私は筑紫のバットを素手で掴む。

新太「は、離せ…！」

咲子「アンタは復讐がしたかったようだけど…弱すぎる」

新太「何だと!?!」

咲子「それと一年前のアレは完全に自業自得よ…出直してきなさい！」ボツ
新太「ツ…！」スツ

筑紫はバットで防御する。

…んなもん折ってやるわ！

咲子「真…烈焼脚！」ゴオツ！

…バキツ！

新太「なー」

…バゴオン！

新太「グフツ…」バタン

シュウウウ…

筑紫の頭には、綺麗なタンコブができていたとき。

恨み

side室見メイ

一郎「この道…長いな」

祐樹「そんなレベルじゃねえだろ!？」

絵奈「10分ぐらい走ってるね」

メイ「…あ」

ルマ「どうしたのメイちゃん？」

メイ「コレ、Q・E・Dの壁だな」

味方『はあ!?!』

メイ「今すぐ範囲を広げる」

ドツ!

翔「うおう…」

メイ「…よし」

レイト「よし、じゃないんだよね」

千早「もっと早くやれよ…」

翔「やっぱ規格外だな、お前」

メイ「今本気なだけだ」

「う、撃て「よつ」ギャファン！」バゴオン！

レイト「レーヴァテイン！」ゴオツ！

「うわアアア！」

祐樹「ひよえ、もう倒されてる……」

ルマ「ボクの出番が……」

メイ「手っ取り早く早く倒した方がいいだろ？進むぞ」タタツ

千早（撮っておくか。後からメイに見せて赤面させてやろう）

―数分後―

何度か敵に出くわしたが、速攻で片づけた。

今、俺達は 見 覚 え の あ る 部屋の前扉の前にいる。

ナオ「コレって……！」

メイ「…………」

ガチャツ

「ククク、待ちくたびれたぞ……室見メイ！」

メイ「まさかもう釈放されてるなんてな……那珂川遠賀」

那珂川組組長、那珂川遠賀がそこにいた。

遠賀「とある人がそうしたのな。…さあ、死ねい！」スチャツ

…ドツ！

メイ「ヤツの能力は銃弾の追尾だ！撃ち落とせ！」

一郎「おう！雷神グフィストG3！」ドゴオ！

祐樹「サンダーラッシュV3！」バチツ！

遠賀「ほう、流石に攻略法は知っていたか。なら…コレはどうだい？」ポチツ

…カシャン！

四方の壁から銃器が現れる。

レイト「なっ…!？」

遠賀「…撃て！」ポチツ

ドゴドゴドゴツ！

メイ「ツ、翔！絵奈！」

翔「ああ…うおおおお！」ピキツ！

絵奈「（みんなを守る！）真…大国謳歌！」ギユオオオ！

翔は氷、絵奈は能力を纏った技で銃弾から俺達を守る。

シユウウウ…

2人「ハア、ハア……」

遠賀「……………」ニヤリ

…予想通りだ。

メイ「命命斬り」

ズバツ！

遠賀「な…ガハツ…」

メイ「お前がそういう考えをするのはバレバレなんだよ…フンツッ！」ドスツ

遠賀「ガクツ

那珂川遠賀 気絶

レイト「え、どういう事だい？」

メイ「コレを見ろ」スパン

銃弾を真つ二つに斬る。

メイ「中に小型爆弾が入っている。そしてこの数だ…大爆発を起こすつもりだったんだらうな」

一郎「マジかよ…」

初代の戦闘

side 火野有美

有美「…さて」

どうせ寝れないし、行くとするわ。

有美「確か、咲子達がアンチ隊ってヤツと交戦中だったわね」

もしかしたら、ソイツらのボスがヌーク・リートかもね。

有美「まあいいわ…」

シュツ

リートの気配（殺気）を探りながら、転送で移動する。

有美「…？」

強い気配が2つ…

有美「咲子とメイね。後…」

この建物ね。

有美「さて、ダイナミックなエントリーをしましよっか♪」
ギョーン：

有美「ハッ…」グッ

…ドッ！

有美「飛び込み（神）炎天掌！」ズガアン！

バリイン！

建物の壁を突き抜ける。

「何だ何だ!?!」

「侵入者だ！撃てい！」スチャッ

有美「神炎天桜舞」B L O O O O O M !

ドスッ！

「ぐわっ…」

うん、カスね。

―数分後―

この部屋ね。

コンコン

ドアをノックする。

しーん

返事はない。

有美「入らせてもらおうよ！」

ドゴオ！

「乱暴だな」

有美「私に殺気を送っておいてソレを言うのね、ヌーク・リート」

リート「……………」スツ

ピュン！

有美「ツ……」サツ

放射線ね……

有美「フレイムバレットV4」

(弾幕技。V4で技の威力はクレセントムーンぐらい)

シュバババツ！

リート「…フン」ドカッ

…ピキイン！

リートは机を蹴飛ばし、それに放射線を当て原子構造を弄りダイヤモンドにした。

シユウウウ……

有美「チツ…」

リート「俺は今戦うつもりはない」

有美「アンタがココにいる時点で、それは信用できないのよ！」ドツ
シュルル…

有美「天空掌！」ズガアン！

（炎天掌の風属性版。炎天掌より少し威力が高い）

リート「…ヌクリアレーザー」ピカッ！

有美「ツッ！」シュツ

…バゴオン！

リートの能力は『放射能を操る能力』

核分裂、核融合、核爆発…などができる。

歩く核兵器なのよ、コイツは。

しかも悪事を働こうとする。

有美（だから今すぐにでもコイツを殺さないと…）

世界がほぼ確実に崩壊する…！

有美「ヘルフレイム∞！」ゴオオオオ！

リート「……………」

ダッ！

…逃げる気ね。

有美「させないわよ！」パチン

ゴツ！

ヘルフレイムの火球を追尾型に変える。

リート「逃がす気なし、か」スツ

ピュンピュン！

リートは地面に放射線を打ち込み、地面の物質を弄る。

ピキイン！

そしてそれで防御した。

有美「クツ…」

リート「ココは逃げさせてもらう。まだその機会ではないのでな」ダッ

有美「させるk「後ろを気にしたらどうだ？」…!？」

シュウウウ…

真後ろには、水素。

有美「ツ…！」

ドガアアン！

有美「グハツ……」

リート「……」

ヌーク・リート 逃亡

有美「クソツ……！」

何か変なヤツら①

side 桜木咲子

咲子「さて、と」

ゼイル「ボスっぽいヤツも倒したしな」

砂智子「これからどうします？」

学「……ん？」

育也「？」

学「おい、あつちから変なヤツらが来てるぞ」

ザツ、ザツ

「おういお前らあああ！」

「俺は貴様をムッコロス！」

咲子「……………」

赤、青、黄色、緑、ピンク…

咲子「スーパー戦隊？」

しかもセリフが仮面ライダーね。

『違うわっ!』

「俺たあちいはあああ!」

ドドドドド…!

『牛乳特戦隊だあああッ!』シャキーン!

…そつち!?

学「ブハッ、ポーズだせえwww」

砂智子「…恥ずかしくないのでしょうか?」

「俺達は貴様らをムッコロスべくココに来た!」

「ケツチャコ着けようぞおおお!」

仮面ライダー、スーパー戦隊、ギニュー…頭がこんがらがってきたわ。

咲子「えっと、私は赤を相手するわ」

砂智子「私は黄色を」

ゼイル「俺は青で」

育也「じゃあ僕は緑」

学「俺ピンクかよ…」

『ピンクのぬあにが悪い!』

味方『うるさい!』

喋り方がウザいのよ(怒)

咲子「…行くわよ!」ドッ

火を纏って、と。

咲子「飛び込み(真)炎天掌!」ズガアン!

赤「フンツ!」シユツ

…ドゴオ!

掌底とパンチがぶつかり、弾かれる。

…スタツ

咲子「意外と骨がありそうね」

赤「意外とは何だ意外とはああ!」ボツ

ダツ!

赤「ムツコロオオオスツ!」

咲子「…来い!」

赤「レッドバーナー!」

咲子「魔王・ザ・ハンドG3」ガシツ!

赤「むっ、ならばレッドキックうう!」シユバツ!

咲子「ッ、結界流しV2!」ガオン!

ツルツ

赤「ゑ」

赤は結界流しをくらって滑り…

ずでーん

赤「ちーん

咲子「…はあ？」

頭から地面にぶつかり気絶した。

咲子「えつと…弱くね？」

side 飛羽野ゼイル

ゼイル「クレセントムーン」ギユウウン！

青「アクアガードツ！」ザパツ！

…シユウウウツ！

俺の攻撃は水の壁を貫いた。

青「ぬう…」サツ

しかし避けられた。

ゼイル「……………」

技がクレセントムーンに強化されてから、やけに命中率が低い気がするんだよな…

(変わってません、気のせいです)

青「来ないならこっちの番だッ！」ダッ

近付くのは悪手だぞ？

ゼイル「真風神の舞！」ビュウウン！

青「ぬわにつ!!?アクアスファイア！」ギユウン

シユウウウ…

ゼイル「防がれたか…」

じゃあコレしかないな。

ゼイル「ダークブラスター」ギユイイン！

青「…ダニイ!?!」

ドガアアン！

青「ぐわあああああ！」

ちーん

ゼイル「…ええ？」

コイツ、モロにくらわなかったか？

ゼイル「バカか？」

…まあいいか、俺の勝ちつと。

何か変なヤツら②

side 椿木砂智子

砂智子「アースアロー！」ヒュン！

黄色「へっ、遅いぜえええッ！」サツ

大胆に避けますね…

逆にそれをするとは効果がないので面倒くさいのですが。

黄色「くらえ！サンダークロススプリットアターック！」ビリビリッ！
え、ジョジョー部のダイアーですか？

砂智子「気化冷凍法…ではなくメガトンアツパー！」シヤツ

バゴオン！

黄色「グフツ、何だと…」

バタン

砂智子「…弱すぎませんか？」

あっさりしてますね…

side 竹下育也

緑「ウインドブラストオオオ！」

技が弱いね。

育也「真無頼ハンド！」ガシッ！

シユウウウ：

緑「ほう、止めたか…面白い！」

育也「いやいや、アレを止めるのはウチでは当たり前だよ…
むしろ防御力が一番弱いのは僕だよ？七隈兄妹意外で。」

緑「俺のとおっておきを見せてやる！」ギユイイン！

育也「…！」

強いのが来そうだね…！

緑「くらえ…風斬改！」ズバツ！

育也「（。D。）」

風斬!?弱すぎるよ!?

育也「（…もういいや）よっ」サッ

緑「な…俺の必殺技を避けただと」

育也「今度は僕のターンだよ…」ビリビリ

緑「ッ、来い…！」

育也「サンダーラッシュV3！」ドゴオ！

緑「グホオツ!？」

バタン

……………。

育也「出オチ感ヤバくない？」

side 本松学

ピンク「くらいなさい！ラブシヨット！」ピユン！

学「ザ・マウンテンV2！」グオツ！

…プスン

学「…は？」

威力弱くね？

ピンク「あたたたたたあ！」ピユンピユン！

…プスンプスン

俺が出した壁はびくともしなかった。

ピンク「はあ、はあ…」

学「えつと、大丈夫か？」

ピンク「スミマセン降参です」

学「お、おう……」

何か解せないな……

こうして、さとかに隊 v s 牛乳特戦隊は、さとかに隊のボロ勝ちに終わったのだった。

side レイン・キサラ

千代「……………」カタカタ

レイン「えつと、ヒマだね」

千代「そうね、那珂川組のサーバーを攻撃してから連絡以外する事がないわ」

レイン「でも、本拠地であるココが襲撃されるかもしれないから警備は怠っちゃダメだね」

千代「そうね……」

……………!

レイン「千代、早速敵だよ」

千代「ええ……」

ガチャツ

「おうおう、本拠地は1人だけかあ？」

「随分と舐められたものだなあ！」

レイン 「舐めてるのはそっちかもね？」

「ああ!？」

レイン 「君達は私がぶつ飛ばしてあげるよ！」

ギユイイン！

「…ほう？」

レイン 「ソウルブラスター！」 ドガアアン！

「ナツパ、避けるー！」

(元ネタ：ドラゴンボール)

「ダニイ!？」

…ドゴオ！

「グハツ」 バタン

ナツパ (あだ名) 気絶

不良の親はヤクザ

♪柴又

sideレイン・キサラ

「おらよっ！」 スチャッ

ダンッ！

レイン 「白炎結界！」 ボッ

シユウウウ…

「なっ…」

レイン 「ソウルブラスター！」 ギユン

ドガアアン！

「グオッ…」 バタン

レイン 「…で？ もう終わり？」

「ヒイツ…」

敵共は怖気づいていた。

「どけ、お前ら」

「お、親分！」

レイン「親分？」

つまり、コイツらのボスね。

荒樹「俺ア筑紫荒樹…お前らを潰しにきた」

(筑紫新太の父親)

レイン「へえ…？」スツ

少し強い気配がするね…

コレは楽しめそうだ。

荒樹「…行くぞ！」

ドツ！

荒樹「フンツッ！」ブンツ

筑紫は釘バットを振り回す。

レイン「白炎結界！」ボツ！

…ドシュツッ！

レイン「なー」

荒樹「…オラア！」

レイン「ツ…」サツ

白炎結界を破るなんて…

レイン「(次は強度を上げないと…)破壊光線！」ドツ

ジビビビツ!

荒樹「ほう…!」シヤツ

ガキーン!

レイン「(跳ね返そうとしてる!?)ハアアアツ!」

…ドゴオ!

荒樹「ぬっ…!」

筑紫は光線に弾かれ、体勢を崩す。

…今だ!

レイン「リーパーサイズ!」シヤキン

ドツ!

荒樹「…むんツ!」ダンツ

…キーン!

レイン「ツ…(相手の腕力が…!)ソウル覚醒…10%!」ギユン!

…ドゴオ!

荒樹「グハツ…」ヨロツ

レイン「…ふう」

もうソウル覚醒を使ってしまったよ…

楽しむどころか、コレは本気でいかないとね。

レイン「破壊光線！」ジビビビッ！

荒樹「それはもう経験した…」サッ

あつさり避けられてしまった…

レイン（どうすれば…）

荒樹「今度はこつちから行くぞ！」バチッ

レイン「…！」

荒樹「エレキバットオオ!!」ブンッ

レイン「白炎結界V2！」ボオッ！

ギインッ！

結界を強化して攻撃を防ぐ。

荒樹「…何イ？」

レイン「ソウル覚醒20%…」ギユン

ザパアアア！

荒樹（水…コイツ属性2つ持ちか！）

レイン「アクアジェット！」ドツ！

水を纏って突進する。

荒樹「!?グオツ…」

レイン「…からの！」ボツ

荒樹「ツ…！」スツ

バットでガードしたか。

レイン「でも、無意味！破壊光線…拳バージョン！」ギユイイン！

…ドゴオオオ！

荒樹「ガアツ…クソツ…」

クリティカルヒットだね…！

レイン「そろそろトドメを…「できると思ったか？」…？」

荒樹「悪魔化ア！」ドツ！

レイン「えっ!?」

ギユオオオ…

荒樹「バットの悪魔カッキヤー…」

悪魔化ができるなんて…だいぶヤバいね…

荒樹「フンツ！」ドゴツ

レイン「ガハッ！」

動きが、見えなかった…

レイン「ソウル覚醒100%…！」ギユルルル
舐めないで…！

レイン「ソウルブラスター！」ギユン

ドガアアーン！

荒樹「…フンッ！」カキイン！

レイン「な…！」

私の光線は、あっさり跳ね返されてしまった…。

スピリッツバーン

♪Rolling Sky—Ghost Warrior

sideレイン・キサラ

レイン「ツ、破壊光線！」ジビビビツ！

荒樹「…ムンツ！」ガツ！

跳ね返してきた!?

レイン「白炎結界V2！」ボツ！

…シュウ！

レイン「ガツ…」

強化してすぐに破られるなんて…

荒樹「エレキ…」ビリッ

レイン「…！」ザッ

来る…！

荒樹「…バレッツ！」

ズドドドツ！

レイン「リーパーサイズ！」シャキン
スパスパッ！

レイン「ハアアアッ！」

飛んできた電気の塊を鎌で斬っていく。

荒樹「フンツ…！」バチイッ！

レイン「ツ!？」ガキイン！

電圧と硬度が上がった…！

レイン「クツ…」ササッ

荒樹「おうおう、避けようってか？意味ないぜ…」パチン

…バチバチッ！

レイン「ギャッ…！」

電気の塊に囲まれ、その中で高電圧の攻撃をされた。

レイン「ハア、ハア…」シユウウウ…

ソウル覚醒が、もう持たない…

レイン「本拠地を守るのは、私の仕事なんだ…！」

私は、みんなに頼られてるんだ…！

荒樹「…フン。トドメだ」バチッ

レイン「何人たりとも…ココは通さない！」

私「私が守り通す！」

ギユオオオ……!

私は、その時不思議な光に包まれた。

荒樹「…土壇場だど!?!」

シユウウウ…

レイン「…あれ?体が元気になった…え?」バサツ

…翼ア!?

後、髪色の青がかつてる…まるでお母さんみたい。

レイン「私、悪魔化したの!?!」

えっと、名前は…!?

レイン「タマシイの悪魔、シユウコン!」

(タマシイを集めるって意味…魂集)

荒樹「悪魔化…か」

レイン「コレで対等に戦えるね…」

荒樹(対等ではないだろう…)バチツ

また来る…!

荒樹「エレキバレッツ!」バチバチツ!

レイン「…ハアツ!」ギユオオオ!

心臓の位置から巨大な赤い手が現れる。

レイン「タマシイ・ザ・ハンドオオツ！」ガシイン！
シユウウウ…

荒樹「止めただと…」

レイン「…行けっ！」ギユン

ギユイイン！

レイン「ソウルブラスタ―G2！」

ドガアアン！

荒樹「バットガード…！」

…ドスツ！

荒樹「ガフツ…（クソツ、さつきとは段違いだ…）」

レイン「…フツ！」スツ

私のタマシイのエネルギーを最大限まで貯める。

ギユルルル！

するとそれは青く輝く元氣玉のようなものとなった。

…まあ、原理が近いからね。

荒樹「なっ…」

レイン「トドメだよ…スピリッツバーン！」ポイツ！
ドゴオオオ！

荒樹「クツ、グググツ…」

レイン「ハアアアツ…！」

バガアアン！

荒樹「グオオオオオ…！」ヒュウウン

…ドゴオ！

『親分…！』

荒樹は吹っ飛び、地面に激突した。

筑紫荒樹 戦闘不能

レイン「で？まだやるの？」

「ヒ、ヒイイ！」

「親分を運べ！逃げるぞ！」

ダダダダダ

レイン「…ふう」シュツ

悪魔化を解除する。

レイン「少し休んで…ん？」

千代「……………」ジーツ

後ろに振り向くと、千代がニヤニヤしながらカメラをこつちに…

レイン「…って動画撮ってたの!？」

千代「…悪魔化する前のセリフ、イイ！」グツ

レイン「は、はあ…」

大親分現る

side 桜木咲子

咲子「…?」

牛乳特戦隊とかいう変なヤツらを倒してから、強い気配を感じる…

砂智子「…! 地中から何か来ます!」

学「結構深いぞ!」

ゼイル「地面…?」

咲子「とりあえず離れるわよ!」バラツ

フワツ

左手の小指から体を離し、それを利用して空を飛ぶ。

育也「凄い応用方法だね…」バチバチ

うん、アンタもね。

(十と十電気が退け合う性質を利用して浮遊してる。リニアモーターカーみたいな感じ)

砂智子「…ハッ!」

学「とうっ！」

ボコッ

砂智子と学は地面の一部を操って浮かせている。

ゼイル「俺は普通に飛べるな」フワッ

風属性つて移動に便利ね。

砂智子「…お出ましのようです」

…ボゴオオオ！

「ウオラアアアア！」ビュン！

クルクル、スタッ

地面から勢いよく大男が現れ、宙返りして着地した。

「この俺こそがアンチ隊のリーダー…」

ザッ！

宗助「新宮宗助だ！…桜木咲子、貴様を潰しにきた！」

咲子「へえ…」

こんな大男に私は恨まれてるのね。なんでだろ？

宗助「5人いるようだな…まとめて潰してやるッ！」スッ

ゴオッ！

地面が揺れる。

…あ、私の小指がヤバいわね。

咲子「ちよつと乗るわよ」スタツ

学「おう」

戻れ！

…カチツ

咲子「よし」

でも、もう飛べないわね。

咲子「まあいつか」ピヨン

スタツ

相手の攻撃範囲である地面に着地する。

宗助「バカが！くらえ…」ゴゴゴゴゴ

ズドツ！

宗助「アーススパイク！」

ビュウン！

ゼイル「この攻撃範囲は…やりすぎだろ！」サツ

宗助「地面は俺の縄張りだア！」

こつちに來るわね…

咲子「真千手觀音！」　コオオオオオ！
ガシツ

宗助「…ほう？」

咲子「ハアアアッ！」

パラパラッ…

こつちに來た土の棘を防ぐ。

宗助「骨がありそうだな…フンツ！」　ドゴツ
新宮は地面を殴る。

学「…！咲子、避けるオ！」

咲子「…!？」　グラッ

地面が大きく揺れる。

宗助「グラウンドプラスター！」

ドゴオオオ！

私の足元から土砂が…！

咲子「ツー」

…ズガアン！

宗助「…?」

咲子「ハア、ハア…」

新技だけど、今使わなかったら大ダメージを受けてたわ…

咲子「天空掌…!」

ゼイル「アレは…坂田先生が咲子に教えてた技か」

学「ずっと温存してたのかよ…」

ゼイル「一応、何個かまだ未使用の技があるぞ」

学「ハア!?!」

宗助「次はないぞ…ムンツッ!」バゴツ!

ガシッ

新宮は左右に岩の柱を出し（岩柱じゃないよ）2本を片手ずつ掴む。

育也「一体何を…?」

宗助「今度はお前らを狙ってやるぜ」ザッ

砂智子（もしかして、それを…）

宗助「ストーンピラーズ!」ポイツ!

ギユオオオ!

咲子「…!?!」（。旦那）

岩の柱はとんでもないスピードでゼイル達に向かって飛んでいく！
咲子「避けて……！」

片付け（相手が味方を）

side 桜木咲子

咲子「避けて……！」

ビュン！

ゼイル「エアライドV3！」ササッ

学「……ダツダア！」ズイッ

ギユオオオ！

学「ザ・マウンテンV3！」

ピキーン！

土には土を。学は3人分の攻撃を一気に防いだ。

宗助「止めるか。だがもう一丁！」ギユン！

ビュウウン！

育也「今度は僕が！絶無頼ハンド！」ガシッ！

砂智子「私も守られるばかりじゃいられませんね。……ハッ！」シユッ

ギユルルル！

砂智子「超曇天椿舞！」 B L O O O M !

ドゴオ!

ゼイル「攻撃で相殺したのか…」

宗助「またか。…なら！」 バゴツ

…イイツ!

学「ツ!?!」 グラッ

学と砂智子が体勢を崩した。

アレは…

砂智子「相手にこの岩が操られてしまったようです…ッ!」 フラッ

ヒュン…スタッ

宗助「コレで地面に着いてるのが3人になったなア!」 スッ

ドゴツ!

咲子「また来るわよ!」

宗助「アーススパイク改イ!」 ドスッ!

砂智子（土を操っても敵に操り返される…なら土椿で!） パラッ

シユルル…

咲子「へえ…!」

砂智子は土椿を使って攻撃を回避していた。
中々いい使い方ね。

ドスツ！

咲子「おっと。神炎天桜舞！」 B L O O O O M !

シュツ！

砂智子「まさか神まで強化しているとは」

咲子「まあね。燃費がいいし結構便利よ」

砂智子「そうですか…ハツ！」

バゴツ！

咲子「ええ…？」

叩き折ったんだけど…？

結構な脳筋プレイよ今の。

学「真土流波！」 ドシュウウ！

宗助「フン…（部下共がやられたのもうなずけるな。だが…甘い）」

咲子「……………」

新宮、一体何を考えてるのかしら…？

side 室見メイ

ザッ

「お前らか、那珂川組を壊滅させたのは」

気付かぬ間に、俺達の前には男がいた。

メイ「ココの敵は全員倒したハズ……」

ルマ「……メイちゃん、気を付けて。ただならぬ気配を感じるよ」

メイ「ああ……」

「部下が壊滅したのでな、俺はその片付けに来たワケだ」

一郎「片付けだと……？」

「その通り。……お前ら含めてな」 スッ

……ツツ!!

ピュン!

メイ「ヤエツ!」

ヤエ「ハアツ……!」

……ドシユツ!

千早「なっ……」

ヤエが防御に張った岩の壁は、粉々になった。

絵奈「一瞬で…!？」

下手したら俺達は…ツ。

メイ「みんな」

味方『…?』

メイ「死ぬなよ」

「ほう、気付いたか。…だが遅い」ピュン!

同じ光線を発射してきた。

メイ「斬一閃改…!？」

スウツ…ドスツ!

メイ「ガハツ…!」

刀を、通り抜けただと…!?

レイト「メイ!」タタツ

ナオ「ツ、よくも!」ドツ

一郎「ナオ、落ち着け!近づくな!」

「フン」ピュン

一郎「ツ!」サツ

「避けたか……だが無意味」

一郎「？息が少し苦しく……あれ？」

祐樹「どうかしたのか!？」

一郎「いや……一秒だけ息が苦しくなっただけ
息が苦しい？」

光線は一郎に当たっていない……

メイ「光線はガスか何かかなのか？」

「さあな。知る前に死ぬだろうな」

敵は余裕の表情でそう言う。

その余裕の表情が殺気まみれだがな。

一体どうすれば……？

大怪我

side室見メイ

考えろ…相手の攻撃を予測しろ…

「……………」ピュンピュン

メイ「…！ルマ！」

ルマ「え、ボク!?…骨結界！」ピキツ!

…グシヤツ!

ルマ「えっ…」

メイ「…チツ、違ったか」

岩も骨も粉微塵になつてしまうレーザー…一体何なんだ?

祐樹「うおお!サンダーラツシユV3!」バチツ!

「電気か…なら」スッ

シヤアン!

味方『!?!』

突然、空中に金属が現れた!

シユウウウ…

祐樹の電撃はそれで防がれてしまった。

クミ「ど、どういう事!？」

絵奈「分からない…でもひたすら攻撃するべきだよ!ザ・タイフーンV4!」ザパア
ン!

「二酸化二水素か」ピュン

(つまり水)

シユウウウ…!

絵奈「…!？」

この音は…まさか!?

メイ「絵奈!すぐそこから」

ドガアアン!

絵奈「うぐっ!？」

絵奈の目の前が突然大爆発した。

翔「絵奈!？」

メイ「今のは、水素爆発だ…」

一郎「水素爆発だど!？」

メイ「そして、アイツの能力は…」

「…言ってみろ」

メイ「放射線を操る能力だ…！」

「正解」ドッ

メイ「ツ…！」 シャツ

キーン！

「お前のような勘のいいガキは嫌いじゃないが…」 スツ

来る…！

メイ「ハッ…！」

「あいにく俺は片付け中なのでな。消えてもらう」 ピュン！

メイ「神火斬り！」 ズバッ

…キーン！

「…ほう」

メイ「ハア、ハア…」

光線を1つ跳ね返すだけでこれほど力を使うとはな…まずい…

レイト「…零零斬り改！」 ズバッ

「お前は弱いな」 ピュン

レイト「グッ…」

「レイトじや太刀打ちできないのか…」

絵奈「…ッ!?」ズキッ

二ヨ「絵奈…?」

絵奈「ガア…アアア!痛い痛い痛い!」

一郎「被ばくしたのか!?!」

絵奈「あ、足が…痛いよお…!」

翔「今すぐ冷やすぞ!」ピキッ

ジユウウウ…

貝塚絵奈 重症により戦闘不能

水素爆発からの放射線被ばくとは、なんてヤツだ…!

祐樹「ルマ、行くぞ」

ルマ「うん」

ドッ!

2人『トラフィック・ジャムG4!』愚者ッ!

ナオ「ヤエ、クミ!」

2人「了解!」

ギョーン!

3人『真無影乱舞!』シユバツ!

「一気に来たか。ヌクリア……」ギョーン

一郎「ツ、逃げろ!」

「スファイア」バシユツ!

敵はドーム状に放射線を放った。

5人『ツツ!?!』

二ヨ「斬一閃改!」

ス

パ

ア

ン

!

メイ「危なかった……」

二ヨが空間をずらしてなかったら……恐らくあの5人は絵奈よりも大怪我していただろう。

「どうした?もう終わりか?……言っておくが、天使化・悪魔化はすでに封じている」

一郎「何…?」

「気付かなかったのか?このアジト…天使化・悪魔化を阻止する物質が空気中に混ざっていたのさ」

翔「なんだと…」

「つまり、お前らは既にほぼ詰んでるんだ。大人しく消えろ」ピユン

…消えない。

キーン!

メイ「消えてたまるか。俺達は全員生きて帰るんだ」

「そうか…じゃあどうにかして俺が諦めるようにする事だな」ギユン

シユバババツ!

鉄壁

side 室見メイ

「どうにかして俺が諦めるようにする事だな」ギユン

シユバババツ!

メイ「ツ…構え!」

4人『了解!』

…今だ!

ドツ!

5人『Q・E・D!』

ズバツ!

「…鏡空間か」

メイ「コレなら、お前の攻撃は防げるハズ「フン、バカめ」…ツ!?」サツ

攻撃が、何処からともなく飛んできた…!?

「鏡空間は∞に同じ空間がつながっている。つまり光線を飛ばしてもまた防ぐまでずつと飛ぶ」

メイ「……！」

クソツ、忘れてた……！

「まあ、俺の行動範囲が制限されたのは事実だがな」 スツ

シュバババツ！

メイ「脱出！」 シャツ

Q・E・Dの空間から出る。

「出られたか……」

一郎「つまり、コイツは出られなくなったのか？」

レイト「二応そうなるけどね……」

ナオ「能力的に脱出するのも不可能ではないわ」

「不可能どころか、かなり容易だ……こんな風にな」 カチツ

……ドガアアン！

味方『!?』

ルマ「核爆発!?!」

「その通り。この空間の歪みも、大きな力を加えれば元に戻る」 カチツ

ドガアアン！

メイ（クソツ、俺は一体どうすれば……！「メイ!」……！）

翔「考えすぎるな！こんな状況でソレは命取りだぞ！」
メイ「そ、そうだな…」

「そろそろだな」カチッ

ドガアアン！

ルマ「…みんな、爆発はボクが防ぐよ」

祐樹「ルマ!？」

絵奈「ダ、メだよ…そんな事したら体が吹き飛ぶ…ッ…」

「最後だ」ポチッ

ドガアアン！

空間の歪みが戻される。

「やっとなおれた…じゃ、お前ら消えろ」スッ

シュウウウ…

メイ「みんな、逃げろオオ！」

タタッ

ルマ「…ハアッ！」ピキッ！

ゴキゴキッ

骨が、圧縮されてる…？

ルマ「ツ、コレ使った後気絶しちゃうかもね…」
祐樹「やめろ、ルマ」「止めないで、祐樹」…ツ」

ルマ「本来のタンクは、ボクなんだから」

「チャージ完了だ…起爆」ポチッ

ドガアアアアアアアアン…！

ルマ「守り抜く…！

イージスフオース！」

バゴオオオオ……！

メイ「くうっ!?」ビユウン

ルマがとてつもなく強い技を放ったのを最後に、俺は爆風で吹き飛んでしまった。

プスプス……

「……ほう？」

ルマ「ハア、ハア……ゲホッ」

「あの爆発を耐え、吹き飛ばなかったとはな……」

ルマ「ハハッ……もう、立てないよ……」バタン

羽犬塚ルマ 気絶

「……今回は見逃してやる」クルッ

スタスタ…

ヌーク・リート 逃亡

ズイツ

一郎「メイ、大丈夫か？」

メイ「ああ…それよりもルマが…！」

ルマ「……………」

祐樹「ルマ！」タタツ

ルマは爆心地付近で倒れていた。

祐樹「よかった、気絶してるだけだ…！」

翔「…アイツ、マジで凄い事したな」

レイト「どういう事だい？」

翔「周りを見てみる」

味方『…！』

被害がこの部屋以外ない…！

翔「ルマが技を放たなかったら、俺達は愚かココから半径数百メートルは吹き飛んで

るだろうな」

絵奈「グウツ…」ズキツ

ナオ「…！急いで救急車を呼ぶよ！」

一郎「…ああ」

殺意マシマシ筋肉プロテイン絡め

♪MULAストーリー―炎天桜舞V2

side 桜木咲子

咲子「(まあ、考えても無駄ね) 神炎天桜舞!」B L O O O O O O M !

砂智子「超曇天椿舞!」B L O O O O M !

シュバツ!

宗助「ロックガード」ドゴツ

防がれたわね…なら。

咲子「飛び込み炎天掌(改)!」ズガアン!

バゴオン!

相手の防御をぶっ壊す。

宗助「チツ…アーススパイク!」ドゴオ!

ゼイル「させるかよ!ダークプラスター!」

ドガアアン!

宗助「グオツ!?!」

育也「フイールドスパークV2！」バチイッ！

宗助「ツ、ロツクガー」させませんよ！メガトンアツパー！」…ぐほつ」バゴオ！
砂智子「連携攻撃が弱点のようですね…」

宗助「クソツ、バレたか…だが甘い。悪魔化ア！」カツ！
ギョオオオ…

宗助「暴力の悪魔ヴァイオ。ぶつ殺してやるぜ…」ゴゴゴ
(「ヴァイオレンス」からとってる)

咲子「…！」

殺意が何倍にも増して「隙だらけだぜ！」

ドゴオ！

咲子「ガアツ!？」

動きが、速い…！

学「咲子!？」

咲子「…大丈夫よ。ハアツ！」ボツ

ゴオオオオツ！

咲子「ジ・インフェルノ！」

宗助「フン…オラア！」ボコツ

新宮は地面から手の形をした岩の塊を出し…

ドゴオ！

それで私の火球を殴りつけた。

シユウウウ…

咲子「クツ…」

宗助「その程度じゃ悪魔化した俺にダメージは与えられねえよ。アーススパイク！」
ドゴツ！

…ボゴオン！

味方『!?!』

範囲がとてつもなく広がってる!?!

ゼイル「エアラ…ぐわっ!?!」グラッ

空中にいるゼイルにすら攻撃が届いてるなんて…

砂智子「結構ヤバイですね」

咲子「…今私が思った事をそのまま言ったわね」

砂智子「そりや似てますからね」

それ、関係あるの？

…まあいいわ。

咲子「砂智子、そろそろフルパワーで行くわよ。天使化！」カッ！

ゼイル「：俺もだな。悪魔化！」カッ！

砂智子「いい考えですね。天使化！」カッ！

シユウウウ：

咲子「結界の天使アンヘル！」

ゼイル「回復の悪魔ドーズ！」

砂智子「鉱石の天使ジェムス！」

鉱石？

見てみると、砂智子の髪色は銀髪、目の色は緑になっており、翼の色は赤だった。

カラフルね：

宗助「全員じゃないのか？」

学「残念ながらな」

育也「まあ、それでも僕達は戦うけどね！」

宗助「そうか：：来い！」

咲子「言われなくても：：飛び込み炎天掌（改）！」ズガァン！

宗助「：ムンッ！」スッ

ガキーン！

新宮は腕をクロスしてガードした。

咲子「からの、アッパー天空掌！」ズガアン！

(天空掌は上下にも撃てる)

宗助「グウ!? (掌底でアッパーだど!?)」

咲子「真烈焼脚！」ドゴオ!

宗助「ガハツ:(クソツ、舐めすぎた) ツ:(ズサー

すぐに体勢を戻したようね。

…煽ってみよ。

咲子「…あら? 『さつき』までの『殺気』はどうなったのかしら? なんちゃって」

宗助「あ?」

お、怒ったわね。

煽つたクセに苦戦

side 桜木咲子

お、怒つたわね。

咲子「アンタのへなちよこな殺気はその程度かしら？」ニタア

砂智子（さ、流石に煽りすぎでは？）

宗助「この程度だと思つてんのかア!?」ギョオツ!

新宮が放つ殺気が一層強くなつた。

…私はひるまないが。

咲子「ほうら、かかつてきなさいよお」

…コレ、自分で言うのもなんかウザいわね。

宗助「ぶつ殺してやるツ！」ドツ!

顔面に怒りマークができるレベルでイラついているようね。

相手の冷静さを爆散させる作戦は成功つと。

咲子「結界」ピキッ

結界を”私の拳”に纏う。

咲子「砂智子、ジャンプ」

砂智子「は、はい？」ピヨン

咲子「：オラア！」ドゴツ

地面を殴る。

バゴオ！

砂智子「ええっ!? (地割れ!?)」

コレが私の結界の硬度よ。

咲子「今よ、学！」

学「お、おう！地裂改！」ズドツ！

宗助「なぬっ!?ぐおお：」

咲子(ゼイル!) チラツ

ゼイル「(オーケー!) 天空落としV2!」ギユオオオ!

宗助「ツ、メタルガード！」シャキツ!

シユウウウ:

咲子「金属:」

土属性は最初の頃は土や石しか動かせない。

でも、力が増せば岩:その後金属も動かせるようになる。

砂智子「私は一応金属動かすまであと一歩なんですよね…」

咲子「へえ、いいじゃない。手本が目の前にいるわよ？」

砂智子「それは自分で習得します」

ふーん、まあいいわ。

宗助「コイツを使うことになるのは予想外だ…」

あ、それフラグ。

咲子「…てか、金属って」チラツ

育也「電気を通すハズ…フィールドスパークV2！」バチツ！

シユウウウ…

…ダメージを受けてない？

宗助「ククツ、残念だったな。雷属性対策として同時に土も動かしてくつつけてんだ

」

まあ、流石にね。

宗助「話は終わりだ…ッ！」ドゴツ

ボコオン！

地面から岩の棘が出てくる。

咲子「空中分解G3！」パラツ

ヒユウウン…

咲子「ふう…」カチツ

一旦バラバラになったのは、空に上がる途中で攻撃されない為よ。

砂智子「その能力、結構グロいですね…」

咲子「そう？私はもう慣れたけど」

砂智子「見ている側はカンタンに慣れませんか…」

ゼイル「俺は慣れてるが？」

学「俺も」

育也「僕も」

砂智子「ええ…それは貴方達がおかしいです」

宗助「宙に浮いてるからって攻撃が当たらないと思うなよ？」ドゴツ

…ピユウン！

地面から出てきた岩の棘が発射された！

咲子「そりゃそうなるわよね…結界流しV2！」ガオン！

ギユルルル！

結界で防ぐ。しかし…

宗助「オラオラ、さつき俺を煽った時の威勢はどうしたア!?」シユバツ

攻撃を防ぐだけじゃ、相手を倒せない。
どうすれば…？

炎の空

side 桜木咲子

攻撃を防ぐだけじゃ、相手を倒せない。

どうすれば…？

考えながら一旦着地する。

宗助「ロックスパイクウ！」ゴツ

…ドスッ！

岩の棘が私の腕に掠る。

着地しなきやよかつたわね…

咲子「グッ!？」

ゼイル「咲子!？」

咲子「大丈夫、かすり傷よ…」

結界を張っておくべきね。

ピキッ

宗助「結界は守る事しかできねえぜ!?オラア!」ドゴオ!

守る?…そうだ!

咲子「結界は、硬い」ギユン

さつきの地割れのように拳に纏えば、攻撃として使えるわ!

咲子「ハアッ!」ドッ

宗助「メタルガード」シャキッ

この状態じゃ火は出せないから…!

咲子「天空掌!」ズガアン!

バキッ!

宗助「何…(金属の防御を拳で折つただと!?なんて腕力…いや)結界を拳に纏ってるだど!」

咲子「アンタの”守る”って発言からヒントをもらったわ、ありがと」ピキッ

宗助「チイツ…!」スッ

再び岩の棘が放出される。

咲子「憑依：竜美!」ピカッ!

ギユウウン!

咲子「フンッ!」バキッ

岩の棘を容易く割る。

宗助「姿が変わった…変身か？」

咲子「その通り♪」

砂智子「それは…？」

学「アレは憑依つってな、竜美の力を憑依してパワーを上げてるんだ」

砂智子「なるほど…」

咲子「フフツ、くらいなさい…！」ドゴツ！

私の背後に竜の残像が見える。

宗助「(大技がくるな…)メタルガード」シャキッ

新宮は何重もの金属の壁を作る。

咲子「んなもんぶっ飛ばしてやるわ！ドラゴンスレイヤー…V2ツ！」

ドギユウウン！

ゼイル(いつの間に強化したんだ?)

宗助「ツ、このパワーは…!?!」

咲子「ハアアアア！」

ドゴオ！

宗助「グフツ…」

竜の光線は金属の防御を貫き、新宮に直撃した。

咲子「トドメよ……！」

シユルル……！

育也「桜……？」

宗助「クソツ、俺は負けるワケにはいかねえんだよ……！」シヤキツ

ゼイル「それはさせねえよ。デビルバーストG4！」ギユオオオ

宗助「ガアツ、貴様らア！」

咲子「ありがと、ゼイル……！」

夏休み中に完成させた、炎天桜舞の強化版……！

咲子「炎空桜舞！」シユバツ！

ギユルルルル！

宗助「グワアアアアア……ッ！」ドスドスツ！

……ドゴオ！

攻撃は新宮に当たり、新宮は地面に激突した。

宗助「か、はッ……」

新宮宗助 気絶、戦闘不能

咲子「……ふう」フツ

やっとなつたわ……

ゼイル「お疲れ、咲子」

咲子「ええ…「咲子！大変だアア！」…一郎？」

一郎「ハア、ハア…」

学「大丈夫か？」

一郎「大丈夫だ、それよりも…咲子、落ち着いて聞いてくれ」

咲子「ええ…」

一郎が言った内容は、衝撃的だった。

一郎「強すぎるヤツが現れて絵奈とルマが病院送りになったんだ…！」

咲子「何ですって…!？」

一郎「放射線を操るヤツに、まるで歯が立たなくて…ルマのおかげで被害はだいぶ抑えられたが…クソツ」

咲子「メイ達は!?大丈夫なの!？」

一郎「ああ…少しの傷で済んでる…」

…ツ。

咲子「今すぐ病院へ行くわよ！」

一郎「ああ…！」

病院へ

side 桜木咲子

急いで病院へ向かった。

一郎「こつちだ！」ダツ

「あの、院内は走らないでください！」

咲子「すみません、急いでるんです！」

タタツ

―数秒後―

一郎「この部屋だ……」

ガチャツ

メイ「……着いたようですね」

咲子「メイ……」

メイ「絵奈さんとルマさん以外は全員軽傷で済んでいます。しかし2人は……」

絵奈「うつ、ぐうう……」

咲子「絵奈！」

足に包帯が巻かれている。

咲子「一体何があったの!？」

「放射線被ばくです」

咲子「放射線……？」

何でそんなモノが？

「彼女らを奇襲した相手の能力です」

学「ツ……」ギリツ

メイ「俺達は奮闘しましたが……歯が立ちませんでした」

ルマ「ボクが、あの技を使わなかったら……被害はもつと広がってたよ」

咲子「ルマ……!？」

ルマ明らかに体調がすぐれてないようだった。

育也「腕が細くなってる……？」

「彼女は能力の過剰な使用による反動で骨粗しょう症になっております」

骨粗しょう症とは、骨密度の低下によって骨がもろくなり、骨折しやすくなる病態のことである。

ルマ「どちらかといえばボクの方が重症なんだけど……絵奈は後遺症が残るかもしれないからね」

絵奈「当分は登校できそうにないよ…ハハッ」
作り笑いをする絵奈。

咲子「…アンタ達を奇襲したのは、誰なの？」

メイ「分かりません…でも、咲子さんが1人で相手しようそたら即死でしょう」
それ程の相手なのね…

「奇襲したのはヌーク・リートよ」ガチャッ

咲子「先生…」

日花「師匠が逃がしてしまったと言ってたわ。まさか部下の始末に行くとは予想外だった…」

砂智子「師匠って、初代桜ですよね？」

日花「ええ…水素爆発で足止めされたそうよ」

ゼイル「水素爆発!？」

日花「ヌーク・リートの能力は放射線を操ること…つまり歩く核兵器よ」

一郎「アレはバケモンだ、今の俺達じゃ太刀打ちできねえ…」

日花「対応は私達に任せなさい。…咲子」

咲子「？」

日花「間違ってもヌーク・リートと接触しようとしないうちに。師匠命令よ」

咲子「ッ、分かりました」

私達のアンチ隊討伐は、すっきりしない勝利で終わったのだった…

アオイ「レイン、貴女悪魔化したって?」

レイン「うん、戦闘中に目覚めたんだ!」

アオイ「…成功のようね」

レイン「?」

アオイ「実は…貴女がココに来る前の頭痛、貴女の悪魔化の前兆だったのよ」

レイン「え!?!…でも何で分かったの?」

アオイ「遺伝子検査の結果で出たのよ。ちなみにココに来て頭痛が収まったのは、能力によるものよ」

レイン「タマシイを操る能力が?」

アオイ「ええ、帰巢本能と言えはいいのかしら?」

レイン「…?」

もう片方の刀

side 桜木咲子

咲子「天空掌！」ズガアン！

ビュン！

サンドバックが上に飛ぶ。

咲子「ハッ！」ピヨン

そのさらに上まで私はジャンプし…

咲子「真烈焼脚かかと落とし！」ドゴオ！

強烈なかかと落としを決める。

…バゴオ！

サンドバックは地面に埋まった。

スタツ

咲子「ふう…」

ゼイル「やる気出てるな」

咲子「ええ…」

いつヌーク・リートのようなバケモンが来るか分からない。

だから少しでも力をつけないと…!!

ゼイル「手伝ってやろうか？」

咲子「いや、いいわ。コレは私一人で「咲子」…んむっ!?!／／」 チュツ

ゼイルからキスされた：／／／

ゼイル「お前は1人じゃない。だから協力させてくれないか？」

ち、近い…

咲子「わ、分かったわよ／／／」

ゼイル「(顔赤いな) スマン、こうしないと落ち着かないと思つてな」

咲子「べ、別にいいわよ、嬉しかったし…ゲフンゲフン! 早速やるわよ!」

ゼイル「おう!」

シュバツ!

side 室見メイ

室見祖父「ゆつくりしんしんしゃい」

レイト「は、はい」

俺とレイト君は早良区にある実家に来ています。

レイト「えっと、何で僕達はココに？」

メイ「早めの挨拶です」

レイト「ええっ!？」

焦るレイト君。

メイ「冗談ですよ♪」

ちよつと意地悪しました。

レイト「そ、そっか。ちよつと焦ったよ」

メイ「本当の目的は、この刀についてです」スツ

レイト「名刀『飛梅』だっけ？」

メイ「はい。俺がこの刀を受け取った時はコレ一本しか家になかったんですが、どう

も怪しいんですよね…」

レイト「何がだい？」

メイ「刃をみてみて下さい」シャキン

レイト「……!」

メイ「分かりましたか？」

レイト「コレ、形状的に二刀流だ!」

メイ「その通りです。だから逆刃刀と組み合わせていたんですが、どうしても違和感があるんですよね」

レイト「だから、この家にもう一本あるんじゃないかと思ってるのかい？」

メイ「はい。…お爺さん」

室見祖父「どうしたと？」

メイ「この家に、飛梅と対を成す刀はありますか？」

室見祖父「……あるぞ」

メイ「ホントですか!？」

室見祖父「おう、メイが気付きんしゃった時に渡すつもりだったよ。ついてきんしゃい」

メイ「はい」スタスタ

レイト「一体どんな刀なんだろう？」スタスタ

「隠し部屋」

レイト「ココは？」

メイ「俺が飛梅を見つけ、手に入れた部屋です」

室見祖父「この台に逆刃刀と飛梅を置きんしゃい」

メイ「……………」コトン

…ゴゴゴツ!

2人『!!』

台の後ろが動き出し、1本の刀が出てきました。

スツ

室見祖父「コレが飛梅と同じくワシの親父が使っていた刀…麒麟じゃ」

文字通り衝撃の事実

side 室見メイ

室見祖父「コレが飛梅と同じくワシの親父が使っていた刀……麒麟」じゃ」
スツ

メイ「麒麟……」カチツ

お爺さんに刀を渡されました。

室見祖父「ほれ、抜いてみい」

シャツ……

……!

メイ「綺麗……」

刀身は桃色がかつた銀色でした。

形状は飛梅とかなり似ていますね……

室見祖父「庭の竹で試してみんしゃい」

メイ「はい」

スタスタ

―庭―

メイ「行きますよ…」スツ

レイト「……………」ゴクリ

メイ「…斬ッ！」シヤツ

ス

パ

ア

ン

！

竹は綺麗に斬れました。

メイ「凄い斬れ味です…！」

室見祖父「そうじゃろ？ じゃあ、今度は飛梅と麒麟の二刀流で斬ってみい」ニヤリ

メイ「？…分かりました」スツ

シヤキン

メイ「命命斬り！」シヤツ

刀を竹に振りかぶると…

…ギユウウン！

レイト「!?」

メイ「衝撃波!」

刀から飛斬撃…いや衝撃波が出て、斬れた竹が吹っ飛んで壁にぶつかりました。

室見祖父「はっはっは、驚いたやろ?」

メイ「コレは…?」

室見祖父「飛梅、麒麟を同時に使った時、それが起きるとよ。理由は不明じゃがな」

メイ「なるほど…」

なんとなく、この2本を互いに近付けた時に力を感じます。

室見祖父「説明はそれだけじゃ。後は慣れんしやい」スタスタ

メイ「…コレ、凄いですね」

レイト「でも、どう扱えばいいんだろう? 衝撃波の発生は使いにくそうだし」

メイ「衝撃波の発生には何らかの意味があるハズです。いつかソレを解明してみせま

す!」キラン

そう言つて俺は、刀を天に掲げました。

…その時たった一瞬だけ、刀身が白くなったように見えました。

side 七隈千早

千早「なあ、千代」

千代「何？」

千早「桜木咲子ファンクラブの会員数、どうなってる？」

千代「ちよつと待って…おお、4桁行ったわ」

千早「流石咲子だな」

千代「ええ…ホント、私達勧誘されて良かったわね」

千早「だよな…」

1年半前を思い出しながら言う。

千早「偶々俺の能力が気付かれて、パソコン室で見つかったんだよな？」

千代「ええ」

千早「…てか、今思うと俺ら咲子ファンの中では超古参だよな」

千代「でも、咲子の中学校時代からのファンもいるわよ？」

千早「俺達もそうじゃねーか」

千代「…ま、そうね」

咲子が中学校で戦闘大会に全国優勝した時、俺マジでカッコいいって思ったんだよ…

懐かしい。

千早「…そういえば、”奏斗”はどうしたんだ？」
千代「用事で来れないらしいわ」

千早「そうか。ま、今日は別に問題ないな」

そして俺達はパソコン作業を再開するのであった。

スキマ……？

side 桜木咲子

咲子「ふう、疲れたわ」

ゼイル「俺は壁を作るだけだったしな」

咲子「帰りましょ」

ゼイル「ああ」

手を繋いで帰る。

普段は間に竜美がいるから、2人だけで帰るのはホントに久しぶりね。

―数分後―

ピンポーン

…ガチャッ

2人『ただいま』

茜「あ、お兄ちゃんお義姉ちゃんお帰り」

茜は私を「お義姉ちゃん」と呼ぶようになった。

咲子「……！」 タタッ

ボフツ

リビングにあるソファアームに飛び込む。

ゼイル「何やってんだ…」 ナデナデ

咲子「むふう〜」

茜（相変わらず甘いな…潜ろう）スツ

スルツ…

茜はスキマを開いて、その中に入ってしまった。

咲子「…何するのかしら？」

ゼイル「さあ？」

side 飛羽野茜

茜「はあ、お兄ちゃん達の雰囲気にはやっぱり耐えられないよ…」 スタスタ

異空間で独り言を言う。

茜「まいっか。はあ〜」 ボフツ

この異空間に、私は色々な家具を入れている。

この空間だけでもある程度の生活はできるようにね。

茜「…ん？」

何か、スキマが開いてる…

茜「開けた覚えはないんだけどな…よつと」スツ

閉まれ！

しーん…

茜「あれ？」

閉まらない…？

茜「閉まれ！…閉まれ！…何で!？」

閉まらないんだけど!？」

茜「……そうだ！」

入ってみよう！

スルツ…

スルツ

茜「ココは…」

森？

「グルルルル…」

茜「あ？」クルツ

「グルアウ！」

け、獣!?

茜「弧月十字斬！」ズバツ！

「キャウン！」

茜「に、逃げよう！」ギユン

ギユルルル！

茜「エアーバレットV3！」タタツ

玉乗りのように風の玉に乗り、走る。

ビュウウン！

―数分後―

茜「ふう…コレで大丈夫かな？」

そろそろ帰ろう…

茜「よっ」スツ

…あれ？

茜「な、何コレ？」

スキマの中に”目”みたいなのが大量にあるんだけど…？
「あら、貴女は？」

茜「へっ？……!!？」

え、ええっ!?

何で…

紫「私を見て何故驚いてるのかしら？」

東方の八雲紫がああ!?

スルッ

「よっと」

橙髪の彼女は、異空間へと降り立った。

どうやら別の空間からココへ来たようだ。

「ココは…別の人が作った異空間ね。なら」スッ

彼女は異空間を”裂いた”。

「コレでオーケー。外の世界へ行くこう行く」スルッ

そして彼女はスキマの中へと消えていった。

茜がこのスキマに気付いたのは数分後の話である。

平行世界の魔術師

side 桜木咲子

『明日のことは知っている、イワシが土から…』

咲子「電話ね、もしもし」ピッ

レイン『咲子!』

咲子「どしたの、レイン?」

てか、レインが電話してくるのは珍しいわね。

レイン『さとかに隊基地に今すぐきて!』

咲子「は?何があつたの『ゲストが来たんだ!じゃ!』…はあ?」

ゼイル「何でそんなに焦ってるんだ?」

咲子「ゲストって、誰かしら?…とりあえず行ってみましょ」

ゼイル「そうだな」

―数分後―

着いた着いた。

ガチャッ

咲子「誰が来たの、レイ…ン…」

…は!?

咲子「何で貴女がいるんですか!？」

「うーん、遊びに来た？」

橙髪の女性がそこにいた。

咲子「それはおかしいですよ、ケーティさん…」

ケーティ「それもそうね」

この人はケーティ・マリオ、平行世界の魔術師だ。

レイン「私も、来た時ビックリしたよ…」

咲子「ホント、何故来たんです？もう昼3時ですよ？」

ケーティ「言ったでしょ？遊びに来たって」

咲子「…はあ」

ケーティ「ところで、この世界にもアオイがいるって聞いたんだけど」

レイン「はい、私のお母さんです！」

ケーティ「そこは変わらないのね…あっちでは私の妹でもあるんだけど」

それは知ってる。

side 室見メイ

…ふつつ、準備完了です！

メイ「レイト君レイト君レイト君」

レイト「どうしたの、メイ…ってええ!?何その服!?!」

私が入っているのは、肩と背中部分が空いているセーターです。つまり…

メイ「童貞を殺すセーターです♪」

レイト「僕は童貞じゃ…そうじゃなくて！何で突然ソレを!?!」

メイ「知りたいですかあ?」

あざとくきいてみます。

レイト「き、聞きたいよ」

メイ「そうですか。それはですね…」ドンツ

レイト「うわっ」

レイト君に壁ドンします。

メイ「パーカー以外の服着てるのをレイト君に見せたら、ギャツプ萌えするかな…なんて思ったからです♪」

ポワン

二ヨ「まあ、アイデアはボクが思いついたんだけどね♪」

レイト「そ、そうなんだ…」

メイ「で、どうです？萌えました？」

レイト「うーん…分からないかな？」

二ヨ「ええ、それはないよ」

レイト「だって突然きかれてもね…」

メイ「むう…じゃあこうします。二ヨ」

二ヨ「オーケー♪」

ギョツ！

レイト「わっ!？」

ボスッ

左右からレイト君に抱き着き、ベットに倒れます。

メイ「逃がしませんよ♪」

レイト「う、うん…」

…はあ、やっぱりレイト君はいい匂いです♪

二ヨ「レイト君、頭撫でて」

レイト「…うん」ナデナデ

「二」
「三」
「ふ」
「わ」
「あ」
「…」

病院的一幕

side 戸畑祐樹

病院の一室に向かう。

コンコン

「どろぞろ」

ガラガラ

祐樹「今日も来たぜ」

ルマ「おはよ♪」ニコッ

ルマが骨粗しょう症になって入院してから、俺は毎日対面時間終了までずっと病院に
来ている。

祐樹「今日はリンゴを買ってきたぞ」コトン

ルマ「わあ、ボク最近果物食べてなかつたな」

祐樹「切るぜえ……！」ピリッ

スパアン！

ルマ「おお！」

電気を手に纏い、手刀で八等分した。

祐樹「はい、あーん」スツ

ルマ「あーん♪」パクツ

…可愛いなあ。

祐樹がルマの部屋に行った時、翔は。

s i d e 西新翔

コンコン

「どろろぞろぞろ」

ガラガラ

翔「よっ」

絵奈「今日はちゃんと来たね〜」

翔「悪かったな昨日来なくて」

絵奈「ま、別にいいんだけどね〜」

いいのかよ。

翔「お前のスケッチブックと色鉛筆を持ってきたぞ」

絵奈「あ、ありがと。コレでヒマつぶしができるよ」

ヒマつぶしに神クオリティの絵を描くのか？

翔「じゃ、ペンギンの散歩があるから帰「待つて、翔」…？」

絵奈「もうちよつと…ココにいてくれないかな？」

翔「？おう…」

ペンギンの散歩は午後にするか…

絵奈「ちよつと一人が寂しくてね」

翔「だよな……なあ」

絵奈「？」

翔「咲子のヤツ、俺達よりだいぶ強くなっちゃったよな…」

絵奈「…そうだね」

翔「入学時は差はほぼなかったのに、日花先生に弟子入りしてからクソ強くなってよ…俺達から離れていつてる気がするんだ」

絵奈「…じゃあ」

翔「あ？」

絵奈「私達も強くなろうよ。自身持つて咲子の親友つて言えるように、ね？」

翔「…！ああ！」

絵奈「…よかった」

翔「？」

絵奈「翔、最近明るくなかったから。頭使ってばっかりだったよね」

…そういえば。

翔「そうだったな…」

絵奈「さて、私もさっさと退院しなきゃね！」

翔「フツ、だな」

side 桜木竜美

竜美「んぐぐ…」

力をためて…

春奈「竜美ちゃん、何してるの？」

竜美「…はあ！」ドゴツ

パンチ！

…バゴオ！

春奈（い、岩を砕いたあ!?!）

竜美「やったー！できたー！」

春奈「えっと、何をしたの？」

竜美「岩をパンチした！私、お母さんみたいに強くなりたいの！」

春奈「そ、そう…（既に咲子より強いのに、ねえ…今でも日花ぐらいしか止められないのに、さらに強くなっちゃったら…怖いわあ…）そ、そろそろ休憩しない？」

竜美「うーん…分かった！」

春奈（ほっ）

茜と紫

side 飛羽野茜

茜「え、えつと…」

紫「どうしたの、さつきから？」

茜「私と似たような能力を使って驚いただけです、大丈夫でしゅか、囁んだ…」

紫「全然大丈夫じゃなさそうだけど？」

茜「と、とにかく大丈夫です！さよなら！」スツ

今度はちゃんと私の空間が開けた。

紫「ちよつと待ちなさい」ガシッ

…え!?

掴まれたっ！

茜「な、何ですか!？」

紫「貴女、私みたいなスキマを開いて…怪しいわね？」

怪しいって…

茜「貴女こそ怪しいですよ！能力も見た目も完全に東方の八雲紫じゃないですか！」

紫「東方…ああ、なるほど。貴女は外の世界の住民なのね」

茜「（急、まさか本人!？）そ、そうです！」

紫「なら辻褄が合うわね。」あの魔術師”がスキマを開いて外の世界に行ったとき、名残りがあつたからね…」

茜「…？」

何の事？

紫「まあいいわ。安全に帰りなさいな」スツ

紫…さんは帰りのスキマを開く。

茜「…！つ、きかせて下さい」

紫「？」

茜「幻想郷は、実在しますか？」

紫「…ふふつ、それは貴女の想像に任せるわ」

言動からして絶対するでしょ！そこは断定してよ！

茜「…分かりました」

紫「じゃあね、飛羽野茜さん」

…え？

茜「何で私の名ま…」
スルツ

スタツ

茜「あ、私の異空間…」

…幻想郷って、実在するんだね。

茜「とんでもない事を知っちゃったなあ」

side 桜木咲子

ケーティ「ねえ咲子、私と手合わせしてみる？」

咲子「慎重に断らせていただきます」

ケーティ「え、何で？」

咲子「貴女に勝てるビジョンが見えません」

だって考えてみてよ！魔術師の中で最強の人だよこの人！

私の能力と天使化と憑依をフル活用してもフルボッコ確定なのよ！

ケーティ「そう…じゃあ私は手加減するわ」

咲子「どれぐらいですか？」

ケーティ「1割の力でいくわ」

咲子「……………」

服の模様からして5部前半のケーティさんだから…

咲子「それでいいですよ」

ケーティ「ふふっ、ありがと」

まあ正直言つて、1割のケーティさんでも勝てる確率はそんなにないわね。

ゼイル「多分俺は5%でも無理だな…」

レイン「それはないと思うよ？」

―裏庭―

ザッ

ケーティ「武器はありなの？」

咲子「え、1割で武器使うんですか？」

ケーティ「あ、そうだったわね」スツ

カラン…

ケーティさんは所持していた魔剣、『ヴァルキリー』を荷物と一緒に置く。

アレが実物ね…

ケーティ「さて…いつでもかかって来なさい！」

咲子「分かりました…ハッ！」ボツ
早速この技で！

咲子「真マキシマムファイア！」ズバツ！
ギユウウン！

ケーテイ「……………」ニヤリ

魔術師!咲子vsケーティ①

side 桜木咲子

咲子「真マキシマムファイア!」ズバツ!

ギユウウン!

ケーティ「……………」ニヤリ

スツ

ケーティ「ウイザーインパクト!」ギユン

ドガアアン!

咲子「!」

ケーティさんは黒い爆発を起こし、私の攻撃を相殺した。

ケーティ「1割はこんな感じかしら?」

咲子「(真マキシマムファイアが相殺される…なら!)ハッ!」ギユルル!

ポオオオオ!

ケーティ「へえ……!」

咲子「ジ・インフェルノV2!」ゴオオオオ!

(爆熱スクリューとブレイズスクリューは改進化なのにね)

強化もしてる。コレならどう!?

ケーティ「ウイザーインパクト…連射!」ドドッ!

バゴオン!

咲子「連射!?!」

それは流石に無理ね…近接戦闘しかないわ。

咲子「結界!」ピキッ

拳に結界を武装色の覇気のように纏う。

ケーティ「拳で来るの? いいわよ…!」スッ

咲子「いかせてもらいます…飛び込み炎天掌(改)!」ズガァン!

ケーティ「フッ!」キーン!

魔力を纏った腕でガードされた。

咲子「…新技! エンバーラッシュ!」ボッ

(火を纏った拳のラッシュ。炎タイプのインファイト)

ドゴドゴドゴッ!

ケーティ「(防御って面倒くさいのね…でも、充分衝撃は溜めたわ!) 黒反射!」

バンッ!

咲子「ッ!?!」ドスッ

カウンター技ね…!

ケーティ「ウイザーバレット!」ドッ

咲子「おっと」サッ

油断は禁物、危なかったわ。

ケーティ「…アンタ、中々凄い反射神経してるわね?」

シュッ

咲子「そうです…かつ!」ドゴォ!

ケーティ「よっ」サッ

咲子「絶烈焼脚!」バゴォン!

ケーティ「!?!グッ…」

咲子「天空掌!」ズガァン!

地面に向かって掌底を撃ち、その反動で宙に浮く。

ケーティ「…!」サッ

咲子「1人グランドファイア(G3)!」ズドッ!

ケーティ「(3人技を1人で!?)」面白い発想ね…!」キイン

いやいや、すぐに防御されても説得力ないですよ?

ケーティ「そろそろ反撃タイムよ！ハッ！」ギユン
シャキン！

ケーティさんの背後に数本の黒剣が現れる。

ケーティ「黒斬り！」シャツ！

咲子「……コレ、効くのかしら？」

ケーティ「……？」

咲子「ハッ……カッ

” 白いエネルギー” を拳に纏う。

咲子「分解火桜！」 B L O O M !

(解除火桜の強化版。やっとな出した)

シュウウウ……

ケーティ「!？」

咲子「……なるほど、コレは貴女の能力なんですわね」

ケーティ「能力？……違うわよ？」

咲子「え？」

ケーティ「私の能力は『虚空を操る程度の能力』、ウィザーのアレは能力じゃないわよ

？」

咲子「…つまりまた能力が進化したのかしら？」
…まあいつか。

2割!?:咲子VSケーティ②

side 桜木咲子

咲子「炎空桜舞!」ギユウウン!

ケーティ(炎)「空?天じゃないのかしら?」

咲子「ハッ!」シュバッ

ケーティ「:!!」(威力が数倍膨れ上がってるわ!強化版ね:)ウイザーバレット!」バ
ンッ!

ドシュッ

黒い弾丸が火桜の花びらを相殺していく。

咲子「それじゃ防げませんよ!とうっ!」ピヨン

シュルル:

咲子「天空落とし:V3!」ドゴッ

(威力は現在作中3位)

ギユウウン!

ケーティ「ジャストガード!」スッ

(スマブラかよ!?)

ピキーン!

咲子「防がれた!？」

ケーティ「ヘルフレイム!」ゴオオオオ!

…え!?

咲子「ヘルフレイム!? ツ、ハアッ!」サッ

ギユオオオ!

咲子「魔王・ザ・ハンドG4!」ガシーン!

ケーティ「…!」

咲子「ふう…」

ヘルフレイムは驚いたけど、無強化は流石に止められたわね。

ケーティ「私の攻撃もアンタの攻撃も、互いに止められてばっかね…」

咲子「ケーティさんはホントに隙がないですね」

ケーティ「そう?…まあいいわ。1割じゃこの程度だろうし…2割でいってみるわ

♪「ニコッ

…2割!？」

咲子「私、ついていけるかしら?」

ケーティ「頑張つてね。…ハアツ！」ザッ
ギユウウン！

咲子「ツ……！」

私が初めて出夢先輩と戦った時のような威圧感を感じる。

ケーティ「じゃ…行くわよ！」ドッ

咲子「…受けて立つ！」ザッ

武装色、硬化！

(結界を拳に纏ってる)

ピキーン！

ケーティ「ディメンションフィスト！」ドゴオ！

咲子「真炎天掌！」ズガアン！

キツ、キキキツ……！

拳が拮抗する。

ケーティ「ハアツ！」

咲子「わっ!？」

パワーはケーティさんが勝った。

ケーティ「ウイザーインパクト！」スッ

ドガアアン!

至近距離で!?

咲子「結界流：ぐわっ！」ドサッ

ケーティ「ほらほら、その程度!?!」シュッ

咲子「この程度じゃ、ないですよっ！」ドゴッ!

私も至近距離で!

咲子「グラランドクエイクッ！」

ドゴオオオ!

ケーティ「!?!」

地面から大量の土砂が噴出される。

流石にケーティさんも対応できず、ダメージを受けた。

…今ならこの技を!

咲子「ミニクリムゾンハリケーン！」ギョルルル!

ケーティ「ジャストガード！」スッ

ピキーン!

…また!?!

咲子「ッ、エンパーラッシュ！」ドドドドッ!

ケーティ「(またソレね) ……黒反射」ギユン!
バゴオン!

咲子「ガハッ…!」

反射技、忘れてたわ…

ケーティ「ウイザーインパクト!」ドガアアア

咲子「結界流しV2!」ガオン!

シューウウ…

咲子「ハア、ハア…」

ケーティ「疲れてきたようね」

咲子「ハハッ、そうですね…でも、まだ奥の手があります!」

ケーティ「ああ、アレね」

咲子「天使化!」カッ!

竜星群と黒嵐! 咲子 v s ケーティ③

♪桜咲く。――3代目桜

シユウウウ…

咲子「結界アンヘル！」バアン!

ケーティ「…かかってきなさい」

天空落としV3とかミニクリムゾンハリケーンは、ジャストガードに防がれた。

でもソレは、単発攻撃だからよ!

咲子「なら弹幕攻撃ね」スツ

ギユン!

ケーティ「…お?」

咲子「フレームバレット!」

(有美に教えてもらった)

ダンツ!

ケーティ「黒反射…グッ!?」ドスツ

咲子「先制技なので間に合いませんよ…ハッ!」ドッ

ケーティ「…フツ、アンタの近接戦闘スタイルはもう読んだわ！」ザツ

咲子「果たしてそうですかね？」ニヤリ

ボツ

咲子「絶烈焼脚！」ドゴツ！

ケーティ「(変わってないじゃない。…まあ、油断はしないけどね)黒斬り！」シャキ

ン

咲子「ふふっ…天使化、解除！」シユウ…

速攻で天使化を解除し…

咲子「憑依：竜美！」ギユン！

竜美に憑依する。

ケーティ(何を…?)

咲子「ドラゴン…スレイヤー！」ギユイイン

ケーティ「至近距離!? ツ…！」

咲子「V2！」カッ！

ドガアアン！

青い光線はケーティさんに直撃した。

(背後にドラゴンが現れなかったのは、天使化+憑依じゃなかったから)

シユウウウ…

咲子「…!?!」

ケーティ「ふう、危なかったわ」ギョルルルル

ケーティ「さんの手からは渦巻き状の何かが出ていた。

ケーティ「吸収…エネルギー系の技を吸収する技よ」

咲子「なっ…何ですかそのチート!?!」

折角の作戦が1割失敗したじゃないですか!

(後9割あるんかい!)

咲子「…まあいいです、次は物理攻撃ですからね!」ドゴツ

ゴゴゴツ!

地面を殴り、岩が数個浮き上がる。

ケーティ「竜ってこんな事できたかしら?」

咲子「できるんですよ、原理を気にしたら終わりですけど」

ケーティ「ふーん。…ヘルフレイム!」ゴオオオオオ

技溜めの中に攻撃はご法度でしょ!?

(そんな事ない。てか咲子もするじゃん)

咲子「真炎天掌!」ズガァン!

とりあえずヘルフレイムを跳ね返す。

ケーティ「吸収！」ギユルルル！

…うん、もうツツコまない。

咲子「そろそろね…！」

ギユオオオ！

ケーティ「コレは…！（ジャストガードじゃ防御できないわね…ならコレよ！）」スツ

咲子「畳みかける！ハアツ…：…竜星群！」シヤツ

ゴオオオオオオオオ！！

炎と竜のエネルギーが纏われた岩石の雨をケーティさんに浴びせる。

ケーティ「私も必殺技で行くわ…！」ギユウウン

ビユウウン！

ケーティ「ウイザーストーム！」

ビユオオオオ！

咲子「ツ、ハアアアア！」ギユイイン

ケーティ「ツ!?ハアツ…！」

…バゴオオオオ！

二ヨの気持ち

side 桜木咲子

咲子「ふう…私の勝ちですわね」

ケーティ「あ、あちゃあ…」

ケーティさんは微妙に線を越えており、場外になっていた。

レイン「勝者、咲子！」

コレで、一応3割の力を出したケーティさんに勝てる事が証明された。

―数分後―

ケーティ「あら、今日泊まっているの？」

咲子「いいですよ、結構快適ですし」

ケーティ「…じゃあ世話になるわね」

咲子「はい！」

その後、ケーティさんの寝相の良さに驚く私であった。

(悪くないのかよ)

side 室見二ヨ

二ヨ「……………」

僕の視点になるのは珍しいよね？（メタい）

…まっ、それはどうでもいつか。

二ヨ「むふうく♪」ギュー

レイト「……………」ナデナデ

今回は僕がレイト君を独り占めできるんだ♪

二ヨ「レイト君」

レイト「何だい？」

二ヨ「僕とメイ、どっちが好き？」

レイト「……………」どっちも同じくらい好きだよ」

二ヨ「そっか…むう…」

でも、レイト君を独り占めするのはメイが多いし…正直羨ましい。

二ヨ「…僕が本体だったらなあ」

レイト「？」

二ヨ「僕ね、メイが羨ましいんだ」

レイト「…僕ともつと過ごせるからかい？」

二ヨ「それだけじゃない。戦闘でも一番活躍してるし、咲子と対等なライバルだし、僕はただの別人格で「そんなことない」…え？」

レイト「二ヨも活躍してるし、メイにも匹敵した力を秘めてるよ。だから…ただの別人格だとは言わないでくれないかい？」ナデナデ

二ヨ「…うん、ありがとう」ギョッ

この幸せを、僕は守っていききたいな…

『超音波検査しますね…』ビー

…お腹に機械を当て、映像に映ったのは1人の胎児。

『…!?』

『おかしい…2週間前は5つ子が生まれる予定だったはず…!』

病院の医者達は焦っている。

『ツ、コレを見ろ!』ガサッ

とある資料が発見された。

『なっ、こんな事ありえるのか…!?』

そこには、5人の胎児が結合していく映像だった。
『実際に起きた事だ、信じるしかない…』

二ヨ「ふあゝあ…」

…昨日、変な夢を見た。

僕、いや僕達はもしかして…

レイト「ん、起きたのかい」ガチャツ

二ヨ「あ…レイト君、おはよう」

レイト「おはよう、二ヨ。朝ご飯はもうできてるよ」

二ヨ「ホント？すぐ行くね」

レイト「うん」

…夢の事は、頭の片隅に置くことにしよう。

旅人

side 桜木咲子

ケーティさんと勝負して数日後、私は公園でメイと雑談していた。

メイ「MULAの物語、RTAしてみたんですがかなり時間が…」

咲子「うん、当たり前」

アレ、全部やると半日以上かかるわよね…？

メイ「それでかなり疲れましたが、レイト君に抱き着くとすぐに回復しました♪」

咲子「あ…それ分かるわ。私も疲れてる時ゼイルに抱き着いたら一気に疲れが吹っ飛ぶのよ」

レイト「へつくし！」

ゼイル「…大丈夫か？」

レイト「あれ？誰か僕をうわさ」「ハクシヨン！」…大丈夫？」

ゼイル「俺も噂されてるようだな…」

「あゝ」

咲子「？」

黒髪青目の女性が話しかけてきた。

「花町高専って、どちらですか？」

咲子「花町高専？…あの道をまっすぐ進むと着きますよ」

「そうですか、ありがとうございます。それでは」スタスタ
女性はお礼を言うと去っていった。

メイ「何しに行くんですか？」

咲子「さあ？花町のOLなんじゃない？」

そして私達は雑談に戻った。

side
???.
????

スタスタ

「おお…だいが変わってるわね」

” 26年前 来た時はもうちよつと小さかったような…

「……!? 貴女は……!」

「……?」

「テレスさん! テレスさんですよね!」

テレス「うん、そうだけど? 君は……: 日花?」

日花「そうですよ! お久しぶりですね!」

テレス「はえ……: 老けた?」

日花「テレスさんが老けないだけですよ……: 最後会ってから26年経ってますし」

まあ、そうだよね。

テレス「ところで、有美は?」

日花「多分家にいますよ」

テレス「えっ、先生なのに?」

日花「もう先生辞めてますよ」

テレス「ええっ!」

それは知らなかったな……:

テレス「じゃあ、有美の家に行つてくるよ」

日花「私は仕事があるので……: また後で会いましょう」

テレス「うん、それじゃあね」

スタスタ…ピタッ

日花「…どうしました？」

テレス「えっと…有美の家って何処にあるの？」

日花「あ、分からないんですね。それは…」

日花に有美の家を教えてもらった。

日花「…を曲がると、着きますよ」

テレス「…オーケー、ありがとう。じゃ、行ってくるよ」

スタスタ

日花（流星に26年経ってるから建物で色々、ね…）

…ザッ

テレス「よし、着いた！」

ピンポーン

…ガチャッ

有美「どちら様で…?!？」

テレス「久しぶり、有美」

初代の友達

side テレス・テレスト

テレス「久しぶり、有美」

おお、ちよつと老けてるね。

有美「テレス、なの…？」

テレス「そうだよ、それ以外にありえるの？」

有美「テレス…！」

テレス「おっと」ギユツ

有美が抱き着いてきた。

有美「偶に会いに来るって言ったじゃない…！なんで26年も待たせてるのよ！」

テレス「ゴメンね…別世界で時間を使いすぎたんだ…」

有美「…次は絶対1、2年おきに来なさいよ？」じつ

有美に少し威圧される。

テレス「う、うん」

有美「約束よ…じゃ、上がって」

テレス「失礼します」

ガタン…

そして、しばらく思い出話に花を咲かせた。

―数時間後―

有美「…そういうえば、アンタを3代目桜に会わせたいの」
テレス「3代目？」

26年経つてるしもうちよつと思つたんだけどね…

有美「多分この時間帯だと公園にいるわね…行きましょ」

テレス「うん」

ガチャツ

―公園―

有美「…いたわね」スタスタ

「あ、有美さん」

「こんにちは」

黒髪ショートの子と、その隣に桃髪の女の子がいた。

…つて

テレス「僕に道案内した子じゃん！」

有美「あら、そうなの？」

「はい、数時間前に花町高専が何処かきかれて…」

有美「へえ。…テレス、この子が3代目桜よ」

黒髪の子ね。ふうん…

テレス「ふむふむ…」じっ

「…？」

この子、強いね。

それと…

テレス「ほーほー…」じっ

「えつと…」

この子も同じぐらいかな？

テレス「僕はテレス・テレスト。君達は？」

咲子「桜木咲子です」

メイ「室見メイです」

テレス「咲子にメイね、オーケー」

有美「テレスは私の親友で、旅人なのよ。最後ココに来たのが26年前ね…」
テレス「あはは…」

2人『26年!?(放浪癖でもあるんですか!?)』

有美「それと…彼女はただの旅じゃなくて、色んな平行世界に旅してるの」

咲子「平行世界? ああ…」

メイ「あつちの日花さん達ですね…」

テレス「ん、知ってるの?」

咲子「はい、ちよつと…」

有美「…あ、そろそろ時間ね。帰るわよテレス」

テレス「うん。咲子、メイ、またね」スタスタ

2人『さよなら』

テレス「…ふふっ」

2人の成長ぶりが楽しみだね。

テレス「ふあ〜」

眠い…

テレス「……………」

今日は久しぶりに有美や日花に会えたし、3代目桜の咲子、多分そのライバルのメイにも会えた。

テレス「…ちよつと残りたくなるなあ」

旅も楽しいけどね…

天空掌を創った人

side テレス・テレスト

次の日の8時頃。

僕は朝の散歩で昨日咲子達に会った公園を通りかかった。

咲子「さあ、かかってきなさい！」

「うんー」 スッ

テレス「……？」

天使化した咲子が小さな女の子の相手をしていた。

妹かな？

というか…

テレス「なんで天使化…？」

「えいっ！ぶっ飛びパンチ！」 ザッ

ドッ…！

テレス「ええ!!」 (。D。)

何、今の勢い…

咲子「結界!…からの分解火桜!…さらに真千手観音!」ガシンン!
次々と防御技を使う咲子。

ピキツ…

「はああああ!」

それにヒビを入れる女の子。

一体何者!?

シユウウウ…

咲子「あ、危なかった…」

「むう、おしかったな〜」

咲子「やっぱり強いわね、竜美」ナデナデ

竜美「お母さん…えへへ〜」

…ん!?

テレス「お母さん!」

どう見てもそんな年齢差には見えないんだけど!?

咲子「あ、テレスさん。おはようございます」

テレス「え?…ああうん、おはよう。その子は?」

咲子「娘の竜美です。とある理由で引き取った子です」

テレス「なるほど…」

引き取ったなら、まあ理解できるね…

竜美「桜木竜美です！おぼさんは？」

テレス「テレスだよ、よろしく」

(おぼさんと言われても気にしないタイプ)

竜美「うん！」ニコッ

…そうだ。

テレス「竜美ちゃん」

竜美「？」

テレス「さっきのパンチ、僕にも見せてくれないかな？」

竜美「いいですよ！」

咲子「えっ…テレスさん、ケガしますよ？」

テレス「大丈夫だよ、こう見えても僕、有美より強いから」

咲子「は、はあ…(有美さんより強いって、どれぐらいなのかしら?)」

テレス「そういうことで…かかってきて！」ザッ

竜美「うん、行くよ…！」

スッ

竜美「ぶっ飛びパンチ！」ザッ

ドッ…！

テレス「おお…」

凄い、目の前から見るとより気迫を感じるね…！

テレス「ハッ…：天空掌！」ズガアン！

シユウウウ…

掌底を放ち、竜美ちゃんのパンチを相殺した。

咲子「天空掌!?…あつ、なるほど…」

テレス「ん、君も使えるのかい？」

咲子「テレスさんも日花先生に教えてもらったんですか？」

テレス「ん?…いや、逆だよ？」

咲子「ゑ」

テレス「天空掌は、僕が作った技なんだ」

咲子「ええっ…?!?（知らなかった…）」

テレス「僕がそれを日花に教えて、日花はそれを元に炎天掌を生み出し、有美がそれを真似して覚えたんだ。…まあ、天空掌より威力は少し低いけどね」

咲子「なるほど…」

竜美「テレスさん！私のパンチどうだった!？」

テレス「凄く強かったよ！」

竜美「でしょく！」ニコッ

いやあ、この子は凄く強いね…

テレス「咲子」

咲子「？」

テレス「僕はそろそろ行くとするよ、またね」スタスタ

咲子「はい、またです」

竜美「またねく！」

…決めた。

しばらくココに滞在しよう。

彼氏へのプレゼント

side 桜木咲子

後数日で10月30日、つまりゼイルの誕生日になる。

ゼイルが転校してきたのが11月1日だから、まだ誕生日を祝った事がないのよね…

咲子「ねえ竜美」

竜美「どうしたの、お母さん？」

咲子「あとちよつとでゼイルの誕生日でしょ？プレゼントを買いただけ…何をあげれば喜んでくれるかしら？」

竜美「うーん…分かんない！」

咲子「デスヨネー…！！」ハッ

「そういえば、アイツらなら…

↓数分後↓

恋人のプレゼントを決める。

それに長けているのは…

咲子「アンタら若宮宮若コンビでしょ!？」

敬太「そうだけどな…」

景子「そうだけどね…」

若宮景子と宮若敬太

コイツらは中学生の頃から付き合っており、咲子達と同じ中学である。

初登場は2話とかなり初期だが、ほぼ登場していない言わばモブキャラ。

尚、イナイレのパロディ回では登場した模様。

咲子「恋人に渡すプレゼントは一応クリスマスもあったけど、もっとゼイルが喜ぶようなプレゼントを渡したいの」

景子「……………」

咲子「相手が喜ぶようなものにどんなものがあるのか、ずっとリア充のアンタ達にきききたの」

敬太「なるほどな…」

景子「そうは言っても…」

敬太「プレゼントは何を渡してもいいと思うぞ？」

景子「プレゼントは何を渡してもいいと思うわ？」

咲子「えっ…？」

敬太「1番大事なのは、気持ちだ」

景子「ちゃんと自分の想いが伝わればいいのよ」

咲子「……………」

そう、だったわ…忘れてた。

咲子「ありがとう、2人とも」

敬太「どういたしましてだ」

景子「どういたしましてね」

そして、当日。

全員『ゼイル、17歳の誕生日おめでとう！』

ゼイル「ああ…みんな、ありがとう…！」

かなり久々にちゃんと誕生日を祝われたゼイルは、少し感動していた。

そして周りは順番にプレゼントを渡していき…

翔「よし、最後は咲子だな」

咲子「ええ。ゼイル、ちよつと立ってくれないかしら？」

ゼイル「おう…」ガタン

咲子「私からのプレゼントは2つあるわ。まずはコレ」スツ
私が出したのは…灰色と黒のマフラーだった。

それをゼイルの首に巻く。

咲子「頑張つて編んだのよ？」

ゼイル「…フツ、ありがとな咲子」ナデナデ

咲子「ふふつ…そして、私の2つめのプレゼントはコレよ♪」

グイッ

ゼイルを少しこつちに寄せる。

ゼイル「おいちよ…」

ちゆっ

咲子「愛してるわよ、ゼイル♪」ニコツ
口に軽いキスをした。

全員『おお〜！』パチパチ

ゼイル「……………（やっべ、咲子に惚れ直したぞ…）」

咲子「じゃ、誕生日会を続けましよ！」

全員『イエーイ！』

そうだ、食べに行こう

side 桜木咲子

私、ゼイル、竜美の3人は家（自宅）で寛いでいた。

咲子「竜美、今夜は何食べる？」

竜美「うーん……何でもいい！」

ええ…

咲子「その返答が一番困るんだけど……あ」

ゼイル「何か思いついたのか？」

咲子「外食にしましょう」

竜美「やったあ！」

店は…

咲子「いつもと同じでいいわよね？」

ゼイル「もちろんだ。あその料理は美味しいな」

咲子「んじや、いくわよ竜美」

竜美「はくい！」タタツ

♪煮ル果実―ハングリーニコル

―イーティングニコル―

ガラガラ

今はまだ5時だからか、あまり人はいなかった。

「いらっしやいませ…おお、君達かい」

咲子「先月ぶりです、ニコルさん」

「俺もいるぞー!」

ゼイル「…ノーマンさん?」

花町のOB兄弟、ニコルさんとノーマンさんがいた。

…まあ、ニコルさんは店主だから当たり前だけど。

ニコル「…そうだ!君達に見せたいものがあるんだよ」スツ

ニコルさんとはあるポスターを出す。

咲子「えつと…」

カプサイシンチャレンジ!

対象商品：カプサイシンライス（大盛）

カプサイシンライス（大盛）を30分以内に食べると、代金無料＋クーポンをプレゼント！能力の使用は許可します！是非チャレンジにご参加下さい！

ただ今のベスト記録：5分20秒

ただ今の2位記録：28分42秒

…まさか。

咲子「ベスト記録って、風鈴だったりしますか？」

ニコル「そうだよ。チャレンジに挑戦する為だけに北海道からはるばる来たとか言っていたね」

咲子「ええ…?」

いつ来たの？

風鈴の思考回路がよく分からないわ…

ニコル「ちなみに、このチャレンジを受ける場合牛乳が自動的につくから、安心していいよ」

ソレ、標準装備なので安心できませんよ……
ノーマン「で、挑戦するのか咲子？」

…フツ。

咲子「…挑戦しますよ」

ニコル「オーケー、じゃあ早速準備するよ。…あ、君達2人は？」タタツ

ゼイル「俺はポークステーキで」

竜美「お子様セット！」

ニコル「了解！」ババツ

…うん、速いわね。

…数分後…

ニコル「はいお待ち〜」コトン

ジュワア…

赤い飯が盛られた皿が私の前に置かれる。

…もちろん赤飯ではなくカプサイシンライスである。

咲子「……………」ゴクリ

ニコル「準備はいいかい？」

咲子「…はい！」

ニコル「じゃあ…始めるよ！」

カプサイシンチャレンジ

side 桜木咲子

ニコル「じゃあ…始めるよ！」

ピッ!

タイマーがスタートする。

咲子「一口目…」パクッ

…んぐっ!?

咲子「辛いいいイ！」ガシッ

ゴクッ…

すぐに牛乳を一口飲んで辛みを消し去る。

咲子「牛乳を飲み干すとほぼ詰みね…」

できるだけ節約しないと…

咲子「ヤケよ!はむっ、あむっ…」

ゼイル「おい待てそれは…」

ジジッ(あく、辛味の音オ〜!)

咲子「ギヤアアア！」

辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い!

(1個だけ違うな…)

ゴクゴク…

咲子「んぐっ…ヤバいわね、コレ」

ノーマン「無理するなよ? 割とマジで」

デスヨネ…

咲子「はむっ」パクッ

ジュウ…

辛い…でも我慢よ…

咲子「んむっ」パクッ

ジュワア…

イイツ…

咲子「あむっ」パクッ

シユウウウ…

咲子「一口!」ゴクッ

ゼイル(そのサイクルをしても、牛乳は持たないだろうな…どうするんだ咲子?)

とりあえず

ライス3口↓牛乳1口

のループを繰り返した。

↓数分後（タイマー残り：17分49秒）↓

ゴクツ：

咲子「あ（絶望）」

牛乳が、亡くなった：

（漢字がおかしいぞ）

まだ半分残ってるのに：

ノーマン「ココまで持たせたのも結構凄いなと思うけどな？」

咲子「問題はソレじゃないですよお：」

：またヤケ食いしかないわね。

咲子「んむっ、はむっ、あむっ、はむっ、んむっ：」パクパク

ゼイル「（。 ㇏。）」

ジジツ：

咲子「くくくッ！」ジタバタ

辛い辛い辛い辛い唐津！

(地名かよー)

咲子「辛いのが飛んでいけ、辛いのが飛んでいけ、辛いのが……あれ？」
辛く、なくなった？

咲子「はむっ」パクッ

しーん

咲子「でも味覚はある……まさか」

私……

咲子「辛味を”分解”した……？」

能力の使用はありだから……問題ないわね。

咲子「うおおおおお！」ガツガツ

ニコル「えええっ!？」

ノーマン「おいおい死ぬぞ!？」

咲子「もう私は無敵だアア！」パクパク

13分後(ムスカ大佐です)ー

咲子「はむっ！」パクッ

……ゴクッ

最後の1口を飲み込む。

ピッ

ニコル「残り時間13分6秒：つまりタイムは16分54秒だね！2位更新おめでとう！」パチパチ

咲子「いやあ、私の能力が発動しなかったら死んでました」

ノーマン「そういえば、能力が進化したとか言ってたな」

咲子「そゆことです」

竜美「…ねえねえお母さん」

咲子「？」

竜美「次は私も挑戦したい！」

咲子「……………」（。D。）

ゼイル「…どうする？」

咲子「えつと…もつと大きくなったら、ね？」

竜美「うん！」ニコッ

その後私はクーポンを貰い、ゼイルと竜美の代金を払って帰った。

数日後、メイは咲子と同じようにカプサイシンチャレンジに挑戦していた。

メイ「咲子さんには負けません！」パクツ
ジジツ…

メイ「ギャアアア！」

ニコル（うん、だよね…）

26分後、死にかけてた状態でチャレンジをクリアしたメイがいた。
一応3位更新である。

留美とレイトの遺伝子

「何故だ！」ダンッ

研究者の1人は台パンする。

「赤坂留美と室見レイトの遺伝子を採用したのはいい…だが、ソレが保管されている研究所までが破壊されるとは…」

「予想できぬ事態だ…」

「攫う事はもうできない。どうやって2人の遺伝子を採用する?」

「髪の毛1本でもいい、どうにかして…」

ザッ

「室見レイトのならある」

「…戻ってこられましたかボス!」

研究者達のボス…ヌーク・リートが現れる。

リート「ヤツらと戦闘する機会があつてな、その時採取した。使え」スツ

「あ、ありがとうございます!」

研究者は室見レイトの髪の毛1本を受け取る。

リート「赤坂留美とは後に接触するつもりだ。ヤツの遺伝子はかなり特殊だからな
…」

「はい、3つの属性を持つ上に能力を持つ確率はかなり高いヤツの遺伝子は重宝すべき
物でしょう」

リート「赤坂留美の遺伝子は知っているが…室見レイトの遺伝子は何が特別なのだ
？」

「生まれた時の遺伝子検査などを元に攫ったのですが…予想通りでした。…こちらの映
像を」スツ

研究者はヌーク・リートにとある映像を見せる。

咲子達が研究所に着く前、レイトが実験されている映像だった。

レイト「あ、あ”あ”ッ…！」グラッ

…ゴオッ！

室見レイトは、悪魔化した。

リート『…偽物の悪魔、ドツペルか』

『はこ』

リートが悪魔化名を知っているのは、既に同じものを見たことがあるからである。

「フンッ！」 ダンッ

映像の中で研究者がレイトに向かって光線銃を撃つ。

…キーン！

しかし、光線は何かに弾かれた。

レイト「グツツ…」 キラッ

パアア…

レイトの前にジョジョで言うスタンドのようなものが現れていた。

風貌は…天使化のソレである。

「…！成功だ…！」

そこで映像が切られた。

リート「ふむ…」

「ヤツは天使化と悪魔化が同時にでき、しかも片方を変身せず意のままに操る事ができる…この映像のヤツは暴走状態ですが、意識があればかなり厄介でしょう」

リート「なるほど、この遺伝子がアレばそれをわが物でできるな」

「その通りです」

リート「……そろそろ時間のようだ、俺はもう行く」

「はっ」

シュツ

「……よし、この髪の毛から遺伝子を採取するぞ」

「ああ……」

この研究が咲子達にとって悪い意味で成果を出すのは、翌年の3月にある5校衝突の時だった。

留美「……痛っ！」ズキッ

茜「……どうしたの、留美？」

留美「いや、なんか髪の毛が抜かれた感覚がして……」

リート「…………」

シュツ

ドツペルとワンダーズ

side 室見メイ

メイ「やあっ！」キーン！

レイト「！」サツ

俺は今、レイト君と手合わせをしています。

レイト「ダブルグレネード：V2！」ドゴオ

ギユウウン！

メイ「：ハツ！」ギユン

ゴオオオオ……！

メイ「ゴツドキャッチ：G4！」ガシツ！

シユウウウ……

レイト君の攻撃を難なく止めます。

レイト「止められたか……でもコレはどうかな！」ボツ

ドツ！

レイト「レーヴァテイン改！」ギユウウン！

…ココは、相殺した方が良さそうですね。

メイ「ハツ…絶ゴツドノウズ！」ドギユウン！

…バゴオ！

レイト「負けないよ！ハアアア！」

レイト君は負けじとエネルギーを送り続けます。

メイ「…！」

カッ！

メイ「天使化…!?!」

レイト君の天使化と同時に、俺の技が相殺されてしまいました。

シユウウウ…

レイト「冒険の天使、ワンダーズ！」

(元ネタ…トンデモワンダーズ)

メイ「おお…！」

レイト「…あ、やっちゃったよ」

メイ「えっ…？」

つまり、既に習得済みだったんですか？

レイト「実はね、一週間前ぐらいにゼイルと手合わせした時に目覚めたんだ」

メイ「は、はあ…「それと、コレもできるよ」…?」

レイト「見て驚いてよ…悪魔化!」ギユン!

…悪魔化!?

メイ「ありえませんが…天使化と悪魔化が同時なんて…あれ?」

レイト「…よし」

メイ「外見が、変わってませんよ?」

レイト「ん?ああ、僕の状態は天使化だけど、悪魔化はこうやって出すんだ…ハッ!」

…ゴオオ!

メイ「…!」

レイト君の隣に、スタンドのような人型の影が現れました。

レイト「偽物の悪魔、ドツペル!」

(元ネタ：拝啓ドツペルゲンガー)

メイ「…でも、どうやってその現象が?」

レイト「この現象が発生した直後に、坂田先生にきいてみたんだけど…かなり驚いて

いたね。遺伝子が特殊らしいよ」

メイ「なるほど…」

レイト「…さあ、手合わせを続けよう!」

メイ「あ、その前に…天使化！」カッ
シユウウウ…

メイ「…コレでフェアです！」

レイト「そうだね…真零零斬り！」ズバツ！
赤い斬撃が飛んできます。

メイ「神火斬り！」キイン！

…スパアン！

レイト「ツ、ハツ！」ギユン
パラツ…

メイ「…！（グラランドスイーパーですね…！）」キツ

レイト「予想通りだといいいね…！」カチツ

…ピカッ！

メイ「範囲が…!?」

レイト「グラランドスイーパーV3！」

ドドドドゴオ…！

メイ「…グハツ！」バゴオ

…ズサツ！

爆風で吹き飛ばされてしまいましたが、すぐに着地して体勢を整えます。

レイト「…どうだい？」

メイ「…フツ、強くなってますね…！」

レイト「そうかい。…まだまだ行くよ！」 ドツ

メイ「…こつちこそ、です！」

…キーン！

特訓、特訓。

side 室見メイ

レイト「せいっ！」シヤッ

メイ「…ふっ！」サッ

レイト「えっ!？」

今です！

…ギョーン！

メイ「ハアアアア！ストームゾーン！」

(風神の舞の強化版)

ビュウウン！

レイト「くうっ…うわっ！」フワッ

メイ「さらに命命斬り！」

レイト「ドツペル！」

…ズバッ！

メイ「…!!」

レイト「ふう、危なかった…」

レイト君は悪魔化で俺の斬撃を止めていました。

レイト「僕のターン！レーヴァテイン改！」ボツ

…キーン！

メイ「ツ…！」ギギギ

レイト「…せやあ！」ゴオツ

メイ「うっ…」ザッ

少し押され気味になってますが…試してみますか。

俺は押されながら刀を構え…

メイ「命命斬り！」ギユン！

技を発動しました。

すると…

…ギユウウン！

レイト「なっ…ぐわっ!？」ドゴオ！

衝撃波が発生し、レイト君を吹っ飛ばしました。

ドサッ

レイト「いてて…今のは何だい!？」

メイ「この2本の刀の特性ですよ。技と一緒に衝撃波が出るんです」

レイト「えっ、何それ…」

メイ「…でも、ココからは一刀流で戦いますのでご安心を」スツ

レイト「うん、安心できないけどね？」

メイ「それと…天使化解除！」

シユウウウ…

レイト「!？」

メイ「からの…憑依：クミ！」

ギユン！

レイト「…なるほど、憑依を使って戦うんだね」ザツ

メイ「その通りです。雷属性の技にも慣れておかないといけませんからね…」スツ

お互い構えます。

…ドツ！

レイト「真零零斬り！」ズバツ

メイ「真ニードルハンマー！（刀バージョン）」バチツ

…キイン！

その後もしばらく俺とレイト君は手合わせするのでした。

side 桜木咲子

私は、留美が悪魔化を制御できるように鍛えている。

その結果、ある程度は制御できるようになった。

咲子「んじゃ、変身しなさい！」

留美「はい！…悪魔化！」ゴオッ

シュウウウ…

留美「紅の悪魔、コウマ！」

咲子「憑依…竜美！」

ギョーン！

留美「いきますよ…！」ボッ

ギョルルルル！

留美の後ろに炎のマジンが現れ、留美と共に回転する。

留美「ブレイズストーム！」ドゴッ

(爆熱ストームの強化版)

ゴオオオオオ！

咲子「…フツ、いいわね」

結構。パワーを感じるわ。

咲子「真千手観音！」ギユン

…ガシン！

留美「…あちゃあ」

シューウウ…

咲子「ふう。いい攻撃だったわよ！」グッ

留美「パワーの差は2.6倍ぐらいあるのによく言いますよ」

(ココでのパワーは450万 vs 1200万)

咲子「私が言ってるのはパワーじゃなくて気迫よ、気迫。だいぶ制御できてるじゃない」

留美「フフツ、ありがとうございます」

咲子「んじゃ、続けるわよ！」

留美「はい！」

曲を作ってるヤツ

side 桜木咲子

私達さとかに隊＋留美&茜は基地に集合していた。

どうやら千早達がプレゼンをやるらしい。

咲子「多分5部のプレゼンだろうけど…早くない？」

メイ「開発スピードは元々速いのさらにさらに速くなってますよね…」

翔「もう驚かんぞ…」

ガチャツ

…セツティングが終わったようね。

千早「それじゃ、プレゼンを始めます」

画面には、

『MULAの物語制作陣の紹介と5部のPV』

のタイトルが。

…やっぱり5部の開発は終わってたのね。

千早「まずは、制作陣のメンバー紹介ですね。プログラマーは俺、七隈千早と…」

ザツ

千代「私、七隈千代です。量は私が8割、千早が2割ですね。私の場合能力によるものが多いです」

千早「映像・演出はこの方です！」ピツ

絵奈『どうも、貝塚絵奈です』

スクリーンに絵奈が映る。

病院で動画を撮ったようだ。

絵奈『ピクセルアートは私が全部やっています！』

そして動画は終わった。

…短いわね。

千早「そして音楽、つまりBGM担当はこの方です。…おーい、出てこい」

「う、うん…」

眼鏡とヘッドホンを付けた男性が現れる。

奏斗「音楽担当の、音羽奏斗です。曲は僕が作っています」

千早「メンバーは以上です！それじゃ次はお待ちかね、M U L Aの物語5部のPVで

す！」

PVの後、プレゼンは終わった。

奏斗「緊張した…」

千早「まあ、そりゃ学年のトップ達の目の前で自己紹介をするんだからな」

千代「緊張しなかった私達がおかしいのよ」

奏斗「いや、それは2人が試合の実況もしてるからだと思うよ？」

うん、私もそう思うわ。

咲子「…そういえば、アンタ達はいつ知り合ったの？」

千早「中学の時だな。オタトークで盛り上がってそのまま友達になった」

奏斗「そういえばその時ぐらいだったね、桜木さんが中学の戦闘大会に優勝したの」

千代「私達は違う中学だったけどね」

咲子「それぐらいの時期だったのね…」

てか、私自身戦闘大会に優勝したのを忘れそうになるわ…

主にココ2年の内容が濃すぎるせいで。

メイ「奏斗さんの曲、凄く気に入ってますよ！」

奏斗「あ、ありがとう…」

そしてもうしばらく私達は雑談するのであった。

―数時間後―

メイの実況、生配信にて。

私とメイはアモングアスの対戦をしていた。

もちろんさとかに隊のヤツらも巻き込んで。

Bloom「Kid」「さつき誰かがベントしたのが聞こえたわよ？」

Mei「どのあたりですか？」

Silver「Bloomと一緒にいたんだが、医務室辺りからだ」

Ice man「マジか？」

TY「……………」

Zeroto「TYはどうだい？」

Fast「Thousand」「さつきから黙ってるようだが？」

TY「お、俺は何も…」

全員『TYだな』ピッ

『TYはインポスターだった』

うん、やっぱりね。

夢（300話突破！）

side 桜木咲子

今日は2学期最後の日。

冬休みはまた北海道に行くつもりだから、楽しみね♪

日花「それじゃ、冬休みの宿題を配るわよ」パサッ

祐樹「宿題かよ…」ずーん

ルマ「ボクが手伝うから安心して」

めんどくさがる祐樹を松葉杖を持ったルマがなだめる。

色々渡された後、とある紙が最後に渡された。

咲子「…原稿用紙？」

お題は何かしら？

日花「今回の作文のお題はズバリ、『夢』よ」

翔「夢？」

日花「将来やりたい事、就きたい職業、成し遂げたい目標…何でもいいわ。アンタ達の夢を書きなさい。…ただし、高校生らしい書き方をするからね」

咲子「……………」

夢、か…

そういうえば翔、祐樹、絵奈の3人以外には言つてなかつたわね…

学校が終わり、私達は帰路についた。

（メンバーはさとかに隊+留美&茜）

メイ「俺の夢は室見流の道場を建てることです！」

レイト「おお…それはいいね」

メイ「咲子さんの夢は何ですか？」

咲子「…知りたい？」

メイ「だからきいてるんです」

咲子「…ふふつ、そりやそうねえ」

翔「…ああ、アレか」

祐樹「懐かしいなおい…」

絵奈「だよね〜」

（ビブスをつけてる）

翔、祐樹、絵奈の3人は懐かしがる。
そりや小学校の時に言った事だしね…
咲子「私の夢は…」

”最強”になる事、かしら？

久々に言ったわね。

ゼイル「最強……？」

咲子「まずは福岡県で最強になり、次に日本最強になって、さらにアジア最強になって、ついに世界最強になって、最後は……」

私は一息ついて、その言葉を言う。

咲子「時間軸も超えて最強になる事よ」

その為に私は花町高専に入学した。

留美「先輩の夢……凄いです！」

（語彙力死んでるぞwww）

千早「……流石だな」

メイ「……フフツ、きっと咲子さんなら叶えられますよ、その夢！」

咲子「そうね。アンタも道場を建てる夢、頑張りなさいよ」

メイ「はい！」

そして私達は雑談しながら帰ったとき。

―過去―

コレは咲子達が小学生の頃に起きた出来事である。

翔「俺の夢は、ペンギントレーナーになることだ！」

絵奈「ポケモントレーナー？」

翔「違う！ペンギントレーナーだ！」

絵奈「ふくん。私は画家になることかな？」

咲子「絵奈らしいわね」

祐樹「俺は…まだない！」

翔「え、マジで？」

祐樹「俺バカだから、まだ思いつかない！…咲子は？」

咲子「私の夢は、”最強”になることよ！」

3人『最強？』

咲子「日本一強くなって、世界一強くなって…今までもコレからも一番強い人になるの！」

翔「おお、いいな！」

絵奈「頑張っ
てく！」
咲子「うん！」

2年冬休み 帰省

side 桜木咲子

ガチャッ

春樹「ただ”イモ”」

咲子「おかか”えり」

蓮也「…？」

春樹「おう、咲子。…と、ついでに親父。お土産だ」スツ

蓮也「俺はついでおかよ…」

もらったのは東京バナナだった。

コレ、結構美味しいわよね。

春樹「…ん？」

竜美「…お兄さん、誰？」

咲子「あ、そういえば会ったことなかったわね」

夏休み中は帰って来なかったし。

春樹「えっと、この子が竜美ちゃんか？」

咲子「ええ」

竜美「桜木竜美です！お兄さんは？」

春樹「咲子のお兄さんの春樹だ、よろしくな」ポンポン

竜美「うん！」

春樹「…そういえば。竜美ちゃんのお土産もあるんだよ」ゴソゴソ

咲子「えっ、買ったの？」

春樹「まあ、好みが分からなかったから、コイツだ」スツ

兄さんが出したのは…ご当地のピカチュウキーホルダーだった。

…無難なチョイスね。竜美はテレビでポケモン見るし。

竜美「ピカチュウだ！ありがとう！」ニコツ

春樹「おう、喜んでくれた何よりだ」

蓮也（俺、空気なのか？父親なのに立場弱すぎだろ…）

side 飛羽野ゼイル

ガチャッ

きじお「ただいま」

ゼイル「おかえり、兄さん」

茜「おかえり〜！」

きじお「そういえばゼイル、義娘ができたんだって？」

ゼイル「…まあな」

きじお「確か…竜美ちゃんだっけ？明日会わせてくれないかい？」

ゼイル「もちろんだ」

きじお「つと、お土産だよ」スツ

ゼイル「…プレミアムマツ缶だと!？」

コレ、実物を見るのはかなり久々だな…

ゼイル「ありがとな、兄さん」

きじお「どういたしまして」

side 梅野風鈴

今年も咲子達に来るらしい。

咲子達と一緒にいるのは結構楽しいし、楽しみだ。

風鈴「うーん、予定を考えてるとお腹がすくなあ…」

(いやなんでだよ)

…次福岡へ行くときも、カプサイシンチャレンジに挑戦したいな。

風鈴「あーあ、もっとお腹すいてきた。カップ麺10個食べよつと」スタスタ
(今、明らかに異常な数字を聞いた気がするんだが?)

13分後

ズズツ

風鈴「え、なんで私が太らないのかって?そりゃ…脂肪は常日頃戦闘に使ってるからね!」ドヤア

読者達に説明し、ドヤ顔をする。

(何だ、この圧倒的メタさは…)

風鈴「ん…そうだ!」

咲子達が来たら、”アレ”をしよう!

風鈴「でも、絶対私が勝つから…」

咲子達vs私、コレでチャラだね!

楽しみだなあ♪

初代梅

side 桜木咲子

今日は12月24日、クリスマスイブ。

私は博多駅でとある人物を待っていた。

…お、いた。

咲子「こつちよ、砂智子」

砂智子「あ、咲子さん。1月半ぶりですね」

まあ、話数的には30話も経ってないけどね（メタい！）

一応砂智子も私達と北海道へ行くつもりだ。

砂智子「明日はクリスマス会があるんですね？」

咲子「ええ…そういうえば風鈴が来るって言ってたわ」

砂智子「風鈴さんが？北海道からですよね？」

咲子「ソレがよく分からないのよ…どうせ私達が北海道に行った時に会えるのに」

砂智子「飛行機じゃないんですか？」

咲子「移動手段をきいたら、『飛んでくる』って言われたんだけど…まさか」

…うん、風鈴だったらあり得るわね。

砂智子「空を飛んで福岡まで来たりして…？」

咲子「…絶対そうね。見つけたら撃ち落としてやるわ」ニヤリ

砂智子「あはは…」

テレス「いやあ、ヒマだったからちようどよかったよ」

咲子「そういえばしばらくココに留まるんでしたよね？」

途中通りかかったお土産屋で見覚えのある人がいたので、挨拶したらついてきた。

テレス「そうだよ。最後ココに来てからだいぶ変わってるし、色々見て回りたいしね」

砂智子「あの…」

テレス「ん、どうしたんだい砂智子？」

砂智子「半年程前に羽合高専に来たりしてませんか？」

テレス「半年前に羽合？…ああ、あったね」

砂智子「そうですね、何処か見覚えがあったので気になっちゃいました」

…ピロン

咲子「ん、メールね」スツ

風鈴から写真付きでメールが来ていた。

『福岡なう』

咲子「…マジで来たわね」

写真は福岡タワーを空から撮ったものだった。

テレス「北海道から飛んでくる友達がいるの？ 凄いなその子」

ピロン

また風鈴からメールだ。

『咲子捜索中。どこにいるの？』

咲子「……………」

砂智子「…普通に答えたらどうです？」

咲子「いや、私の予想が正しければ…」

…多分もう見つけてるのよ」

砂智子「えっ？」

咲子「いるんでしょ、風鈴？」

…バサッ

「いやあ、バレちゃったよ。流石咲子だね」

スタツ

天使化した風鈴が空から着地した。

…それにしても。

咲子「アンタ、北海道から天使化して飛んできたの？」

私だったら風を纏って飛んでくるけど。

風鈴「その通り。風の天使は速いのさ！」フンスツ

ドヤ顔をする風鈴。

テレス「んく？」じー

風鈴「ん？…あ、貴女は！」ハッ

咲子「知り合い？」

風鈴「…しよ」

テレス「…あ、バレた？」

風鈴「初代”梅”さん!？」

砂智子「…え」

咲子「えええっ!？」

衝撃的な言葉が風鈴の口から放たれたのだった。

風鈴は食いしん坊である

side 桜木咲子

12月24日の昼頃。私達は衝撃的な事実を知った。

テレス「えっと、なんで分かったの？」

風鈴「高専の写真で歴代梅の写真を見たことがあるんです！」

テレス「へえ…ん？2人ともビックリしてどうしたの？」

咲子「そりや初代桜の親友が初代梅なんですから」

砂智子「突然言われて驚かないハズがないですよ…」

テレス「うん、だよね」

風鈴「……………」じー

咲子「…どうしたの、風鈴」

風鈴「…咲子」

ぐうーっ。

…はあ。

咲子「…我慢しなさい」

風鈴「だってえ、北海道からココまで飛んできたんだよ？天使化は…今解除つと」
シユツ

砂智子「えつと…」

風鈴「？」

砂智子「風鈴さんって食いしん坊でしたっけ？」

咲子「むしろなんで今まで気付かなかったの？」

風鈴「失礼な！能力の為に食べてるだけだよ…まあ、いっぱい食べるのは否定しないけど」

咲子「…アンタ昨日の夜私達が北海道に行くのが楽しすぎてお腹すいたからカツプ麺10個食べたとかメールしたわよね？」

風鈴「ギクツ

砂智子「じゅ、10個も？」

テレス「よくそんなに食べれるねえ。しかも太r「テレスさん、ソレはいつちやダメです」…あ、うん」

風鈴があんなに食べても太らないのはもはや七不思議だ。

…能力の影響であんなに体系保てるモノなの？

風鈴「と、とりあえずさっさと移動しよっか♪あはは…」クルツ

タタタ…

砂智子「…行きましようか」

タタツ

途中でテレスさんと別れ、さどかに隊基地に着いた。

ピンポーン

…ガチャツ

翔「おつ、おかえり…つて風鈴？」

風鈴「飛んできた」

翔「お、おう…入れ」

スタスタ

入るとゼイル、祐樹、学、育也、レイトの5人がスクリーンで面白動画を見ていた。

学「…ギャハハハッ！」

ゼイル「学、アウト」

学「あ」

ルマ「せいっ！」ベシツ

学「いてっ！」

罰ゲームはルマのハリセンのようだ。

メイ「……………」カタカタ

砂智子「メイさん？」

メイ「……………」カタカタ

画面を見るとアンダーテールの難関二次創作をしていた。
集中してるようね。

カチッ

メイ「…よっしや！やっどクリアできたぜ！」バツ

風鈴「（。D。）」

砂智子（あ、その口調でしたか）

…ああ、風鈴はこの状態のメイを見たことがなかったわね。

咲子「……………」トントン

メイ「ん？…あ、戻って来てたんですね咲子さん」

口調は戻ったようね。

風鈴「メ、メイ…さっきのは？」

メイ「さっきの？…ああ、アレですか。気合を入れてる時はあの口調になるんです」

風鈴「気合……？」

咲子「まあ、気にしない方がいいわよ。 ……はい、ポテチ」 スツ

風鈴「ありがと」 ビリッ

パクパク……

砂智子「………」（。D。）

メイ「凄い食いつぶりですね……」

みんなで食べに行く

side 桜木咲子

咲子「…ちよつと気になったんだけど」

風鈴「？」パクパク

咲子「アンタ、嫌いな食べ物とかあるの？」

ポテチを勢いよく食べている風鈴に尋ねる。

風鈴「うーん…ないねえ」パクパク

咲子「デスヨネー「でも」…でも？」

風鈴「ダークマターは食べられないね」パクパク

咲子「ふーん…」

つまり絵奈の料理（目玉焼き除く）は食べられないと。

…んなモン食べれないのが当たり前よ。

風鈴「…ふう、ご馳走様」

翔「あの大き袋を30秒未満で食べ終わっただと…」

メイ「一時的に食費が飛びますね…まあ、上がった所で資金は結構あるので大丈夫で

すが」

砂智子「資金？」

メイ「俺の生配信や七隈兄妹が作ったゲームなどから資金を得ています」

砂智子「なるほど…って」

2人『生配信!?!』

メイ「コレです」スツ

自分のチャンネル、『メイの実況』を見せるメイ。

登録者は50万人程。

風鈴「後でチャンネル登録するね」

メイ「ありがとうございます」

砂智子「…もしかして」

咲子「？」

砂智子「この元倉庫も資金で改造したんですか？」

咲子「ソレは違うわ。中3の頃に宝くじで5000万当たったの」

メイ「初めて聞いた時はめっちゃビックリしましたよ…」

砂智子「かなり運が良かったんですね」

咲子「まあね」

そしてもうしばらく雑談したとき。

数時間後。

咲子「もう6時半ね。そろそろ飯食いに行かない？」

翔「賛成」

祐樹「アルカリ性」

学「うるせえ！」

：ココまでがテンプレ。

風鈴「そうだ！咲子、カプサイシンチャレンジで勝負しない!？」

咲子「うーん…いいわよ？」

私は能力で辛味を分解できるようになったし。

翔「そうときたら移動しようぜ」

スタスタ

イーディングニコル

メタ視点で一ヶ月私視点で一ヶ月半ぶりのイーディングニコルね。(メタい！)

ガラガラ

ニコル「いらつしやいませ。今日はみんなで来たのかい」

咲子「はい」

ニコル「じゃ、席に案内するね」スタスタ

奥の方に案内され、席に座る。

咲子「風鈴、ホントにやるのね？」

風鈴「もちろん。勝てる自身満々だよ！」

メイ「ア、アレはもうやりたくないです…」

レイト「やった時死にかけてたからね…」

翔「そんなにしんどいのか？」

ゼイル「ああ、常人じゃまず食べきるのに精一杯だ。ほれ、咲子が苦しんでる写真だ」
スツ

…アンタ、いつそんな写真を？

翔「…しんどいなその量は」

咲子「ゼイル」

ゼイル「どうした咲「その写真、今すぐ消しなさい」お、おう…」

咲子「撮るならせめて喜んでる写真にしなさい。Do you understand?
d？」

(英語の訳：理解した?)

ゼイル「Y, Yes」

(訳：は、はい)

そしてゼイルは写真を消した。

咲子「よし。そろそろオーダーしましよ」

風鈴「うん」

圧倒的スピード

side 桜木咲子

それぞれがオーダーし、少し待つ。

咲子「能力発動の準備、と」スツ

ギョーン

口に能力を発動する。

スタスタ

ニコル「ご注文の料理です〜」コトン

カプサイシンライス（大盛）が私と風鈴の前に置かれる。

ニコルさんが全員分の料理を置き終わると、タイマーを机に置いた。

ニコル「それじゃ、始めるよ？」

2人『はい！』

ニコル「3…」

スツ

スプーンを構える。

メイ（コレは凄い勝負になりそうですね…）ゴクリ
ニコル「2…」

サツ

食べやすい角度に顔を動かす。

ゼイル（頑張れよ、咲子）

ニコル「1…」

2人『……………』

ニコル「…スタート！」

ピッ

……………！

咲子「あむっ、んむっ、はむっ！」パクパク

風鈴「んあむ、んむあ、あむん！」パクパク

翔「……………」（。D。）

祐樹「は、速え…」

前と違って能力で辛味を分解しているので、普通の飯を食べてる気分…というワケでもなく、甘味も分解されてしまってるので何も味がない。

ただ、ひたすら食べてるだけ。

咲子「…んぐつ、一口」スツ

ゴクツ…

…よし。

咲子「ヤケ食いよ！」コトン

私は皿を持ち…

咲子「…あむんっ！」ムシヤツ

風鈴「んむっ!?!(え、そんなのアリ!?!私でも喉焼けるよ!?!)」

ガーツと大盛の飯を口の中に流し込む。

大丈夫、口の中に入った瞬間米を全部分解してるから喉はつまらない。

絵奈「おおく、速いね〜」

…黄猿のマネかしら?

―数分後―

咲子「……んぐつ」ゴクリ

…コトン!

咲子「終わったわ!」

風鈴「負けた…」コトン

風鈴もどうやら今終わったようだ。

ピッ

ニコル「タイムは3：16…だいぶ速いね」

風鈴「1分以上タイム縮めたのに…」ぐでー

咲子「偶々よ、うん」

風鈴「偶々で私に勝つのはホントにヤバイよ？君も大食いにならない？」

咲子「脂肪は分解できるけど、とりあえず断つておくわ」

ゼイル「…咲子」

咲子「？」

ゼイル「よかったな」ナデナデ

愛する彼氏に頭を撫でられる。

咲子「…ふふっ、ありがと♪」

ニコル「一応2人ともタイムはよかったから…はい、クーポン」スツ

咲子「あ、ありがとうございます」

風鈴「……………」じー

風鈴は何故かメニユーを見ている。

まさか…

風鈴「ポークステーキっ！」

ニコル「まいど」スタスタ

咲子「結局もつと食べるのね…」

流石に私は腹一杯よ。

風鈴「ふう、一杯食べた〜♪」

咲子「……………」

会計の時の金額…

『15282円』

半分以上風鈴の食事料だったわ。

まあ、ちゃんと風鈴が払ったけど。

咲子「アンタ…どうやってその金を？」

風鈴「大食い大会の優勝賞金」

咲子「…へ、へえ」

うん、もう驚かないわ。

代を継ぐ条件

side 桜木咲子

クリスマス会の準備などもあるので、今夜はお泊り会になっている。

咲子「ツリー、よし。装飾、よし。ケーキ…あ」

メイ「もうありますよ」

咲子「ならよし。プレゼント…私の分はもう買った」

メイ「後は…当日の料理ですが、ソレは当日ですよね？」

咲子「そりやそうね。じゃ、準備はほぼ終わったしゆつくりしましょ」ユラッ

メイ「そうしましょう…」ユラッ

ドサッ

2人でソファアに倒れこむ。

2人『はあ』

ストレッツチ気持してい

ガタン

……ん？

ゼイル「……………」スツ

レイト「……………」スツ

…パシヤツ

2人『…よし』グツ

ゼイルとレイトがそれぞれのスマホで写真を撮ったようだ。

…十中八九待ち受け画面にするんでしょね。別にいいけど。

風鈴「咲子！」

咲子「ん〜？」ぐでー

風鈴「部屋決めするらしいよっ！」

咲子「分かったわ〜。メイ、行きましょ」

メイ「了解です〜」ぐでー

スタスタ

部屋に入ると、トランプカードは配られ終わっていた。

翔「そこに咲子とメイのカードがあるぞ」

咲子「ん、ありがと」スツ

そしてババ抜きは始まった。

―数分後―

…パサッ

風鈴「上がり〜！」

最初に上がったのは風鈴だった。

翔「んじや、部屋を選べ」

風鈴「ド真ん中で！」

翔「オーケー」

風鈴「じゃあね〜」スタスタ

ー43秒後ー

…おっ。

咲子「上がりね」パサッ

私は2番目だった。

翔「部屋はどっちだ？」

咲子「いつも通り端っこで」

翔「了解だ」

スタスタ

その後はいつも通りゼイルが部屋に来て、一緒に寝たとき。

side 坂田日花

日花「……………」

私はとある紙を読んでいた。

『花称号の代を継ぐ条件』

- ① 特定の高専に所属中の生徒であること。
- ② 特定の属性が扱えること。
- ③ 最も先代の代がさせる試験を合格すること。
- ④ 実際に業務をやるのは卒業後である。

私や咲子が桜の称号を継いだ時も、この条件に沿って行われた。…まあ、咲子が④をやるのは後3年ちよつと経ってからだけ。

日花「…ん？」

『次の招集 二元旦』

コレはいつも通りね。

…そういえば。

日花「そろそろ一度は咲子も招集に連れて行かないとね…」
所詮ただの会議だし、あの子だから大丈夫だと思っただけ。

日花「さて、ゲームに戻ろう…」スツ
カタカタ…

ガチャッ

風鈴「…あれ？」

砂智子「どうも」

風鈴「なんで同じ部屋を？」

砂智子「偶然ですよ。目を瞑って選んだので」ニコッ

風鈴（どうしてわざわざそんな事を…？）

クリスマスの朝…には全然見えない

side 桜木咲子

12月25日、今日がクリスマス当日だ。

今は6時半、クリスマス会は11時頃からである。

しかし…

咲子「……………」

竜美「むにや…」スヤスヤ

何故か連れてきてきてないハズの竜美が私とゼイルの間で寝ていた。

…なんでいるの？

―数分後―

竜美「ふわあ…メリークリスマス、お母さん」

ちやんとクリスマススの挨拶をする竜美。

咲子「メリークリスマス。えつと…どうやって来たの？」

竜美「有美さんにてんそう？された！」

…有美さん、いきなりそんな事しないで下さい。

親（実質）の私がビックリするじゃないですか。

竜美「お父さんは知ってるよ？」

咲子「…えっ？」

竜美「有美さんが『咲子にも教えておいて』って」

その連絡、私に来てないわね…

咲子「ふーん？」

ゼイル「すう…」スヤスヤ

咲子「……………」ニコツ

ちよつとb起こす（ボコす）わ。

ギョーン

咲子「起きろやゴラァ！」

ドゴォ！

ゼイル「グホッ!？」ガパッ

ゼイルに思いつきり台パンした。

咲子「メリークリスマス、ゼイル♪」

ゼイル「痛ッ…咲子!?!どうした!?!」

あら、挨拶は返さないのかしら？

(誰のせいだよ)

咲子「…この子、どうしたの？」

ゼイル「…あ。言い忘れ「うん分かった、後で覚えておきなさい」(あ、詰んだ)」ちーん

竜美「??」

咲子「んじや竜美、朝飯食ベにいくわよ」

竜美「うん！」

スタスタ

ゼイル(今年も性なる夜かよ…)

リビング的な部屋に出ると、そこには…

レイト「すう…」スヤスヤ

メイ「フフフ…」そーっ

咲子「…Oh」

寝ているレイトと…レイトにいたずらしようとしているメイがいた。

咲子「メイ？」

メイ「…ふえっ!」(。D。)

まさかこんな時間帯に誰か起きるとは思わなかったメイ超驚いた顔でこちらを見る。

ゼイル「な、何してるんだ?」

メイ「べ、べべ別にい!?!レイト君にエロ同人みたいにあんな事やこんな事をするつもりなんて一切なかったんですからね!?!それと3人にメリークリスマス!?!」

メイ「…アンタ、むつつりなのね…」

それと挨拶はいいけど、なんで『!?!』がついてるのよ…

竜美「…お母さん?」

咲子「?」

竜美「えろどうじんって何?」どーん

咲子「(。D。)

とんでもない質問をしてきた竜美。

…もう許早苗。

咲子「…メイ」ゴゴゴ

メイ「は、はい…ヒイツ!?!」ドンッ

メイを壁に追い詰め、壁ドンする。

咲子「アンタ、私の娘に何言わせてるのよオ!」(#。D。)

…ドゴォ!

メイ「グハツ!」

私の怒りの鉄槌∞はメイに命中し（ダジャレではない）メイはその場に崩れ落ちた。
ゼイル「…竜美、その質問の答えは大人になったら教えてやる」

竜美「うーん…分かった!」

咲子「ふう…」

スツキリしたわ♪

レイト「すう…」スヤスヤ

（まだ寝てる）

メイ（ね、寝取るなんて考えなければよかった、です…）

（イメージが180度変わった気がする）

風鈴（さ、咲子怖…てかあの子誰?）

（起きたらこの現場に立ち会った人）

さとかに隊のクリスマス会V2 ①

side 桜木咲子

風鈴に竜美を紹介した。

すると…

風鈴「わぁ可愛いね〜！」むぎゆむぎゆ

竜美「うみゆみゆ〜」ムニムニ

風鈴は竜美の頬つぺたをむぎゆむぎゆし始めた。

…おっと、さっきの怒りがまだ残ってるわね。

咲子「…そこまですておきなさい」ゴゴゴ

”ちよつと”威圧が出てしまったわ♪

(トンでもねえ…)

風鈴「う、うん」サツ

スタスタ

翔「おはようお前ら…ん？」

メイ「ちーん

翔「…メイはなんであぁなってるんだ？」

ゼイル「ちよつと耳貸せ」

翔「おう…」

ゼイル「……つてことがあつたんだよ」

翔「Oh…マジか」

メイがしようとした事を知った翔は若干引いてるようだ。

…私？まあ、私もゼイルを媚薬漬けにしたりするし、人の事言えないから気にしてないわよ？

(ソレはソレでどうなんだ?)

咲子「…さて、準備しましょ」

翔「おう」

そして数時間後、時間になった。

全員『メリークリスマス！』

手に持つてるドリンクを乾杯する。

さとかに隊+茜&留美に、今回も出夢先輩と花先輩が来ており、去年と違って未例先

輩ではなく日和先輩が来ている。

それと：

日花「偶々来てみたら、クリスマス会だったから来てみたけど……いいわねココ」

咲子「絶対偶々じゃないですよね……」

日花「あら、バレた？」ニコツ

んなモンすぐ分かりますよ……

日和「うーん……」

咲子「どうしたんですか？」

日和「いやあ、なんか私久々に出たような気がするんだ」

咲子「……メタいですよ」

日和「テヘツ♪」

……はあ。

咲子「そろそろ他のヤツと話してきますね」

日和「じゃあね〜」

スタスタ

砂智子「……！」

ルマ「どう？美味しいでしょ？」

砂智子「はいッ、美味しいです！」キラキラ

咲子「ふふっ、喜んでもらえたようね」

砂智子「咲子さんが作ったんですか？」

咲子「一応ね。まあ、メインはルマと…茜だけど」

茜って、普通に料理が上手いのよね。

砂智子「ゼイルさんの妹さんですよ？ 凄いです！」

咲子「でしょ？ 存分に楽しみなさいな」

ルマ「…ボクも食べよつと」

スタスタ

千早「今年もプレゼントをやる準備はできたか？」

千代「ええ！」

咲子「今年もやるの？」

千早「まあな。今回もゲームに関するものだが、もつと凄いヤツだから楽しみにしと

けよ！」

咲子「…ふふっ、そうね。楽しみにしておくわ」

スタスタ

みんな楽しんでいるようで何よりね。

咲子「…ケーキでも食べて待とうかしら」

千早達のプレゼン、今回は何のゲームを紹介するのかしら？

さとかに隊のクリスマス会V 2 ②

side 桜木咲子

千早「それじゃ、『チーム・さとかにサウンド』のプレゼンを始めます！」

『チーム・さとかにサウンド』は、千早達開発チームの名称よ。

何故さとかにが入ってるのかは謎だわ。

…ピッ

モニターがつき、映像が流れる。

『MULAの物語 5部 エクストラコンテンツ』

ゲーム映像を流しながら、千代が話す。

千代「MULAの物語5部、エクストラコンテンツはすでにリリースしているMULAの物語5部を全クリした人たち向けに作ったコンテンツです！」

奏斗「えつと、5部では登場キャラが多くてそれぞれの戦闘はあまりできなかったんですが…なんと！」

千早「とある新要素によって、それぞれのキャラと戦闘できるようになります！」

日花「へえ…？」ニヤリ

そして映像が終わる。

千代「MULAの物語の説明は以上です。次は…」

画面には…コミケの写真が。

…まさか。

千早「はい、俺達『チーム・さとかにサウザンド』はコミケに出ることになりましたッ
！」

全員『おお！』

コレはシンプルに凄いわね。

千早「ブースで売るものについては、こちらをご覧ください！」ピッ

『チーム・さとかにサウザンド オリジナル作品』

そしてタイトルが表示された。

『CHIMERA』

…キメラ？

千代「CHIMERAは、現実と違って能力や属性が珍しい世界が舞台です！」

奏斗「珍しいどころか、一般人はほとんど知らないレベルの珍しさです」

千早「主人公は元々普通の高校生でしたが、属性や能力に目覚め、似たような人達に

会う物語です！」

そして、戦闘シーンが表示される。

主人公『フレイムバレット！』ダンッ！

：おっ？

千早「技は現実にあるものを主に採用していますが、少しのオリジナリティも加えて
おります！」

千代「以上をもちまして、『チーム・さとかにサウザンド』のプレゼンを終了いたします！」

パチパチパチパチ！

千早達に拍手をする。

いやあ、凄いモン作ったわね！

風鈴「凄い凄い！凄かったよ！」

(語彙力はどこいった？)

砂智子「千早さん達はどうかやってあんな作業を？」

咲子「見たことあるけど、千早は大体確認・修正、千代が能力を使ってプログラムを

入力してるわ」

砂智子「その能力って？」

咲子「指の加速」

砂智子「…便利ですねぇ」

私もそう思うわ。

てか、あの能力ってクソ汎用性が高いから、仮にプログラマーじゃなかったとしても
だいぶ活躍できると思う。

クリスマス会の後の話

side 桜木咲子

クリスマス会も終わり、私達は家に帰った。

竜美はもう寝ており、泊まることになったいる砂智子は別の部屋にいる。

つまり…

咲子「ゼイル…」

ゼイル「咲子…」

チュツ

今から聖なる夜は性なる夜になるのよ♡

(ストレートに言うな！)

咲子「さて、と♪」スツ

…ガシツ!

ゼイル「蒸」

咲子「逃げられると思ったのかしら？」

ガシヤン!

ゼイルの四肢を鎖で固定する。

ゼイル「ま、また俺が受けなのかよ…」

咲子「だって、罰でしょお…？」スツ

例のヤツ（媚薬）を出す。

”とある特殊なルート”から入手したブツだ。

トロツ…

ゼイル「つぁ…」ビクツ

咲子「それじゃ…始めるわよ♡」サツ

そして私はゼイルのズボンを…

コレ以降は規制されるから想像に任せるわ♪

side 室見メイ

レイト「メイ…！」ギユツ

チュツ

メイ「んむっ!？」

と、突然レイト君にキスされました…

…ベロチューです♡

ドサッ

キスをしながら、ベッドに押し倒されました。

…俺が入手した媚薬、効果靨面のようです♪

(今日の朝から懲りてないのかよ！)

レイト「体が熱いんだ…君のせいだろう？」

メイ「…はい」

レイト「僕をこうさせた罰だ…コレを着ろ」スツ

レイト君が出したのは…童貞を殺すセーターでした♡

(前着てたヤツか！)

メイ「分かりました」ゴソゴソ

レイト「ソレを着たら…分かるよね？」

メイ「…はい♡」

その後はお楽しみでした♪

ルマ「んふふ♪」ギョツ

今俺はルマに抱き着かれています。

感想？

…ホント、いつも柔らかいな。

(さーらっと彼女の乙πを堪能してやがる…)

ルマ「…むう」

祐樹「どうした？」

ルマ「その顔…またボクの胸を楽しんでるね？1年4か月彼女してるから分かるんだ

よ？」むすっ

祐樹「ゴ、ゴメン？」

ルマ「まあいいけどね。祐樹は胸が大好きだって彼女になる前から知ってたし」

祐樹「おう…」

許された…のか？

ルマ「じゃ、今度は祐樹が抱きしめてよ。彼氏の温かみを感じたいんだ」コテン

体をこっちに傾けてくるルマ。

しれっと凄い事言ってるのに気付いてる？

…気付いてないですね、はい。

ギョツ

祐樹「コレでいいか？」ナデナデ

犬耳のように逆立った銀髪を撫でる。

ルマ「…えへへ♪」

可愛いなおい…

祐樹「…なあ、ルマ」

ルマ「なあに？」

祐樹「お前の骨粗しょう症は治ってもリハビリ期間が長いんだろ？」

ルマ「うん…今年度の5校衝突で代表として出れないんだ…」しゅん

祐樹「そうか…残念だな。…でもな？」

ルマ「？」

祐樹「その分俺達の特訓してたのがバレずに済むんだ。一気に強くなって、みんなを驚かしてやろうぜ！」

ルマ「…うん！」

その後もルマとイチヤイチャしたとき。

さ
ん
ぽ

side 桜木咲子

咲子「……………」スタスタ

クリスマスから2日後。

冬休みだし、ヒマなので私は音楽を聴きながら今朝の散歩をしている。
聴いている曲？

青と橙の縞模様のジャケットを着たサンズが写ってるわね。

(曲名↓Story spin—Megallazing)

「真螺旋丸！」ギユン

「結界」ピキッ

…おっ。

咲子「やっってるわね〜」

公園を見てみると、風鈴がテレスさんに鍛えられていた。

砂智子は帰ったのに風鈴が帰ってなかったのは…そういうことね。

…いや。

咲子「いやいやジュース買いに来ただけけど」

ロジカ「…そ、そう」

咲子「アンタは何買いに来たの？」

ロジカ「な、なんでもないわ？」オドオド

咲子「ふーん？」

サツ

咲子「じゃあコレは…え？」

一瞬でロジカの後ろに回り込み、持っていたカゴを奪う。

入っていたのは…モンスター30本だった。

咲子「なんでこんなに…？」

ロジカ「ひ、秘密よ！」

咲子「……………」

ロジカは腐女子。

つまり…

咲子「ああなるほど、アンタBL本を書いているのね？」

ロジカ「!?」ギクッ

咲子「でもまだ18じゃないから…多分アシストかつエロシーン抜きね」

ロジカ「な、な……！」

咲子「ふふっ、凶星だったようね♪」ニコッ

ロジカ「ちーん

…おっと、どうやらタマシイが抜けたようね。

誰のせいかしら？

(鏡見ろ)

咲子「んじや、またね」

さっさと会計に行こつと。

スタスタ

ロジカ「…ハッ!？」

スタスタ

さて、散歩も終わったし基地に「咲子く！」

咲子「…風鈴？」

風鈴「なんで特訓に参加しなかったのさ！通りかかったの見たんだからね！」

咲子「散歩中だったから」

風鈴「…あ、そうか。なら仕方ないね…とはならないよ!？」

咲子「ノリツツコミ乙」

風鈴「むう…じゃあ今から一緒に特訓しようよ!有美さんも呼んでさ!」

初代桜&梅 v s 現役桜&梅の特訓ね。面白そうじゃない。

咲子「乗ったわ」

風鈴「じゃ、行こう!」

タタツ

初代と特訓①

side 桜木咲子

咲子「……つて感じですよ」

有美「ふーん。だから日花じゃなくて私の所に来たと」

咲子「はい」

有美「……ま、いいわよ。どうせこんな66歳のババアは1日中ヒマなんだし」

そんな66歳のババアが外見30代後半なのもおかしい気がするんですけどね。

スタスタ

風鈴「……あ、テレスさん！」

テレス「有美、やってくれるのかしら？」

有美「ええ。ちよつとこの2人の実力も気になってたし」

咲子「……」

有美「……どうしたの？」

咲子「いやあ、場所まで有美さんが転送してくれればなあ〜なんて」

※有美の能力は『転送』である。範囲は結構広い。

有美「ああ、そういうことね。んじや転送」ギユン
シュツ

シュツ

有美「で、特訓はどんな感じなの？」

風鈴「有美さんとテレスさん v s 私と咲子の手合わせ的なヤツです！」

その説明、分かりやすいのか適当なのかよく分からないわね。

テレス「え、どもソレじやだいぶしんどくない？主に君達が」

咲子「ソレも含めて特訓ですよ。私達が結構苦戦する程度にお願いします」

テレス「うーん…分かった。そうするよ」

そして2対2で向き合う。

有美「かかってきなさい」

先攻は譲られた。

咲子「普通に攻撃するわよ、風鈴」ザッ

風鈴「オ、オーケー？（普通に攻撃とは？…まあいつか）」スッ

ギユン

咲子「炎空桜舞！」ゴオツ

風鈴「神晴天飛梅！」B L O O O O O M !

シヤツ……!

有美「(咲子は炎天桜舞の強化版を編み出したようね。ソレも日花と違うモノを)フレ
イムバレット！」ダンツ!

テレス「(もう最大強化してるんだね。时期的には早いけど……足りないよ!) 神風斬
！」ズバツ!

(神風斬の威力は真風斬・鎌鼬と同等の威力)

……バシユツ!

2人『!?!』

私達の技は完全に相殺されてしまった。

風鈴「まさか全部防がれるとは……」

有美「思ってもみなかったでしょ?今度は私……ではなくテレスの番よ」

テレス「行くよ!」ギユン

テレスさんは手にエネルギーを溜め「やあつ!」……!

咲子「ツ?!」サツ

気付いたら既に至近距離まで来ていた。

…超速い。

風鈴「は、速い…」（。D。）

テレス「焦ってるヒマはあるのかなあ〜？」ギユン
来r「せいっ！」…ああもう思考が追いつかない！

サッ

咲子（ほぼ反射で避けてるけど、意識して避けないと後々ヤバいことになりそうね）

テレス「あれ？2回も避けられた。じゃあ今度は風鈴を狙おう」スッ

風鈴「え、私!?（あの速いのが来r「やあっ！」わあっ!）」サッ

私より動体視力が高い風鈴は反応するのが私より早かった。

テレス「もう、避けないでよ！」ポンポン

咲子「んな事言われても…」

攻撃は、避けるしかないでしょ？

初代と特訓②

side 桜木咲子

テレスさんの攻撃はいつくるか分からん「せいっ！」

咲子「危なッ!?」サッ

テレス「1発は当たってよ！」ポンポン

咲子「当たったら痛いので断っておきます」

テレス「むう…じゃあ確実に当てるよ？」ギユン

風鈴（い、嫌な予感…）

技を使うようね…けっか「エアドライブ！」い…

パリーン！

咲子「速すぎませんか!？」サッ

ソレを避けてる私もおかしいんだけど。

テレス「やっぱり突進系の技であるエアドライブは避けられたね…ならコレは？」

ギユン

ビュウウン！

テレス「風斬弾幕！」スッ

シュバツ！

…いやいや!?

咲子「この量はもはや反則ですよ!?!」

テレス「確実に当てるって言ったでしょ?」

咲子「(だからと言ってこの量は…)真千手観音!」ガシン!

風鈴「暴風改!」ビュウウン!

(大嵐の強化版)

…ズバツ!

2人『ぐうつ!?!』

私達の防衛を抜け、テレスさんの攻撃は命中してしまった。

1つの斬撃でこの痛さ(ダメージ)はえげつないわね…

風鈴「つ、強すぎません!?!」

テレス「いやあ?…有美、そろそろ交代ね」

有美「了解よ」ザッ

咲子「……………」ゴクリ

1年半ぐらい前の3代目試験で、だいぶ手加減していた有美さんに1発入れたのは懐

かしいわね。

有美「あら咲子、私と久々に戦うからって緊張してるのかしら?」

咲子「: : : そうですね」

有美「フフツ: : : 行くわよ!」ボツ

ドツ!

一気に距離を縮めてきた有美さん。

: : : この技ね。

咲子「: : : ハアツ!」ドゴツ!

地面を殴る。

咲子「グランドクエイク!」バゴオ!

そして地中から土砂が噴出される。

風鈴「え!?! 土属性の技!?!」

有美「: : : !」サツ

しかし避けられてしまった。

有美「風属性の技である天空掌も覚えてて、土属性も: : :」

咲子「なんならこつちを先に覚えてたんですけどね」

(覚えた時期: グランドクエイク↓2年夏休み前半 天空掌↓2年夏休み後半)

有美「…へえ。面白い」スツ
ギョルルルル!

有美「もつと技を見せてみなさい!」ドツ!

風鈴「う、うわあ…(言ってることが戦闘狂だあ…)」

咲子「…フツ、もちろんです!」

風鈴(こつちも戦闘狂だあ…!?) (。D。)

何故か風鈴がビツクリしてるけど、無視無視つと。

有美「神炎天掌!」ズガアン!

咲子「(この技に応戦できるのは…!) 天空落としV3!」ギョウウン!

…ボオツ!

咲子「グフツ…!」

有美「…足りないわね、主に威力が」

威力は有美さんが圧倒的に上回っていた。

この状況で使える私の最強技に対して、だ。

風鈴「咲子!」

有美「次は、アンタよ!」ギロツ

風鈴(顔怖っ!?)

初代と特訓③

side 桜木咲子

有美「次は、アンタよ！」ギロツ

風鈴（顔怖っ!?!）

有美さんが風鈴を某火の鳥のようににらみつける。

（某火の鳥↓ポケモンのファイヤー）

ドッ!

有美「アンタの技を見せてみなさあいッ！」フハハ

咲子「（。D。）

有美さんって戦闘狂なの!?!

風鈴「（どうにかしないと…!）神晴天飛梅!」B L O O O O O M !

シュバッ!

有美「効かないわねえ〜!炎天桜舞!」B L O O M !

ドスッ!

風鈴「うっ!?!」

有美さんの火桜が風鈴の風梅を完全相殺し、弾幕は風鈴に命中してしまった。

有美「神炎天掌！」ゴオツ

…ドゴオ！

風鈴「グハッ…」

バタン

風鈴「強すぎるう…」

咲子「……ッ」

有美「あら、もう終わりかしらあ？」

咲子「まだ…終わってません！」ゴオツ

体に火をオーラのように纏い、立ち上がる。

有美「果たしてそうかしら？…フレイムバレットV3！」ダンッ！

咲子「結界流しV3！」ギユン

シユルルッ！

火の弾丸を強化した結界で受け流した。

有美「へえ…？」

咲子「…ハアッ！」ボツ

ギユルルル！

火を足に纏い、宙返りする。

有美（烈焼脚かしら？でも…）ギユン

有美さんは手にエネルギーを溜め、防御体勢になっている。

咲子「超烈焼脚！」ゴオツ

…バゴオ！

有美「…！（かかと落としね…！）」

本来、烈焼脚は回転蹴りである。

でも…私の場合には炎突から強化したから、かかと落としバージョンができるのだ。

咲子「さらにエンバーラッシュュ！」ポツ

ドゴドゴドゴツ！

有美「むっ…（連続攻撃を決めてきたわね…させないわよ？）」グググツ

咲子「！」ササツ

有美さんの手が動いたので、すぐソレを感知し距離を取る。

有美「…あら、気付かれたようね。まあいいわ…テレス」

テレス「オーケー」ザツ

…今のうちね。

咲子「風鈴」

風鈴「…？」

咲子「ちよつと私と連携技をしてもらうわよ」

風鈴「連携技？」

咲子「……………」ごによごによ

風鈴「ああ…うん、分かった」

咲子「頼むわよ？」

風鈴「了解」

2人で有美さんとテレスさんの方を向く。

有美「話は終わったかしら？」

テレス「そろそろ僕達で相手しようと思つてね」

咲子「1人でもめっちゃ手こずつたんですが…」

有美「まあまあ、そんなこと言わずに…ね？」

シュバツ！

もう始まつたわ…

咲子「行くわよ、風鈴！」

風鈴「うん！」

ギューイン！

私は火桜、風鈴は風梅を放つ。

そう、コレは私とメイが放つた連携技……!

2人『神陽天梅桜!』バツ

ギョルルル!

有美(連携技……!)

テレス(コレじゃ素早く動けないよ……)

……ザッ

有美「考えたじゃない」

咲子「フフツ、それほどでも?」

風鈴「咲子、全くそんな事考えてなかったよね?」ボソツ

咲子「そーゆー事にしておきましょう」ボソツ

テレス「ただ……僕達を止めたからといって勝てるとは思わないでね?」ニヤリ

咲子「……もちろんです!」

初代と特訓④

side 桜木咲子

有美「さて：アンタ達も連携技を使ってきたし。テレス、やるわよ」スツ

テレス「オーケー♪」グツ

有美「：あ、ちなみに奥義技ね？」

咲子「!？」

この2人が連携技!?

しかも奥義技：私達、生きていけるかしら？

有美「もちろん威力は下げるけどね。：せいっ！」ドツ

テレス「：やあっ！」ドツ

：カッ！

火と風が混ざり合う。

：まるでクリムゾンハリケーンね。

風鈴「：えっと、コレヤバいね？」

咲子「本気で止めにいくわよ：！」

有美「吹っ飛ばされる覚悟はできたかしら!?」フハハ

テレス「やっちやうよおおお!」フハハ

風鈴（いやだからそのセリフ怖いって!?)

咲子「:~!」

:ギユン!

2人『炎風:~!』

その技は、至ってシンプル名前だった。

しかし威力は:

ギユオオオオオオオオオ!

えげつないモノだった:(白目)

風鈴（ヒツ:~!に、逃げちやダメだ:~!）

:いや、怖気づくヒマはないわ。立ち向かう!

咲子「空中分解G3!」ギユイイン!

風鈴「風神・ザ・ハンドG3!」ビュウウン!

:ドガアアッ!

2人『ハアアアツ！』

必死で技を止めにかかる。

有美「……………！」ニヤリ

テレス（その立ち向かう姿勢…嫌いじゃないよ…！）

ズズツ…

しかし、私達は結構押されてしまっていた。
それでも…！

咲子「私達は…」ググツ

風鈴「…負けない！」ググツ

2人『うおおおおおっ！』

その時。

…ギューイン！

私達を光が包み込んだ。

有美（…！）

シユウウウ…

咲子「コレは…憑依…！」

氣付けば私は風鈴に、風鈴は私に憑依していた。

私達の髪色は深緑に変わっている。

（黒＋緑＝深緑）

風鈴（何コレ…力があふれてくる…！）

…ハッ、と私は何かを思いついた。

すぐに実行する。

咲子「風鈴！アンタは炎天掌を撃って！」

風鈴「え!？」

咲子「いいから！」

風鈴「…分かった！」グツ

私は天空掌を撃つ！

咲子「行くわよ…風鈴！」

風鈴「了解…！」

…ギョーン！

片手で炎風を止めながら、もう片手に力を溜め…放った。

咲子「天空掌！」

風鈴「炎天掌！」

ズガアアン…！！

私達の力は合わさり、考えられない威力を放った。

その結果…

…パアアツ！

炎風は…

…消え去った。

テレス「……………！」（。 ㇿ。 ）

有美「…フツ」

風鈴「おお……………！」

咲子「やった……………！」

私達はこうして、奥義技（威力2割）を止めたのだった。

テレス「いやあ、あの技は凄かったよ！」

有美「私が名付けてあげるわよ？」

咲子「えつと…じゃあお願いします！」

有美「炎天掌と天空掌を合わせ、炎風を止める威力…名付けて

『えんくうたいししょう炎空大掌』

…どうかしら？」

炎空大掌……！

咲子「めちやくちやいい名前ですね！気に入りました！」

風鈴「私もです！」

有美「フフツ、これからはソレも鍛えるといいわよ」

2人『はい！』

一方その頃、メイは…

side 室見メイ

メイ「…やあっ！」シユツ

…ダメですね、姿勢が悪いです。

スタスタ

レイト「何してるんだい？」

メイ「俺の夢は室見流の道場を建てることって言いましたよね？」

レイト「うん」

メイ「その室見流の技を作ってるところでず」

レイト「…急？」（。 ㇿ）

何故かレイト君はポカーンとしています。

レイト「そもそも存在してなかったの!？」

メイ「はい。だからまずは作るのです！」

レイト「そ、そうなんだ…頑張ってるね」

メイ「はい！」ニコツ

レイト（可愛いなあ…）

数時間後。

俺は自分が使っている技を元に室見流の技を編み出しました。

メイ「二刀流…！」ギユン

ドツ！

メイ「双風斬！」ズバツ！

風斬を刀で2つ飛ばすというシンプルなものです。

技を編み出すのって割と難しいですね…

（いつもやってるだろ…）

メイ「…いい事思いつきました！」

本来は一刀流と二刀流の技を考えてましたが…

メイ「少しふざけて…」

刀を使わない”無刀流”なんてモノも…

メイ「うーん、でもソレだと剣術じゃないですね…」

一旦諦めますか。

タタツ

メイ「？」

「メイ、私達凄いことをしたんだ！」

駆け寄ってきたのは、咲子さんと風鈴さんでした。

ちなみに話しかけてきたのは風鈴さんです。

メイ「凄い事とは？」

咲子「奥義技を止めるほどの威力を持つ技よ。ただ、今の私達は体力が消耗してるから生で見せることはできないけどね」

風鈴「動画があるから、コレを見て！」スツ

『私達は…』

『負けない！』

『うおおおおおっ！』

すると動画の咲子さんと風鈴さんの2人が何故か憑依しました。

髪色は深緑色になっています。

メイ「何故憑依を…？」

咲子「私達にも分からないわ」

そして迫りくる奥義技に対し、咲子さんは天空掌、風鈴さんは炎天掌を撃ちました。

『パアアツ!』

メイ「ええっ?!」(。D。)

奥義技をホントに止めましたね…

咲子「それで、有美さんがこの技に名前を付けてくれたの!」

2人『炎空大掌、つてね!』

炎空大掌、ですか…

メイ「有美さんのネーミングセンス、凄いですね…」

俺も参考にした方が良さそうです。

風鈴「ところで、メイは何をしてるの?」

メイ「俺が作った流派、室見流の技を考えてたところです!」

風鈴「流派を作ったの!」

メイ「はい、まあ…まだちゃんとした流派つてレベルの技や技術がないんですけどね」

咲子「なるほどね…技作り、頑張りなさいよメイ」

メイ「はい!咲子さんこそ最強目指して頑張つて下さいね!」

咲子「フフツ…ええ!」

風鈴(咲子の夢つて、最強になることなんだ…咲子らしいね)

ハイテンション留美

side 桜木咲子

咲子「えつと…」

留美「……！」キラキラ

留美は私をキラキラとした目で見つめていた。

理由は…私が数日前鍛えてやるわといったからだ。

留美「はやく！はやく始めましょうよ！」キラキラ

咲子「はあ…分かったわ。だから一旦ソレやめて」

留美「はい！」キラキラ

…ブレないわね、うん。

初対面の時からこんな感じだったし。

咲子「えつと…何を教えようかしら？」

留美「新技！新技をお願いします！」

新技ねえ？うーん…

咲子「私がこれぐらいの時期で覚えた技は…あつ」

別にこの時期じゃなくてもいいわね。

留美が覚えられそうなのは…

咲子「フレイムバレットね」

留美「火の銃弾ですね！」

咲子「直訳するとね？まあ、技自体そんな感じだけど。とりあえず見てなさい」ポツ

私は指から火を出し、エネルギーを溜め…

咲子「フレイムバレット…！」ダンツ！

銃のように発射した。

ズドツ！

火の銃弾は地面に当たり、地面は少しへこんだ。

留美「おお…！」キラキラ

再び目をキラキラさせる留美。

咲子「よし、じゃあまずは再現してみなさい」

留美「はい…ハアッ！」ポツ

留美は指から火を出す。

…再現度高いわね？

留美「そして…発射！」ダンツ！

咲子「……………」(。D。)

一発で出来てるじゃん…凄いわね…

…ズドツ!

流石に威力は私より低かったようだ。

留美「どうですか?」

咲子「アンタ…一発で成功したわよ?」

留美「え!?マジですか!」

咲子「うん、マジ」

留美「やったあッ!」うおおお

咲子「…今日のアンタ、なんかテンションがおかしいわね?」

留美「分かります?私もそう思うんですよね!」

咲子「なんで?」

留美「うーん…今日の朝起きてから調子がいいんですよ」

咲子「スッキリ寝れたとか?」

てか、ソレだけでコレだけテンションが高いのはおかしいけどね。

留美「スッキリ寝たのはいつも通りですよ?」

咲子「あっそう」

じゃあ他にあるのかしら？

留美「…あ！」

咲子「？」

留美「確か今日の朝、『今日もテンション高く行こう！らんらんるる♪』とか言ってたから1日中テンション高くなりました！」

咲子「うん絶対ソレね」

てかららんらんるるって…アンタドナルド？

…ん？

咲子「ソレを言った結果そうなったんでしょ？」

留美「はい」

咲子「言っただけでそうなったって…まさか能力？」

留美「……ん!？」

めっちゃビックリしてるわね。

留美「あ…あなるほど！だから『私だったらゲームクリアできる』って前に言った時クリアできたんですね！」

咲子「えっ、前にもそんなのあったの？」

じゃあ確実に能力ね。

咲子「能力名は…『自己暗示』？」
多分そんな感じね…

プラシーボ効果みたいなもん

side 桜木咲子

咲子「能力名は…『自己暗示』？」

多分そんな感じね…

留美「自己暗示？」

咲子「自分が何かをするって繰り返し脳内で唱えることで、実際そうなたったりするやつよ。プラシーボ効果みたいなモノね」

まあ、プラシーボ効果は思い込みだけど。

留美「なるほど…」

咲子「例えば…そうね。『私の拳は鉄のように硬い』と言ってから地面を殴ってみて」

留美「私の拳は鉄のように硬い…ハアッ！」シユツ

…ドゴォ！

留美が地面を殴ると、そこにはクレーターができた。

留美「（。㇏。）」

咲子「おお…」

留美「何ですかコレええ!？」

咲子「他には…そうね。『私は先輩をぶっ飛ばせる』とでも言ってみなさい」
実際成功したらヤバいけどね。

留美「えっと…私は先輩をぶっ飛ばせる?」

何故『?』を?…まあいいわ。

咲子「じゃ、やってみなさい。結界!」ピキッ

保険の為に一応結界を張っておく。

吹っ飛ばされるのは流石に痛いからね。

留美「いきますよ…てやあ!」シヤッ

…パリイン!

結界はカンタンに割られた。

咲子「…!」

ガシッ!

しかし、留美の拳は普段より強いぐらいで、私が吹っ飛ばされることはなかった。

留美「あれ…?」

咲子「流石に私が吹っ飛ばされることはなかったようね。限度があるのかしら?」

留美「どうなんですかね?」

―数時間後―

いくつかの能力実験をして、分かった事は限度があることだけだった。

咲子「とりあえず今回分かったことは、能力は『自己暗示』で、限度があることね」

留美「そうですね…はあ、疲れました」ドサツ

咲子「まあ、能力を多用したらそりや疲れるわよ。まだ慣れてないだろうしね」

留美「…そういうえば」

咲子「？」

留美「先輩の能力って、結局何なんですか？」

私の能力？

咲子「そうね…一応『分解』というのは一部だと思っただけど」

ソレだと憑依が説明できないのよね。

火桜神が夢で与えたのはあくまでも夢で、ホントは既に持ってたものだと思うのよ。

咲子「まだ未完成っていうか、進化途中だから分からないわね」

留美「うーん…先輩の能力が特別な気がしなくもないんですけどね」

咲子「能力は全部その人の特別なものよ？」

留美「そういう事じゃなくて…」

咲子「まあいいわ。能力のことはその内分かるだろうし。帰りましょ」

スタスタ

留美「あつ…待ってくださーい！」 タタツ

私の能力…か。

完全に覚醒したら色々と面白いことができるようになりそうね。
…しかし、私の能力が完全に覚醒するのは当分先の話だった。

ラーメンか、そばか、どっちなんだい!?

side 桜木咲子

現在、大晦日の22時頃。

さとかに隊と一緒に年を越そうとしているのだが…

咲子「むう……」じー

風鈴「むむっ……」じー

バチバチ

私と風鈴の視線の間には火花が散っていた。

メイ「えつと……コレどういう状況ですか？」

ゼイル「年越しにはそばかラーメンか、という口喧嘩らしいぞ？」

竜美「どっちも食べたい！」

ゼイル「……それが正解だな。よしよし、いい子だ」ナデナデ

2人『……だーかーらー!』

咲子「我が家の伝統(?)で年越しはラーメンなの！」

風鈴「私はそばが食べたいんだ！」

2人『むうっ……!』バチバチ

ルマ「いい加減決めないと、作る時間がないよ?」

翔「ぶつちや俺はどつちでもいいけどn」翔、今ソレは言つちやダメ」…お、おう」
学「……なあ、2人とも」

2人『あ“!?!』ギロツ

乱入してきた学を某火の鳥のように睨みつける。

コレは私達の戦い(?)なのよ、邪魔しないd

学「どつちも食べればよくね?」

2人『………ツ!!!』(。D。)

そ、そうだった……!

2人『それだ!』

メイ「……はあ」バチン

(眉間に手を当てている)

咲子「んじや、早速取り掛かりましょ!」

風鈴「材料は両方買ってるしね!」

咲子「行くわよルマ!」

ぐいっ

ルマ「え?…うわっ!」

ルマが乗ってる車椅子を後ろから引つ張る。

ルマ「ちよ、引つ張るんじやなくて押してよおう!」

2人『そば!ラーメン!そば!ラーメン!』ふんすつ

スタスタ

ルマ「ああれええ…!」

翔「…祐樹がこの光景を見たら絶対怒るな」

(祐樹は荷物の整理中)

ゼイル「だな」

メイ「同感です」

竜美「???」

130分後1

…コトン

2人『完成!』

竜美「わあ、美味しそう!」

ゼイル「竜美、先に手を洗うぞ」

竜美「あ、うんっ」タタッ

ルマ（ボク、味見役だったんだけど…行く意味あった？）ポカーン

咲子「ん、どうしたのルマ？」

ルマ「……………」じー

何かジト目で見られてるんだけど、私何かしたかしら？

（もう忘れたのか…）

祐樹「ルマ、大丈夫か!？」

ルマ「うん…ボクは大丈夫だよ。ボクは、ね」

祐樹「と、言うと？」

ルマ「この2人、後ろからボクの子椅子を…引つ張つたのさ」

祐樹「…フア!」（。D。）

咲子「…ああ、アレ？」

風鈴「アレは…私じゃなくて咲子が引つ張つたよね？（嫌な予感があったから犯人を確

定させておこう）」

咲子「ええ、そうね…「おい咲子」……………あ」（。D。）

見ると祐樹はドス黒いオーラを纏ってルマの鎌を振りかぶっていた。

祐樹「俺のルマを…乱暴に扱いやがってえええ！許さんぞおおお！」ゴゴゴゴゴ

咲子「ちよ、流石に乱暴には「黙れ」アツハイ」

なんか祐樹が怖いんだけど!?あの自他共に認めるバカキヤラの祐樹が！

風鈴「…頑張れ、咲子」サツ

(一瞬で5メートル距離を取る)

咲子「(。D。)

祐樹「罰すべしいいいい！」ブンツ

目の前には…鎌の根本。しかも雷纏ってる。

咲子「あ、詰んだ」

…ドゴオ!

2年編での年越し

side 桜木咲子

咲子「……………」

私の頭上には…

もわ〜ん

タンコブができています。

祐樹に思いつきり鎌の根本を叩きつけられた。

風鈴「ははははっ！何ソレwww」

咲子「割と痛かったわね…祐樹、アンタ特訓でもした？」

祐樹「（あ、ヤベ）本気でやったただけだぞ？」

ルマ「ボクの為に怒ってくれたのさ！」ふんすつ

ソレで何故かドヤ顔をするルマ。

メイ「4人よも、そろそろそばまたはラーメンを食べましょう。冷めてしまいますよ」

4人『あ、うん』

その後美味しく麺をいただいたとき。

「111:59」

今年は色々あつたわね。

そんな事を思いながら、私達は…カウントダウンをする。

翔「おっ、来るぞ」

よし、スタート。

学「10…」

育也「9…」

レイト「8…」

祐樹「7…」

ルマ「6…」

ゼイル「5…」

竜美「4！」

風鈴「3…」

メイ「2…」

咲子「1…」

ピタッ

全員『明けておめでとう！』
2022年、今年も頑張るわ！

その頃、他のヤツらは。

千早「…おっ、日付変わったぞ」

奏斗「あけましておめでとう」

千代「今年も頑張りますよ」

カタカタ…

絵奈「うくん、つと！」コトン

(リハビリ中)

レイン「おお、今度はずっと進めたね！」

絵奈「次は…あっちまで？」

(奥にある壁まで)

レイン「いやいやそこ遠すぎ!？」

ロジカ「ふう……」ペラペラ

(BL本を読んでも)

ピロン

ロジカ「ん？」チラッ

『Bloom』Kid：あけおめ』

ロジカ「……ことよろ、っと」

留美「むうくくっ!」

茜「…どうしたの?」

留美「先輩達とあけおめを言いたかった!」

茜「うーん…それは私もだね」

日花「すう……」スヤスヤ

坂田日花は、いつも通り寝ていた。

…しかし。

日和「…よし！」

『YOU WIN!』

未例「フア!?!」

平尾（日和のゲームの上手さは日花譲りだね）

他の3人はゲームしていた。

「…できたか？」

「ああ、4割ほど完成した」

「しかも重要な部分か…なら他はすぐに終わりそうだな」

「そうだな…」

コオオオツ…

研究者が弄っている機械の中にあつたのは、人型の何かだった。

見せつけるねえ

side 桜木咲子

初詣も終わり、私達は基地の庭で餅を焼いていた。

ジュッ

風鈴「おおく、イイ感じに焼けてる」

咲子「：ヨダレ、垂れまくってるわよ？」

風鈴「あつ」ジュルル

そうとう腹が減ってるようね。

ゼイル「今年もマックスコーヒーを混ぜ込んだヤツがあるのか？」

咲子「ええ、あるわよ」スッ

皿に餅を乗せ、ゼイルの方を向く。

咲子「はい、あーん」

ゼイル「ん？珍しいな」：はむっ、んぐっ。美味しいな。去年より美味しくなっていないか？」

咲子「ふふっ、ありがと」ニコッ

風鈴（…ちよっと、苦いものを食べたくなってきたなあ）

ルマ（…ボクもやろう！） 祐樹！

祐樹「？」

…どうやらルマもやるようね。

餅はきな粉餅のようだ。

ルマ「あーん♪」スッ

祐樹（Oh…可愛い）…はむっ

ルマ「どう？」

祐樹「美味い！」

風鈴「…ねえ」

咲子「？」

風鈴「近くにブラックコーヒーを売ってる自販機とかない？ 雰囲気が甘くて砂糖吐き

そうんだけど」

雰囲気？…あ、そゆこと？

咲子「あ…普通に基地の冷蔵庫にストックされてるわよ？」

風鈴「んじや、行ってくる」タタッ

さつきまでヨダレ垂らしてた状態とは大違いね。

side 梅野風鈴

ガチャツ

風鈴「あ“あ“あ”ゝ」

あの甘い雰囲気、ついていけないよ。

風鈴「冷蔵庫のコーヒーつと」

あつたあつた。

私はブラツクコーヒーを1缶取る。

風鈴「さて戻って…ん？」

向こう側にあるソファーには、2人座っていた。

メイ「レイト君、ぎゅーっしてしてください」

レイト「…こうかい？」ギユツ

メイ「そうです…えへへっ♪」ニコツ

風鈴「」

ココも…

風鈴「ココも甘いんかあああいつ！」うわああ

見せつけないでほしいよ、もう！

メイ「…風鈴さん？」

レイト「大丈夫かい？」

風鈴「…その甘いのを何とかしてね？」

2人『？』

2人ともきよとんとした顔をする。

はあ…

風鈴「まあいいよ。餅食べてくる」

メイ「は、はい…？」

ガチャツ

…彼氏、欲しいなあ。

side 桜木咲子

風鈴「ただいま」

咲子「あら、おかえり…どうしたの？」

風鈴「あつちも甘い雰囲気だった…」

風鈴は少しゲツソリした顔をする。

ゼイル「…何のことだ？」

おつと、ゼイルはこんな事全く気付かないタイプね。

咲子「ちよつと黙れ鈍感」

ゼイル「お、おう？（口調変わってないか!?!）」

―数秒後―

風鈴の話によると、見せつけられているのが嫌らしい。

咲子「別にそのつもりはないけどね…」

風鈴「私にとつてはそれにしか見えないよ？」

咲子「…：…なら、解決策は1つね」

風鈴「？」

咲子「さつさと彼氏作りなさい」

風鈴「…：…はあ!?!」

招集？

side 桜木咲子

トントン。

餅を食べながら風鈴と雑談していると、突然肩トンをされた。

…絶対日花先生ね。

クルッ

咲子「何ですか先せ…」

有美「…よっ、あけおめ」

咲子「有美さん？…明けましておめでどうございます」

風鈴「あけましておめでどうございます！」

初代桜の火野有美さんがいた。

有美「日花ならあっちにいるわよ」

日花「……………」ニヤニヤ

5メートル程離れた所に、日花先生がニヤニヤしていた。

咲子「…絶対肩トンしてから時間停止で離れましたよね？」

日花「ピンポーン。あけおめ、咲子と風鈴」

2人『明けましておめでとうございます』

咲子「…で、通りかかったただけじゃないですよね？」

日花「流石、勘がいいわね。実は今日、花称号達の招集なのよ」

2人『招集？』

そんなモンがあるのね…

有美「歴代の花称号達のほとんどが集まり、報告や議論をする会議があるの。今回の招集場所は…羽合だったかしら？」

日花「そうですね」

有美「あつてるわね。それで、今回はアンタ達現代の花称号も見学する形で来ることになってるわ」

咲子「なるほど…」

風鈴「…ほとんど、ですか？なんで全員じゃないんですか？」

有美「テレスなどの旅してる人や、既に亡くなっている人、事情で来れないまたは来ない人がいるからよ」

風鈴「あー…」

来ない人って、単純に面倒くさいからなのかしらね？

日花「つてことで、羽合に向かうわよ」

咲子「電車ですか？」

有美「何言ってるのよ、天使化できるんだからソレに決まってるでしょ？」

咲子「アツハイ」

空飛ぶって、便利ね。

「ちよ、僕を置いて行かないですよ！」

風鈴「…あ、テレスさん」

テレス「今回の僕は珍しく旅してないから、久々に参加できるんだよ!!」

有美「…あつ、うっかりソレを忘れてたわ」

テレス「ええっ!?!」(。D。)

…67歳とは思えない漫才ね。

—30分後、羽合高専—

…スタツ。

有美「よし、着いた」シュツ

風鈴「…どうだった、咲子？」

咲子「割と気持ちいいわね、飛行するのって」

風鈴「でしょ？」

日花「…おっ」

「日花、久しぶりだな」

そこにいたのは、モコモコヘアーの男性だった。

隣には年明け前に帰っていた砂智子もいる。

日花「甲じゃない、前の招集ぶりね」

甲「ああ……おっ？」

咲子「？」

甲「お前が砂智子の従姉妹か。俺は志免甲、4代目椿だ」

咲子「桜木咲子です」

甲「咲子か、よろしくな。…それにしても、お前ら2人はホントに似てるな？まるで

双子だ」

咲子「偶に言われます」

砂智子「どうして風鈴さんもそちらに？」

風鈴「一緒にいたからね」

砂智子「一緒に？」

風鈴 「毎日福岡と北海道を往復してるの、覚えてる？」
砂智子 「…なるほど」

花称号会議①

side 桜木咲子

咲子「……………」

会議 参加者リスト

代 氏名 年齢 ふりがな

桜

初代 火野有美 67歳 ひの ゆうみ

二代 坂田日花 42歳 さかた にちか

三代 桜木咲子 16歳 さくらぎ さきこ

梅

初代 テレス・テレスト 67歳 てれす てれすと

二代 旭川剛志 58歳 あさひかわ つよし

三代 冬野冷子 49歳 ふゆの れいこ

四代 アオイ・キサラ 41歳 あおい きさら
 五代 冬野達也 30歳 ふゆの たつや
 六代 梅野風鈴 17歳 うめの ふうりん
 蓮

初代 基山善助 67歳 きやま ぜんすけ
 二代 美羅康介 56歳 ちゆら こうすけ
 三代 空原快晴 36歳 あきはら かいせい
 四代 水川水夢 28歳 みずかわ すいむ
 五代 那覇流 17歳 なは りゆう

桃

初代 鴨野蛸雄 67歳 かもの たこお
 二代 真面聡一 49歳 じめ そういち
 三代 雷落雷槍 30歳 らいらく らいそう
 四代 雷落一郎 17歳 らいらく いちろう
 椿

初代 ゼット 66歳 ぜつと
 二代 佐原栄太 58歳 さはら えいた

三代 土波哲子 51歳 つちは てつこ

四代 志免甲 42歳 しめ きのえ

五代 椿木砂智子 16歳 つばき さちこ

テレス「あれ？みんないるんだ…」

有美「結構珍しいわね」

咲子「…さっき既に死んでる人は参加できないって「ソレはいた場合よ。今の所そんな事ないわ」…なるほど」

…って

咲子「アオイさん!？」

しれつと四代目梅の欄に載ってるんだけど!？」

風鈴「えっ、知らなかったの?」

一郎「意外だな、お前が真つ先に知ってると思っただが」

アオイ「ああ、ソレは私の能力だよ。『意識を逸らす』のさ」

咲子「えっ…つまり私はずっと能力の効果を受けてたってことですか!？」

アオイ「そゆこと」

咲子「（。 ㇿ。）

どうやら花称号は規格外が多いようだ。

後、何故ひらがなでフリガナが載ってるかが気になるが言わないでおこう。

そんなことを思いながら、私達は席につく。

ザツ

ゼット「進行は俺、ゼットがする。会議を始めよう」

初代椿、ゼットさんが真ん中の席につき話す。

変な仮面をつけている。まるで作者のような…

（俺じゃないし、メタい）

ゼット「まずは新世代への説明だ。蛸雄、頼む」

蛸雄「うむ」ガタン

初代桃の鴨野蛸雄さんが説明を始める。

蛸雄「各地方での事件を報告したり、会議するのが花称号会議じゃ。詳細は…まあそ

のうち分かるじやろう」ガタン

そして鴨野さんは席に座った。

5人（結構ざつくり…）

説明、それだけでいいのかしら？

∴後は自分で理解しろ、ということだろう。

花称号会議②

side 桜木咲子

ゼット「次は近況報告だな。各地方の近況を報告してくれ。まずは羽合から」

甲「ココ辺りは特に事件はありませんが、ヤクザのヤツらが不穏な動きをしています」

ゼット「確かに不穏な動きをしてるな。次は総武」

雷槍「事件はなく、不穏な動きもありません。今の所平和そのものです」

ゼット「ソレはよかった。次は海原」

水夢「最近津波がありました。死者・行方不明者は共にゼロです。現在地域の復興に力を入れています」

ゼット「ゼロ：凄いな。次は輪花」

達也「北海道は現在豪雪。ココ10年で最も多い降雪量を記録しており、局地的なものも多いことからもしかしたら人為的なモノではないかとの考察もささやかれております」

ゼット「ほう、人為的なモノか：ありえなくもない。最後に花町」

隣にいる日花先生が立つ。

日花「前回の花称号から約1週間後、ヤクザと不良の連合による襲撃がありました。弟子の咲子がそれを鎮めました。有美先生が目撃した連合を操っていた者であろう。ヌーク・リートは逃亡してしまいました」

ゼット「ヌーク・リート：アイツか。ちょうどいい、近況報告も終わったのでそれについて議論しよう。まずは事件を詳しく」

ヌーク・リートは相当ヤバイヤツのようね。メイから聞いた話だと能力は放射能という極めて危険な能力らしいし。

有美「まずは私が説明するわ。ヌーク・リートが連合を裏で操っていたのは部下の尋問で判明した：そしてアイツがいると言われる建物に殴り込むと：案の定いた」

善助「ホントにいるのか。まるで予測されていたようだ」

有美「ええ：余裕の表情そのものでそこにいたわ。そして私はアイツを捕らえようとしたけど水素爆発で足止めされてしまい、逃亡された：」

日花「逃げたヌーク・リートは敗北したヤクザの後始末をしようとし、その場に居合わせた咲子の仲間達と交戦。結果は生徒2人の大怪我とヌーク・リートの逃亡です。今ココにいる者で詳しく話せるのは四代目桃の一郎だけでしょう」

一郎（確かに、現場に居合わせたのはこの中で俺だけだな：）

ゼット「：質問がある。有美、お前が言ったことに1つ間違っていることがあるだろ

う？」

全員『!?!』じっ

全員の視線が有美さんを向く。

有美「…流石に分かってしまうようね。ええ…私はヌーク・リートを捕らえるのではなく殺そうとした」

日花（…やっぱり！）

ゼット「…やっぱりか。お前の場合アイツに恨みがあるからな」

恨み？

…嫌な予感がする。

花称号会議③

side 桜木咲子

ゼット「…やっぱりか。お前の場合アイツに恨みがあるからな」

有美「……………」

ゼット「ただ、アイツをどうにかする対策がないワケではない」

有美「！」

ゼット「栄太、例の資料を頼む」

栄太「了解」カチツ

ジーツ…

二代目椿がプロジェクターに映し出したのは、3月に行われる2年5校衝突の会場の写真だった。

ゼット「次ヌーク・リートが行動を起こすと思われるのは…ココ、2年5校衝突の最中だ」

冷子「何故そう思ったのです？」

三代目梅が質問する。

ゼット「その質問に答える前に、まずは事実確認だ。二代目桜、5、6月のどこかで、魔界にある研究所をぶっ壊したろ？」

日花「はい」

ゼット「そしてその時に実験台にされていた子供達を助けた、そうだろ？」

日花「…そうです」

ゼット「よし、事実は証明された。その例の研究所がぶっ壊された後、善助の娘が跡地を調査した。結果…こんなモンが見つかったんだ」カチツ

ガラスのタンクに入った謎の液体に、赤ちゃんが入っている写真が映し出された。

冷子「クローン…ですか。しかし何故コレが時期と関連するのです？」

ゼット「コイツが見つかった場所付近には、研究メモのようなヤツがあったのさ」カチツ

今度は研究メモが映し出される。

『ボスが言うには、特定の人物のクローンを製造し、2年5校衝突の会場に放つらしい。目的は恐らく同世代で揃っている花称号を攫う、もしくは傑作：りゆうかの試運転だろ』

ゼット「日付を見ると研究所がぶっ壊される2週間前の物だった。傑作：りゆうかか後に救出され、桜木竜美という名前が付いた」

冷子「なるほど……」

竜美、実験台としての名前は傑作：りゅうかなのね……ん？

咲子「……スミマセン、質問です」

ゼット「桜木竜美の保護者の三代目桜か。なんだ？」

あ、私竜美の保護者扱いされてるのね。

咲子「『りゅうか』の文字が何故平仮名になっているかが気になります」

ゼット「……ソレか。正直『竜化』という漢字を当てても大丈夫な気がするが……敵の

思惑まで分からない、が答えだ」

咲子「……分かりました」

竜美の能力は竜化……だけじゃないかもしれないわね。

硫化、とか？ダジャレっぽいけどありえなくもない。

ゼット「他に質問はあるか？」

全員「……」

ゼット「ないようだな……続けるぞ。肝心の対策だが……次ヌーク・リートが行動を起こすと思われる2年5校衝突の会場に、俺達花称号が変装して観客に紛れ込む。顔をマスクまたはサングラスで全部は見えないようにすればいい」

……割と普通な対策ね。

花称号会議④

side 桜木咲子

ゼット「それと気配を消すのを忘れないことだな」

：つまり花称号が現場に大量発生する、と。

凄いことになりそうね。無事に5校衝突ができればいいんだけど…

ゼット「他に意見はあるか？」

聡一「はい」スツ

二代目桃が挙手する。

聡一「ヌーク・リートが行動を起こすのが2年5校衝突の会場だけとは限りません。保険をかけて他の会場にも誰かを送り込むべきなのではないでしょうか？会場付近に仕事場がある卒業生など、やりようはあると思います」

ゼット「：なるほど、ソイツもするべきだな。2年の会場はそのままの体制で、他の会場は人員を募るとしよう」

そのまま内容はまとまり、会議は進み…

―十数分後―

ゼット「これにて会議を終了する。今年も頑張るとしよう」ガタン
咲子「……はあ」ぐでっ

終始緊張した雰囲気が続いていたから、疲れたわ……

風鈴「花称号会議って、こんなシリアスなんだね……」

日花「いや、いつもこうってワケじゃないわよ？ 今回は偶々話題が話題だっただけよ」

咲子「そうなんですか？……ん？」

ザッ

流「よう、風鈴」

流、砂智子、一郎の3人が来た。

風鈴「？」

流「最近北海道と福岡を毎日往復してるらしいじゃねーか」

風鈴「まあね」

一郎「お前なんて体力してんだ……？」

風鈴「ふふん、体力切れになる前にスピードで着くのさ！」ふんすっ

咲子「ソレ、風の天使であるアンタにしかできないわよね」

風鈴「そ う だ よ ♪」ドヤア

うわあ……殴りたいそのドヤ顔。

side テレス・テレスト

アオイ「テレスさんがココに来るの26年ぶりですね。私と日花と甲が初めて会議に出たのがちょうどその時でしたっけ？」

テレス「そうだよ。多分僕の事を知ってる人はこの中で3割もいないんじゃないかな？」

アオイ「しかも輪花ではなく花町にいるって…私と同じじゃないですか！」

テレス「ホント、奇遇だよね」

アオイ「なんで私に会って一発で気付いちやうんですか！能力の意味ないですよ！」

テレス「意識なんて誰でも逸らせるのさ！」

アオイ「むう…あつ、もうこんな時間。私はそろそろ帰りますね、また」

テレス「うん、またね」

「おーい、テレス」

テレス「あつ、4人とも！」

有美、蛸雄、善助、ゼットの初代組がこつちに来た。

善助「本当に久しぶりだな、お前の放浪癖ヤバすぎだろ」

有美「ホント、ねえ…」

蛸雄「ワシなんて26年でこんなに老けちゃったわい」

テレス「うん、1番老けたのは蛸雄だよね」

ゼット「お前が老けないだけだろ」

そして私達はそのまま飲みに行くことが決まり、居酒屋へと足を運ぶのだった。

準備と豪雪

side 桜木咲子

花称号会議から2日経った1月3日、私達は北海道に向かう準備をしていた。

咲子「風鈴、あっちの気温って今どれぐらい？」

風鈴「―25度ぐらい？」

メイ「低すぎません!？」

風鈴「豪雪で気温が下がりがり続けてるんだよね〜」

咲子「…飛行機、大丈夫なのかしら？」

風鈴「ソレは問題ないよ。飛行機が通る地域は豪雪じゃないんだ」

メイ「まるで奇跡ですね…」

咲子「……………」

タタッ

翔「おい、ペンギン達を連れてきたぞ」

「クエエー!」

今回は翔のペンギン達も連れて行くつもりだ。

本場ではないが、ペンギンが住むような地域だしね。

風鈴「わあ、可愛い〜！」ナデナデ

「クウ〜」

風鈴「この子達の色って地毛？」

翔のペンギン達の羽毛は本来の黒と違って紫色だ。

ただ地毛でそう生えることもあるので少し珍しいぐらいらしい。

翔「そうだぞ」

風鈴「ふーん」

咲子「他のヤツらは準備終わったのかしら？」

メイ「2泊3日ですし、それほど荷物はいらなと思いますすが…」

風鈴「お菓子は現地調達できるからね！」

2人（ソレは関係ないと思いまゝす）

ポワン！

二ヨ「いやあ、僕楽しみだよ！」

突然二ヨが分身として現れた。

翔「ああ、そういえばお前年は来なかつたもんな」

二ヨ「ちようどレイト君を助けてたからね」

メイ「今年は楽しめるといいですね」

二ヨ「だね」

その頃北海道では、豪雪が続いていた。

『豪雪地帯は20メートルを超える降雪量となっており、一軒家が多数雪の中に埋まってしまっており。屋根には幸い熱が通っているので雪は解ける仕組みですが、水圧ならぬ雪圧によって窓ガラスが割れないか心配されている方が多いとのこと。しかし雪が止む気配はなく、このまま数日は続くだろうと言われています。5代目梅は、場合によっては物理的に雪雲を破壊することです…』

ニユースではそう報道されている。

ピッ

風香「……はあ」

さつきまでニユースを観ていた風鈴の姉、風香はテレビを消した。

ちなみに前回の登場から、学年ランクは1位に上がっている。

(144話ぶりの登場)

風香「風鈴は福岡と北海道を往復しているが、大丈夫なのか…?」

天気予報を見ると、風鈴が通る地域は「晴れ」または「曇り」と表示されていた。風香「天気予報を見ると安全なようだが…嫌な予感がする」

ザッ、ザッ、ザッ。

「はあ、何だよこのしんどい任務…寒すぎだろ…」

北ぞ北海道

side 桜木咲子

当日。

私達は飛行機で北海道に来た。

メイ「さ、寒いですね…」ブルブル

咲子「寒いのか？ほい」ポツ

火を出して暖をとる。

メイ「はあ…暖かいです…」

ゼイル「…うおっ!？」ポフツ

隣にいるゼイルの顔面に雪玉が当たる。

翔「雪合戦だゼイル！」

「クエエー！」

ゼイル「…負けないぞ？」ダツ

ポフツ、ポフツ。

翔（+ペンギン）とゼイルの雪合戦が始まった。

…私も後で参加しよう。まずは風鈴を探すべきだ。

咲子「空港から出てすぐの場所にいるって言ったのに…また飲食店にでもいるのかしら？」

メイ「流石にソレはないと…思いたいですね」

つまり多分あり得ると。

咲子「こうなったら…」スッ

私が出したのは…火桜の花びら。

咲子「コレに…憑依：風鈴！」カツ！

火桜に風鈴のエネルギーを纏わせる。

メイ「ええっ!？」

咲子「憑依の応用で相手の追跡ができるって分かったのよ」

メイ「なるほど、ソレは便利そうですね…」

ヒュン！

火桜を飛ばし、風鈴を追跡する。

咲子「ちよつと行ってくるわね」

祐樹「おう、引っ張ってこいよ」

タタツ…

―数分後―

咲子「……………」

私が行きついたのは…

『札幌ラーメン〇〇』

案の定飲食店だった。

「ズズツ…」

…はあ。

咲子「……風鈴」ポンツ

「んむっ？……んむっ!？」（。 ㇏。 ㇏。）

麵を吸いながらこつちを向く風鈴は驚いた表情をする。

咲子「さっさと食べ終わりなさい」

風鈴「ん、んむっ。ズズツ…」

咲子（…うん、まるで掃除機ね）

ピンクの悪魔ならぬ緑の悪魔…いや天使だったわね。

―食べた―

風鈴「いやあ、ゴメンゴメン。朝食パン10枚しか食べてなくてさ」

咲子「しか」の範疇を越えまくってる気がするけど…さっさと戻るわよ、もしかし

たらみんな冷凍食品になつてるかもしれないわ」

風鈴「…冷凍するならとにかく、食品はないんじゃないかな？」

咲子「んな事はいいの、いくわよ！」ダツ

風鈴「ちよ…待つて〜」ダツ

―42秒後―

メイ「あ、戻つてきましたね。やっぱり食べてたんですか？」

風鈴「うん、てへっ☆」ペロッ

風鈴は何故かテヘペロを披露する。

咲子「…不合格ね」

メイ「テヘペロが可愛いのは俺と咲子さんだけです、出直してきてください」

風鈴「フア!?自分で言うのソレ!?!」

咲子「安心しなさい、自他共に認められてるから。でしよ、ゼイル？」

ゼイル「おう」

風鈴（ぜえったい彼氏補正があるよね!?!）

メイ「さて、前置きはココまでにして「前置きなんだ…」さつさと町案内をしてくだ

さい」

風鈴「何か口調が乱暴になつてない？メイちゃん大丈夫？」じゃあこつちから行こう

か
」

…風鈴の扱いがなんかおかしくなってるわね、メイ。

なんで俺も…

side 桜木咲子

道を少し歩いたが、突然風鈴が立ち止まった。

風鈴「ちよつと待って、私1人で案内するとお腹すくから誰か呼ぶね」

…日が暮れる、じゃなくしてお腹すくなのね。

ピツ、ポツ、パツ、プルルル…

風鈴「あ、透矢？花町から友達が来たんだけど、人手が足りないから手伝ってくれない？…えつ、面倒くさい？しょうがないなあ、なら三学期覚えといて…ん？すぐ行く？ありがとね。〇〇にいるから10分来てね、じゃ」

ツ…

咲子「…風鈴、アンタ相手を軽く脅してなかった？」

風鈴「何の話かな？」キョトン

咲子「…まあいいわ。誰が来るの？」

風鈴「輪花の2位、北村透矢だよ」

ルマ「…あ！去年ボクを倒した人だ！」

メイ「その後俺が倒した相手ですね。能力は確か…なかったはずです。気配を消すのが得意、ですよね？」

風鈴「まあ、今は能力として透明化を持つてるよ。最も、アレは気付かれればほぼ意味ないけどね。自分や物を透明にする能力だよ」

咲子「ふーん…」

気配を消された上に透明だったら、結構気付きにくいかもね…忍者かしら？

―数分後―

「ハア、ハア…なんで俺も…」

風鈴「おお、やっと来たね透矢」

透矢「ああ…来たぞ。俺は輪花2位の北村透矢、よろしく」

初対面（ココの半数）の人の為に透矢は自己紹介をした。

風鈴「まさか自分から来るなんて思わなかったよ」

透矢「俺は脅されたんだが!？」

ルマ「やあ北村君。ボクの事覚えてるかな？」

透矢「ん?…羽犬塚か」

ルマ「今年は生憎と参加できないけど、来年は君に勝つからね？」

透矢「…望む所だ（参加できないのは車椅子だからだろうな）」

おお…なんかバチバチやってるわね。

風鈴「んじや透矢、今日だけじゃなくて明日のスキー場にも来てもらうからね」

透矢「はあ!?!なんで俺も!?!」(。D。)

風鈴「金は心配ないよん、私が払うから「ならギリ許容範囲だな…」…よし」

…完全に上手く扱われてるわね、凄いわ風鈴。

そして数時間後、観光はある程度終わり私達は…風鈴の家に来ていた。

風鈴「予め言ってるから問題ないと思うよ」

咲子「…ホントに?」

ピンポン…ガチャツ

「遅いぞ風鈴、もう7時半…:What?」(。D。)

中から緑髪の女性が出てきた。

風鈴「ただいま、姉さん。朝言ったみたいに客人を連れてきたよ」

「多すぎないか!?!」

風鈴「まあいいじゃん」

「(よくないぞ!?) はあ…とりあえず入ってくれ」

咲子「…失礼します」

明日の計画

side 桜木咲子

風鈴の姉にリビングまで案内された。

風香「風鈴の姉の風香だ。ウチの風鈴がお世話になってるな」

咲子「いえいえ、こちらこそお世話になってます。桜木咲子です」

風香「あら、コレはご丁寧に」

その会話を聞いた風鈴はむすつとした顔をする。

風鈴「むう。何よ、私がお世話になってるって?」

透矢「日頃の行いだろ」

風鈴「はあ?」

風香「夕飯はもう食べたか? 買い置きしているおにぎりとかはあるが「あ、もう食べてますよ」…そうか」

風鈴「そのおにぎり、私のじゃん!」

風香「お客さんにあげちゃダメなのか?」お前の”お客さんだぞ?”じつ

メイ(わお、強調しますね)

風鈴「むう……」

(本日2回目)

風香「狭いかもしれないが、ココともう1部屋あるから寛ぐといい。布団を取つてくる」スタスタ

咲子「…風鈴、アンタの姉いい人ね」

透矢「性格は全然違うよな…」

風鈴「は？姉さんも結構食べるし！」むすつ

2人『ソレは今関係ない』

風鈴「…むう」

(本日3回 (ry))

…さつきから『むう』しか言っていないようね。

翔「まあまあお前ら落ち着け。明日の予定の確認をしておくぞ」

パサッ

翔は持っていた計画表を出す。

翔「明日、2日目はスキー場に行く。豪雪地帯に若干入っているが、被害はないエリアのようだし問題はないだろうな」

祐樹「1日中スキー場なのか？」

翔「そうだな」

祐樹「そうか…（俺はルマと建物内でゆっくりするか）」

…ドサッ

咲子「？」クルッ

振り向くと、布団が大量に置かれていた。

風香「コレぐらいしか布団がないんだ、すまない」

メイ「いえ、大丈夫ですよ。ありがとうございます」

…充分多い気がしますけどね。というか、コレだけの布団を何に使ってるかが気になる。

翔「ところで、部屋割りはどうするんだ？男女で別れるか？」

咲子「あゝ？」ギロッ

とんでもない発言をした翔を某火の鳥のように睨みつける。

ゼイルと寝れないのは私にとって大惨事なのよ!?

（週2回ぐらいそうなるだろうが…って竜美と一緒だったな）

翔「…いや、何でもない。自由で」

…よろしい。

メイ「俺はレイト君と寝ます！」ふんすつ

ルマ「ボクは祐樹と寝るよ！」ふんすつ

風鈴「…見せつけるねえ」

しょうがないじゃない。(そんな事ない)

学「俺らは別にもう1部屋の方で寝るか？」

育也「そうしょつか」

透矢「俺は…帰って寝る」ん？何か言った？」…ココで寝ます」

風鈴「私の隣で寝てね」

透矢「は!？」

こうして部屋割りには決まっていき、私達は寝床についたのだった。

朝特訓、朝飯。

side 桜木咲子

咲子「ふわあ…」

目が覚め、起き上がる。

時間を見ると、まだ5時だった。周りが薄暗い。

…あら？

咲子「風鈴がない…」

何故か風鈴が部屋になかった。

少し待ってみたが、戻ってくる気配はない。

…ヒマだし、少し散歩しよう。

―家の外―

咲子「暗いわね」

まあ、冬の早朝だから当たり前だが。

…ヒュン、ドゴツ

咲子「？」

家の裏側から人が戦つてゐるような音が聞こえる。

気になつたので見てみると……

風鈴「ハアツ！」ヒユン

ドゴオ！

風鈴が一人で特訓していた。

咲子「あら、風鈴おはよう」

すると風鈴はこつちを向いた。

風鈴「咲子？君も早起きしたんだ、おはよう」

咲子「……アンタ、毎朝コレを？」

風鈴「そうだね。特に今年は君に勝ちたいからね」

咲子「へえ……？」

確かに風鈴は憑依も習得してるし、技も強くなつてゐるからね……

もしかしたら負けるかもしれない。

咲子「私も負けるつもりはないわよ？」

風鈴「フフツ、そりゃあそうだね。……咲子も特訓する？」

咲子「ええ、ヒマだしやるわ」

：2時間後、朝7時頃。私達は朝食の準備をしている。

咲子「朝の特訓はいい眠気覚ましになったわね」

風鈴「アレが眠気覚ましなんだ：（それにしても動きに眠気がなかったけどね？）」
それにしても：

咲子「アンタ、料理できたのね」

食べる専門だと思ってたわ。

風鈴「失礼な！飲食店以外では自炊しないと私の腹は満たせないんだよ!？」

咲子「あー：なるほどね」

まあ確かに誰かがアンタ1人の為に20人前とか作ってくれるハズないわね。

咲子「：えっ、つまりアンタが今作ってるのは自分の？」

風鈴「そうだよ？私が20人分、君は残り全部。これで半々だね！」ふんすつ

咲子「そんなドヤ顔をされても：」

食費は：大食い大会の賞金から賄っているんだったわね。

スタスタ

メイ「おはよーございましたゆ：」フラッ

メイが眠そうにしながら部屋に入ってきた。

咲子「おはよう、メイ。珍しくレイトの寝顔を眺めないのね」

メイ「今日は二ヨの番なので」

メイは五重人格だが、レイトに恋を抱いているのはメイと二ヨだけである。後の3人にとっては親友だそうだ。

メイ「ところで：手伝えることってあります？」

風鈴「じゃあ皿を持ってきてくれる？盛り付けを手伝ってほしいんだ」

メイ「分かりました」サツ

―数分後―

朝食の準備ができたので、みんなを起こし、朝食を食べ始めた。

風鈴「もぐもぐぱくぱくくんぐんぐ：」ガツガツ

風鈴が自分で作った普通20人分の朝食はあつという間に減っていた。

咲子「……………」じっ

ゼイル「…カービイかよ」

スキー場で滑ろうか？それとも雪玉を投げようか？

side 桜木咲子

朝食を食べた数時間後…私達はスキー場にいた。

「クエエ〜ツ〜」シャー

ペンギン達は生き生きとしている。

学「待てゴラア…ぼふう!？」ボフツ

翔「雪合戦だ！せいっ!」ポイツ

育也「てやつ!」ポイツ

学「…望むところだ!」ザツ

男子達は雪合戦を始めた。

メイ「咲子さん、一緒に滑りましょう!」

咲子「いいわよ…追いつけるならね!」スツ

シャーツ!

ものすごいスピードで雪の坂を滑る。

メイ「えっ!?!…待って下さ〜い!」シャーツ

フフツ、待たないわよ!

咲子「このままゴールに「やっほー」…え?」クルツ
横を向くと、そこには…

風鈴「いやあ、風が気持ちいいね」シャーツ

平気な顔で私と並走している風鈴がいた…って

咲子「速くない!?!」

さつきまで見たらなかつたんだけど!?!

風鈴「追いつくのになちよつと本気でしたからね」

メイ「…本気出したらどれぐらい速いんですか?」

後ろからメイが質問する。

風鈴「これぐらいだ…ね!」カッ

ビューンツ!

咲子「(。(。D。D。)

メイ「(。(。D。D。)

風鈴は瞬時に加速し、圧倒的スピードで進んでいった。

…多分もうゴールに着いたわね。

咲子「は、速いわね…」

メイ「スピードはピカイチですね…」

side 飛羽野ゼイル

ゼイル「ウインドスノーボール！」ビュン

育也「サンダースノーボール！」バチツ

雪玉を投げているうちに、次第に風や雷を纏って雪合戦をするようになった。

透矢「……そこだっ！」ポイツ

翔「うおっ!？」ボフツ

…いい事思いついたぞ。

ゼイル（コイツを使えば一気に蹴散らせるな）スツ

ゴロゴロ…

俺は雪を集め、次第にそれを塊に変えていく。

学「…デツケエ雪玉を作るつもりか？させねえぞ！」スツ

ドゴツ！

雪玉の下の地面が隆起する。

ゼイル「おっと」ひよい

咄嗟に雪玉を抱え、崩れるのを回避する。

ゼイル「浮かせた方が楽だな」フワッ

雪玉を風で浮かせておき、雪を集めて雪玉にくっつけていく。

育也「えっ…もうそんなサイズになったのかい!？」

透矢「これじゃあ避けきれないな…」

…よし、充分なサイズになったな。

ゼイル「くらえ…大玉!」スッ

ゴオッ!

風を利用して圧倒的勢いで雪玉を発射する。

翔「ちょ、こりやヤベえ!」ダッ

翔は背中を向けて逃げ出すが…

ドゴオ!

翔「ぐほおっ!」ドサッ

雪玉は翔の背中に直撃した。

衝撃で小さな雪玉があちらこちらに散らばる。

ゼイル「(これも作戦通りだ!)…いけっ!」ヒュン

学「フア!?!操るのかよ!？」ダッ

育也「…うわっ！」ボフッ
フハハハハハ、雪合戦は俺の勝利だぜッ！

ありきたりな遭遇

side 飛羽野ゼイル

ゼイル「…よし！」

ドサツ

翔「デカすぎだぞおい…」

学「バラバラにして操るなんてよお…」

透矢「…あれ？ココ何処だ？」

ゼイル「建物から少し離れた所だぞ？あっちの方だ」

俺はちゃんと周りを見ていたので覚えていた。

育也「…ん？」

ゼイル「どうしたんだ？」

育也「奥の方から…何か光が出てないかい？」

見てみると、奥に人工的な光が見えた。

翔「行ってみるか？」

ゼイル「待て、一旦場所を記録するぞ」スツ

ズンツ：

影で大きな釘を作り、地面に打ち込む。

自分の影なので、すぐに探知できる。

学「…初めて見たぞ、ソレ」

ゼイル「他にやるタイミングがなかったからな」

透矢「じゃ、行くぞ」

スタスタ

光に近付くにつれ、色は赤だと分かる。…もともと色は分かるか。

少しして、光を発しているものにたどり着いた。

学「…ヘルメット？」

育也「見覚えがあるような…」

…ガサツ！

5人『!?』

ヘルメットが何故か動きだした。

「おい、助けてくんね？」

ゼイル「ん？」かぼつ

ヘルメットを取ってみると…

学「…ノーマンさん!？」

ノーマンさんがいた。

雪の中に埋まっているようだ。

育也「どうしてこんな所に」「その前に出してくれ!」は、はい!」スツズボツ

ノーマン「くうーっ、やっと出れたぜ。ちょうどココに落とし穴があつてな、30分前ぐらいに」

ゼイル「そもそもなんでこんな所に…」

ノーマン「ああ、それはな…」

透矢(この人、誰だ?)

ー148秒後(透矢とノーマンはお互い自己紹介した)ー

ノーマン「…つてことだ」

翔「…マジすか?」

どうやらノーマンさんは任務できているようだが、内容は…

『豪雪を起こしている施設を捜査せよ』

とのことだ。

ゼイル「人為的なものだったんですね…」

ノーマン「流石に自然のものだったら」梅「あたりが雲を吹っ飛ばしてるからな」
透矢（…つまりその内風鈴が雲とか吹っ飛ばすのかよ）

ノーマン「それで、豪雪地帯に広がってる雲の出どころをしらみつぶしに探してると…この辺りに施設があると分かったのさ」

育也「なるほど…」

ノーマン「…おっと、そろそろ任務に戻った方がいいな。じゃあな」クルツ

ノーマンさんはそう言っただけかかを返す…おいおいちよつと待て。

ゼイル「ノーマンさん」

ノーマン「？」

ゼイル「その任務、手伝わせて下さい」

透矢「!?!」

学「話を聞くだけじゃ気がすむワケないじゃないですか」

ゼイル「それとそこで話を区切るってことは、暗に俺達に手伝えと言ってるようなモンですよ」

俺がそう言い切ると、ノーマンさんは口角を上げ、こつちを向いた。

ノーマン「…フツ。気付いてたのか、ゼイル？」

ゼイル「まあ…人間観察は得意なので」

ノーマン「(人間観察関係なくないか?) …まあいい。手伝ってくれないか?」
ほぼ全員『もちろんです!』
透矢(…あれ、コレ俺も行くパターンか?)

その頃、竜美は

side 桜木竜美

竜美「むう〜」じっ

私は、お母さんに渡された算数の問題を解いていた。

次の問題を計算しなさい。

① 15×6

② 27×3

③ 63×4

お母さんが小学4年生ぐらいのレベルだと言ってたけど…私4年生じゃなくて4歳だよ？

かけ算の九九とか、その逆の割り算を先月やったばかりだよ？…カンタンだったけど。

(それが異常だと気付け！)

竜美「90、81、252って」

(計算速っ!?)

ガチャッ

春奈「竜美ちゃん、おやつの間よ〜」

竜美「あ、ありがとうおばあちゃん！」スツ

おばあちゃんからおやつを乗せた皿を受け取る。

：クツキーだ！やったあ！

竜美「はむっ：」パクッ

ん〜、美味しい♪

春奈「咲子に渡された宿題は進んでるかしら？」

竜美「んむっ：うん、ちゃんとやってるよ。結構楽しいし」

いい暇つぶしになるんだよね〜。

春奈「そう：（この子、本来なら6年後にやるような問題を解いて楽しいのね：もし

かして研究所の影響で頭が凄いいのかしら？）：他にすることかないの？」

竜美「ゲームとかあるけど：ずっとやってたら頭が痛くなるし：」

春奈「ほっ、年相応の遊びもちちゃんとしてるのね、よかった）じゃあ問題解くの頑張っ

てね。皿は後でシンクに、ね？」

竜美「分かった〜」

ガチャッ

竜美「つと、次の問題は…」パラッ
クツキーをほおぼりながらページをめくる。

…ん？何か書いてある。

『今日はここまで！コレ以上解いたら一緒に寝ないからね？ by 咲子』

お母さんからのメッセージだった。…前コレを破ってホント一人で寝なきやいけなくなつちやつた時がある。…ん？

竜美「でも今お母さんは北海道にいるし…あれ？」

よく見ると、さつき読んだ所の下に何か小さく書いてあった。

『追記：あ、私が北海道にいる時破ったら母さんと一緒に寝れないわよ？』

…ハハ、バレテラ（白目）

（何故そんなフリーズを…）

竜美「しようがないなあ…ゲームしよつと」カチッ

お母さんのパソコンを起動し、自分のアカウントでマイクラのサーバーに入る。
（そんなモン持つてんの!?!）

竜美「ピーブイピーだよ！とりやああ！」カチカチ

―数分後―

『YOU WIN!』

竜美「やったあ！」

お母さんに『9割ぐらい勝てる戦法』を教えてもらったからねえ〜！

竜美「次は…そうだ、HSBやろつと」

(HSB：ハイピックセルスカイブロック)

このゲームモード、あんまり進めてないんだよね…何時間も同じことを繰り返すのつて疲れない？

『YOU DIED ！』

竜美「むむっ…」

やっぱり難しいね…

潜入捜査

side 飛羽野ゼイル

俺達はノーマンさんの任務を手伝うことになった。

…学生が捜査任務を手伝うのは危ないって？ヤクザとかを壊滅させてる時点で今更だろ。

ノーマン「建物はこの先500メートル程にあるようだな。ゼイル、お前の能力で影に潜らせてくれ

ゼイル「了解です」スツ

ズオツ

透矢「…！」

能力で影に潜る。

ノーマン「ココからはこの状態で進むぞ」

スタスタ…

表に出て障害物に当たったりしないように注意しながら、施設へと近づいていく。

151秒後1

ノーマン「…見えたぞ、アレだ」

翔「アレが…」

ウイイイン…

建物は観測所のような外観で、妙な機械音がする。

学「…あそこに監視カメラとセンサーがあるぞ！」

ノーマン「だな」カチッ

ダンッ！

ノーマンさんは拳銃を出し、弾丸を放つ。

…バキイ！

弾丸はカメラとセンサーに命中し、機械は破壊された。

ノーマン「さて、後は中に入るだけだが…ゼイル、影に入ったまま中に入るこ
とってできるのか？」

ゼイル「…できません、どこかのスキマならいけますが」

ノーマン「そうか、うーむ…」

それか施設内に誰かいることを祈ってドアを開けるまで待つかな。

…ん？ 待てよ。

ゼイル「おい、透矢」

透矢「？」

ゼイル「お前の能力は他に人に使えるか？」

透矢「使えるが…まさか」

透矢は勘づいたようだ。

ゼイル「ああ…俺達全員を透明にしてくれ」

透矢「…分かった」

スウツ…

俺達の体は半透明になった。

恐らく透明じゃないヤツらから見たら透明なのだろう。

ノーマン「一旦この状態で外にでるぞ」

ニユツ…

影から出る。前方に入口と思われる場所があった。

ノーマン「…作戦はこうだ。まず、俺がドア付近の半径2メートルを爆破する。その間に全員建物に入る、いいな？」

全員『……………』コクツ

全員が頷いた。

ノーマン「よし、作戦スタートだ！」カチツ

ポイツ

ノーマンさんが懐から爆弾を取り出し、ドアの方に投げた。

…ドガアアン!

爆弾は地面に当たるとすぐ爆発した。

「何だ何だ!?!爆発!?!」

「この施設の所在がバレたのか!?!」

中にいると思われるヤツらの怒号が聞こえてくる。

タタツ…

どさくさに紛れて俺達は施設に入った。

中には…大きな機械があつて、その周りで研究者らしき人達が色々弄っていた。

「どこから爆弾が投げられた!?!」

「指紋検査…ツ、指紋がないぞ!?!」

ノーマン「当たり前だ、ゴム手袋をつけといたからな」

(透明化している時は声も透明化してるので他には聞こえない)

ゼイル「…んで、ココからどうするんです?」

ノーマン「とりあえず機械を調べるぞ。一通り調べ終わったら…ぶつ壊す!」

任務完了ッ！

side 飛羽野ゼイル

ノーマン「コイツは…恐らく人口的に雪雲を作る装置…ソレの超強化版だな。本来なら冷蔵庫ぐらいの大きさだが、こんなに大きければあの豪雪も説明できる」ふむふむ

育也「詳しいですね」

ノーマン「そりゃあ、色々潜入の仕事が来るからな。機械に詳しくないと捜査ができないだろ？」

…マジで何の仕事をしてるんだ、この人？

「侵入者は何処だ!?!」

「恐らく透明化の系統の能力使いだ、例のゴーグルを使いえ！」

学「…例のゴーグルだと？」

ノーマン「ん、もうバレそうだな。ゼイル、影に潜るぞ」

ゼイル「はい」

ズオッ

能力で影に潜り、その中で透矢が透明化を解除する。

…上から声が聞こえる。

「ッ、誰もいないぞー!」

「時間停止系か!?!」

俺達を見つけられなかった研究員どもは焦っているようだ。

ノーマン「うーん、困ったな…後30秒程猶予があれば機械を壊して逃げれたんだが」
ゼイル「…囧作戦はどうです? 囧は俺で、俺が研究員をかく乱している間に他のヤツらで機械をぶっ壊して下さい」

ノーマン「お、そりゃいい考えだな…ただ、囧はお前じゃなくて俺だ」スツ
ズオツ

ノーマンさんはそう言つて自ら影を出た。

「だ、誰だお前は!?!」

ノーマン「お前らが探してた侵入者だぜ…追えるモンなら追つてみな!」ダツ
研究員どもの意識は全員ノーマンさんに向いている。

ゼイル「…お前ら、今の内に機械を壊すぞ。透矢、透明化だ」

透矢「透明になつてもゴーグルをつけてるヤツらにバレるぞ?」

ゼイル「ないよりはマシだ」

透矢「…分かつた」

スウツ：

ゼイル「んじゃ…まずは翔が辺りを凍らせろ」

翔「分かった…とうつ！」バツ

パキン！

「氷!？」

「…お前の仕業か！」

ノーマン「その通りさ。機械はぶつ壊すつもりなんだな！（辺りを凍らせるとは…ど
うやって壊すつもりなんだ？）」

ゼイル「後は…集中攻撃だ！」

全員『おう!』

ギユン！

学「地裂改！」ドゴオ！

グゴゴツ…！

地面が割れ、機械はバランスを崩す。

「な…機械が倒れるぞ！」

「離れろ！」

2人『サンダーラッシュV3!』

(なんと透矢も雷属性)

バチッ…バチバチッ!

そこに育也と透矢の2人が機械に電撃を当て、機械はショートする。

翔「ノーザンインパクトV4!」ヒュン

バゴオ!

とうとう機械は崩れ始めた。

…仕上げだ!

ゼイル「デビルバーストG5!」ギユオオオ

ズドツ…ボンツ!

機械は大きな音を立て、カタカタを変な振動をしだす。

…こりや爆発するな。

翔「逃げるぞ!」

ダダダダダ

逃げる途中でノーマンさんと合流し、その数秒後…

ドガアア!

機械…とそれがあつた建物は爆発した。

ノーマン「よし、任務完了だ。福岡でお前らには飯をおごつてやるよ」

ゼイル「ありがとうございます」

ノーマン「んじゃ、俺は報告にかなきゃいけないから…またな」クルツ
タタツ…

学「…戻るか」

育也「だね」

透矢（コイツら、妙に慣れてるな…）

隠されたもの

side 三人称

ゼイル達がブチ壊した、辺りを豪雪地帯に変える機械……それが使われた理由。

それは……豪雪による混乱の中で『とある施設』を地上から地下に隠すためであった。

ウイイイイ……ン

「お疲れ様です、ボス！」

「……ああ」

ボス……ヌーク・リートが施設を訪れた。

リート「研究は順調か？」

「はい。逃亡され匿われた傑作：りゅうかには並ぶレベルの傑作ができそうです」

リート「……傑作：りゅうかは反抗することが多かったようだが？」

「……こちらの傑作はその性格的問題も修正しております」カチッ

研究員はヌーク・リートをとある部屋に案内した。中には4歳程の少年がいた。

「こちらが……『傑作：シヨック』です」

少年の目はヌーク・リートに向いている。

「貴方は…誰…?」

リート「俺はヌーク・リート…お前のボスだ」

「ボス…」

リート「そう、ボス。お前は俺の部下だ」

「部下…分かった」

リート「…ほう？」

「ボスには従えって、教えてもらった」

「…どうです? 修正されているでしょう?」

リート「確かに…見る限り反抗的な意思は読み取れないな。…名前はないのか?」

「ありません…コードネームが傑作…シヨックとしか」

リート「そうか…シヨック、お前に名前を与えてやろう」

「名前…?」

リート「ああ…お前はこれから『震』と名乗れ」

震「しん…分かったよ、ボス」

こうして…傑作…シヨックは震という名を持ってヌーク・リートの部下となった。

side 火野有美

…私は夢を見た。

途轍もない惨状を、唾然と見つめている夢を。

そこには、私の弟が血だらけの状態で倒れていた…心臓は止まっている。

有美『有…太…！起きて！起きてよ！』

しかし、もちろん返事はなかった。

…ザッ

そこに、有太を殺した犯人が現れた。

有美『……………えっ？』

『有、美さん……………俺、やっちゃったよ…』

有美『アンタ、が……やったの…？』

『そうさ、俺がやったさ…ははっ』

有美『ツ…』

ヤツは、何かが壊れたように笑いだした。

『ははは、もうどうにでもなれ。あははっははっはははっはははっはははっははは…！』

そこで私の意識は暗転した。

—

有美「…はっ！はあ、はあ…！」ガパツ

また、あの夢を見た。

時計を見てみると…針は2時を指している。

有美「あの時から…」

弟が死んでから、私は何度もあの夢を見ている。…しかし最近は特に見るこ
い。
多

有美「有太…」

私は…一体どうすればいいのかしら？

日照と斬舞

side 桜木咲子

私と風鈴は…雪の中、手合わせをしていた。

咲子「炎空桜舞！」シユバツ

ズドドドツ！

風鈴「へっ、負けないよ…！」

ギユン

風鈴「日照飛梅！」シユバツ

ズドオン！

…今、してつと新技出したわね。

咲子「その技は…？」

メイ「俺と風鈴さんが作った、晴天飛梅の強化版ですよ。威力は炎空桜舞と同等です」

私と風鈴の手合わせを見学しているメイが説明した。

咲子「へえ…じゃあコレは止めれるかしら？」スツ

ちよつとNARUTOのマネをするわね…

ギユルルル…!

咲子「火遁・紅台風の術参式！」

訳すとクリムゾンハリケーンG3…その小型版を飛ばした。

メイ「アレはクリムゾンハリケーンですね…」

レイト「小さいからって油断できないね」

風鈴「紅台風…クリムゾンハリケーンね。なら私は…」スツ

キュイイン!

風鈴「絶螺旋丸！」ドツ

…ドシユウ!

風鈴の螺旋丸と私の小型クリムゾンハリケーンがぶつかり、相殺された。

風鈴「今度は私の番だよ。…よっ」シャキン

咲子「…剣？」

風鈴はエネルギーで緑色の剣を2つ生み出した。

風鈴「メイ」

メイ「？」

風鈴「君は風斬を独自で強化したでしょ？」

メイ「そうですね…弧月十字斬から、飛梅・燕返しに強化しています」

風鈴「…私の場合、順当にやっているんだ」

咲子「順当…確かに風斬・鎌鼬を使ってたわね」

…ということはつまり。

咲子「アンタはそのさらに強化版を…」

風鈴「その通り！くらえ…」

ぐるんっ

風鈴は剣に風を纏い宙返りすると…

風鈴「飛斬舞…V3！」

…ん!?

ちよつと待っていきなりV3!?

ビュンツ!

一気に大量の飛斬撃が飛んできた。

…アンタ、テレスさんの攻撃で驚いてたのに。人の事言えないわよ？

咲子「ツ…空中分解G3」パラッ

ヒュン…

体を分解して斬撃を避ける。

風鈴「むう…その脳力、回避に特化しすぎじゃない？」

咲子「まあ、そういう脳力だから」
その後も手合せは続いた。

—————

—————

—————

—————

！

side 羽犬塚ルマ

みんなは今外でスキーとかしてるのかな…

(いや、手合せとか機械破壊とかしてます)

ルマ「祐樹く、ちよつと外に出ようよ。流石にボクも雪遊びゼロは我慢できないよ
！」

祐樹「でも、お前は車椅子だぞ？雪に沈んだら上がれ「ボクが火属性なのを忘れてる
のかな？」…あ、なるほど」

ボクは火属性、沈めば雪を溶かせばいいんだ。

祐樹「じゃあ行くか」グッ

ウイイイン

自動ドアを出て銀世界に入る。

ルマ「…よし！」ザッ

私は車椅子から『立ち上がった』。

祐樹「フア!？」

ルマ「実はもう完治したんだ…なーんてね？ボクは短時間しか立てないよ」

祐樹「あ、そっか」

…もう納得した。流石ボクの彼氏だね！

そんなにアホじゃない

side 桜木咲子

咲子「…そういえば」

風鈴「？」

咲子「アンタ、いつNARUTO読んだの？」

去年…いや一昨年風鈴が使っていた技は回風球だった。

風鈴「あ…去年読んだよ？それで、回風球の強化版として螺旋丸を使ってるんだ。ま、正確には風遁螺旋丸だけだね」

それで真まで強化して使ってたと？

(初登場では真だった。今は絶)

メイ「咲子さん、そろそろ俺も戦っていいですか？」

咲子「ん？…いいわよ、ほい」サツ

メイ「ありがとうございます。…分身！」

ポーンッ！

メイの隣に分身が1人…目が黄色いのでクミね。

クミ「あたいが相手だよ！」

メイ「えつ、俺もですよ？」

クミ「むう、でもあたいはあんまり出番がないじゃん？」

メイ「…確かにそうですね。じゃあクミが相手して下さい」

クミ「よしっ！」グッ

…ポンッ！

二ヨ「僕はレイトとイチヤイチャしとくね〜」

メイ「…はあ、いいですよ」

どうやら二ヨはレイトとイチヤイチャする為だけに出了たようだ。

…てか、その分身のメカニズムが謎ね。後できいてみよう。

「あれ、スキーしてないの？」ザッ

背後から声がした。振り向くと…

咲子「…ルマと祐樹？」

車椅子に乗ってるルマとソレを押してる祐樹がいた。

ルマ「手合わせしてるようだね」

咲子「ええ、まあ」

ルマ「ボクも後でちよつとやっついていいかな？」

祐樹「待てルマ、お前はまともに動けないんだぞ？」

ルマ「…じゃあ」

2人『じゃあ？』

ルマ「ボクと祐樹で相手すれば解決だね！」ドーン

咲子「いやいや、その考えはおかしいわよ？祐樹、何か言つてやりなさい」

祐樹「…足し蟹」

咲子「納得するの!?!」

—————

—————

—————

—————

—————

side 室見クミ

クミ「いよおおし、頑張るぞー！」

風鈴「（あ、この子アホの子だ）エアドライブV4！」ビュン

ドッ！

風鈴は風を纏って突撃してきた。

クミ「絶ニードルハンマー！」バチッ

…ドゴオ！

あたいは拳に雷を纏ってソレに対処する。

メイ（あれ？力でごり押しする戦法じゃないですね）

風鈴「（対処の仕方はアホじゃないのかな？） 天空掌！」ズガアン！

クミ「むっ」サッ

風鈴（避けた!?!）

危ないね。

クミ「極雷天落桃！」 B L O O O O M !

風鈴「ッ…瞬身！」サッ

（素早い動きで回避する技）

ん、避けられちゃった…ならコレは？

クミ「真斬一閃！」シヤッ

スパアン！

風鈴「瞬身…ッ!?!」

おっ、今度は掠ったね。

クミ「動きは速いようだけど、それだけかな？」

風鈴「……！（凄い観察力、2回しか使っていないのに仕組みが分かるなんて……）」
技の仕組みは分かっただし、逆転するよ！

うん、絶対⑨じゃないよね？

♪桜咲く。 — 劍豪

side室見クミ

クミ「…ハッ！」シユッ

風鈴（消えた…無影乱舞だね…）ザッ

クミ「おっ、注意されたね。なら…）Q・E・D！」スッ
ンッ

ザ
！

風鈴の周りで能力を発動し、円形に空間を斬る。

風鈴「!?(何コレ!?)」(。D。)

(風鈴はQ・E・Dを見たことがない)

クミ「ふふん、空間を切断したのさ！」ドヤッ

うん、やっぱりあたい最強ね！

(久々の⑨)

風鈴「(空間を!?) どうやって出るのコレ!?)」

クミ「うーん…時間経過？」

風鈴「フア!?」(。D。)

…ま。

クミ「あたいは攻撃できるけどね！トラフィック・ジャムG3！」ブロッ

ヒュン！

風鈴「ツ…(時間が経過するまで防衛線をするしかない！)風神・ザ・ハンドG3！」

ビュウウン

…ガシッ！

クミ「むう…(止められちゃった…)」

うーん、Q・E・Dの性能上近接攻撃はできないんだよね。

クミ「(使える技が少ないのが難点だ…)超ゴッドノウズ！」ギユウン

バゴオ！

風鈴「今度はソレか…日照飛梅！」シユバツ！

ズドオン！

あたいの技は相殺されてしまった。

クミ「(Q・E・Dって、割とデメリットもあるね)…解除！」スツ

ヒュン…

風鈴 「…え？」

クミ 「このままじゃ面白くないし、普通に戦おうよ」キンツ
そう言つてあたいは刀を構えた。

風鈴 「ふーん…いいよ、そうしよう」スツ
ドツ！

クミ 「命命斬り！」シユツ

風鈴 「飛斬舞！」シャツ

…ガキイツ！

クミ 「うおおお！」

風鈴 「ハアアア！」

ズドオン！

衝撃で辺りの雪が吹つ飛ぶ。

風鈴 (うわっ！)

そのせいか風鈴が今体勢を崩した！

クミ (今だ！) 真…！」ドガツ

超スピードで動き、風鈴のお腹に蹴りを入れた。

風鈴 「かはっ…！」フワツ

その反動で風鈴が少し宙に浮き…

クミ「空前絶後！」

ズドドドッ！

それを利用してあたいは連撃を叩きこんだ。

クミ「てやあ！」バゴオ

…ドゴオ！

風鈴「グハツ…」ドサツ

メイ「…！（一人用に空前絶後を改造したんですね…）勝者、室見クミ！」

クミ「やったあ！」

風鈴「ううつ…今の、強すぎない？一人で出来る技じゃないよ？」

クミ「え？…気合いで何とかなつたよ？」

風鈴（気合い!?）

—————

—————

—————

—————

—————

ゼイル「おつ、そろそろ咲子達がいる場所に着くぞ」ザッ
学「やつとか」

透矢「……ん？なんか、ヤバい音が聞こえないか？」

ドガツ、バゴツ！

全員『確かに』

翔「この音……手合わせでもしてるのか？」

育也「スキー場で？」

ゼイル「……咲子達ならやりかねないな」

翔「合流しようぜ」

スキーパーバトル？

side 桜木咲子

二ヨ「クミく、いつの間に1人用の空前絶後なんて編み出してたの？」

クミ「えっ？」

咲子「まさか、土壇場で？」

クミ「うん」

…今ので確信したわ。

咲子「アンタ…センスに関しては何人の中で1番じゃない？」

クミ「え、そうなの？ やっぱりあたいは最強ね！」 ドヤツ

メイ「コレがなければ完璧なんですけどね…」 じゃ、次はルマさんと祐樹さんが戦うんですか？」

ルマ「うん。相手は、そうだね…」 じーっ

何故かルマは明後日の方向を向いている。

…ん？

ガサツ、ザツ

ゼイル「よう、お前ら」

ゼイル、翔、学、育也、透矢の5人がやってきた。

翔「なんでスキー場で手合わせなんてしてんだ？雪の中の手合わせなんざ公園でもできるだろ？」

…足し蟹。

咲子「…なんとなく？」ドーン

メイ「ですな」ドーン

風鈴「だね」ドーン

3人『他に理由はない(です)！』ばーん

透矢(コイツら3人で三馬鹿みたいになってないか…?)

ルマ「…ゼイルと咲子で！」ピシッ

このタイミングでルマが相手を決めた。

…いやいや今?(お前が言う立場じゃないだろ)

ゼイル「…何の話だ？」ポカーン

咲子「実はね…」

182秒後1

ゼイル「なるほど。なら、せっかくスキー場にいるんだし、スキーをしながら戦わな

いか？」

ルマ「スキーで戦う…スキーバトル？」

ゼイル「命名するならそうなるな」

祐樹「おいおい待て。ルマはリハビリ中なんだぞ？そうカンタンにスキーなんてできるかよ…」

翔「…ソレについてはいい案があるぜ？」

4人『？』

パキツ…

翔は氷で…車椅子用のスキーを作った。

祐樹「あ、なるほど。そうすればいいのか」

ゼイル「影で強化しておくか」ズツ

咲子「んじゃ、早速準備しましょ」

—————

—————

—————

—————

—————

そして、雪山ならぬ雪丘の頂上で私とゼイルのペアとルマと祐樹のペアが並んでい
る。

メイ「先にふもとにペアの2人が着いた方の勝ちです。用意……………スタート！」

ビシツ

ドツ！

4人『うおおおおお！』バツ

ズサササツ！

翔「は、速え…」

風鈴「おお、私といい勝負するんじゃない？」

ズシャーッ

咲子「今はできるだけスピードを出して、まずは差をつけるべきね」

ゼイル「だな…つと、そう言ってるヒマもないみたいだぞ。横を見ろ」

ゼイルにそう言われて横を向くと、ルマが骨を構えてこちらを向いていた。

攻撃をするつもりね。

ルマ「クロスボーンV4！」ババッ

うわっ、しかも物理攻撃…完全に邪魔をするつもりね。

咲子「分解火桜改」スツ

シユウウウ…

私はルマの骨をその場で分解した。

物理攻撃はコレで対処できるわね。

ルマ「むむつ…（次仕掛ける技を溜めておかないとね…）」

咲子「このまま突っ走るわよ！」

ゼイル「おう！」

ビユウウン！

Yとサーフィン

side 桜木咲子

ビュウウン!

雪の丘を滑り抜ける。

ルマ「……………」ギユウウン

咲子「…?」

ルマはずつとこちらを見ながら、赤いエネルギーを手に溜めている。色からしてXブラストだろうけど、チャージが長いわね……………まさか。

咲子（強化版…?）

ゼイル「どうした、咲子?」

咲子「ルマが恐らくXブラストの強化版を撃つつもりよ」

ルマ（え、バレた!?!）ビクッ

祐樹（いつバレた!?!）ビクッ

揃いも揃って焦ってるわね。バレバレよ。

ルマ「そ、その通りだよ!くらえ!」バツ

…こんな出し方でいいのかしら、新技って？（メタい）
ルマ「Xの次は、Yなのさ！…Yプラスト！」

ギユイイン！

XからYに変わった濃い赤の光線が飛んでくる。

咲子「ツ…（このエネルギー、さてはリハビリがてら新技開発してたわね！）結界流しV3！」ギユン

…ズドツ！

咲子「ガハツ!?」ヨロツ

私は体勢を崩してしまった。

今の技…威力で言えばジ・インフェルノに匹敵するわね。

ゼイル「咲子!？」

ルマ「へへっ、お先！」

ビユウウン！

ツ、先に行かれたわね…

咲子「ゴメン、技の威力を見誤ってたわ」

ゼイル「謝らなくていい…それよりもルマ達に追いつくぞ」

咲子「ええ」

ドツ！

—————

—————

—————

———

！

祐樹「今のうちに距離を稼ぐぞ！」

ルマ「うん！」

…サツ

咲子「…なんて、できるとでも？」

2人『速っ!』（。D。）

ゼイル「風で加速したからな」

ルマ「むっ…（そういえばその手があったね）」

祐樹「だが、俺達は追い抜かせねえよ！サンダーパンチ改！」バチツ

ゴオツ！

祐樹が拳に雷を纏い、ロケットパンチのようにソレを飛ばした。

ゼイル「…咲子、ちよつと飛ぶぞ？」

咲子「えっ?…わっ」バサッ
キュイン

ゼイルと私の足元に風が集まり、その影響で私達が少し宙に浮く。

ゼイル「攻撃を避けて、いつきに突っ走るぞ…とうっ!」
ドッ!

ゼイル「エアライド改め…ミデアサーフ!」バツ

突然、突風が巻き起こり…

ズドオン!

私達は圧倒的スピードで吹っ飛んだ。

咲子(キヤアアア!?)

何コレ!?

2人『ファツ!?(。D。D。)

ゼイル「うおおおっ!」

…ん?

スイーツ(雪を滑る音)

咲子「雪、ちゃんと滑ってるわね」

飛んでると思っただわ。

ゼイル「滑ってるというか、ギリギリ触れてるだけだな。触れてなきやもはやスキーじゃないだろ？」

咲子「そうね…お、ゴールよ」

ルマ「…あ、しまっ」

ブチツ

翔「ゴール！勝者は咲子とゼイルだな」

祐樹「…なあ、ルマ」

ルマ「…うん」

2人『Yプラストで加速すればよかった…』しよぼーん
…確かに、ソレだと多分私達が負けてたわね。

カニ鍋、美味しいよね

side 桜木咲子

スキーパートルに勝った後、私達は建物に戻った。

咲子「そういえば、アンタ達はどこに行つてたの？」

ゼイル「ある場所でノーマンさんに会つて、任務の手伝いをしてた」

…こんな短時間で？

咲子「そ、そう…」

ウイイイン

「クエエ〜」フラッ

そこに自動ドアを通つて疲れ切つたペンギン達が現れた。

翔「おつ、お前ら。楽しめたか？」

「クエツ！」

風鈴「ん〜、そういえばもう6時になつてるね。そろそろ帰る？」

透矢「ああそうしよう、俺は疲れ〜「透矢にはきいてないよ？」…（俺の扱いひどくね…？）」

クミ「帰ろっか、最強のあたかも流石に疲れたし」

メイ「俺も賛成です」

風鈴「じゃ、帰ろう！…あ、ついでにどこかで食べてく？」

咲子「そうね…カニ鍋とか「よしソレで！」…即答ね」

風鈴「美味しいなら何でもいいからね！」グツ

うん、アンタならそう言うと思つたわ。

—————

—————

—————

—————

—————

ぐつぐつ

目の前で蟹や野菜が入った鍋が煮えている。

祐樹「おお…！」

学「何というか…雰囲気があるな(？)」

育也「何ソレ…」

風鈴「……………」じっ

風鈴はじっくりと鍋の食べ物を取るタイミングを観察している。
ぐつぐつ

風鈴「(3、2、1…) …今だ！」サツ
バツ…!

咲子「おつ、タイミングが来たのね」スツ

風鈴「はむっ…」パクッ

風鈴はソレを一口頬張り…

風鈴「…美味しいツ！」パアア

その表情は喜びに満ちた。

咲子「んむっ…美味しいわね。ゼイル」

ゼイル「？」

スツ

咲子「あーん」

風鈴「!? (ココでするの!?)」ビクッ

ゼイル「あむっ…美味しいな。俺も取るか」

その後美味しく頂いたとき。

1

――

――

――

――

side 梅野風香

妹とその友達は今朝スキー場に行ったのだが、未だに帰ってきていない。

風香「：電話するか」スツ

ブルルルル：ガチャッ

風鈴『もしもし、姉さん？何かあったの？』

：特に何事も起きてないようだ。

風香「もう8時だぞ？スキー場は既に閉鎖してるハズだが：何処にいるんだ？」

風鈴『カニ鍋店で食べてるよ。後ちよつとで食べ終わるから8時半前には家に着くよ』

よ

風香「カニ鍋？ああ、北海道料理を楽しんでるのか。分かった、気を付けて帰れよ」

風鈴『母さんか！』

ツーツ：

風香「いや、私は別に母親じゃないのだが：？」

言い方が悪かったのか？

風香「まあいいか、両親にはあまり会ってないから私が親代わりになってしまうのだらう」

私と風鈴の両親は苦小牧に住んでいるが、輪花から遠いので私と風鈴はココに引っ越した。

風香「ラーメンでも食べて待つておくか…」

帰りを付いてくる風鈴

side 桜木咲子

カニ鍋を食べた後、私達は風鈴の家に帰ってきた。

ピンポン…ガチャツ

風香「おお、やっと帰ってきたか。楽しめたか？」

風鈴「うん！」どーん

風香「…お前じゃない、お前の友達に聞いているんだ」

でしようね。

咲子「はい、楽しめましたよ」

風香「ソレはよかった。上がってくれ、布団はもう敷いてあるぞ」

—————

—————

—————

—————

—————

部屋は昨日と同じ。

なんか風鈴が、

風鈴「透矢はちやあんと私の隣に寝てね♪」ゴゴゴ

…なんて言ってたから、まさかとは思った。

透矢は犠牲になったのよ…生きてるけど。

んで今は。

コロコロ…

『1』

ルマ「えくっ!?」スツ

トンッ

寝るには早すぎる時間だったし、なんかすごろくをしている。

咲子「次は私ね、よっ」ポイツ

コロコロ…

咲子（エネルギーでちよつと動かす！）スツ

→イカサマじゃねーか！

…ピタッ

『6』

咲子「よし」スツ

トンツ（x6）

そしてその2時間後、私達は寝た。

↓

↓

↓

↓

↓

次の日…その昼頃。

私達は新千歳空港にいた。

咲子「風香さん、2日泊めてくれてありがとうございます」

風香「お礼はいらないさ…これからも風鈴をよろしく、な？」

咲子「はい！」

風鈴「……………」

…ん？

メイ「どうしたんですか、風鈴さん？」

すると風鈴はハツとした表情になり。

風鈴「…私も行く！」

…と言った。

全員『はあ？』

何言ってるのこの子？

透矢「おい風鈴、どうやってついていくんだ？お前は飛行機に乗れないんだぞ？」「天使化して行く」…あつそすか」

うん、知ってた。…でも飛行機のスピードって確か時速300キロぐらいよ？

咲子「アンタは時速何キロで飛べるのよ？」

風鈴「確か…後ちよつとで音速だよ？」

…あ？

翔「ジェット機かよ…」

風鈴「風の天使は伊達じゃないのさ！」ふんすつ

透矢「ソレってもはやスピードの天sh「ちよつと黙っててね？」…あつはい」

咲子「…はあ、分かったわ。福岡空港で現地集合ね？」

風鈴「オーケー！」グッ

風香（ホントに行くつもりなのか、この妹は）

↓4時間後、福岡空港↓

飛行機に乗ってる途中で窓からのぞいてくる……なんてことは流石になかったわね。

(お前は風鈴を何だと思ってるの!?)

私はそう思いながら自動ドアを出る。みんなは私の数歩後ろにいる。

「あ、いた!」

……スタツ

その時、私達の前に……

風鈴「ハロー」パクッ

九州限定のアイスであるブラックモンブランを食べている風鈴がいた。

全員『……マジか』

ほぼ確実に先回りしてアイスを買ってきたわね?

咲子「アンタ、そんなにヒマなの……?」

風鈴「うん」

全員『でしようね!』

じゃないとわざわざ北海道から福岡に飛んで来ないわよ!

2年3学期 2年3学期、始まる

♪MULAストーリー — 日常。V3

side 桜木咲子

毎日北海道と福岡を往復する風鈴に少し引きながら過ごした数日後。

私達は花町高専で雑談していた。

咲子「いやあ、冬休み長かったわね」

メイ「えっ？2週間しかありませんよ？大した期間じゃないハズですが…」

咲子「いや、なんかこう…リアルで8か月経つてるといっか…」

(メタい！)

メイ「は、はあ…」

…まあ、メタい話は置いといて。

咲子「明日のバトルデー、誰と戦うつもりなの？」

メイ「俺ですか？…そうですね、戦う機会としては最後だと思うので坂田日和先輩です
すね」

ふーん…

咲子「じゃあ私は出夢先輩と戦おうかしら。今年は1学期のタッグ戦ぐらいでしか戦ってないし。…確か、留美は日和先輩の弟である未例先輩と戦うつもりだったわね」

メイ「3年1位のですか？なるほど…」

咲子「…あ、そうだ。ゼイル、アンタは誰と戦うの？」

ゼイルを呼び、対戦相手を質問する。

ゼイル「決まってないな。挑戦されたら受けるが」

…ひよこっ

レイン「私はまた花先輩と戦うよ」

何処からともなく現れたレインがそう言った。

咲子「悪魔化を習得したんだし、まあいいんじゃないかしら？」

レイン「うん、今度は勝つよー！」

おお、かなりやる気ね。

—————

—————

—————

—————

1
そして、次の日。

千早『さあ、始まりました、3学期バトルデーッ!』

ワアアアアッ!

周りから歓声が聞こえてくる。

千代『今回のバトルデーで注目すべき戦いは、

2年1位『3代目桜』の桜木咲子vs4年1位『重力魔』の室見出夢、

2年2位『剣豪』の室見メイvs5年1位『闇炎』の坂田日和、

2年3位『影風』の飛羽野ゼイルvs1年2位『岩拳』の小倉勝、

2年5位『炎魂』のレイン・キサラvs4年2位『毒腕』の藤崎花、

1年1位『紅魔』の赤坂留美vs3年1位『光砲』の坂田未例。

この5戦です!』

…ん、ちよつと待って?

咲子「留美」

留美「なんですか、先輩?」

咲子「アンタの異名、なんで『紅魔』なの?」

悪魔化と全く同じ名前じゃない。

留美「ああ、ソレですか。火属性を使う時ソレが紅色に染まってるのと、悪魔化した姿がコウマだからですわね」

咲子「ふーん……」

紅色の炎つて、ストロンチウムでも使ってるのかしら？

(炎色反応じゃねーよ)

…あと、花先輩の異名が『毒手』から『毒腕』になってるわね。

未例先輩の異名『光砲』も気になるわ。

千早『さあ、そろそろー戦目！』

お、そろそろ出るわ。

咲子「またね、留美」

留美「はい……お互い勝ちましょう！」

咲子「……フツ、えええ！」

そして私は戦鬪場に出た。

久々の1対1！咲子vs出夢①

side 桜木咲子

スタスタ

千早『先に出場したのは3代目桜の桜木咲子選手〜!』

千代『ヤクザや不良をボコボコにした桜木選手は、一体どのように強くなったのでしょうか!』

ワアアアア!

「えっ、あのヤクザどもをぶっ飛ばしたのって3代目だったのかよ!」

「3代目すげえ!」

…ああ、そういえばそんな事してたわね。

スタスタ

出夢「……………」ニヤリ

前方から出夢先輩が出てきた。

千早『次に出場したのは重力魔の室見出夢選手〜!』

千代『2学期で3代目と同格の剣豪を倒した室見選手。果たして3代目に勝てるので

しようか!?!』

ワアアアア!

「今度こそ勝つてくれ〜!」

「そういえば1年ぶりだったな、3代目対重力魔って」

私と出夢先輩に対してそれぞれ歓声が聞こえてくる。

千早『この戦いを見どころだぞ、とくにご覧あれ!』

千代『1回戦……開始ッ!』

咲子「……!」

出夢「……!」

……ドツ!

私達は同時に地面を蹴り……拳をぶつけ合った。

ドゴオオオ!

『……!』

辺りに衝撃波が広がる。

……一瞬先輩の重心がズレたわね。

咲子「真炎天掌!」バツ

ズガアン!

出夢「ぐうっ……！（くっ、重心がズレた瞬間を狙われた……）……ッ」サツ
先輩は一旦距離を取り、手を地面に置いた。

出夢「吹っ飛びなよ……暴風！」ズツ
ビュウウン！

確か風鈴は暴風改だったわね……と思いつつながら、私はその技に対応する。

咲子「真千手観音！」ゴオツ

……ドスッ！

千手観音を出し、手を地面に突き刺すことで風に吹き飛ばされないようにし、それに紛れて手……ではなく指を分解する。

シユウウウ……

風が止む。

出夢「まさかびくともしないとね……神重力球！」バツ

ズドドツ！

青紫色の弾幕が飛んでくる。やっぱり弾幕戦法で挑んでくるのね……

（予想してたん？）

咲子「ま、んなモン完封するけど！分解火桜！」バツ

パラッ……

私が出す白い桜に触れた弾幕は分解され消滅する。

出夢「何っ!?!」

咲子「分解火桜を破れるのは…それを上回る威力だけですよ」

誰もが知っているであろう事実を言う。

…あ、知ってるの私だけか。

出夢(今思うと、咲子の能力はかなりチートじみたものになってるね…どうする…?)

咲子(考えこんでるようね、隙あり!) ドツ

…ギョーン!

咲子「真マキシマムファイア!」 ボツ

ギョウウン!

出夢「ツ…(考えるのは後のようだね) …重力・ザ・ハンド!」 スツ

…ドゴオオン!

咲子「…うそーん」

割とあっさり防がれたわね。

出夢「舐められちゃ困るよ…伊達に鍛えなおしてないのさ」

…確かにそうね。2学期でメイに勝ってるし、油断はできないわ。

咲子「ま、私こそ舐められちゃ困りますよ」 スツ

私は分解した指を出夢の後ろまで動かし…火を出す。

咲子「フレイムバレット」ボツ

…ダンッ！

激闘!咲子 v s 出夢②

side 桜木咲子

咲子「フレイムバレット」ポツ

ダンツ!

私は分解した指から火の弾丸を放つ……しかし。

出夢「…フツ」ニヤリ

…ドスツ!

咲子「!？」

弾丸は出夢先輩に当たらず、地面に当たった。

出夢「こんな事もあるうかと、僕は自身の周りの重力を強くしている…その作戦は効かないよ？」

咲子「ツ…」

手を分解して炎天掌を撃てばよかったわね…

出夢「じゃ、次は僕の番だ。絶グラビティスラッシュユ！」ギユン

ギユオンツ!

能力を纏った飛斬撃が飛んでくる。絶に強化されてるわね。

咲子「跳ね返す！ グランドファイアG3！」ボツ

ギユウウン！

咲子（（（（（出夢

カウンター成功！

私の技の威力を上乗せして飛斬撃が出夢先輩に向かつて飛ぶ。

出夢「威力が足りなかったか……」バツテンスロウV3！せいせいせいッ！」ドツ

シュバツ……ドゴオ！

咲子（あっさり対策されたわね……）

うーん……一気に倒すのが得策だけど、先輩も悪魔化ができる。それと、恐らくだけど先輩は新技を隠している。

咲子「（様子見ね）ジ・インフェルノV2！」ドゴツ

ゴオオオオ！

小さな獄炎を蹴り飛ばす。

出夢「重力・ザ・ハンド！」ズンッ

シュウウウ……

しかし先輩に止められてしまった。……もっと威力を上げないと様子見ができないわ

ね。

咲子「なら…コレね！」ダッ

ギユイイン!

出夢(通常状態での最強技は…天空落としか。なら…)

咲子「天空…落とし! V3!」ドガッ

ギユオオオ…!

夕焼けが先輩に向かって降りそそぐ。

出夢「(予想通りだ!)…ハッ!」バツ

ギユイイン!

咲子(新技ね…!)

ドゴッ

先輩は能力を拳に纏い、地面を殴る。

出夢「ヘビイドーム!」ズドオ

ドバツ!

すると青紫色のドームが先輩の前に噴出した。

…イジゲン・ザ・ハンドや結界流しから着想を得たのかしら?

ギユルルル!

私の天空落としV3はそれによって受け流される。…かなり威力が高い防御技ね。

咲子「…流石ですね、先輩。まさか天空落としを受け流されるとは」

出夢「君こそだよ。本来この技は変身した後に使うつもりだった…」

…なら。

咲子「ならば…今、そうしましょうよ。天使化！」

出夢「ソレもそうか…！悪魔化！」

カッ！

私達は同時に変身した。

シューウウ…

咲子「結界の天使、アンヘル！」

出夢「逆さの悪魔、ネロイズム！」

ドドドドドドドド

辺りの空気がピリピリしている。

咲子「超烈焼脚！」ドツ

出夢「暴風…拳！」ビュン

…ドゴォ!

通常状態の数倍の威力を持った衝撃波が発生する。

「うおっ…!」

「何だこの衝撃波?!」

…ドシヤッ

その衝撃で私達は弾かれ、少し距離が離れる。

咲子「…フッ」

戦いはこれからよ!

ドゴドゴドゴオ——z——ッ!

「やべえ…なんだあのスピード!」

「俺悪魔化できるけどああはならんぞ?!」

咲子「ウラァ!…ガハッ」バゴオ

出夢「否定ッ!…グフッ」ズドオ

お互いの拳が顔に突き刺さる。

ヨロッ

しかし体勢を崩さず、その場に立つ。

咲子（ラツシユの威力は互角…といった所ね。なら…）サツ

先輩から少し距離を取り、私は…

咲子「ハッ…!」ギユン

左手に天空掌、右手に炎天掌を発動する。

咲子「1人版…炎空大掌!」

…ドゴオン!

ギユオオオオ!

赤い台風が先輩に向かって突き進む。

「マジか、今やるのかよ!」

「デケエなおい…」

出夢「…!? (後隙を狙われた!?) 重力・ザ・ハンドオ!」バツ

ドギユウン……パキッ

出夢「なっ…」

…パリイン!

出夢「ぐわああッ!」バゴオ

ギユルルル!

赤い台風は後隙を突かれた先輩の防御を貫通し直撃した。

…コレ、後隙突かなくても当てられたわね、クリムゾンハリケーンは威力がバカみたいにあるし。

ただ…先輩の様子を見るにあまりダメージを受けてないわね、なんでだろ?

出夢「グッ…まさか後隙を狙われるとはね、君の策に嵌ったようだ」ヨロツ

咲子「ソレを食らってあまりダメージを受けてそうですか?」

出夢「当たる直前に重力で威力を下げたのさ。危なかったよ」

咲子「…なるほど」

てか、先輩ってかなり技への対策が速いわね。ソレ程警戒されてるって事かしら？

C—MOON!咲子 v s 出夢④

♪桜咲く。 — 花町

side 桜木咲子

咲子「かなり警戒されてるし、そろそろ私の体力も限界が近づいてるわ…なら）スツ
憑依を…」

出夢「…?（もしかして憑依をするつもりかい?）させないよ!」ドツ
ツ、もう気付かれたわね…?!?

出夢「突風蹴り!」ビュン

ドゴオ!

咲子「かはっ…!」

先輩の突風のような蹴りが私の腹に命中し、私はソレに驚いてしまった。
今の蹴り、ギリギリ見えるぐらいのスピードだったわ…音速に近い。

出夢「奇襲用にとっておいた技だよ、驚いたかい?」

咲子「ツ…ええ、驚きましたよ…でも」スツ
ギユン!

咲子「憑依の邪魔は失敗ですね…憑依…竜美!」カツ

…ドオン!

私の髪色は赤みがかかり、黒い竜の角が生える。

(最近やつと竜咲子のデザイン作った)

出夢「ツ…(数発入れた方が良かったようだ…)」

咲子「ハッ!」バツ

…ギユイイン!

咲子「ドラゴン…スレイヤー! V2!」

ドギユウウ——z——ン!

出夢(この威力…使うしかないね)

オオオオ…

咲子「…?」

「おいおい、出夢は何やってんだ!」

「当たっちゃもうぞー！」

光線は先輩に向かっていているのに、先輩は防御する素振りを見せない。

出夢「……………今だ！」スツ

…ヒユウウン！

先輩は光線を避けた……………いや、天井に向かって”落ちて”避けた。

…さらに。

咲子「!?」フラツ

私は…壁に向かって落ちていく。

先輩の重力を操る能力によるものね……………！

出夢「本来僕は重力の方向を1つにしか指定できなかつたが…鍛えることで複数指定できるようになったのさ。今、この戦闘場の重力はあべこべになっている。名付けて…C—MOONと言った所かな？」

(元ネタ：ジョジョ6部)

あ、ジョジョ読んでたのね。

咲子「なら、重力の影響がない攻撃を…炎空桜舞・竜！」シユバツ

ズドドドツ!

竜のエネルギーを纏った火桜が咲き乱れる。

出夢「(やつぱりそう来たか!)ヘビイドーム!」ドギユン

ギユルルル!

咲子「ツ…」

私の作戦を予想していたのか、あつさり防がれてしまった。憑依はしたけど、ドラゴンスレイヤーV2を撃って避けられても意味ないし……

咲子「(竜星群を使うしかないのかしら)突風蹴り!」…!?」サツ

ドゴオ!

さつきとは段違いのスピードで蹴りが飛んできた。今のは見えなかった…声を聞いた瞬間避けたけど。

出夢「避けられるとは…見えたのかい?」

咲子「いえ、全く」

出夢「(見えてなくて避けられたのか…)…ま、いいか。よっ」スツ

…スタツ

先輩は私が経っている壁から跳び、床に着地する。

…慣れてないから違和感しかないわね。

決着!咲子vs出夢⑤

♪ Under tale Last Breath Inc. UST | Pha
se 38 : S A S T E R B A T I O N

side 桜木咲子

出夢（流石に僕の体力も限界に近いようだ…そろそろ決着を付けるべきだろう）スツ

咲子「ツ…!」

また突風蹴りが「突風…」

バゴオン!

咲子「ガフツ…!?!」

出夢「…蹴り!」

先輩の蹴りは文字通り音を置きさりにして私の腹に命中した。

メリイ

骨が折れた音がして…

ヒュン…ドゴオ!

私は天井に激突した。しかも重力の方向がおかしくなっているので落下ダメージも受けている。

咲子「(まずはこの重力をどうにかしないと……!)グツ……ガサツ
出夢「まだ戦意はあるようだね……」

「おい、こりやどうなっちまうんだ?」

「ざつきまで3代目が押し気味だった……」

咲子「……いや」

重力は、元々気にしなくてよかったのよ……!

出夢「重連拳!」ドツ

咲子「エンバーラッシュユ!」バツ

ドゴドゴドゴツ!

咲子「(対策法は思いついた、後は実行するだけ!)ハアツ!」

ズドツ!

出夢「くっ……!」

拳にエネルギーをさらに纏い、一発を先輩のパンチ以上の威力にする。

その隙に…

咲子「超烈焼脚！」ボツ

仕返しとばかりに先輩の腹に蹴りをブチ込んだ。

バゴオ！

出夢「かはつ…！」ズサツ

おかげで先輩を怯ませ、遠ざけることができた。

やっと対策ができるわね…！

咲子「ハアアアツ！」

ゴオオオオオ！

私は必殺技…竜星群を発動するためにエネルギーを溜める。

出夢「ツ、させないよ…突風「空中分解G3イツ！」蹴り…!?」フツ

早めに回避技を発動し、突風蹴りは私を通り抜けた。

…よし、チャージ完了！

咲子「必殺…竜星群！」

ギユオオオオオ——ズ——ンツ！

竜のエネルギーを纏った隕石が全方向に降り注ぐ。

出夢「ヘビイドーム…重力・ザ・ハンド！」バツ
ドギユウン！

しかし先輩は負けじと抵抗していた。

出夢「ググツ…！うおおおッ！」ギユン

シユウウウ…！

咲子「…!？」

私の技は止められそうになっていた…でも！

咲子「私は、負けない！ドラゴンスレイヤーV2ウウウ！」

ギユオオオ！

重力が影響しない光線をさらに上乗せした。

出夢「何ッ!？」

ドシユウ！

出夢「ガハッ…！」

ドサッ

隕石と光線は先輩に命中し、そのまま先輩は倒れた。

出夢「……………僕の、負けだ」

咲子「……………」

『試合終了!』

千早「一回戦はッ!桜木咲子選手の勝利だああッ!」

千代「かなりの接戦でしたね!」

千早「勝利した桜木選手と、大健闘をした室見選手に歓声を!」

『ワアアアア!』

「凄い!凄かったぞお!」

「俺、入学してよかったぜ……………」

咲子「…フッ」

なんとか、勝てたわね…

出夢「くっ、立てないや…」

咲子「先輩、手伝いますよ」

出夢「ありがとう、でももしたら花が黙ってないから……………先に戻ってよ」

咲子「あ、はい」
私はそのまま控え室に戻った。

剣豪と闇炎!メイvs日和①

side 室見メイ

千早『さあ、次は二回戦だあ!』

千代『今回の戦闘では特殊ルールが設けられております!』

ざわざわ

「特殊ルール?」

「多分剣豪関連じゃね? 確か多重人格だし」

「あ、確かに」

その通り、俺に向けて特殊ルールが設けられています。

千早『それでは出場!』

千代『まず出てきたのは今年の3月で卒業する、『闇炎』坂田日和選手!』

ワアアアア!

「日和様〜!」

「勝って有終の美を飾ってくれ〜!」

メイ「…そろそろ出たらどうです?」

「だね、行ってくるよ」

スタスタ

千早『次に出てきたのは…おっと、早速ルールが始動！室見クミ選手だ〜！』

クミ「ハロー〜」

千代『ここで特殊ルールの説明をします。室見選手が多重人格である事を考慮し、場外や降参、気絶で敗北という条件をそのままに人格は1人出場させ、交代可能とします
！』

うおおおお！

「なるほど、そう来たか！」

「ポケモントレーナーみたいだな…」

「5体1だったら流石に一方的になりそうだしね」

納得している人が多そうですね、俺自身1対多は結構不公平だと思ってましたから。

ザッ

日和「なるほど、アホの子が先ね？」

クミ「むう、あたいはアホじゃないぞ！最強なんだぞ！」

観客（あ、この子アホの子だ）

メイ「…はあ」パシッ

(額に手を当てる)

千早『それでは、二回戦…開始ッ!』

side 室見クミ

クミ「…よし」フラッ

日和「?」

狙いは定めた…斬る!

クミ「真斬一閃」スッ

日和「えー」

ス パ ア ン !

日和「ッ…」サッ

あちやあ、避けられちゃった。

日和(何この子、さっきの動きがほぼ見えなかったわよ!?)

クミ「次は当てる!」スッ

日和「ッ、絶月夜桜舞!」ヒュン

ん、弾幕?

クミ「ならあたかも。神雷天落桃！」 B L O O O O M !
シユウ：

あたいの弾幕で相手の弾幕は相殺できた。

クミ「絶ニードルハンマー」バチツ

ドツ！

日和「今度はパンチね？」 シャドーフューリー」ゴオツ

…キイン！

あたいの攻撃は何かによって弾かれた。

クミ「闇の、剣…！」 サツ

スタツ

前咲子と戦った時、変身してから使ったハズ…でも変身しないと使えないとは限らないし、まあいつか。(よくない)

日和「私は剣で、君は刀。どちらが強いか試してみない？」 スツ

剣と刀の戦い？

クミ「え、普通に嫌だけど」

日和「…はい？」 ポカーン

クミ「刀だけじゃ全力は出せないからね」スツ

あたいは構えを取り…日和先輩に向かって走る。

バチツ

足に雷を纏い…あたいは強烈な飛び蹴りを繰り出した。

クミ「電凸撃！」ヒユン

日和「(速い!) ハアツ！」シユツ

…バキツ

あたいの蹴りは先輩の剣を折り…

日和「えーぐあっ…！」ヒユン

バゴオ!

そのまま先輩の腹を蹴って吹っ飛ばした。

連戦！メイVS日和②

side室見クミ

クミ「よしっ！」グッ

いい感じに蹴りが入った！

日和「くう…今のは痛かったね…！」

クミ「ふふっ、そうでしょ？あたいは最強！」ふんすっ

日和（あ、この子やっぱアホの子だ）

クミ「さて、と。よっ！」ピョン

あたいは空中に跳んだ。

日和「…？（もしかしてまた？）」スッ

クミ「空中から…電凸撃！」バチッ

ヒュン！

日和「闇結界！」ゴッ

…バキィ！

結界なんて突き破っちゃうよ!

日和「ツ……!」サツ

バゴオ!

クミ「あちゃあ、避けられた……真斬一閃!」カツ

ス

パ

ア

ン

!

日和「うわっ!」キイン

あれ、ちやつかり防がれちやつた。

クミ「うーん……」

日和「?」

……よし!

クミ「交代!」

日和「……は!?! (あっさりすぎない!?!)」

スタスタ

クミ「よっ」スタツ

あたいは場外に出た。

メイ「お疲れ様です、クミ。休んでいいですよ。さて、次は…」

ヤエ「あたしがやるさね」

メイ「…分かりました、ヤエで」

千早『おっと、次はヤエ選手のようにです！』

千代『ちまちまダメージを与えて倒す作戦ですかね？』

side 室見ヤエ

日和「今度は…オカン？」

ヤエ「そんな事ないと思うけど？」

日和「…ま、いつか。(さっきは翻弄されたから、今度はきつちりダメージを与えておかないと!)」ヘルフレイム：Z!」ボツ

ゴオオオオ!

…うわ、でっかい火球だね。

ヤエ「アスタリスクロックG2!」グツ

…ドゴツ!

六つの大岩が火球にぶつかるところ…しかし。

ガキイ!

砕かれてしまった。

ヤエ「…でも、ココで止まるあたしじゃない!極イジゲン・ザ・ハンド!」ギユン
ギユルルル!

日和「…おお、止めちゃったか」

ヤエ「あたしは技がやや防御よりなんでね」

日和「ふーん? (ならクミちゃんみたいに翻弄される事はないかもね)」スツ

ヤエ「…!」

…その構え、月夜桜舞だね。

ヤエ「(今の内に対策を)」煉獄パンチ改!」な…グウツ!」ドゴツ

ズサツ

危ない、咄嗟にガードしてなかったらモロにくらってた…!

日和「私の構えを見て対策しようとしたでしょ?視線でバレバレよ?」

ヤエ「くっ…」

慣れない事をするんじゃないか。

ヤエ「神曇天椿舞！」 B L O O O O M !

日和「絶月夜桜舞」 シュバツ

シュウ…

椿属性の技を使うも、あっさり相殺されてしまった。

ヤエ（やつぱり防御寄りね、あたしは…）

日和「どうするの？このままじゃ防戦一方だよ？」 スツ

ギユン

そう言いながら先輩は闇の剣…シャドーフューリーを出した。

ヤエ「…ツ、あたしでも」

攻撃はできるんだ…！

ギユウウン

あたしは岩に椿属性のエネルギーを纏わせながら、攻撃の隙を伺った。

椿砲!メイvs日和③

side 室見ヤエ

ヤエ「…………ツ」

先輩を観察しながら攻撃の隙を伺うけど、中々隙がない。

日和「とうっ!」ドツ

そう思ってたなら、先輩が剣を構えて斬りかかってきた。

ヤエ「命命斬り改ッ!」ギユン

…キイン!

ヤエ「んぬっ…!」グッ

日和「へえ…?」ググッ

フワッ

岩はあたしの背後に浮かせ、攻撃は刀で受け止めた。

ヤエ「ハアッ!」ギユン

日和「おっと…」フラッ

スタツ

…ツ、体勢は崩せなかつたね。

日和「ところでさ…」

ヤエ「？」

日和「さつきから君の背後に浮いてるその岩…何なの？」
うん…そりや気になるね。

スツ

ヤエ「新技に使うモノです」

日和「新技？…使ってみなよ」ザツ

ニヤニヤしながら挑発する先輩。…後悔するよ？

ヤエ「いいでしょう…！」グツ

ギユルルル…！

あたしは岩に椿属性のエネルギーを集中させる。すると…

パアアアア！

岩は光りだし、粒子のようになっていく。

日和（見るからに光線系だね…私も避ける準備をしないと）グツ
…シユツ

チャージ完了!

ヤエ「くらえ…!」

もくしゅんせきほう
木春石包!

ハアアアツ!

ヒユウウン!

岩の小粒が渦巻く光線を発射する。

日和「モーニングドーンG2!」キラッ

ズドオン……ピキッ

日和「急」

あたしの攻撃は先輩の最強防御技をあっさり破り…

バゴオ!

日和「グハツ…!」ドサッ

先輩の全身を痛めつけた。…上手く行ってよかった。

ヤエ「ハア、ハア…」

体力を使いすぎて息が少し上がっている。

ヤエ「交代！」

メイ「凄い技でしたね、さっきの…至近距離で命命斬り改を当てた威力に相当するでしょう」

「細かいわね…」

メイ「あ、次はナオですか？」

ナオ「ええ、久々の出番よ（メタい）」

千早『次はナオ選手だッ！』

千代『連戦で坂田日和選手は体力が減っていますが、果たして勝てるのでしょうか!?!』

side 室見ナオ

ザッ

日和「体力が減ってる、だってね？」

ナオ「実際はどうなんです？」

日和「まあ…3割ぐらい減ったね。君達は？」

ナオ「そうですね…クミは5割、ヤエは8割減ってるので…全体的に2割6分ですね」
日和「そっか、じゃあ君達の方が少し優勢だね。私が油断してたのもあるけど。でも…」グツ

ドドドドド

先輩からドツと威圧が出た。私は気圧されないけど、辺りはピリピリした空気になる。

日和「ココからは、本気を出させて貰うよ?」

ナオ「…受けて立ちます」

日和「まずは私の新技を…ハアツ!」ギユン

先輩から闇が溢れ出し…ソレが先輩を包み込む。

ナオ(まるで鎧ね…)

日和「常闇ノ鎧…!」ドン!

先輩の外見は、西洋の騎士のような恰好になっていた…

落炎の桜！メイVS日和④

side 室見ナオ

日和「…さて」スツ

先輩は闇の剣を構えて…

フツ

その場から消えた…いや、後ろ！

日和「遅い！」シャツ

ナオ「ツ…！」サツ

さつきまでと比べてスピードが格段に上がってる…！

ナオ「マキシマムファイア改！」ボツ

ドギユン！

炎を足に纏って地面を裂く。しかし先輩は…

日和「せいっ！」キンツ

シャキン！

剣でソレを跳ね返した……は!?

ナオ「ツ、ゴツドキヤツチG4!」ガシツ
シユウウウ……

まさか跳ね返されるとはね。

日和「フンツッ!」ドツ

ナオ「ツ……!」スツ

……キイン!

剣と刀がぶつかり、衝撃波が出る。

日和「……ていつ!」バツ

ナオ「とうっ!」シヤツ

キンツ、キンツ……!

……今だ!

ナオ「神炎天桜舞!」B L O O O O O M!

日和「絶月夜桜舞」シヤツ

ドシュツ!

私の弾幕はあつという間に先輩の弾幕にかき消され：

ナオ「ぐうつ…！」ドスツ

やっぱり、威力が足りないわね：

日和「そこっ！」バツ

ナオ「命命斬り改！」ギユン

キイン!

ナオ「流石にやられてばっかりじゃ…たまりませんからね！」バツ
威力が低くても、工夫次第では何とかなる!

ボツ

ナオ「烈焼脚…！」シユルル

空中で何度も回転を掛けながら先輩を狙ってかかと落としをする。

日和「モーニングドーンG2」バツ

…ピキツ!

先輩は咄嗟に防御をし、ソレにヒビが入るだけで済んだ。

ナオ「…チツ」スタツ

…まだ工夫が足りないわね。もうちよつと何か捻らないと。

ナオ「……………」

日和「(あら、隙だらけね?) …!」ドッ

ッ、来る!

ナオ「真斬一閃!」

ガキイ!

日和「あつ…」ボキッ

先輩の剣を折った。でもどうせまた生み出される…だからその前に!

バツ

私は宙に飛び上がり、火桜を槍状の形に出す…威力を出すために土壇場で思いついたわ。

ギユウウン!

ナオ(もつと、エネルギーを…!)

日和「(新技を出すつもりかな…)させないよ?」ポッ

ゴオッ!

日和「ヘルフレイムZ!」ヒュン

ツ、今よ！

ナオ「コレが、私だけの技……落炎桜舞ッ！」

スパアン！

先輩の火球を真つ二つに裂き、火桜の槍は突き進む。

(らくえん↓楽園↓落炎)

日和「モーニングドーンG2！」シユツ

パリィン！

日和「ツ……！」

ドギユウウン！

……よし、当たった！

ナオ「ふうっ……ん？」スタツ

日和「今のはいい攻撃だったよ……でも」パツ

先輩の体は……ほとんど傷ついていなかった。

ナオ「……そうとう堅いですね、その鎧」

日和「結構な自信作だからね」

…そろそろ体力切れね。

ナオ「交代」スツ

side 室見メイ

千早『いやあ、さっきの技はカッコよかったな!』

千代『土壇場で思いついたのもポイントが高いですね!』

ヤエ(あたしは練習してたからね…)

メイ「ナオの発想力は咲子さんに近いものがありますね」

…さて、次は。

メイ「二ヨ、貴女ですよ」

二ヨ「はいはい」パツ

スタスタ

日和「今度はマイペースかな?」

二ヨ「そーだよ」スツ

実はいうと、俺達5人格で二ヨ俺の次に強いのです。鎧の攻略法を探すのも彼女でしよう。

メイ(頼みますよ…!)

流水の陣！メイVS日和⑤

side 室見ニヨ

メイから頼まれたのは、鎧の攻略法を探す事…僕が適任だね！

ニヨ「真激流の渦！」ザパツ

日和「煉獄パンチ改」ダンッ

シユウウウ…

うわあ、あつさり蒸発しちやった。

日和「(私の炎は高温だから、水とは相性がいいのよ!) ヘルフレイムZ！」

(→フラグ)

ゴオオオオオ！

わあ、大きな火の玉だね。

でも…

ニヨ「コレじゃあ僕は当たりもしないよ？」スツ

日和「…?」

僕は拳法のような構えを取り…流れる水のような動きをする。

二ヨ「流水ノ陣!」ドン!

スウウウ…

僕の周りに水が円状に浮かび上がり、集まる。

二ヨ「とうっ!」シユツ

ザパン!

水は拳のような形状になり、火球をぶん殴る。

シユウ…

火球はあっさり消火された。

日和「ええ…? (さっきの発言、フラグだったの…?)」

二ヨ「先輩」

日和「…何?」

二ヨ「…行くよ?」ギユン

シユルル…

僕の前に水を集め…

二ヨ「ハイドロポンプV4!」スッ

…ズバァン!

ソレを一気に発射した。

(いきなりV4!?)

日和「ッ…闇結界V2! モーニングドーンG2!」バツ

ギユン、バゴォ!

先輩の前に黒い結界が張られ、さらに青いエネルギーが噴出する。

…でもね? 流水ノ陣の前では、”正面”から守つても意味はない。

二ヨ「ほい」くいっ

ぐにやっ

日和「ゑ」

ザパァン!

日和「きやつ!」

水は結界の前で曲がり、そのまま回り込んで先輩に命中した。

びちゃっ…

日和「むう、ソレは聞いてないよ…(あ、ヤバい。この鎧水に弱いんだった)」

…ん? 心なしか鎧の色の濃さが少くしだけ薄くなった気がする。

二ヨ「(次で分かりそう) …そおれ!」バツ

…ズドオン!

もう一発ハイドロポンプV4を撃つ。

(※普通は連続で撃てません)

日和「(また!?!…曲がるかもしれないから、今度は全方位を…) 闇結界V2!」シユツ
オオオ…

闇が先輩を包み込んだ。…ああなるほど、全方位で防げば問題ないかと?

二ヨ「流石にコレじゃ」1回目は「当たらないね〜」

…そう、1回目はね。

シユルル!

日和「…ふう」

水は結界に弾かれ、ソレを確認した先輩は結界を解除する。

…今だ!

二ヨ「ハアツ!」カッ

ピタッ

結界に弾かれ飛んでいた水飛沫はその場に止まり…

日和「…なっ!？」

…ズドドツ!

水の針となつて先輩を襲つた。

日和「グウツ…」ピキッ

…お?

パリン!

日和「…あ」

ようやく、鎧が割れた。弱点は水だったみたいだね、なんでだろ?

日和「あちやあ、この技1回しか使えないのに…」

…よし。

二ヨ「僕の役目はココまでだね…交代」スツ

side 室見メイ

千早『いやあ、チートだろ今の!?!何だよ防御を避ける攻撃つて!?!』

千代『…しかしどうやらあの技、かなり体力を削るようですね』

その通り、二ヨはあの技を体力的に10分しか使えません。激しい戦闘だとさらに短くなります。

二ヨ「ハア、ハア…疲れた…」

メイ「後は任せて下さい」

二ヨ「うん…」

俺が日和先輩を倒します!

疾風と黒薔薇！メイVS日和⑥

side 室見メイ

メイ「……………」ザッ

日和「……………」グッ

俺は天使化した状態で日和さんと対峙します。

…流石ですね、隙がない。

メイ「（無い隙は作るしかないですね）スウツ…ハア！」ゴオツ
俺を中心に風を起こす。

メイ「ストームゾーン！」ビュン

日和「うわっ!?!（いきなり突風かあー!）」バツ

ザザッ

メイ「（今…）真斬一閃！」ドッ

ズバッ!

日和「ッ」サッ

反射で避けられたか…

日和「シャドーフューリー。さてと…」グッ

…来る!

メイ「無影「遅い!」くうっ、命命斬り改!」ズバツ

日和「つと」キイン

チツ。

日和「あ、そうそう」ギユン

メイ「?」

日和「足元、注意ね♪」パツ

見ると地面が青く光っていた。

メイ「なー」

ズドオン!

メイ「ぐ…!」

日和「(モーニングドーンG2攻撃版、なんてね?)からの煉獄パンチ改!」ボツ

バゴオ!

メイ「…危なかった」グッ

ギリギリ刀で止められた…

メイ(どうやって反撃するか…)

日和「考えてるようだね…させないけど。ヘルフレイムZ！」パチン
ゴオオオオオ！

…そうだ！

メイ「（上から殴ればいい！）たあつ！」

日和「!?（自ら火球に!?）」

サツ

日和（あ、避けるんだ）

メイ「上から…！」ギユン

火球に威力を上乗せする！

メイ「ゴツド」スツ

俺は足にエネルギーを纏って…

メイ「ブレイク…！」ヒュン！

ズドオオン！

そのまま火球を蹴り飛ばした。

火球の色は赤から白に変わり、先輩を襲う。

日和「（跳ね返した!?）モーニングドーンG2…！」

シュバツ！

日和「くう…」

…掠りはしたやうだな。

スタツ

メイ「次は当てる」ギロツ

日和「やってみなよ」ニヤツ

………!

メイ「日照飛梅!」

日和「絶月夜桜舞!」

ズドドドツ!

風梅と火桜の花びらが激しく衝突する。

メイ(弾幕に斬撃を織り交ぜる…!) シャツ

…ヒュン!

日和「…ツ!?(斬撃!?)」ササツ

バレたか。いつそのこと…

メイ「飛梅・燕返し改」キラツ

弾幕から斬撃の雨に切り替えよう。

メイ「斬!」シュバババ

日和「ちよ……っ！（もしかしてこの子暴走気味!?）」
※そうだよ。

メイ「命命斬り改イ！」ドツ

日和「煉獄パンチ改！」ボツ

バゴオ！

『ツ……』ググツ

そろそろ体力が限界に近い……

メイ「（早めに決着をつける……さっき着想を得た新技で！）んぬっ……」ビュン

日和「……！（どうやらトドメを刺すつもりだね……なら）ハアアツ……」ゴオオ

バチバチツ……！

空気が轟いている。

「なんだアレ……」

「エネルギーがバチバチ鳴ってるぞ！」

メイ「くらえ……！

疾風怒濤

日和「必殺……！

!!

ブラックローズ・アポストル

!!

…ドガアアン!

爆発が起きて、俺の視界は—。

———

———

———

———

—

side 桜木咲子

千早『…な、なんと!結果は…引き分けです!』

ワアアアア!

「マジか!マジかよ!」

「勝敗が決まらなかつたのは残念だったけど、凄かつたな!」

咲子「メイ、日和さん…」

…お疲れ様。

1年の差！影風 V S 岩拳①

side 飛羽野ゼイル

千代『さあ次は学年の2番手達の戦いです！』

千早『あれ？でも2年の2番手は剣豪だろ？』

千代『3代目桜と剣豪のパワーは同数値だから、実質3位が2番手になるんです』
そろそろ出場するか。

千早『あーなるほど。…つと、ココで選手が出場だ！』

ザッ

千代『まずは2年3位で影風の異名を持ち、3代目桜こと桜木咲子の恋人である飛羽野ゼイル選手！』

千早『どうやら超強い娘もいるらしいぞ！』

おい、そこまで言わなくてもいいだろ…！

ワアアアア！

「ゼイル先輩〜！」

「頑張つてー！」

「リア充爆発しろー!」

何故か後輩の女子から応援されている。…なんで?

千代『次に1年2位で岩拳の異名を持つ、小倉勝選手くー!』

千早『よく1位の赤坂留美にボコされては強くなっているそうだ!』

勝「……(これがバトルデーか、緊張するな)」

ガヤガヤ

「頑張れよ岩拳!」

「リア充を粉砕しろー!」

野次が飛ぶ。確かに俺はリア充だが、そんなに言うか?

(堂々とイチヤイチヤしてるので砂糖を吐きます)

千早『それでは…3回戦、開始ッ!』

勝「先輩…行きます!」グツ

ドツ

小倉は手に岩を纏い、突撃する。

ゼイル「(お手並み拝見と行こうか) 孤月十字斬」スツ

ガキイ!

俺の飛斬撃はあっさり砕かれた。

勝「オ、ラアツ！」ヒユン

ゼイル「つと」サツ

流石に舐めすぎてたようだな。

ゼイル「ならコイツはどうだ？デビルバーストG3！」

ギユオオオ！

勝「ハアツ！」ドゴツ

小倉は地面を殴る…まさか。

勝「グランドクエイク！」

ドシユウウ！

ゼイル「…マジかよ」

咲子の技を使うとはな。しかも本来使うべき属性を使ってるから、威力は恐らく咲子のより上に成り得る。

ゼイル「だが…」バツ

ズドツ

一気に距離を詰め、小倉の鳩尾に1発叩き込む。

ゼイル「後隙が、多すぎるぞ？」

勝「ぐう、っ!？」ヒユン

ドゴオ!

ゼイル「これからは後隙を減らすよう努力しろ。…さて、まだ行けるな?」

勝「もちろん、です…先輩!」ズサツ

どうやら余りダメージが入らなかったようだな。

ゼイル「よし…行くぞ!」ドツ

勝「…ダメアツ!」バツ

シユバツ!

—————

—————

—————

—————

—————

side 桜木咲子

留美「…先輩、ゼイル先輩つてもしかして楽しんでます?」

咲子「ほぼ確実にそうね」

勝つてある程度骨がありそうだし、鍛え甲斐がありそうなもの。

咲子「それはさておき…アンタ、未例先輩の対策は考えてるの?」

留美「いや何も？」

咲子「」

対策してないんかい!?

咲子「…ま、いいわ」

弾ける岩!・影風 v s 岩拳②

side 飛羽野ゼイル

勝「…ダアッ!」バツ

シユバツ!

互いが互いに向かって駆けだす。その間に技を溜める。

ギユン

先に溜めが終わったのは小倉だった。彼は空中に飛び上がり、マリオの空前みたいな体勢になる。

勝「(今だ!) ギガントスマッシュ!」ググッ

ゼイル「…!!」

小倉の手からゴッドハンドのような巨大な手が現れ、振り上げられた。

スピードはそれ程なさそ…!?

勝「ぜあっ!」ブンッ

ゼイル「ぐあっ!?!」ドゴッ

俺は意外に速い攻撃をモロに受けてしまう。完全に見掛け倒しだった、エネルギーに

それほど重量がないことを忘れていた……!

勝「よしっ!」パッ

しかもエネルギーの手を振り下ろすだけの技だからか、後隙がほとんどないようだ。

ゼイル「……もしかして今思いついたのか?」

勝「先輩の助言を参考にしてもらいました」

凄いい適応力だな、通りで茜よりランクが上なワケだ。……さて、反撃するか!

ギユン

ゼイル「絶風神の舞!」ビユン

手加減なして技を放つ。

勝「ハッ、ラウンドロック!」ゴオツ

小倉は周囲の土石を体に纏い、身体を丸めた……まるでアルマジロのようだな。

あつさり防がれてしまったな、それに恐らく後隙対策でもう一芸あるな。

勝「(このまま……)バースト!」グッ

……爆発か!

ゼイル「ミデアサーフ!」シヤッ

空中でサーフボードに乗り、飛び散る土石を避ける。

勝「……流石先輩ですね、初見で対策されるとは」

ゼイル「お前こそ、いい技持つてるじゃないか…本気で行くぞ」スツ
悪魔化はしない、だが本気は出す。

ゼイル「ダークブラスター！」ギユン

ギユオオオ!

勝「…! (本気だな、なら!)」スツ

イイイ…!

小倉は体を捻り、心臓から手にエネルギーを溜める。

あの構えは…マジン・ザ・ハンド?

ゼイル(いや違う…!)

ギユイイン!

勝「ゴツドハンド…V!」バツ

ドゴツ!

小倉が出した金色の手はしばらく黒い光線と拮抗する。

…パリーン!

しかし勝つたのは光線だった。危ねえ…

勝「グワアッ!」

ゼイル「(隙あり!) 皇帝ペンギンXV2!」シユツ

ギユウウン!

パワーアップした影のペンギンを飛ばす。

勝「(まずい、追撃か!) 土流波…ブフォツ!’ズガガツ

咄嗟の防御も意味を成さず、小倉は技をモロに受けた…トドメを刺すか。

俺は一気に距離を詰め…

ゼイル「ムンツ!’ズオツ

ドゴオ…!

鳩尾にもう一度ストレートを叩き込んだ。

勝「ガ、ハツ…!’ドサツ

小倉は気絶したようで、その場に倒れた。

ゼイル「…次はいい勝負にしよう」

千早『試合終了!勝者は飛羽野選手く!』

千代『終始落ち着いた雰囲気を出していましたね!』

ワアアアア!

「チクシヨ、リア充爆発しろー!」

「岩拳も頑張ったなー!」

…小倉を保健室に連れてくか。